

茨城県教育財団文化財調査報告第412集

# 宮後東原遺跡

一般県道東山田岩瀬線道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県筑西土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第412集

みやごひがしはら  
宮後東原遺跡

一般県道東山田岩瀬線道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県筑西土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団





第2号井戸跡出土の土師器



第2号井戸跡出土の甑ヘラ書き銘「小長谷部継成」



## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県筑西土木事務所による一般県道東山田岩瀬線道路整備事業に伴って実施した筑西市宮後東原遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、奈良時代から平安時代にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡が多数確認でき、筑西市における奈良・平安時代の集落跡の一端が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県筑西土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、筑西市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成28年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一





# 例 言

1 本書は、茨城県筑西土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団（現公益財団法人茨城県教育財団）が平成 23 年度に、公益財団法人茨城県教育財団が平成 24・25 年度に発掘調査を実施した、茨城県筑西市宮後字東原 541 番地 6 ほか<sup>みやごひら</sup>に所在する宮後東原遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

## 調査

平成 23 年度 平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日（第 1 次調査）

平成 24 年度 平成 24 年 8 月 1 日～9 月 30 日（第 2 次調査）

平成 25 年度 平成 26 年 2 月 1 日～3 月 31 日（第 3 次調査）

## 整理

平成 27 年度 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

3 発掘調査は、平成 23・24 年度が調査課長檜村宣行、平成 25 年度が調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

## 平成 23 年度

首席調査員兼班長 稲田義弘

主任調査員 齋藤和浩

調査員 田村雅樹

## 平成 24 年度

首席調査員兼班長 皆川 修

次席調査員 駒澤悦郎

調査員（主任） 長洲正博

## 平成 25 年度

首席調査員兼班長 綿引英樹

次席調査員 齋藤和浩

調査員 内田勇樹

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員田村雅樹が担当した。

5 本書の作成にあたり、墨書土器の解説については、現人間文化研究機構理事平川南氏に御指導いただいた。

6 下記の金属製品の保存処理と付着樹種の同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。樹種の同定の結果については、付章で掲載した。

## 保存処理

第 18 号竪穴建物跡出土の鎌（M 10）、第 25 号竪穴建物跡出土の刀子（M 12・13）、第 2 号方形竪穴遺構出土の刀子（M 15）

## 樹種同定

第 2 号方形竪穴遺構出土の刀子（M 15）茎部付着の木材

7 第 1～23 号墓坑から出土した人骨は、調査終了後、筑西市宮後字東原の長福寺にて供養後、埋葬した。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅳ系座標に準拠し、 $X = + 29,240 \text{ m}$ 、 $Y = + 19,920 \text{ m}$ の交点を基準点（L 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。なお、調査区南東部から発掘調査が行われたことや本報告範囲の北西に調査が今後およぼ可能性もあることから、上記のような地区設定とした。

2 調査区の呼称については平成 23 年度調査分を南東部・中央部、平成 24 年度調査分を中央部、平成 25 年度調査分を北西部としている。

3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。





遺構 P - ピット PG - ピット群 SA - 柱穴列 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SE - 井戸跡  
SF - 道路跡 SH - 方形竪穴遺構 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑 UP - 地下式坑  
遺物 DP - 土製品 G - ガラス製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 T - 瓦 TP - 拓本記録土器  
土層 K - 攪乱

4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・施釉・自然釉・滓化部		炉・火床面・緑錆								
	竈部材・粘土範囲・黒色処理・漆		柱痕跡・柱あたり・煤・油煙								
●	土器	○	土製品	□	石器・石製品	△	金属製品	■	ガラス製品	- - -	硬化面

5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

6 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

7 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

8 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SB 1 → SA 4, SB 8 → SA 5, SB10 → SA 6, SB13 → SA 7, SB22 P 1・P 2 → SA 8 P 1・P 2,

SB22 P 3 → SK345, SB23 P 1 a · P 2 a · P 3 · P 5 a → SA 9 P 1 · P 2 · P 3 · P 4, SB23 P 1 b · P 2 b · P 4 · P 5 b → SB23 P 1 · P 2 · P 3 · P 4, SE 1 → 第1号大型円形土坑 SE 2 P 2 → SE 2 P 8, SK 3 · 4 · 8 · 9 · 11 · 14 → SB26 P 4 · P 5 · P 1 · P 6 · P 2 · P 3, SK111 → 第1号墓坑, SK130 → SE 2 P 2, SK131 ~ 133 → SE 2 P 5 ~ P 7, SK164 · 165 · 168 · 177 · 184 · 185 · 187 · 189 · 239 → SB19 P 9 · P 1 · P 2 · P 3 · P 6 · P 5 · P 8 · P 4 · P 7, SK170 · 233 · 235 · 236 · 237 · 238 · 249 → SB21 P 1 · P 7 · P 6 · P 5 · P 4 · P 2 · P 3, SK171 · 172 · 173 · 174 · 175 · 200 → SB15 P 1 · P 4 · P 6 · P 7 · P 8 · P 3, SK192 · 195 · 197 · 198 → SB16 P 2 · P 3 · P 4 · P 6, SK205 → SB15 P 3, SK205 → SB17 P 4, SK212 · 218 → SB20 P 3 · P 2, SK209 · 215 · 219 ~ 231 · 240 ~ 245 → PG 6 P 2 · P 15 · P 6 · P 5 · P 4 · P 3 · P 13 · P 10 · P 9 · P 7 · P 14 · P 12 · P 8 · P 11 · P 1 · P 18 ~ P 21 · P 16 · P 17, SK309 → SE 6, SK315 → 第9号墓坑, SK317 ~ 337 → 第2 ~ 8 · 10 ~ 23号墓坑, UP 6 → SE 3, UP 8 → SK344, SD 1 · 2 → SF 2, PG 5 P 8 ~ P 12 → SK339 · SK340 · SK341 · SK342 · SK343

欠番 SK10 · 35 · 36 · 44 · 52 · 67 · 96 · 98 · 150 · 166 · 232 · 259 · 296 ~ 299 · 311 · SA 3

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 奈良時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴建物跡	13
(2) 掘立柱建物跡	35
(3) 大型円形土坑	44
(4) 柱穴列	48
(5) 土 坑	51
(6) ピット群	58
2 平安時代の遺構と遺物	62
(1) 竪穴建物跡	62
(2) 掘立柱建物跡	132
(3) 井戸跡	145
(4) 柱穴列	160
(5) 土 坑	162
(6) ピット群	172
3 室町時代の遺構と遺物	172
(1) 掘立柱建物跡	172
(2) 方形竪穴遺構	180
(3) 井戸跡	183
(4) 墓 坑	186

(5) 地下式坑 .....	186
(6) 柱穴列 .....	198
(7) 土 坑 .....	200
(8) 溝 跡 .....	202
(9) ピット群 .....	203
4 江戸時代の遺構と遺物 .....	203
(1) 井戸跡 .....	203
(2) 墓坑群 .....	205
(3) 道路跡 .....	211
(4) 土 坑 .....	213
(5) 溝 跡 .....	215
5 その他の遺構と遺物 .....	217
(1) 土 坑 .....	217
(2) ピット群 .....	232
(3) 遺構外出土遺物 .....	233
第4節 まとめ .....	237
付 章 .....	259
写真図版 .....	PL 1～PL42
抄 録	
付 図	



# 宮後東原遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

みやごしがしはら 宮後東原遺跡は、ちくせい 筑西市の南東部に位置し、桜川右岸の標高約 38 ～ 39 m の台地上に立地しています。

いっばんけんどうひがしやまだいわせせんどうろせいびじぎょう 一般県道東山田岩瀬線道路整備事業に伴い、遺跡の内容を記録して保存するため、平成 23 年 11 月から 24 年 3 月、平成 24 年 8 月から 9 月、平成 26 年 2 月から 3 月の 3 次にわたり、面積 7,158㎡ について、発掘調査を行いました。



## 調査の内容

調査によって、奈良時代の竪穴建物跡 7 棟、掘立柱建物跡 7 棟、大型円形土坑 1 基、柱穴列 4 条、土坑 9 基、ピット群 3 か所、平安時代の竪穴建物跡 25 棟、掘立柱建物跡 9 棟、井戸跡 2 基、柱穴列 2 条、土坑 12 基、ピット群 1 か所のほか、室町時代や江戸時代の遺構も確認しました。特筆できることは、平安時代の井戸跡に、破片を含むと約 1,900 点に及ぶ、内面にヘラ磨きや黒色処理が施された土師器が、ほとんど使用されていない状態で投棄されていたことです。



平安時代の井戸跡から出土した土師器



竪穴建物跡の調査風景



平安時代の井戸跡から遺物が出土した状況



出土した埴塙・羽口・鉄滓



出土した灰釉陶器

## 調査の成果

平安時代の集落は、<sup>ぼくしよどき</sup>墨書土器などの文字資料が多く出土した「竪穴建物群」と、<sup>かいゆうとうき</sup>灰釉陶器の出土などから邸宅と推測できる「竪穴建物と掘立柱建物群」で構成されていたと考えられます。これらの遺構群からは<sup>るつぼ</sup>埴塙・<sup>はぐち</sup>羽口・<sup>てっさい</sup>鉄滓などが出土していることから、近辺に集落と関係する工房などの施設が想定できます。

平安時代の井戸跡から出土した9世紀中葉の土師器は、<sup>つき</sup>坏・<sup>こうだいつきわん</sup>高台付碗・<sup>ふた</sup>蓋・<sup>さら</sup>皿などの<sup>きょうぜんぐ</sup>供膳具の割合が高いことから、<sup>きょうえん</sup>饗宴やマツリなどで使用されたものと考えられます。それぞれの器種は、口径の大きさから4種に分けられ、ほぼ同じ寸法で製作されていることから、規格性の高い食器と考えられます。しかも、蓋と他の供膳具との組み合わせが可能で、身分や配膳の内容によって蓋が使い分けられたと推測でき、饗宴やマツリ場で視覚的に身分の序列を表現していたと考えられます。

集落や供膳具の構成から、当時の社会の一端が垣間みられます。



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成22年7月2日、茨城県筑西土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道東山田岩瀬線道路整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて、茨城県教育委員会は、平成22年9月3日に現地踏査を行い、続いて同年9月21日、11月24日及び平成23年9月13・14日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成22年12月27日及び平成23年10月21日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県筑西土木事務所長あてに、事業地内に宮後東原遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成23年2月16日、平成24年3月7日及び平成25年1月15日の三か年度に分け、茨城県筑西土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく一般県道東山田岩瀬線道路整備事業地内の宮後東原遺跡に関わる土木工事等の通知を提出した。これを受けて、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存の発掘調査が必要との決定を下し、各年度の平成23年3月9日、平成24年3月16日及び平成25年1月24日、茨城県筑西土木事務所長あてに、工事着工前に発掘調査を実施するように通知した。

平成23年3月11日、平成24年3月21日及び平成25年2月1日、茨城県筑西土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道東山田岩瀬線道路整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成23年3月14日、平成24年3月23日及び平成25年2月12日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県筑西土木事務所長あてに、宮後東原遺跡における発掘調査の範囲及び面積等の回答をし、併せて調査機関として、財団法人茨城県教育財団（現公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県筑西土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成23年11月1日から平成24年3月31日までを第1次調査、公益財団法人茨城県教育財団となった平成24年以降は、平成24年8月1日から9月30日までを第2次調査、平成26年2月1日から3月31日までを第3次調査として発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

宮後東原遺跡の調査は、平成23～25年度の間、3次に分けて実施した。平成23年度は平成23年11月1日から平成24年3月31日までの5か月間、平成24年度は平成24年8月1日から9月30日までの2か月間、平成25年度は平成26年2月1日から3月31日の2か月間である。以下、その概要を表で記載する。

〈平成 23 年度〉

工程 \ 期間	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
調査準備 表土除去 遺構確認	■			■	
遺構調査	■	■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理	■	■	■	■	■
撤収					■

〈平成 24 年度〉

工程 \ 期間	8 月	9 月
調査準備 表土除去 遺構確認	■	
遺構調査	■	■
遺物洗浄 写真整理	■	■
撤収		■

〈平成 25 年度〉

工程 \ 期間	2 月	3 月
調査準備 表土除去 遺構確認	■	
遺構調査	■	■
遺物洗浄 写真整理	■	■
撤収		■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

宮後東原遺跡は、茨城県筑西市宮後字東原 541 番地 6 ほかに所在している。

当遺跡が所在する筑西市の南東部は、八溝山地の南端にあたる筑波山の西麓下に位置し、西は小貝川、東は桜川に挟まれた真壁台地上に立地している。洪積台地に属する真壁台地は標高 30 ～ 40 m ほどで、起伏が乏しい。台地の縁辺下を南流する小貝川や桜川の兩岸には、比較的広大な沖積低地が形成され、また台地の内陸部から端を発する小河川が両河川に注ぎ込む過程で、樹枝状の偏狭な沖積低地とが組み合わさり、真壁台地の内部を半島状や舌状の小台地に分断している。

真壁台地を形成している地質<sup>1)</sup>は、下層位から砂礫層、粘土及びシルト層の常総粘土層、洪積世の火山灰堆積である関東ローム層、現在の生活面も含んだ黒色土を主体とした沖積世の堆積順で構成されている。

当遺跡は桜川の右岸、真壁台地の東縁辺部に位置し、桜川と支流の観音川、及び支谷によって分断された南北 2.5km、東西 1.1km の独立した台地の中央部に立地している。台地の標高は 38 ～ 39 m で、沖積低地と台地上の比高は 4 ～ 6 m である。沖積低地から台地上へは、東側は緩斜地形であるが、西側は急斜で、台地上は山林や畑地、宅地が営まれ、沖積低地には主に水田として土地利用がされている。

### 第2節 歴史的環境

当遺跡の周辺では、遺跡の分布調査や発掘調査によって、多くの遺跡が確認できている<sup>2)</sup>。

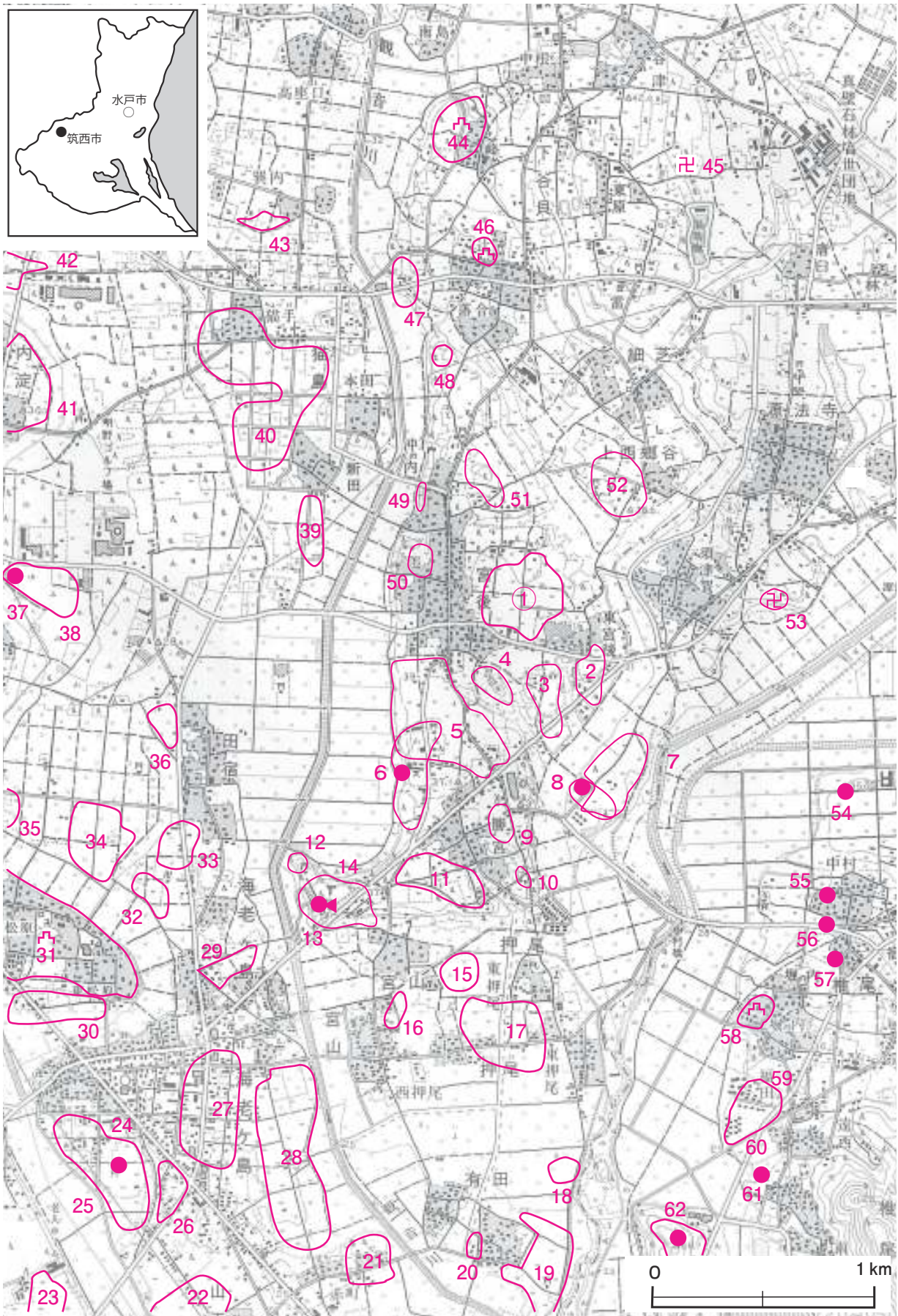
旧石器時代の遺跡は少なく、当遺跡近辺では赤町（中根）十三塚遺跡<sup>3)</sup>や中妻（倉持）遺跡<sup>4)</sup>が知られている。ともにナイフ形石器や尖頭器などが出土しており、桜川支流の観音川や大川流域の低台地上に立地している。

縄文時代早期から前期にかけては、早期では撚糸文を施した井草式土器が採集された中妻（倉持）遺跡、条痕文を施した茅山式土器が出土した向台遺跡（10）、竹垣前遺跡が、前期では連続爪形文を施した浮島式土器が確認できた岡山遺跡（25）などが知られている。この地域における遺跡数は少く、小規模である。

中期になると遺跡数は増加し、人骨が埋甕の中から出土した中妻（倉持）遺跡のほか天神遺跡（5）、宮山遺跡（14）、山王堂遺跡（22）、久保山遺跡（23）、宮北遺跡などが知られている。後期においては、宮山遺跡や中妻（倉持）遺跡、山王堂遺跡などのように中期から時期を跨って存続する大規模な遺跡と、鍋山東原遺跡<sup>5)</sup>（38）、台山遺跡などのように採集された土器数が少く、比較的小規模な遺跡が知られており、地域ごとに母村・子村の関係が成立していた可能性がある。後期以降、遺跡数は減少に転じ、晩期から弥生中期に至るまで遺構を伴った遺跡は、現時点では確認できていない。このほか、少数ながらも陥し穴を確認し、狩場の可能性がある孤冠北遺跡<sup>6)</sup>（33）や炭焼戸東遺跡（34）が分布している。

弥生時代後期は、駒込遺跡（7）、宮山遺跡、山王堂遺跡、鶴田石葉山遺跡、鷺島遺跡、宮前遺跡などが知られているほか、赤町（中根）十三塚遺跡では竪穴建物跡 3 棟、館野遺跡<sup>7)</sup>（28）では竪穴建物跡 5 棟を確認しているが、分布状況は希薄である。

古墳時代の当該地は、新治国に属していたと考えられている<sup>8)</sup>。古墳の分布は桜川左岸域に多くみられ、常陸三山に数えられる筑波山・足尾山・加波山の西麓下では、2 基の粘土槨から甲冑や鉄剣、鉄鏃、鉄鉾、鉄斧



第1図 宮後東原遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000分の1「真壁」「筑波」)

表1 宮後東原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代								
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸	
①	宮後東原遺跡				○	○	○	○	32	菰冠南遺跡				○	○	○		
2	宮後金井遺跡				○	○			33	菰冠北遺跡		○		○	○	○		
3	原山遺跡				○	○	○		34	炭焼戸東遺跡		○			○	○		
4	宮後前畑遺跡				○	○	○		35	炭焼戸西遺跡					○	○		
5	天神遺跡		○		○	○			36	田宿炭焼戸遺跡						○		
6	宮山古墳群				○				37	八坂神社古墳					○			
7	駒込遺跡		○	○	○	○			38	鍋山東原遺跡		○		○	○			
8	駒込古墳群				○				39	猫島新田前遺跡					○	○		
9	陣場遺跡				○	○			40	猫手前遺跡				○	○	○		
10	向台遺跡		○		○	○			41	北浦遺跡				○	○			
11	裕西遺跡		○		○	○			42	搭ノ内遺跡		○		○	○			
12	宮山石倉遺跡	時期不明							43	巽内遺跡				○	○			
13	宮山観音古墳				○				44	谷貝峯城跡						○		
14	宮山遺跡		○	○	○	○	○		45	谷貝廃寺跡					○			
15	矢尻遺跡						○	○	○	46	市村家城跡						○	
16	坪内遺跡						○	○		47	高内遺跡		○					
17	押尾古屋敷遺跡						○	○	○	48	大夫台遺跡		○					
18	下宮遺跡				○	○			49	根ノ下遺跡					○	○		
19	有田東遺跡		○		○	○			50	西後遺跡				○	○	○		
20	有田西遺跡						○	○		51	新田遺跡				○	○	○	
21	赤町遺跡				○	○	○		52	上ノ台遺跡		○		○	○			
22	山王堂遺跡		○	○	○	○			53	源法寺廃寺跡					○			
23	久保山遺跡		○		○	○			54	元寺家古墳群				○				
24	稲荷塚古墳				○				55	北椎尾天神塚古墳				○				
25	岡山遺跡		○		○	○	○		56	仙原塚古墳				○				
26	久保新田遺跡				○	○	○		57	北原古墳				○				
27	海老ヶ島東原遺跡				○	○	○		58	椎尾城跡						○		
28	館野遺跡		○	○	○	○	○		59	南椎尾八幡前遺跡				○	○			
29	戸張遺跡				○	○	○		60	南椎尾小山遺跡				○	○			
30	城ノ内遺跡						○	○		61	大柳古墳				○			
31	海老ヶ島城跡							○		62	松石古墳群				○			

が出土した中期の北椎尾天神塚古墳〈55〉をはじめに、元寺家古墳群〈54〉、仙原塚古墳〈56〉、北原古墳〈57〉、大柳古墳〈61〉などの古墳や古墳群が多く点在しており、狐塚古墳や青柳古墳群、長辺寺山古墳、山ノ入古墳群などが所在する岩瀬盆地まで連なっている。桜川上流に位置する岩瀬盆地で成立した古墳文化が、交通の要所である桜川沿いに拡大したと考えられている<sup>9)</sup>。中期から後期にかけての集落跡である南椎尾八幡前遺跡〈59〉では、堅穴建物跡26棟などが調査され、土師器や須恵器に加え、羽口や鉄斧などが出土し、近接する大柳古墳との関わりが考えられている<sup>10)</sup>。

一方、桜川右岸では、観音川に挟まれた独立した台地上に、中期の前方後円墳である宮山観音古墳〈13〉をはじめに後期の宮山古墳群〈6〉や駒込古墳群〈8〉が集中して築かれている。この周辺には集落跡とされる宮後金井遺跡〈2〉や原山遺跡〈3〉、天神遺跡、駒込遺跡、宮山遺跡などが所在し、古墳の被葬者を中心として当該地一帯を開拓した複数の集団の存在が考えられる。このほか発掘調査された遺跡では、3基の方形周溝墓の調査がされた中妻（倉持）遺跡や管玉、紡錘車などを伴った前期から中期の堅穴建物跡16棟と中期から後期の群集墳の内6基を確認した鍋山東原遺跡、中期の堅穴建物跡1棟を確認した赤町（中根）十三塚遺跡、後期の堅穴建物跡2棟を確認した館野遺跡などがある。

律令体制にはいると地方制度は「評制」となり、新治国は新治評と改まり、白雉四年（653）には新治評と白壁評に分割され、当該地は後者に属した。大宝元年（701）の大宝律令の制定によって「郡制」となると白壁郡となり、延暦四年（785）には光仁天皇の諱と同じであった「白壁」を敬避して、真壁郡に改称された。『和名抄』によれば、真壁郡は神代、真壁、長貫、伴部、大苑、大村、伊讚の七郷から構成されており、当該地は長貫郷に属していたと考えられている<sup>11)</sup>。

奈良・平安時代の遺跡は、寺院跡とされている遺跡の分布に特徴がみられる。桜川右岸の台地には、谷貝廃寺タイプの瓦と新治廃寺出土の軒丸瓦と同範の瓦が出土している谷貝廃寺〈45〉、谷貝廃寺タイプと源法寺タイプの瓦が出土している源法寺廃寺〈53〉が所在している。また、桜川左岸の茨城三山の西麓下には、日月廃寺、山尾権現山廃寺が所在し、源法寺廃寺タイプの瓦が出土している。日月廃寺については、源法寺廃寺に伴う瓦窯跡の可能性もあり、山尾権現山廃寺においては中門・金堂・講堂・塔跡の礎石が確認されている。白壁・真壁郡衙の所在については、現時点では不明であるが、これらの寺院跡とされる遺跡と推定古代道とされる小栗道との位置関係などから、谷貝廃寺や真壁市街の字古城付近に推定されている。

集落跡は、古墳時代から継続する遺跡が多いが、新設された集落もみられる。先にみた宮山観音古墳周辺では独立台地の先端部に矢尻遺跡〈15〉、坪内遺跡〈16〉、押尾古屋敷遺跡〈17〉が、海老ヶ島地区近辺では炭焼戸東遺跡、炭焼戸西遺跡〈35〉が分布している。押尾古屋敷遺跡では8世紀後半の土師器や須恵器が採集されていることや、寺内や寺内寺の地名から寺院跡の可能性が報じられており<sup>12)</sup>、炭焼戸東遺跡では平安時代の堅穴建物跡9棟、掘立柱建物跡6棟などが調査され、「院」「寺」と記された墨書土器から寺院の存在が想定されている<sup>13)</sup>。また、館野遺跡においては奈良・平安時代の堅穴建物跡29棟、掘立柱建物跡11棟などが調査されており、低地に面した微高地に立地することなどから班田農民の集落跡と考えられている<sup>14)</sup>。

10世紀代にはすでに衰退していた班田制にかわって、荘園開発が進んだと考えられている。当遺跡から南方5kmほどの石田地区には、平将門の伯父にあたる平国香の居館があったという伝承に加え<sup>15)</sup>、この時期以降から鎌倉時代にかけての県西地区一帯における荘園の開発や立荘には、常陸平氏一族が深く関わっており<sup>16)</sup>、常陸平氏にとっては重要な所領となっていた。

鎌倉時代から戦国時代にかけての真壁荘は、常陸平氏の血脈で下妻氏の分流である真壁氏の所領となった。国指定史跡である真壁城跡は真壁氏の居城跡で、周辺の要所には谷貝峯城跡〈44〉、市村家城跡〈46〉、椎尾城

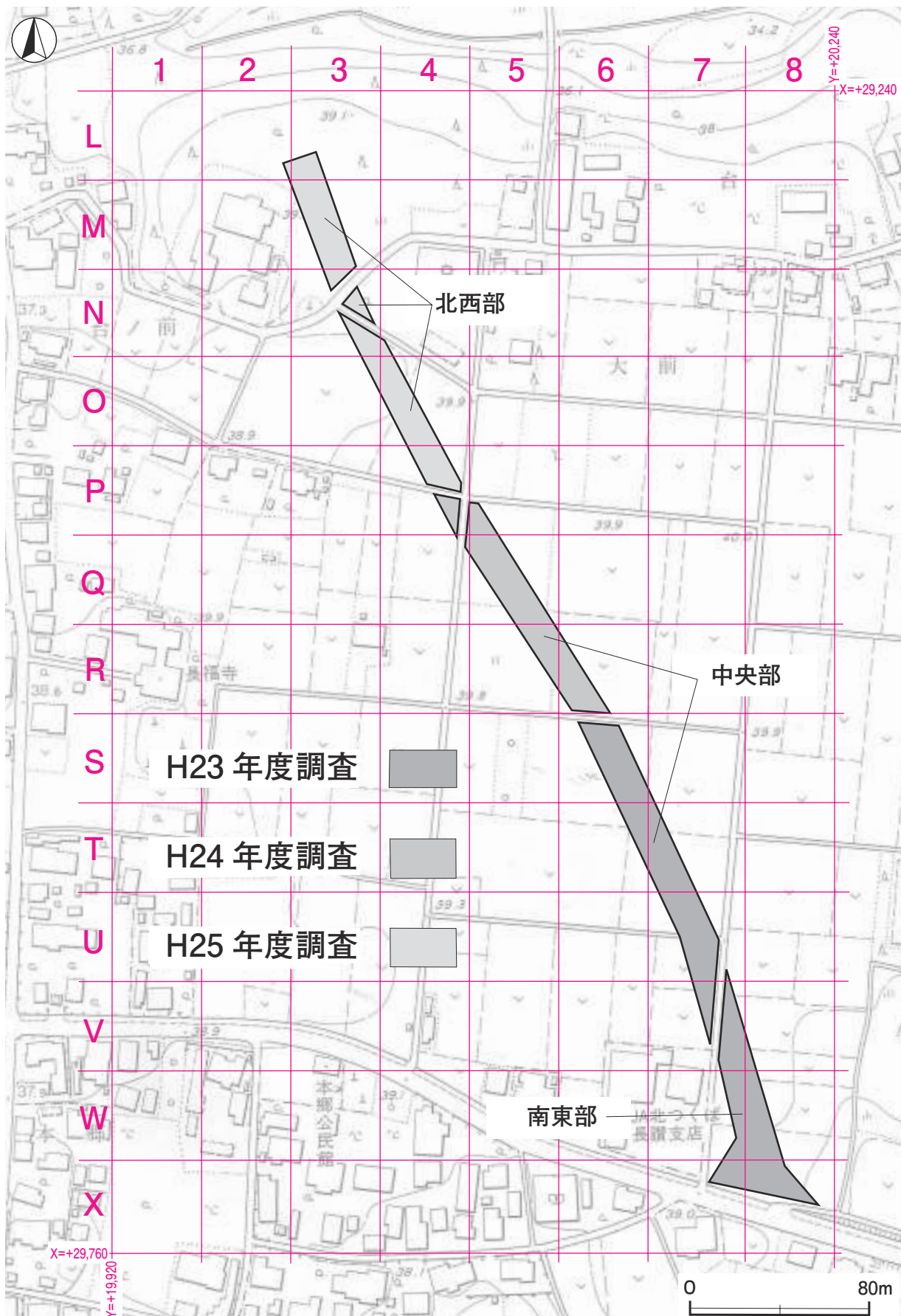
跡〈58〉が配されており、家臣の藤田氏や市村氏、椎尾氏が治めたとされている。

一方、下妻氏は常陸平氏（大掾氏）の惣領多気義幹と八田知家との対立に関与して没落した結果、海老ヶ島付近を含む所領は、下野守護職である小山氏に与えられた。その後、小山氏一族である結城氏に所領の一部は継承され、海老ヶ島城跡〈31〉には結城氏家臣の海老原氏が入城し、戦国時代には小田氏や佐竹氏との抗争の場となっている。海老ヶ島城跡の北側に位置する炭焼戸東遺跡では、掘立柱建物跡 32 棟をはじめとした遺構群が調査され、15～16 世紀代の土師質土器や国産陶器が出土していることから、海老ヶ島城との関連が考えられている<sup>17)</sup>。こうした城館跡の分布などから、真壁氏と結城氏の所領は、概ね観音川を境界としていたと考えられる。

豊臣政権下、常陸国が佐竹氏によってほぼ統一されていくなか、真壁氏は佐竹氏の旗下に組み込まれた。関ヶ原の合戦後の徳川政権時には、佐竹氏は秋田へ転封となり、真壁氏は佐竹氏に従って、出羽角館へ移っていった。

#### 註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会「関東地方」『日本の地質』3 共立出版 2007年5月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 野田良直「主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 中根十三塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第154集 1999年7月
- 4) 田口崇「倉持遺跡-二次調査-」『茨城県明野町埋蔵文化財調査報告書』第2集 明野町教育委員会 1984年3月
- 5) 照山大作「鍋山東原遺跡 つくば明野北部工業団地地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第266集 2006年3月
- 6) 市村俊英「菰冠北遺跡 炭焼戸東遺跡 主要地方道筑西つくば線バイパス道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第295集 2008年3月
- 7) 茂木悦男「館野遺跡 主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第189集 2002年3月
- 8) a 明野町史編さん委員会『明野町史』明野町 1985年7月  
b 飯島光弘編『大和村史』大和村 1974年1月
- 9) 川崎純徳「北椎尾天神塚古墳とその時代」『ふるさと真壁文庫』No. 3 真壁町歴史民俗資料館 2001年3月
- 10) 吹野富美夫「(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書 小山遺跡・八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第99集 1995年3月
- 11) 註8aに同じ
- 12) 註8aに同じ
- 13) 折原洋一・松田政基「炭焼戸東遺跡 県営ほ場整備事業(経営体)松原地区関連遺跡発掘調査報告書1」『筑西市埋蔵文化財調査報告書』第2集 筑西市教育委員会 2006年9月
- 14) 註7に同じ
- 15) 註8aに同じ
- 16) 註6に同じ
- 17) 註6に同じ



第2図 宮後東原遺跡調査区設定図（筑西市都市計画図 2,500 分の 1）



# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

宮後東原遺跡は、筑西市の南東部に位置し、桜川右岸の標高約 38～39 mの台地上に立地している。桜川と観音川、及び支谷によって分断された独立した台地の中央部に所在し、調査区は遺跡範囲の中軸部分を北西から南東に縦断している。調査面積は 7,158㎡で、調査前の現況は、畑地である。

調査の結果、竪穴建物跡 32 棟（奈良時代 7・平安時代 25）、掘立柱建物跡 22 棟（奈良時代 7・平安時代 9・室町時代 6）、方形竪穴遺構 2 基（室町時代）、井戸跡 6 基（平安時代 2・室町時代 2・江戸時代 2）、大型円形土坑 1 基（奈良時代）、墓坑 1 基（室町時代）、墓坑群 1 か所（江戸時代）、地下土坑 7 基（室町時代）、柱穴列 8 条（奈良時代 4・平安時代 2・室町時代 2）、道路跡 2 条（江戸時代）、土坑 245 基（奈良時代 9・平安時代 12・室町時代 2・江戸時代 1・時期不明 221）、溝跡 3 条（室町時代 1・江戸時代 2）、ピット群 6 か所（奈良時代 3・平安時代 1・室町時代 1・時期不明 1）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に 86 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺）、土師器（坏・高台付椀・蓋・皿・鉢・甕・羽釜・甑・埴埴）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・円面硯・短頸壺・長頸瓶・甕・甑）、土師質土器（皿・播鉢・内耳鍋）、瓦質土器（火鉢）、陶器（平碗・皿・播鉢）、土製品（管状土錘・支脚・紡錘車・羽口・土人形）、石器・石製品（尖頭器・鏃・砥石・紡錘車）、金属製品（刀子・鎌・鉸具<sub>カ</sub>・貴金具・釘・鏝・煙管・銭貨）、ガラス製品（数珠玉）、瓦（軒丸瓦・棧瓦）、椀形滓・鉄滓などである。

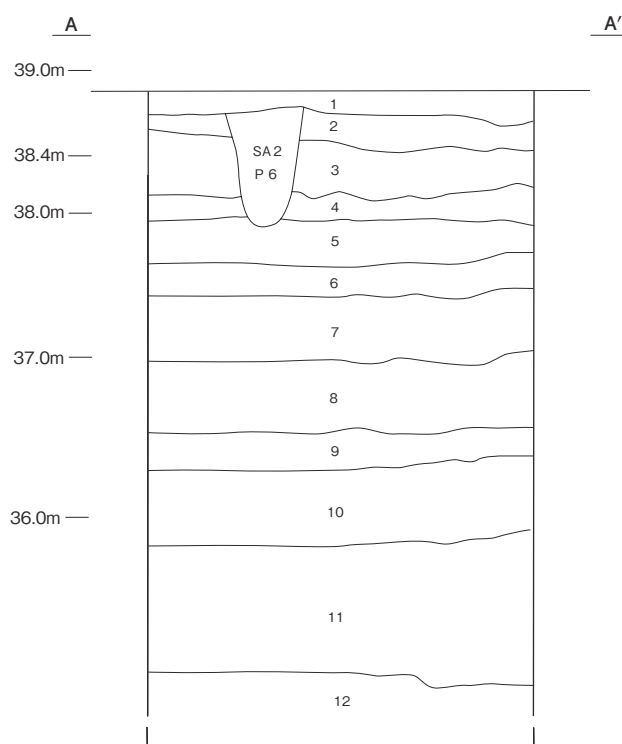
## 第2節 基本層序

調査区南東部の台地上の平坦面に位置する W 8 d3 区でテストピットを設定し、土層の堆積状況を観察した。土層は 12 層に分層できる。基本層序は以下のとおりである。

第 1 層は黒褐色の表土で、腐植土を含んだ耕作土である。粘性・締まりはともに弱く、層厚は 18～20cm である。

第 2 層は褐灰色の支谷への流入土で、埋没谷の構成層である。ローム粒子・長石粒子を少量含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は 3～10cm である。調査区域では、W 8 d3 区付近でのみで確認できている。

第 3 層は褐色のソフトローム層である。長石粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに普通で、層厚は 4～10cm である。



第3図 基本土層図

第4層はにぶい黄褐色のソフトローム層との漸移層である。長石粒子・黒色粒子を微量に含み、粘性は普通で、締まりは強く、層厚は12～16cmである。

第5層はにぶい黄褐色のハードローム層である。長石粒子・黒色粒子を少量含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は14～20cmである。

第6層は褐色のハードローム層との漸移層である。鹿沼パミス・白色粒子を少量含み、粘性・締まりはともに普通で、層厚は10～16cmである。

第7層は黄褐色の鹿沼軽石層である。黒色粒子を少量含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は15～22cmである。

第8層は暗褐色のハードローム層である。黒色粒子を少量含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は18～26cmである。

第9層は暗褐色のハードローム層である。黒色粒子を少量含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は8～12cmである。

第10層は暗褐色のハードローム層である。白色粒子・橙色粒子を少量含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は27～30cmである。

第11層は暗褐色のシルト層で、常総粘土層の上層と思われる。砂粒を中量、白色粒子を少量含み、粘性は普通で、締まりは強く、層厚は40～52cmである。

第12層は灰白色の常総粘土層である。酸化鉄粒子を少量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は10～20cmまでを確認した。

第12層以下は第4号井戸跡の壁面で確認でき、上位から砂礫層、礫層の順で堆積している。

遺構は、第3層の上面で確認したが、埋没谷の範囲では第2層の上面で確認できた。

## 第3節 遺構と遺物

### 1 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡7棟、掘立柱建物跡7棟、大型円形土坑1基、柱穴列4条、土坑9基、ピット群3か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

#### (1) 竪穴建物跡

##### 第2号竪穴建物跡（第4～6図）

**位置** 調査区南東部のW8i2区、標高38mほどの台地緩斜面に位置している。

**規模と形状** 長軸5.36m、短軸5.27mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ30～50cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な床面で、全面が踏み固められている。壁溝が、竈を除いて巡っている。

**竈** 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで130cm、燃焼部の幅70cmである。燃焼部は床面から深さ28cm掘りくぼめられ、第10～12層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第10・11層の上面に第7～9層を積み上げて構築している。火床面は、第10層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に41cm掘り込まれ、火床部からほぼ直立している。第6層は煙道からの流入土、第5層は袖部の崩壊土、第1～4層は天井部材や内壁の崩壊土と考えられることから、自然に崩壊している。

##### 竈土層解説

1 褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量	7 褐灰色 粘土ブロック多量
2 褐灰色 粘土ブロック中量、ロームブロック微量	8 灰黄褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック少量
3 灰黄褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック少量	9 におい黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
4 赤褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量	10 明赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック少量
5 灰黄褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量	11 黄褐色 粘土ブロック中量、炭化物少量
6 黒褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック微量	12 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

**ピット** 7か所。P1～P4及びP7は深さ60～80cmで、配置から支柱穴と考えられる。P7は単一層で、P1に掘り込まれていることから、P7からP1へ立て替えられている。P1～P4は5～6層に分層できる。P5の深さは46cm、P6の深さ18cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は4層、P6は単一層である。P6はP5より浅く、南壁に対し直前に並ぶことから、P6はP5の支柱穴の可能性が有る。第3～9層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。P1～P4の底面から、柱のあたりを確認した。

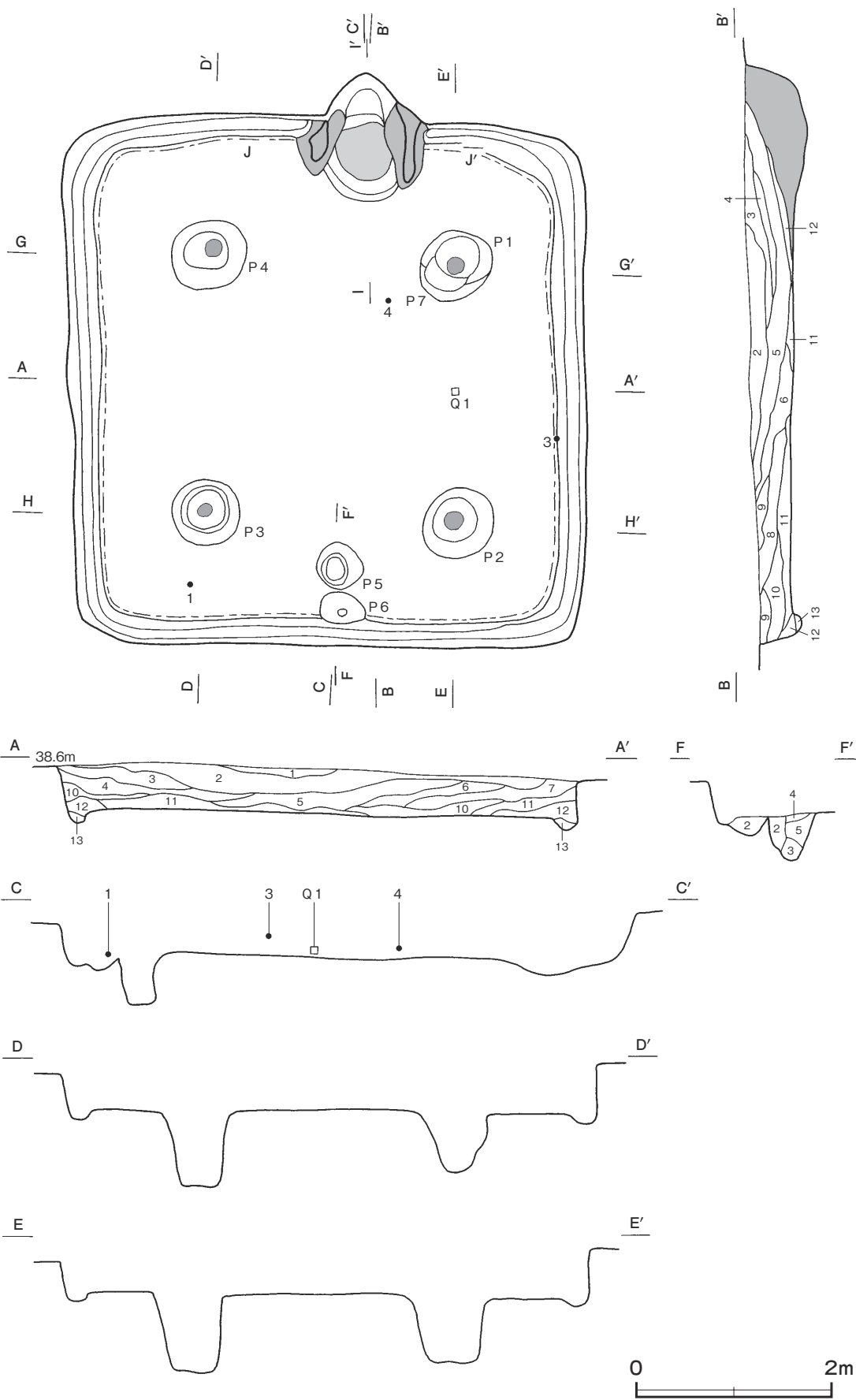
##### ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量	6 褐灰色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量	7 黄褐色 ロームブロック多量
3 褐灰色 ロームブロック少量	8 黒褐色 ロームブロック少量
4 黒褐色 ロームブロック微量	9 におい黄褐色 ロームブロック中量
5 におい黄褐色 ロームブロック多量	

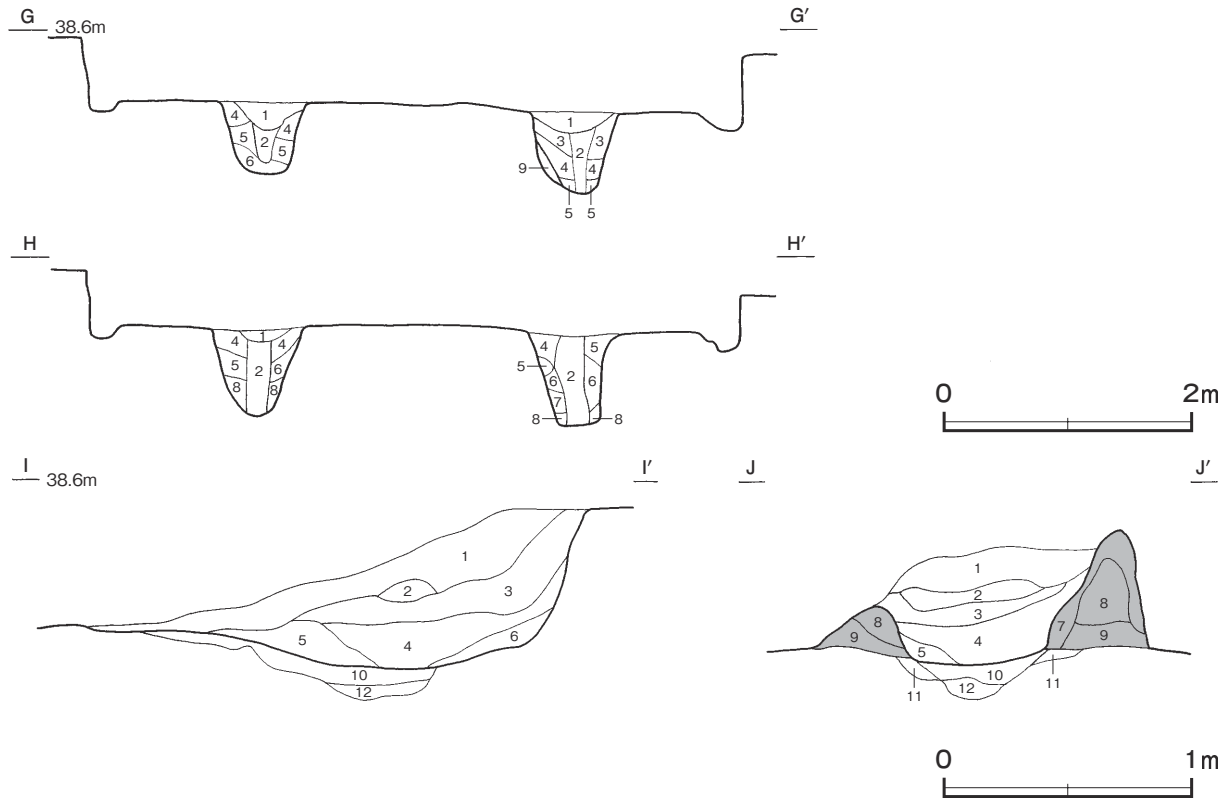
**覆土** 13層に分層できる。第12層は壁の崩壊土及び自然堆積土である。第5～11層はロームブロックが含まれる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第4層は細粒で均質のとれた層位であることから自然堆積、第1～3層はロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第13層は壁溝の覆土である。



W812



第4图 第2号竖穴建物迹实测图(1)



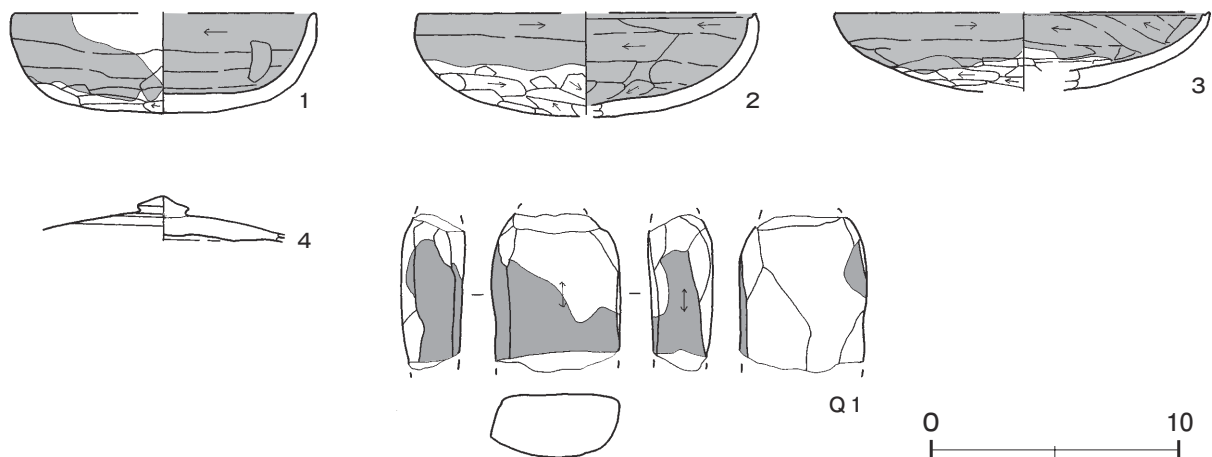
第5図 第2号竪穴建物跡実測図(2)

土層解説

- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量           | 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量     |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量   | 9 褐灰色 ロームブロック少量            |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量           | 10 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量    |
| 4 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量     | 11 褐灰色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量    | 12 灰黄褐色 ロームブロック少量          |
| 6 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量   | 13 黒褐色 ロームブロック少量           |
| 7 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 |                            |

**遺物出土状況** 土師器片 824 点 (坏 299・甕類 525), 須恵器片 9 点 (坏 2・蓋 7), 土製品 1 点 (支脚), 石器・石製品 2 点 (砥石・不明), 金属製品 1 点 (釘<sub>9</sub>) のほか, 縄文土器 1 点 (深鉢) が, 全域に散在した状態で出土している。接合関係が乏しいことから, 破損した土器が投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉から 8 世紀中葉に比定できる。



第6図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

第2号竖穴建物跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
1	土師器	坏	[12.0]	3.90	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ 底部手持ちヘラ削り	口縁部内面横位のナデ 底部内面ナデ	底	覆土下層	50%
2	土師器	坏	[13.4]	4.1	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横ナデ 外部手持ちヘラ削り	口縁部内面横ナデ後沈線 底部内面ナデ	底	覆土中層	50%
3	土師器	坏	[15.0]	(3.1)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ 連続するナデ後沈線	口縁部内面横位から縦位へ 底部手持ちヘラ削り		覆土中層	30%
4	須恵器	蓋	-	(1.8)	-	長石・石英	灰黄	良好	摘み部貼付			覆土中層	20% 新治窯

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(6.2)	5.1	2.6	(138.3)	粘板岩	砥面2面	覆土下層	

第3号竖穴建物跡（第7～10図）

**位置** 調査区南東部のV7g9区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第5号掘立柱建物、第2号道路に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸5.20m、短軸5.10mの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁は高さ22～35cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。中央部の南西寄りに、径32cmで上面が火熱を受け、赤変硬化した部分を確認した。炉跡の可能性もあるが、掘りくぼめられていないことから、性格は不明である。貼床は、第10・11層を2～18cm埋め戻して構築されている。北壁下の一部を除いて、壁溝が巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。第2号道路に掘り込まれていることから、焚口部から煙道部まで82cmしか確認できなかった。燃烧部の幅52cmである。燃烧部は床面から深さ30cm掘りくぼめられ、第6・7層で埋め戻されている。袖部は床面及び第7層の上面に第4・5層を積み上げて構築している。火床面は、第7層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込み方は不明であるが、火床部からの立ち上がりの状態から外傾していたと推定できる。第3層は煙道からの流入土、第1・2層は天井部材や内壁の崩落土と考えられることから、自然に崩落している。

**竈土層解説**

- |                         |                          |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 灰褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 5 褐灰色 粘土ブロック多量           |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量         | 6 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子中量       | 7 赤褐色 ロームブロック中量          |
| 4 灰褐色 粘土ブロック中量          |                          |

**ピット** 7か所。P1～P4は深さ50～58cmで、配置から支柱穴と考えられる。P1は2層、P2～P4は3層に分層できる。P5は深さ26～28cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。2層に分層できる。2か所のピットが存在しているが、重複関係が明確ではなく、並存していた可能性がある。第3層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。P6は深さ10cm、P7は深さ12cmで、性格は不明である。いずれも単一層で、ローム粒子が含まれていることから自然堆積と思われる。P1～P5の底面から、柱のあたりを確認した。

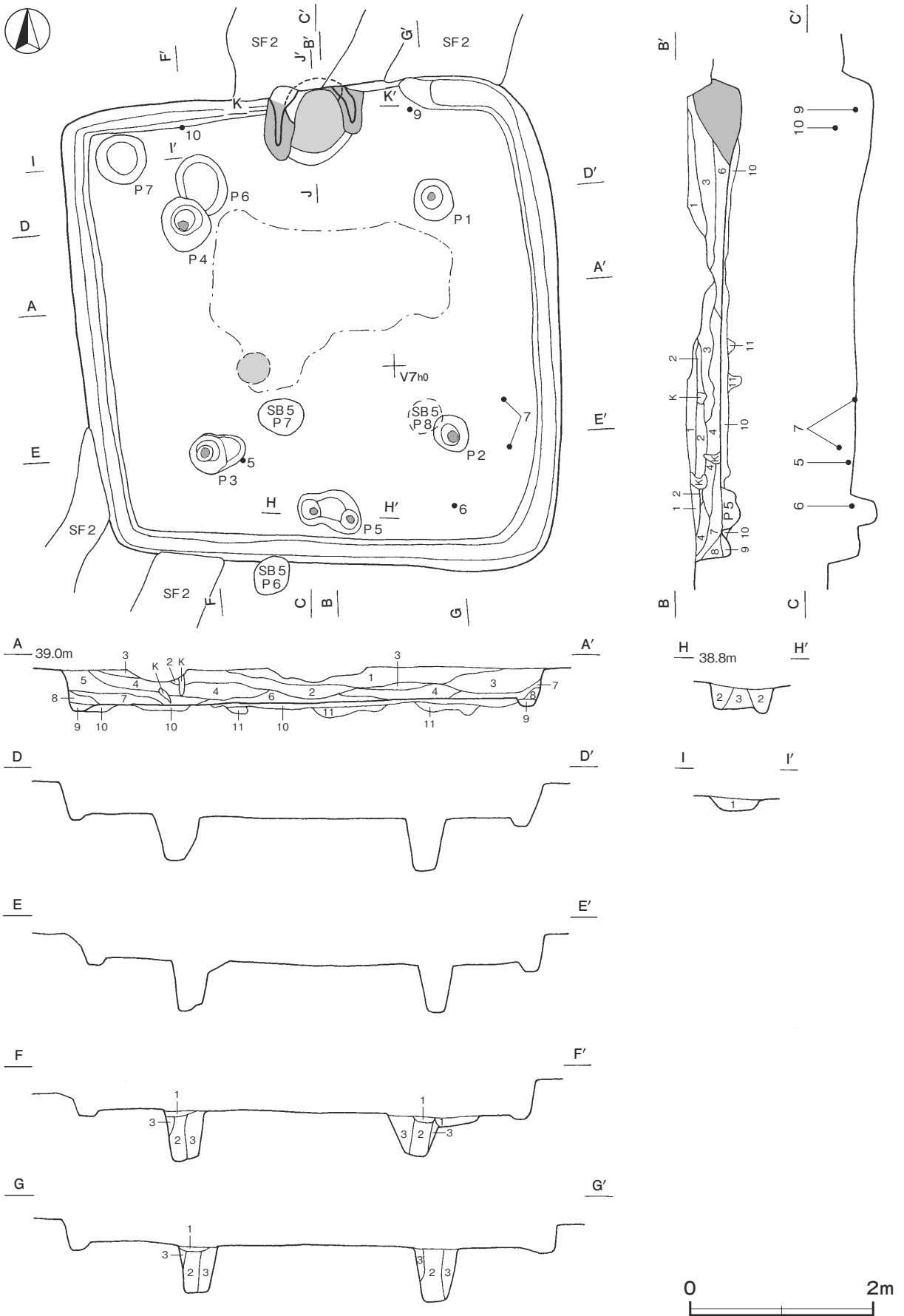
**ピット土層解説（P1～P5共通）**

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 |                    |

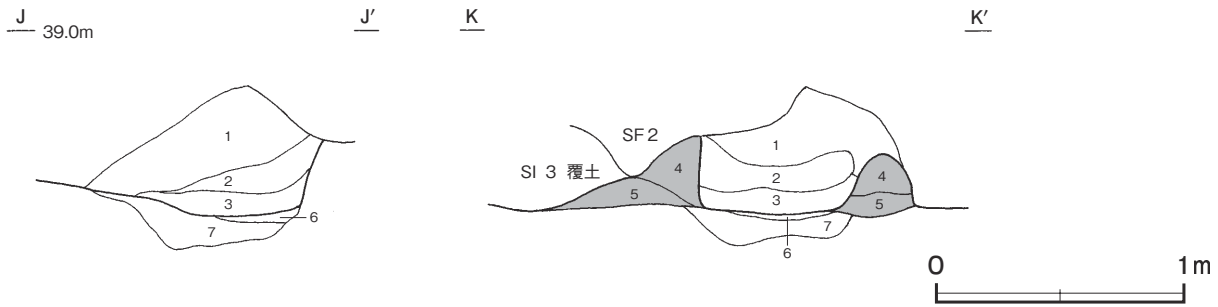
**ピット土層解説（P6・P7共通）**

- |                      |
|----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
|----------------------|

**覆土** 9層に分層できる。第8層はローム粒子が含まれていることから、自然堆積である。第1～7層はロー



第7図 第3号竖穴建物跡実測図(1)



第8図 第3号竪穴建物跡実測図(2)

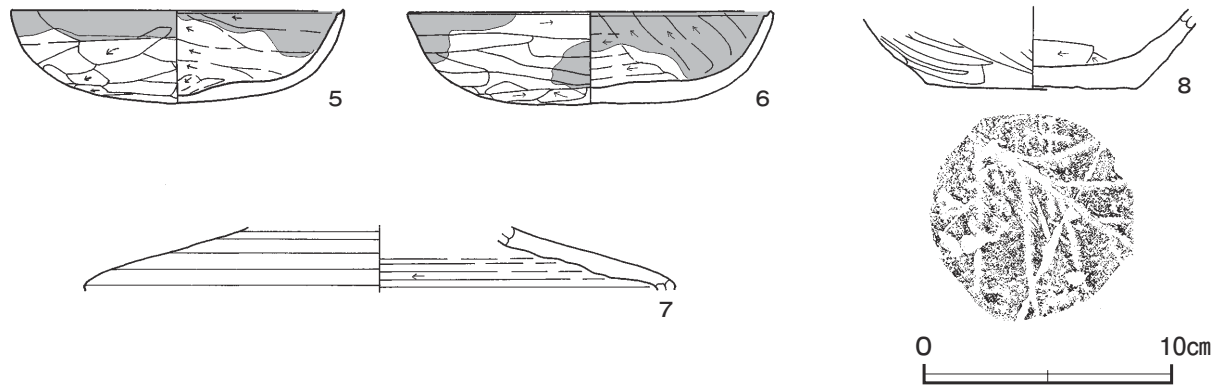
ムブロックを含む不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第9層は壁溝の覆土、第10・11層は貼床の構築土である。

土層解説

- |          |                     |           |                     |
|----------|---------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量           | 7 にぶい黄褐色  | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色    | ロームブロック少量           | 8 暗褐色     | ローム粒子少量             |
| 3 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量    | 9 褐灰色     | ロームブロック少量           |
| 4 黒褐色    | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼軽石微量   |
| 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量           | 11 黄褐色    | ロームブロック少量           |
| 6 黒褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量    |           |                     |

遺物出土状況 土師器片 293点 (坏63・蓋3・甕類227), 須恵器片 13点 (坏6・蓋1・甕類6), 土製品1点 (支脚) のほか, 近世の瓦1点が, 全域から出土している。5～7・9・10は, 中層から下層にかけて横位や斜位の状態で出土していることから, 埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉に比定できる。

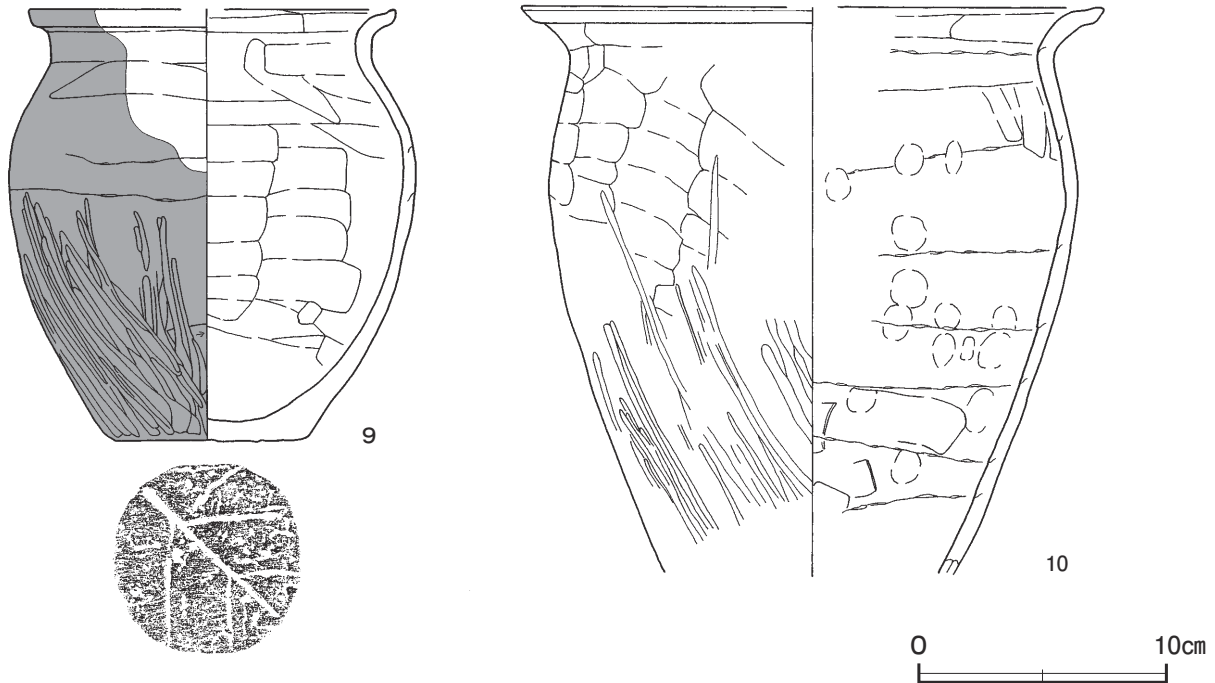


第9図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第9・10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	土師器	坏	13.2	3.7	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面横ナデ後沈線底部外面手持ちヘラ削り 底部内面ナデ	覆土下層	100% PL25
6	土師器	坏	14.3	3.7	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面横位から縦位へ連続するナデ後沈線 底部手持ちヘラ削り	覆土下層	95% PL25
7	須恵器	蓋	-	(2.6)	-	長石・白色粒子・黒色粒子	灰黄褐	普通	外・内面ロクロナデ 自然釉付着	覆土中層	25% 東海産カ
8	土師器	小形甕	-	(3.3)	8.4	長石・雲母・細礫	にぶい橙	普通	体部外面磨き 体部内面ナデ 底部木葉痕	覆土中	10%
9	土師器	小形甕	[14.5]	17.1	7.9	長石・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のナデ 中位下に磨き 体部内面横位のナデ 底部木葉痕	覆土中層	80% PL25 煤付着
10	土師器	甕	[23.0]	(22.6)	-	長石・雲母・細礫	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の削り後横位のナデ 中位下に磨き 指頭痕	覆土中層	30%





第10図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

#### 第12号竪穴建物跡 (第11～14図)

**位置** 調査区南東部のU7c4区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第4・7号地下式坑、第99・100号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸7.92m、短軸7.62mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁は高さ20～34cmで、ほぼ直立している。

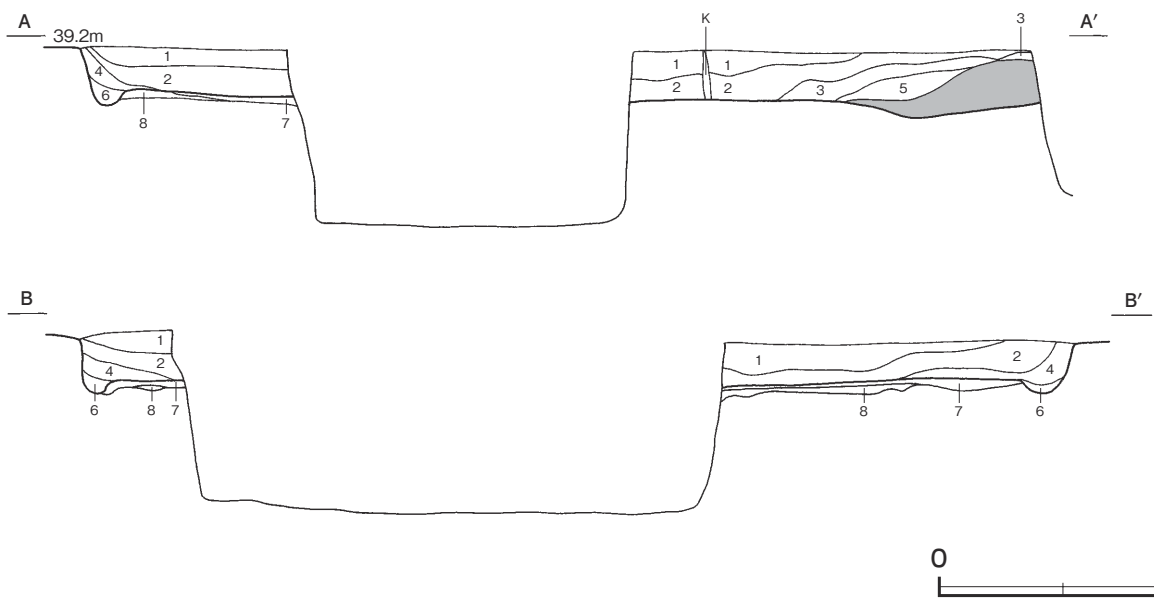
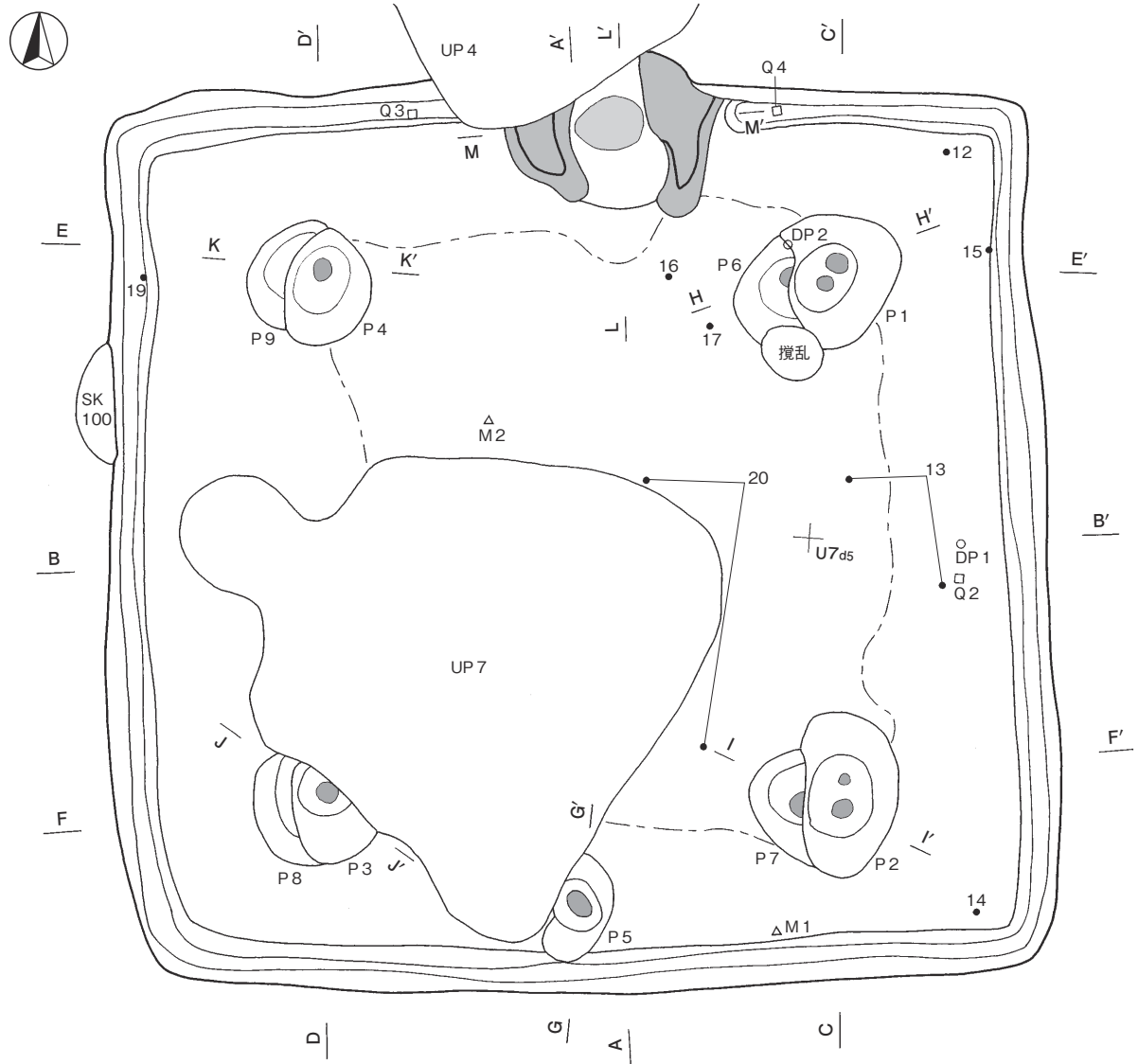
**床** 第7号地下式坑に掘り込まれた部分を除いて、平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第7・8層を6～12cm埋め戻して構築されている。壁溝が、竈を除いて巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。第4号地下式坑に掘り込まれていることから、焚口部から煙道部まで110cmしか確認できなかった。燃焼部の幅80cmである。燃焼部は床面及び10層から深さ23cm掘りくぼめられ、第8・9層で埋め戻されている。袖部は床面及び第8・9層の上面に第5・6層を積み上げて構築している。火床面は、第8層の上面が火熱を受け赤変硬化し、第7層を形成している。煙道部の壁外への掘り込み方は不明であるが、火床部からの立ち上がりの状態から外傾していたと推定できる。第1～4層は天井部材の崩壊土で、不規則な堆積状況から壊されている。また、竈前方部の第10層下から火熱を受け、赤変硬化した第11層が確認できた。当跡が構築される以前の竈の可能性はある。

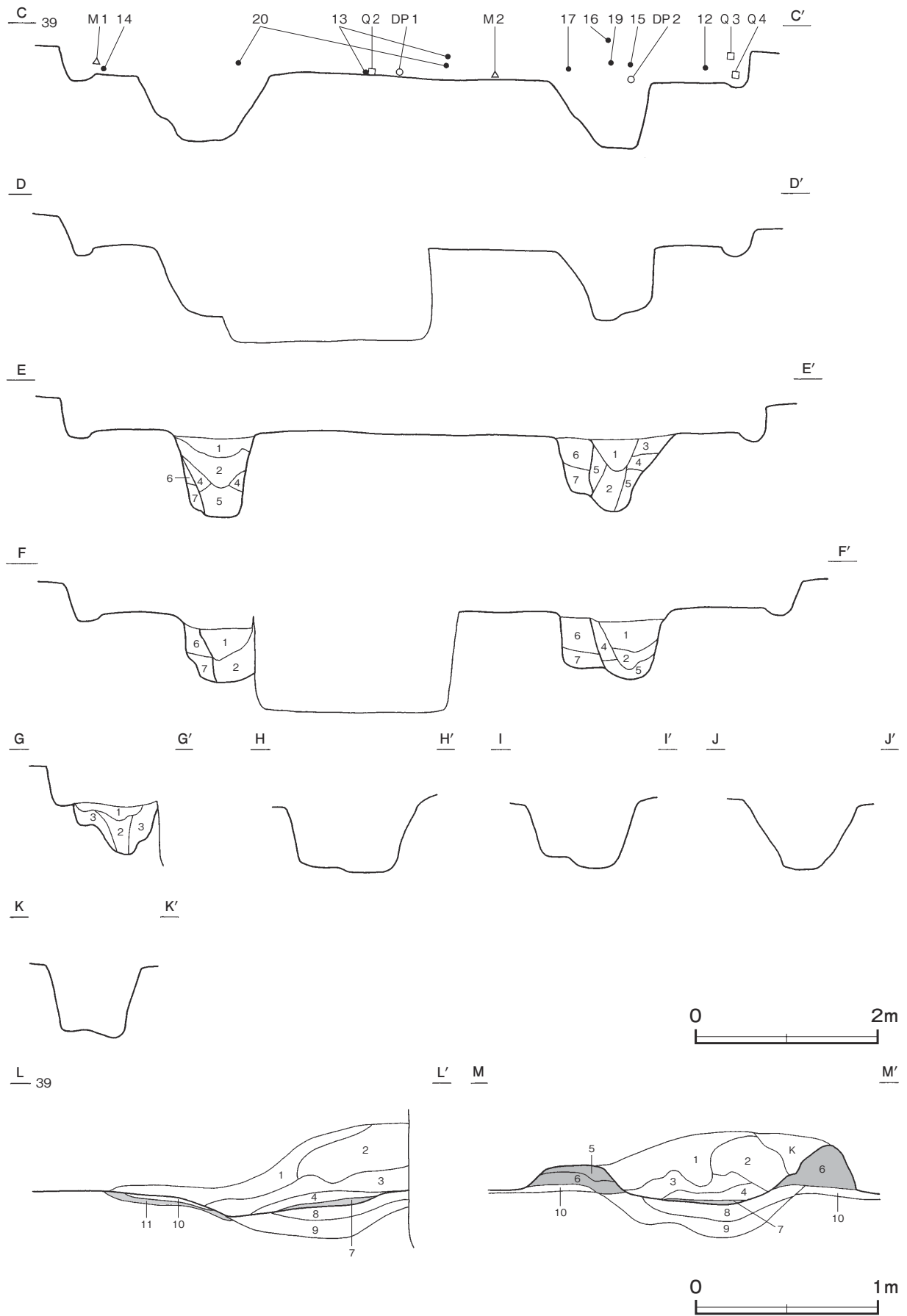
#### 竈土層解説

- |        |                           |         |                         |
|--------|---------------------------|---------|-------------------------|
| 1 褐灰色  | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量   | 6 灰黄褐色  | 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量       |
| 2 灰黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 7 明赤褐色  | 焼土ブロック多量                |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、粘土ブロック少量 | 8 褐灰色   | ロームブロック中量、焼土ブロック少量      |
| 4 灰黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量          | 9 暗褐色   | ロームブロック・焼土ブロック少量        |
| 5 褐灰色  | 粘土ブロック中量、焼土ブロック微量         | 10 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
|        |                           | 11 淡赤橙色 | 焼土ブロック多量                |

**ピット** 9か所。P1～P4及びP6～P9は深さ68～74cmで、配置から主柱穴と考えられる。P6～P9は2層で、埋土と思われる。P6はP1に、P7はP2に、P8はP3に、P9はP4に掘り込まれているこ



第 11 图 第 12 号竖穴建物跡実测图(1)



第 12 图 第 12 号竖穴建物跡实测图(2)

とから、立て替えられている。P1～P7の底面から、柱のあたりを確認した。P1・P2では、柱のあたりが各2か所で確認できたことから、さらに部分的な立て替えの可能性もある。P1～P4は2～5層に分層できる。P5は深さ52cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。3層に分層できる。第3～7層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。

**ピット土層解説 (各ピット共通)**

- |          |                     |          |                    |
|----------|---------------------|----------|--------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 灰黄色    | ロームブロック・鹿沼パミス少量    |
| 2 褐色     | ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 | 6 におい黄褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼パミス少量 |
| 3 におい黄褐色 | ロームブロック多量           | 7 黄褐色    | ロームブロック・鹿沼パミス中量    |
| 4 明黄褐色   | ロームブロック多量, 鹿沼パミス少量  |          |                    |

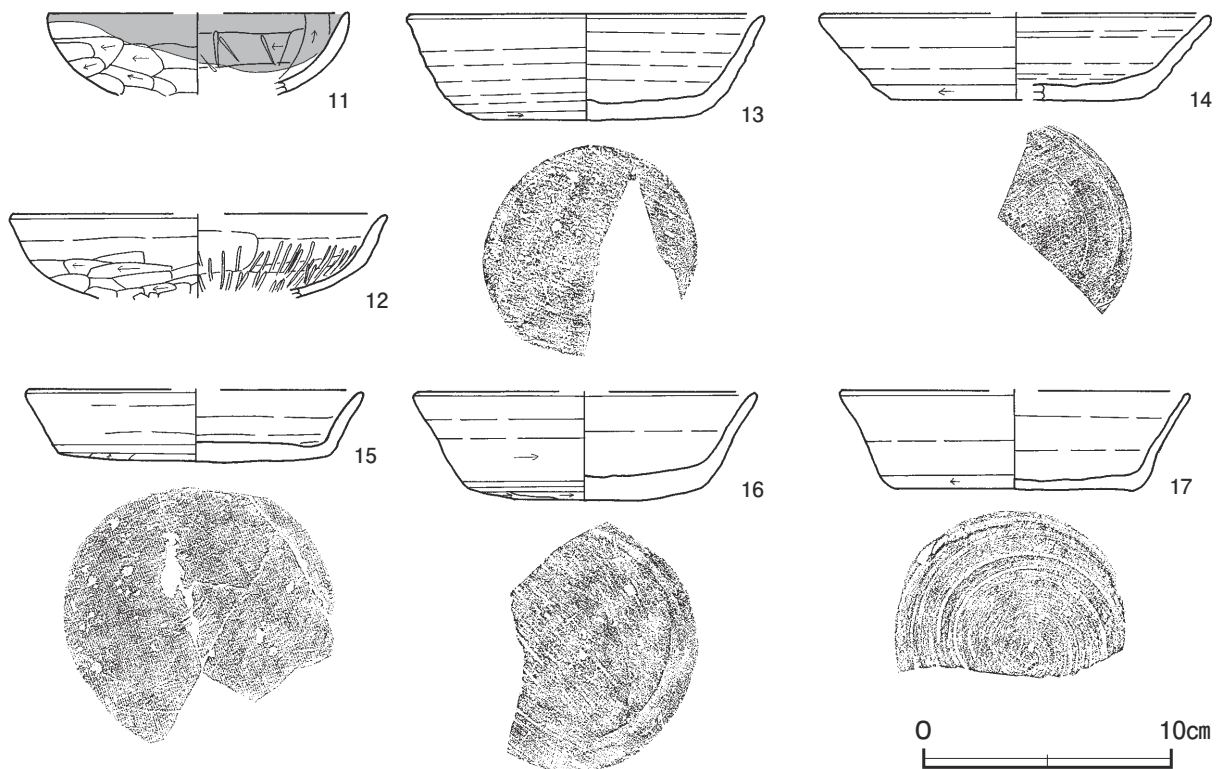
**覆土** 6層に分層できる。レンズ状の堆積から自然堆積と考えられる。第7・8層は貼床の構築土である。

**土層解説**

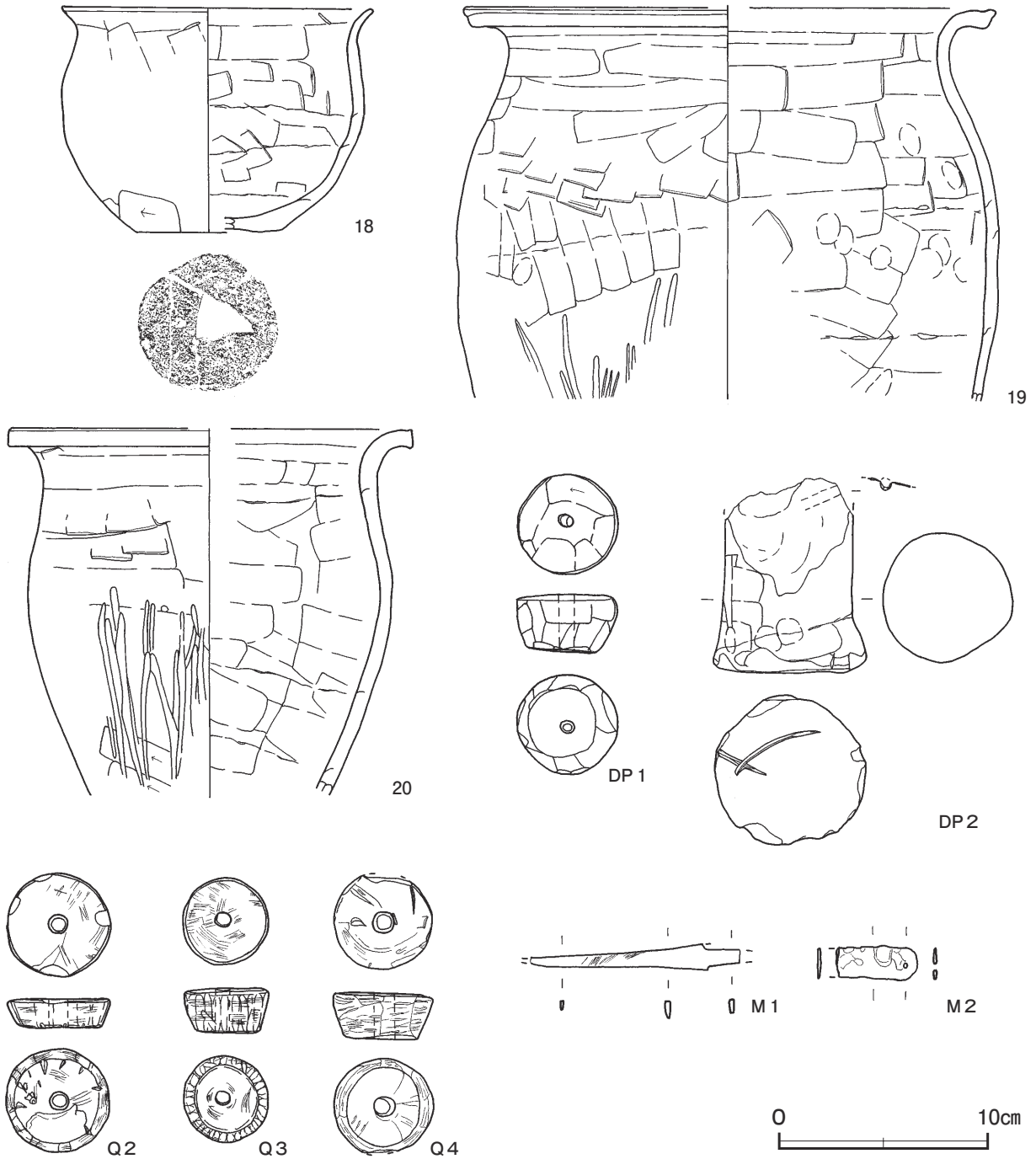
- |       |                       |          |                     |
|-------|-----------------------|----------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量               | 5 黒褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量    |
| 2 褐灰色 | ロームブロック微量             | 6 黒褐色    | ロームブロック少量           |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック・焼土ブロック・ローム粒子少量 | 7 におい黄褐色 | ロームブロック中量           |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量               | 8 黒褐色    | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |

**遺物出土状況** 土師器片 1697点 (坏 367・蓋 1・甕類 1321・甑 8), 須恵器片 319点 (坏 177・蓋 14・鉢 4・瓶類 1・甕類 123), 土製品 4点 (支脚 1・紡錘車 1・不明 2), 石製品 3点 (紡錘車), 金属製品 5点 (刀子 1・手鎌 1・不明 3) のほか, 縄文土器 2点 (深鉢), 手握土器 1点 が, 主に壁際周辺から出土している。12～15・17・19・20は, 中層下位から下層にかけて斜位の状態で出土していることから, 埋没の早い段階で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 平底の須恵器坏が少数含まれることや長期間の存続が考えられることから, 8世紀前葉から中葉に比定できる。



第13図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第14図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第12号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第13・14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師器	坏	[12.0]	(3.3)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面横位から縦位へ連続するナデ 底部手持ちヘラ削り 底部内面横位ナデ後暗文状のヘラ圧痕	覆土中	20%
12	土師器	坏	[14.8]	(3.3)	-	雲母・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 底部手持ちヘラ削り 底部内面横位ナデ後放射状の暗文	覆土中層	30% PL25
13	須恵器	坏	14.2	4.2	8.2	長石・雲母・細礫	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後一方向の手持ちヘラ削り	覆土中層	70% PL26 新治窯
14	須恵器	坏	[15.5]	3.4	[10.1]	長石・石英・白色粒子	灰	良好	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土中層	30% 堀ノ内窯
15	須恵器	坏	[13.3]	2.8	10.8	雲母・白色粒子・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ削り後多方向の手持ちヘラ削り	覆土中層	60% 新治産
16	須恵器	坏	[13.6]	3.7	9.3	細礫・白色粒子・黒色粒子	灰	良好	底部回転ヘラ削り後二方向の手持ちヘラ削り	覆土上層	50% 堀ノ内窯
17	須恵器	坏	[13.8]	3.9	9.6	雲母・細礫	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中層	40% 新治窯

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
18	土師器	小形甕	[14.4]	(10.6)	6.8	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ 下部削り 体部内面横位のナデ 底部木葉痕ナデ消し	覆土中	60%
19	土師器	甕	[25.1]	(18.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後横位のナデ 中位以下に磨き 体部内面横位のナデ	覆土中層	20%
20	土師器	甕	[18.6]	(17.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ 下部削り後中位以下に磨き 体部内面横位のナデ	覆土下層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	紡錘車	4.8	2.8	0.7	70.3	長石・石英・細礫	褐	全面削り後ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	PL40

番号	器種	高さ	最大径	最小径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 2	支脚	(9.2)	7.1	6.0	(397.9)	長石・石英・細礫	にぶい赤褐	粘土紐巻き上げ ナデ 指頭痕 側面に径5mmの穿孔 底面「×」状のヘラ書	覆土下層	PL40

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	紡錘車	4.9	1.4	0.9	49.3	粘板岩	上面・下面研磨 削り痕 側面削り後研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	PL41
Q 3	紡錘車	4.1	2.2	0.7	60.2	蛇紋岩	上面・下面研磨 側面削り後研磨 一方向からの穿孔	覆土中層	PL41
Q 4	紡錘車	4.7	2.2	1.0	(58.6)	粘板岩	上面・下面研磨 側面削り後研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	刀子	(10.0)	1.3	0.3	(10.3)	鉄	刃部先端・関部欠損 刃部断面三角 茎部一部欠損 両関	覆土中層	PL41
M 2	手鎌	(3.9)	1.5	0.1	(5.6)	鉄	刃部一部欠損 端部に径2mmの穿孔	覆土下層	PL41

## 第 21 号竪穴建物跡 (第 15 ~ 17 図)

**位置** 調査区中央部の Q 5 b5 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 北東部が調査区域外に延びているが、長軸 3.76 m、短軸 3.42 m の方形で、主軸方向は N - 2° - W である。壁は高さ 30 ~ 33cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、西壁際付近及び南東部壁際付近を除いて、踏み固められている。壁溝が、竈付近を除いて巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されていると推定できる。焚口部から煙道部まで 120cm、燃焼部の幅 55cm である。燃焼部は床面から深さ 11cm 掘りくぼめられ、第 9 層で埋め戻されている。袖部は、床面に第 6・7 層を積み上げて構築されている。火床面は第 9 層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 39cm 掘り込まれ、第 8 層を 14cm 貼り付けて、煙道の外壁が構築されている。火床部からは緩やかに立ち上がり、煙道部は直立している。第 3 ~ 5 層は天井部材や内壁の崩落土と考えられるが、土器片が複数含まれていることから、壊されている。第 2 層は煙道部痕跡への流入土、第 1 層は竈が崩落した後の覆土である。

### 竈土層解説

- |          |                        |        |                      |
|----------|------------------------|--------|----------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 6 褐灰色  | 粘土ブロック中量、炭化物微量       |
| 2 暗褐色    | 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量      | 7 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック多量、炭化物少量         | 8 赤褐色  | 粘土ブロック多量、焼土ブロック中量    |
| 4 暗褐色    | 焼土ブロック中量、炭化物少量         | 9 黒褐色  | ロームブロック中量、焼土ブロック少量   |
| 5 暗赤褐色   | 粘土ブロック多量               |        |                      |

**ピット** P 1 は深さ 42cm で、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第 3・4 層は埋土、第 2 層は柱痕跡、第 1 層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。

### ピット土層解説 (P 1)

- |       |                      |          |           |
|-------|----------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量 | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量              | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |

**覆土** 10 層に分層できる。第 1 ~ 9 層は不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第 9 層には

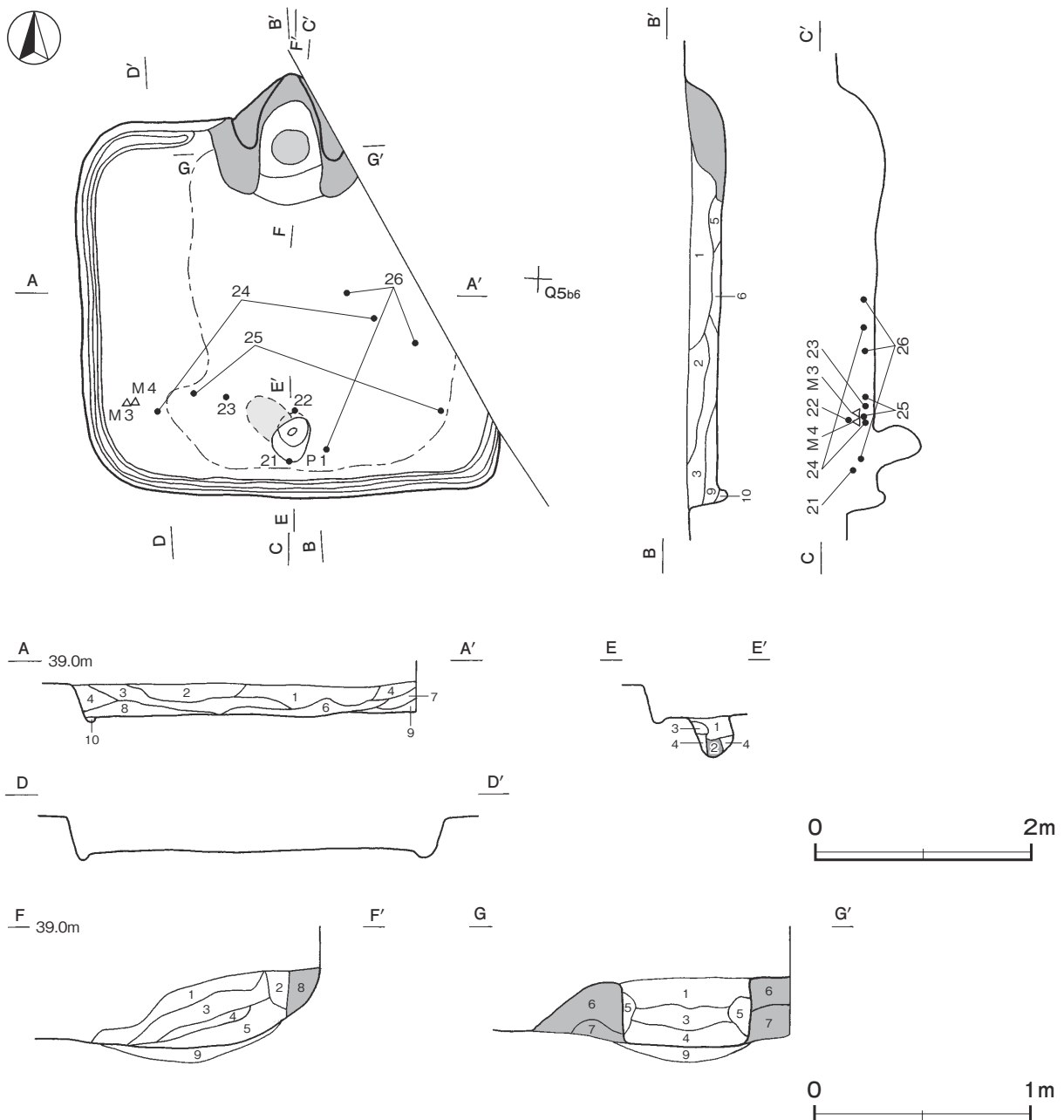
焼土ブロックや炭化材が含まれている。第10層は壁溝の覆土である。

**土層解説**

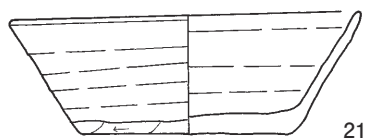
- |       |                     |           |                         |
|-------|---------------------|-----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色     | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量     |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量      | 7 暗褐色     | ローム粒子中量                 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量   | 8 暗褐色     | ロームブロック中量               |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量           | 9 にぶい赤褐色  | 焼土ブロック・炭化材中量, ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック少量   | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量               |

**遺物出土状況** 土師器片 81点 (坏2・甕類78・甑1), 須恵器片 45点 (坏13・高台付坏1・蓋3・盤1・高盤1・鉢1・甕類23・甑2), 石器1点 (砥石), 金属製品2点 (釘) が, 主に南半部から出土している。床面上や第9層からは, 焼土ブロックや炭化材が多くが確認できた。土器は大型の破片が大半で, 覆土第8層以上で出土していることから, 廃材を焼却した後, 埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

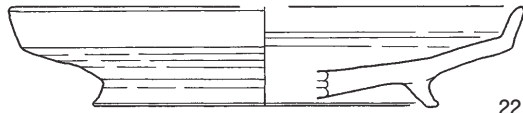
**所見** 時期は, 出土土器から8世紀後葉に比定できる。



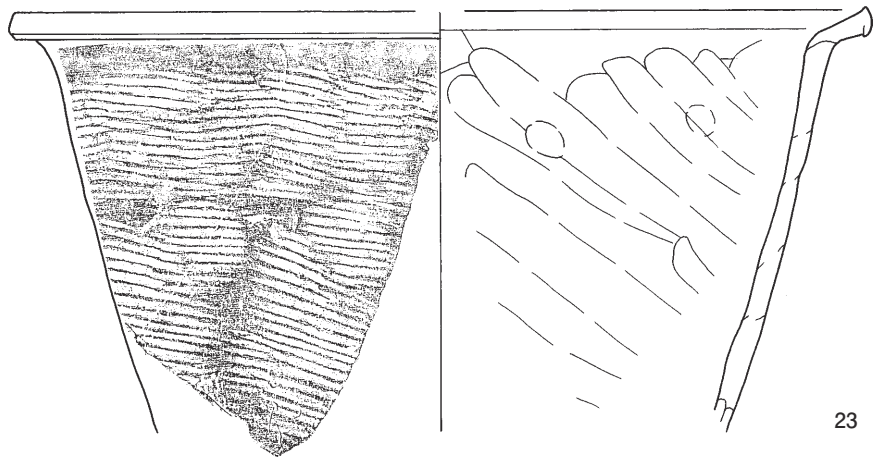
第15図 第21号竪穴建物跡実測図



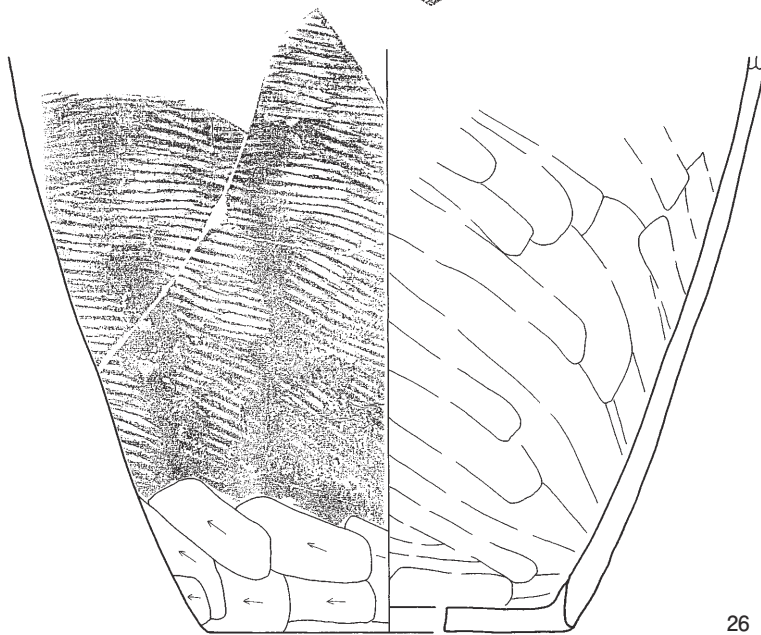
21



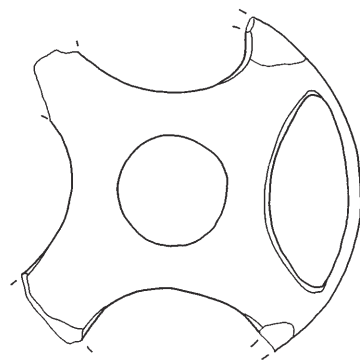
22



23

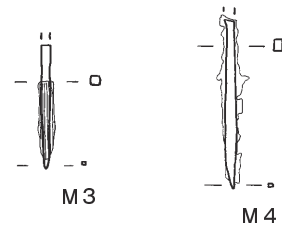
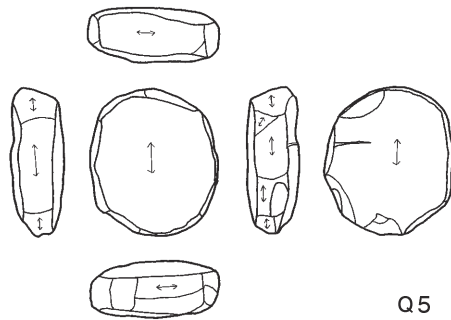
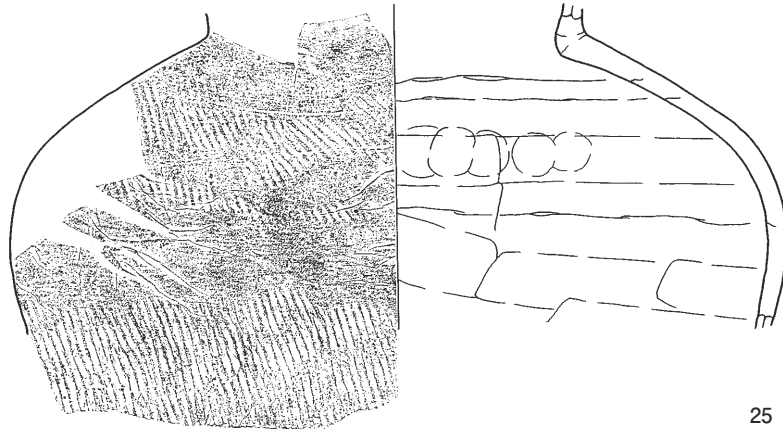
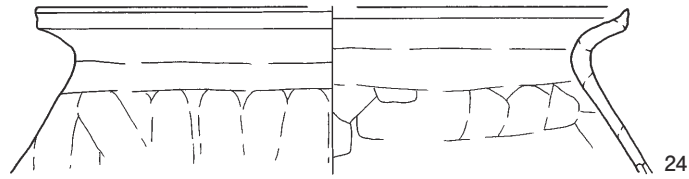


26



第 16 图 第 21 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)





第 17 図 第 21 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 21 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 16・17 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
21	須恵器	坏	13.9	4.9	8.3	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良好	体部下端手持ちへら削り 底部へら切りを残す一方向のナデ	覆土中層	60% PL26 堀ノ内窯
22	須恵器	盤	[20.4]	4.0	[13.6]	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良好	口縁外ナデ 体部内面口唇部に沿って円状のナデ 底部高台貼付後ナデ	覆土中層	40% 堀ノ内窯
23	須恵器	鉢	[33.8]	(16.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横・斜位の平行叩き 体部内面斜位のナデ 指頭痕	覆土中層	10% 新治窯
24	土師器	甕	[23.6]	(6.6)	-	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ 体部内面縦位のナデ後横位のナデ	覆土中層	5%
25	須恵器	甕	-	(13.0)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	体部外面縦・斜位の平行叩き後部分的な横位のナデ 体部内面横位のナデ 指頭痕	覆土中層	30% 堀ノ内窯
26	須恵器	甗	-	(23.0)	[14.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	体部外面横・斜位の平行叩き後下位にへら削り 体部内面斜位のナデ 底部へら切りによる穿孔 底部内面多方向のナデ	覆土中層	30% 新治窯

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	砥石	5.9	5.1	2.2	84.94	凝灰岩	砥面 12 面	覆土中	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	釘	(5.0)	0.4	0.4	(4.97)	鉄	頭部欠損 断面方形 木片付着	覆土中層	PL41
M4	釘	(6.3)	0.5	0.4	(5.70)	鉄	頭部欠損 断面方形	覆土中層	

第 24 号竪穴建物跡 (第 18・19 図)

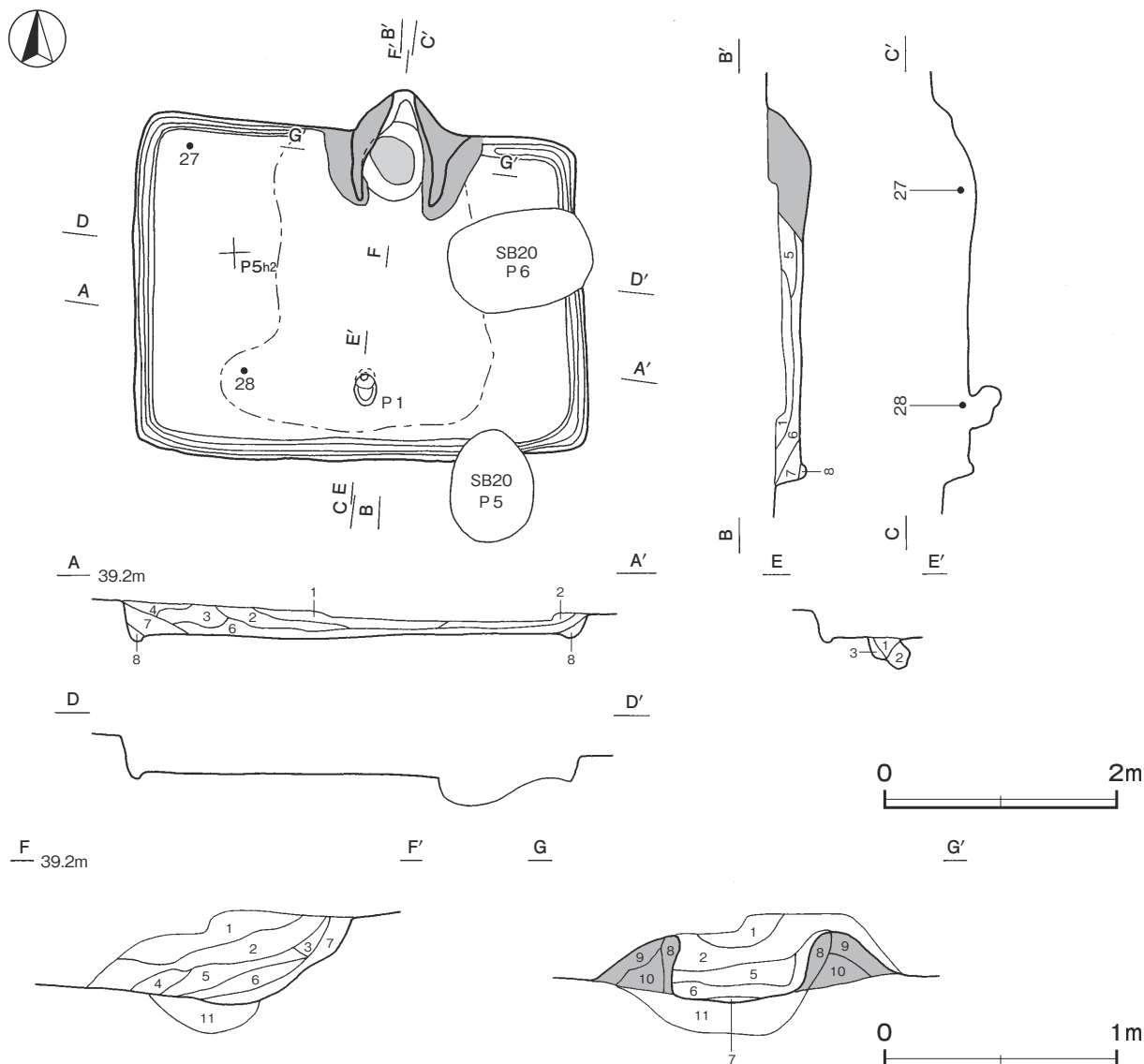
**位置** 調査区中央部の P 5 h2 区, 標高 39 m ほどの台地緩斜部に位置している。

**重複関係** 第 20 号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 3.82 m, 短軸 2.90 m の長方形で, 主軸方向は N - 10° - E である。壁は高さ 20 ~ 30 cm で, ほぼ直立している。

**床** 平坦で, 竈周辺と中央部が踏み固められている。壁溝が, 竈付近と第 20 号掘立柱建物に掘り込まれた部分を除いて巡っている。

**竈** 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで 112 cm, 燃焼部の幅 52 cm である。燃焼部は床面から深さ 16 cm 掘りくぼめられ, 第 11 層で埋め戻されている。袖部は, 床面及び第 11 層の上面に第 8 ~ 10 層を積み上げて構築している。火床面は第 11 層の上面で, 火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 37 cm 掘り込まれ, 火床部から外傾している。第 7 層は煙道からの流入土, 第 4 ~ 6 層は天井部材や内壁の崩落土であるが, 第 5 層には焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから, 壊されている。第 1・2 層は, 竈の廃絶後の覆土である。



第 18 図 第 24 号竪穴建物跡実測図

**竈土層解説**

- |        |                         |         |                    |
|--------|-------------------------|---------|--------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 7 極暗褐色  | 焼土粒子中量, 炭化物微量      |
| 2 暗褐色  | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量     | 8 暗褐色   | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量 |
| 3 暗褐色  | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量     | 9 灰褐色   | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 4 灰褐色  | 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量        | 10 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量 |
| 5 褐色   | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック中量      | 11 暗褐色  | ロームブロック・焼土ブロック少量   |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量                |         |                    |

**ピット** P1は深さ26cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第3層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。

**ピット土層解説 (P1)**

- |       |                        |          |           |
|-------|------------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量              |          |           |

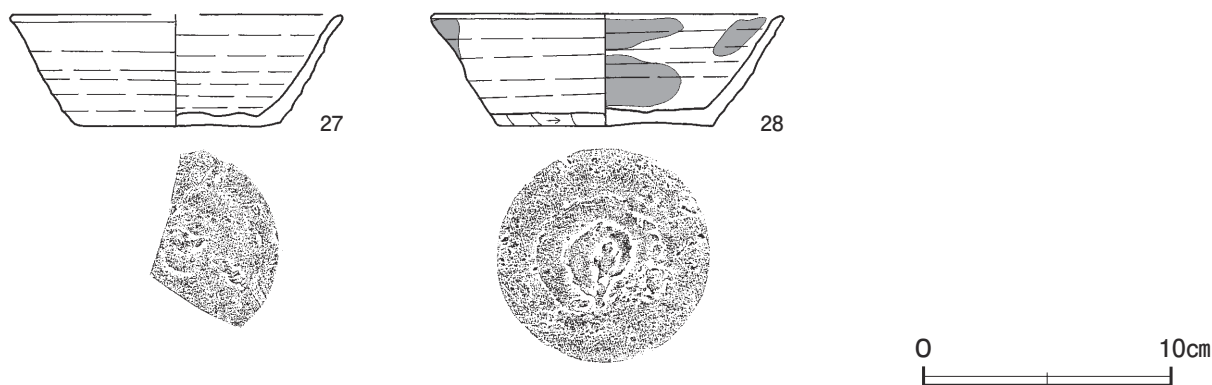
**覆土** 8層に分層できる。第1～7層は不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第8層は壁溝の覆土である。

**土層解説**

- |       |                   |          |                         |
|-------|-------------------|----------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 5 暗褐色    | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量     |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色    | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量     | 7 暗褐色    | ロームブロック中量               |
| 4 黒褐色 | ロームブロック微量         | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量               |

**遺物出土状況** 土師器片15点(坏1・鉢1・甕類13)、須恵器片8点(坏6・蓋1・甕類1)、石器1点(金床石<sub>カ</sub>)が、主に壁際から出土している。27は、大型の破片で北西コーナー部の下層から出土していることから、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。28は完形品で床面から出土していることから、遺棄の可能性がある。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第19図 第24号竪穴建物跡出土遺物実測図

第24号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
27	須恵器	坏	[13.0]	4.5	[8.2]	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	底部へら切りを残す多方向のナデ	覆土下層	40% 堀ノ内窯
28	須恵器	坏	14.0	4.5	8.5	長石・石英・黒色粒子	オリーフ灰	良好	体部下端手持ちへら削り 底部へら切りを残す多方向のナデ	床面	100% PL26 堀ノ内窯 煤付着

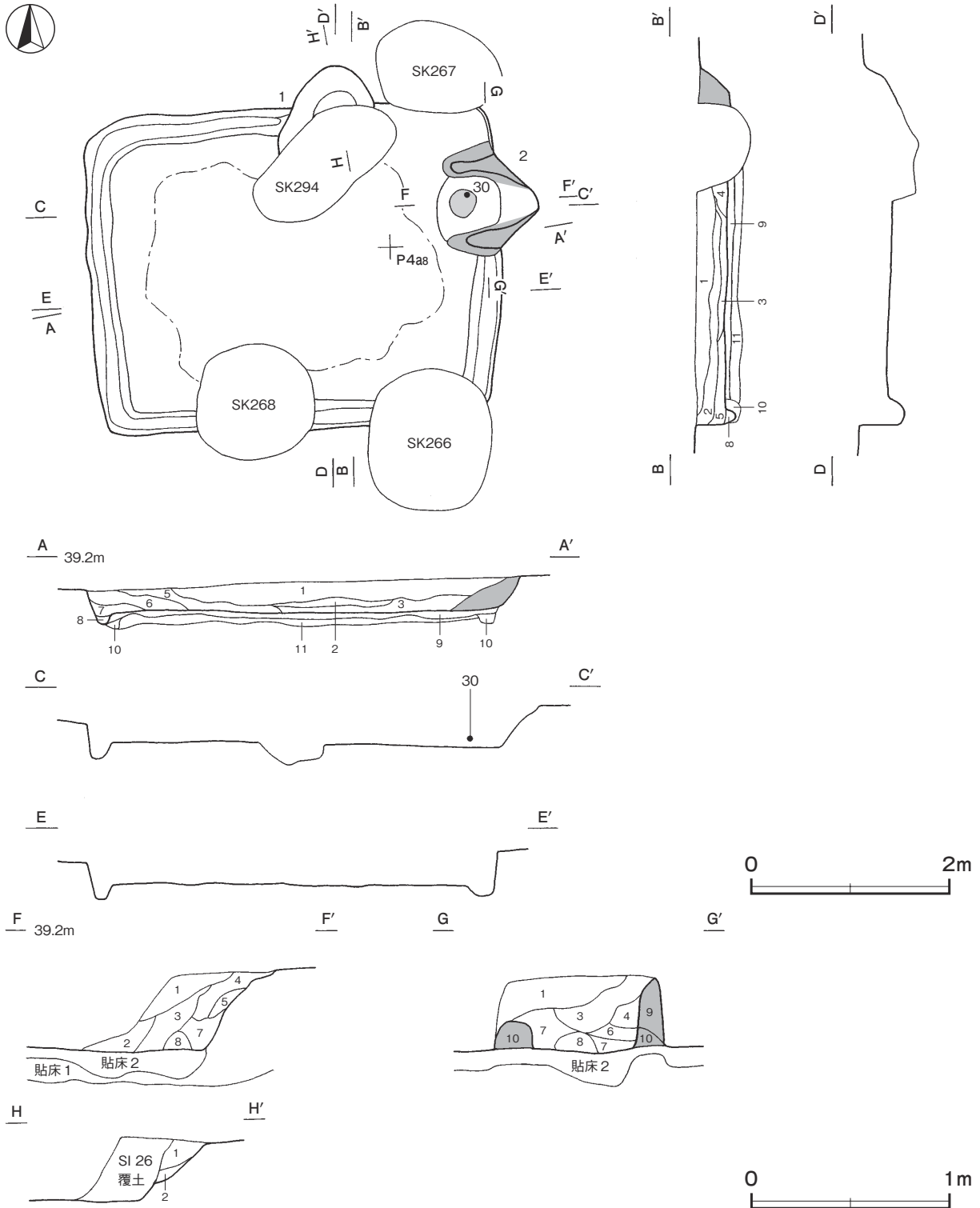
**第26号竪穴建物跡 (第20・21図)**

**位置** 調査区北西部のO4j7区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第266～268・294号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.06m，短軸3.16mの長方形で，主軸方向はN-90°-Eである。壁は高さ18～30cmで，ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で，中央部が踏み固められている。貼床は二面が確認でき，第1面は第11層を2～14cm，第2面は第9層を6～12cm埋め戻して構築している。壁溝が，竈と北東コーナー部を除いて巡っている。



第20図 第26号竪穴建物跡実測図

**竈** 2か所。竈1は北壁中央部の東寄りに付設されている。第294号土坑に掘り込まれていることから、焚口部や燃焼部は確認できなかった。煙道部は壁外に38cm掘り込まれ、外傾している。第1・2層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊された後、埋め戻されている。袖部が壊されていることから、竈1から竈2へ作り替えられている。竈2は東壁の北寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで102cm、燃焼部の幅55cmである。燃焼部は第2面の床面から深さ3cm掘りくぼめられている。袖部は、床面に第9・10層を積み上げて構築している。火床面は床の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に44cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第3～8層はロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。第1・2層は廃絶後の覆土である。

**竈土1層解説**

- |   |        |                            |   |    |                         |
|---|--------|----------------------------|---|----|-------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 2 | 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
|---|--------|----------------------------|---|----|-------------------------|

**竈土2層解説**

- |   |        |                      |    |      |                     |
|---|--------|----------------------|----|------|---------------------|
| 1 | 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子少量         | 6  | 暗褐色  | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 |
| 2 | 灰黄褐色   | ローム粒子微量              | 7  | 暗褐色  | ロームブロック少量           |
| 3 | 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 8  | 赤褐色  | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量  |
| 4 | にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量      | 9  | 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量  |
| 5 | 褐色     | ロームブロック・焼土ブロック微量     | 10 | 黄褐色  | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 |

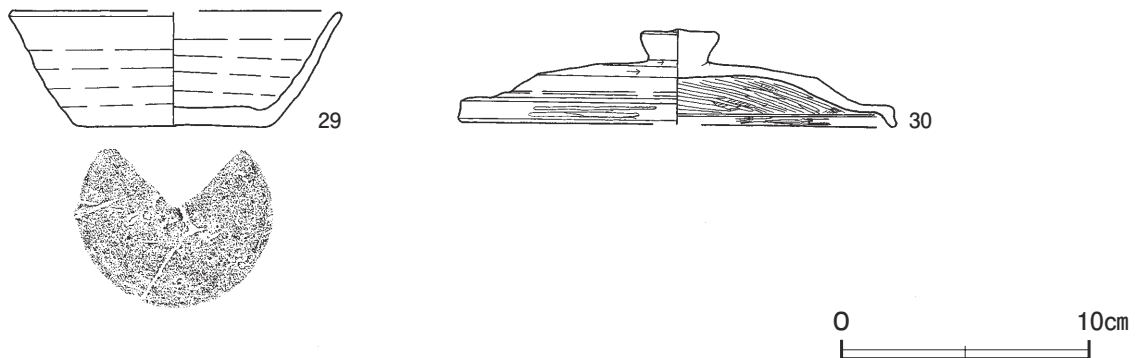
**覆土** 8層に分層できる。第1～7層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第8層は第2面の壁溝の覆土, 第9層は第2面の貼床の構築土, 第10層は第1面の壁溝の覆土, 第11層は第1面の貼床の構築土である。

**土層解説**

- |   |        |              |    |        |                     |
|---|--------|--------------|----|--------|---------------------|
| 1 | 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子少量 | 7  | 灰黄褐色   | ローム粒子微量             |
| 2 | 黒褐色    | ローム粒子微量      | 8  | にぶい黄褐色 | ローム粒子微量             |
| 3 | 暗褐色    | ローム粒子・焼土粒子微量 | 9  | 褐色     | ロームブロック中量           |
| 4 | 暗褐色    | ロームブロック微量    | 10 | 暗褐色    | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 5 | 暗褐色    | ロームブロック少量    | 11 | 褐色     | ロームブロック多量           |
| 6 | にぶい黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |    |        |                     |

**遺物出土状況** 土師器片18点(坏1・蓋1・甕類16), 須恵器片22点(坏20・蓋1・甕類1)が, 全域に散在した状態で出土している。土器は細片が多く, 斜位や逆位などの状態で出土していることから, 埋没の過程で投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第21図 第26号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 26 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 21 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	須恵器	坏	[13.0]	4.6	7.6	長石・石英・ 黒色粒子	灰	普通	底部多方向のナデ	覆土中	50% 堀ノ内窯
30	土師器	蓋	[17.2]	3.8	-	雲母・赤色粒子・ 白色粒子	にぶい褐	普通	天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後 口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外・内面横 位の磨き	竈2覆土下層	50%

第 30 号竪穴建物跡（第 22・23 図）

**位置** 調査区北西部の O4h3 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 27 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 南半部は第 27 号竪穴建物に掘り込まれ、西部は調査区域外に延びていることから、南北軸は 1.74 m、東西軸は 2.16 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形で、主軸方向は N-7°-E と推定できる。壁は高さ 32cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第 4 層を 8～12cm 埋め戻して構築している。確認できた部分では、壁溝が巡っている。

**竈** 北壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。焚口部から煙道部まで 112cm、燃焼部の幅 74cm である。燃焼部は床面から土坑状に深さ 16～20cm 掘りくぼめられ、第 12～15 層で埋め戻されている。袖部は、床面に第 9～11 層を積み上げて構築している。袖部の構築土からは、35・36 が逆位で出土しており、芯材として用いられている。火床面は第 12～14 層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。火床面では 34 が逆位で確認でき、第 12 層で口縁部から頸部までが埋められ、据え付けられていることから、支脚に転用されている。煙道部は壁外に 76cm 掘り込まれ、火床部から外傾している。第 5～8 層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。第 1～4 層は廃絶後の覆土である。

**竈土層解説**

1 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	9 灰褐色	焼土ブロック・粘土ブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	10 灰黄褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック微量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	11 黒褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	12 赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
5 暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量	13 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
6 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量	14 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック微量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	15 褐色	焼土ブロック・粘土ブロック微量
8 赤褐色	焼土ブロック少量、粘土ブロック微量		

**ピット** 3 か所。P1～P3 は深さ 10～14cm で、配置から主柱穴と考えられる。P3 は、P1 との立て替え関係にある柱穴の可能性はある。

**覆土** 3 層に分層できる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第 4 層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

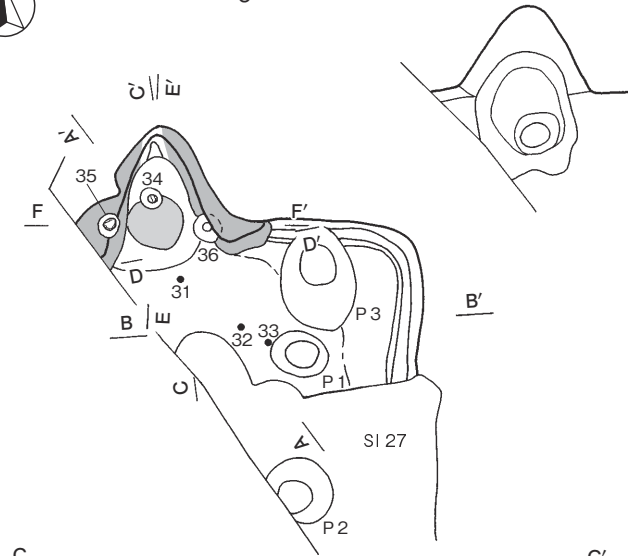
1 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子微量	4 にぶい黄褐色	ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師器片 60 点（甕類）、須恵器片 21 点（坏 14・高台付坏 1・蓋 1・盤 4・甕類 1）、石器 1 点（砥石）のほか、縄文土器 1 点（深鉢）が、全域に散在した状態で出土している。土器は小片が多く、覆土中から斜位や逆位などの状態で出土していることから、埋没の過程で流入及び廃棄されたものと考えられる。32 は、遺存状態が良好で覆土下層から出土していることから、投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



†O4n4



A 39.2m A'

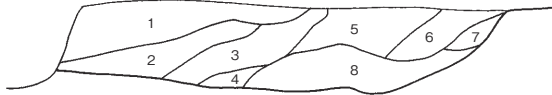


B B'



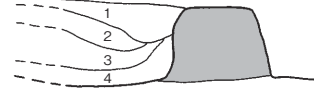
0 2m

C 39.0m



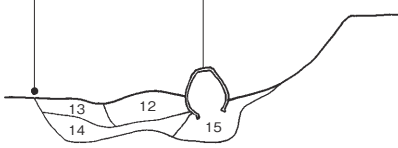
C'

D

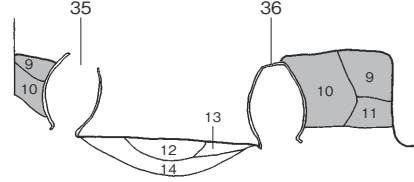


D'

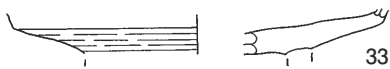
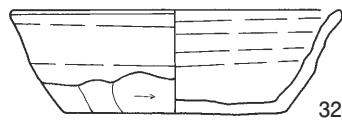
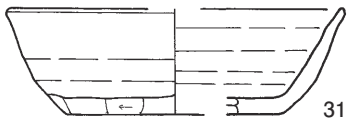
E 31 E'



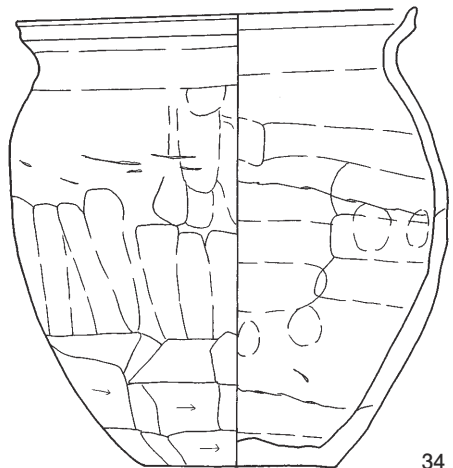
F



0 1m



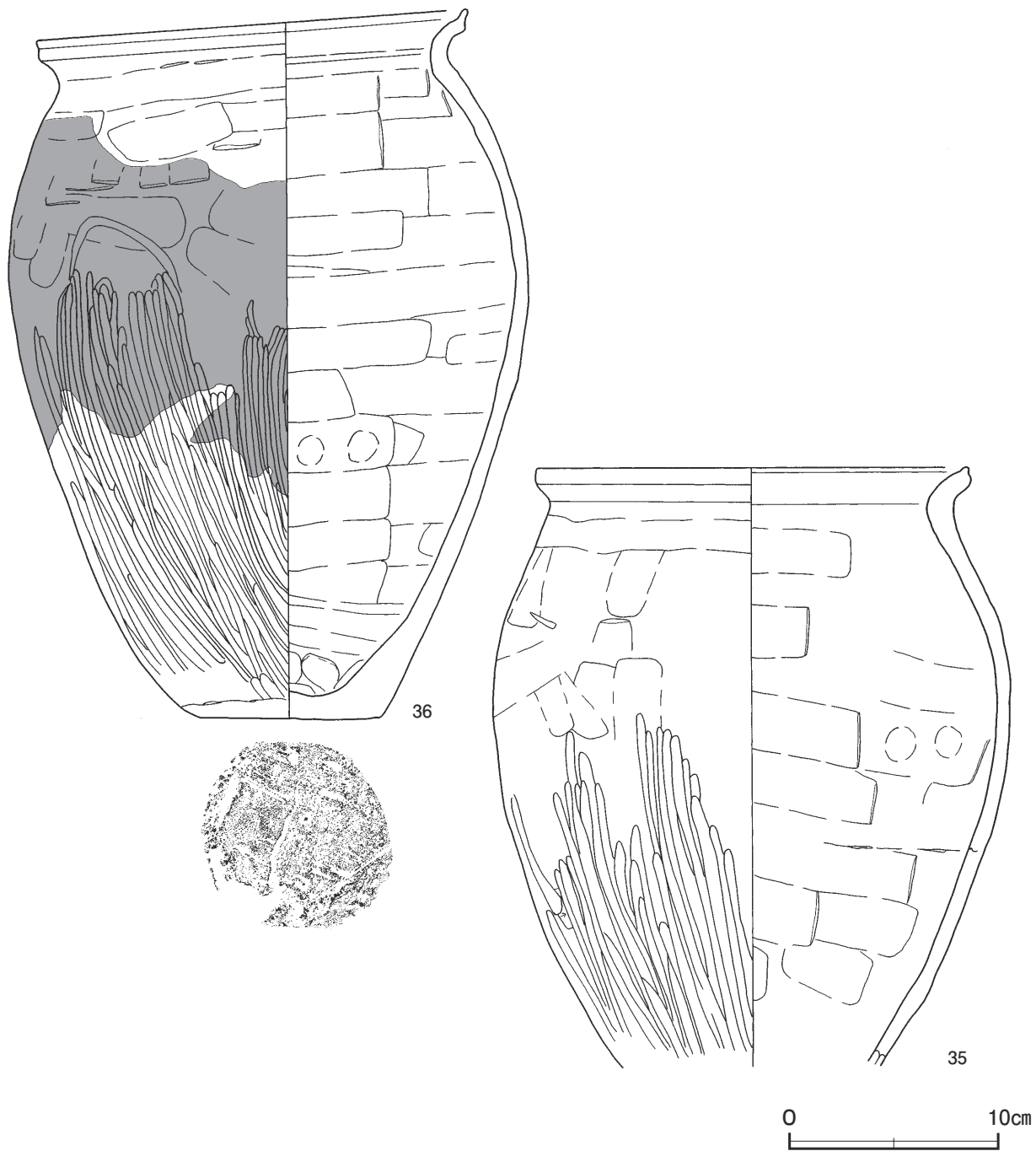
33



34

0 10cm

第 22 图 第 30 号竖穴建物跡・出土遺物実測図



第23図 第30号竪穴建物跡出土遺物実測図

第30号竪穴建物跡出土遺物観察表（第22・23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	須恵器	坏	[13.3]	4.2	[8.5]	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちへら削り 底部一方向の削り	覆土下層	20% 堀ノ内窯
32	須恵器	坏	13.0	4.2	8.7	長石・石英・雲母・ 黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちへら削り 底部二方向の削り	覆土下層	60% 新治窯
33	須恵器	高台付坏	-	(1.7)	-	長石・白色粒子・ 黒色粒子	灰	良好	底部高台部貼付痕	覆土下層	10% 堀ノ内窯
34	土師器	小形甕	15.8	18.3	7.7	長石・石英・雲母	にぶい 赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後 中位以下に削り 体部内面横位のナデ 底部木 葉痕 指頭痕	竈火床面 から掘方	100% PL25
35	土師器	甕	20.2	(28.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい 赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナ デ後中位以下に磨き 体部内面横位のナデ 指 頭痕	竈袖構築土	90%
36	土師器	甕	20.4	33.5	8.5	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後 中位以下に磨き 体部内面横位のナデ 底部一 方向の削り 指頭痕	竈袖構築土	100% PL25 煤付着



表2 奈良時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
2	W 8 i2	N - 3° - E	方形	5.36 × 5.27	30 ~ 50	平坦	全周	5	2	-	北壁	-	自然 人為	土師器, 須恵器	8世紀前葉 から中葉	
3	V 7 g9	N - 3° - W	方形	5.20 × 5.10	22 ~ 35	平坦	ほぼ 全周	4	1	2	北壁	-	自然 人為	土師器, 須恵器	8世紀前葉	本跡→SB 5→SF 2
12	U 7 c4	N - 4° - W	方形	7.92 × 7.62	20 ~ 34	平坦	全周	8	1	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 土製 品, 石製品, 金属製品	8世紀前葉 から中葉	本跡→UP 4・7, SK99・100
21	Q 5 b5	N - 2° - W	[方形]	3.76 × 3.42	30 ~ 33	平坦	一部	-	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石器, 金属製品	8世紀後葉	
24	P 5 h2	N - 10° - E	長方形	3.82 × 2.90	20 ~ 30	平坦	ほぼ 全周	-	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀中葉	本跡→SB20
26	O 4 j7	N - 90° - E	長方形	4.06 × 3.16	18 ~ 30	平坦	ほぼ 全周	-	-	-	北壁 東壁	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀後葉	本跡→SK266 ~ 268・ 294
30	O 4 h3	[N - 7° - E]	[方形・ 長方形]	(2.16) × (1.74)	32	平坦	一部	3	-	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀中葉	本跡→SI27

(2) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第24図)

**位置** 調査区南東部のW 7 j9区, 標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 第1号柱穴列に掘り込まれている。第7号掘立柱建物跡と重複しているが, 柱穴同士は重複していない。第7号掘立柱建物跡が室町時代と考えられるため, 本跡が古いとみられる。

**規模と構造** 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡で, 桁行方向がN - 4° - Eの南北棟である。規模は, 桁行6.00m, 梁行4.20mで, 面積は25.20㎡である。柱間寸法は, 桁行の両妻側が1.80m (6尺), 中央間が2.40m (8尺), 梁行は2.10m (7尺)で, 柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 12か所。平面形は円形もしくは楕円形で, 長径45~74cm, 短径42~52cmである。深さは30~74cmで, 掘方の壁はほぼ直立している。P 1~P 10は, 第4~6層が埋土, 第3層が柱痕跡, 第1・2層が柱材の抜き取り後の覆土である。P 11・P 12は第3層が埋土, 第2層が柱痕跡, 第1層が柱材の抜き取り後の覆土である。P 1・P 3・P 4・P 6~P 10の底面から, 柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から, 柱は直径8~20cmと推定できる。また配置や堆積状況から, P 2はP 11に, P 6はP 12に掘り込まれており, 部分的な立て替えの可能性はある。

柱穴土層解説 (P 1~P 10 柱穴共通)

- |       |                   |          |           |
|-------|-------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐灰色 | ロームブロック・炭化粒子少量    | 5 褐色     | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量         | 6 黒褐色    | ロームブロック少量 |

柱穴土層解説 (P 11・P 12 柱穴共通)

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量   | 3 黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 |       |           |

**遺物出土状況** 土師器片17点 (坏1, 甕16), 須恵器片1点 (坏)が, P 2, P 5~P 7, P 9から出土している。

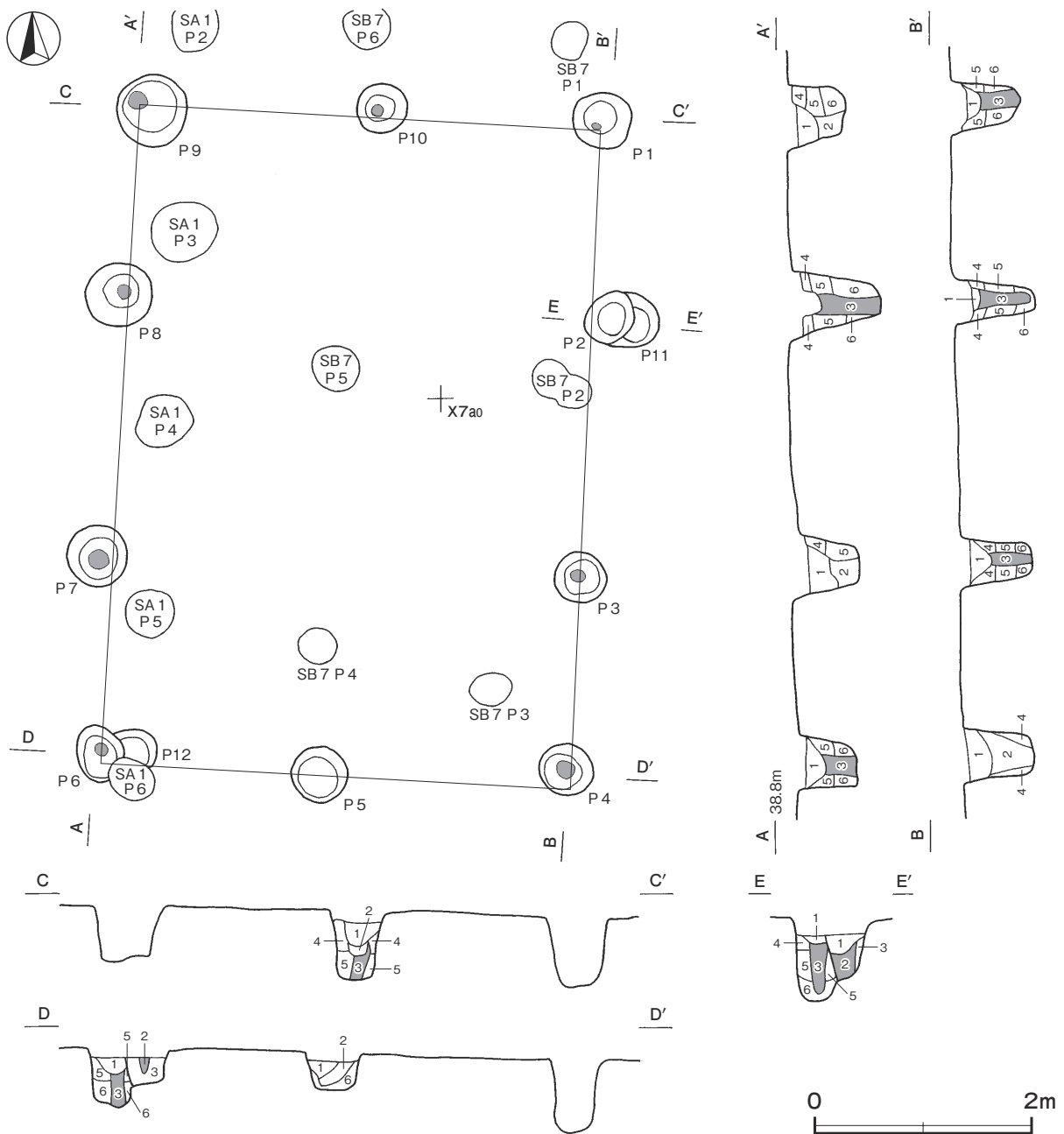
**所見** 時期は, 平安時代の土師器片を含まないことや, 奈良時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから8世紀前葉から中葉と考えられる。性格は, 構造から「屋」としての機能が想定できる。

第3号掘立柱建物跡 (第25図)

**位置** 調査区南東部のW 7 h0区, 標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 第5号柱穴列とは重複は認められるが, 柱穴同士は重複していないので, 新旧関係は不明である。

**規模と構造** 北西部が調査区域外に延びているが, 周辺で確認できた掘立柱建物跡の柱穴の配置から桁行3間,



第24図 第2号掘立柱建物跡実測図

梁行2間の側柱建物跡と推定できる。桁行方向が $N-0^\circ$ の南北棟である。確認できた規模は、桁行5.40 m、梁行4.20 mで、面積は22.68 $m^2$ と推定できる。柱間寸法は、桁行が1.80 m（6尺）、梁行は2.10 m（7尺）で、P6を除いて柱筋はほぼ揃っている。

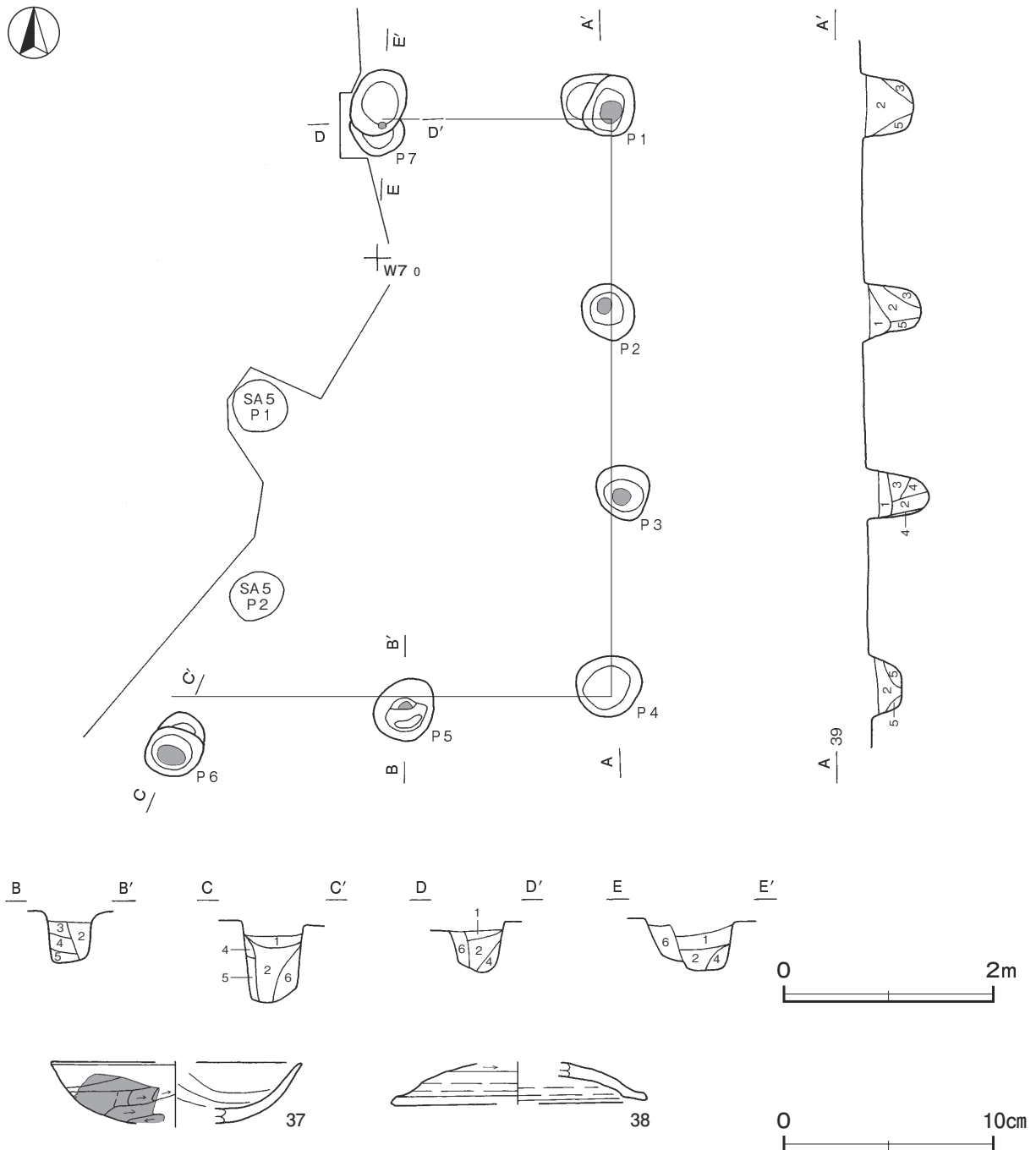
**柱穴** 7か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径58～68cm、短径38～58cmである。深さは30～74cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第3～6層は埋土、第1・2層は柱材の抜き取り後の覆土である。P1～P3・P5～P7の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりから、柱は直径10～20cmと推定できる。またP1・P6・P7は、平面形状や堆積状況から立て替えられた可能性がある。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 褐 暗 色 ローム粒子微量            | 4 暗 褐 色 ロームブロック微量        |
| 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 5 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 暗 褐 色 ロームブロック中量          | 6 褐 色 ロームブロック少量          |

遺物出土状況 土師器片 104 点（坏 23, 甕 81）, 須恵器片 11 点（坏 3, 蓋 5, 甕 3）のほか, 土製品 1 点（羽口）が, P 1～P 7 から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。性格は, 構造から「屋」としての機能が想定できる。



第 25 図 第 3 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

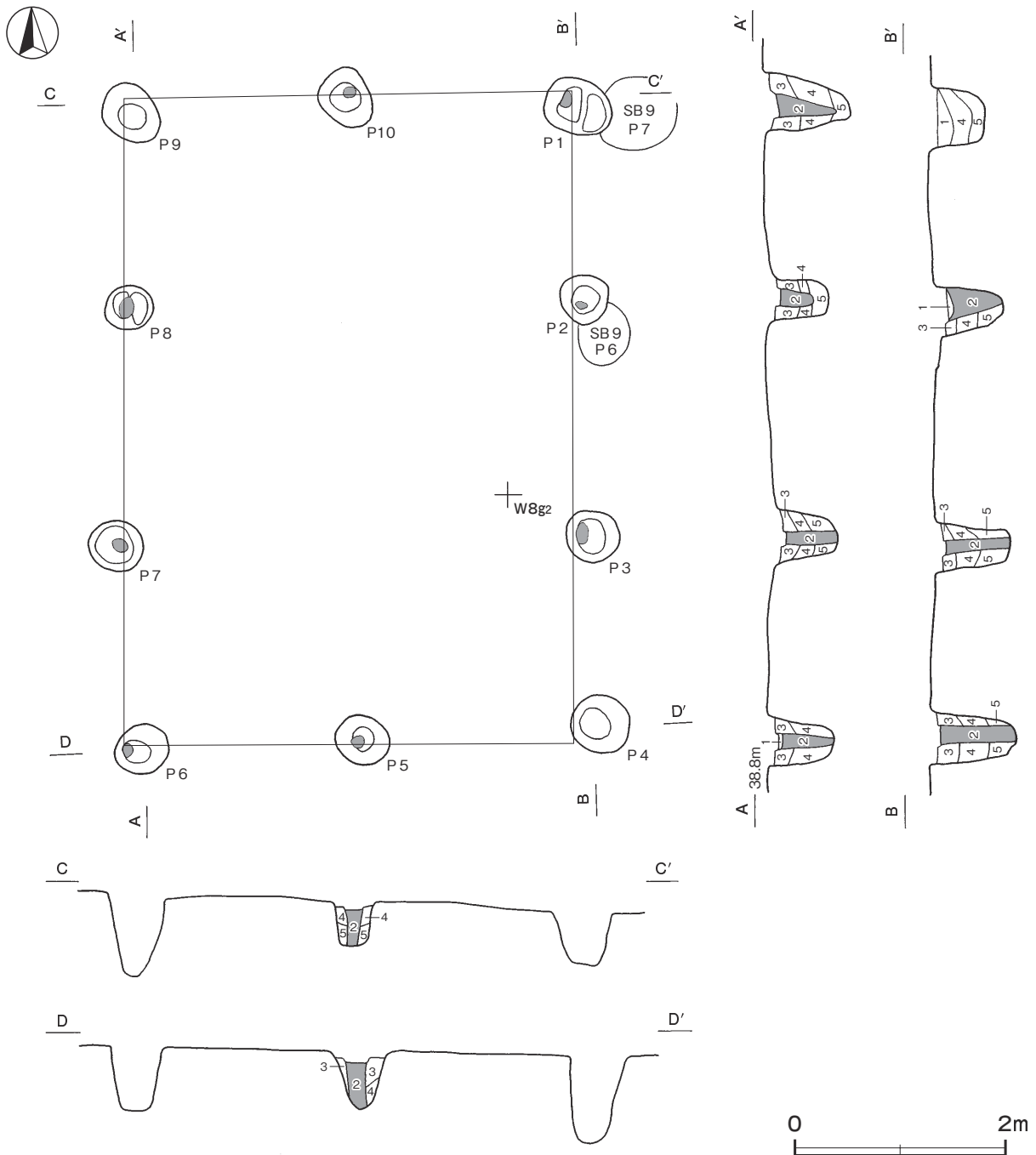
第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
37	土師器	坏	[11.7]	(28)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ、口縁部内面横位から縦位へ連続するナデ、底部手持ちヘラ削り	P 1 覆土中	5%
38	須恵器	蓋	[11.9]	(1.9)	-	石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	P 1 覆土中	5% 新治窯

第4号掘立柱建物跡 (第26図)

位置 調査区南東部のW8f1区、標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

重複関係 第9号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。



第26図 第4号掘立柱建物跡実測図

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-1°-Eの南北棟である。規模は、桁行6.00m、梁行4.20mで、面積は25.20㎡である。柱間寸法は、桁行の両妻側が1.80m（6尺）中央間が2.10m（7尺）、梁行は2.10m（7尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 10か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径44～63cm、短径41～51cmである。深さは43～83cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第3～5層は埋土、第2層は柱痕跡、第1層は流入土である。P1～P3・P5～P8・P10の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径12～22cmと推定できる。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |          |              |       |           |
|----------|--------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒色     | ローム粒子微量      | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量    |       |           |

**遺物出土状況** 土師器片7点（甕）、須恵器片2点（坏）が、P2・P8から出土している。

**所見** 時期は、出土土器に平安時代の土器片を含まないことや、第9号掘立柱建物跡との重複関係から8世紀代前葉から中葉と考えられる。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

### 第9号掘立柱建物跡（第27図）

**位置** 調査区南東部のW8e2区、標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 第33号土坑を掘り込み、第4号掘立柱建物、第2号ピット群P23に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行方向がN-2°-Eの南北棟である。確認できた規模は、桁行5.70m、梁行3.90mで、面積は22.23㎡である。柱間寸法は、桁行の北妻側と中央間が1.80m（6尺）南妻側が2.10m（7尺）、梁行は西平側が1.80（6尺）、東平側2.10m（7尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 10か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径52～74cm、短径50～63cmである。深さは32～63cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第3～5層は埋土、第1・2層は柱痕跡である。P2～P10の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径10～22cmと推定できる。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |        |                |       |                    |
|--------|----------------|-------|--------------------|
| 1 黒色   | ロームブロック微量      | 4 黒褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色  | ロームブロック・粘土粒子微量 | 5 褐色  | ロームブロック中量          |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック少量      |       |                    |

**遺物出土状況** 土師器片23点（坏4・甕19）、須恵器片1点（甕）が、P3・P8・P10から出土している。

**所見** 時期は、平安時代の土器片を含まないことや、奈良時代の遺構が確認できた範囲に位置していること、第4号掘立柱建物跡との重複から8世紀前葉と考えられる。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

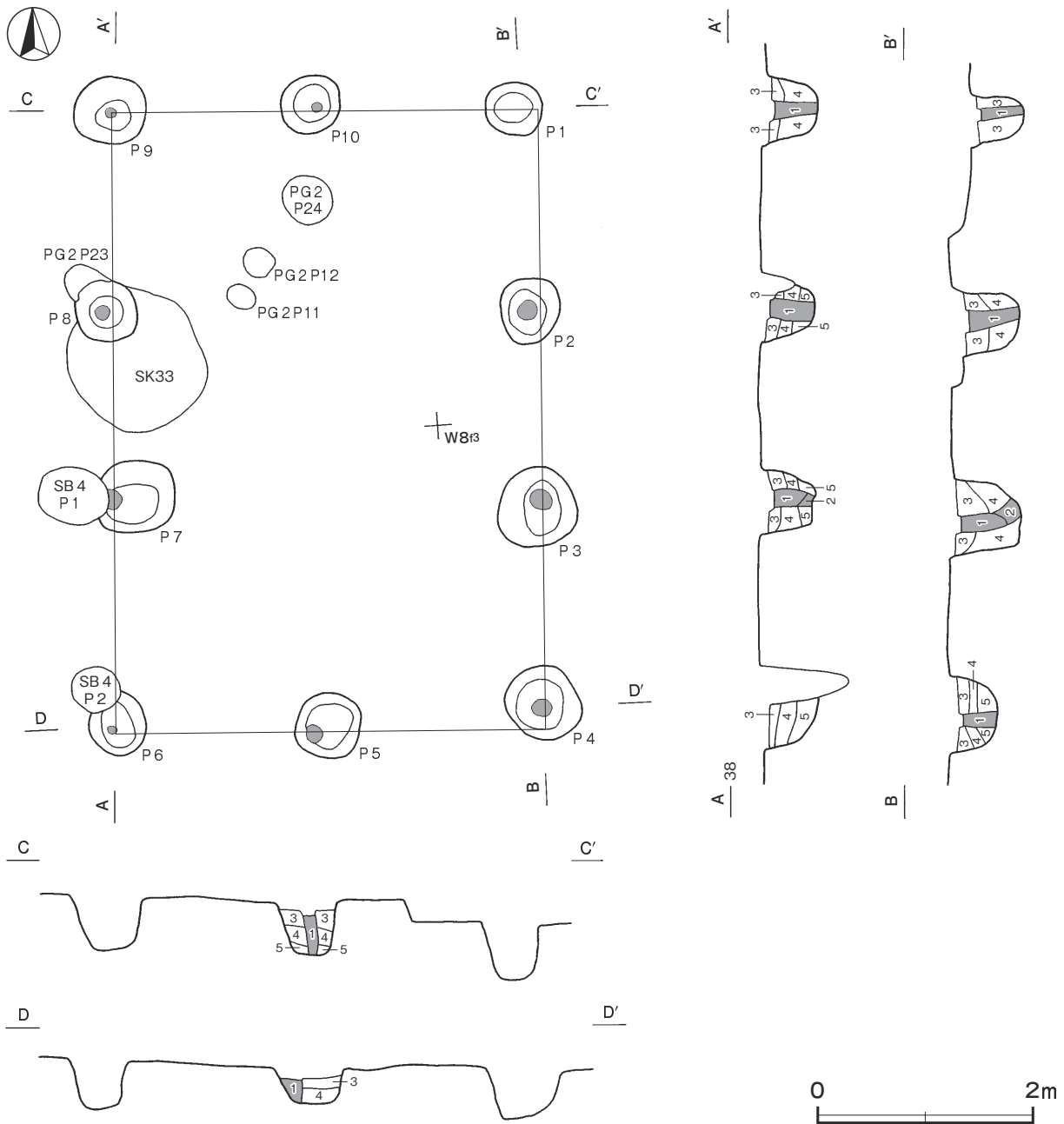
### 第11号掘立柱建物跡（第28図）

**位置** 調査区南東部のW8e1区、標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 第2号柱穴列を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行方向がN-89°-Wの東西棟である。規模は、桁行6.00m、梁行4.20mで、面積は25.20㎡である。柱間寸法は、桁行の東妻側が1.80（6尺）、西妻側と中央間が2.10m（7尺）、梁行は2.10m（7尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 11か所。平面形は楕円形もしくは隅丸長方形で、長径（軸）46～82cm、短径（軸）36～68cmである。



第27図 第9号掘立柱建物跡実測図

深さは44～108cmで、掘方の壁はほぼ直立している。P1～P10は、第6～9層が埋土、第5層が柱痕跡、第2～4層が柱材の抜き取り後の覆土、第1層が流入土である。P11は、第2層が埋土、第1層が柱痕跡である。P1・P2・P4・P8～10の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径10～22cmと推定できる。また配置や堆積状況からP7からP11へ立て替えられている可能性がある。

柱穴土層解説 (P1～P10 柱穴共通)

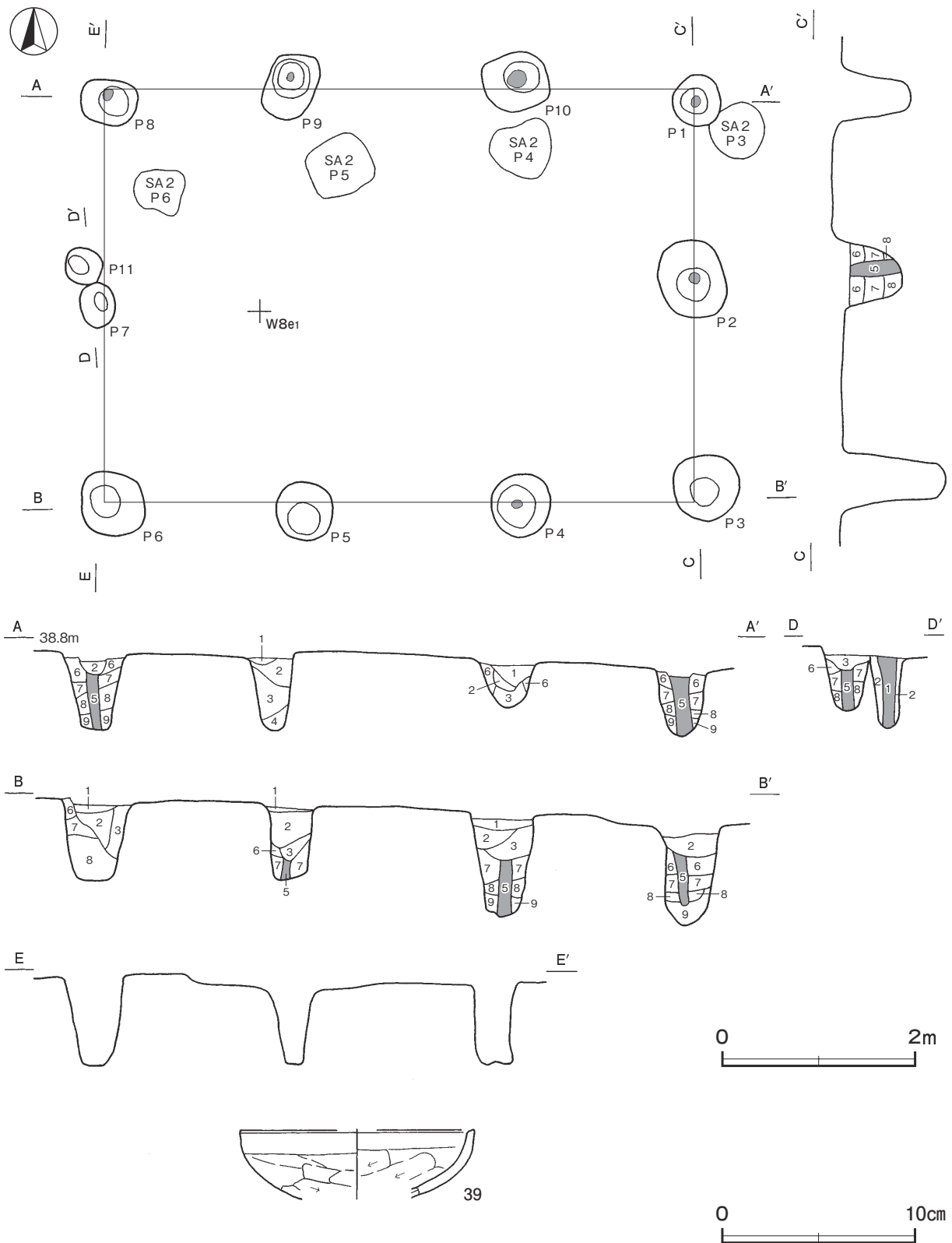
- |          |           |       |                     |
|----------|-----------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子微量   | 6 褐色  | ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量 |
| 2 黒褐色    | ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量    |
| 3 褐色     | ロームブロック中量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量           |
| 4 におい黄褐色 | ロームブロック中量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量  |
| 5 黒色     | ロームブロック微量 |       |                     |

柱穴土層解説 (P11 柱穴共通)

- |       |           |          |           |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 2 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
|-------|-----------|----------|-----------|

**遺物出土状況** 土師器片 27 点 (坏 6・甕 21), 須恵器片 1 点 (甕) が, P 2・P 5~P 8 から出土している。

**所見** 出土土器は 8 世紀前葉と考えられるが, 第 2 号柱穴列との重複関係から 8 世紀前葉から中葉に比定できる。性格は, 構造から「屋」としての機能が想定できる。



第 28 図 第 11 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 11 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 28 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
39	土師器	坏	[11.8]	(3.5)	-	長石・石英・ 橙色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ 部外面手持ちヘラ削り	口縁部内面横ナデ 底部内面ナデ	後沈線底	P 2 覆土中	5%

第 12 A 号掘立柱建物跡（第 29 図）

**位置** 調査区南東部の U 7 g 5 区、標高 39 m ほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第 12 B 号掘立柱建物、第 64・82・87・88 号土坑に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行 3 間、梁行 2 間の身舎に西庇が付く側柱建物跡である。桁行方向が N - 2° - E の南北棟である。規模は、身舎が桁行 6.90 m、梁行 3.60 m で、面積は 24.84㎡である。庇の出は 1.80 m で、庇も含めると梁行は 5.40 m で、面積は 37.26㎡である。身舎の柱間寸法は、桁行の北妻側と中央間が 2.10（7 尺）、南妻側が 2.70 m（9 尺）、梁行は 1.80 m（6 尺）で、柱筋はほぼ揃っている。庇の柱間寸法は、桁行の柱間寸法と同じで、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 13 か所。身舎柱穴の平面形は楕円形もしくは隅丸長方形と推定でき、長径（軸）46～84cm、短径（軸）24～64cm である。深さは 38～84cm で、掘方の壁はほぼ直立している。庇柱穴の平面形は楕円形で、長径 40～52cm、短径 38～42cm である。深さは 42～72cm で、掘方の壁はほぼ直立している。第 11～13 層は埋土、第 10 層は柱痕跡、第 8・9 層は柱材の抜き取り後の覆土である。P 15・P 18・P 25～P 27 の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径 12～16cm と推定できる。

**柱穴土層解説（P 15～P 27 柱穴共通）**

8 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	11 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
9 にぶい黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	12 明黄褐色	ロームブロック多量
10 黒色	ロームブロック微量	13 黒褐色	ロームブロック少量

**所見** 本跡から第 12 B 号掘立柱建物へ建て替えられていることから、時期は 8 世紀前葉と考えられる。性格は、庇が付く大型の掘立柱建物で、他の掘立柱建物跡と様相が異なることから、「屋」への収納物を管理する施設や邸宅などが想定できる。

第 12 B 号掘立柱建物跡（第 29・30 図）

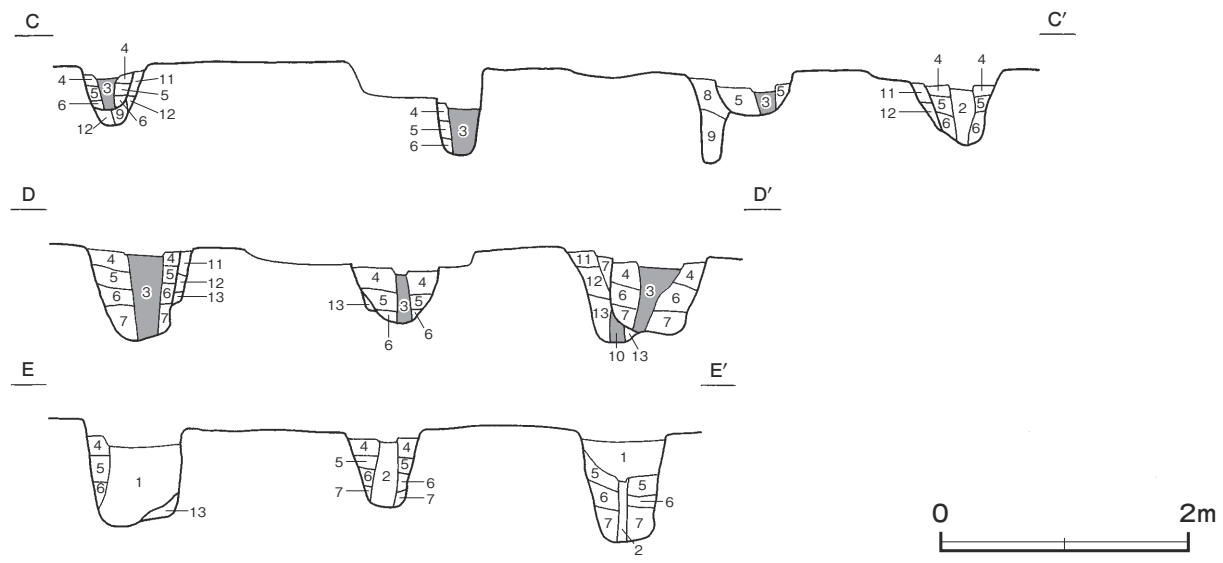
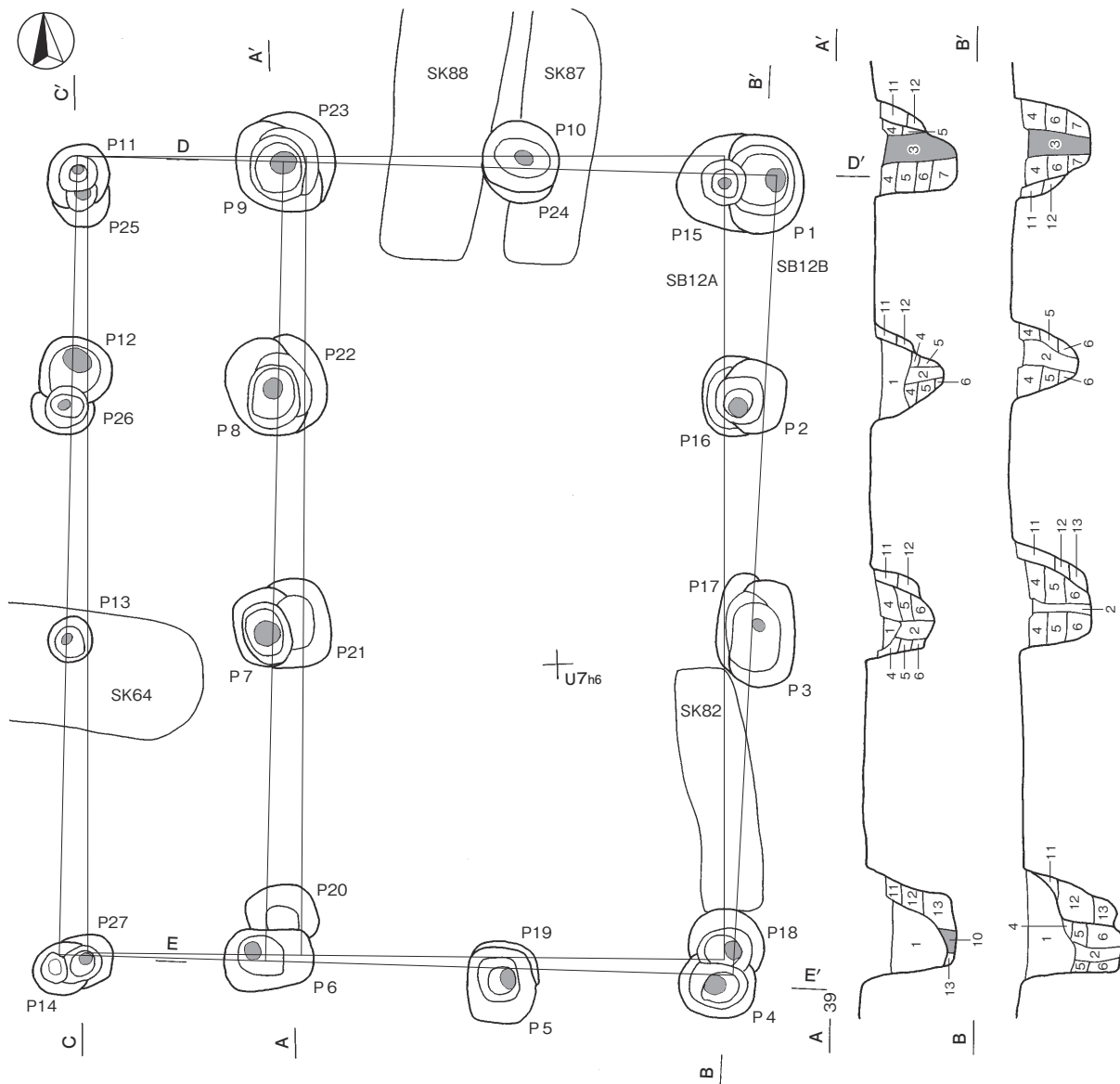
**位置** 調査区南東部の U 7 g 5 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 12 A 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 64・82・87・88 号土坑に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行 3 間、梁行 2 間の身舎に西庇が付く側柱建物跡である。桁行方向が N - 4° - E の南北棟である。規模は、身舎が桁行 6.90 m、梁行 4.20 m で、面積は 28.98㎡である。庇の出は 1.80 m で、庇も含めると梁行は 6.00 m で、面積は 41.40㎡である。身舎の柱間寸法は、桁行の北妻側と中央間が 2.10（7 尺）、南妻側が 2.70 m（9 尺）、梁行は 2.10 m（7 尺）で、柱筋はほぼ揃っている。庇の柱間寸法は、桁行の柱間寸法と同じで、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 14 か所。身舎柱穴の平面形は楕円形または隅丸長方形で、長径（軸）70～94cm、短径（軸）52～78cm である。深さは 58～84cm で、掘方の壁はほぼ直立している。庇柱穴の平面形は楕円形で、長径 40～62cm、短径 38～54cm である。深さは 38～62cm で、掘方の壁はほぼ直立している。第 4～7 層は埋土、第 3 層は柱痕跡、第 1・2 層は柱材の抜き取り後の覆土である。P 1～P 13 の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや





第 29 图 第 12 A · 12 B 号掘立柱建物迹实测图

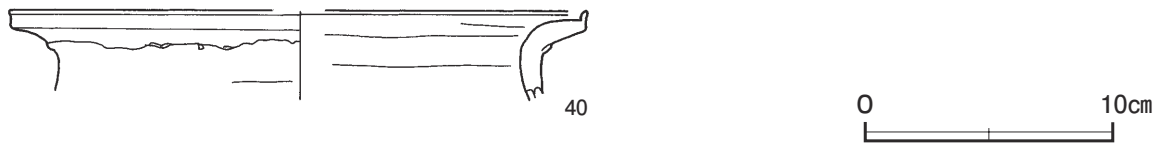
柱痕跡から、柱は直径10～28cmと推定できる。

柱穴土層解説 (P1～P14 共通)

- |       |                     |          |           |
|-------|---------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量      | 5 灰黄褐色   | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 6 黒褐色    | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量   | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黄褐色 | ロームブロック中量           |          |           |

遺物出土状況 土師器片47点(坏6, 甕41), 須恵器片4点(坏)が, P1・P3・P4・P6～P9から出土している。

所見 時期は, 8世紀前葉から中葉と考えられる。性格は, 底が付く大型の掘立柱建物で, 他の掘立柱建物跡と様相が異なることから, 「屋」への収納物を管理する施設や邸宅などが想定できる。



第30図 第12B号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第12B号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
40	土師器	甕	[22.8]	(3.5)	-	長石・雲母・細礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	P9覆土中	5%

表3 奈良時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数		規模	面積	柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時期	備考	
			桁×梁(間)	桁×梁(m)			(㎡)	桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数				平面形
2	W7j9	N-4°-E	3×2		6.00×4.20	25.20	1.80~2.40	2.10	側柱	12	円形・楕円形	30~74	土師器, 須恵器	8世紀前葉から中葉	本跡→SB7・SA1
3	W7h0	N-0°	[3×2]		5.40×4.20	[22.68]	1.80	2.10	側柱	7	円形・楕円形	30~74	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SA5との重複不明
4	W8f1	N-1°-E	3×2		6.00×4.20	25.20	1.80~2.10	2.10	側柱	10	円形・楕円形	43~83	土師器, 須恵器	8世紀前葉から中葉	SB9→本跡
9	W8e2	N-2°-E	3×2		5.70×3.90	22.23	1.80~2.10	1.80~2.10	側柱	10	円形・楕円形	32~63	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SK33→本跡→SB4・PG2P23
11	W8e1	N-89°-W	3×2		6.00×4.20	25.20	1.80~2.10	2.10	側柱	11	楕円形・隅丸長方形	44~108	土師器, 須恵器	8世紀前葉から中葉	SA2→本跡
12A	U7g5	N-2°-E	3×2		6.90×3.60 6.90×5.40	24.84 37.26	2.10~2.70	1.80	側柱 此部	13	楕円形・隅丸長方形	38~84 42~72	-	8世紀前葉	本跡→SB12B・SK64・82・87・88
12B	U7g5	N-4°-E	3×2		6.90×4.20 6.90×6.00	28.98 41.40	2.10~2.70	2.10	側柱 此部	14	[楕円形・隅丸長方形]	58~84 38~62	土師器, 須恵器	8世紀前葉から中葉	SB12A→本跡→SK64・82・87・88

(3) 大型円形土坑

第1号大型円形土坑 (第31～33図)

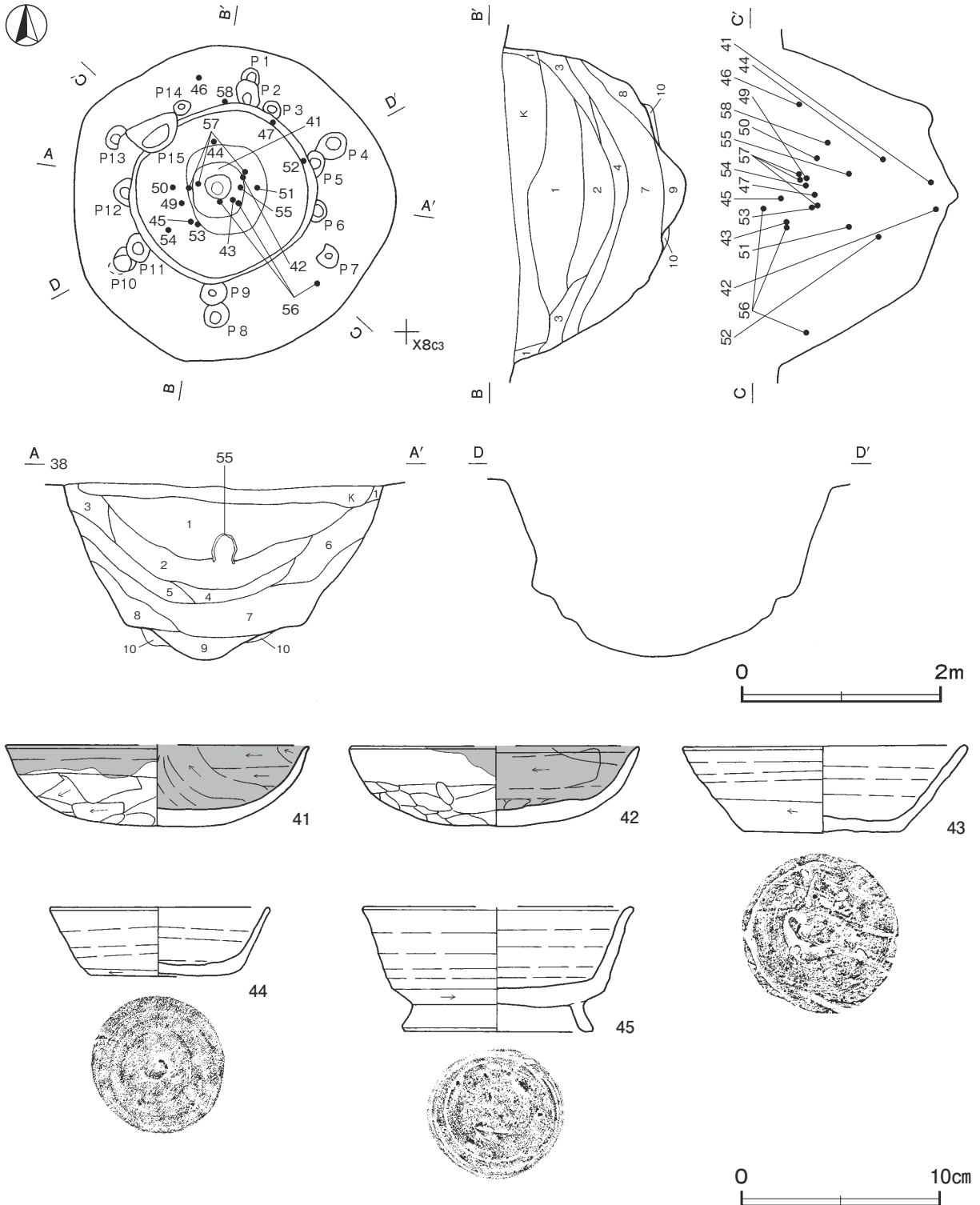
位置 調査区南東部のX8b2区, 標高38mほどの台地緩斜部に位置している。

規模と構造 開口部は長径3.18m, 短径3.10mの円形, 底面は長径1.88m, 短径1.80mの円形である。深さ1.34～1.40mで, 壁は外傾している。底面の中央部は径0.40mで, 一段深く掘り込まれ, 第10層を埋め戻して貼床が構築されている。貼床面の中央部には長軸88cm, 短軸80cmの隅丸長方形で, 深さ32cmの穴が掘り込まれている。底面は鍋底状で, 壁は外傾している。

柱穴 15か所。P1～P14は, 底面と壁の境付近に, 底面と同心円状に掘り込まれている。長径20～34cm,

短径 18 ~ 36cm の円形もしくは楕円形で、壁面からの深さは 21 ~ 41cm である。底面は平坦で、壁は直立している。上屋に関わる施設や木組みの受け部の可能性も考えられるが、不明である。P 15 は底面の北西部に位置し、本跡の壁下部及び底面を掘り込んでいる。長軸 52cm、短軸 32cm の不均整な台形で、確認面からの深さは 156cm である。底面は皿状で、壁は外傾している。出入口施設の可能性もあるが、不明である。

**覆土** 9層に分層できる。第2~9層はロームブロックが含まれていることから埋め戻し土、第1層はローム粒子を含む均質な堆積であることから、自然堆積土と考えられる。第10層は貼床の構築土である。



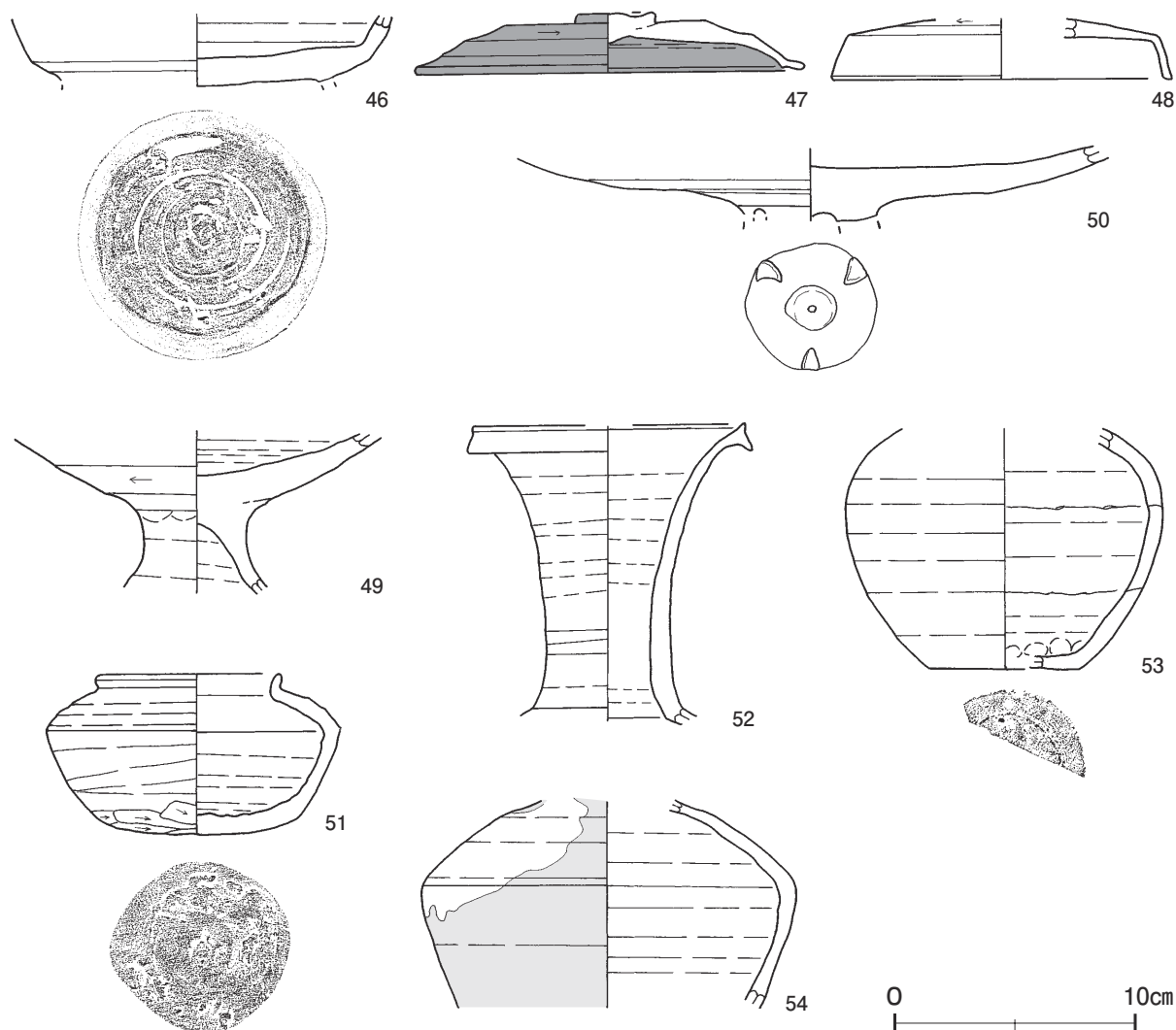
第 31 図 第 1 号大型円形土坑・出土遺物実測図

土層解説

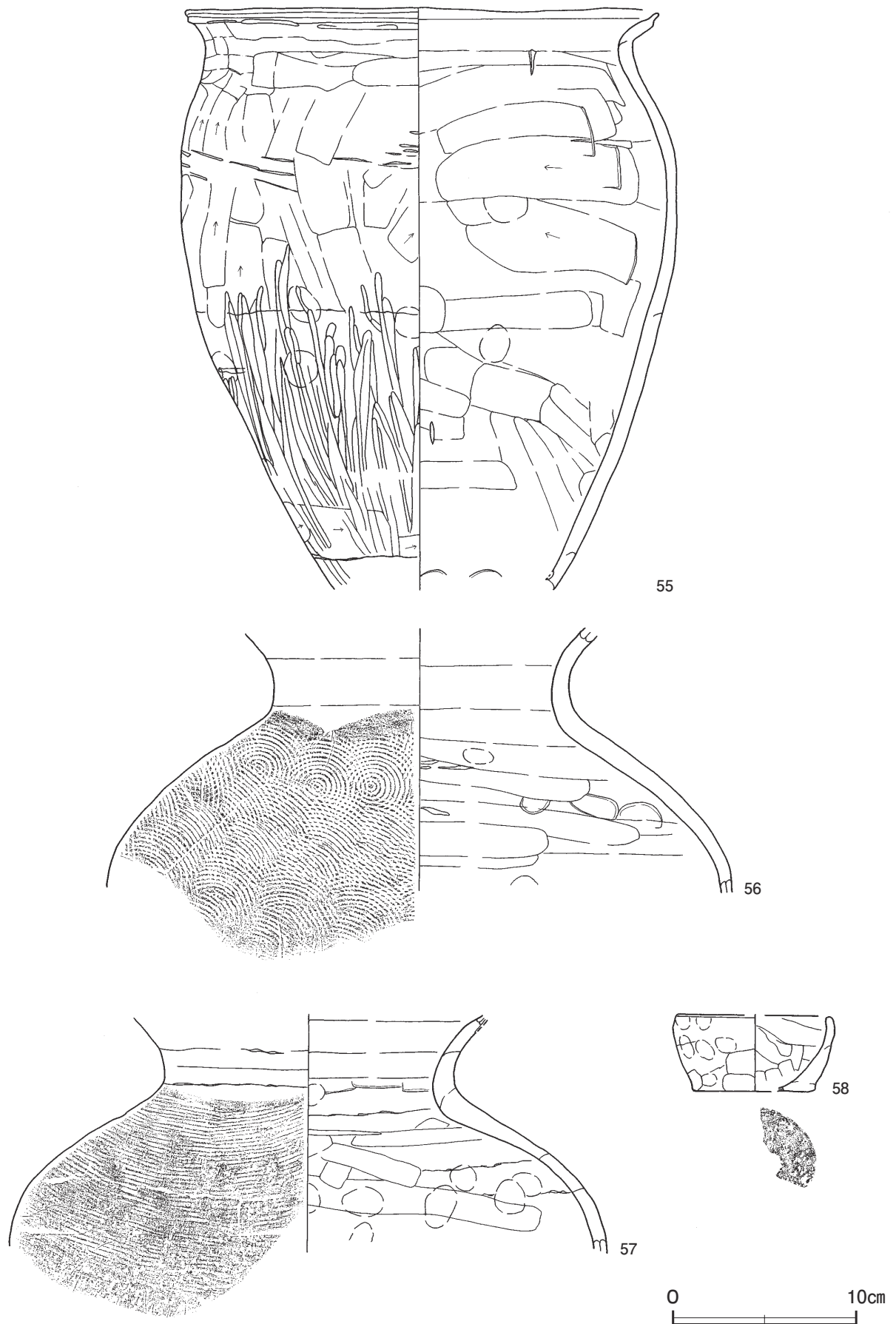
- |       |                        |           |                    |
|-------|------------------------|-----------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量                | 6 暗褐色     | ロームブロック中量, 焼土粒子微量  |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量    | 7 黒褐色     | ローム粒子少量            |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量      | 8 褐色      | ロームブロック多量, 炭化粒子微量  |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒色      | ロームブロック・鹿沼軽石ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量      | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック多量   |

**遺物出土状況** 土師器片 713 点 (坏 130・甕類 579・甌 3・手捏土器 1), 須恵器片 292 点 (坏 79・高台付坏 10・蓋 32・盤 2・高盤 2・長頸瓶 3・短頸壺 4・甕類 159・甌 1), 土製品 1 点 (支脚), 金属製品 1 点 (刀子), 石器 5 点 (砥石) 瓦 1 点 (丸瓦) のほか, 縄文土器片 2 点 (深鉢) が, 自然堆積土である上層から纏まって出土している。41・42・44・51・52 は中層から下層にかけて出土していることから, 埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。55 は第 2 層の上位から逆位で出土しており, 底部が欠損していることから, 廃棄された可能性がある。43・45～47・49・50・53・54・56～58 は, 上層から出土していることから, 埋没の過程で投棄されたものと考えられ, 廃絶後も開口していたと考えられる。

**所見** 時期は, 8 世紀前葉から後葉の土器が出土しているが, 中層以下には丸底状の須恵器坏や短頸壺が含まれていることから, 8 世紀前葉から中葉に廃絶されたと考えられる。上層からは平底の須恵器坏や高盤などが含まれており, 遅くとも 8 世紀後葉には埋没したと思われる。性格は氷室や貯蔵施設, 井戸などが考えられるが, 詳細は不明である。



第 32 図 第 1 号大型円形土坑出土遺物実測図(1)



第 33 图 第 1 号大型円形土坑出土遺物実測図(2)

第1号大型円形土坑出土遺物観察表（第31～33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師器	坏	[14.9]	4.0	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面横位から縦位へ連続するナデ 底部手持ちヘラ削り 底部内面ナデ	覆土下層	60% PL25
42	土師器	坏	[14.3]	4.0	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 底部外面手持ちヘラ削り 底部内面放射状のナデ後外周部ナデ	覆土下層	70%
43	須恵器	坏	13.9	4.3	8.0	石英・細礫・黒色粒子	褐灰	良好	口縁部外・内面横ナデ 底部外面手持ちヘラ削り 底部内面放射状のナデ後外周部ナデ 体部外面下端一方向のヘラ削り 底部回転ヘラ切り後二方向の条線	覆土上層	100% 堀ノ内窯
44	須恵器	坏	10.9	3.4	6.9	石英・細礫・黒色粒子	灰	良好	底部回転ヘラ削り	覆土中層	80% PL26 堀ノ内窯
45	須恵器	高台付坏	[13.4]	6.2	9.4	石英・細礫・赤色粒子	褐灰	良好	底部回転ヘラ削り 高台部貼付	覆土上層	60% PL26 堀ノ内窯
46	須恵器	高台付坏	-	(2.9)	-	雲母・細礫・黒色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り 高台部貼付	覆土上層	50% 新治窯
47	須恵器	蓋	15.8	(2.5)	-	雲母・細礫・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り 摘み部貼付	覆土上層	90% PL26 新治窯 炭付着
48	須恵器	蓋	[13.9]	(2.5)	-	石英・雲母・黒色粒子	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	20% 新治窯
49	須恵器	高盤	-	(6.7)	-	長石・雲母・細礫・黒色粒子	灰黄褐	普通	坏部外面下端回転ヘラ削り 脚部外・内面回転によるナデ 脚部貼付	覆土上層	30% 堀ノ内窯
50	須恵器	高盤	-	(3.0)	-	雲母・細礫・白色粒子	灰	普通	坏部外面下端回転ヘラ削り 脚部貼付部に三角形の透かし痕跡	覆土上層	10% 新治窯
51	須恵器	短頸壺	7.4	6.6	7.2	雲母・砂粒	灰白	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後二方向の手持ちヘラ削り及びナデ	覆土中層	95% PL26 新治窯
52	須恵器	長頸瓶	[11.0]	(12.2)	-	長石・黒色粒子	灰	良好	外・内面回転によるナデ	覆土中層	20% PL26 堀ノ内窯
53	須恵器	長頸瓶	-	(9.9)	[6.2]	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	底部外周回転ヘラ削り 輪積み痕 指頭痕	覆土上層	30% PL26 堀ノ内窯
54	須恵器	長頸瓶	-	(8.5)	-	長石・白色粒子・黒色粒子	灰白	良好	外・内面回転によるナデ 自然袖付着	覆土上層	20% PL38 猿投産
55	土師器	甕	25.2	(31.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後横位のナデ、中位以下ヘラ削り後磨き 体部内面縦位のナデ後横位のナデ 下端に打ち抜き痕 指頭痕	覆土中層	80% PL25
56	須恵器	甕	-	(14.1)	-	長石・石英・細礫・白色粒子	褐色灰	普通	頸部外・内面横ナデ 体部外面同心円状の叩き 体部内面横位のナデ当て具痕 指頭痕	覆土上層	10% PL26
57	須恵器	甕	-	(12.8)	-	雲母・砂粒・白色粒子	黄灰	普通	頸部外・内面横ナデ 体部外面横位の平行叩き 体部内面横位のナデ 指頭痕	覆土上層	10% 新治窯
58	土師器	手捏土器	[8.2]	4.1	[6.6]	長石・雲母・砂粒	にぶい橙	普通	外面横位のナデ 指頭痕 内面横位のナデ	覆土上層	50%

(4) 柱穴列

第1号柱穴列（第34図）

位置 調査区南東部のW7j9区、標高38mほどの台地緩斜面に位置している。

重複関係 第2号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 南北方向8.40mの間に配列された柱穴6か所を確認した。配列方向はN-6°-Eである。柱間寸法は1.50～1.80m（5～6尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 6か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径40～57cm、短径35～55cmである。深さは35～53cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第3～6層は埋土、第2層は柱痕跡、第1層は柱材の抜き取り後の覆土である。P1～P6の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径14～18cmと推定できる。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- |       |                    |          |               |
|-------|--------------------|----------|---------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 4 褐色     | ロームブロック中量     |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量          | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量     |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量          | 6 黒色     | ロームブロック・炭化物少量 |

遺物出土状況 土師器片11点（坏3・甕類8）、須恵器片1点（坏）が、P1～P4から出土している。

所見 出土土器に平安時代の土器片を含まないことや、奈良時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから8世紀代と考えられる。梁行に関わる柱穴が確認できなかったことから、堀跡と考えられる。

第2号柱穴列（第34図）

位置 調査区南東部のW8d1区、標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 第11号掘立柱建物に掘り込まれている。第2号ピット群との重複関係は不明である。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びていることから、東西方向9.60 mの間に配列された柱穴6か所しか確認できなかった。配列方向はN-85°-Eである。柱間寸法は1.8 m～2.10 m（6～7尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 6か所。平面形は楕円形もしくは隅丸長方形で、長径（軸）50～66cm、短径（軸）44～62cmである。深さは62～65cmで、掘方の壁はやや外傾している。第5～7層は埋土、第4層は柱痕跡、第2～3層は柱材の抜き取り後の覆土、第1層は流入土である。P2～6の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径8～22cmと推定できる。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |       |                 |          |           |
|-------|-----------------|----------|-----------|
| 1 黒色  | ローム粒子少量         | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 6 黒褐色    | ロームブロック少量 |
| 3 黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 | 7 褐色     | ロームブロック中量 |
| 4 黒色  | ロームブロック微量       |          |           |

**遺物出土状況** 土師器片5点（甕類）が、P5から出土している。

**所見** 第11号掘立柱建物に掘り込まれていることから、時期は、8世紀前葉以前と考えられる。梁行に関わる柱穴が確認できなかったことから、塀跡と考えられる。

**第5号柱穴列（第34図）**

**位置** 調査区南東部のW7h9区、標高39 mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 同じ範囲に位置している第3号掘立柱建物跡との重複は認められないことから、新旧は不明である。

**規模と構造** 北部が調査区域外に延びている可能性もあるここから、柱穴列として扱った。南北方向1.80 mの間に配列された柱穴は2か所しか確認できなかった。配列方向はN-1°-Eである。柱間寸法は1.80 m（6尺）である。

**柱穴** 2か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径53～58cm、短径44～50cmである。深さは33～66cmで、掘方の壁は直立している。第2・3層は埋土、第1層は柱痕跡である。P1・P2の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径10～18cmと推定できる。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

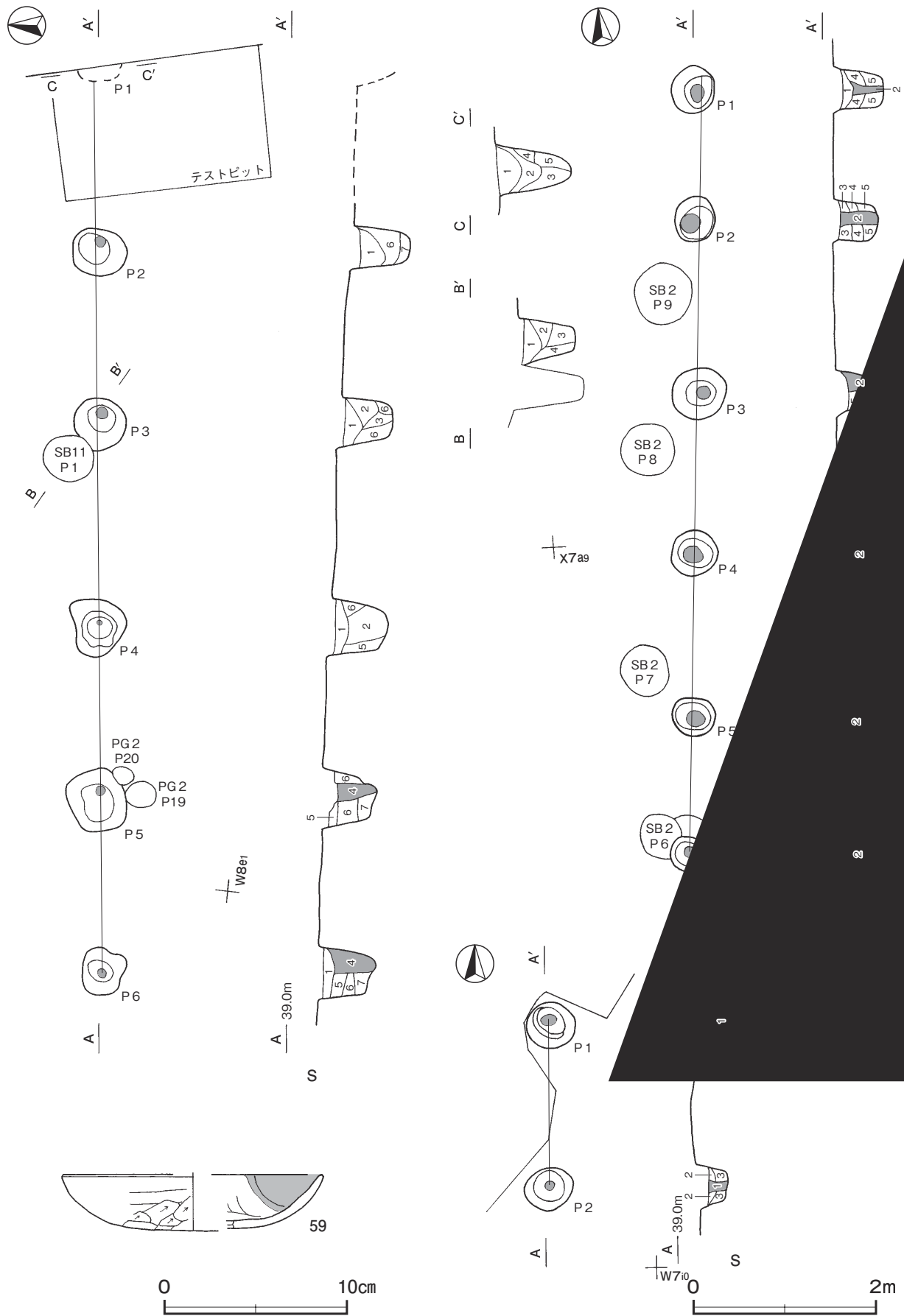
- |       |                 |          |           |
|-------|-----------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量       | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |          |           |

**遺物出土状況** 土師器片2点（坏1・甕類1）が、P1から出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から8世紀前葉と考えられる。第4号掘立柱建物跡と第9・11号掘立柱建物跡などのように、同じ場所に建て替え関係が認められることから、第3号掘立柱建物跡との建て替えに関わる掘立柱建物跡の可能性はある。

**第5号柱穴列出土遺物観察表（第34図）**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
59	土師器	坏	[14.0]	(3.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 口縁部内面横位から縦位へ連続するナデ 底部手持ちヘラ削り 底部内面ナデ	P1 覆土中	20%



第34図 第1・2・5号柱穴列・出土遺物実測図



### 第6号柱穴列 (第35図)

**位置** 調査区南東部のW7b8区, 標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

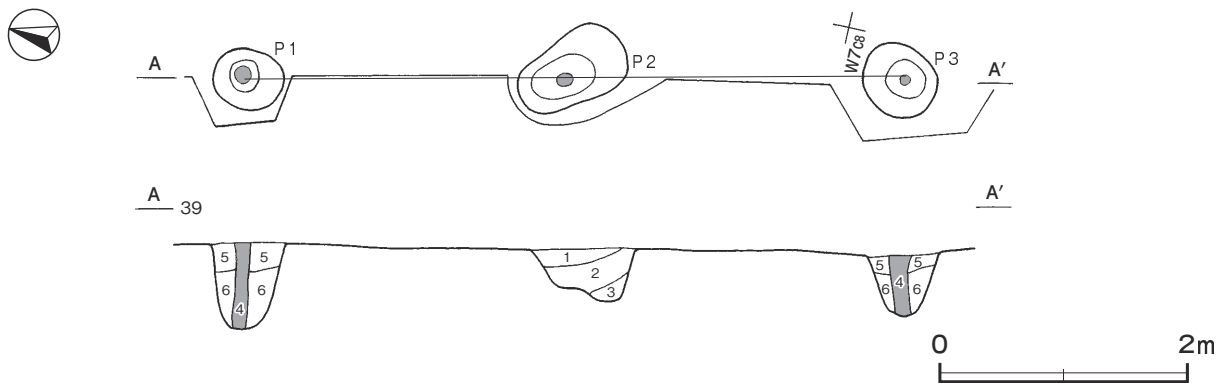
**規模と構造** 北部が調査区域外に延びていることから, 南北方向5.40mの間に配列された柱穴は3か所しか確認できなかった。配列方向はN-12°-Wである。柱間寸法は2.70m(9尺)で, 柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 3か所。平面形は楕円形で, 長径57~60cm, 短径55~48cmである。深さは44~68cmで, 掘方の壁はほぼ直立している。第5・6層は埋土, 第4層は柱痕跡, 第1~3層は柱材抜き取り後の覆土である。P1~P3の底面から, 柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から, 柱は直径10~18cmと推定できる。

**柱穴土層解説 (各柱穴共通)**

- |           |                  |           |           |
|-----------|------------------|-----------|-----------|
| 1  におい黄褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 | 4  黒褐色    | ロームブロック少量 |
| 2  暗褐色    | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 5  黒褐色    | ロームブロック微量 |
| 3  褐色     | ロームブロック・炭化物少量    | 6  におい黄褐色 | ロームブロック中量 |

**所見** 出土遺物は確認できなかったが, 奈良時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから8世紀代と考えられる。規格性のある柱穴の配置から, 掘立柱建物跡や塀跡の可能性はある。



第35図 第6号柱穴列実測図

表4 奈良時代柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ (m)	柱間 (m)	柱 穴					主な出土遺物	備 考
					柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
1	W7j9	N-6°-E	8.40	1.50~1.80	6	円形・楕円形	40~57	35~55	35~53	土師器, 須恵器	SB2→本跡
2	W8d1	N-85°-E	(9.60)	1.80~2.10	6	隅丸長方形・楕円形	50~66	44~62	62~65	土師器	本跡→SB11 PG2とは重複不明
5	W7h9	N-1°-E	1.80	1.80	2	円形・楕円形	53~58	44~50	33~66	土師器	SB3との重複不明
6	W7b8	N-12°-W	5.40	2.70	3	楕円形	57~60	55~48	44~68	-	

### (5) 土坑

#### 第5号土坑 (第36図)

**位置** 調査区南東部のW7i0区, 標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**規模と形状** 長径0.92m, 短径0.86mの楕円形で, 長径方向はN-7°-Eである。深さは26cmで, 壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

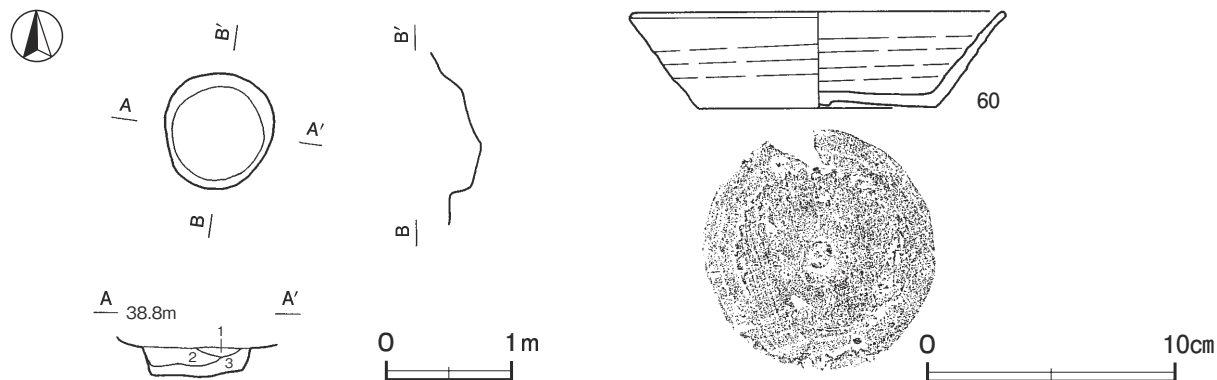
**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |           |       |                |
|--------|-----------|-------|----------------|
| 1  暗褐色 | ロームブロック中量 | 3  褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2  暗褐色 | ロームブロック少量 |       |                |

**遺物出土状況** 土師器片3点（甕類），須恵器片1点（坏）が，覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第36図 第5号土坑・出土遺物実測図

第5号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
60	須恵器	坏	14.8	3.8	9.4	石英・雲母	灰黄	普通	底部ヘラ切りを残す二方向のヘラ削り	覆土中	60% 新治産

### 第28号土坑（第37図）

**位置** 調査区南東部のX7a9区，標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**規模と形状** 長径0.42m，短径0.38mの円形である。深さは45cmで，壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

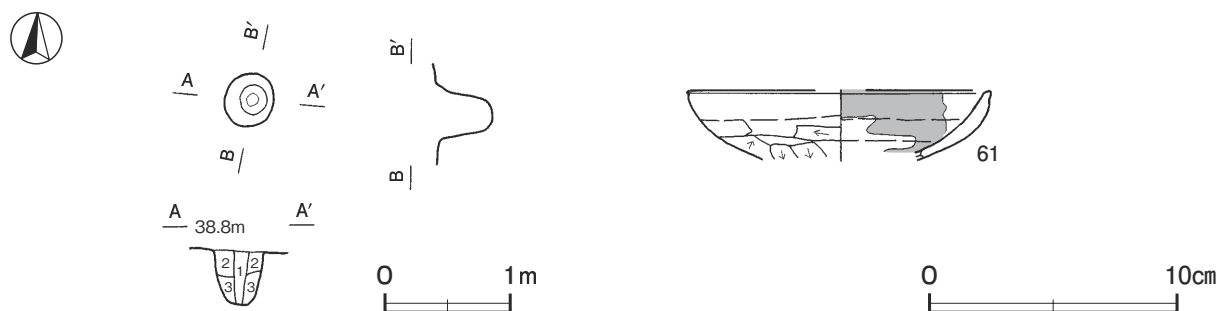
**覆土** 3層に分層できる。第2・3層は埋土，第1層は柱材抜き取り後の覆土である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片1点（坏）が，第1層から出土している。柱材を抜き取った後の埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から8世紀前葉に比定できる。性格は柱穴であるが，関連する柱穴は周辺からは確認できなかった。



第37図 第28号土坑・出土遺物実測図

第 28 号土坑出土遺物観察表 (第 37 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
61	土師器	坏	[12.0]	(2.8)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 底部外面手持ちヘラ削り 底部内面ナデ	覆土第 1 層	20%

第 34 号土坑 (第 38 図)

**位置** 調査区南東部の W 8 c2 区, 標高 39 m ほどの台地緩斜面に位置している。

**規模と形状** 長径 0.40 m, 短径 0.40 m の円形で, 深さは 60cm で, 壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

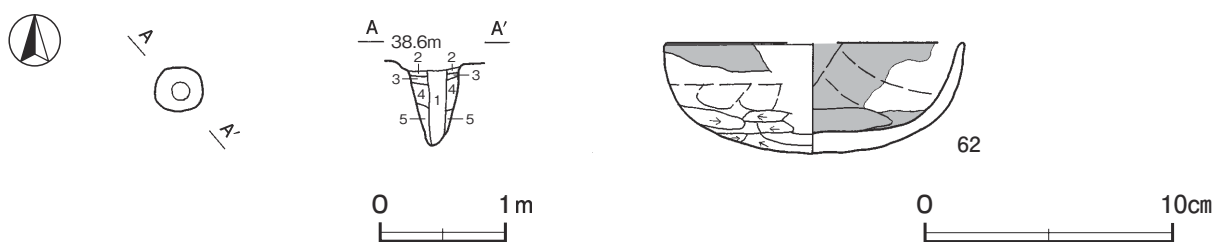
**覆土** 5 層に分層できる。第 2～5 層は埋土, 第 1 層は柱材抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

- |          |                     |         |                     |
|----------|---------------------|---------|---------------------|
| 1 黒 褐 色  | ロームブロック少量           | 4 灰黄褐色  | 粘土ブロック多量, ロームブロック少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック中量 | 5 褐 灰 色 | ロームブロック・粘土ブロック少量    |
| 3 黒 色    | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 |         |                     |

**遺物出土状況** 土師器片 1 点 (坏) が, 覆土中から出土している。柱材を抜き取った後の埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。性格は柱穴であるが, 関連する柱穴は周辺からは確認できなかった。



第 38 図 第 34 号土坑・出土遺物実測図

第 34 号土坑出土遺物観察表 (第 38 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
62	土師器	坏	[11.7]	4.4	-	石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 底部外面手持ちヘラ削り 底部内面ナデ	覆土第 1 層	20%

第 41 号土坑 (第 39 図)

**位置** 調査区南東部の V 7 d6 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 3 号ピット群 P 26 に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径 0.58 m, 短径 0.54 m の円形である。深さは 64cm で, 壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

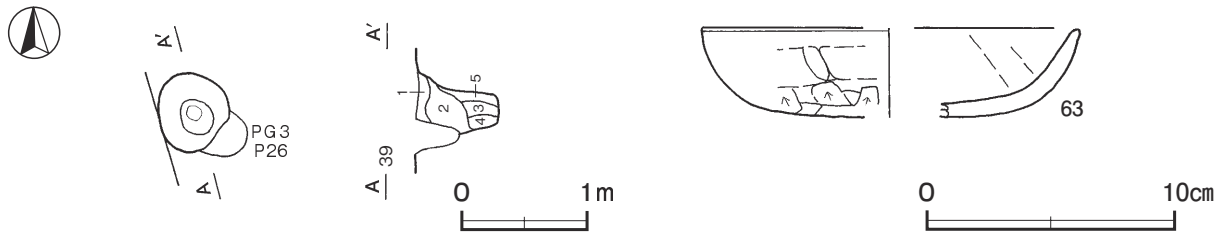
**覆土** 5 層に分層できる。第 4・5 層は埋土, 第 1～3 層は柱材抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

- |         |                   |         |           |
|---------|-------------------|---------|-----------|
| 1 暗 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子少量      | 4 暗 褐 色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 5 褐 色   | ロームブロック中量 |
| 3 黒 色   | ロームブロック少量         |         |           |

**遺物出土状況** 土師器片 31 点 (坏 9・甕類 22) が, 第 1～3 層から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。性格は柱穴であるが、関連する柱穴は周辺からは確認できなかった。



第39図 第41号土坑・出土遺物実測図

第41号土坑出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
63	土師器	坏	[15.0]	3.5	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面横位から縦位へ連続するナデ 底部手持ちヘラ削り 底部内面ナデ	覆土第1～3層	10%

#### 第46号土坑（第40図）

位置 調査区南東部のV7a6区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第3号ピット群P16に掘り込まれている。

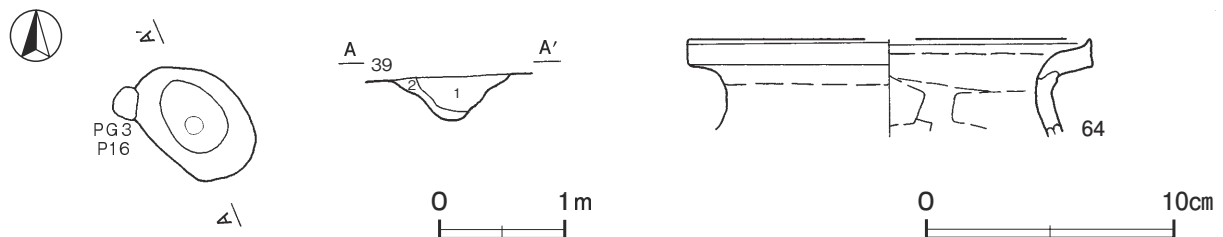
規模と形状 長径1.06m、短径0.73mの楕円形で、長軸方向はN-50°-Wである。深さは34cmで、壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。

##### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック中量



第40図 第46号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片13点（甕類）、須恵器片3点（坏2・甕1）が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。性格は不明である。

第46号土坑出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	土師器	甕	[16.0]	(3.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	覆土中	20%

### 第 122 号土坑 (第 41 図)

**位置** 調査区中央部の U 7 a3 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

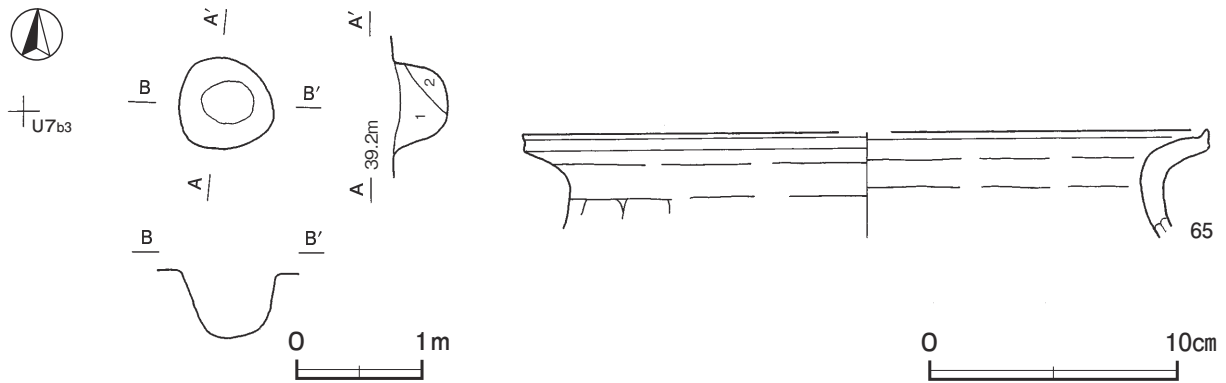
**規模と形状** 長径 0.74 m, 短径 0.72 m の円形である。深さは 50cm で, 壁はほぼ直立している。底面は皿状である。

**覆土** 2 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

#### 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量



第 41 図 第 122 号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片 1 点 (甕類) が, 覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。性格は不明である。

### 第 122 号土坑出土遺物観察表 (第 41 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
65	土師器	甕	[27.0]	(4.2)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ	覆土中	5%

### 第 208 号土坑 (第 42 図)

**位置** 調査区中央部の P 5 j4 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 東部が調査区域外に延びていることから, 長径は 0.97 m で, 短径は 0.68 m しか確認できなかった。

確認できた範囲から, 円形と推定できる。深さは 20cm で, 壁は外傾している。底面は平坦である。

**覆土** 4 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

#### 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

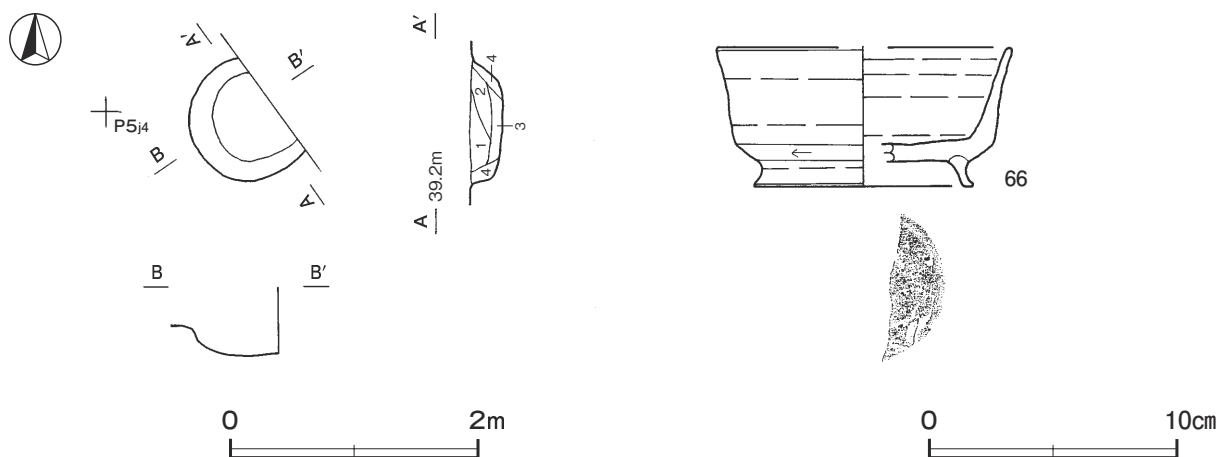
3 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量

4 にぶい横褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師器片 5 点 (甕類), 須恵器片 2 点 (高台付坏 1・甕類 1) が, 覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。性格は不明である。



第42図 第208号土坑・出土遺物実測図

第208号土坑出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
66	須恵器	高台付坏	[11.8]	5.0	[8.6]	長石・黒色粒子・白色粒子	暗灰黄	良好	体部下端から底部回転ヘラ削り 高台部貼付後ナデ	覆土中	40% 堀ノ内窯

### 第210号土坑（第43図）

**位置** 調査区中央部のP5i3区，標高39mほどの台地平坦面に位置している。

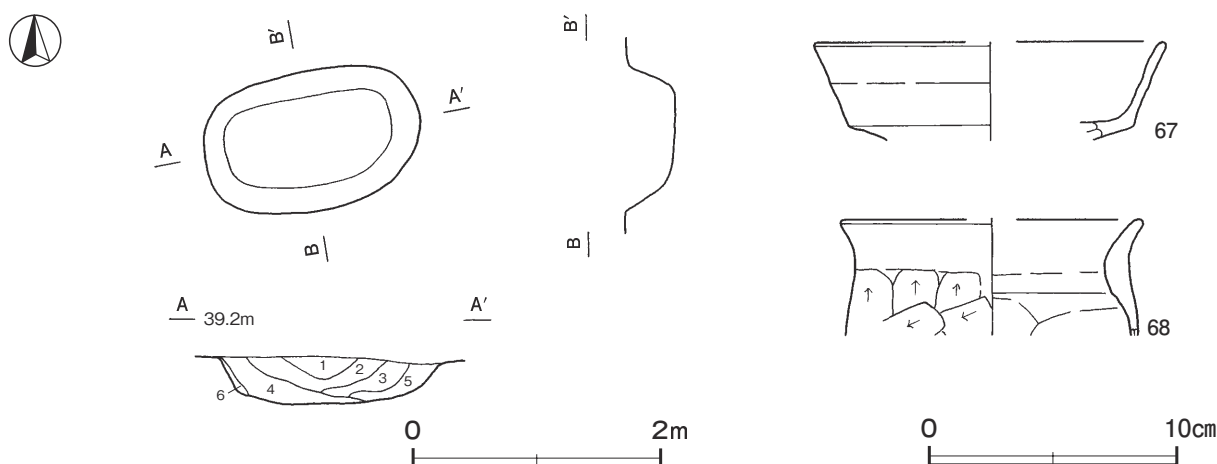
**規模と形状** 長径1.72m，短径1.10mの楕円形で，長径方向はN-80°-Eである。深さは38cmで，壁は外傾している。底面は平坦である。

**覆土** 6層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

#### 土層解説

- |       |                        |       |                        |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   | 4 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量        |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量              | 6 暗褐色 | ロームブロック中量              |

**遺物出土状況** 土師器片7点（甕類），須恵器片6点（坏5・甕類1）が，覆土中から出土している。土器片は細片で，埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。



第43図 第210号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。性格は不明である。

第210号土坑出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
67	須恵器	高台付坏	[13.8]	(3.9)	-	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	ロクロナデ	覆土中	20% 堀ノ内窯
68	土師器	小形甕	[11.8]	(4.6)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の削り 体部内面横位のナデ	覆土中	10%

第213号土坑（第44図）

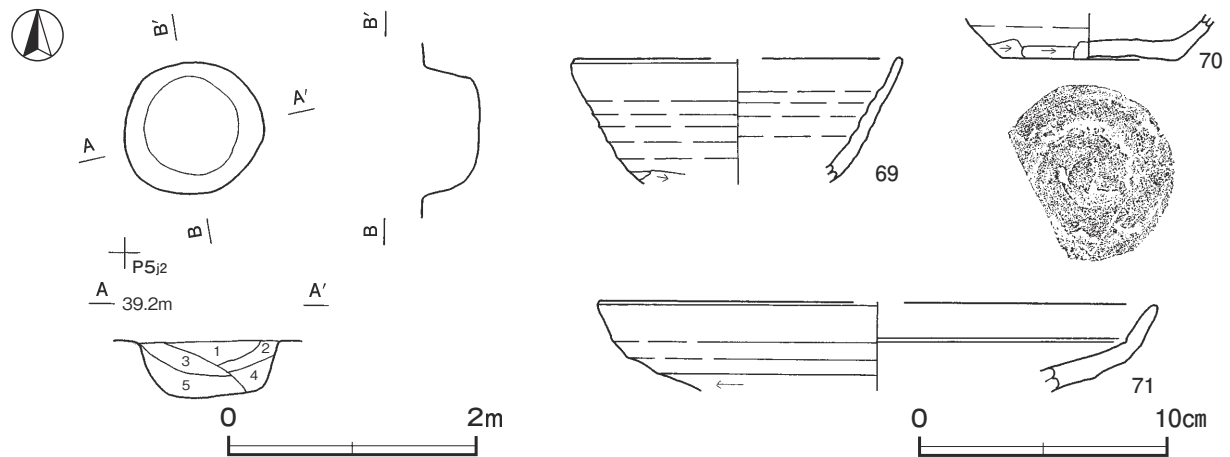
位置 調査区中央部のP5i2区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径1.10m、短径1.05mの円形である。深さは45cmで、壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- |          |                      |          |           |
|----------|----------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量            | 4 暗褐色    | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック中量、<br>焼土粒子微量 | 5 にぶい横褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 にぶい横褐色 | ロームブロック中量            |          |           |



第44図 第213号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片22点（甕類），須恵器片15点（坏9・高台付坏1・蓋1・甕類4）が、覆土中から出土している。土器は、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。性格は不明である。

第213号土坑出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
69	須恵器	坏	[12.9]	(4.9)	-	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	10% 堀ノ内窯
70	須恵器	坏	-	(1.8)	7.0	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切りを残す 二方向の削り	覆土中	30% 堀ノ内窯
71	須恵器	盤	[21.8]	(3.5)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	良好	体部下端回転ヘラ削り 体部内面口唇部に沿って 円状のナデによる沈線	覆土中	10% 新治窯

表5 奈良時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
5	W7i0	N-7°-E	楕円形	0.92 × 0.86	26	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	
28	X7a9	-	円形	0.42 × 0.38	45	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
34	W8c2	-	円形	0.40 × 0.40	60	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
41	V7d6	-	円形	0.58 × 0.54	64	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	本跡→PG3P26
46	V7a6	N-50°-W	楕円形	1.06 × 0.73	34	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	本跡→PG3P16
122	U7a3	-	円形	0.74 × 0.72	50	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	
208	P5j4	-	[円形]	0.97 × (0.68)	20	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
210	P5i3	N-80°-E	楕円形	1.72 × 1.10	38	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
213	P5i2	-	円形	1.10 × 1.05	45	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	

(6) ピット群

第1号ピット群 (第45図)

**位置** 調査区南東部のW7a0～W7c0区, 標高38mほどの台地緩斜面に位置している。

**規模と形状** 南北8.90m, 東西6.18mの範囲に, ピット15か所を確認した。個々の形状, 計測値については, 一覧表に記載する。

**遺物出土状況** 土師器片31点(坏9・甕類22)が, P1～P15から出土している。

**所見** 時期は, 出土土器に平安時代の土器片を含まないことや, 奈良時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから8世紀代と考えられる。ピットの分布状況から, 建物跡は想定できない。

第1号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	W7b0	楕円形	60	44	34	6	W7b0	楕円形	43	34	15	11	W7a0	円形	62	57	32
2	W7b0	円形	43	43	43	7	W7b0	楕円形	52	41	26	12	W7a0	楕円形	49	43	42
3	W7b0	楕円形	47	41	46	8	W7b0	円形	47	44	58	13	W8a1	円形	52	52	45
4	W7b0	楕円形	52	38	63	9	W7b0	楕円形	49	40	26	14	W7c9	円形	58	57	24
5	W7c0	円形	48	44	42	10	W7a0	円形	64	62	22	15	W7b9	楕円形	47	42	18

第2号ピット群 (第46図)

**位置** 調査区南東部のW7d9～W8e2区, 標高39mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** P23は第33号土坑を, P39は第32号土坑を掘り込んでいる。これ以外の重複関係は, 不明である。

**規模と形状** 南北4.90m, 東西13.90mの範囲に, ピット41か所を確認した。個々の形状, 計測値については, 一覧表に記載する。

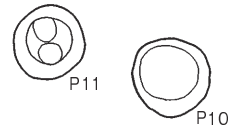
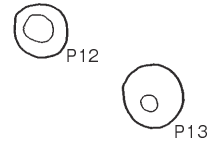
**遺物出土状況** 土師器片46点(坏12・甕類34)が, P1～P41から出土している。

**所見** 時期は, 平安時代の土器片を含まないことや, 奈良時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから8世紀代と考えられる。ピットの分布状況から, 建物跡は想定できない。

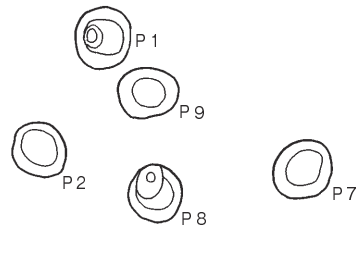




W7a0



W7b0



W8c1



第45図 第1号ピット群実測図

第2号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	W 7 d0	楕円形	48	22	61
2	W 7 d0	楕円形	30	21	32
3	W 7 d0	[楕円形]	22	(16)	56
4	W 7 d0	楕円形	35	22	21
5	W 7 d0	円形	30	19	58
6	W 7 e0	[楕円形]	(17)	16	31
7	W 7 d0	円形	33	32	39
8	W 7 d0	[楕円形]	(18)	22	43
9	W 7 e0	楕円形	47	38	44
10	W 7 e0	円形	26	26	25
11	W 8 e2	楕円形	27	22	11
12	W 8 e2	円形	28	28	23
13	W 7 d0	不定形	45	30	73
14	W 7 d0	楕円形	32	26	70

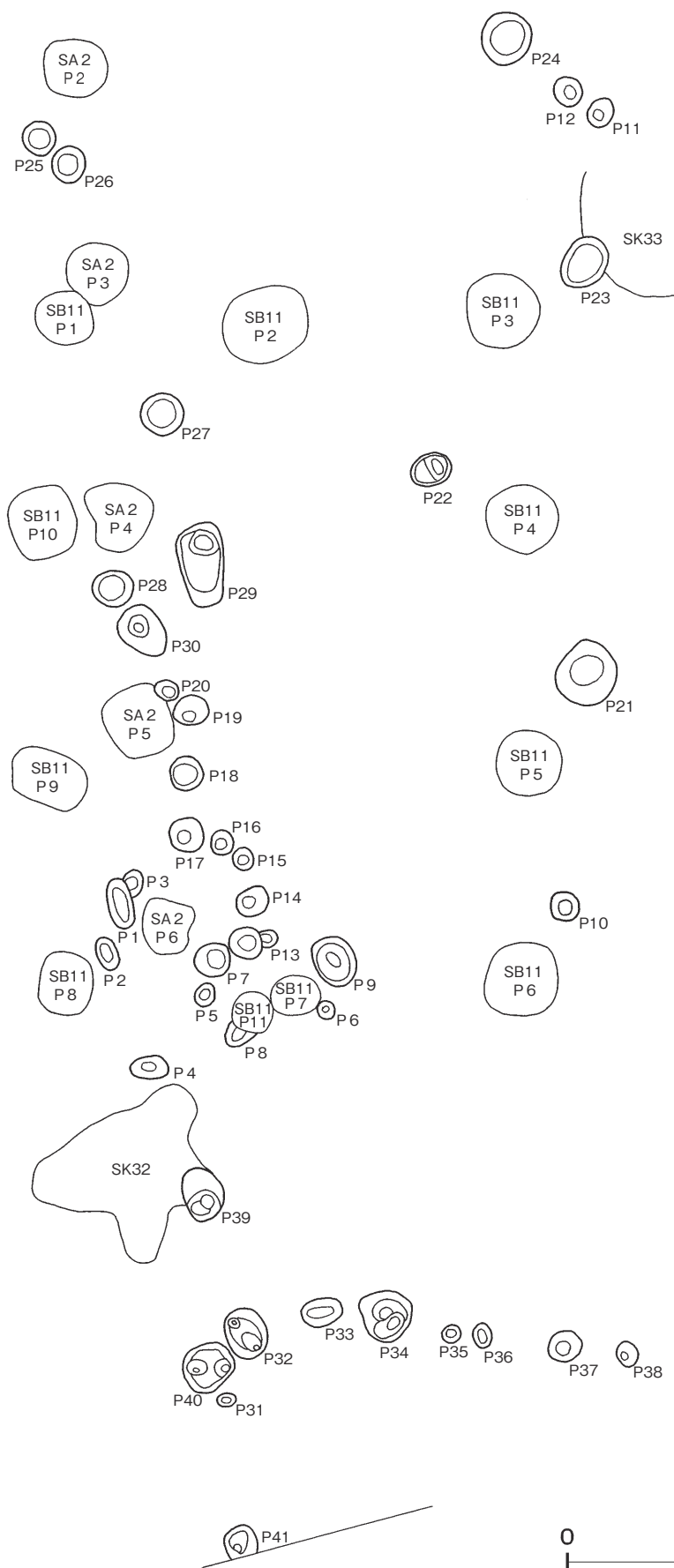
番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
15	W 7 d0	円形	22	20	66
16	W 7 d0	円形	23	21	102
17	W 7 d0	円形	31	30	78
18	W 8 d1	円形	31	30	58
19	W 8 d1	楕円形	33	30	41
20	W 8 d1	楕円形	24	20	66
21	W 8 e1	楕円形	60	53	69
22	W 8 e1	楕円形	39	31	34
23	W 8 e2	[楕円形]	(40)	50	60
24	W 8 e2	円形	48	46	47
25	W 8 d2	円形	31	31	26
26	W 8 d2	円形	34	31	24
27	W 8 d1	円形	39	38	31
28	W 8 d1	楕円形	38	34	17

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
29	W 8 d1	楕円形	75	42	37
30	W 8 d1	楕円形	50	40	46
31	W 7 d9	楕円形	16	12	15
32	W 7 d9	楕円形	48	38	45
33	W 7 e9	楕円形	38	26	35
34	W 7 e9	円形	48	48	24
35	W 7 e9	楕円形	17	16	14
36	W 7 e9	楕円形	21	18	10
37	W 7 e9	楕円形	31	27	36
38	W 7 e9	楕円形	24	20	16
39	W 7 d0	楕円形	48	40	32
40	W 7 d9	楕円形	47	42	18
41	W 7 d9	[楕円形]	(28)	30	30

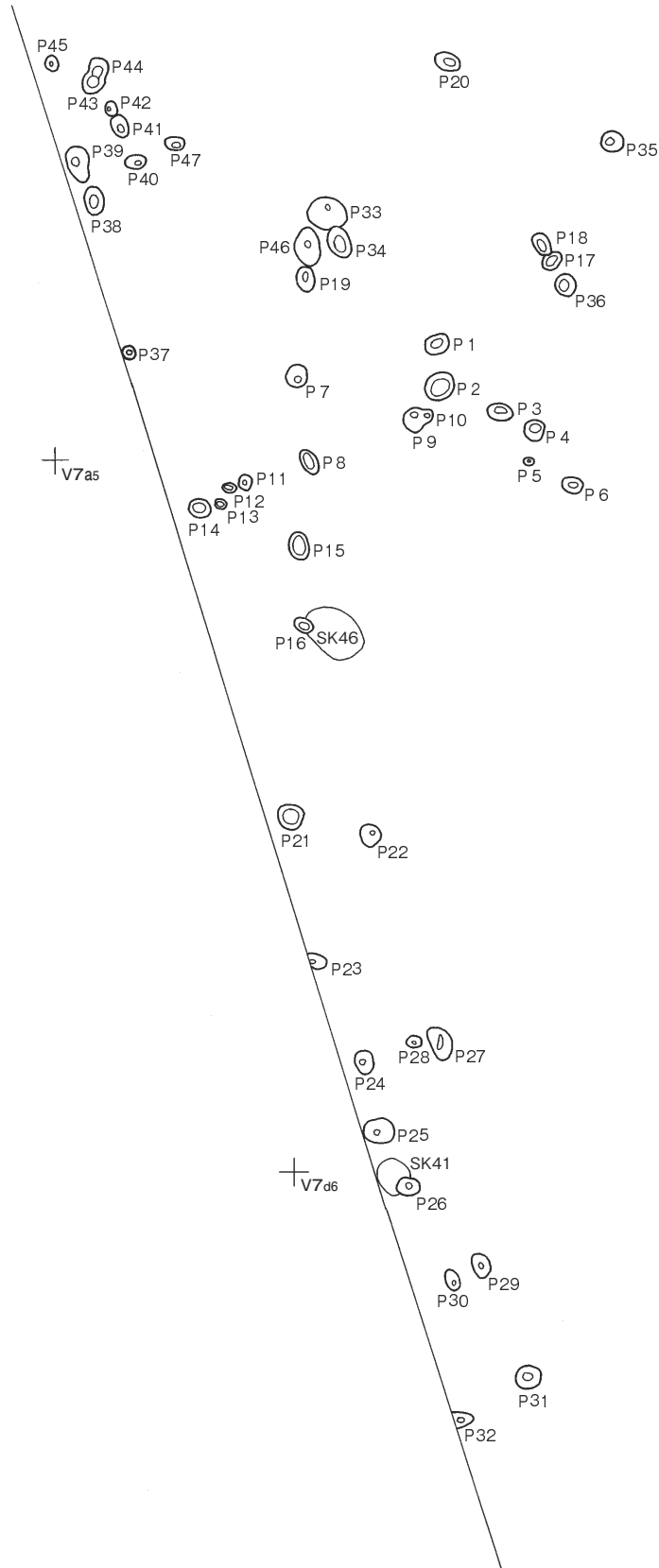


W802

W700



第46図 第2号ピット群実測図



第 47 図 第 3 号ピット群実測図

### 第3号ピット群（第47図）

**位置** 調査区南東部のU7i4～V7e7区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** P26は第41号土坑を、P16は第46号土坑を掘り込んでいる。これ以外の重複関係は、不明である。

**規模と形状** 南北22.80m、東西8.80mの範囲に、ピット47か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

**遺物出土状況** 土師器片57点（坏11・甕類46）が、P1～P47から出土している。

**所見** 時期は、出土土器に平安時代の土器片を含まないことや、奈良時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから8世紀代と考えられる。ピットの分布状況から、建物跡は想定できない。

第3号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	U7j6	楕円形	41	33	19	17	U7j7	楕円形	42	28	17	33	U7i6	楕円形	64	55	13
2	U7j6	楕円形	54	45	26	18	U7j7	楕円形	42	23	15	34	U7j6	楕円形	56	41	29
3	U7j6	楕円形	43	31	23	19	U7j6	楕円形	41	36	27	35	U7i6	円形	41	40	31
4	U7j7	円形	37	34	17	20	U7j6	楕円形	44	33	41	36	U7i7	円形	39	38	17
5	U7j6	円形	19	18	24	21	V7b5	円形	44	41	16	37	U7j5	円形	26	24	40
6	U7a7	円形	35	33	12	22	V7b6	楕円形	43	32	30	38	U7i5	楕円形	46	36	28
7	U7j6	円形	40	39	45	23	V7c6	[楕円形]	19	(14)	38	39	U7i5	楕円形	62	42	34
8	U7a6	楕円形	49	31	19	24	V7c6	楕円形	43	37	62	40	U7i5	楕円形	37	27	22
9	U7j6	[楕円形]	43	[38]	50	25	V7c6	楕円形	56	46	49	41	U7i5	楕円形	40	30	31
10	U7j6	[楕円形]	25	[21]	10	26	V7d6	楕円形	40	37	23	42	U7i5	楕円形	29	25	27
11	V7a5	楕円形	32	21	22	27	V7c6	楕円形	61	41	36	43	U7i5	楕円形	39	30	49
12	V7a5	楕円形	22	19	10	28	V7c6	楕円形	28	25	43	44	U7i5	楕円形	50	34	84
13	V7a5	楕円形	21	19	19	29	V7d6	楕円形	42	32	29	45	U7i4	楕円形	28	23	28
14	V7a5	円形	37	36	18	30	V7d6	楕円形	36	28	35	46	U7j6	楕円形	66	50	19
15	V7a6	楕円形	49	35	13	31	V7d6	円形	45	42	34	47	U7i5	楕円形	33	28	32
16	V7a6	楕円形	31	25	22	32	V7e6	[楕円形]	(32)	30	48						

## 2 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡25棟、掘立柱建物跡9棟、井戸跡2基、柱穴列2条、土坑12基、ピット群1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

### (1) 竪穴建物跡

#### 第1号竪穴建物跡（第48～50図）

**位置** 調査区南東部のX7a8区、標高38mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 第6・26号掘立柱建物、第6号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.36m、短軸3.23mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁は高さ30～36cmで、ほぼ直立している。

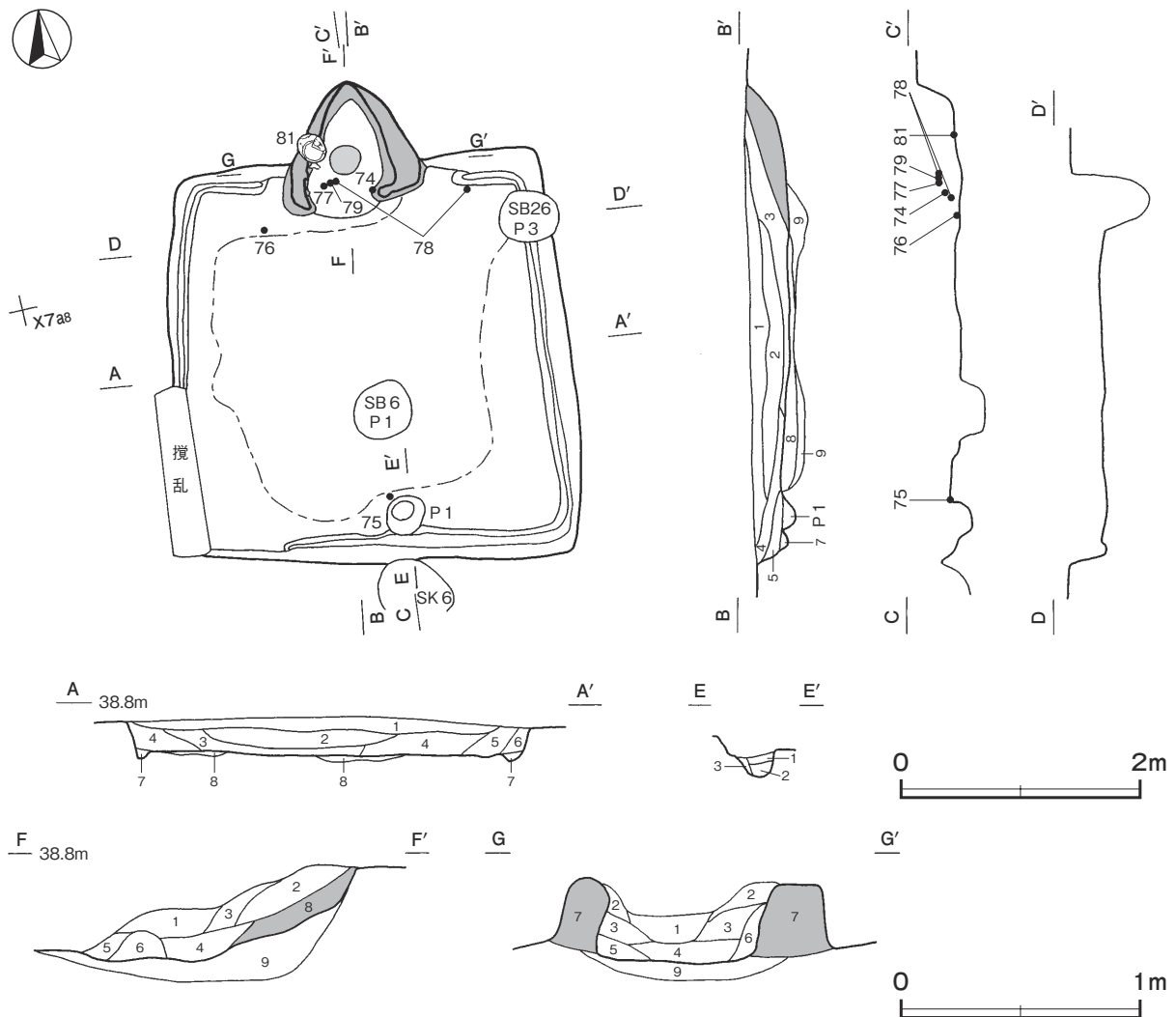
**床** 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第8・9層を6～18cm埋め戻して構築している。壁溝が、竈付近と南西部を除いて巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで110cm、燃焼部の幅60cmである。燃焼部は床面から深さ10cm掘りくぼめ、第9層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第9層の上面に第7層を積み上げて構築している。左袖部の構築土からは、81が逆位で出土しており、芯材として用いられている。火床面は、

第9層の上面で火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第8層は第7層と同質の粘土層で、上面に火熱を受けており、第8層下の地山にも、火熱による赤変硬化が確認できたことから、竈は再構築と考えられる。第1～6層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。

**竈土層解説**

- |          |                         |          |                       |
|----------|-------------------------|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 | 6 褐色     | 粘土ブロック中量, 炭化物微量       |
| 2 暗褐色    | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量      | 7 灰黄褐色   | 粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック多量, 炭化物少量         | 8 赤褐色    | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック中量    |
| 4 暗褐色    | 焼土ブロック中量, 炭化物少量         | 9 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子微量        |
| 5 暗赤褐色   | 粘土ブロック多量                |          |                       |



第48図 第1号竪穴建物跡実測図

**ピット** P1は深さ22cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。

**ピット土層解説**

- |          |                  |      |         |
|----------|------------------|------|---------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量        | 3 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 |      |         |

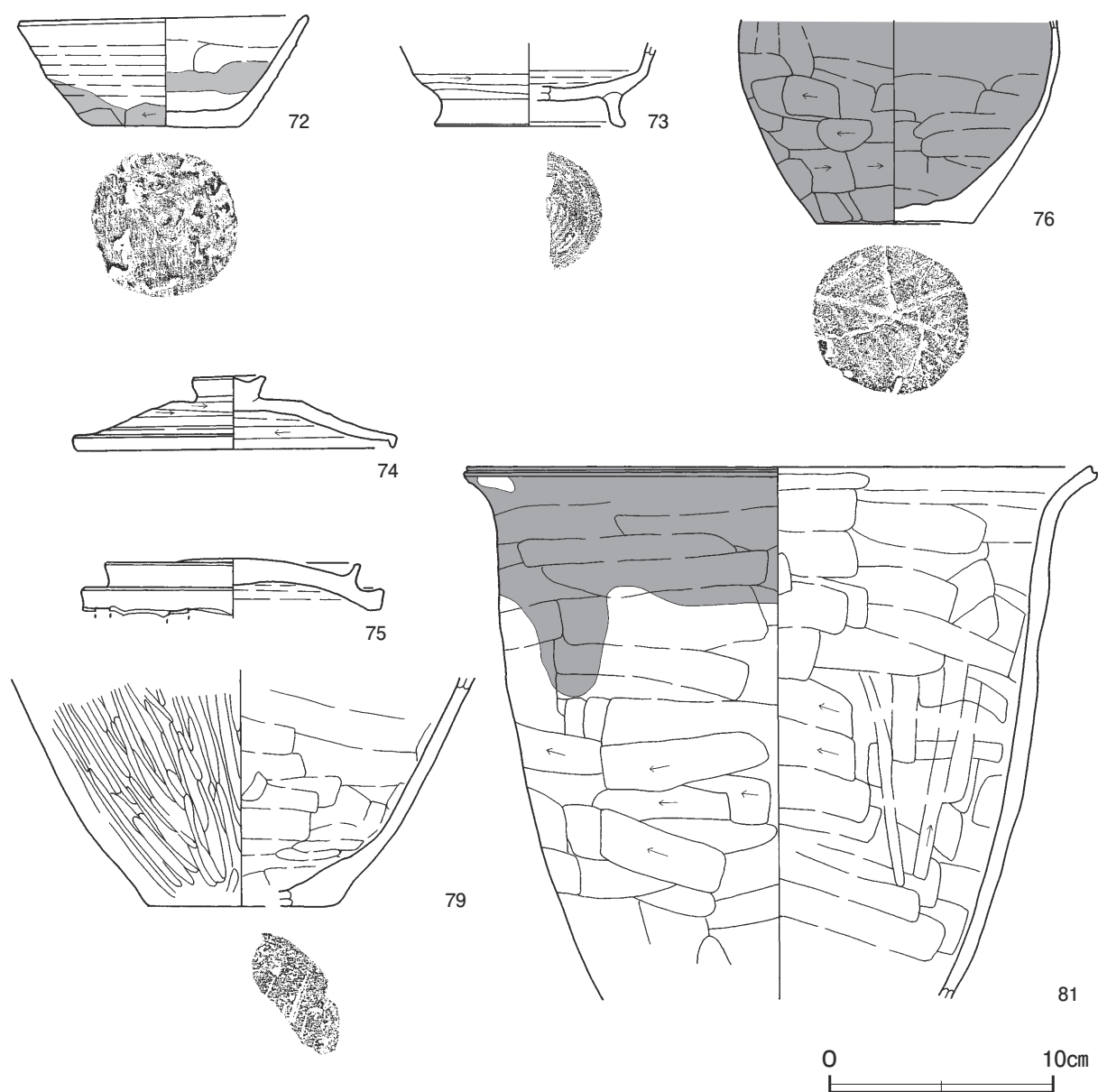
**覆土** 7層に分層できる。均質な堆積をしていることから自然堆積土である。第8・9層は貼床の構築土である。

土層解説

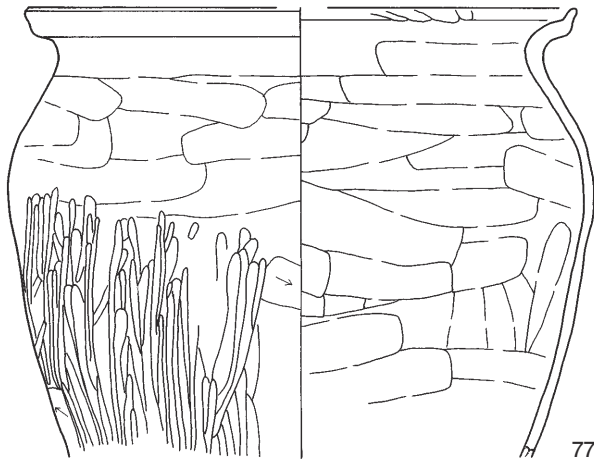
- |       |                  |          |                |
|-------|------------------|----------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 におい黄褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量  | 7 褐色     | ロームブロック少量      |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 8 暗褐色    | ロームブロック中量      |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量        | 9 黄褐色    | ロームブロック中量      |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック微量 |          |                |

遺物出土状況 土師器片 272 点（坏 36・甕類 232・甗 4），須恵器片 90 点（坏 69・高台付坏 1・蓋 10・円面硯 1・甕類 8・瓶類 1），土製品 1 点（支脚）のほか，縄文土器 1 点（深鉢），鉄滓 1 点（30.2 g）が，全域に散在した状態で出土している。土器は大型の破片で，覆土中層以下から出土している。74・75 は，斜位や逆位などの状態で出土していることから，埋没の過程で投棄されたと考えられる。76～79 は，土器片が竈の火床面付近や北壁際からまとまって出土していることから，竈の廃絶に伴って廃棄されたと考えられる。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



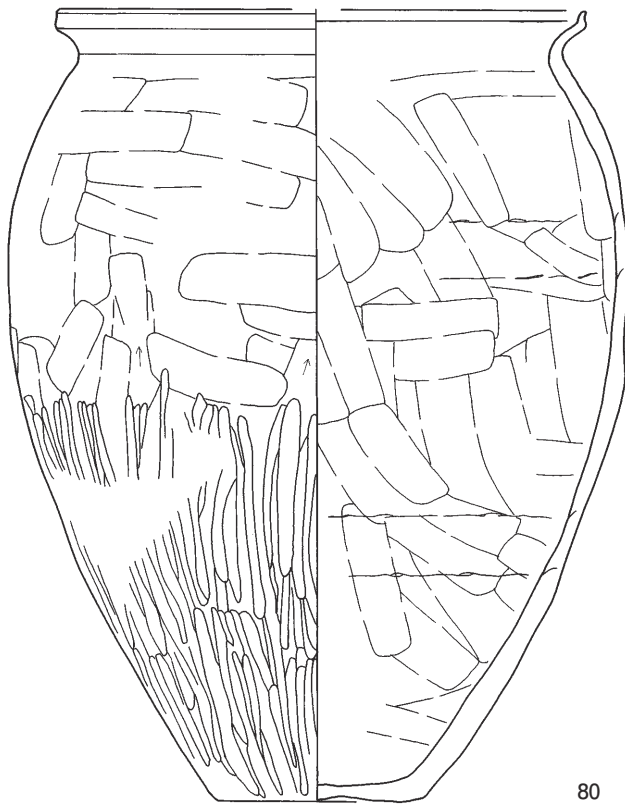
第 49 図 第 1 号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



77



78



80



第 50 図 第 1 号 竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第49・50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
72	須恵器	坏	12.6	4.9	6.4	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向の削り	覆土中	80% PL34 新治窯 漆付着
73	須恵器	高台付坏	-	(3.7)	[8.2]	長石・石英・礫	灰	普通	底部回転ヘラ削り 高台部貼付	掘方	10% 堀ノ内窯カ
74	須恵器	蓋	14.2	3.3	-	長石・石英・雲母・礫	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り 内面に重ね焼き痕 摘み部貼付	竈覆土	95% 新治窯
75	須恵器	円面硯	[13.3]	(2.4)	-	長石・石英・礫	暗灰黄	良好	体部外・内面横ナデ 透かし部ヘラ切り	覆土下層	20% PL35 堀ノ内窯
76	土師器	小形甕	-	(9.0)	6.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面縦位・横位のナデ後横位の削り 体部内面横位のナデ 底部木葉痕ナデ消し	覆土下層	50% 煤付着
77	土師器	甕	[21.8]	(17.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の削り後横位のナデ 中位以下に磨き 体部内面縦位・横位のナデ	竈覆土	30%
78	土師器	甕	[20.5]	(13.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の削り後横位のナデ 中位以下に磨き 体部内面横位のナデ 指頭痕	覆土中層・ 竈覆土中層	30% 79と同一個体
79	土師器	甕	-	(10.1)	[8.3]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面縦位の削り後横位のナデ 磨き 体部内面横位のナデ 底部ヘラ削り	竈覆土中層	30% 78と同一個体
80	土師器	甕	[20.9]	31.4	8.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の削り後横位のナデ 中位以下に磨き 体部内面縦位・横位のナデ後横ナデ 底部木葉痕	覆土中	70%
81	土師器	甕	27.4	(23.5)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の削り後横位のナデ 体部内面縦位・横位のナデ	竈袖構築土	70% 煤付着

第4号竪穴建物跡（第51～53図）

**位置** 調査区中央部のT6d0区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長軸3.34m、短軸3.28mの方形で、主軸方向はN-16°-Eである。壁は高さ26～35cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、南西コーナー部と北西コーナー部を除いて、踏み固められている。貼床は、第8層を6～12cm埋め戻して構築している。壁溝が、竈付近及び北東部、南東部、北西部を除いて、巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで106cm、燃烧部の幅30cmである。燃烧部は床面から深さ36cm掘りくぼめられ、第9・10層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第9層の上面に第8層を積み上げて構築している。煙道部は棚状施設の壁外に18cm掘り込まれ、火床部から外傾している。火床面は、第9・10層の上面が火熱を受け赤変硬化している。94は火床面に接して逆位で置かれていたことから、支脚への転用と考えられる。第1～7層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。

**竈土層解説**

- |   |        |                        |    |        |                  |
|---|--------|------------------------|----|--------|------------------|
| 1 | にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量       | 6  | 暗褐色    | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量  |
| 2 | 暗褐色    | ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量 | 7  | 赤褐色    | 焼土ブロック中量         |
| 3 | 暗褐色    | 粘土ブロック少量、焼土粒子微量        | 8  | 灰黄褐色   | 粘土ブロック多量、炭化粒子微量  |
| 4 | にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量、焼土粒子少量        | 9  | にぶい黄褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 5 | 暗褐色    | 焼土ブロック・炭化粒子微量          | 10 | 褐色     | ローム粒子・焼土粒子微量     |

**棚状施設** 北西コーナー部が突出することから、竈の両側に2か所が推定できる。棚1は、幅1.22m、奥行き0.52mと推定でき、床面からの高さは28～35cmである。棚面は確認できなかった。竈右袖部の外側に、地山を掘り残して構築されている。棚2は、幅0.78m、奥行き0.42mと推定でき、床面からの高さは32～35cmである。棚面は確認できなかった。竈左袖部の外側に、北西コーナー部を除いて、地山を掘り残して構築されている。性格は、竈に付帯して構築されていることから、供膳具や煮沸具などの置き場と考えられる。

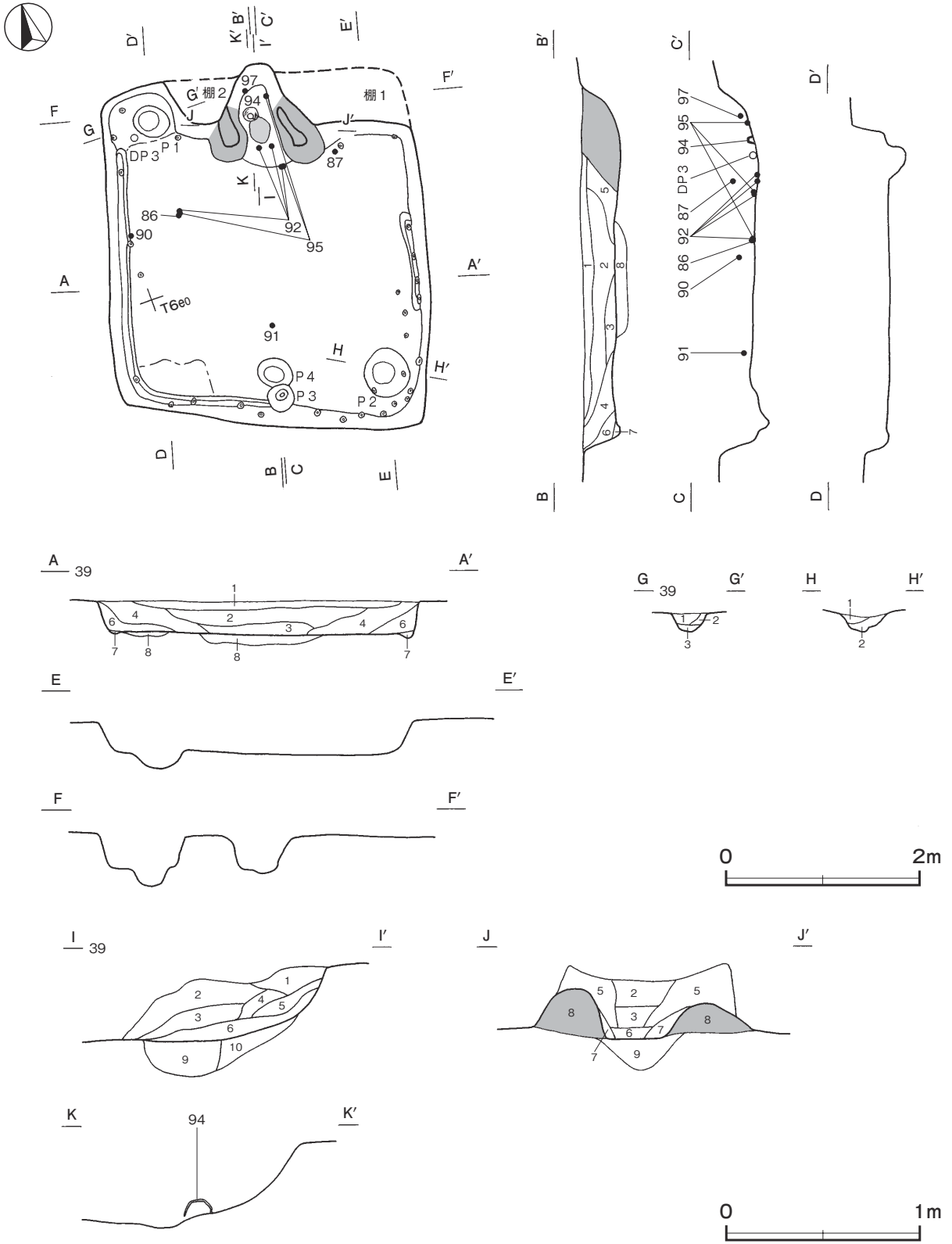
**ピット** 34か所。P1・P2は深さ18～22cmで、配置から貯蔵穴の可能性はあるが、不明である。覆土はP1が3層、P2は2層で、埋め戻されている。P3・P4は出入りに伴うピットと考えられる。このほか、壁下に沿って、小ピット30か所を確認した。壁面及び床面からの深さは4～20cmである。壁材の支柱と考えられる。



ピット土層解説 (P1・P2共通)

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量



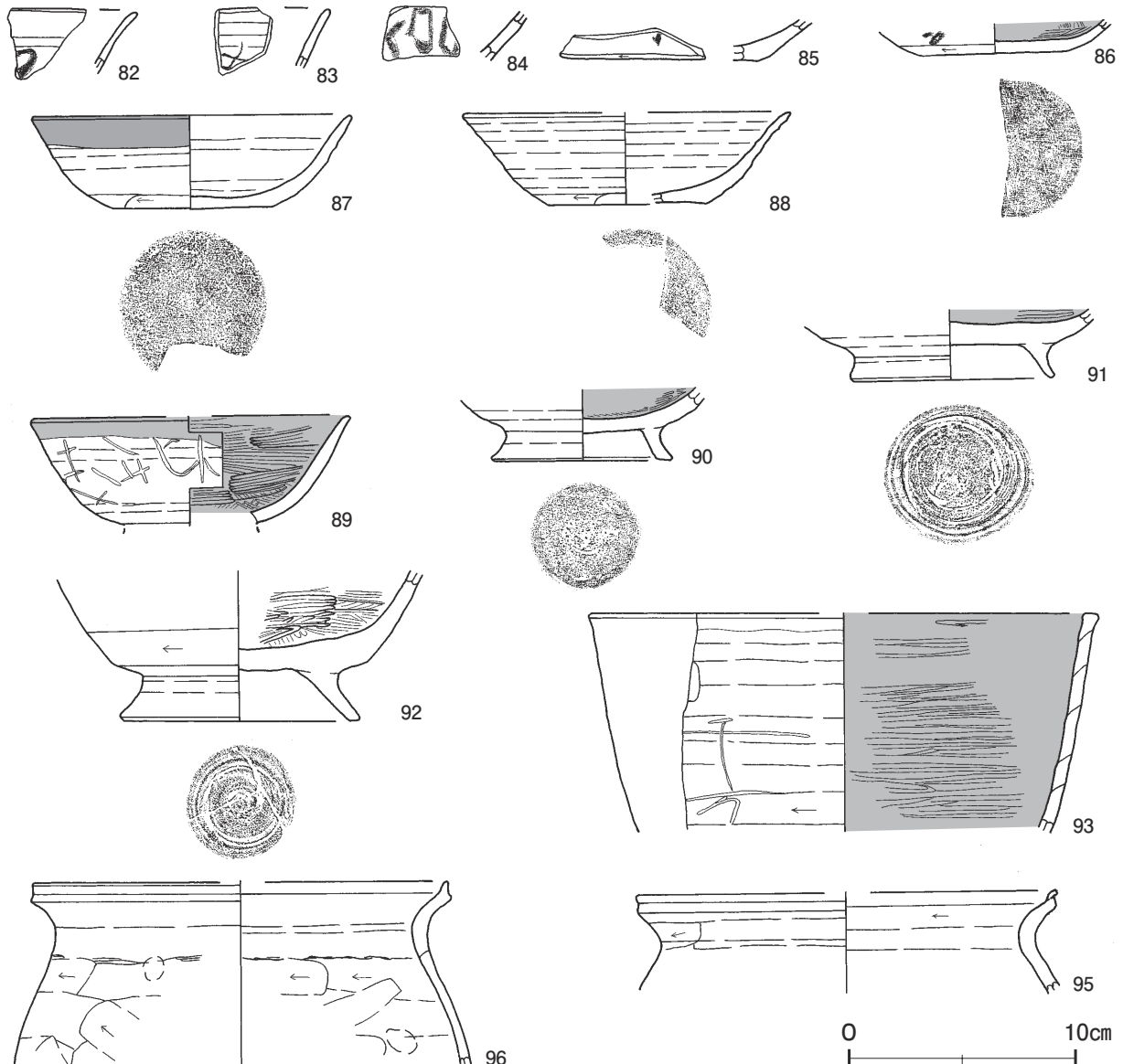
第51図 第4号竪穴建物跡実測図

**覆土** 7層に分層できる。第1～6層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第7層は壁溝の覆土、第8層は貼床の構築土である。

**土層解説**

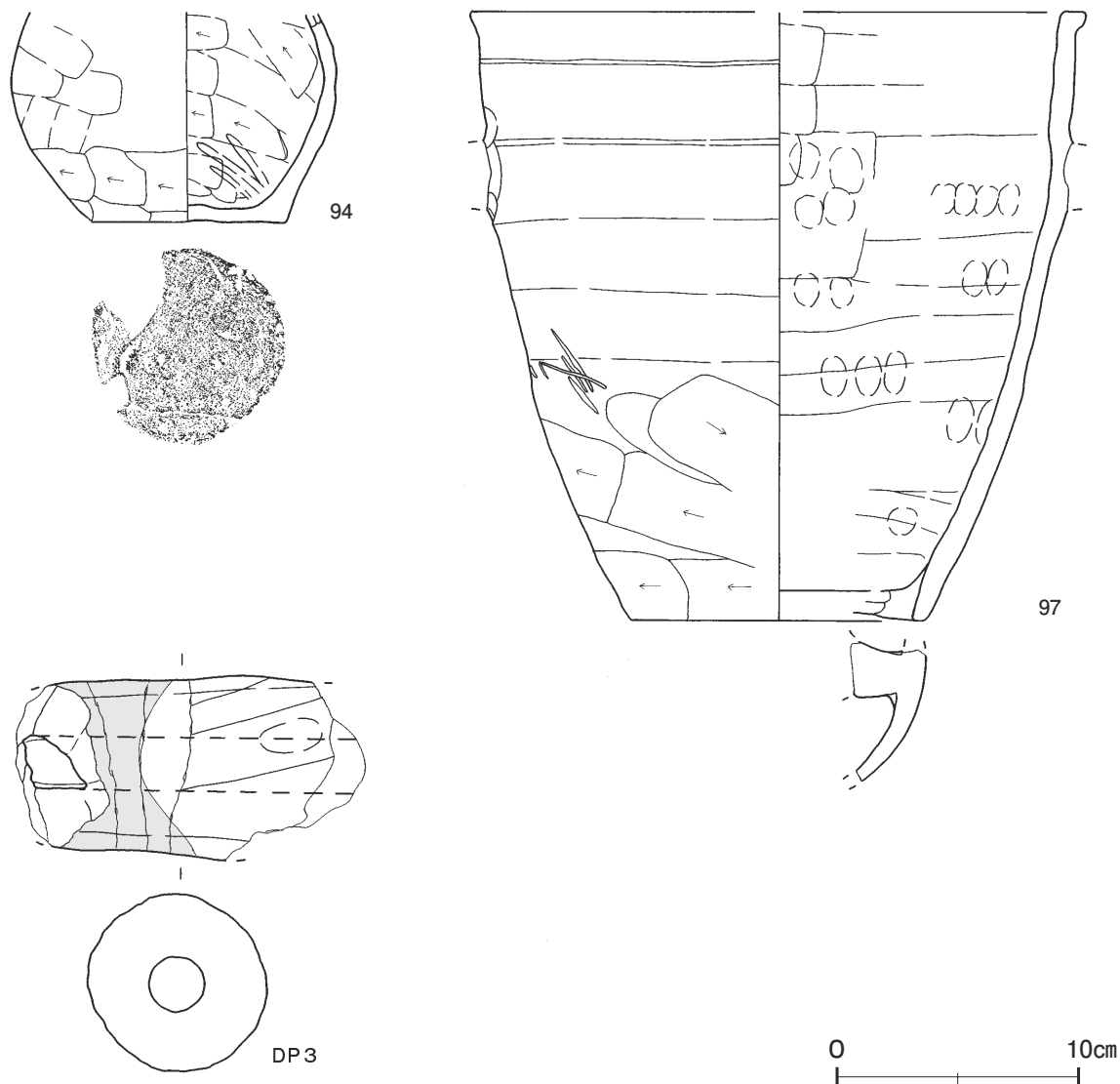
- |       |                        |          |                   |
|-------|------------------------|----------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量      | 5 暗褐色    | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量         |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量    | 7 暗褐色    | ローム粒子・粘土粒子微量      |
| 4 暗褐色 | ロームブロック微量              | 8 黒褐色    | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |

**遺物出土状況** 土師器片 606点 (坏 179・高台付碗 26・鉢 1・甕類 399・甑 1), 須恵器片 55点 (坏 20・高台付坏 1・蓋 2・甕類 26・甑 6), 土製品 4点 (羽口), 金属製品 2点 (不明), 鉄滓 2点 (81.3 g) のほか, 弥生土器片 1点 (広口壺) が, 主に竈周辺から出土している。土器は小型もしくは中型の破片で, 覆土中層以下から出土している。87・90・91は斜位や逆位などの状態で出土していることから, 埋没の過程で投棄されたと考えられる。92・95・97は, 竈付近から破損した状態で出土していることから, 竈の廃絶に伴って廃棄されたと考えられる。  
**所見** 時期は, 出土土器から9世紀後葉に比定できる。DP 3が出土していることから, 調査区付近で鍛冶に



第52図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)

関わる施設の存在が推定できる。



第 53 図 第 4 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 52・53 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
82	土師器	坏	-	(2.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 [□] 墨書
83	土師器	坏	-	(2.6)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 [□] 墨書
84	土師器	坏	-	(2.1)	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 [宮城.] 墨書
85	土師器	坏	-	(1.8)	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面下端手持ちヘラ削り 内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 [□] 墨書
86	土師器	坏	-	(1.4)	[6.0]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面多方向の磨き	覆土下層	10% PL36 [□] 墨書
87	土師器	坏	13.8	4.0	6.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向の削り	覆土中層	50% 煤附着
88	須恵器	坏	[14.0]	4.0	[6.8]	石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向の削り	覆土中	30%
89	土師器	高台付椀	[13.7]	(4.7)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位・斜位の磨き	覆土中	20% PL36 [□成井.] 刻書
90	土師器	高台付椀	-	(3.1)	7.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内面横位の磨き	覆土中層	20%
91	土師器	高台付椀	-	(2.9)	8.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内面横位の磨き	覆土下層	40%
92	土師器	高台付椀	-	(6.5)	[10.2]	雲母・白色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き	竈覆土下層・覆土下層	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	土師器	鉢	[22.0]	(9.5)	-	石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	外面横位のナデ 内面横位の磨き 輪積み痕	覆土中	20% PL36 「千万」ヘラ書
94	土師器	小形甕	-	(8.5)	7.9	長石・石英・細礫	にぶい赤褐	普通	外面縦位のナデ後横位ナデ、下端ヘラ削り 内面斜位のナデ後横位ナデ、下位にヘラ圧痕 底部一方向の削り	竈火床面	40% 火熱による劣化
95	土師器	甕	[18.0]	(4.3)	-	石英・雲母・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%
96	土師器	甕	[18.0]	(8.1)	-	長石・石英・細礫	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のナデ 体部内面横位・斜位のナデ 指頭痕 輪積み痕 体部外面横ナデ、刻線、下端ヘラ削り、把手部貼付 痕、体部内面横位のナデ、指頭痕 底部ヘラ切りによる穿孔	覆土中	10%
97	須恵器	甌	[25.0]	24.9	[12.0]	石英・雲母・白色粒子	灰黄	普通		竈覆土下層	30% 新治産

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 3	羽口	(14.2)	(7.5)	1.2	(464.0)	石英・細礫・白色粒子	赤褐	ナデ 一部滓化	覆土下層	PL40

### 第5号竪穴建物跡（第54～56図）

**位置** 調査区中央部のT6c9区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 西部の大半が調査区域外に延びているため、南北軸は3.86m、東西軸は2.02mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-2°-Eである。壁は高さ28～40cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第9～11層を4～12cm埋め戻して構築している。壁溝が、竈付近と南東コーナー部を除いて巡っている。

**竈** 北壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。焚口部から煙道部まで138cm、燃焼部の幅34cmである。燃焼部は、床面から深さ18cm掘りくぼめられている。袖部は、床面に第4・5層を積み上げて構築している。袖部の構築土中からは、107・109が逆位で出土しており、芯材に用いられている。火床面は、地山の上面で火熱を受け赤変硬化している。Q6は、火床面に接して逆位で直立した状態で確認でき、火熱を受けていることから、支脚として用いられている。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第1～3層は天井部材や内壁の崩落土と考えられるが、右袖の前方部に粘土ブロックが散在することから、壊されている。

#### 竈土層解説

- |                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 灰黄色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック微量    |
| 2 灰黄色 粘土ブロック中量             | 5 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 3 赤褐色 焼土ブロック中量             |                             |

**ピット** P1は深さ14cmで、配置から貯蔵穴の可能性はあるが、不明である。覆土は単一層で、埋め戻されている。

#### ピット土層解説（P1）

- |                    |
|--------------------|
| 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |
|--------------------|

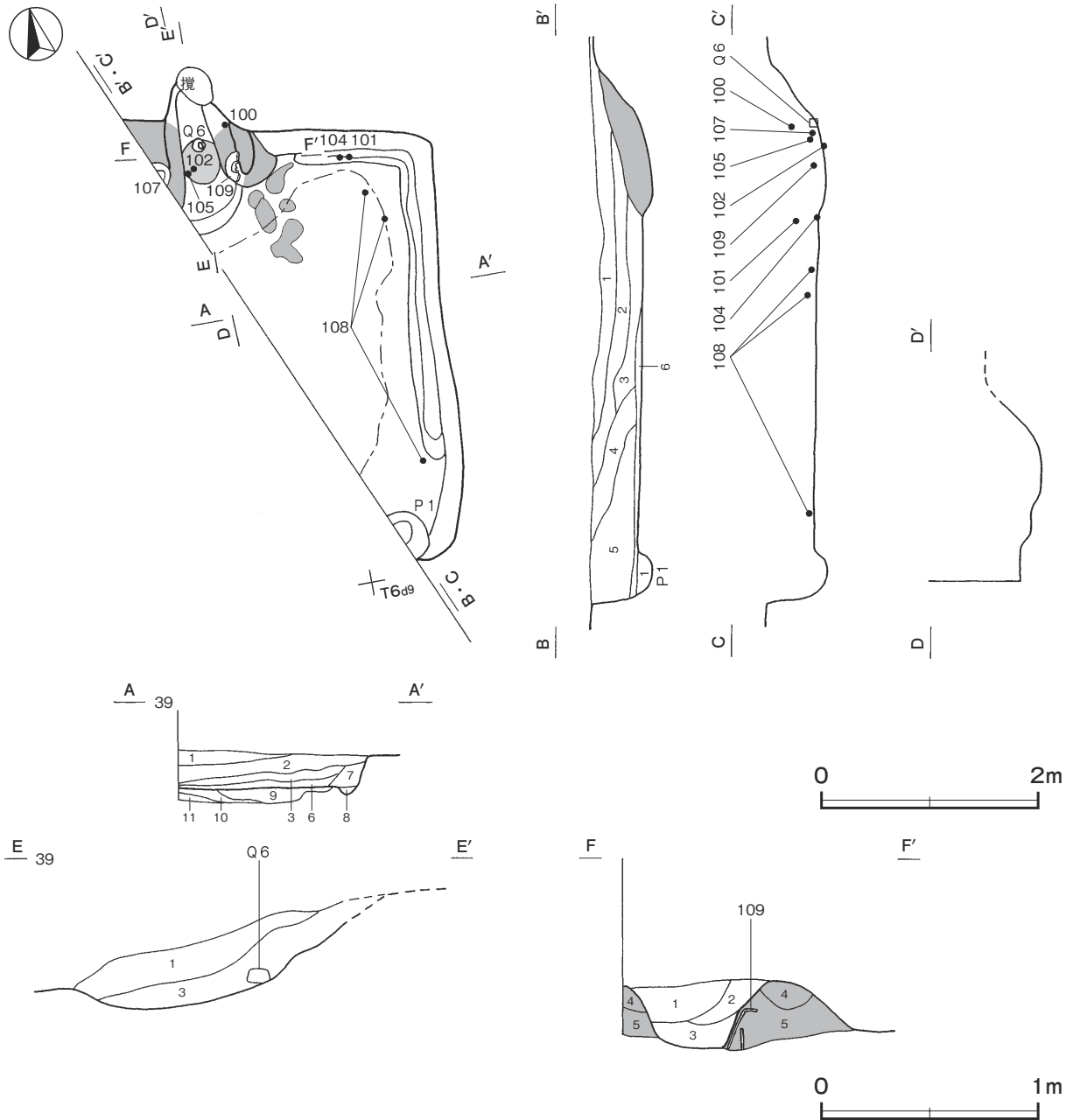
**覆土** 8層に分層できる。第1～7層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積土と考えられる。第7層はロームブロックが比較的多く含まれていることから、壁の崩壊土と思われる。第8層は壁溝の覆土、第9～11層は貼床の構築土である。

#### 土層解説

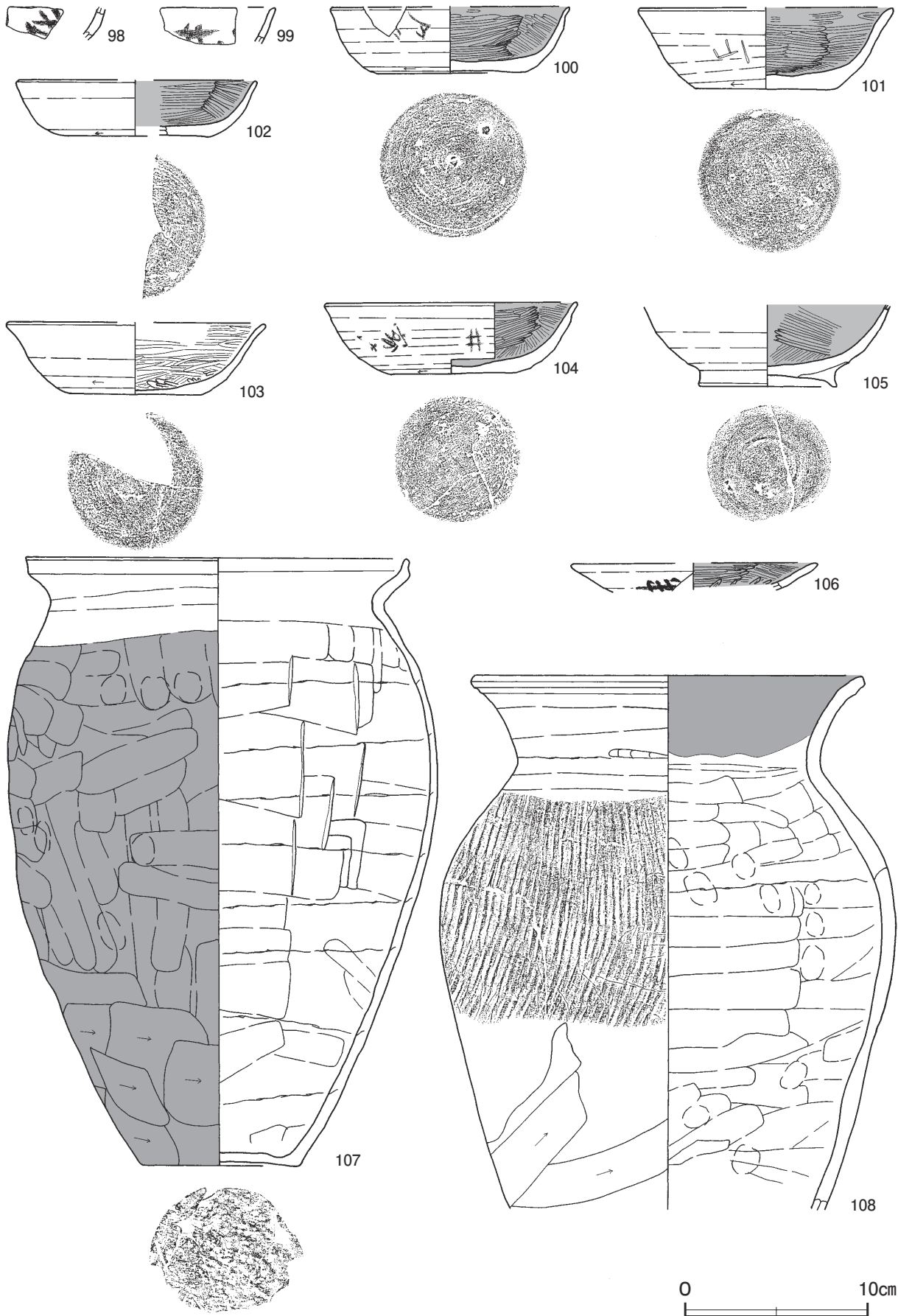
- |                        |                            |
|------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量          | 6 暗褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量     |
| 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量   | 7 にぶい黄褐色 ロームブロック中量         |
| 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量     | 8 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量     |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量        | 9 黒褐色 ロームブロック少量            |
| 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 10 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片 338 点 (坏 105・高台付椀 5・蓋 2・皿 1・甕類 224・甑 1), 須恵器片 38 点 (坏 23・高台付坏 1・甕類 14), 石製品 1 点 (支脚), 鉄滓 2 点 (105.3 g) が, 主に竈周辺から出土している。土器は大型の破片で, 覆土中層以下から出土している。101・104・108 は, 斜位や破損した状態で出土していることから, 埋没の過程で投棄されたものと考えられる。100・102・105 は, 竈の覆土から出土していることから, 廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。

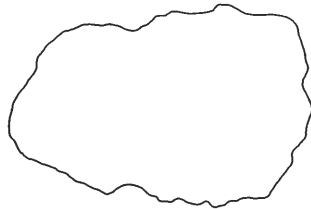
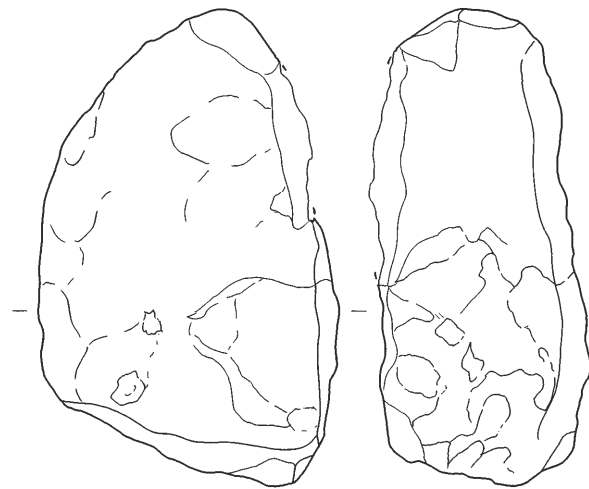
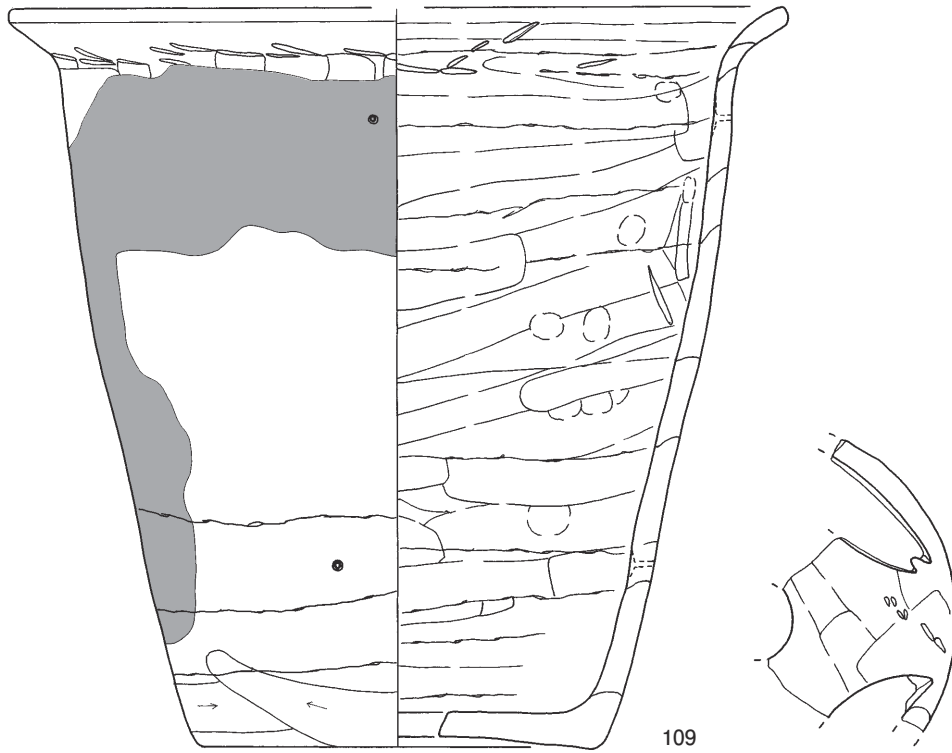
**所見** 時期は, 出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 54 図 第 5 号竪穴建物跡実測図



第55図 第5号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 56 図 第 5 号 豎 穴 建 物 跡 出 土 遺 物 実 測 図 (2)

第 5 号 豎 穴 建 物 跡 出 土 遺 物 観 察 表 ( 第 55 ・ 56 図 )

番号	種 別	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 ほか	出 土 位 置	備 考
98	土 師 器	坏	-	(1.7)	-	雲 母 ・ 赤 色 粒 子	赤 褐	普 通	内 面 横 位 の 磨 き 黒 色 処 理	覆 土 中	5% PL36 「城。」 墨 書

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
99	土師器	坏	-	(2.0)	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面横位の磨き、黒色処理	覆土中	5% PL36 「井」墨書
100	土師器	坏	[12.9]	3.6	7.8	雲母・赤色粒子・ 白色粒子	にぶい 赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面体部から連続する 横位の磨き	竈覆土中層	70% PL27 「□□」墨書
101	土師器	坏	[13.6]	4.3	7.6	雲母・赤色粒子・ 白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面体部から連続する 横位の磨き	覆土中層	80% PL27 「山」ヘラ書
102	土師器	坏	[12.9]	3.0	[6.8]	雲母・赤色粒子・ 白色粒子	明赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面体部から連続する 横位の磨き	竈覆土下層	50%
103	土師器	坏	[13.8]	3.9	7.2	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面多方向の磨き	覆土中	60%
104	土師器	坏	13.5	3.8	6.7	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面体部から連続する 横位の磨き	覆土下層	80% PL27 「家」「井」墨書
105	土師器	高台付椀	-	(4.4)	7.3	石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	体部内面横位の磨き 底部内面へ連続する横位 の磨き	竈覆土中層	40%
106	土師器	皿	[13.3]	(1.4)	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面横位・斜位の磨き	覆土中	5% PL36 「□」墨書
107	土師器	甕	20.5	32.8	8.6	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部縦・横位のナデ、 下端ヘラ削り 体部内面横位のナデ 輪積み痕 底部多方向の削り	竈左袖 構築土	90% PL33 煤付着
108	須恵器	甕	[20.8]	(29.0)	-	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・斜位の平 行叩き、下端ヘラ削り 体部内面横位のナデ 指頭痕	覆土下層	40% PL35 煤付着
109	土師器	甌	[30.6]	29.4	[16.0]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の平行叩 き後下端ヘラ削り 体部内面横位のナデ 底部 ヘラ切りによる穿孔 指頭痕	竈右袖 構築土	40% 煤付着 体部2か所に内 面からの穿孔

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	支脚	19.0	12.1	(8.9)	(1174.6)	凝灰岩。	火熱による劣化のため調整不明	竈火床面	

## 第6号竪穴建物跡（第57・58図）

**位置** 調査区中央部のT7f3区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第56号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 北東部が調査区域外に延びているが、長軸4.50m、短軸3.60mの長方形と推定できる。主軸方向は不明である。壁は高さ26～36cmで、ほぼ直立している。

**床** 緩やかな凹凸をもつ貼床で、中央部が高まり、踏み固められている。貼床は、第11層を2～5cm埋め戻して構築している。壁溝が、南壁下のみで確認できた。

**ピット** 2か所。P1は深さ66cm、P2は深さ68cmで、主柱穴の可能性がある。P2は4層に分層でき、第3・4層は埋土、第2層は柱痕跡、第1層は流入土である。

### ピット土層解説（P2）

- |       |              |          |           |
|-------|--------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量      | 4 暗褐色    | ロームブロック少量 |

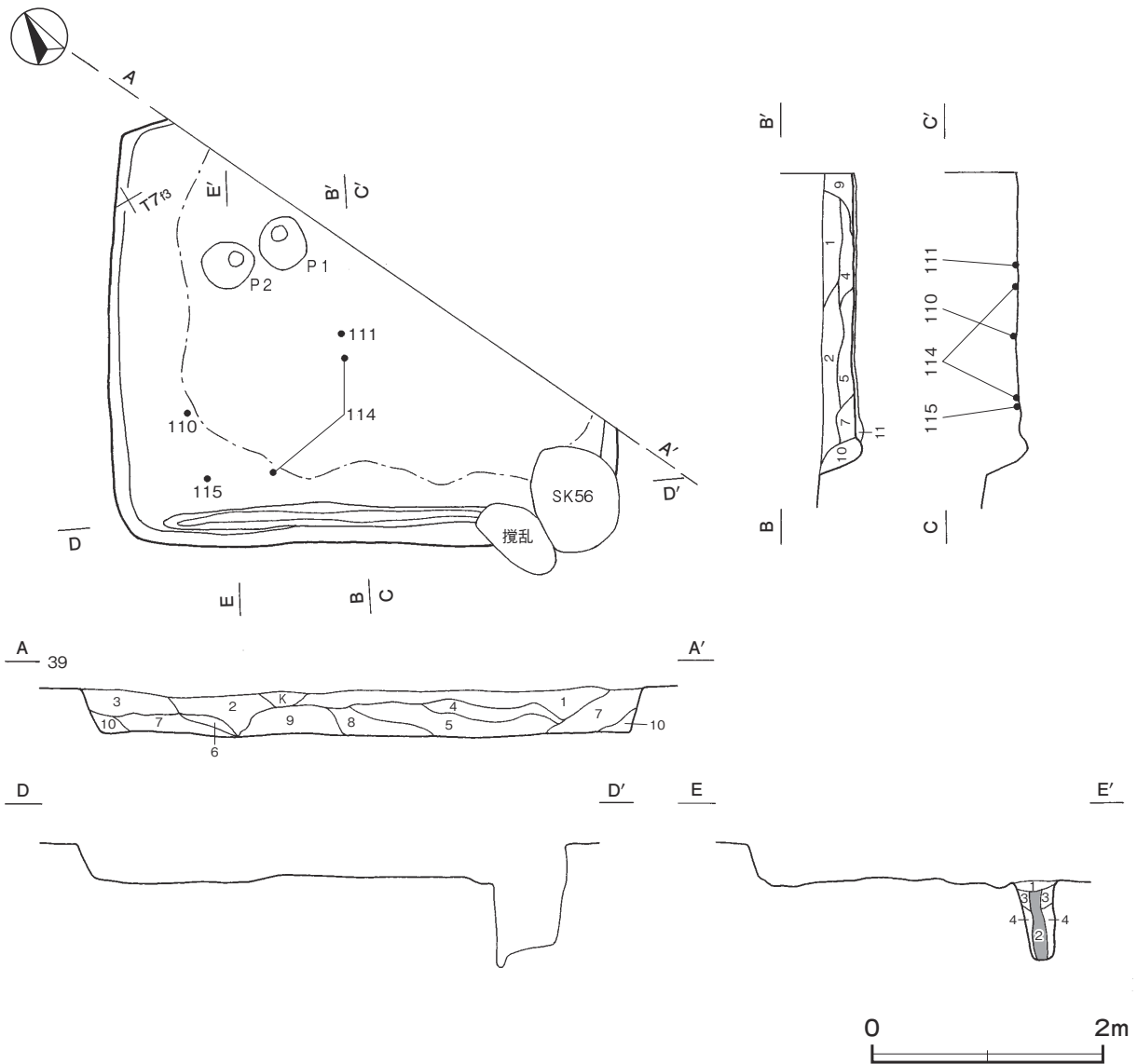
**覆土** 10層に分層できる。不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第11層は貼床の構築土である。

### 土層解説

- |       |                  |           |                  |
|-------|------------------|-----------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 7 黒褐色     | ロームブロック少量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量  | 8 黒褐色     | 焼土ブロック・粘土ブロック少量  |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量          | 9 暗褐色     | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量    | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量        |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子微量   | 11 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量        |
| 6 黒褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子微量 |           |                  |

**遺物出土状況** 土師器片394点（坏175・高台付椀21・蓋11・皿3・コップ形土器<sub>カ</sub>1・鉢2・甕類181）、須恵器片33点（坏13・高台付坏1・蓋2・瓶類4・甕類13）、灰釉陶器1点（長頸瓶<sub>カ</sub>）のほか、縄文土器片1点（深鉢）が、主に南西部から中央部にかけて出土している。接合関係が乏しいことから、破損した土器が、廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。



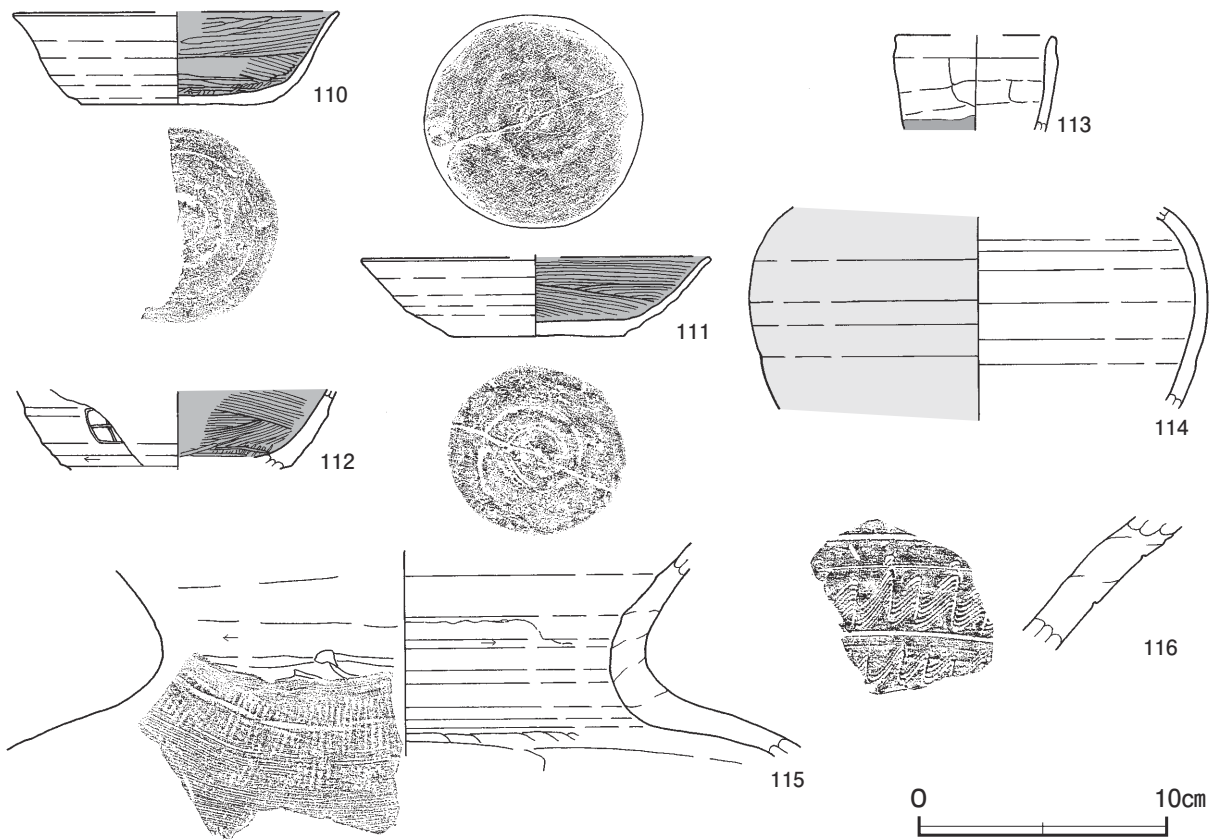


第 57 図 第 6 号竪穴建物跡実測図

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。

第 6 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 58 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
110	土師器	坏	[12.9]	3.7	[7.6]	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁から体部内面横位の磨き 底部へら切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨き	覆土下層	30%
111	土師器	坏	[13.8]	3.1	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁から体部内面横位の磨き 底部へら切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨き	覆土下層	60% PL27「田」刻書
112	土師器	坏	-	(3.1)	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端回転へら削り 体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き	覆土中	10% PL36「田カ」刻書
113	土師器	コップ形土器	[6.8]	(3.8)	-	石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面横位のナデ	覆土中	25% 煤付着
114	灰釉陶器	長頸瓶	-	(8.0)	-	石英・長石・黒色粒子	灰白 灰オリーブ	良好	口縁部外 外面漬け掛け	覆土下層	10% 炭投産
115	須恵器	甕	-	(8.1)	-	石英・白色粒子・黒色粒子	灰黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の平行叩き後横位のカキ目 体部内面縦位のナデ後横位のナデ 輪積み痕	覆土下層	5% 堀ノ内窯
116	須恵器	大甕	-	(5.4)	-	石英・白色粒子・黒色粒子	灰	普通	外面沈線による区画 3 条 区画内に 8 条 1 単位の波状文 内面横ナデ 輪積み痕	覆土中	5% 堀ノ内窯



第58図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡 (第59～61図)

**位置** 調査区中央部のT7f1区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第8号竪穴柱建物に掘り込まれている。

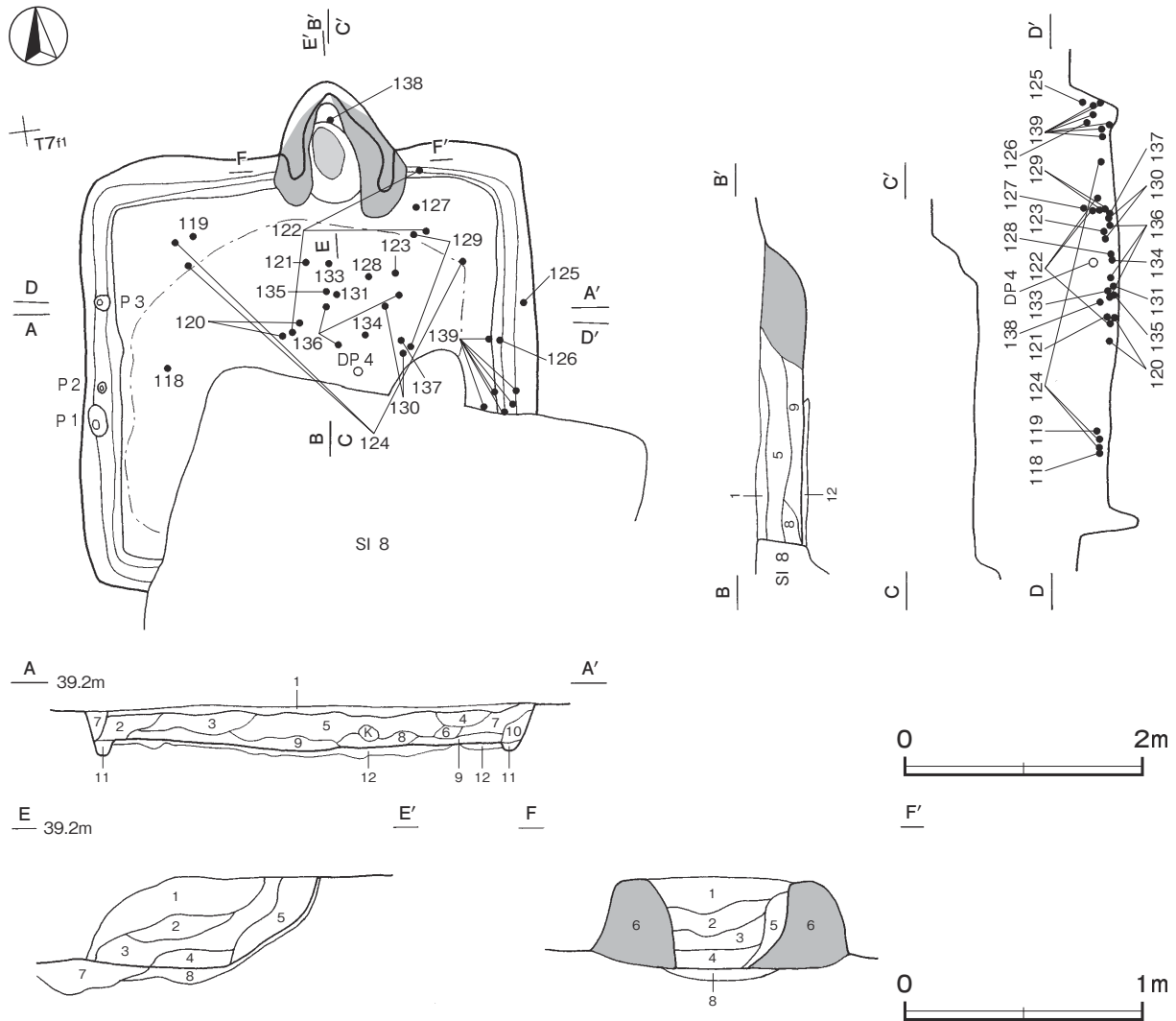
**規模と形状** 南東部を第8号竪穴柱建物に掘り込まれているが, 長軸3.70m, 短軸3.53mの方形と推定できる。主軸方向はN-6°-Eである。壁は高さ24～32cmで, ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で, コーナー部と壁際を除いて踏み固められている。貼床は, 第12層を4～10cm埋め戻して構築している。確認できた部分では, 壁溝が巡っている。

**竈** 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで100cm, 燃焼部の幅40cmである。燃焼部は床面から深さ16cm掘りくぼめられ, 第7・8層で埋め戻されている。袖部は, 貼床面及び第8層の上面に第6層を積み上げて構築している。火床面は第7・8層の上面で, 火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ, 火床部から外傾している。第5層は煙道からの埋土, 第3・4層は天井部材や内壁の崩落土と考えられることから, 自然に崩落している。第1・2層は建物跡の覆土であることから, 埋め戻された後に崩落している可能性がある。

竈土層解説

- |       |                  |          |                        |
|-------|------------------|----------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 暗褐色    | 粘土ブロック中量, 焼土粒子少量       |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 6 灰黄色    | 粘土ブロック中量, 焼土粒子微量       |
| 3 灰黄色 | 粘土ブロック中量         | 7 黒褐色    | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物少量  | 8 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック少量               |



第 59 図 第 7 号 竪穴建物跡実測図

**ピット** 3か所。西壁下で確認した。床面からの深さは16～24cmで、壁材の支柱の可能性はある。

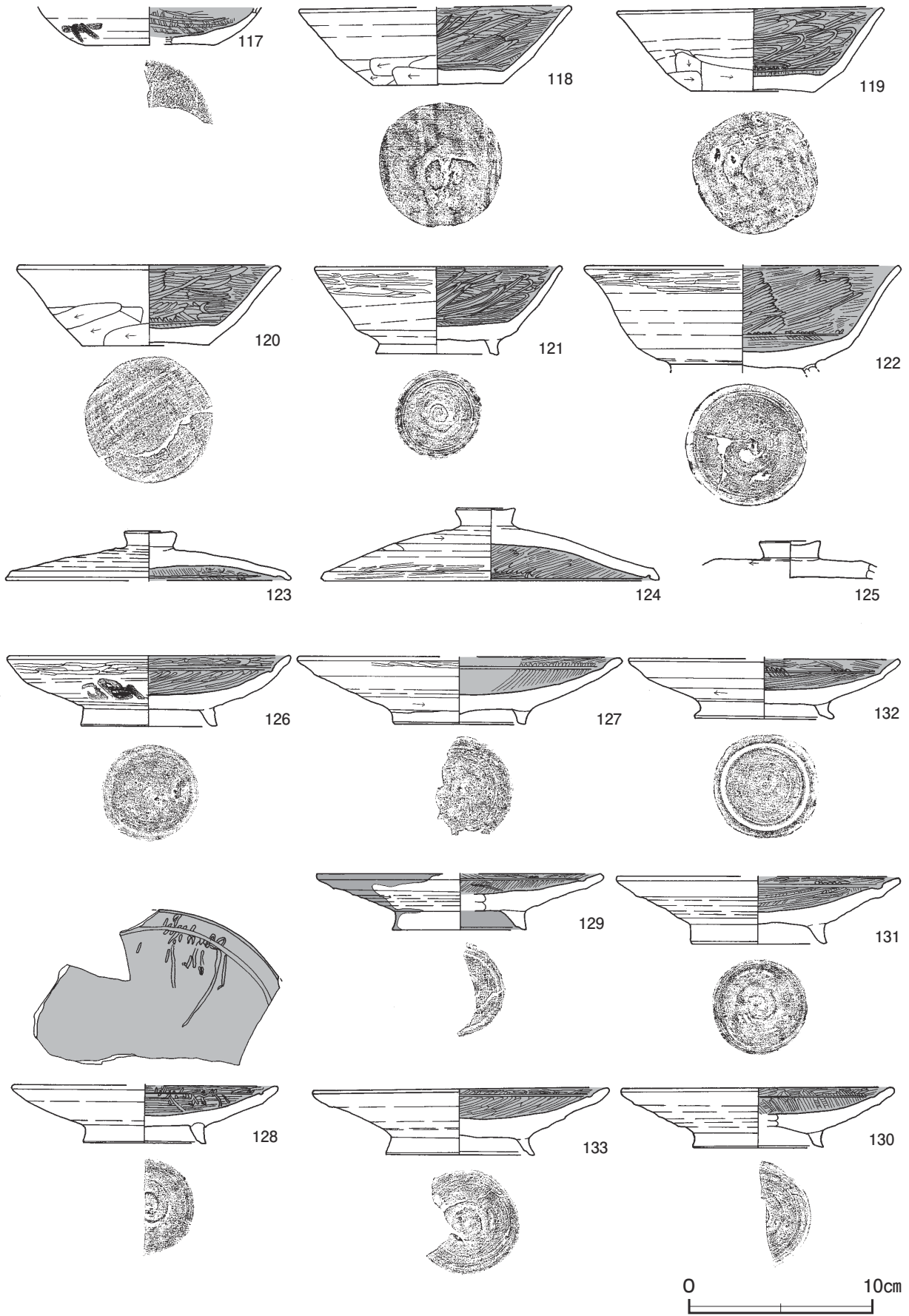
**覆土** 11層に分層できる。第1～10層は不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第11層は壁溝の覆土、第12層は貼床の構築土である。

**土層解説**

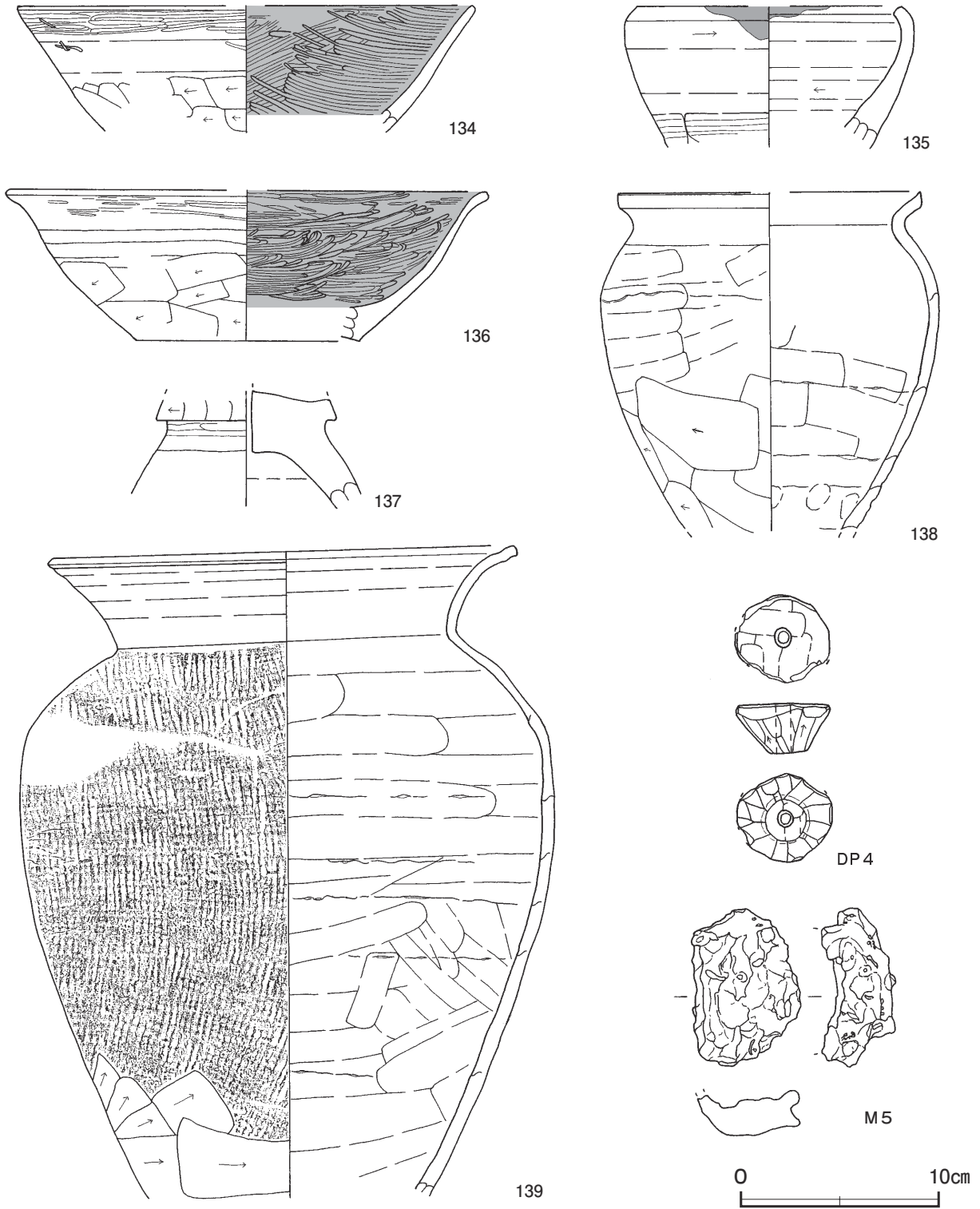
- |        |                       |           |                    |
|--------|-----------------------|-----------|--------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量      | 7 褐色      | ローム粒子中量            |
| 2 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック少量      | 8 黒色      | 粘土ブロック少量           |
| 3 暗褐色  | ロームブロック中量             | 9 にぶい黄褐色  | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 4 灰黄褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量    | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量    |
| 5 暗褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色    | ローム粒子微量            |
| 6 灰黄色  | 焼土ブロック・粘土ブロック中量       | 12 褐色     | ロームブロック少量          |

**遺物出土状況** 土師器片 779 点（坏 325・高台付椀 25・蓋 125・皿 59・鉢 4・甕類 241），須恵器片 31 点（坏 11・蓋 1・盤 2・甕類 16・甗 1），土製品 3 点（支脚 1・紡錘車 2），石器 1 点（金床石<sub>9</sub>），椀形滓 1 点（464.0 g）が、全域から出土している。土器などは完形品や接合関係が良好な大型の破片で、多くが中央部東寄りの覆土の中層以下から多く出土していることから、埋め戻しに伴って一括投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第60図 第7号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第61図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第60・61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
117	土師器	坏	-	(2.1)	[7.0]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部二方向の削り	体部内面横・斜位の磨き	覆土中	5% PL36 「井。」墨書
118	土師器	坏	[14.6]	4.2	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 磨き 底部一方向の削り	体部内面横・斜位の磨き 底部内面一方向の磨	覆土下層	50%

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
119	土師器	坏	14.2	4.6	6.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方向の削り 底部内面一方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	90%
120	土師器	坏	14.0	4.3	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方向の削り 底部内面一方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	90%
121	土師器	高台付椀	13.2	4.8	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面横・斜位の磨き 底部高台部貼付 底部内面多方向の磨き	覆土下層	80%
122	土師器	高台付椀	[16.8]	(5.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラナデ内面横・斜位の磨き 底部高台部貼付 底部内面二方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	70%
123	土師器	蓋	[15.2]	2.7	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線	覆土下層	40%
124	土師器	蓋	18.0	3.9	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き 口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土下層	100%
125	須恵器	蓋	-	(2.0)	-	長石・石英・細礫	灰褐	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	20% 堀ノ内窯カ
126	土師器	皿	15.2	3.7	[7.2]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部外面回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土中層	80% PL32 「西門」墨書
127	土師器	皿	[17.2]	3.6	[7.0]	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土中層	30%
128	土師器	皿	[14.1]	2.6	[6.6]	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部内面二方向の磨き 後花弁文状の暗文カ、口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土下層	40%
129	土師器	皿	[15.2]	3.0	7.2	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐	普通	体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土中層	40% 煤付着
130	土師器	皿	14.6	3.2	[7.0]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土下層	50%
131	土師器	皿	[15.2]	3.6	7.2	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土下層	60%
132	土師器	皿	[14.4]	3.2	7.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土中	60%
133	土師器	皿	16.0	3.7	8.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線 底部高台部貼付	覆土下層	60%
134	土師器	鉢	[22.6]	(6.3)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部外面中位以下にヘラ削り 体部内面横・斜位のナデ	覆土下層	30%
135	土師器	鉢	[13.4]	(7.1)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下位横位のナデ 体部内面横ナデ	覆土下層	30% 煤付着
136	土師器	鉢	[23.6]	7.5	[13.1]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部外面中位以下にヘラ削り 体部内面横・斜位のナデ	覆土下層	40%
137	土師器	鉢	-	(5.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部外面横位のナデ 脚部外・内面横ナデ 底部中央に一方向からの穿孔	覆土下層	20%
138	土師器	小形甕	[15.0]	(16.9)	-	長石・石英・細礫	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のナデ 後中位以下にヘラ削り 体部内面横位のナデ 指頭痕	覆土下層	50%
139	須恵器	甕	22.8	(32.5)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面格子目叩き後下端ヘラ削り 体部内面横・斜位のナデ	覆土中層 覆土下層	60% PL35 新治窯

番号	器 種	径	厚さ	孔径	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
DP 4	紡錘車	4.7	2.5	0.7	(34.4)	雲母・赤色粒子・白色粒子	褐灰	土・下面二方向のナデ 側面削り後ナデ	覆土中層	PL40

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 5	椀形滓	7.9	(5.2)	1.8	(464.0)	鉄	全面錆化 一部発泡 ガラス質の滓付着 着磁性なし	覆土中	PL40

## 第8号竪穴建物跡 (第62・63図)

**位置** 調査区中央部のT7f1区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第71号土坑に掘り込まれ、第7号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南部を第71号土坑に掘り込まれることから、東西軸2.75m、南北軸は3.69mしか確認できなかった。第71号土坑の規模から方形と推定でき、主軸方向はN-106°-Eである。壁は高さ24~29cmで、ほぼ直立している。

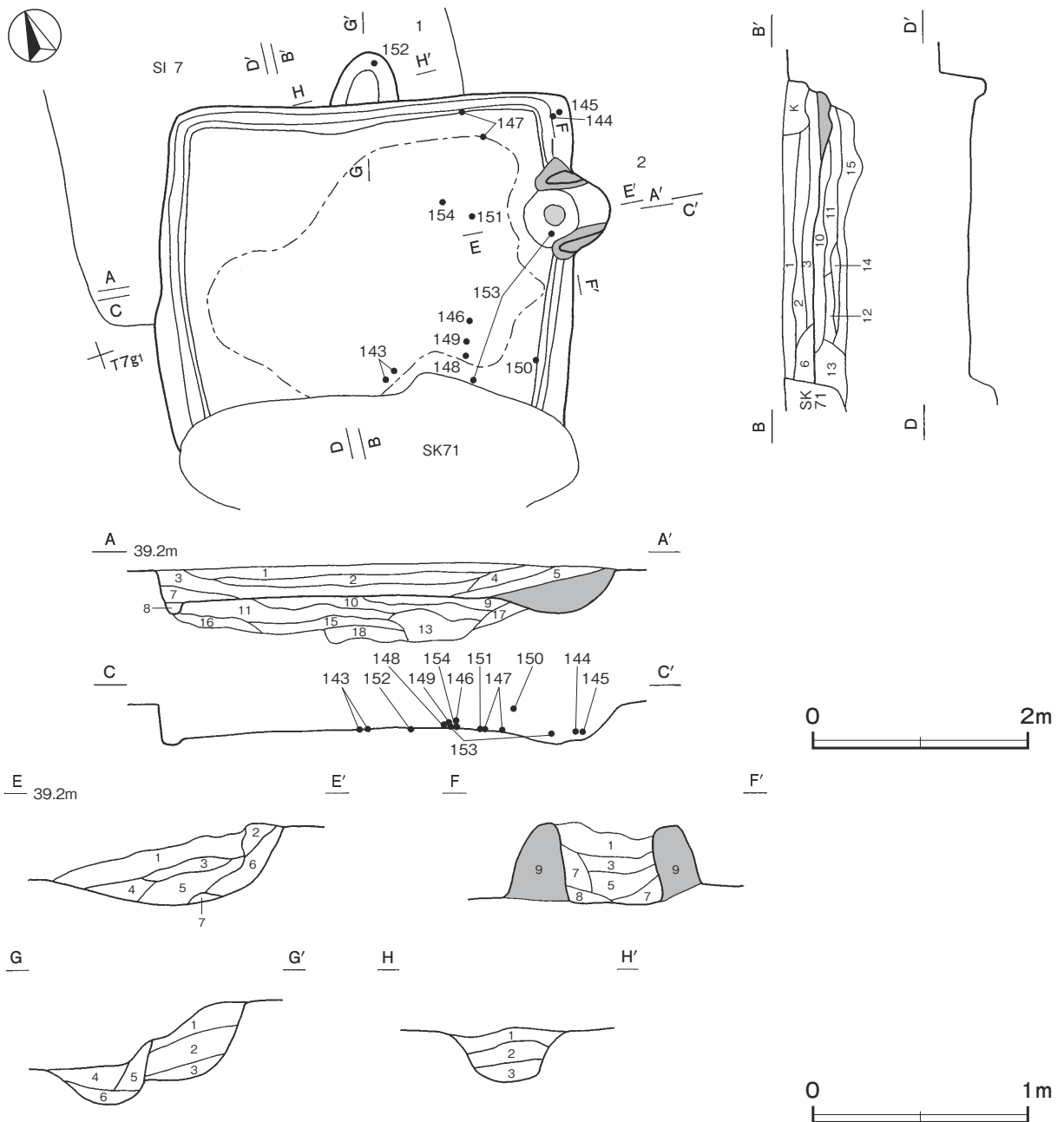
**床** 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第9~18層を22~44cm埋め戻して構築している。壁溝が、竈付近を除いて巡っている。

**竈** 2か所。竈1は北壁の中央部に付設されている。掘方の一部と煙道部のみが確認できた。第6層は掘方への埋土で、層厚12cmである。第4・5層は竈の閉塞に伴う埋土で、第5層で竈を閉塞した後、第4層を貼床面に合わせて14cm埋め戻している。煙道部は壁外に46cm掘り込まれ、外傾している。第1~3層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊された後、埋め戻されている。燃焼部や袖部が壊されている

ことから、竈1から竈2へ作り替えられている。竈2は東壁の北部寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで80cm、燃焼部の幅46cmである。燃焼部は貼床面から深さ14cm掘りくぼめられている。袖部は、床面に第9層を積み上げて構築している。火床面は地山の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第1～8層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。

竈1土層解説

- |                     |                           |
|---------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量  | 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量     |
| 2 赤褐色 焼土ブロック中量      | 5 にぶい黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量           |



第62図 第8号竪穴建物跡実測図

**竈2土層解説**

- |       |                        |        |                |
|-------|------------------------|--------|----------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色  | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量           | 7 暗赤褐色 | 粘土ブロック多量       |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量       | 8 暗褐色  | ローム粒子微量        |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量       | 9 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量       |
| 5 明褐色 | 焼土ブロック多量, 炭化物少量        |        |                |

**覆土** 8層に分層できる。第1～7層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第8層は壁溝の覆土、第9～18層は貼床の構築土である。

**土層解説**

- |          |                  |           |                     |
|----------|------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子微量          | 10 褐色     | ロームブロック少量           |
| 2 暗褐色    | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 11 黒褐色    | ロームブロック中量, 粘土粒子微量   |
| 3 暗褐色    | ローム粒子・粘土粒子少量     | 12 黒褐色    | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色    | 粘土ブロック・焼土粒子少量    | 13 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量           |
| 5 灰黄色    | 粘土ブロック・ローム粒子少量   | 14 暗褐色    | ロームブロック中量, 炭化粒子微量   |
| 6 暗褐色    | 焼土粒子・炭化粒子少量      | 15 褐色     | ロームブロック中量           |
| 7 にぶい黄褐色 | ローム粒子少量          | 16 暗褐色    | ロームブロック中量, 鹿沼バミス微量  |
| 8 黒褐色    | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 17 黄褐色    | ロームブロック多量, 鹿沼バミス微量  |
| 9 暗褐色    | ロームブロック中量        | 18 暗褐色    | ロームブロック・鹿沼バミス少量     |

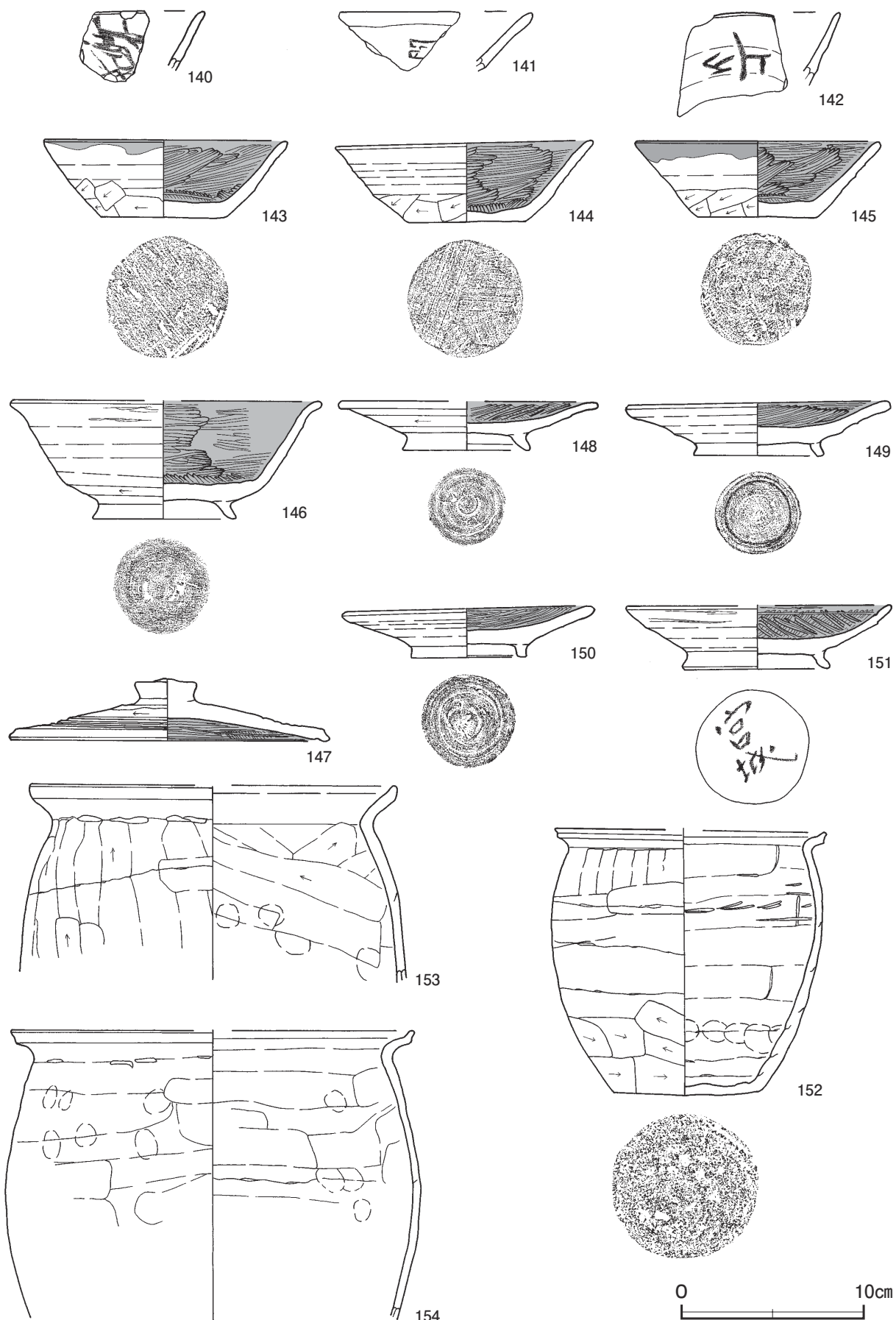
**遺物出土状況** 土師器片 1588点 (坏 732・高台付碗 65・蓋 120・皿 36・鉢 23・甕類 611・不明 1), 須恵器片 144点 (坏 26・高台付坏 1・蓋 1・甕類 115・甗 1), 土製品 1点 (紡錘車), 金属製品 1点 (刀子), 鉄滓 1点 (32.6g) が、主に東半分の壁際付近から出土している。土器などは接合関係が良好な大型や中型の破片で、多くが覆土中層以下から斜位や逆位などの状態で出土していることから、埋没の早い段階で一括投棄されたものと考えられる

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できるが、第7号竪穴建物跡よりは新しい土器群といえる。

**第8号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第63図)**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
140	土師器	坏	-	(3.1)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 「城」墨書
141	土師器	坏	-	(3.2)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 「□」墨書
142	土師器	坏	-	(3.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 「□□」墨書
143	土師器	坏	13.0	4.2	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方向の削り 底部内面一方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	90%
144	土師器	坏	13.8	4.4	6.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部多方向の削り 底部内面二方向の磨き	覆土下層	90%
145	土師器	坏	13.2	4.1	6.3	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方向の削り 底部内面多方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	90%
146	土師器	高台付碗	[16.6]	6.4	7.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	赤褐色	普通	体部下端一方向のナデ 体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き	覆土中層	70%
147	土師器	蓋	[17.2]	3.3	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	普通	天井部回転ヘラ削り 体部外面に5条の沈線 体部内面二方向の磨き, 口縁部に沿って円状のナデ沈線	覆土下層	50%
148	土師器	皿	[13.7]	2.7	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面中位以下回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き	床面	50%
149	土師器	皿	14.1	3.0	6.9	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	ロクロナデ 体部内面二方向の磨き	覆土下層	70% PL31
150	土師器	皿	13.5	2.8	6.2	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	ロクロナデ 体部内面二方向の磨き	覆土中層	100%
151	土師器	皿	[14.0]	3.5	7.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き 口唇部に沿って円状のナデ沈線	床面	60% PL32 「宮城」墨書
152	土師器	小形甕	[14.5]	14.5	8.0	石英・雲母・細礫	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後横位のナデ, 下端ヘラ削り 体部内面横位のナデ 指頭痕 底部多方向のナデ	竈1 覆土中	80%
153	土師器	甕	[19.6]	(10.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ 体部内面斜位のナデ 指頭痕 輪積み痕	竈2 覆土中・覆土下層	30%
154	土師器	甕	[21.6]	(15.5)	-	石英・雲母・白色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面横位のナデ 指頭痕 輪積み痕	覆土下層	30%





第 63 图 第 8 号竖穴建物跡出土遺物実測図

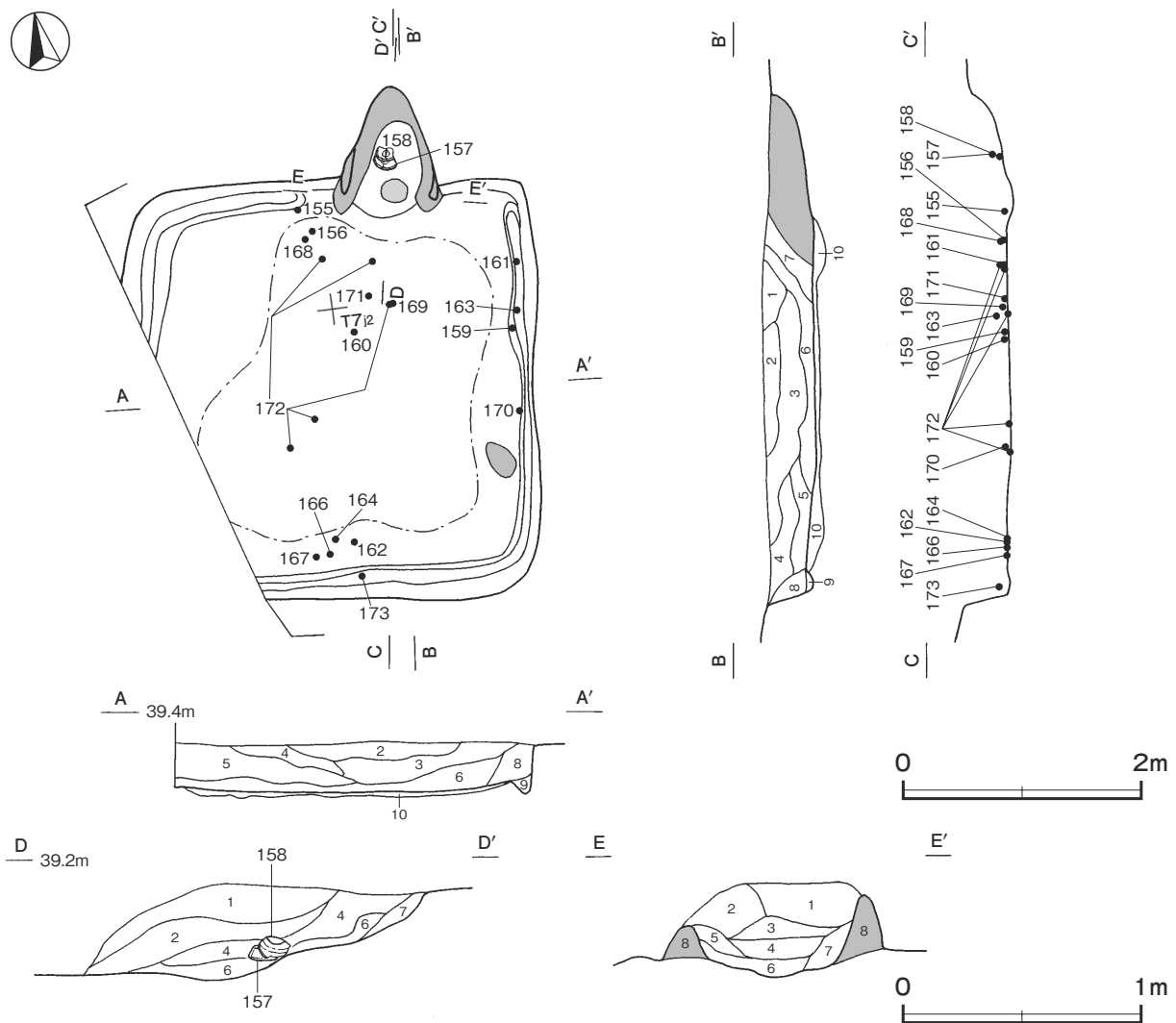
第9号竪穴建物跡 (第64～66図)

**位置** 調査区南東部のT7j2区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 南西部が調査区域外に延びているが, 長軸3.46m, 短軸3.38mの方形と判断できる。主軸方向はN-6°-Eである。壁は高さ26~30cmで, 直立している。

**床** 平坦な貼床で, コーナー部と壁際を除いて踏み固められている。貼床は, 第10層を2~20cm埋め戻して構築している。東壁際の南寄りに粘土塊が確認できた。竈の補修材の補管などが考えられるが, 不明である。確認できた部分では, 壁溝が竈付近を除いて巡っている。

**竈** 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで108cm, 燃烧部の幅50cmである。燃烧部は床面から深さ6cm掘りくぼめられている。袖部は, 床面の上面に第8層を積み上げて構築している。火床面は地山の上面で, 火熱を受け赤変硬化している。157・158は床面に接して逆位で, 重ねられて置かれていた。火熱を受けていないことから, 竈祭祀の可能性はあるが, 不明である。煙道部は壁外に82cm掘り込まれ, 火床部から緩やかに立ち上がっている。第3~7層は焼土ブロックや粘土ブロックなどが混在している層位もあることから, 壊されている。第1・2層は竈廃絶後の覆土である。



第64図 第9号竪穴建物跡実測図

竈土層解説

- |       |                    |        |                     |
|-------|--------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量   | 5 黒褐色  | ロームブロック微量           |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量   | 6 赤褐色  | 粘土ブロック多量, ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量 | 7 黒褐色  | 粘土ブロック少量, 炭化物微量     |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック微量 | 8 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量            |

覆土 9層に分層できる。第1～8層はロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第9層は壁溝の覆土、第10層は貼床の構築土である。

土層解説

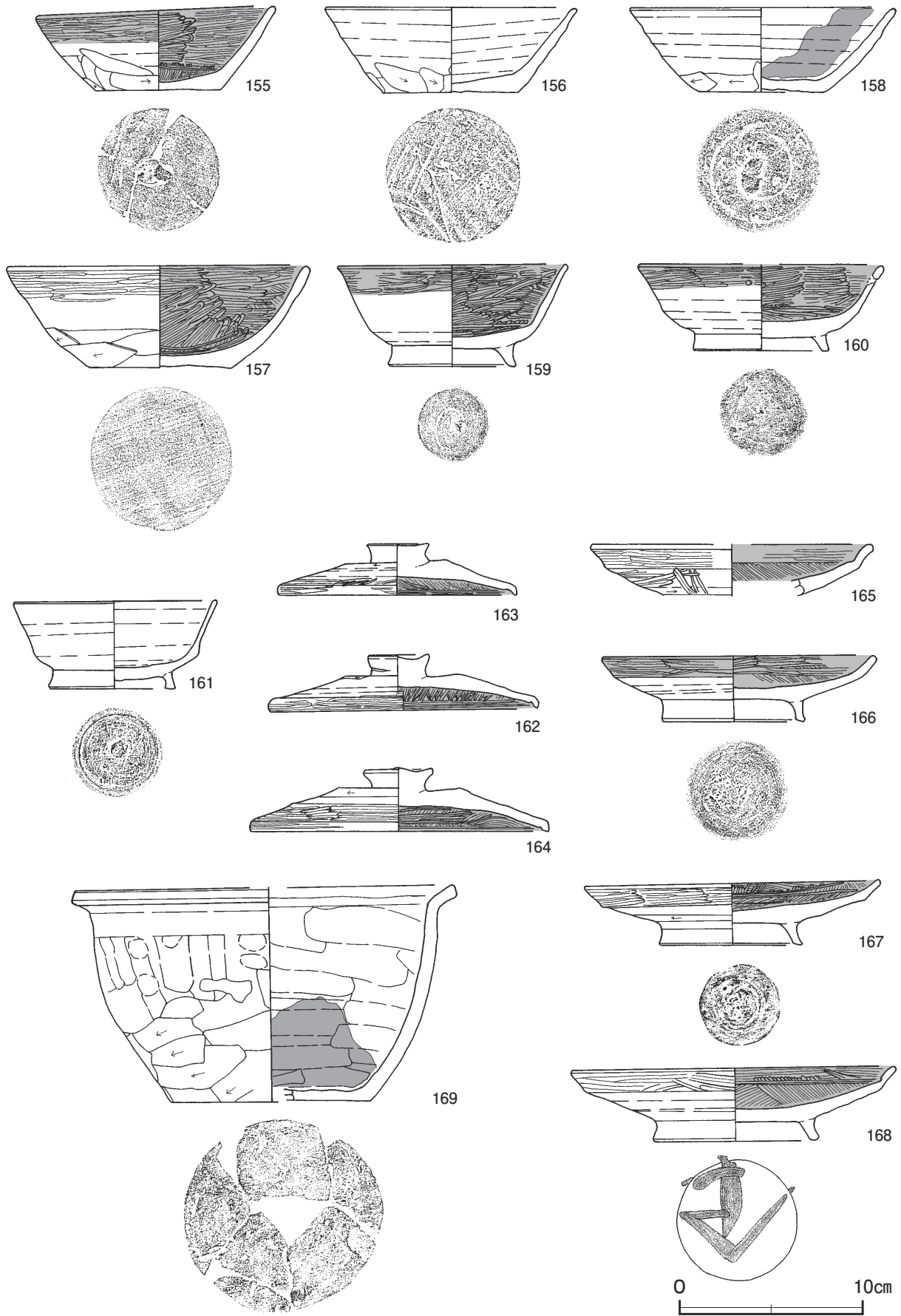
- |          |                     |           |                     |
|----------|---------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量           | 6 におい黄褐色  | ロームブロック・焼土ブロック少量    |
| 2 暗褐色    | ロームブロック中量           | 7 暗褐色     | ロームブロック少量, 焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色    | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 8 におい黄褐色  | ローム粒子中量, 焼土ブロック微量   |
| 4 におい黄褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 9 黒褐色     | ロームブロック少量           |
| 5 黄褐色    | ロームブロック中量           | 10 におい黄褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量    |

遺物出土状況 土師器片 502点 (坏130・高台付碗28・蓋12・皿57・鉢2・甕類272・三足火舎香炉1), 須恵器片21点 (坏13・高台付坏3・蓋2・鉢1・甕類2), 金属製品1点 (鏃) のほか, 土師質土器片1点 (内耳鍋) が, 主に竈前方部から中央部を中心として, 全域に散在した状態で出土している。土器などは接合関係が良好な大型や中型の破片で, 多くが覆土下層から斜位や逆位などの状態で出土していることから, 埋め戻しに伴って一括投棄されたものと考えられる。

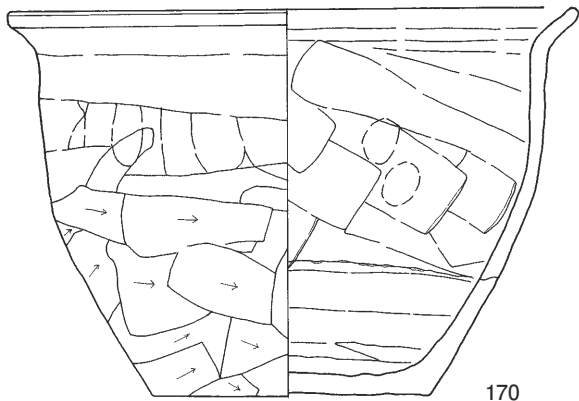
所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。

第9号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第65・66図)

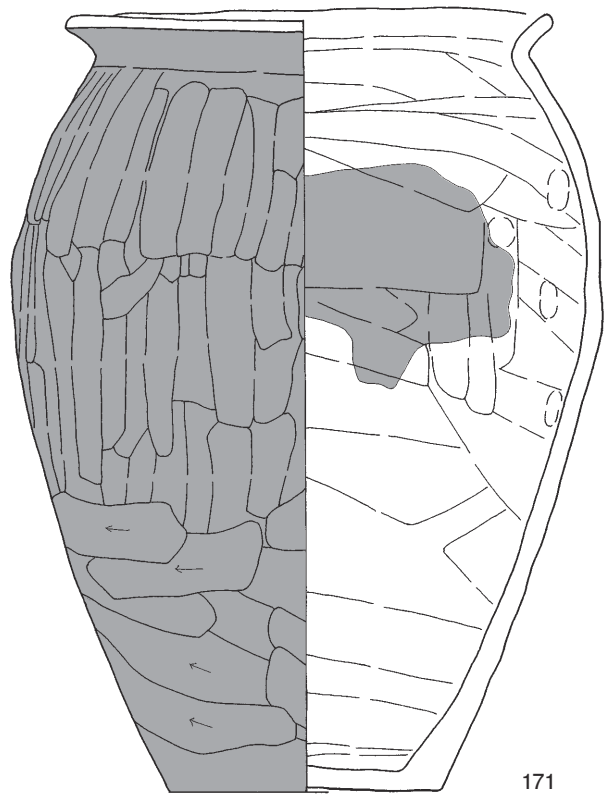
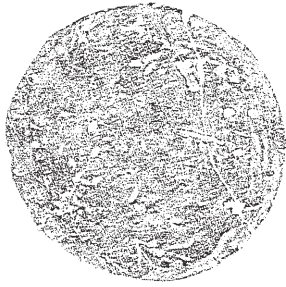
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
155	土師器	坏	12.6	4.5	6.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り体部内面横位の磨き 底部一方向の削り 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	90%
156	土師器	坏	13.4	4.6	7.3	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向の削り	覆土下層	100%
157	土師器	坏	16.2	5.5	7.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り体部内面横・斜位の磨き 底部一方向の削り 底部内面体部から連続する磨きの後一方向の磨き	竈床面	80%
158	須恵器	坏	14.1	4.5	6.7	石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削りを残す多方向のナデ	竈床面	80% 新治窯 煤付着
159	土師器	高台付碗	12.2	5.5	6.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	95%
160	土師器	高台付碗	[13.0]	4.6	7.2	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面横位の磨き 底部高台部貼付後ナデ 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土下層	60% 体部に穿孔
161	須恵器	高台付坏	10.8	4.7	6.7	長石・石英・黒色粒子	褐灰	良好	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り	覆土下層	100% PL34 堀ノ内窯
162	土師器	蓋	14.3	3.0	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい赤褐	普通	天井部回転ヘラ削り 口縁部外・内面横位の磨き 体部内面一方向の磨き, 口縁部に沿って円状のナデ沈線	覆土下層	90%
163	土師器	蓋	12.8	2.8	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい褐	普通	天井部回転ヘラ削り後摘み部貼付 口縁部外・内面横位の磨き 体部内面一方向の磨き, 口縁部に沿って円状のナデ沈線	覆土下層	100%
164	土師器	蓋	16.0	3.4	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい赤褐	普通	体部外面中位から天井部回転ヘラ削り, 摘み部貼付 口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き, 口縁部に沿って円状のナデ沈線	覆土下層	100%
165	土師器	皿	[15.0]	(2.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部外面下端回転ヘラ削り, 二方向の磨き 体部内面一方向の磨き, 口唇部に沿って円状のナデ沈線	覆土中	30%
166	土師器	皿	14.5	3.6	7.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部外面口縁部ナデ 体部内面一方向の磨き, 口唇部に沿って多量のナデ沈線	覆土下層	95%
167	土師器	皿	15.8	3.3	7.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部外面下端回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き, 口唇部に沿って二条のナデ沈線	覆土下層	100%
168	土師器	皿	17.3	3.9	8.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部外面下端口縁部ナデ 体部内面二方向の磨き, 口唇部に沿って二条のナデ沈線	覆土下層	90% PL32 「□」墨書
169	土師器	鉢	[20.3]	11.5	10.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ後中位以下ヘラ削り 体部内面横位のナデ 底部多方向のナデ	覆土下層	80% 煤付着
170	土師器	鉢	22.3	15.4	11.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ後中位以下ヘラ削り 体部内面横・斜位のナデ 底部多方向のナデ	覆土下層	90%
171	土師器	甕	19.0	31.2	10.8	石英・雲母・赤色粒子	におい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦ナデ後下に削り 体部内面縦・横位のナデ 底部外面網代痕ナデ消し 指頭痕	覆土下層	95% PL33 煤付着
172	土師器	甕	20.7	(28.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦ナデ, 中位以下に削り後磨き 体部内面縦・横位のナデ	覆土下層	80% 煤付着
173	土師器	三足火舎香炉	-	(13.1)	(5.5)	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい橙	普通	脚部表面ナデ後磨き 粘土紐巻き上げ	覆土下層	5%



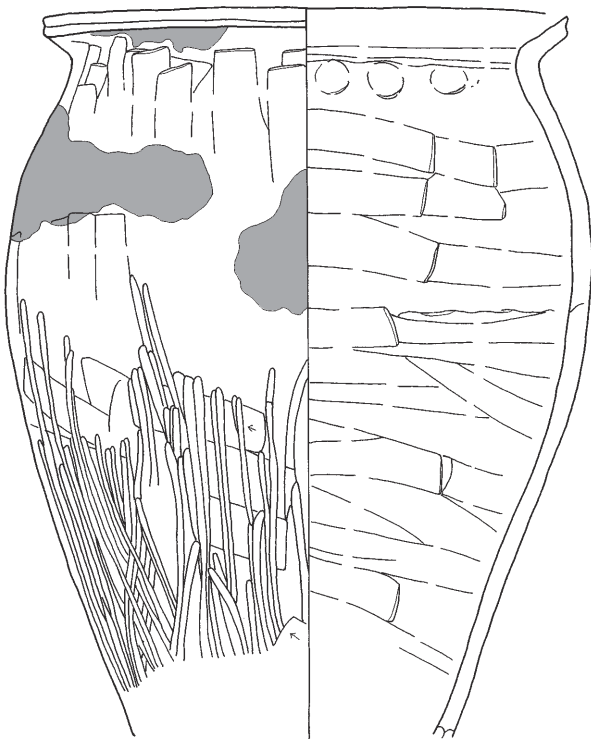
第 65 図 第 9 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



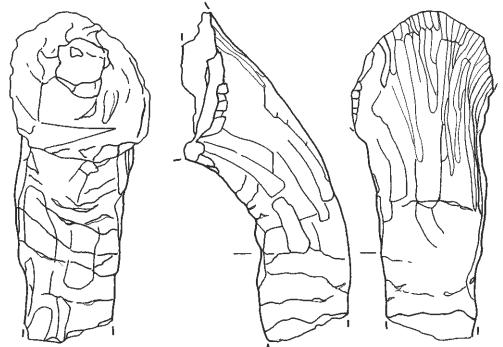
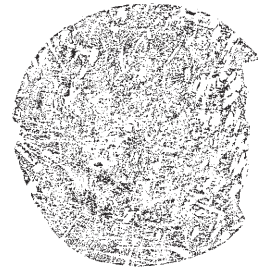
170



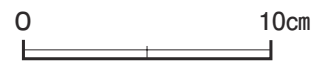
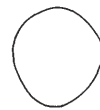
171



172



173



第 66 图 第 9 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

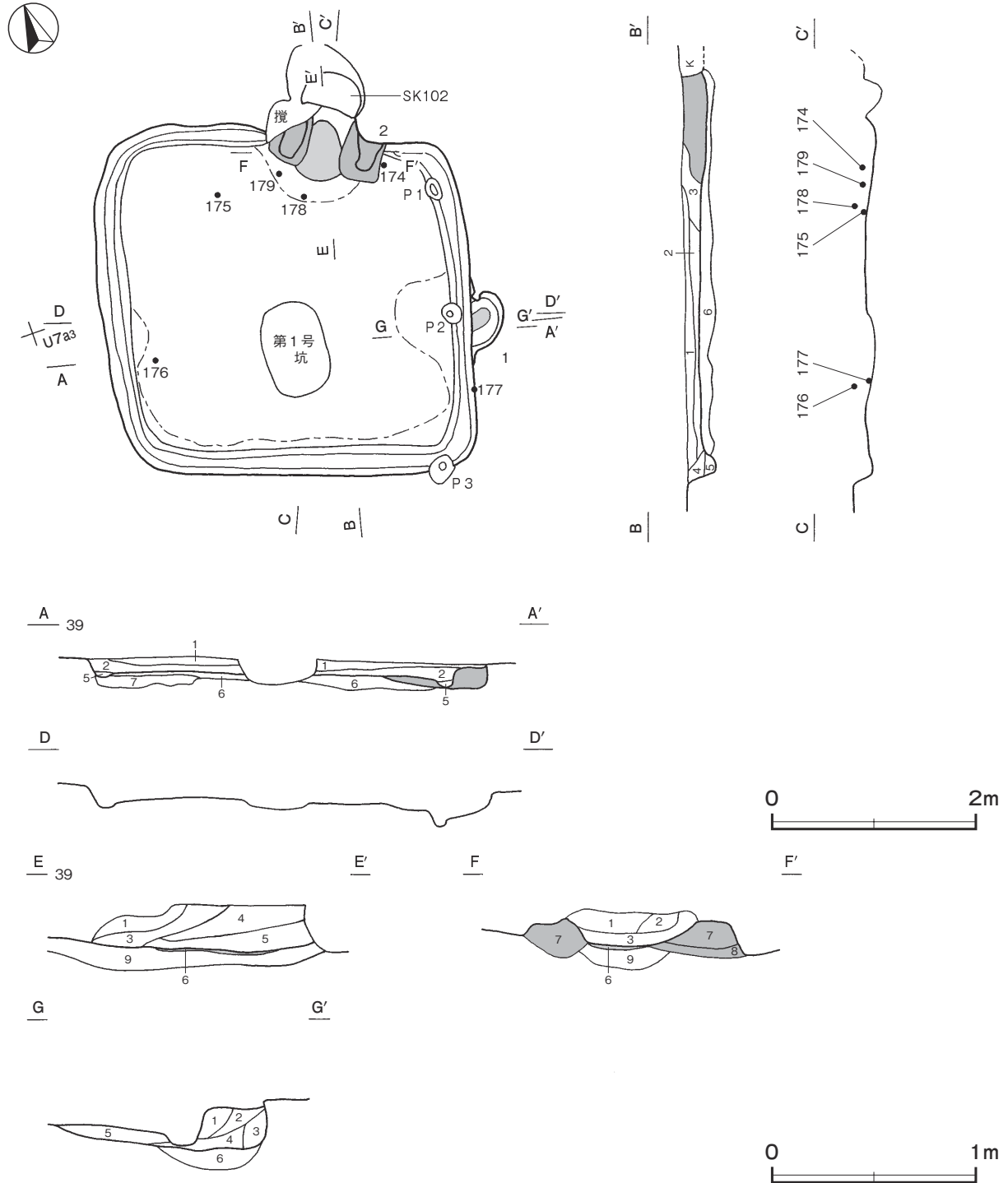
第10号竪穴建物跡（第67・68図）

位置 調査区中央部のT7j3区，標高39mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号墓坑，第102号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.60m，短軸3.38mの方形で，主軸方向はN-16°-Eである。壁は高さ15~18cmで，ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で，南壁際と竈周辺を除いて，踏み固められている。貼床は，第6・7層を6~22cm埋め戻して構築している。壁溝が，竈付近を除いて巡っている。



第67図 第10号竪穴建物跡実測図

**竈** 2か所。竈1は東壁中央部の南寄りに付設されている。掘方と火床面の一部、煙道部のみが確認できた。第6層は掘方への埋土で、層厚10cmである。袖部は、確認できなかったが、火床面は一部残存しており、第6層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。第5層は竈の廃絶後の埋土で、貼床面に合わせて14cm埋め戻されている。煙道部は壁外に46cm掘り込まれ、ほぼ直立している。第1～4層は焼土ブロックが混在していることから、壊された後、埋め戻されている。燃焼部や袖部が壊されていることから、竈1から竈2へ作り替えられている。竈2は北壁中央部の東寄りに構築されている。煙道部の先端部に攪乱を受けていることから、焚口部から煙道部まで72cmしか確認できなかった。燃焼部の幅33cmである。燃焼部は貼床面から深さ30cm掘りくぼめられ、第9層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第9層の上面に第7・8層を積み上げて構築している。火床面は第8・9層の上面で火熱を受け、赤変硬化した第6層を形成している。煙道部の壁外への掘り込み方や、火床部からの断面形状は不明である。第1～5層は天井部材や内壁の崩落土と考えられることから、自然に崩落している。

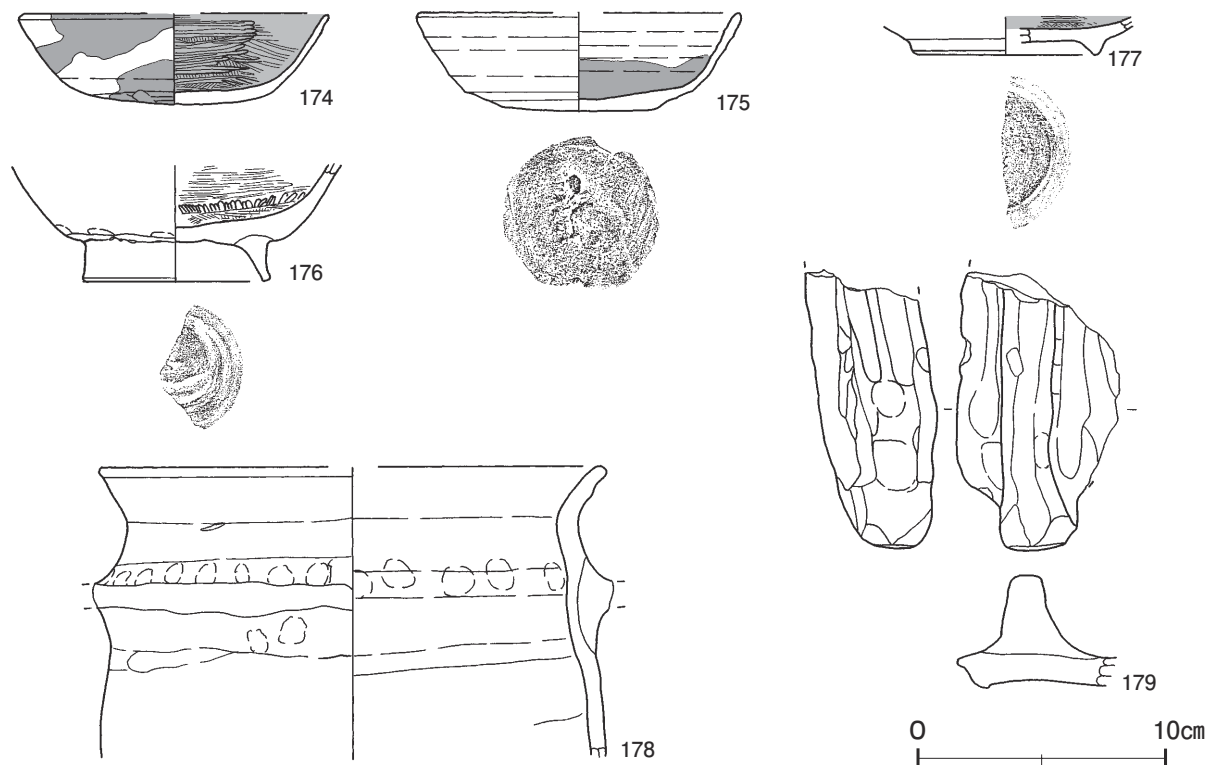
**竈1土層解説**

- |          |                         |          |                     |
|----------|-------------------------|----------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 | 4 灰赤褐色   | 焼土ブロック・粘土ブロック中量     |
| 2 明赤褐色   | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量      | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量    |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量     | 6 にぶい橙色  | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 |

**竈2土層解説**

- |          |                     |          |                     |
|----------|---------------------|----------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量    | 6 暗赤褐色   | 焼土ブロック中量, 炭化物微量     |
| 2 褐灰色    | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量  | 7 褐灰色    | 粘土ブロック多量, ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色    | ロームブロック・粘土ブロック少量    | 8 灰黄褐色   | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック中量  |
| 4 灰黄褐色   | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量  | 9 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量           |
| 5 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |          |                     |

**ピット** 3か所。東壁際と南東コーナー部で確認できた。貼床面及び壁面からの深さは10～17cmで、壁材の支柱と考えられるが、不明である。



第68図 第10号竪穴建物跡出土遺物実測図

**覆土** 5層に分層できる。第1～4層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第5層は壁溝の覆土、第6・7層は貼床の構築土である。

**土層解説**

- |          |                         |       |           |
|----------|-------------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック・焼土粒子少量          | 5 黒褐色 | ローム粒子少量   |
| 2 黒褐色    | ロームブロック少量               | 6 褐色  | ロームブロック中量 |
| 3 褐色     | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量                 |       |           |

**遺物出土状況** 土師器片319点(坏124・高台付椀18・蓋7・皿2・甕類166・羽釜1・置竈1)、須恵器片26点(坏2・高台付坏1・蓋6・甕類17)、土製品1点(環状土錘)、鉄滓1点(34.2g)が、主に竈周辺から出土している。土器は小型の破片が多く、接合関係が乏しいことから、埋没の過程で破損した土器が投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。

第10号竪穴建物跡出土遺物観察表(第68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
174	土師器	坏	[12.1]	3.6	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端一方向のナデ 体部内面底部から連続する縦位の磨き後横位の磨き 底部ヘラ切り後ナデ 底部内面多方向の磨き	覆土下層	40% 煤附着
175	須恵器	坏	[12.8]	3.9	6.3	長石・石英・細礫	にぶい黄褐	普通	ロクロナデ 底部多方向のナデ	覆土下層	70% 煤附着 PL34
176	土師器	高台付椀	-	(4.6)	[7.6]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端一方向のナデ 体部内面横位の磨き 底部内面多方向の磨き	覆土下層	30%
177	土師器	高台付椀	-	(1.5)	[7.0]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 指頭痕、体部内面横位の磨き 底部高台削り出し 底部内面多方向の磨き	覆土下層	10%
178	土師器	羽釜	[20.0]	(11.6)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面銹部貼付後ナデ 指頭痕 体部内面横ナデ 指頭痕	覆土下層	20% PL33
179	土師器	置竈	-	(11.0)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部外面焚口部貼付後ヘラナデ	覆土下層	5%

**第11号竪穴建物跡(第69・70図)**

**位置** 調査区中央部のT6b0区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長軸2.64m、短軸2.40mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁は高さ25～30cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第12～16層を8～20cm埋め戻して構築している。壁溝が、竈の東部を除いて巡っている。

**竈** 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで93cm、燃焼部の幅46cmである。燃焼部は、床面から深さ16cm掘りくぼめられている。袖部は、床面に第8層を積み上げて構築している。煙道部は壁外に58cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がってから、ほぼ直立している。火床面は地山の上面で、火熱を受け赤変硬化している。第1～7層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、壊されている。

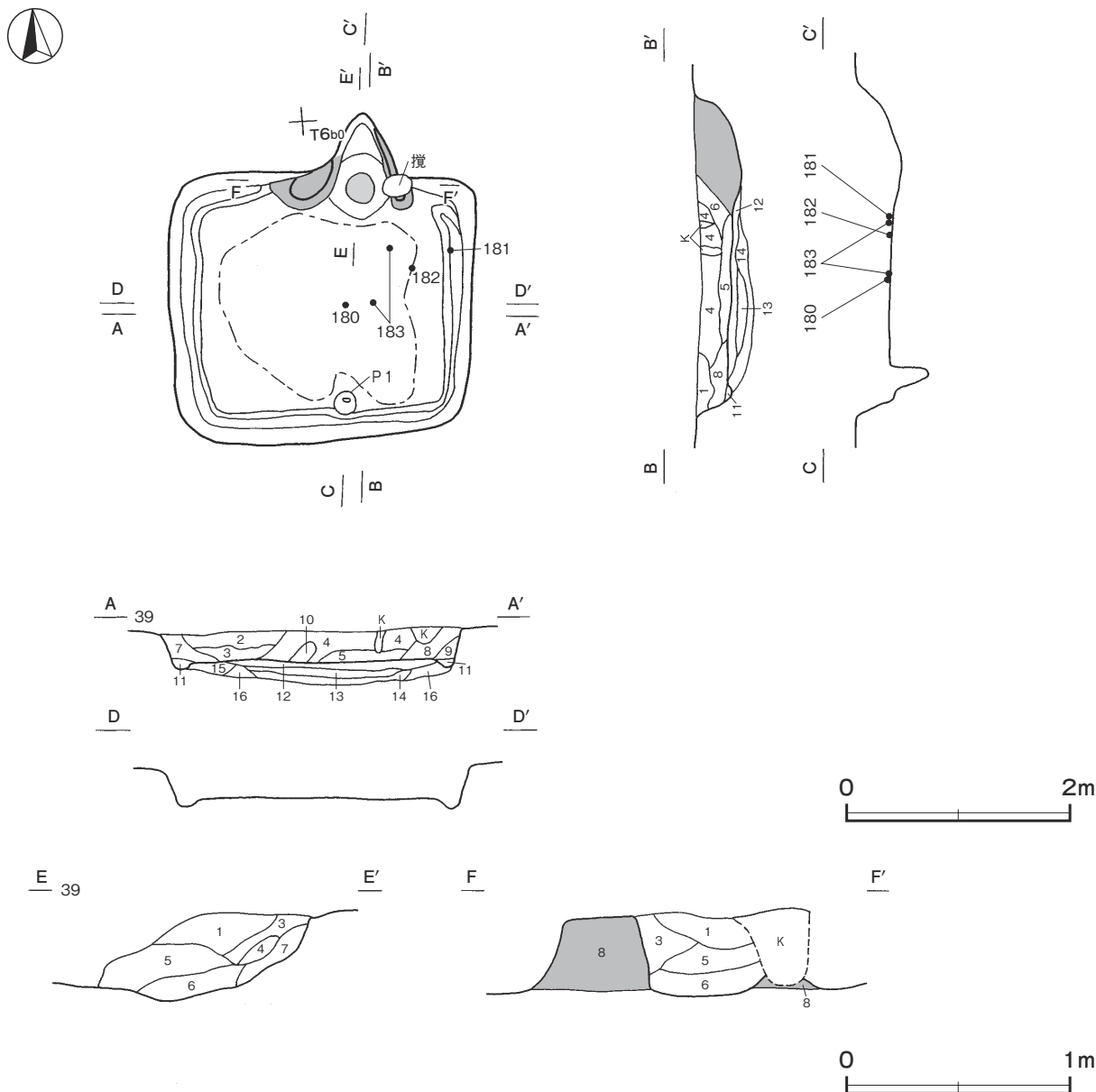
**竈土層解説**

- |       |                  |          |                    |
|-------|------------------|----------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量     | 5 暗褐色    | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量     | 6 暗褐色    | 炭化物少量、焼土ブロック微量     |
| 3 黒色  | 焼土ブロック中量、炭化物微量   | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 8 灰黄褐色   | 粘土ブロック多量、焼土ブロック微量  |

**ピット** P1は深さ36cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 11層に分層できる。第1～10層はロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第11層は壁溝の覆土、第12～16層は貼床の構築土である。





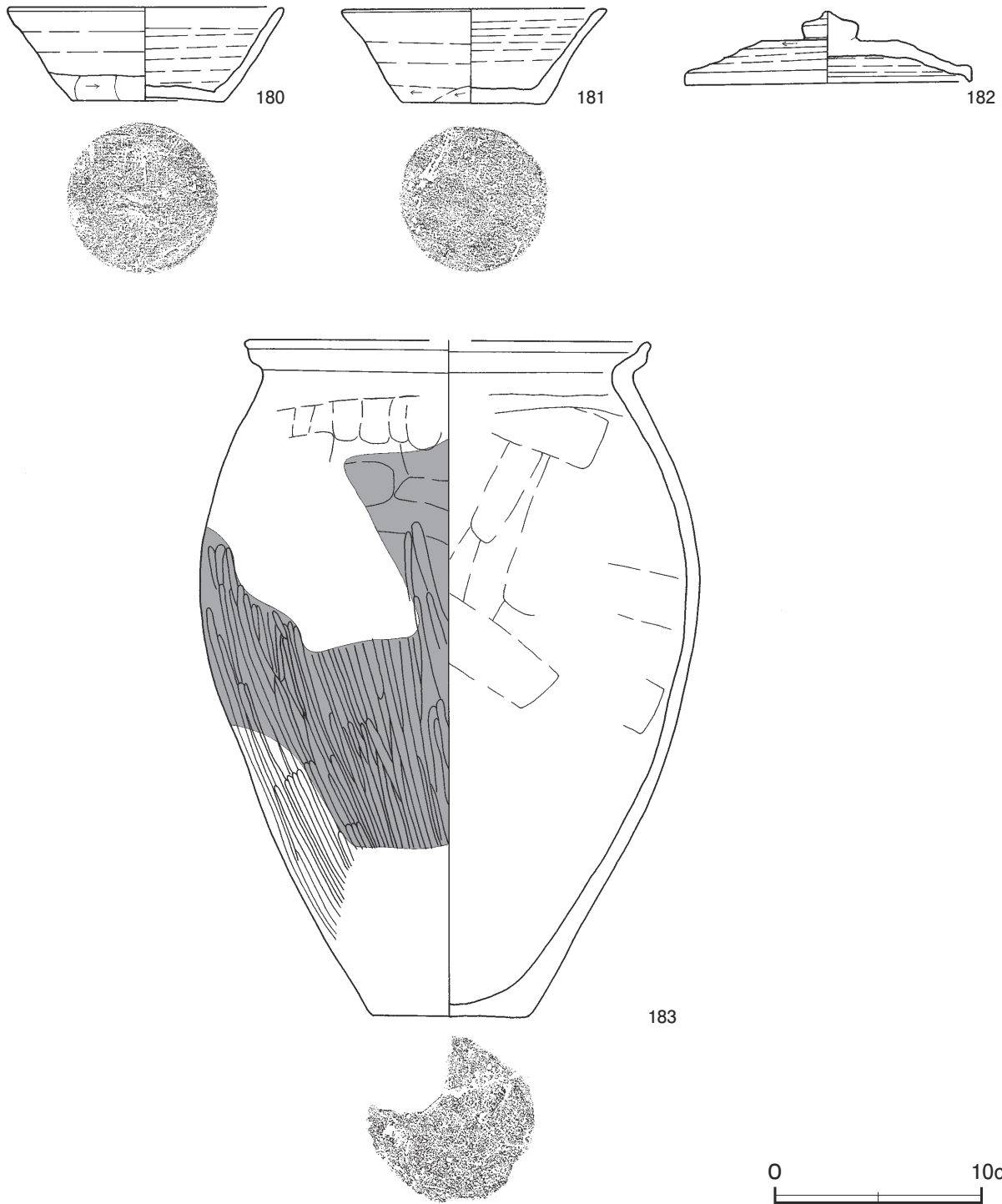
第 69 図 第 11 号竪穴建物跡実測図

土層解説

- |          |                  |           |                      |
|----------|------------------|-----------|----------------------|
| 1 暗 褐 色  | ロームブロック少量        | 9 暗 褐 色   | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量 |
| 2 黒 褐 色  | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 10 灰黄褐色   | ロームブロック多量, 炭化物微量     |
| 3 黒 褐 色  | ローム粒子少量          | 11 褐 色    | ローム粒子少量              |
| 4 暗 褐 色  | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 12 褐 色    | ローム粒子微量              |
| 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量        | 13 暗 褐 色  | ロームブロック中量, 焼土粒子微量    |
| 6 暗 褐 色  | 粘土ブロック少量, 焼土粒子微量 | 14 褐 色    | 粘土ブロック少量, 焼土粒子微量     |
| 7 褐 色    | ロームブロック少量        | 15 褐 色    | ロームブロック少量, 炭化物微量     |
| 8 黒 褐 色  | ロームブロック少量        | 16 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量            |

**遺物出土状況** 土師器片 87 点（坏 30・高台付椀 5・蓋 5・皿 4・鉢 1・甕類 41・甌 1），須恵器片 10 点（坏 8・瓶類 2）が，主に北東部下層から床面で出土している。180～182 は完形品や完形品に近い状態で，床面から出土していることから，遺棄されたものと考えられる。このほかの土器片の大多数は，正位や斜位など状態で出土していることや，接合関係が乏しいことから，投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第70図 第11号竪穴建物跡出土遺物実測図

第11号竪穴建物跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
180	須恵器	坏	13.0	4.5	7.3	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向のヘラ削り	床面	95% 堀ノ内窯
181	須恵器	坏	12.5	4.6	7.0	長石・石英・雲母	灰	良好	体部下端手持ちヘラナデ 底部一方向のヘラ削り	床面	90% 新治窯
182	須恵器	蓋	13.6	3.5	-	長石・石英・雲母	暗灰黄	良好	天井部回転ヘラ削り後摘み部貼付 重ね焼痕	床面	100% 新治窯
183	土師器	甕	[19.2]	32.1	7.4	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい 橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ、中位以下に磨き 体部内面横・斜位のナデ 底部多方向のナデ	覆土下層	50% 煤付着

第 13 号 竪穴建物跡 (第 71・72 図)

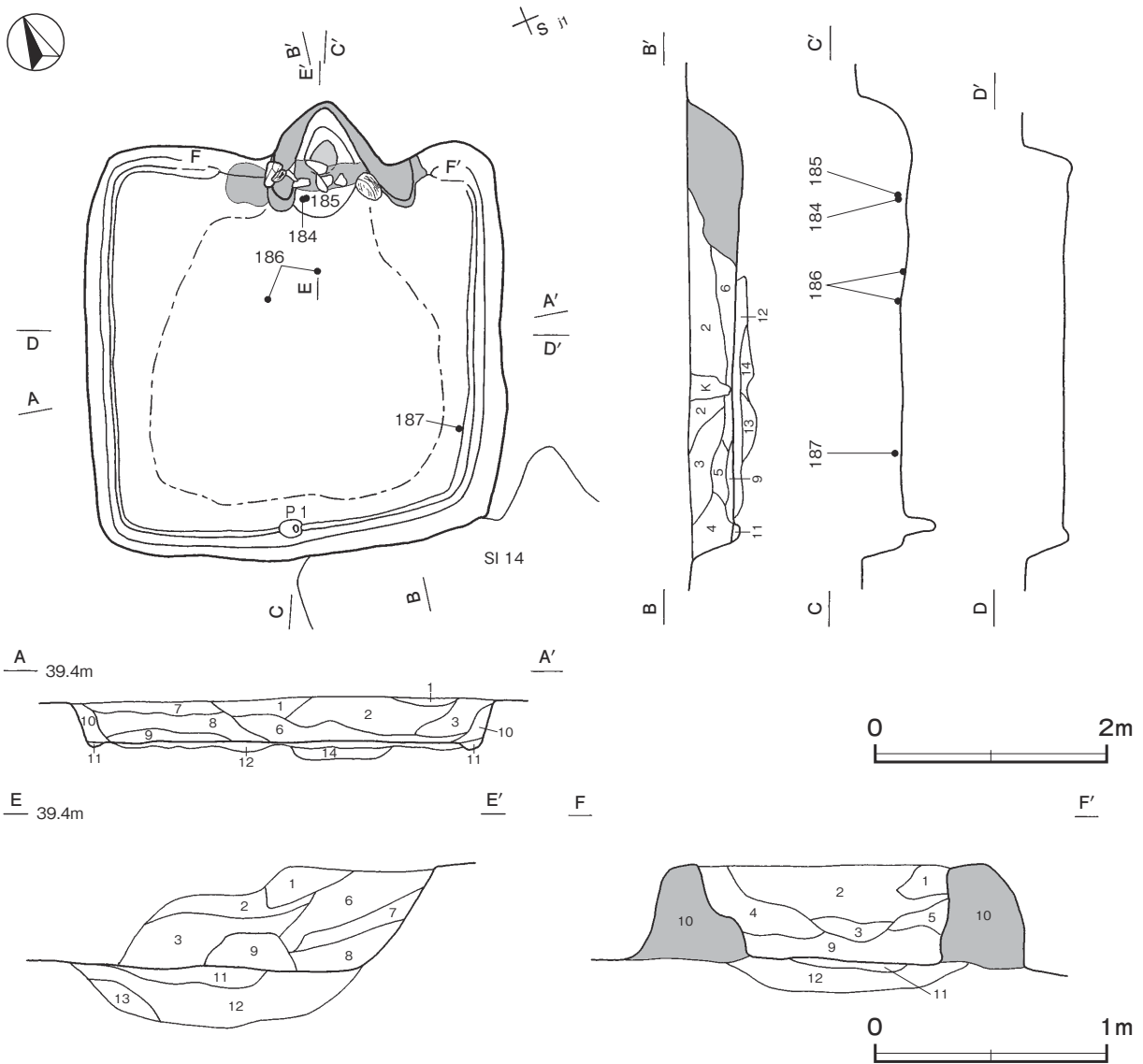
**位置** 調査区中央部の S 6 j0 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 14 号 竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 3.52 m, 短軸 3.48 m の方形で, 主軸方向は N - 28° - E である。壁は高さ 30 ~ 40cm で, ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で, 竈前方部と中央部が踏み固められている。貼床は, 第 12 ~ 14 層を 4 ~ 20cm 埋め戻して構築している。壁溝が, 竈付近を除いて巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで 100cm, 燃焼部の幅 46cm である。燃焼部は, 床面から深さ 30cm 掘りくぼめ, 第 11 ~ 13 層を埋め戻している。袖部は貼床面及び第 12 層の上面に, 第 10 層を積み上げて構築している。火床面は第 11・12 層の上面で, 火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 40cm 掘り込まれ, 火床部から外傾している。第 9 層は粘土ブロックや砂岩の大型破片が多く含まれていることから, 天井部材や懸架材が崩落したものと考えられる。第 1 ~ 8 層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから, 壊されている。



第 71 図 第 13 号 竪穴建物跡実測図

**竈土層解説**

- |        |                     |         |                         |
|--------|---------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色  | 焼土ブロック・炭化物少量        | 8 極暗褐色  | 焼土ブロック・炭化物少量            |
| 2 暗褐色  | 焼土ブロック・粘土ブロック少量     | 9 赤褐色   | 粘土ブロック・砂岩片多量            |
| 3 暗褐色  | 焼土ブロック少量            | 10 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量                |
| 4 暗褐色  | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 11 黒褐色  | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 5 暗褐色  | 粘土ブロック・焼土ブロック少量     | 12 暗褐色  | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量  |
| 6 暗褐色  | 粘土ブロック少量            | 13 黒褐色  | 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物微量     |
| 7 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量, 焼土粒子微量    |         |                         |

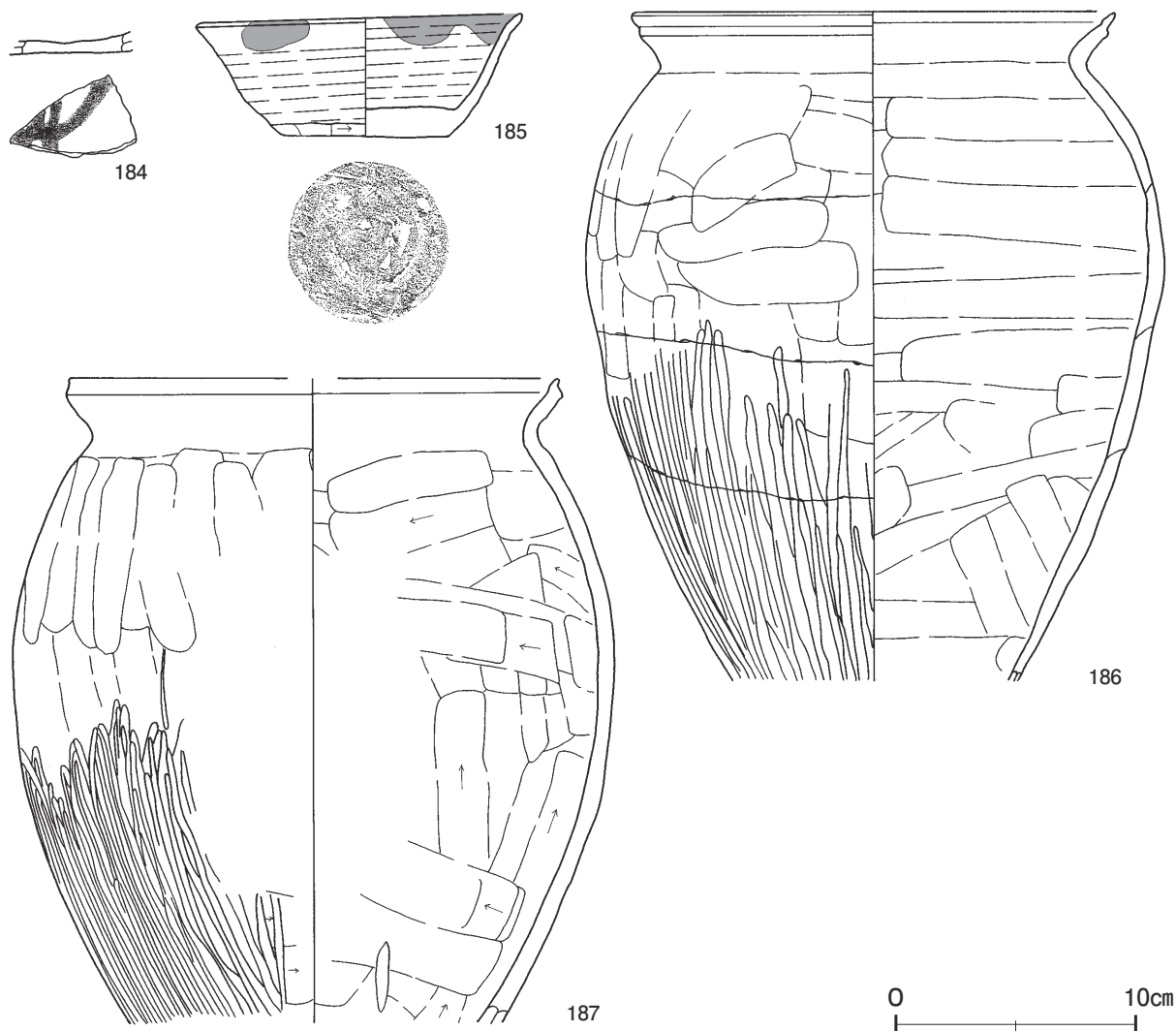
**ピット** P1は深さ28cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 11層に分層できる。第2～10層は不規則な堆積をしていることから埋め戻し土, 第1層は流入土と考えられる。第11層は壁溝の覆土, 第12～14層は貼床の構築土である。

**土層解説**

- |       |                     |           |                         |
|-------|---------------------|-----------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量        | 8 黒褐色     | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量     |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量    | 9 にぶい黄褐色  | ロームブロック中量, 炭化物微量        |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量    | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量               |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量    | 11 黒褐色    | ロームブロック少量               |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量       | 12 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 13 黒褐色    | ロームブロック・焼土粒子少量          |
| 7 暗褐色 | ロームブロック中量           | 14 褐色     | ロームブロック中量               |

**遺物出土状況** 土師器片 238点 (坏3・高台付碗1・甕類234), 須恵器片 54点 (坏43・盤4・瓶類1・甕類



第72図 第13号竪穴建物跡出土遺物実測図

6), 金属製品2点(鉄1・不明1)が, 竈の前方部や南東部壁際の覆土中層から下層にかけて出土している。多くが覆土下層から出土していることから, 埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。185は崩落した竈の天井部材や懸架材に接した焚口周辺部から出土していることから, 竈の廃絶直後に廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。

### 第13号竪穴建物跡出土遺物観察表(第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
184	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部手持ちヘラ削り	覆土下層	5% PL36 新治窯カ [□] 墨書
185	須恵器	坏	13.2	5.1	6.7	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	ロクロナデ 体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削りを残す二方向の削り	覆土下層	95% 堀ノ内窯 煤付着
186	土師器	甕	19.6	(27.5)	-	長石・石英・雲母・ 細礫	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ, 下位にヘラ削り後磨き 体部内面横・斜位のナデ 輪積み痕	覆土下層	60%
187	土師器	甕	[20.0]	(26.5)	-	長石・石英・ 白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ, 下位にヘラ削り後磨き 体部内面縦・横位のナデ	覆土下層	30%

### 第14号竪穴建物跡(第73・74図)

**位置** 調査区中央部のT6a0区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第13号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北西部を掘り込まれているが, 長軸3.62m, 短軸3.44mの方形と推定できる。主軸方向はN-12°-Eである。壁は高さ32~38cmで, ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で, 中央部が踏み固められている。貼床は, 第9層を2~12cm埋め戻して構築している。確認できた部分では, 壁溝が巡っている。

**竈** 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで94cm, 燃焼部の幅46cmである。燃焼部は床面の深さとほぼ同じで, 平坦である。袖部は, 床面に第8層を積み上げて構築している。火床面は地山の上面で, 火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ, 火床部から外傾している。第2~7層は焼土ブロックや粘土ブロックが混在していることから, 壊されている。第1層は建物跡の覆土第5層である。

#### 竈土層解説

- |          |                        |          |                    |
|----------|------------------------|----------|--------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量, 炭化物微量       | 5 黒褐色    | 焼土ブロック・粘土ブロック少量    |
| 2 暗褐色    | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色    | 焼土ブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色    | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック・炭化物微量 | 7 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量    |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量       | 8 灰黄褐色   | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量 |

**ピット** P1は深さ28cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

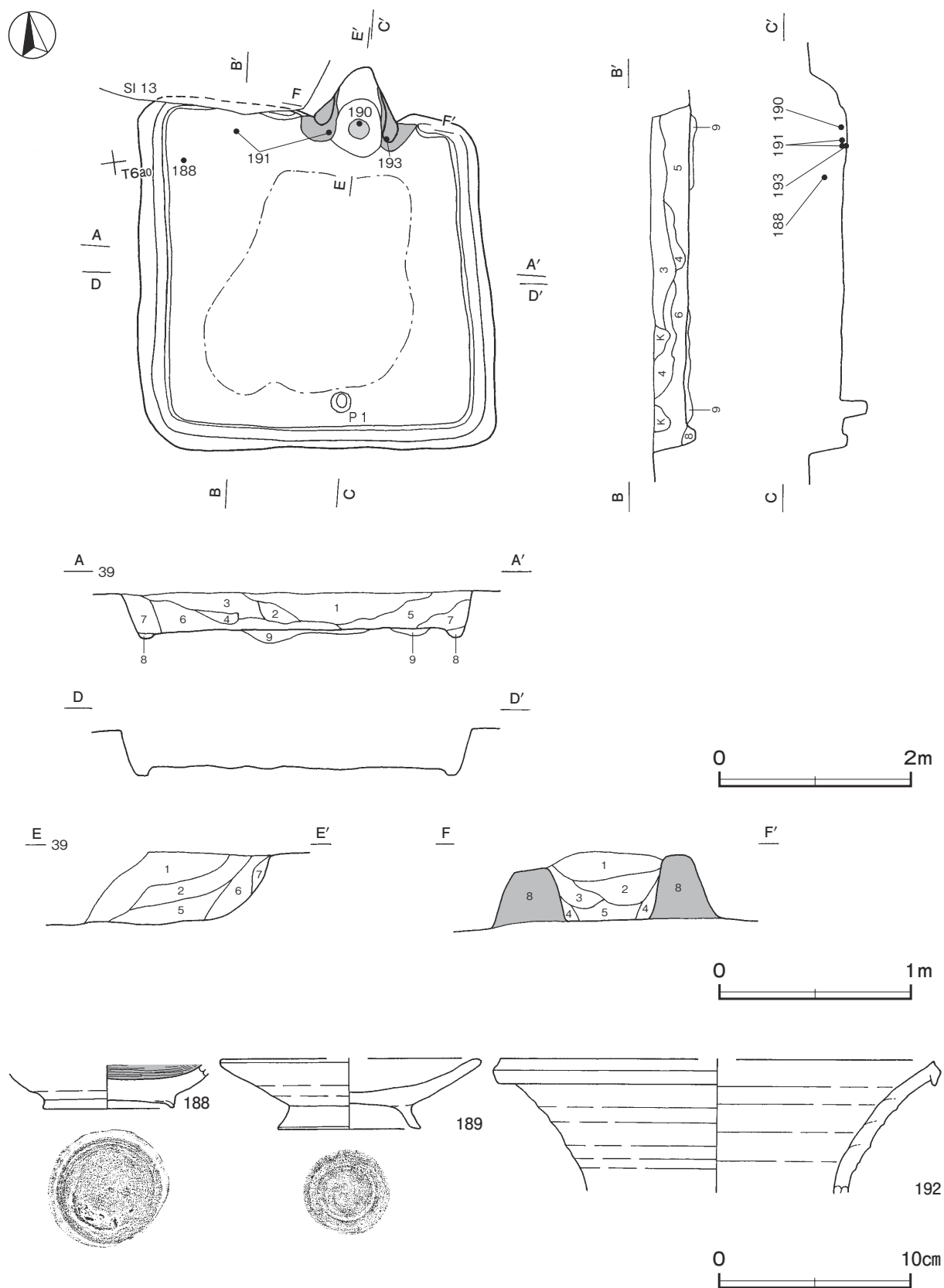
**覆土** 8層に分層できる。第1~7層はロームブロックが含まれた不規則な堆積をしていることから, 埋め戻されている。第8層は壁溝の覆土, 第9層は貼床の構築土である。

#### 土層解説

- |       |                   |          |           |
|-------|-------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量         | 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 7 黒褐色    | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量  | 8 褐色     | ローム粒子微量   |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量         | 9 黄褐色    | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量  |          |           |

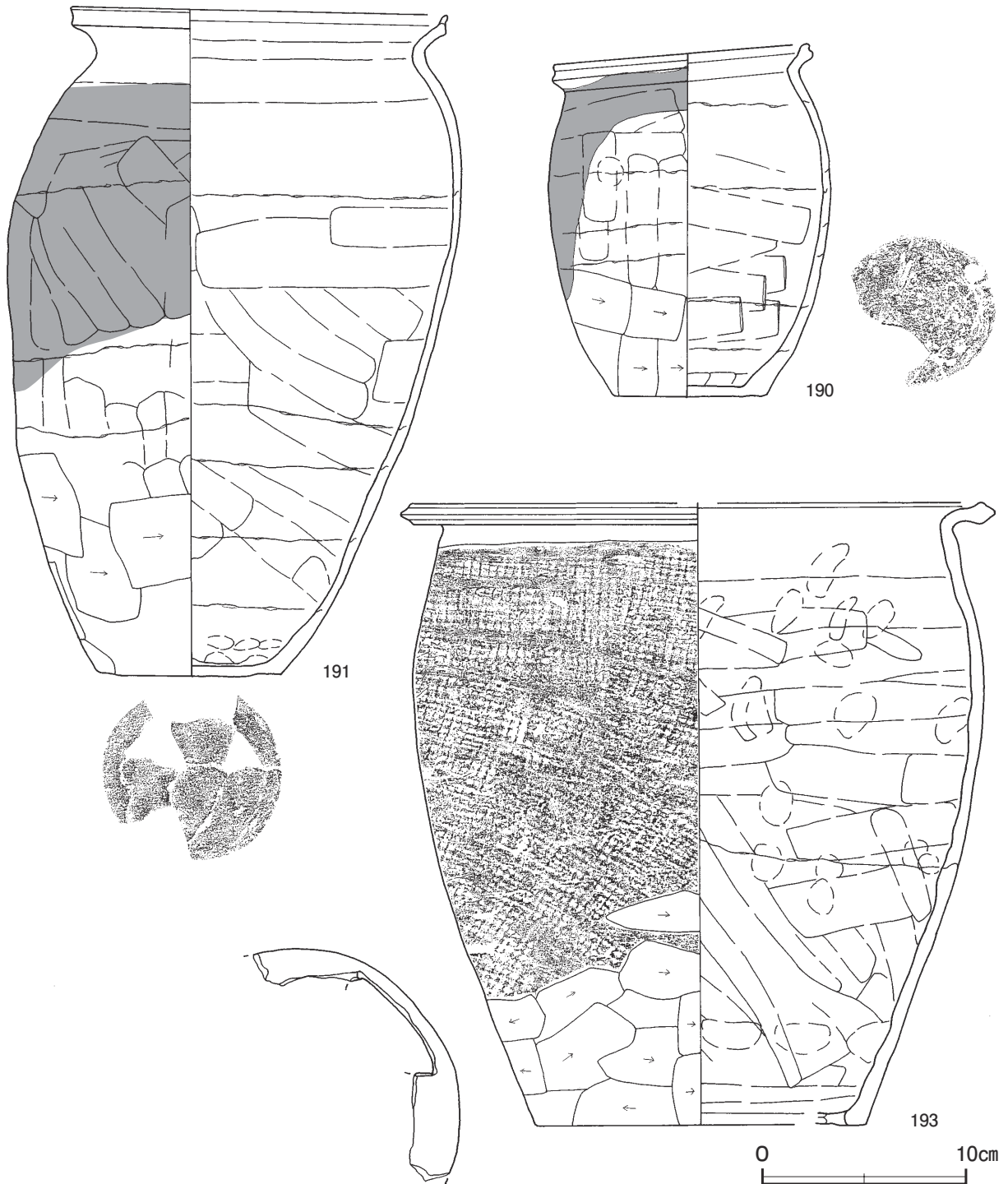
**遺物出土状況** 土師器片200点(坏52・高台付碗5・蓋5・皿16・甕類121・甌1), 須恵器片38点(坏

27・甕類 11) のほか、石器 1 点 (剥片) が、主に竈前周辺部から出土している。土器は中型の破片が多いものの、接合関係が乏しいことから、埋没の過程で破損した土器が投棄されたものと考えられる。



第 73 図 第 14 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第74図 第14号竪穴建物跡出土遺物実測図

第14号竪穴建物跡出土遺物観察表（第74図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
188	土師器	高台付椀	-	(22)	[6.7]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端一方向のナデ 体部内面横位の磨き 底部高台部貼付後削り出し 底部内面体部方向から連続する横位磨き	覆土中層	25%
189	土師器	皿	[13.2]	3.3	7.3	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	ロクロナデ 高台部貼付後ナデ	覆土中	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
190	土師器	小形甕	12.4	17.1	7.5	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ 体部内面横位のナデ 底部多方向の削り	竈覆土下層	70% PL33 煤付着
191	土師器	甕	18.0	32.4	8.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・斜位のナデ 後下位にヘラ削り 体部内面横・斜位のナデ 底部外・内面多方向のナデ 底部多方向の削り	覆土下層	60% PL33 煤付着
192	須恵器	甕	[22.3]	(6.9)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	口縁部外 口縁部外面折り返し 輪積み痕	覆土中	10%
193	土師器	甗	[27.5]	30.1	[16.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面格子目の叩き後 下位にヘラ削り 体部内面横・斜位のナデ、当て 具痕、指頭痕 底部ヘラ切りによる穿孔	竈覆土下層	25%

### 第15号竪穴建物跡（第75・76図）

**位置** 調査区中央部のS 6 b4区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第7号井戸に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.95m、短軸2.70mの方形で、主軸方向はN-96°-Eである。壁は高さ8~20cmで、外傾している。

**床** 第7号井戸に掘り込まれた周辺を除いて、平坦な床で、中央部が踏み固められている。貼床及び壁溝は、確認できなかった。

**竈** 東壁の南部に付設されている。焚口部から煙道部まで70cm、燃焼部の幅35cmである。燃焼部は床面の深さとほぼ同じで、平坦である。袖部は床面から第5層を積み上げて構築しているが、右袖部は残存していなかった。火床面は地山の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は、壁外に45cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第1~4層は焼土ブロックや粘土ブロックが混在していることから、壊されている。

#### 竈土層解説

- |          |                         |        |                        |
|----------|-------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック・粘土ブロック少量        | 4 赤褐色  | 焼土ブロック・ロームブロック中量、炭化物少量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック・粘土ブロック・焼土ブロック中量 | 5 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量、炭化物少量         |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量      |        |                        |

**ピット** 4か所。P1は深さ14cmで、竈の補強材に関わるピットの可能性があるが、不明である。P2は深さ18cmで、2層に分層でき、埋め戻されている。南東コーナー部に位置することや、竈の右袖部が残存していないことから、竈の廃絶に伴って掘り込まれたと推察できるが、性格は不明である。P3は深さ14cm、P4は深さ18cmで、柱穴の可能性があるが、不明である。

#### ピット土層解説（P2）

- |       |              |      |           |
|-------|--------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | 炭化物少量、焼土粒子微量 | 2 褐色 | ロームブロック少量 |
|-------|--------------|------|-----------|

**覆土** 7層に分層できる。第3~7層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1~2層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。

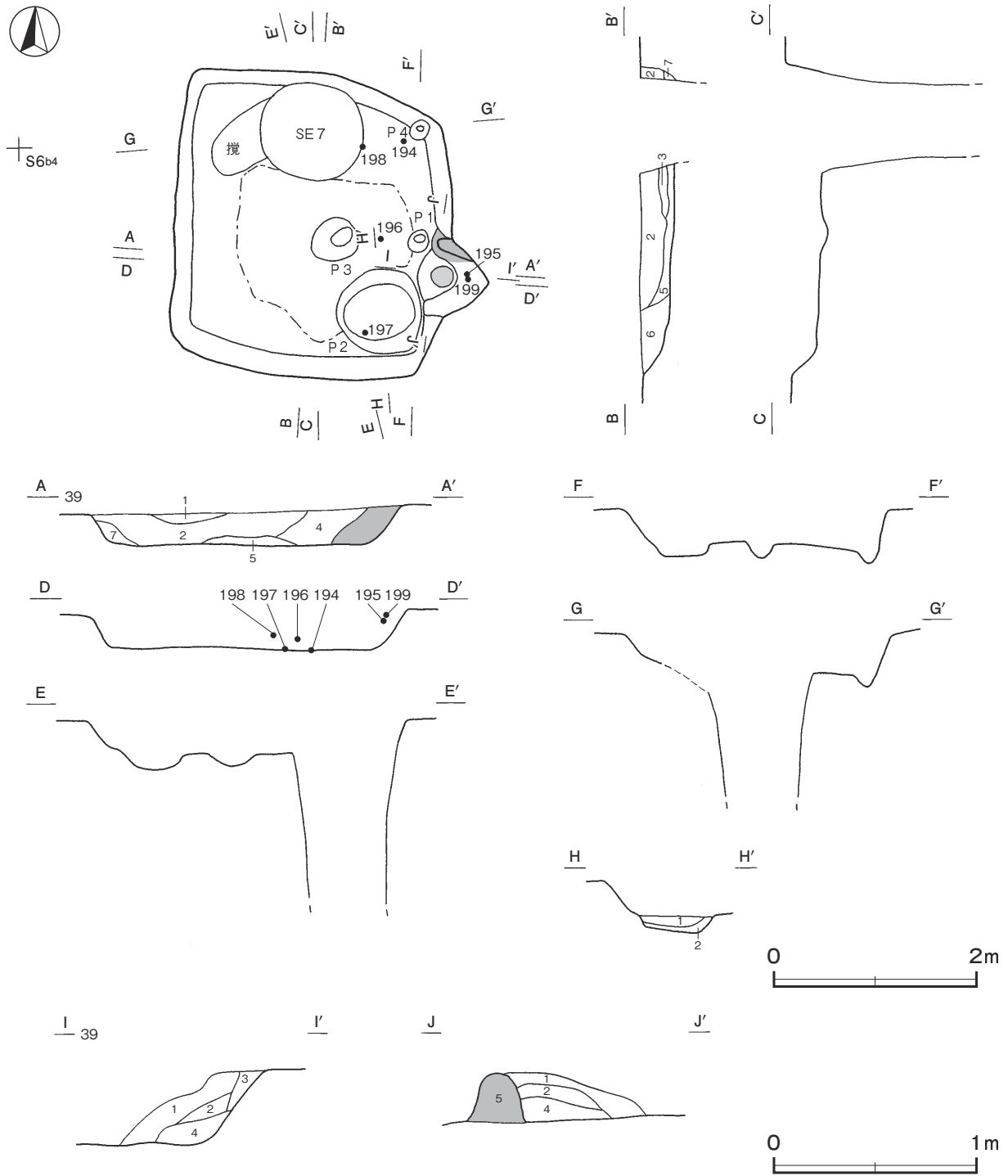
#### 土層解説

- |          |                    |          |                 |
|----------|--------------------|----------|-----------------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子少量            | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量       |
| 2 黒褐色    | ローム粒子少量、焼土粒子微量     | 6 暗褐色    | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量    | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量       |
| 4 暗褐色    | ロームブロック少量、粘土ブロック微量 |          |                 |

**遺物出土状況** 土師器片49点（坏11・高台付碗3・皿1・甕類32・甗<sub>1</sub>1・埴埴1）、須恵器片6点（甕類）、土製品1点（羽口）、金属製品1点（鏝）、鉄滓8点（461.8g）のほか、縄文土器片1点（深鉢）、弥生土器片1点（広口壺）が、主に竈及び北半部から出土している。194・196~198は、覆土上層から下層にかけて斜位の状態で出土していることや、接合関係が良好であることから、埋め戻しに伴って一括投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。

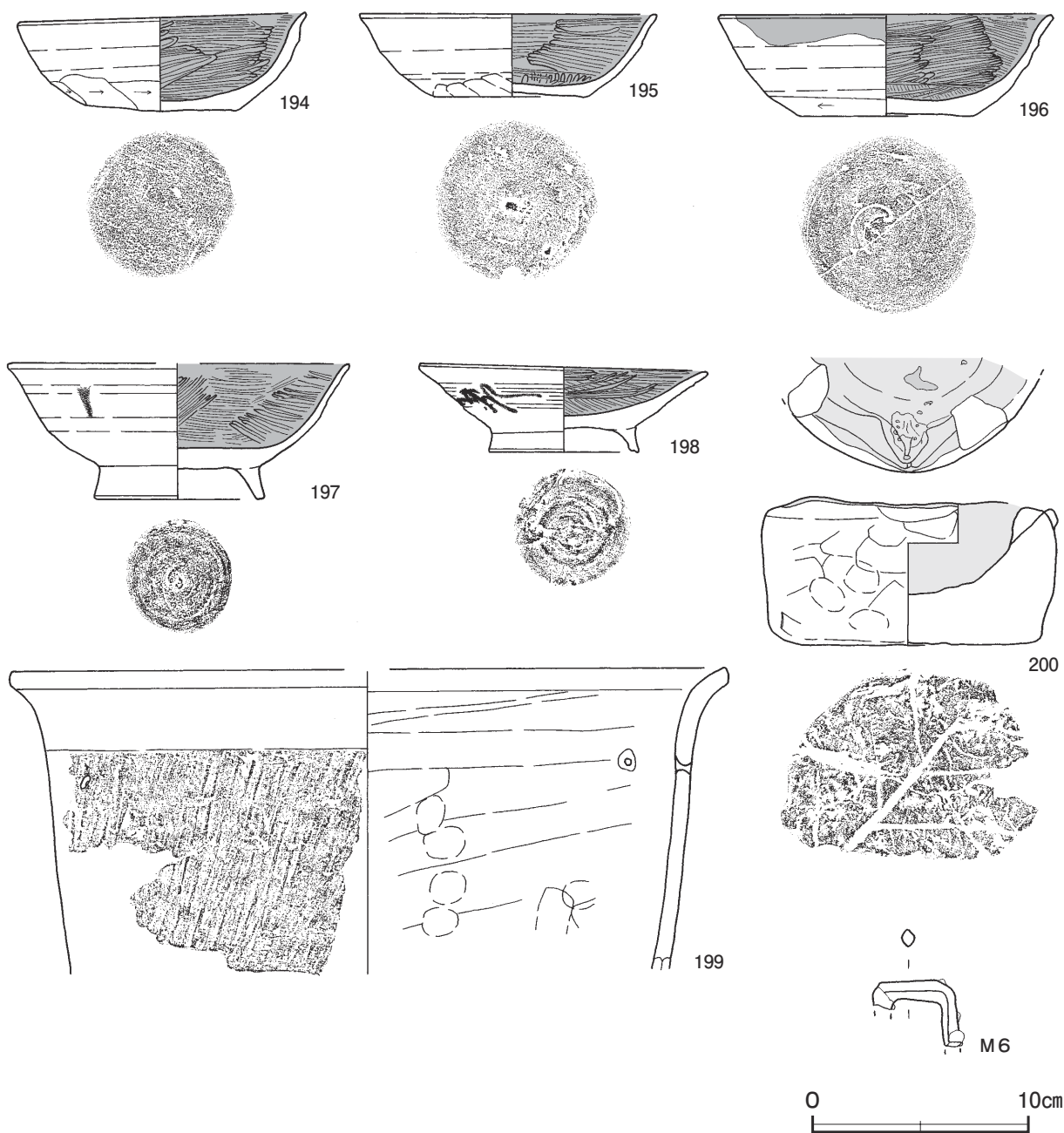




第75図 第15号竪穴建物跡実測図

第15号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
194	土師器	坏	13.1	4.5	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持へら削り 体部内面横位の磨き 底部二方向の削り 底部内面体部から連続する 一方の磨き	覆土下層	95% PL29
195	土師器	坏	13.4	3.8	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐	普通	体部下端へらナデ 体部内面横位の磨き 底部へ ら切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨 き	竈覆土上層	80%
196	土師器	坏	15.3	4.7	7.9	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端回転へら削り 体部内面横位の磨き 底 部回転へら削り 底部内面体部から連続する一方 向の磨き後多方向の磨き	覆土中層	90%



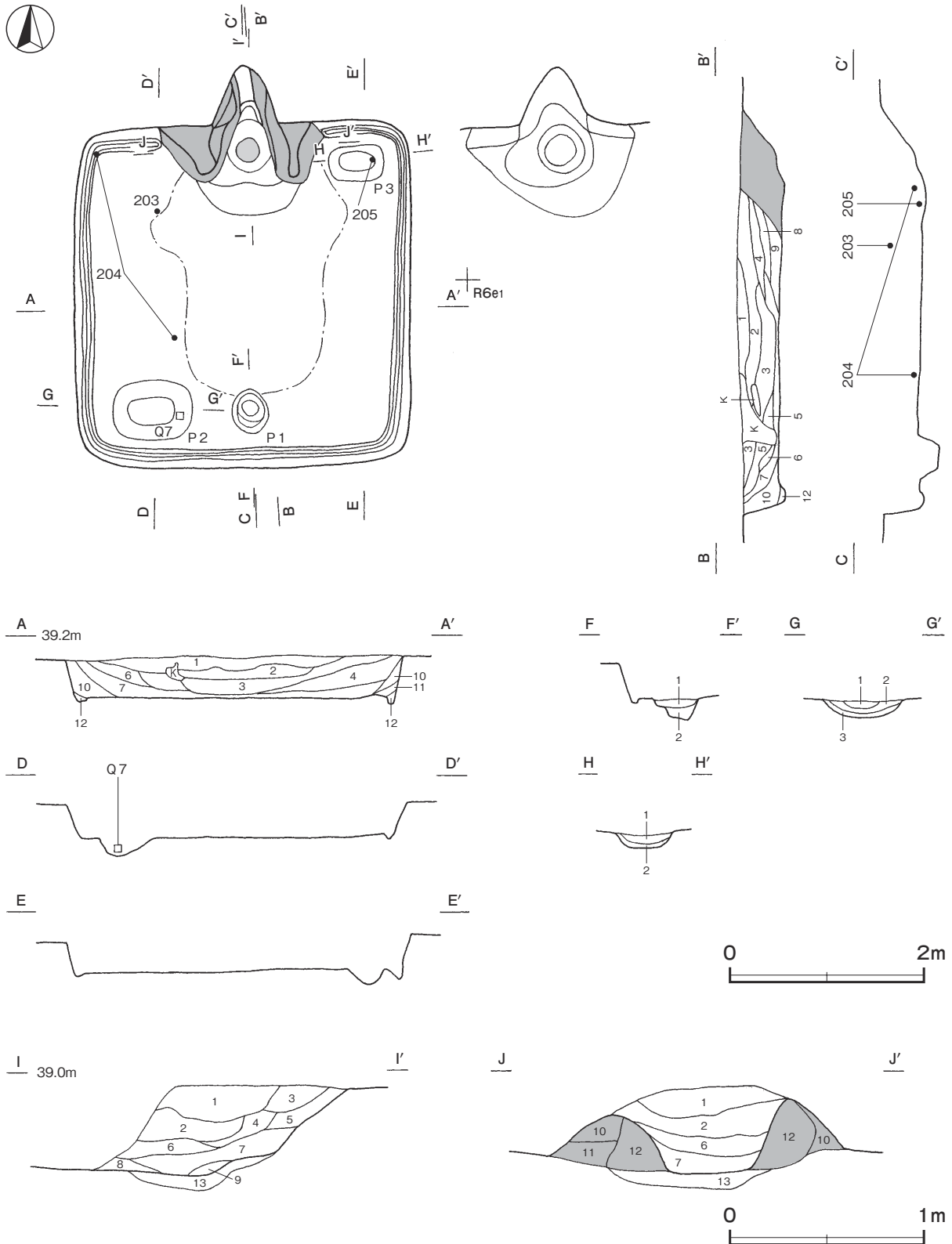
第76図 第15号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
197	土師器	高台付碗	[15.5]	6.2	7.3	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 体部内面横位の磨き 底部高台部貼付後ナデ 底部内面体部から連続する一方の磨き後多方向の磨き	覆土下層	70% PL30 「□」墨書
198	土師器	皿	13.0	4.1	[6.7]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内面横位の磨き 底部内面体部から連続する一方の磨き後直立する磨き	覆土中層	80% PL31 「亀カ」墨書
199	土師器	甌カ	[32.3]	(13.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位の平行叩き 体部内面横位のナデ 指頭痕	竈覆土上層	10% 内面からの穿孔
200	土師器	埴塼	[12.4]	6.8	11.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ナデ 内面銹化 注口部付近に緑錆付着 底部木葉痕	覆土中	70% PL40
M6	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M6	鏝	(3.0)	4.2	0.6	10.36	鉄	両先端部欠損 断面四角形 断面に使用時の歪みあり		覆土中	PL41	

第 16 号 竪穴建物跡 (第 77・78 図)

位置 調査区中央部の R 5 d0 区, 標高 39 m ほどの台地平坦部に位置している。

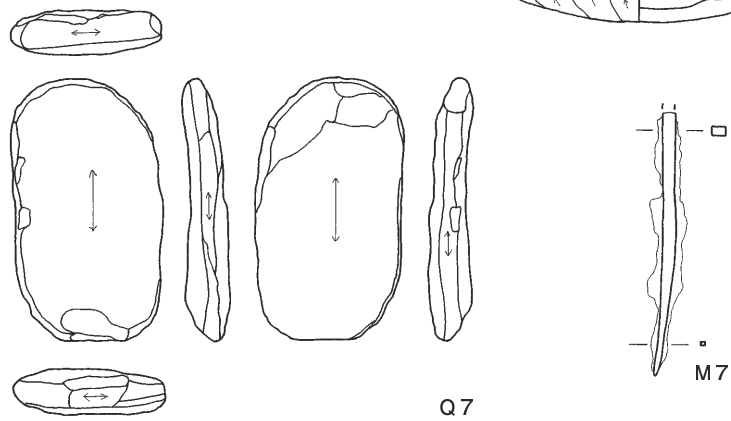
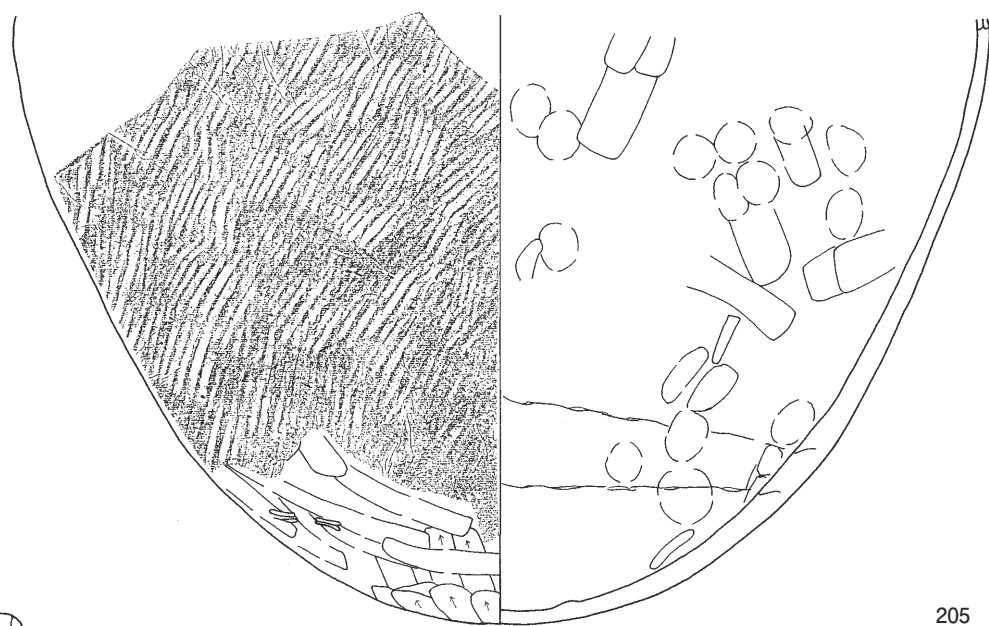
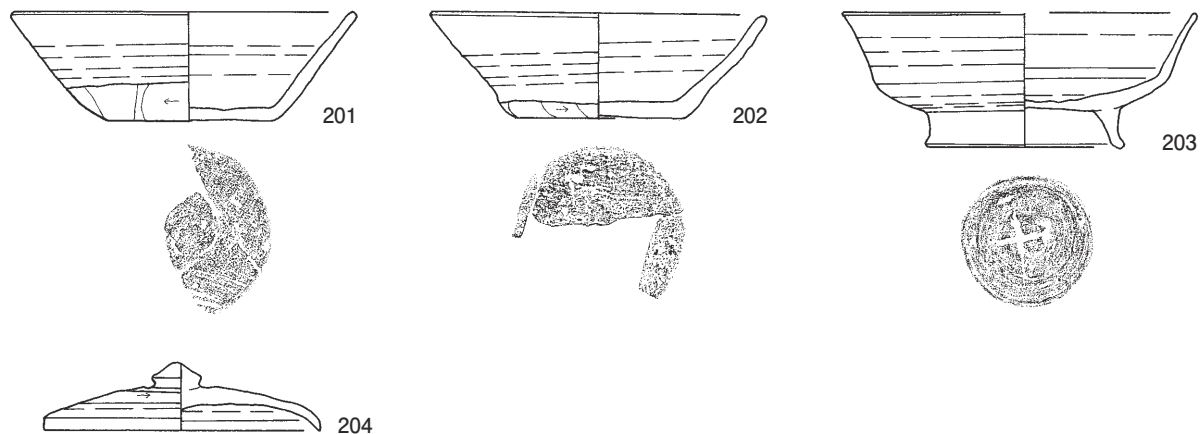
規模と形状 長軸 3.50 m, 短軸 3.42 m の方形で, 主軸方向は  $N-1^{\circ}-E$  である。壁は高さ 30 ~ 36 cm で, 直立している。



第 77 図 第 16 号 竪穴建物跡実測図

床 平坦で、竈の前方部から中央部が踏み固められている。壁溝が、全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで118cm、燃焼部の幅42cmである。燃焼部は床面から土坑状に深さ13cm掘りくぼめられ、第13層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第13層の上面に第10～12層を積み上げて構築している。火床面は第13層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に58cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第3～9層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれているこ



第78図 第16号竪穴建物跡出土遺物実測図

とから、壊されている。第2層は建物跡の覆土8層、第1層は建物跡の覆土4層である。

**竈土層解説**

- |          |                         |         |                    |
|----------|-------------------------|---------|--------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 8 黒褐色   | 焼土粒子中量             |
| 2 黒褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量        | 9 暗赤褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量        |
| 3 におい黄褐色 | 粘土ブロック中量                | 10 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 4 暗褐色    | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量      | 11 褐色   | 灰褐色 粘土ブロック少量       |
| 5 暗褐色    | 粘土ブロック多量                | 12 灰黄色  | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量 |
| 6 黒褐色    | 焼土ブロック少量, 粘土ブロック微量      | 13 褐色   | 焼土ブロック中量           |
| 7 暗褐色    | 焼土ブロック少量, ロームブロック微量     |         |                    |

**ピット** 3か所。P1は深さ21cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。覆土は2層で、柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。P2・P3は長軸54～80cm、短軸34～60cm、深さ16～20cmの隅丸長方形である。P2は3層、P3は2層に分層でき、埋め戻されている。配置から貯蔵穴の可能性はある。

**ピット土層解説 (P1)**

- |       |         |          |           |
|-------|---------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量 | 2 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
|-------|---------|----------|-----------|

**ピット土層解説 (P2・P3共通)**

- |       |                     |          |           |
|-------|---------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量           | 3 におい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 |          |           |

**覆土** 12層に分層できる。第2～11層は不規則な堆積をしていることから埋め戻されており、第1層は自然堆積である。第12層は壁溝の覆土である。

**土層解説**

- |       |                         |           |                     |
|-------|-------------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量            | 7 暗褐色     | ロームブロック少量, 炭化物微量    |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量        | 8 黒褐色     | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量          | 9 におい黄褐色  | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 10 におい黄褐色 | 焼土ブロック少量            |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量, 粘土ブロック微量       | 11 におい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量    |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量          | 12 におい黄褐色 | ロームブロック少量           |

**遺物出土状況** 土師器片66点(坏9・甕類57)、須恵器片12点(坏4・高台付坏1・蓋1・盤1・鉢1・甕類4)、石器1点(砥石)、金属製品1点(鏃)が、主に北壁際から出土している。土器は大型の破片であるものの、接合関係が乏しいことから、破損した土器が埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第16号竪穴建物跡出土遺物観察表(第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
201	須恵器	坏	13.5	4.4	6.8	長石・石英・黒色粒子	灰黄褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切りを残す二方向の削り	覆土中	70% 堀ノ内窯
202	須恵器	坏	13.2	4.3	6.8	長石・石英・黒色粒子	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切りを残す二方向の削り	覆土中	40% 堀ノ内窯
203	須恵器	高台付坏	[14.0]	5.4	7.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい赤褐色	普通	底部「×」のヘラ書き	覆土中層	70% 新治窯
204	須恵器	蓋	11.0	2.7	-	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	60% PL35 堀ノ内窯
205	須恵器	甕	-	(24.3)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	体部外面斜位方向の平行叩き, 下位以下にヘラ削り後斜位のナデ 体部内面斜位のナデ 指頭痕 輪積み痕	覆土下層	40% PL35 堀ノ内窯

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	砥石	10.5	6.0	1.8	201.30	粘板岩	6面砥面	P2覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	鏃	(10.5)	0.6	0.4	(11.41)	鉄	鏃身欠損 鏃被断面長方形 鏃被先端部断面方形	覆土中	

第 17 号 竪穴建物跡 (第 79 ~ 81 図)

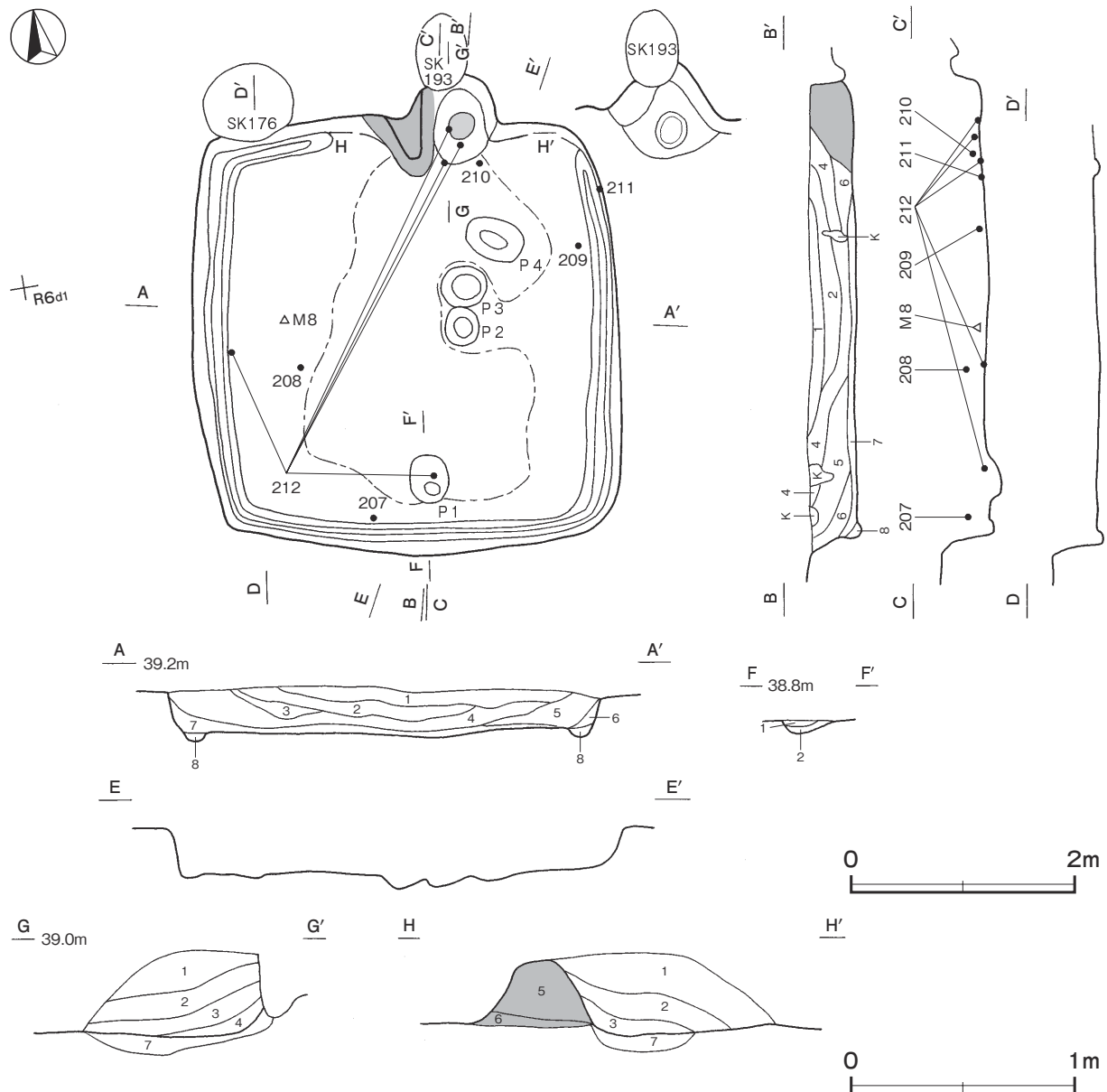
**位置** 調査区中央部の R 6 d1 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 176・193 号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 3.81 m, 短軸 3.78 m の方形で, 主軸方向は N - 14° - E である。壁は高さ 34 ~ 40 cm で, 外傾もしくはほぼ直立している。

**床** 平坦で, 竈の前方部から中央部が踏み固められている。壁溝が, 竈周辺を除いて巡っている。

**竈** 北壁やや東寄りに付設されている。第 193 号土坑に掘り込まれているため, 焚口部から煙道部まで 74 cm しか確認できなかった。燃烧部の幅は 45 cm である。燃烧部は, 床面から土坑状に深さ 10 cm 掘りくぼめられ, 第 7 層で埋め戻されている。袖部は, 床面及び第 7 層の上面に第 5・6 層を積み上げて構築しているが, 右袖部は残存していなかった。火床面は第 7 層の上面で, 火熱を受け赤変硬化している。煙道部の先端部が 193 号土坑に掘り込まれているため, 壁外への掘り込みは, 29 cm しか確認できなかった。火床部からの傾斜は, 外傾



第 79 図 第 17 号 竪穴建物跡実測図

していると推定できる。右袖部が存在していないことや、第1～4層には焼土ブロックやロームブロックが含まれていることから、壊されている。

**竈土層解説**

- |       |                     |        |                  |
|-------|---------------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量    | 5 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量         |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 | 6 褐灰色  | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | 焼土土ブロック少量, 炭化物微量    | 7 黒褐色  | ロームブロック中量        |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |        |                  |

**ピット** 4か所。P1は深さ12cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。2層に分層でき、柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。P2～P4は深さ8～12cmである。性格は不明である。

**ピット土層解説 (P1)**

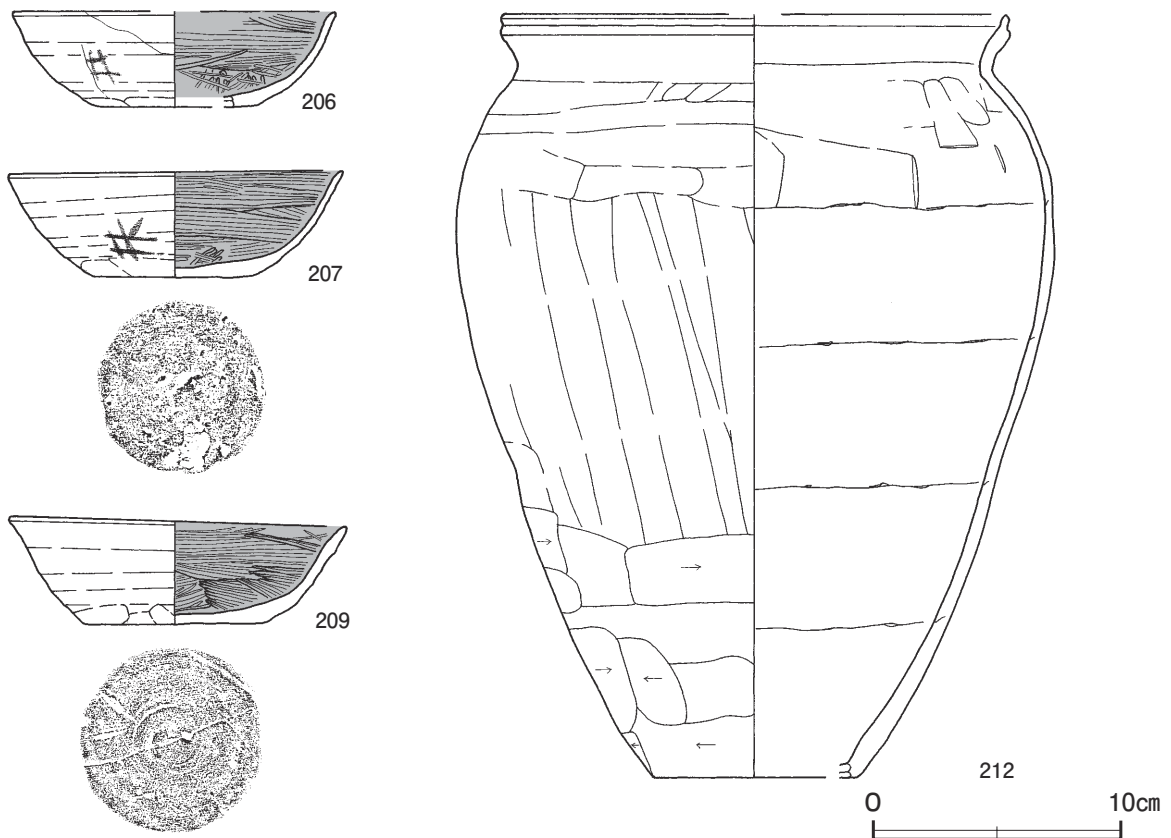
- |       |           |          |           |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
|-------|-----------|----------|-----------|

**覆土** 8層に分層できる。第1～7層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第8層は壁溝の覆土である。

**土層解説**

- |       |                |          |              |
|-------|----------------|----------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量   | 5 暗褐色    | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 | 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量    |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量        | 7 にぶい黄褐色 | ローム粒子少量      |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化物少量    | 8 褐色     | ロームブロック微量    |

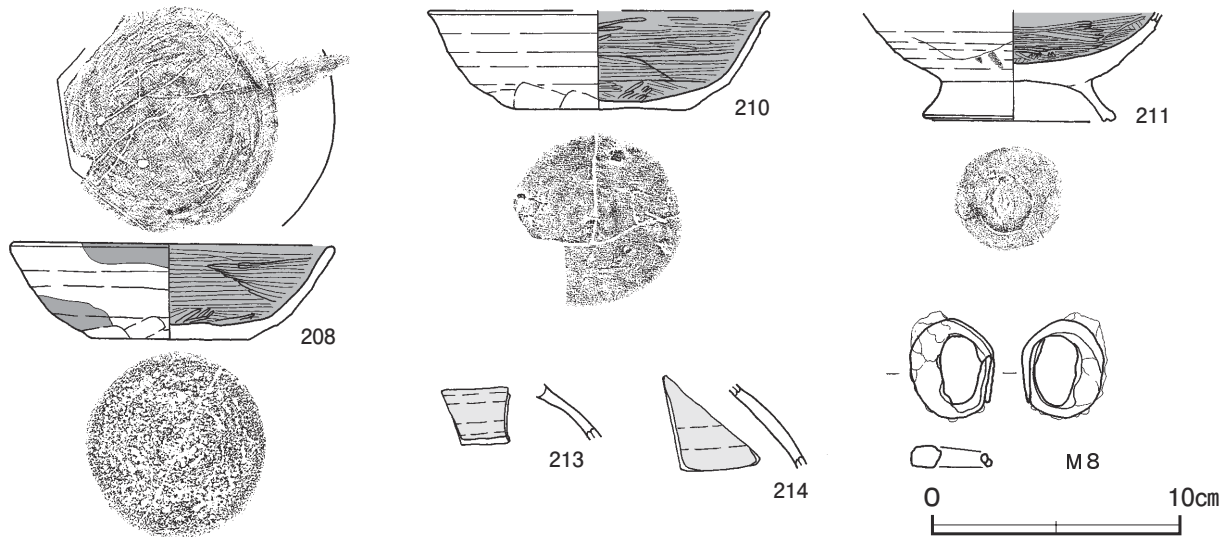
**遺物出土状況** 土師器片 235点 (坏 131・高台付椀 12・鉢 1・甕類 89・置竈 1・不明 1), 須恵器片 37点 (坏 17・高台付坏 1・蓋 1・盤 1・鉢 1・甕類 16), 灰釉陶器片 3点 (瓶), 金属製品 3点 (不明 1・釘 2), 石器 3点 (砥石 2・金床石<sub>カ</sub> 1), 椀形滓 2点 (282.3 g), 鉄滓 11点 (345.2 g) のほか、陶器 1点 (小杯) が、主



第 80 図 第 17 号 竪穴建物跡出土遺物実測図(1)

に竈や北壁際から出土している。土器類は覆土中層以下からの出土が多いことから、埋没する過程の早い段階で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。椀形滓や鉄滓が廃棄されていることから、調査区域の近辺に、鍛冶関連の施設が存在していたと推定できる。



第81図 第17号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第17号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第80・81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
206	土師器	坏	[12.8]	3.7	[7.0]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部下端へラナデ 体部内面横位の磨き 底部内面多方向の磨き	覆土中	30% PL36 「井」墨書
207	土師器	坏	13.2	4.3	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐	普通	体部下端へラナデ 体部内面横位の磨き 底部へラ切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨き	覆土中層	70% PL28 「井」墨書
208	土師器	坏	[12.8]	3.8	6.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部下端へラナデ 体部内面横位の磨き 底部へラ切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨き	覆土中層	60% PL27 「奉」刻書 煤付着
209	土師器	坏	13.4	4.3	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端へラナデ 体部内面横位の磨き 底部へラ切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨き	覆土下層	90% PL29
210	土師器	坏	[13.5]	3.9	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐	普通	体部下端へラナデ 体部内面横位の磨き 底部へラ切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨き	覆土下層	50%
211	土師器	高台付椀	-	(4.3)	7.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部内面多方向の磨き	覆土下層	50% PL30 「井」墨書
212	土師器	甕	[20.0]	30.5	[8.2]	長石・石英・細礫	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ後下位にへラ削り 体部内面縦・横位のナデ	覆土下層	40%
213	灰釉陶器	瓶	-	(2.3)	-	緻密 黒色粒子・白色粒子	灰白	良好	クロコナデ 外面灰釉漬け掛け	覆土中	5% PL38 折戸53式
214	灰釉陶器	瓶	-	(3.3)	-	緻密 黒色粒子・白色粒子	灰明オリブ	良好	クロコナデ 外面灰釉漬け掛け	覆土中	5% PL38 折戸53式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	黄金具	4.3	3.4	0.9	11.52	鉄	一本の鉄材巻き付け	覆土下層	PL41

第18号竪穴建物跡 (第82・83図)

**位置** 調査区中央部のR5c9区、標高39mほどの台地平坦部に位置している。

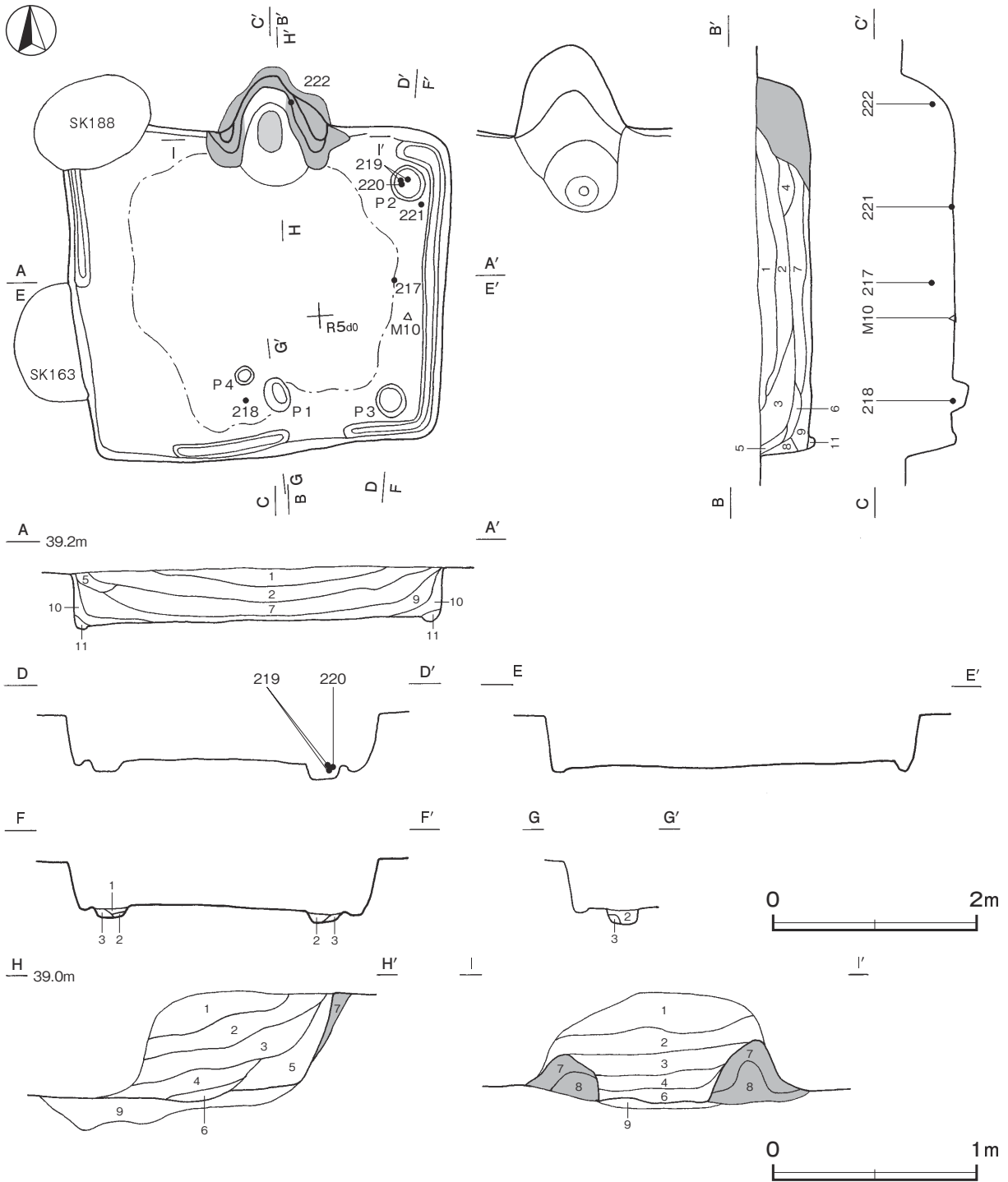
**重複関係** 第163・188号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.62m、短軸3.24mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ40~46cmで、直立している。

**床** 平坦な床で、竈前方部及び中央部が踏み固められている。壁溝が、竈付近と南壁中央部、南西コーナ一部を除いて巡っている。



**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで 114cm，燃焼部の幅 46cm である。燃焼部は床面から土坑状に深さ 13cm 掘りくぼめられ，第 9 層で埋め戻されている。袖部は，床面及び第 9 層の上面に第 7・8 層を積み上げて構築している。火床面は第 9 層の上面で，火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 60cm 掘り込まれ，第 7 層が貼り付けられている。火床部から煙道部の傾斜はほぼ直立している。第 4～6 層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから，壊されている。第 1～3 層は建物跡覆土の第 2・4・7 層である。



第 82 図 第 18 号竪穴建物跡実測図

**竈土層解説**

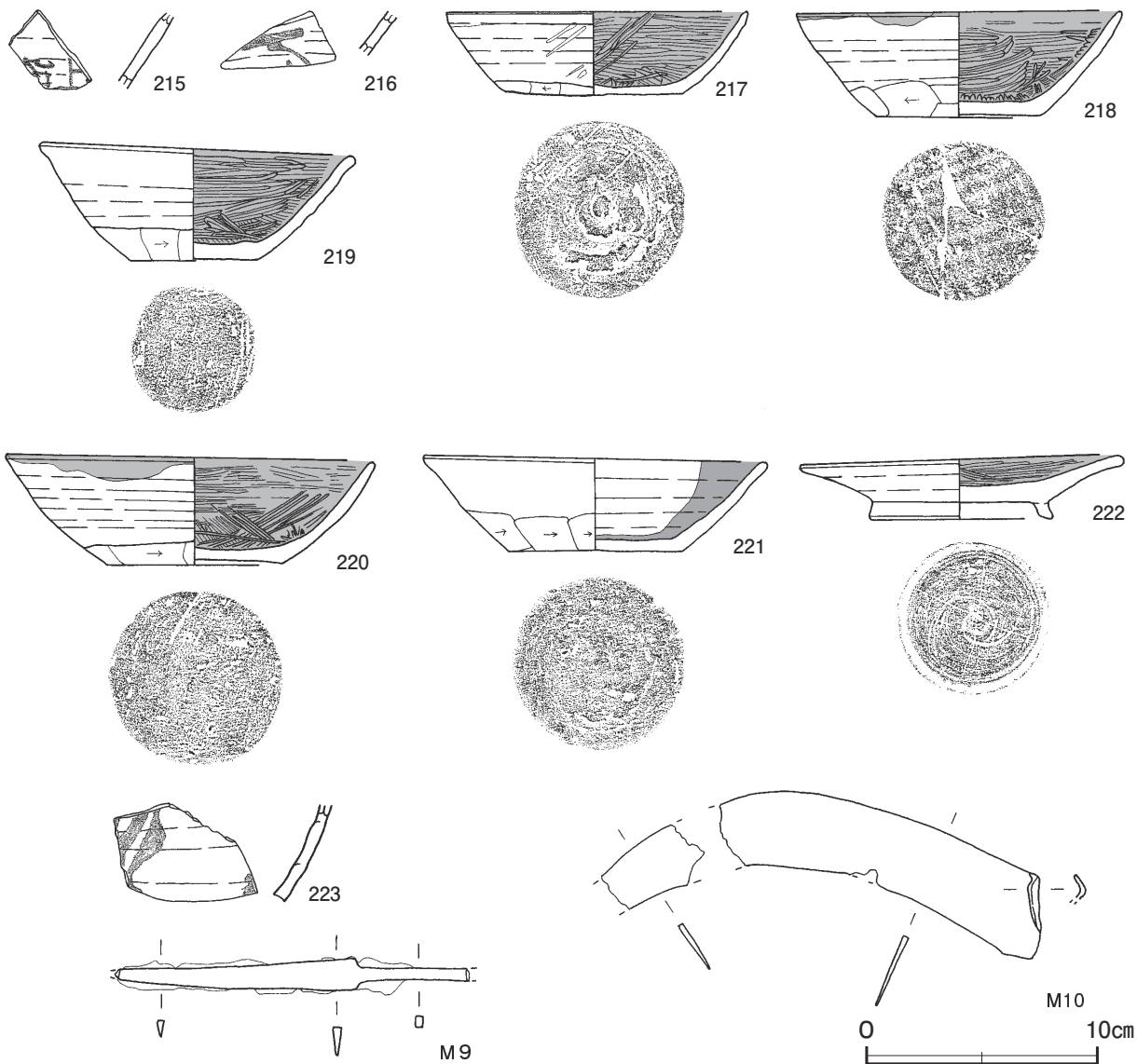
- |       |                   |        |                       |
|-------|-------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量           | 6 黒色   | ロームブロック・焼土ブロック少量      |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量         | 7 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色  | 焼土ブロック・粘土ブロック中量       |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物少量   | 9 黒褐色  | ロームブロック中量             |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量    |        |                       |

**ピット** 4か所。P 1～P 4は深さ12～16cmで、いずれも3層に分層できる。第3層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。P 1は出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2～P 4は柱穴の可能性はあるが、不明である。

**ピット土層解説 (P 1～P 4共通)**

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 褐色  | ロームブロック中量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 |       |           |

**覆土** 11層に分層できる。第1～10層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第11層は壁溝の覆土である。



第83図 第18号竪穴建物跡出土遺物実測図

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	7 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	8 にぶい黄褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	9 暗褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック微量	10 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子微量	11 にぶい黄褐色	ローム粒子少量
6 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量		

**遺物出土状況** 土師器片 320 点 (坏 77・高台付椀 2・蓋 4・皿 8・鉢 8・甕類 221), 須恵器片 87 点 (坏 30・高台付坏 1・蓋 1・鉢 1・長頸瓶 1・甕類 47・甌 6), 灰釉陶器片 5 点 (瓶) 金属製品 2 点 (刀子・鎌) が、主に東半部の壁際から出土している。215・216・223 は、細片で接合関係がないことから、埋没の過程での流入と考えられる。217～222 は、覆土中層以下から出土した完形品や接合関係が良好な大型の破片であることから、一括投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。

**第 18 号 堅穴建物跡出土遺物観察表 (第 83 図)**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
215	土師器	坏	-	(3.3)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL37 「□□」墨書
216	土師器	坏	-	(1.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 「□」墨書
217	土師器	坏	12.8	3.6	7.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部下端手持ちへら削り 体部内面横・斜位の磨き、指頭填 底部へら切りを残す多方向のナデ 底部内面多方向の磨き	覆土中層	70% PL29
218	土師器	坏	13.8	4.5	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部下端手持ちへら削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面多方向の磨き	覆土下層	100%
219	土師器	坏	13.3	5.1	5.3	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端手持ちへら削り 体部内面横・斜位の磨きの後見込み外周に沿って円状の磨き 底部一方向の削り 底部内面一方向の磨き	P 2 覆土中	90%
220	土師器	坏	15.7	4.7	7.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端手持ちへら削り 体部内面横位の磨きの後見込み外周に沿って円状の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き	P 2 覆土中	60% PL29
221	須恵器	坏	14.5	4.1	7.3	長石・石英・雲母	灰黄	普通	ロクロナデ 体部下端手持ちへら削り 底部二方向の削り	覆土下層	100% 捺付着
222	土師器	皿	13.6	2.7	7.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ 体部内面横位の磨き	竈覆土中	60% 底部に「×」 刻書
223	灰釉陶器	瓶	-	(4.1)	-	緻密 黒色粒子・白色粒子	灰明オリーブ灰	良好	ロクロナデ 外面灰釉漬け掛け	覆土中	5% PL38 折戸 53 式。

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 9	刀子	(15.1)	1.4	0.4	(18.79)	鉄	刃部先端部欠損 刃部断面三角 茎部一部欠損 両関	覆土中	
M 10	鎌	(18.8)	3.6	0.3	(39.99)	鉄	刃部一部欠損 刃部断面三角形	覆土下層	PL41

**第 19 号 堅穴建物跡 (第 84・85 図)**

**位置** 調査区中央部の R 5 b9 区、標高 39 m ほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第 15・19 号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 3.46 m、短軸 3.01 m の長方形で、主軸方向は N - 4° - E である。壁は高さ 46 ~ 50cm で、直立している。

**床** 平坦な床で、竈の前方部から中央部が踏み固められている。壁溝が、北東コーナー部を除いて巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで 112cm、燃焼部の幅 56cm である。燃焼部は床面から深さ 30cm 掘りくぼめられ、第 9・10 層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第 9・10 層の上面に第 7・8 層を積み上げて構築している。火床面は第 9 層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 60cm 掘り込まれ、火床部から外傾している。第 5・6 層は天井部材や内壁の崩落土、第 1 ~ 4 層は建物跡の廃絶に伴う覆土であることから、竈は埋め戻された後に崩落した可能性がある。

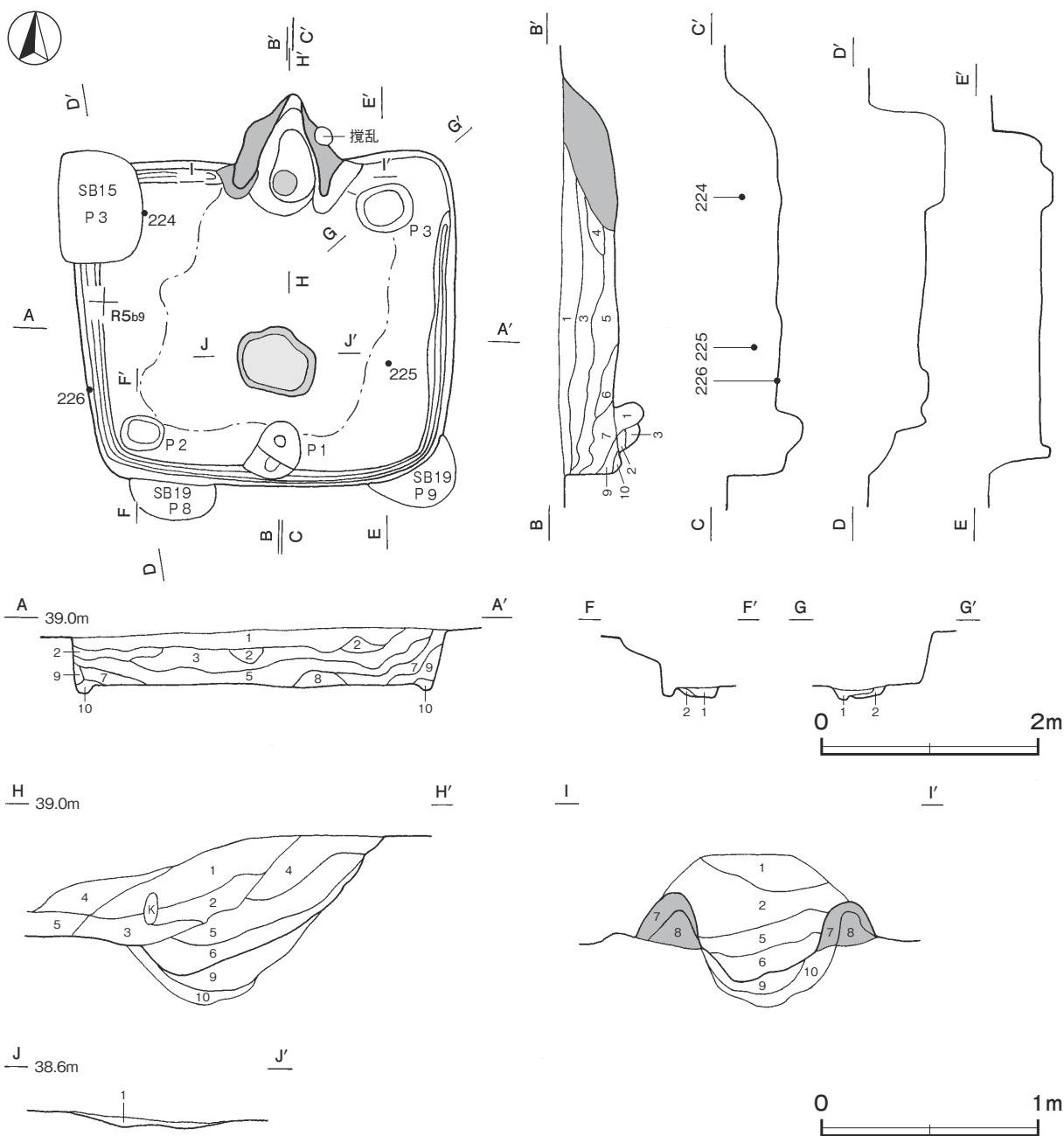
**竈土層解説**

- |        |                    |          |                     |
|--------|--------------------|----------|---------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック・炭化物少量      | 6 暗赤褐色   | 焼土ブロック中量, 炭化物微量     |
| 2 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子微量     | 7 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量  |
| 3 暗褐色  | ロームブロック少量          | 8 灰黄褐色   | 粘土ブロック中量            |
| 4 暗褐色  | 焼土ブロック少量, 粘土ブロック微量 | 9 暗褐色    | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 5 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 | 10 暗褐色   | ロームブロック少量, 炭化物微量    |

**炉** 中央部の南寄りに付設されている。長軸 74cm, 短軸 58cm の不整な長方形で, 床面から深さは 2~4 cm の地床炉である。炉床面は浅く掘りくぼめられ, 火熱を受けて赤変硬化している。炉床面や覆土, 周辺からは鍛造剥片や粒状滓などが確認できなかったことから, 性格は不明である。

**炉土層解説**

- 1 赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子少量



第 84 図 第 19 号竪穴建物跡実測図

**ピット** 3か所。P1は深さ24cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。第2・3層は埋土、第1層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。P2・P3は長軸40～50cm、短軸32～40cmの隅丸長方形で、深さは8～10cmである。性格は、貯蔵穴の可能性はあるが、不明である。覆土は、いずれも2層に分層でき、埋め戻されている。

**ピット土層解説 (P1)**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

**ピット土層解説 (P2・P3共通)**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

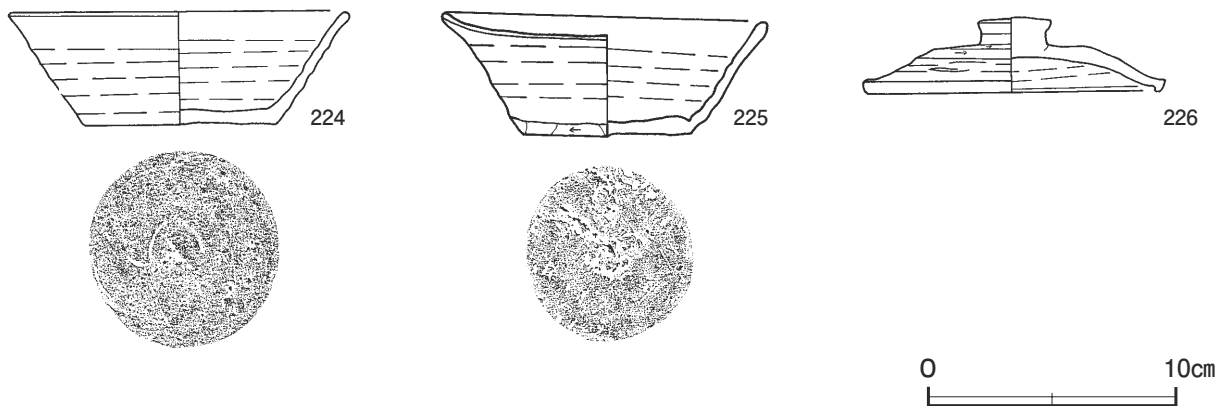
**覆土** 10層に分層できる。第1～9層はロームブロックが含まれる複雑な堆積していることから、埋め戻されている。第10層は壁溝の覆土である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 9 極暗褐色 ロームブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 土師器片40点(坏3・甕類37), 須恵器片66点(坏42・高台付坏3・蓋10・甕類11)が、主に壁際周辺から出土している。土器は大型から小型の破片で、接合関係が乏しいことから、埋め戻しに伴って、破損した土器が投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第85図 第19号竪穴建物跡出土遺物実測図

第19号竪穴建物跡出土遺物観察表(第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
224	須恵器	坏	13.4	4.5	7.6	長石・石英・黒色粒子	暗灰黄	良好	ロクロナデ 底部一方向の削り	覆土上層	70% 堀ノ内窯
225	須恵器	坏	12.8	5.1	6.6	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向の削り	覆土中層	60% 堀ノ内窯
226	須恵器	蓋	11.6	3.0	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	天井部回転ヘラ削り 重焼き痕	覆土下層	100% PL35 堀ノ内窯

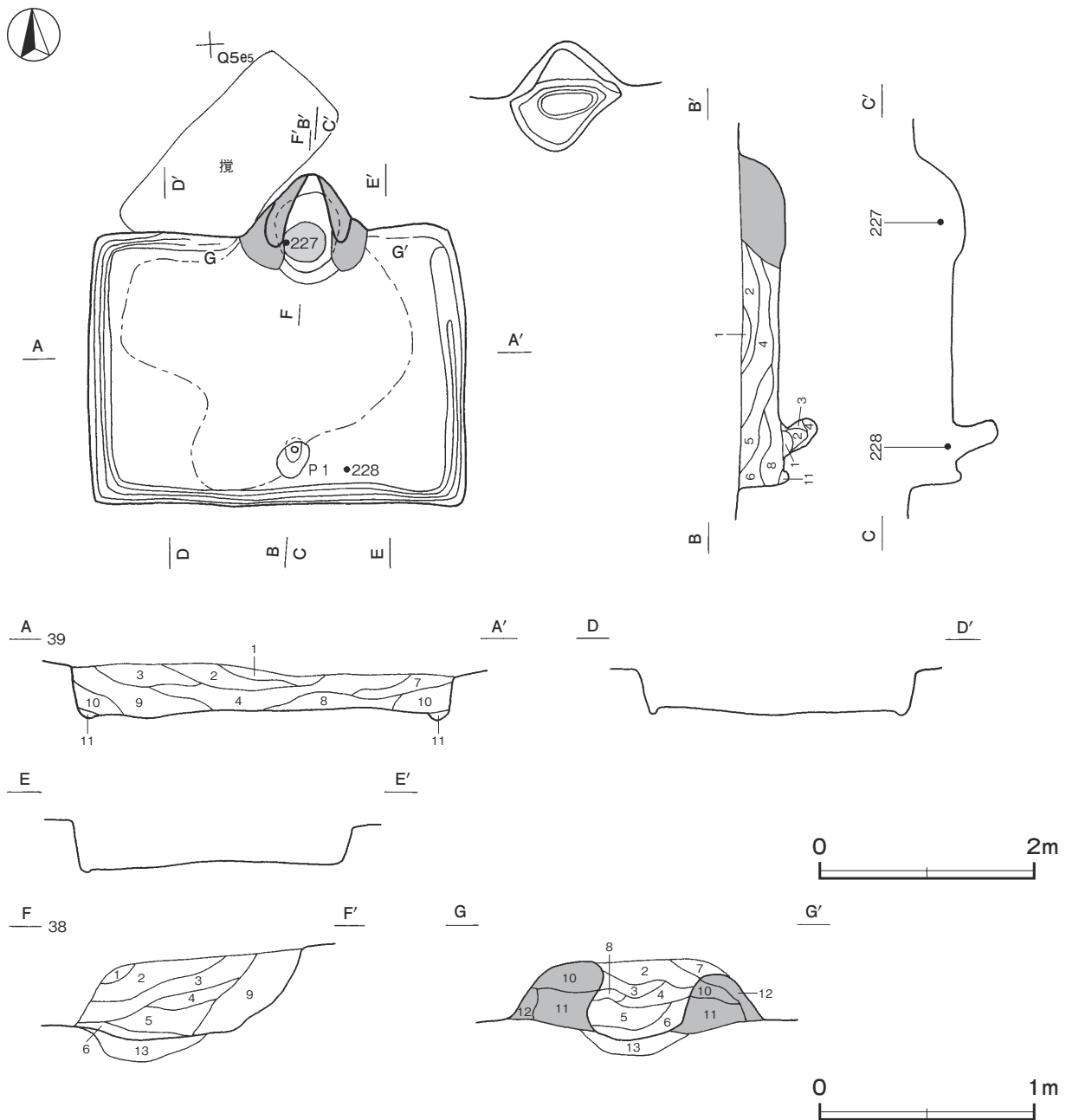
第 20 号 竪穴建物跡 (第 86・87 図)

**位置** 調査区中央部の Q 5 e5 区, 標高 39 m ほどの台地緩斜面に位置している。

**規模と形状** 長軸 3.48 m, 短軸 2.57 m の長方形で, 主軸方向は N - 6° - E である。壁は高さ 33 ~ 46 cm で, ほぼ直立している。

**床** 平坦で, 壁際と南東部, 南西部を除いて踏み固められている。壁溝が, 竈付近と北壁の東部を除いて巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚き口から煙道部まで 100 cm, 燃焼部の幅 44 cm である。燃焼部は床面から土坑状に深さ 16 cm 掘りくぼめられ, 第 13 層で埋め戻されている。袖部は, 床面及び第 13 層の上面に第 10 ~ 12 層を積み上げて構築している。火床面は第 13 層の上面で, 火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外



第 86 図 第 20 号 竪穴建物跡実測図

に50cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第9層にはロームブロックや大型の土器片が含まれていることから、煙道から埋め戻されている。第3～6層は天井部材や内壁の崩落土、第1・2層は建物跡の覆土であることから、建物が埋め戻された後に自然に崩落している可能性がある。

**竈土層解説**

- |        |                    |          |                    |
|--------|--------------------|----------|--------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 8 灰褐色    | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色  | ローム粒子少量, 炭化物微量     | 9 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量   |
| 3 灰褐色  | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量 | 10 灰褐色   | 焼土ブロック・粘土ブロック少量    |
| 4 暗褐色  | 焼土ブロック中量, 炭化物微量    | 11 灰褐色   | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子微量  | 12 灰黄褐色  | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 6 黒褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子少量  | 13 極暗赤褐色 | 焼土ブロック少量           |
| 7 褐色   | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量 |          |                    |

**ピット** P1は深さ38cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。第3・4層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。

**ピット土層解説 (P1)**

- |       |           |          |           |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 3 におい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色     | ロームブロック中量 |

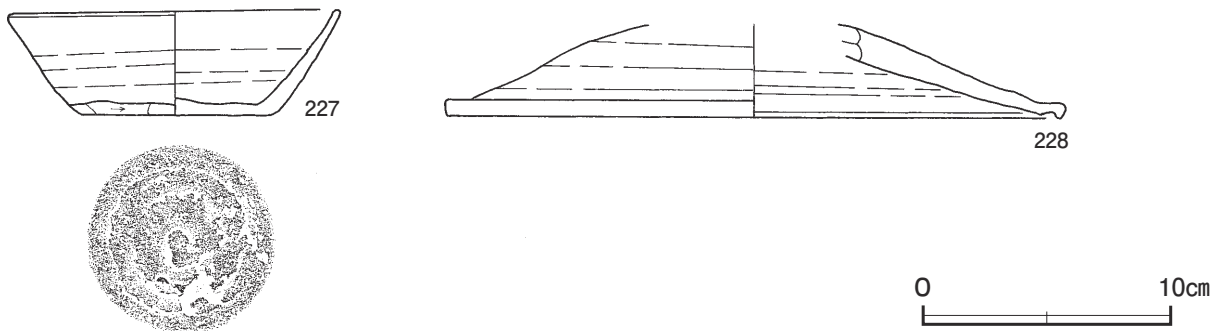
**覆土** 11層に分層できる。第1～10層は不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第11層は壁溝の覆土である。

**土層解説**

- |       |                     |           |                   |
|-------|---------------------|-----------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量  | 7 におい黄褐色  | ロームブロック少量         |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量      | 8 暗褐色     | ロームブロック少量         |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量    | 9 暗褐色     | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量      | 10 黒褐色    | ロームブロック・炭化粒子微量    |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化物少量      | 11 におい黄褐色 | ロームブロック中量         |
| 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 |           |                   |

**遺物出土状況** 土師器片75点(坏6・甕類69), 須恵器片33点(坏21・高台付坏2・蓋3・鉢1・甕類6)が、主に竈や南東部壁際から出土している。土器は大型から小型の破片で接合関係が乏しいことから、埋め戻しに伴って、破損した土器が投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第87図 第20号竪穴建物跡出土遺物実測図

第20号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
227	須恵器	坏	13.1	4.2	7.4	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部へら切りを残す多方向の削り	竈覆土上層	95% 堀ノ内窯
228	須恵器	蓋	24.4	(3.7)	-	長石・石英・黒色粒子	灰黄	良好	ロクロナデ 体部外面自然釉付着	覆土下層	80% PL38 東海産カ

第 22 号 竪穴建物跡 (第 88・89 図)

位置 調査区中央部の P 5 f1 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 225 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北半部が調査区域外に延びているため, 東西軸は 3.46 m で, 南北軸は 2.12 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが, 主軸方向は不明である。壁は高さ 30 ~ 35 cm で, ほぼ直立している。

床 平坦で, 第 225 号土坑に掘り込まれた南部及び壁際を除いて, 踏み固められている。確認した南半部では, 壁溝が巡っている。

ピット P 1 は深さ 28 cm で, 出入口施設に伴うピットと考えられる。第 1 ~ 3 層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。

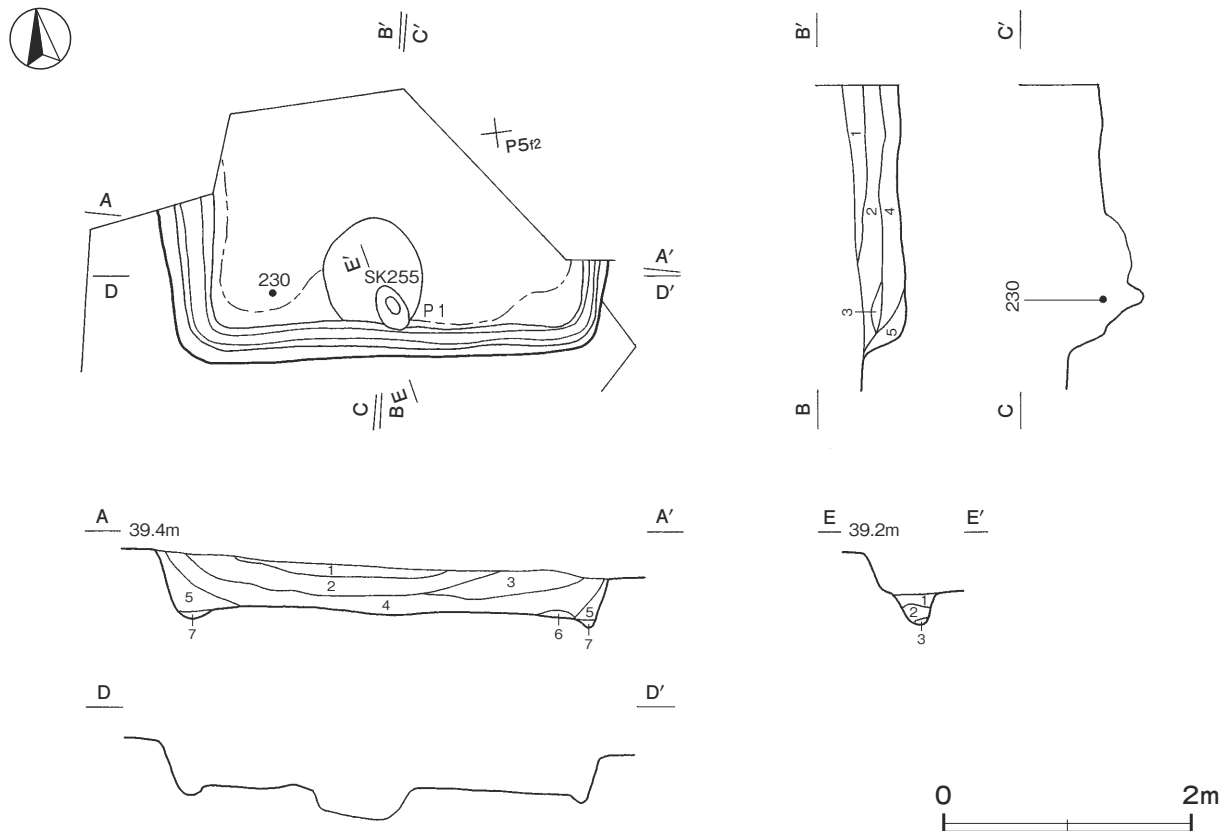
ピット土層解説 (P 1)

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 にぶい黄褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量 |                  |

覆土 7 層に分層できる。第 1 ~ 6 層はレンズ状の堆積状況から, 自然堆積である。第 7 層は壁溝の覆土である。

土層解説

- |                              |                    |
|------------------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量           | 5 暗褐色 ローム粒子少量      |
| 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ロームブロック少量 | 6 にぶい黄褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量        | 7 暗褐色 ロームブロック少量    |
| 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量        |                    |

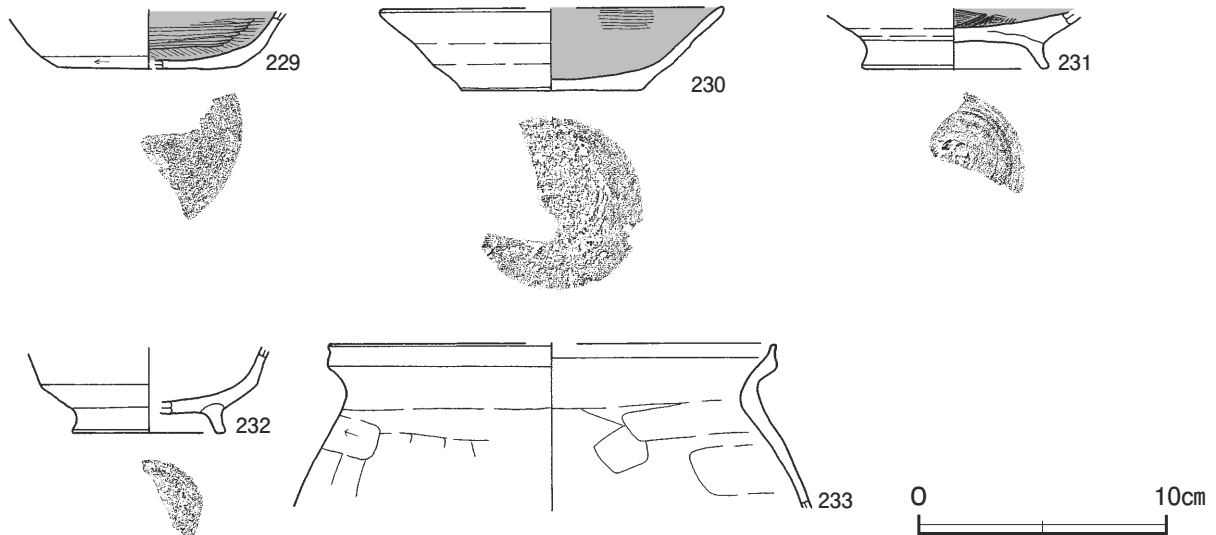


第 88 図 第 22 号 竪穴建物跡実測図



**遺物出土状況** 土師器片 184 点（坏 54・高台付椀 4・皿 1・甕類 122・甑 3），須恵器片 14 点（坏 8・高台付坏 1・蓋 1・甕類 4）が，南半部に散在している。土器は細片で，覆土の全層位から出土していることから，埋没の過程で流入もしくは破損した土器が投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 89 図 第 22 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 22 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 89 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
229	土師器	坏	-	(2.3)	[7.2]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き・底部内面へ連続する横位の磨き 底部多方向のナデ	覆土中	10%
230	土師器	坏	[13.6]	3.3	7.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端一方向のナデ 体部内面横位の磨き 底部多方向のナデ 底部内面劣化により不明	覆土下層	30%
231	土師器	高台付椀	-	(2.3)	[7.5]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部内面多方向の磨き	覆土中	10%
232	須恵器	高台付坏	-	(3.4)	[6.0]	長石・石英・針状物質	灰	良好	底部高台部貼付後ナデ	覆土中	10%
233	土師器	小形甕	[17.6]	(6.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ 体部内面横・斜位のナデ	覆土中	5%

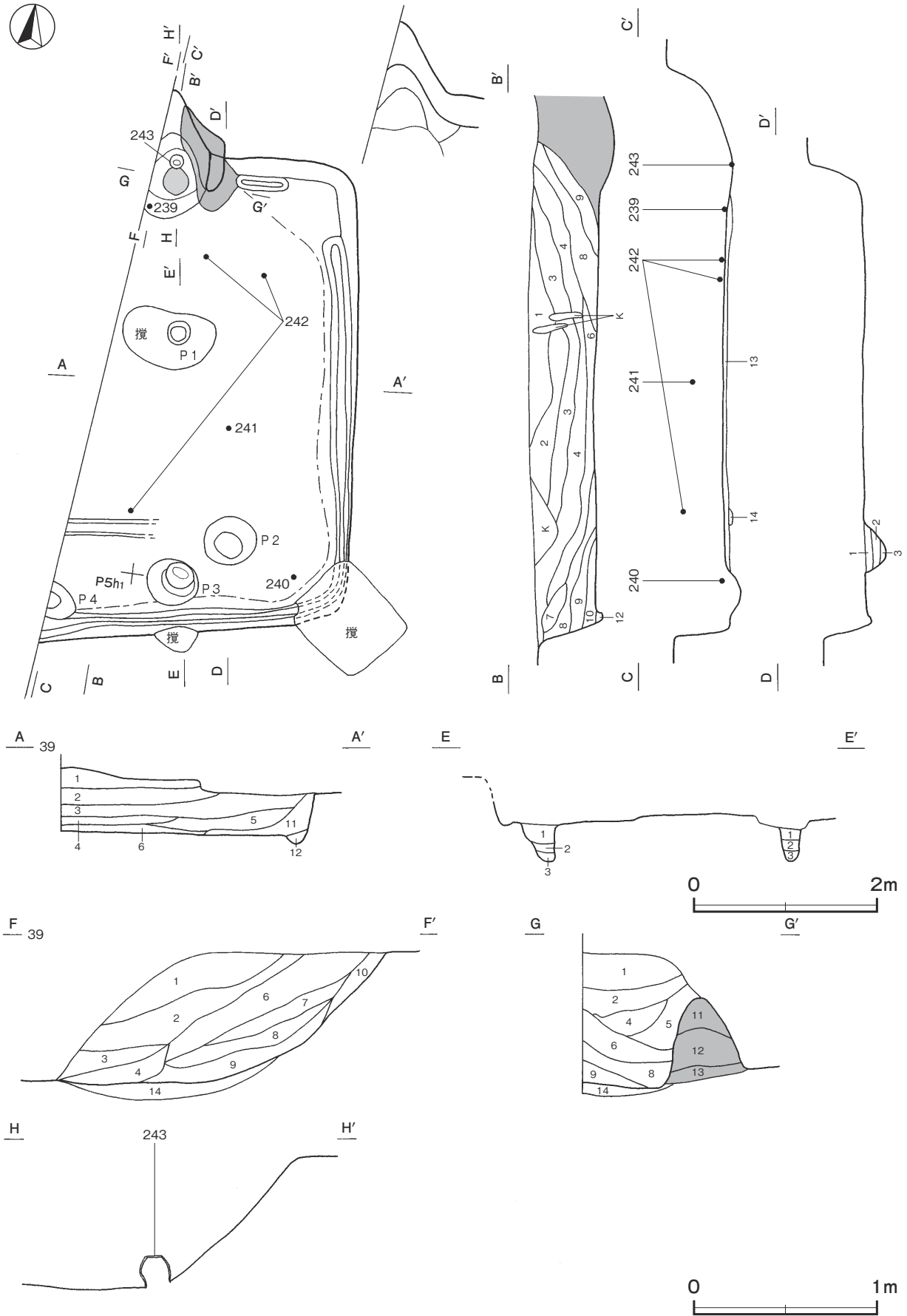
### 第 23 号竪穴建物跡（第 90・91 図）

**位置** 調査区中央部の P 5g1 区，標高 39 m ほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 西半部が調査区域外に延びているため，南北軸は 5.08 m，東西軸は 3.03 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき，主軸方向は N - 6° - W である。壁は高さ 45 ~ 63cm で，ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で，北東コーナー部及び壁際を除いて踏み固められている。貼床は，第 13 層を 10cm 埋め戻して構築している。壁溝が，北東コーナー部と南東コーナー部を除いて，巡っている。

**竈** 北壁に付設されているが，明確な位置は不明である。焚口部から煙道部まで 140cm，左袖部が調査区域外に推定できることから，燃燒部の幅は 49cm しか確認できなかった。燃燒部は，床面から深さ 10cm を土坑状に掘りくぼめ，第 14 層で埋め戻されている。袖部は，床面及び第 14 層の上面に第 11 ~ 13 層を積み上げて構築されている。火床面は第 14 層の上面で，火熱を受け赤変硬化している。243 は火床面に接して逆位で置かれており，火熱を受けていることから，支脚に転用されている。煙道部は壁外に 67cm 掘り込まれ，火床部から



第90图 第23号竖穴建物跡实测图

外傾している。第6～9層は天井部材や内壁の崩落土と考えられることから、煙道部は自然に崩落している。第1～5層はロームブロックや焼土ブロック、粘土ブロックが含まれていることから、焚口部は壊された後、埋め戻されている。

**竈土層解説**

- |          |                         |         |                     |
|----------|-------------------------|---------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 8 暗赤褐色  | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量  |
| 2 黒褐色    | ロームブロック微量               | 9 褐色    | 焼土ブロック中量, 炭化物微量     |
| 3 黒褐色    | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量     | 10 暗褐色  | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 4 暗褐色    | 焼土粒子中量, ロームブロック微量       | 11 褐灰色  | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量  |
| 5 暗褐色    | 焼土粒子少量, 粘土ブロック微量        | 12 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック微量 |
| 6 におい灰黄色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量      | 13 暗褐色  | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 7 褐灰色    | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量      | 14 褐色   | ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 |

**ピット** 4か所。P1は深さ36cm, P3は深さ42cmで、配置から支柱穴の可能性はある。P2は深さ22cmで、P3と立て替え関係の可能性はあるが、不明である。P4は深さ20cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1～3層は、柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。

**ピット土層解説 (各ピット共通)**

- |       |                     |          |           |
|-------|---------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 3 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量           |          |           |

**溝** 南壁から1.08m内側で確認でき、南壁に並行している。調査区域外へ延びているため、長さは88cmしか確認できなかった。幅は22cmで、深さは6cmである。貼床の構築層下から確認できたことから、拡張前の壁溝の可能性はある。

**覆土** 12層に分層できる。第2～11層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻し土、第1層は流入土、第12層は壁溝の覆土である。第13層は貼床の構築土、第14層は拡張前の壁溝の可能性のある遺構の覆土である。

**土層解説**

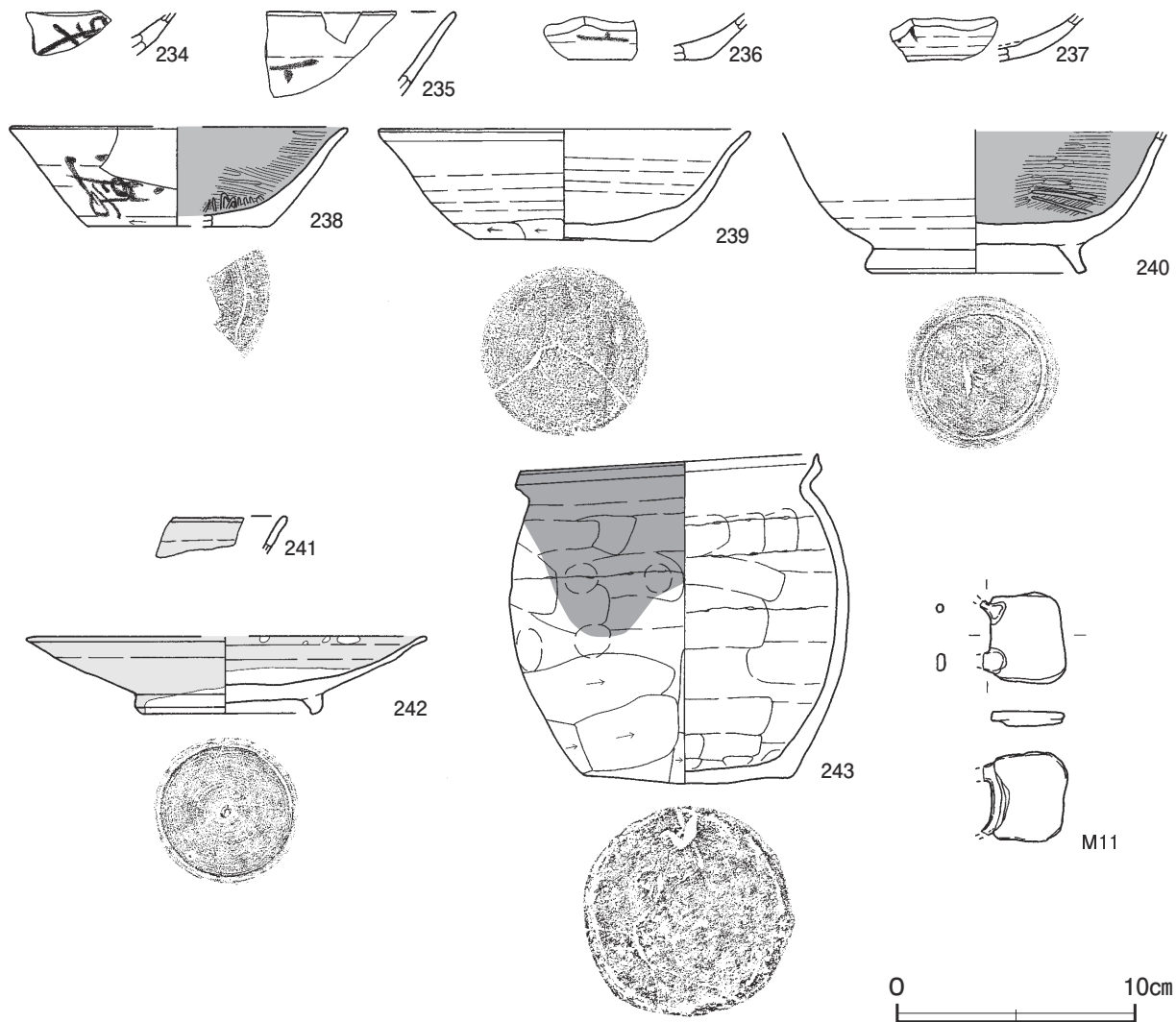
- |          |                     |           |                        |
|----------|---------------------|-----------|------------------------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子・焼土粒子微量        | 8 暗褐色     | 焼土粒子・炭化粒子中量, ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック少量, 炭化物微量    | 9 暗褐色     | ロームブロック・焼土粒子中量         |
| 3 暗褐色    | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 10 におい黄褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量      |
| 4 暗褐色    | ロームブロック中量           | 11 暗褐色    | ロームブロック少量              |
| 5 黒褐色    | ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 | 12 褐色     | ロームブロック中量              |
| 6 におい黄褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量   | 13 におい黄褐色 | ロームブロック中量              |
| 7 におい黄褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量   | 14 褐色     | ロームブロック少量              |

**遺物出土状況** 土師器片642点(坏201・高台付碗8・蓋2・皿4・甕類427)、須恵器片79点(坏22・蓋6・皿1・盤1・甕類43・甌6)、灰釉陶器片5点(碗1・皿4)金属製品1点(鉸具<sub>カ</sub>)、壁材カ1点(2040g)のほか、陶器片1点(碗)が、全域に散在した状態で出土している。土器は、大型の破片が主に覆土下層から出土している。234・238は細片であることから流入と考えられる。242・243は接合関係が良好な大型から中型の破片で、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。239は完形品で床面から出土していることから、遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。

**第23号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第91図)**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
234	土師器	坏	-	(1.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	におい橙	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL37 [ ] 墨書
235	土師器	坏	-	(3.5)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL37 [ ] 墨書



第91図 第23号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
236	土師器	坏	-	(1.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL36 「□」墨書
237	土師器	坏	-	(1.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	内面横位の磨き 黒色処理	覆土中	5% PL37 「□」墨書
238	土師器	坏	[13.8]	4.1	[7.3]	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面二方向の磨き	覆土中	20% PL37 「□鳥」墨書
239	土師器	坏	15.2	4.6	7.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向の削り	床面	100%
240	土師器	高台付椀	-	(5.9)	9.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内面横位の磨き 底部内面多方向の磨き	覆土下層	40%
241	灰釉陶器	碗	-	(1.5)	-	緻密 白色粒子・黒色粒子	灰白 明オリブ灰	良好	外・内面灰釉漬け掛け	覆土中層	5% PL38 折戸53式。
242	灰釉陶器	皿	[16.2]	3.2	7.0	緻密 白色粒子・黒色粒子	灰白 明オリブ灰	良好	外・内面灰釉ハケ塗り 重焼き痕	覆土下層	50% PL38 折戸53式
243	土師器	小形甕	12.2	13.7	8.6	長石・石英・細礫	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横・斜位のナデ 後中位以下にヘラ削り 指頭痕 体部内面横位のナデ底部多方向の削り	竈火床面	90% PL33 煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	鉸具	(3.6)	3.8	0.6	(33.36)	鉄	二枚板貼付 リング状の金具貼付	覆土中	PL41

第25号竪穴建物跡 (第92・93図)

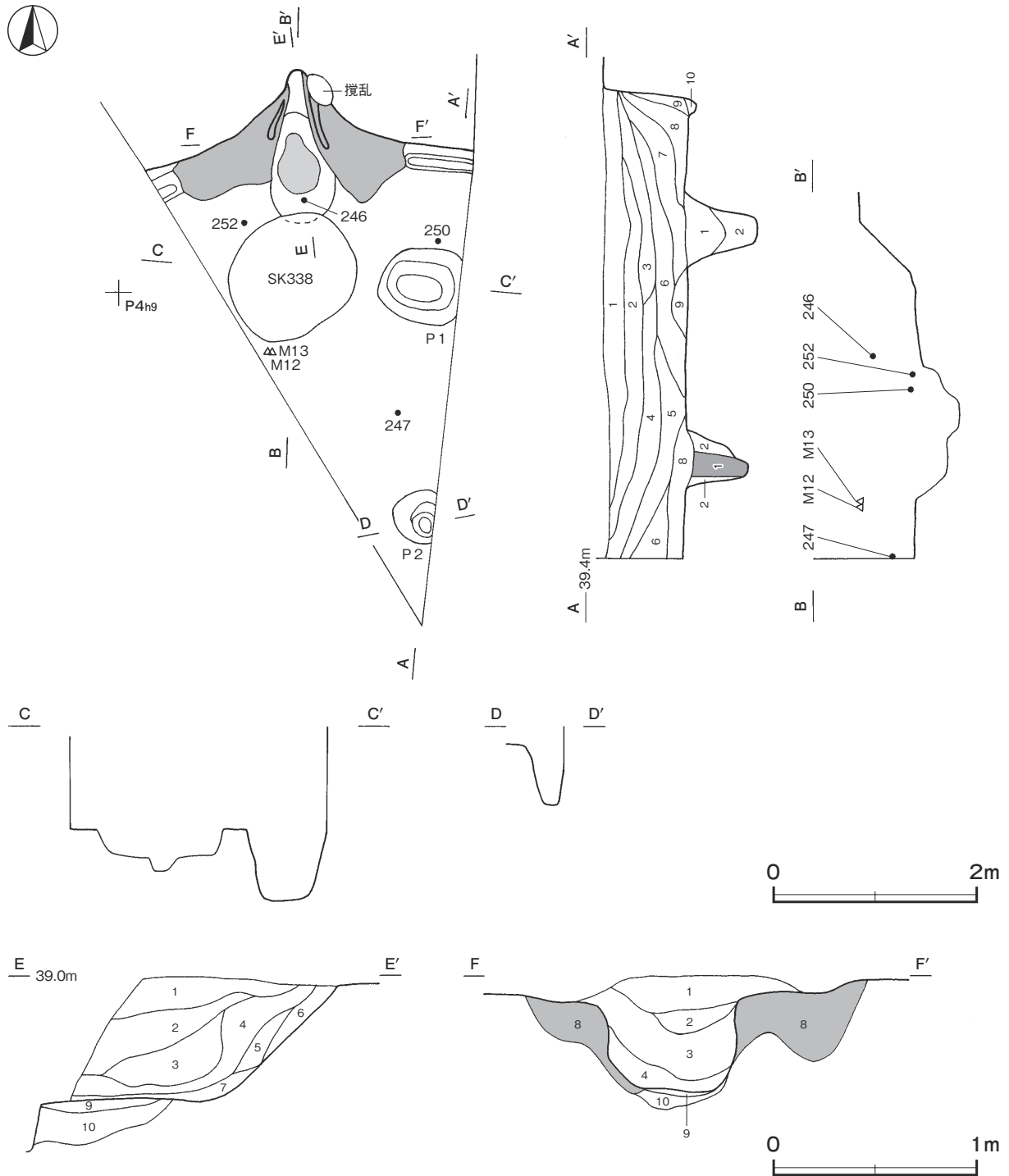
位置 調査区中央部のP4g9区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第338号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部や南部、西部が調査区域外へ延びていることから、南北軸は4.58m、東西軸は3.00mしか確認できなかった。他の竪穴建物の形状から、方形もしくは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁は高さ74～80cmで、直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。大半部が調査区域外へ延びていることから、確認できた部分では、壁溝が巡っている。

**竈** 北壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。第338号土坑に掘り込まれていることから、焚口部



第92図 第25号竪穴建物跡実測図

から煙道部まで148cmしか確認できなかった。燃焼部の幅は60cmである。燃焼部は床面から深さ22cm掘りくぼめられ、第9・10層で埋め戻されている。袖部は、第10層の上面に第8層を積み上げて構築している。火床面は第9・10層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に94cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第5～7層は煙道からの流入土、第3・4層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。第1・2層は廃絶後の覆土である。

**竈土層解説**

- |          |                    |           |                     |
|----------|--------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック微量          | 6 暗褐色     | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量 | 7 にぶい赤褐色  | 焼土ブロック中量            |
| 3 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 | 8 灰黄褐色    | 粘土ブロック多量            |
| 4 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量, 粘土ブロック中量 | 9 にぶい赤褐色  | 焼土土ブロック・炭化物中量       |
| 5 暗褐色    | 焼土粒子中量, ロームブロック少量  | 10 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |

**ピット** 2か所。P1は深さ70cm, P2は深さ58cmで、配置から支柱穴の可能性はある。P1は2層に分層でき、柱材の抜き取り後の覆土と考えられる。P2は2層に分層でき、第2層は埋土、第1層は柱痕跡である。

**ピット土層解説 (P1)**

- |       |           |       |                  |
|-------|-----------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 |
|-------|-----------|-------|------------------|

**ピット土層解説 (P2)**

- |       |         |          |                 |
|-------|---------|----------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量 | 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス中量 |
|-------|---------|----------|-----------------|

**覆土** 10層に分層できる。第5～9層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1～4層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第10層は壁溝の覆土である。

**土層解説**

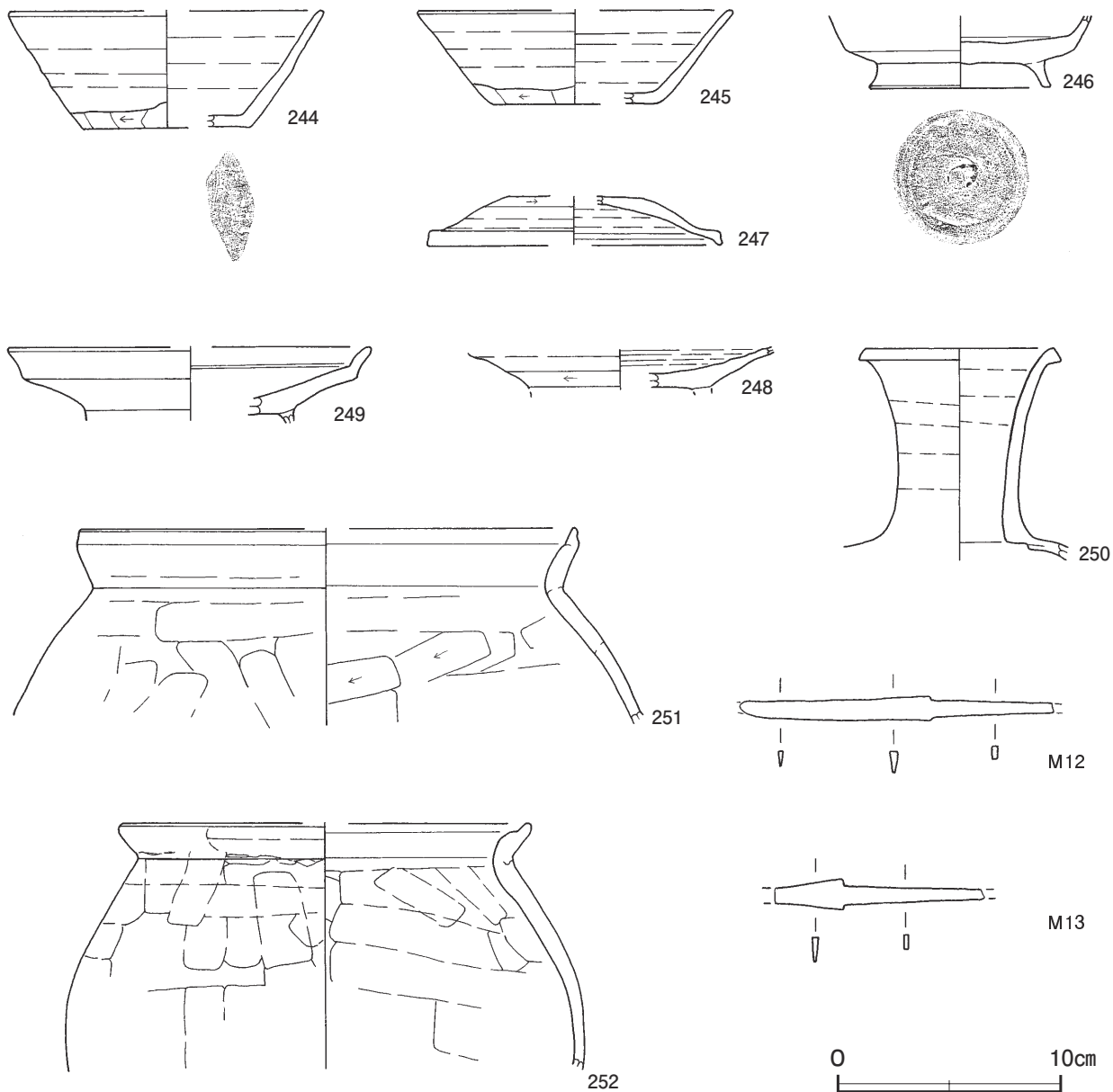
- |       |                        |        |                      |
|-------|------------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量                | 6 暗褐色  | ロームブロック少量, 焼土粒子微量    |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量           | 7 暗褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子微量    |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量        | 8 暗褐色  | ロームブロック・焼土ブロック中量     |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子微量        | 9 暗褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量            |

**遺物出土状況** 土師器片508点(坏8・皿1・鉢2・甕類496・甌1), 須恵器片215点(坏110・高台付坏2・蓋37・皿1・盤1・長頸瓶2・甕類60・甌2), 金属製品2点(刀子)ほか、陶器片1点(瓶)が、主に覆土中層以下の全域に散在した状態で出土している。土器は中型から小型の破片が多く、接合関係に乏しいことから、埋め戻しに伴って破損した土器が投棄されたものと考えられる。244・245は細片あることから、埋没する過程で流入したものと考えられる。M12・M13は遺存状態が良好で、覆土上層から出土していることから、意図的に投棄された可能性がある。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第25号竪穴建物跡出土遺物観察表(第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
244	須恵器	坏	[13.7]	5.2	[7.3]	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向の削り	覆土中	10% 堀ノ内窯
245	須恵器	坏	[13.8]	4.1	[7.2]	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向の削り	覆土中	10% 堀ノ内窯
246	須恵器	高台付坏	-	(32)	7.8	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	底部高台部貼付後ナデ	覆土上層	30% 堀ノ内窯
247	須恵器	蓋	[13.0]	(21)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	10% 堀ノ内窯
248	須恵器	皿	-	(16)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部高台部貼付痕	覆土中	20% 堀ノ内窯
249	須恵器	盤	[16.0]	(34)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内面口唇部に沿って円状のナデ沈線	覆土中	20%
250	須恵器	長頸瓶	8.3	(9.4)	-	長石・針状物質・黒色光沢粒子	褐灰	良好	頸部に三段の接合痕	覆土下層	30% PL38 木葉下窯
251	土師器	甕	[21.8]	(8.6)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後横位のナデ 体部内面横・斜位のナデ	覆土中	30%
252	土師器	甕	[18.1]	(10.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ 体部内面横・斜位のナデ	覆土下層	30%



第 93 図 第 25 号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 12	刀子	(13.8)	1.1	0.4	(12.67)	鉄	刃部先端欠損 刃部断面三角 茎部一部欠損 両閃	覆土上層	PL41
M 13	刀子	(9.3)	1.4	0.3	(6.12)	鉄	刃部一部欠損 刃部断面三角 茎部一部欠損 両閃	覆土上層	PL41

### 第 27 号竪穴建物跡 (第 94・95 図)

**位置** 調査区北西部の O 4 i4 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 30 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 西半部が調査区域外に延びていることから, 南北軸は 1.80 m, 東西軸は 1.52 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形で, 主軸方向は N - 4° - E と推定できる。壁は高さ 28 ~ 32cm で, ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、北東コーナー部を除いて踏み固められている。貼床は、第7層を8～12cm埋め戻して構築している。確認できた部分では、壁溝が、竈付近を除いて巡っている。

**竈** 北壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。焚口部から煙道部まで110cm、燃烧部の幅は調査区域外へ延びていることから、25cmしか確認できなかった。燃烧部は床面から深さ10cm掘りくぼめられ、第8層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第8層の上面に第5・6層を積み上げて構築している。火床面は第8層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、第7層が6cm貼り付けられている。火床部は平坦で、煙道部はほぼ直立している。第1～4層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。

**竈土層解説**

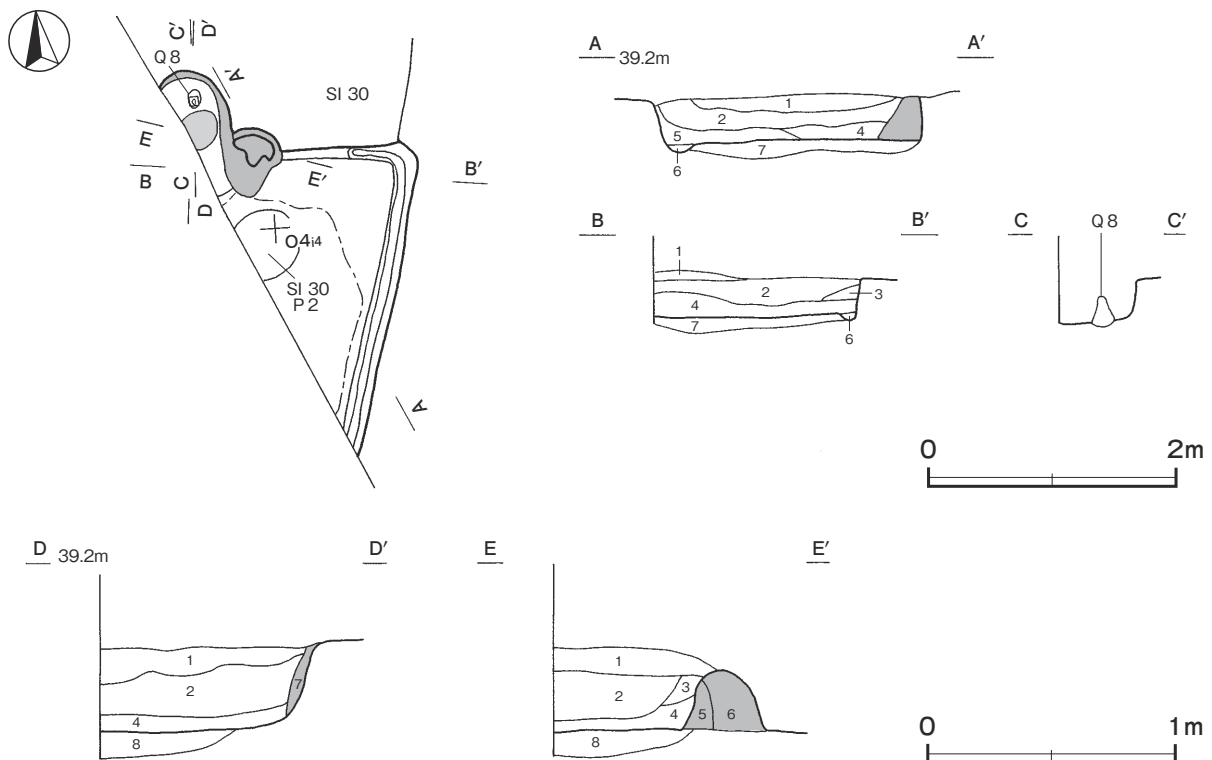
- |                            |                           |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量       | 5 灰黄褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量      | 6 灰黄褐色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック微量 | 7 暗赤褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量   |
| 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量     | 8 暗褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |

**覆土** 6層に分層できる。第2～5層はレンズ状の堆積状況から自然堆積、第1層はロームブロックが含まれていることから、埋没途中で埋め戻されている。第6層は壁溝の覆土、第7層は貼床の構築土である。

**土層解説**

- |                           |                    |
|---------------------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土ブロック微量   | 6 暗褐色 ローム粒子少量      |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量             | 7 暗褐色 ロームブロック中量    |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量     |                    |

**遺物出土状況** 土師器片62点(坏2・蓋1・甕類59), 須恵器片28点(坏21・蓋3・盤1・甕類3), 石製品1点(支脚)が、全域に散在した状態で出土している。土器は小型の破片が多く、斜位や逆位などの状態で

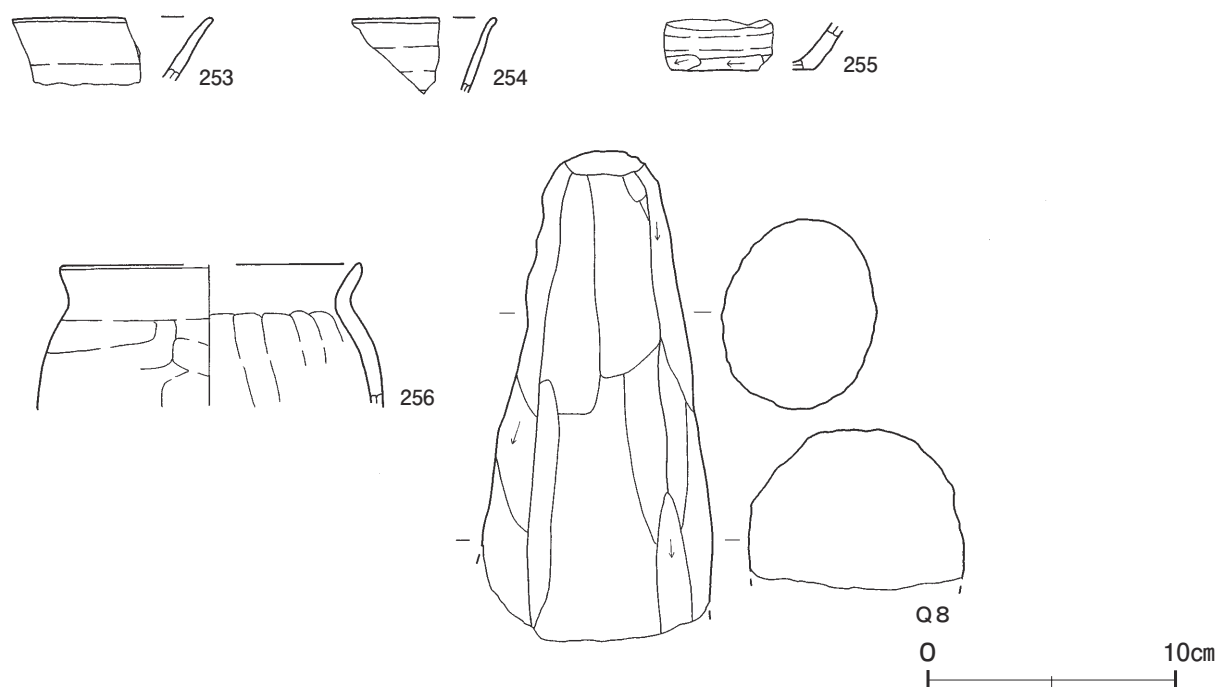


第94図 第27号竪穴建物跡実測図



出土していることから、埋没の過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第95図 第27号竪穴建物跡出土遺物実測図

第27号竪穴建物跡出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
253	須恵器	坏	-	(2.7)	-	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	ロクロナデ	覆土中	5% 堀ノ内窯
254	須恵器	坏	-	(3.0)	-	長石・黒色粒子・ 白色粒子	灰	良好	ロクロナデ	覆土中	5% 堀ノ内窯
255	須恵器	坏	-	(1.9)	-	長石・黒色粒子・ 白色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	5% 堀ノ内窯
256	土師器	小形甕	[11.8]	(5.6)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面縦位のナデ 体部外面横位のナデ	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	支脚	(19.4)	(9.0)	(6.6)	(784.3)	凝灰岩	一部破損 全面削り	竈火床面	PL40

### 第28号竪穴建物跡（第96・97図）

位置 調査区北西部のO4j6区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長軸3.29m、短軸2.98mの方形で、主軸方向はN-15°-Eである。壁は高さ36~42cmで、ほぼ直立している。

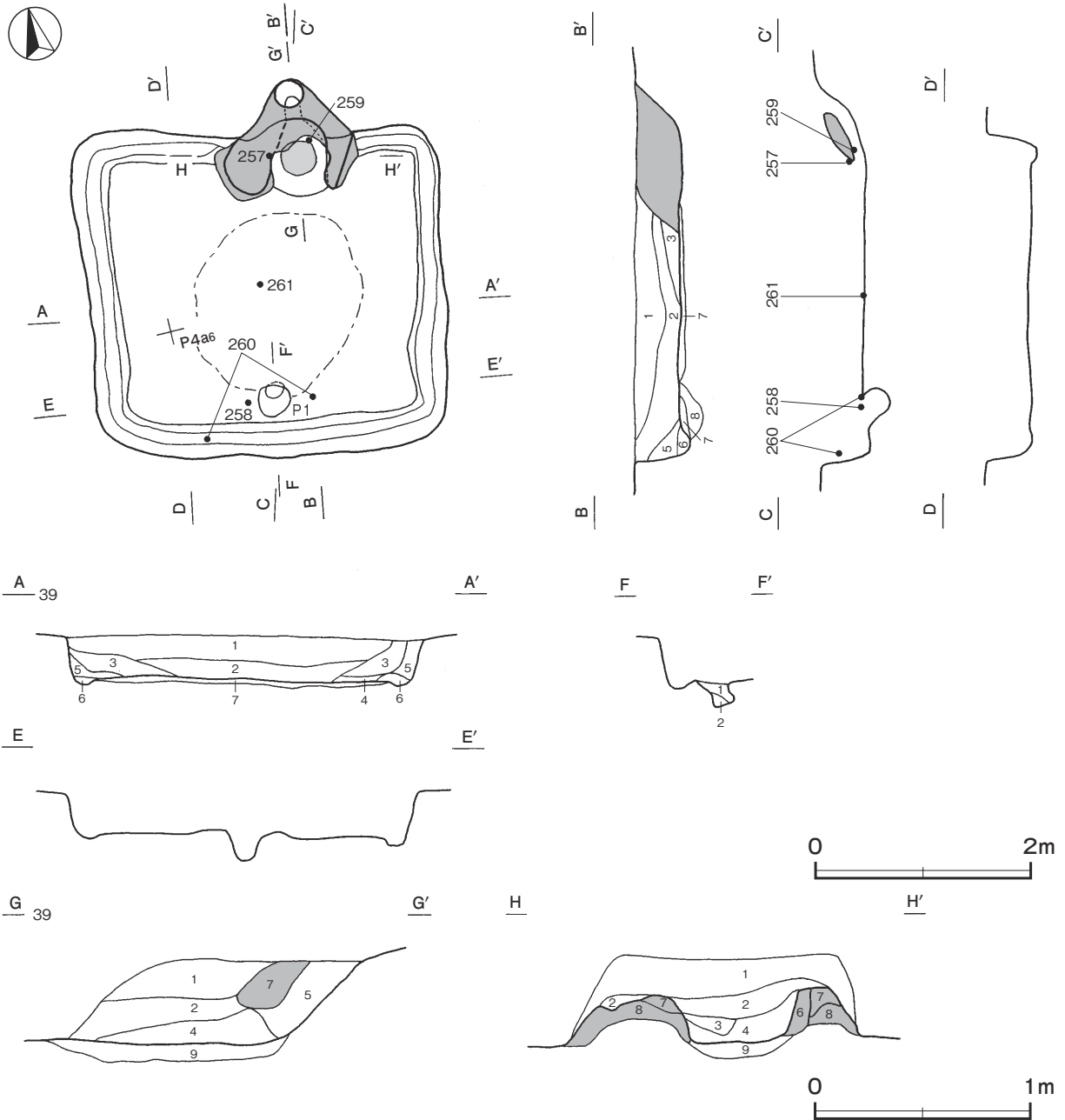
床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第7・8層を4~22cm埋め戻して構築している。壁溝が、全周している。

竈 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで102cm、燃焼部の幅46cmである。燃焼部は床面から深さ11cm掘りくぼめられ、第9層で埋め戻されている。袖部は地山を高さ7~11cm掘り残し、床面及び地山上に第6~8層を積み上げて構築している。天井部の一部は残存しており、第7層を用いて構築され

ている。火床面は第9層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に52cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第5層は煙道からの流入土、第3・4層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから、焚口部の天井は壊されている。第1・2層は廃絶後の覆土である。

竈土層解説

- |        |                    |        |                     |
|--------|--------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック少量          | 6 灰黄色  | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量  |
| 2 黒褐色  | 粘土ブロック少量, ローム粒子微量  | 7 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色  | 焼土ブロック・粘土ブロック中量    | 8 暗褐色  | 粘土ブロック多量            |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量 | 9 暗褐色  | ロームブロック・焼土ブロック少量    |
| 5 暗褐色  | 粘土ブロック・ローム粒子少量     |        |                     |



第96図 第28号竈穴建物跡実測図



番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
260	須恵器	高台付坏	14.2	5.8	9.2	長石・黒色粒子・白色粒子	灰	良好	高台部畳付に棒状の圧痕7か所	覆土中層 覆土下層	95% PL34 堀ノ内窯
261	須恵器	蓋	15.1	2.9	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄褐	良好	天井部回転ヘラ削り後ナデ 重焼き痕	床面	95% PL35 堀ノ内窯

### 第29号竪穴建物跡（第98・99図）

**位置** 調査区北西部のO4i5区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長軸3.75m、短軸3.54mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁は高さ29～40cmで、直立している。

**床** 平坦な貼床で、竈の前方部からP3付近にかけて中央部が踏み固められている。貼床は、第7・8層を3～18cm埋め戻して構築している。壁溝が全周しているが、北東コーナー部では壁から20cm内側に掘り込まれている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで92cm、燃焼部の幅45cmである。燃焼部は床面から深さ26cm掘りくぼめられ、第8～11層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第8・9層の上面に第5・6層を積み上げて構築している。火床面は第8・9層の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に42cm掘り込まれ、第7層が10～26cm貼り付けられている。火床部は平坦で、煙道部は外傾している。第3・4層は天井部材の崩落土であるが、不規則な堆積をしていることから、壊されている。第1・2層は竈廃絶後の覆土である。

#### 竈土層解説

- |        |                   |           |                    |
|--------|-------------------|-----------|--------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック・粘土ブロック少量  | 7 褐灰色     | 焼土ブロック中量、粘土ブロック少量  |
| 2 暗褐色  | ロームブロック・焼土ブロック微量  | 8 暗赤褐色    | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 3 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 9 黒褐色     | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 4 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック微量 | 10 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量   |
| 5 褐灰色  | 粘土ブロック少量          | 11 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量          |
| 6 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック微量 |           |                    |

**ピット** 3か所。P1・P2は深さ20cmで、柱穴の可能性はあるが、不明である。P3は深さ17cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。覆土はP1が3層、P2・P3が2層に分層できる。第2・3層は埋土、第1層は柱材を抜き取った後の覆土と考えられる。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

- |          |           |      |           |
|----------|-----------|------|-----------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量 | 3 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |      |           |

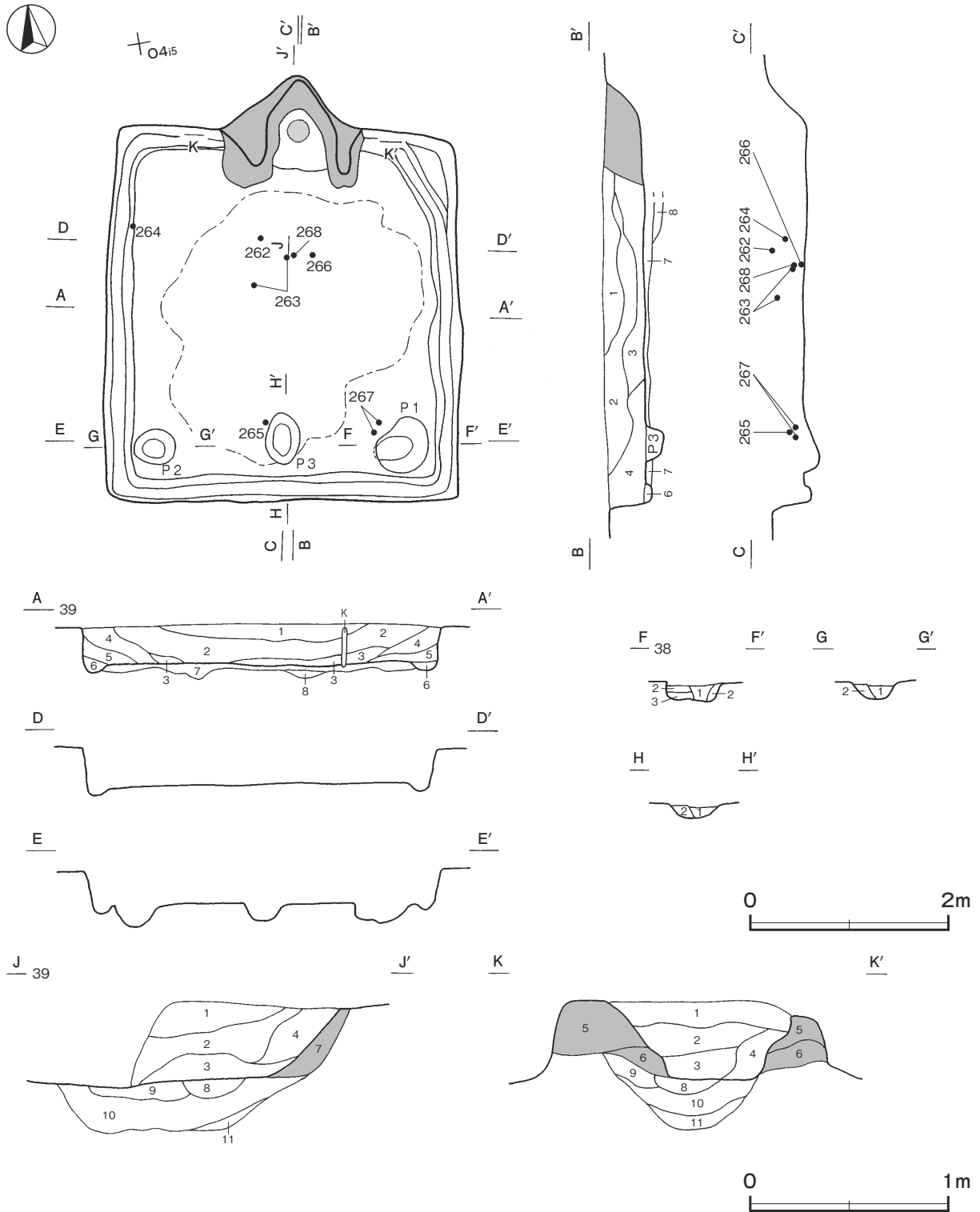
**覆土** 6層に分層できる。第1～5層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第6層は壁溝の覆土、第7・8層は貼床の構築土である。

#### 土層解説

- |          |                       |       |                  |
|----------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量、焼土ブロック微量    | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色  | ロームブロック中量        |
| 3 暗褐色    | ロームブロック微量             | 7 褐色  | ロームブロック多量        |
| 4 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量      | 8 褐色  | ロームブロック少量        |

**遺物出土状況** 土師器片63点（坏2・蓋1・皿1・甕類59）、須恵器片28点（坏21・蓋3・盤1・甕類3）、土製品1点（支脚）が、主に中央部や南壁際から出土している。土器は中型の破片で、接合関係に乏しいことから、破損した土器が投棄されたものと考えられる。

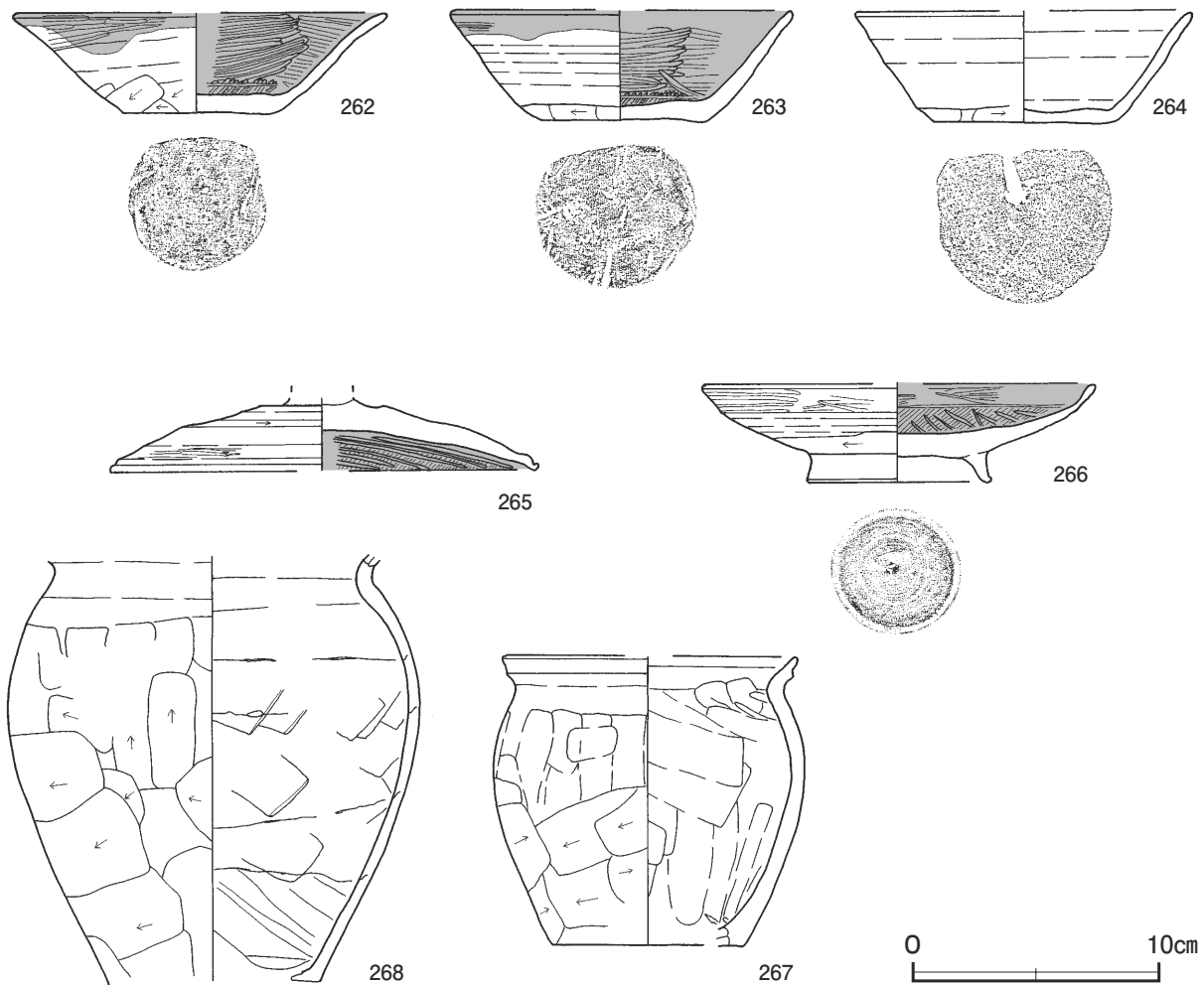
所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第98図 第29号竪穴建物跡実測図

第29号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
262	土師器	坏	[14.8]	4.0	5.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部二方向の削り 内面二方向の磨き 後見込み外周に沿って凹状の磨き	覆土上層	40%



第 99 図 第 29 号 豎穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
263	土師器	坏	[13.6]	4.4	6.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部二方向の削り 底部内面 二方向の磨き後見込み外周に沿って凹状の磨き	覆土上層 覆土中層	50%
264	須恵器	坏	[13.4]	4.4	7.2	長石・石英・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向の削り	覆土上層	40% 堀ノ内窯
265	土師器	蓋	[17.0]	(2.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き 口縁部外・内面横位の磨き	覆土中層	20%
266	土師器	皿	[15.6]	3.9	7.2	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部下端回転ヘラ 削り 体部内面二方向の磨き、口唇部に沿って 凹状のナデ沈線	覆土下層	50%
267	土師器	小形甕	[11.6]	11.5	[11.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後 中位以下削り 体部内面縦・斜位のナデ	覆土中層	40%
268	土師器	小形甕	-	(17.1)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	頸部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後 中位以下削り 体部内面斜位のナデ	覆土下層	40%

### 第 31 号 豎穴建物跡 (第 100・101 図)

**位置** 調査区北西部の O4j4 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 南部と西部の大半が調査区域外に延びていることから、南北軸は 2.30 m、東西軸は 1.90 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形で、主軸方向は N-8°-E と推定できる。壁は高さ 20~25cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、壁際を除いて踏み固められている。貼床は、第 7・8 層を 8~20cm 埋め戻して構築している。確認できた部分では、壁溝が巡っている。

**竈** 北壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。南西部が調査区外に延びていることから、焚口部から煙道部までは106cm、燃焼部の幅は44cmしか確認できなかった。燃焼部は床面の深さとほぼ同じで、平坦である。袖部は、床面に灰黄褐色の粘土を積み上げて構築している。火床面は地山の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に63cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第4層は煙道からの流入土、第3層は天井部材の崩落土であることから、自然に崩落している。第1・2層は竈崩落後の覆土である。

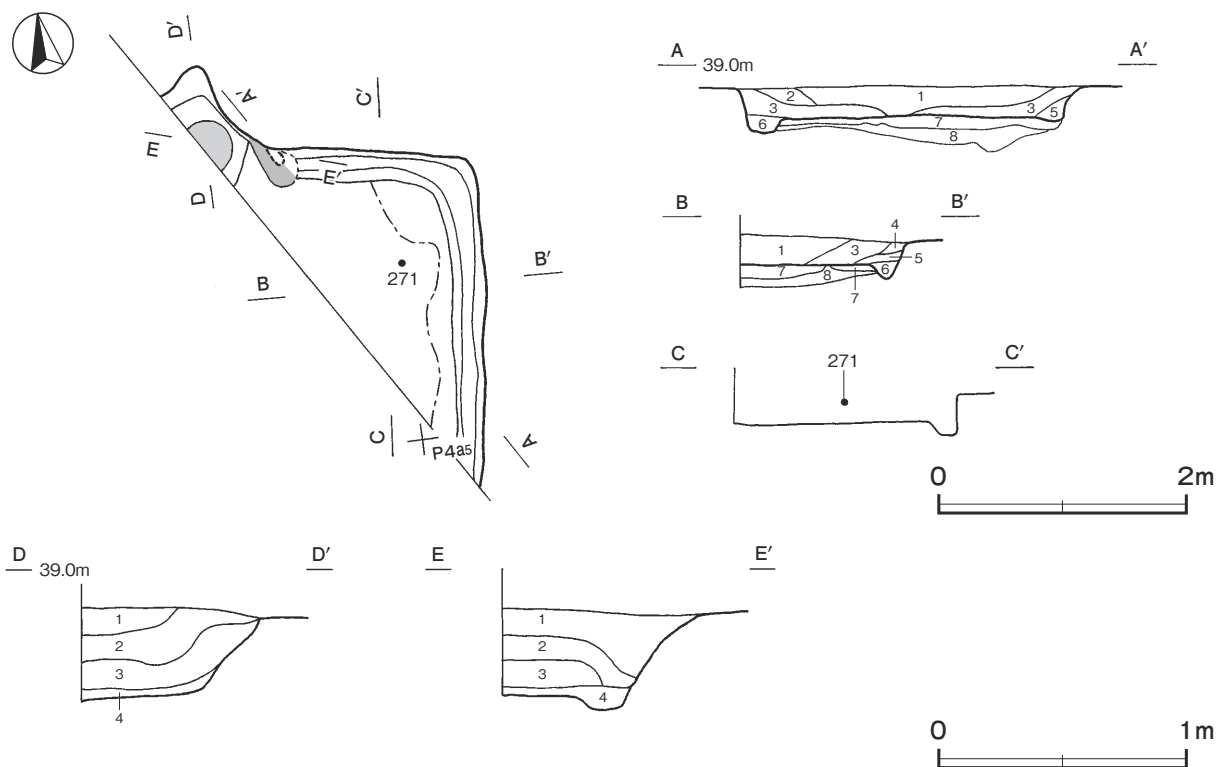
**竈土層解説**

- |       |                 |        |                          |
|-------|-----------------|--------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 3 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量  | 4 黒褐色  | 焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量    |

**覆土** 6層に分層できる。第1～5層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第6層は壁溝の覆土、第7・8層は貼床の構築土である。

**土層解説**

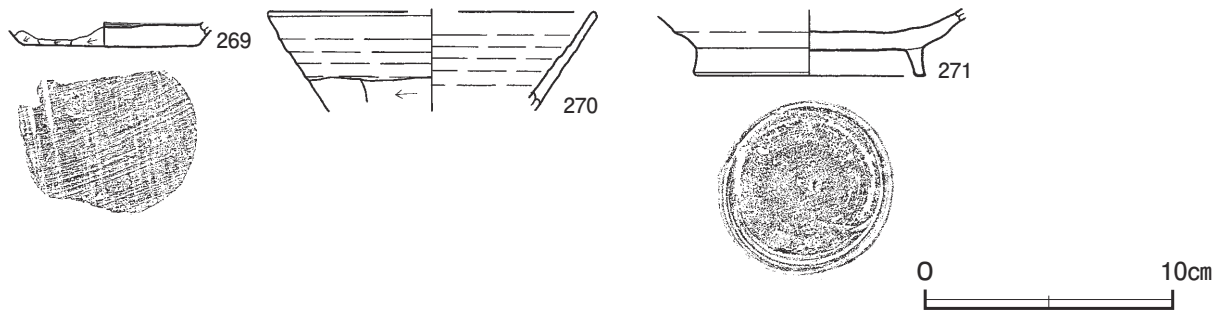
- |         |           |       |           |
|---------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色   | ローム粒子中量   | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色   | ローム粒子少量   | 6 褐色  | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色   | ローム粒子微量   | 7 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 ぶい黄褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック微量 |



第100図 第31号竪穴建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片19点(坏5・皿1・甕類13)、須恵器片25点(坏22・高台付坏1・盤1・甕類1)が、全域に散在した状態で出土している。土器片は主に中型の破片で、覆土中層から下層にかけて出土していることから、破損した土器が埋没の過程で投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。須恵器片と共に出土している土師器片の坏には、内面の磨きや黒色処理がされていない。



第 101 図 第 31 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 31 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 101 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
269	土師器	坏	-	(1.0)	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい明赤褐	普通	体部下端手持ちへら削り。底部二方向の削り。底部内面見込み外周に沿って円状のナデ	覆土中	10%
270	須恵器	坏	[13.0]	(4.0)	-	長石・白色粒子・黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちへら削り	覆土中	20% 堀ノ内窯
271	須恵器	高台付坏	-	(2.6)	9.0	長石・雲母・白色粒子・黒色粒子	灰	良好	底部高台貼付後ナデ	覆土中層	30% 堀ノ内窯

### 第 32 号竪穴建物跡 (第 102 図)

**位置** 調査区北西部の N 3e7 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 南部から西部の大半が調査区域外に延びていることから、南北軸は 2.80 m、東西軸は 1.32 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形で、主軸方向は N-4°-W と推定できる。壁は高さ 34~54cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、壁際を除いた北東部が踏み固められている。貼床は、第 6 層を 8~16cm 埋め戻して構築している。壁溝は、確認できなかった。

**竈** 北壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。西部が調査区域外に延びていることから、焚口部から煙道部までは 98cm、燃焼部の幅は 8cm しか確認できなかった。燃焼部は床面の深さとほぼ同じで、平坦である。火床面は地山の上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 70cm 掘り込まれ、火床部から外傾している。第 3~5 層はロームブロックや焼土ブロックが含まれていることや、袖部が確認できなかったことから、壊されている。第 1・2 層は廃絶後の覆土である。

#### 竈土層解説

- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量     | 4 暗褐色 ロームブロック少量          |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量            | 5 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |                          |

**覆土** 5 層に分層できる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第 6 層は、貼床の構築土である。

#### 土層解説

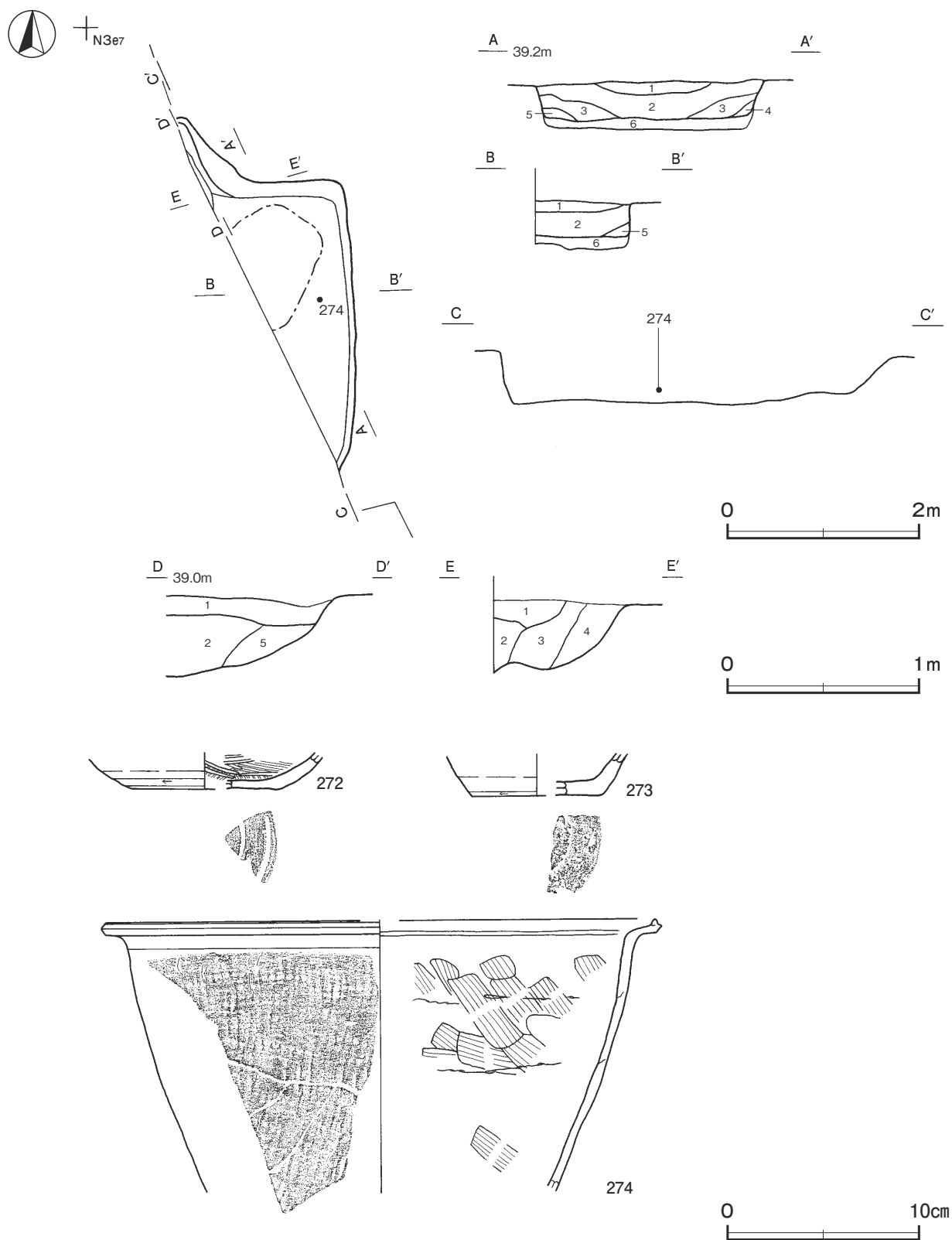
- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量   | 4 暗褐色 ロームブロック微量    |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量    |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量   | 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |

**遺物出土状況** 土師器片 25 点 (坏 10・高台付碗 1・甕類 14)、須恵器片 23 点 (坏 15・高台付坏 1・蓋 3・鉢 1・甕類 3)、金属製品 1 点 (不明)、鉄滓 1 点 (108.3 g) のほか、土師質土器 1 点 (焙烙) が、全域に散在した状態で出土している。土器は接合関係が乏しい小型の破片で、覆土の全層位から出土していることから、埋没



の過程で破損した土器が投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第 102 図 第 32 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 32 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 102 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
272	土師器	坏	-	(18)	[7.6]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面多方向の磨き	覆土中	10%
273	須恵器	坏	-	(21)	[6.6]	長石・白色粒子・黒色粒子	灰	良好	体部下端回転ヘラ削り 底部ヘラ切り後多方向のナデ	覆土中	10% 堀ノ内窯
274	須恵器	鉢	[28.2]	(13.9)	-	長石・雲母・白色粒子・黒色粒子	灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の平行叩き 体部内面5条1単位の斜位のヘラナデ 輪積み痕	覆土下層	10% 堀ノ内窯カ

表 6 平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	(m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴					
1	X 7 a8	N - 6° - E	方形	3.36 × 3.23	30 ~ 36	平坦	一部	-	1	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀前葉	本跡→SB 6・26, SK 6		
4	T 6 d0	N - 16° - E	方形	3.34 × 3.28	26 ~ 35	平坦	一部	-	2	32	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 土製品	9世紀後葉			
5	T 6 c9	N - 2° - E	[方形・長方形]	3.86 × (2.02)	28 ~ 40	平坦	一部	-	-	1	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀後葉			
6	T 7 f3	不明	[長方形]	4.50 × 3.60	26 ~ 36	凹凸	一部	-	-	2	-	-	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	9世紀後葉	本跡→SK56		
7	T 7 f1	N - 6° - E	[方形]	3.70 × 3.53	24 ~ 32	平坦	ほぼ全周	-	-	3	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 椀形埴	9世紀中葉	本跡→SI 8		
8	T 7 f1	N - 106° - E	[方形]	3.69 × (2.75)	24 ~ 29	平坦	ほぼ全周	-	-	-	北壁東壁	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀中葉	SI 7→本跡→SK71		
9	T 7 j2	N - 6° - E	方形	3.46 × 3.38	26 ~ 30	平坦	一部	-	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀中葉			
10	T 7 j3	N - 16° - E	方形	3.60 × 3.38	15 ~ 18	平坦	全周	-	-	3	北壁東壁	-	自然	土師器, 須恵器	10世紀前葉	本跡→第1号墓坑・SK102		
11	T 6 b0	N - 6° - E	方形	2.64 × 2.40	25 ~ 30	平坦	ほぼ全周	-	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀前葉			
13	S 6 j0	N - 28° - E	方形	3.52 × 3.48	30 ~ 40	平坦	全周	-	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀前葉	本跡→SI14		
14	T 6 a0	N - 12° - E	方形	3.62 × 3.44	32 ~ 38	平坦	全周	-	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀後葉	SI13→本跡		
15	S 6 b4	N - 96° - E	方形	2.95 × 2.70	8 ~ 20	平坦	-	-	-	4	東壁	-	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	9世紀後葉	本跡→SE 7		
16	R 5 d0	N - 1° - E	方形	3.50 × 3.42	30 ~ 36	平坦	全周	-	1	2	北壁	-	自然 人為	須恵器, 石器, 金属製品	9世紀前葉			
17	R 6 d1	N - 14° - E	方形	3.81 × 3.78	34 ~ 40	平坦	ほぼ全周	-	1	3	北壁	-	自然	土師器, 灰釉陶器, 金属製品	9世紀後葉	本跡→SK176・193		
18	R 5 c9	N - 3° - E	方形	3.62 × 3.24	40 ~ 46	平坦	一部	-	1	3	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 金属製品	9世紀中葉	本跡→SK163・188		
19	R 5 b9	N - 4° - E	長方形	3.46 × 3.01	46 ~ 50	平坦	ほぼ全周	-	1	2	北壁中央	-	人為	須恵器	9世紀前葉	本跡→SB15・19		
20	Q 5 e5	N - 6° - E	長方形	3.48 × 2.57	33 ~ 46	平坦	ほぼ全周	-	1	-	北壁	-	人為	須恵器	9世紀前葉			
22	P 5 f1	不明	[方形・長方形]	3.46 × (2.12)	30 ~ 35	平坦	一部	-	1	-	-	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀後葉	本跡→SK255		
23	P 5 g1	N - 6° - W	[方形・長方形]	5.08 × (3.03)	45 ~ 63	平坦	一部	2	1	1	北壁	-	自然 人為	土師器, 灰釉陶器, 金属製品	9世紀後葉			
25	P 4 g9	不明	[方形・長方形]	(4.58) × (3.00)	74 ~ 80	平坦	一部	2	-	-	北壁	-	自然 人為	土師器, 須恵器, 金属製品	9世紀前葉	本跡→SK338		
27	O 4 i4	[N - 4° - E]	[方形・長方形]	(1.80) × (1.52)	28 ~ 32	平坦	一部	-	-	-	北壁	-	自然 人為	土師器, 須恵器, 石器	9世紀前葉	SI30→本跡		
28	O 4 j6	N - 15° - E	方形	3.29 × 2.98	36 ~ 42	平坦	全周	-	1	-	北壁	-	人為	須恵器	9世紀前葉			
29	O 4 i5	N - 12° - E	方形	3.75 × 3.54	29 ~ 40	平坦	全周	-	1	2	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀中葉			
31	O 4 j4	[N - 8° - E]	[方形・長方形]	(2.30) × (1.90)	20 ~ 25	平坦	一部	-	-	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀前葉			
32	N 3 e7	[N - 4° - W]	[方形・長方形]	(2.80) × (1.32)	34 ~ 54	平坦	-	-	-	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀後葉			

(2) 掘立柱建物跡

第 14 号掘立柱建物跡 (第 103 図)

位置 調査区中央部の R 6 f1 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と構造 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡で, 桁行方向が N - 6° - E の南北棟である。規模は, 桁行 5.10 m, 梁行 3.60 m で, 面積は 18.36 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行の北妻側と南妻側が 1.80 m (6 尺), 中央間が 1.50 m (5 尺), 梁行は 1.80 m (6 尺) で, 柱筋はほぼ揃っている。

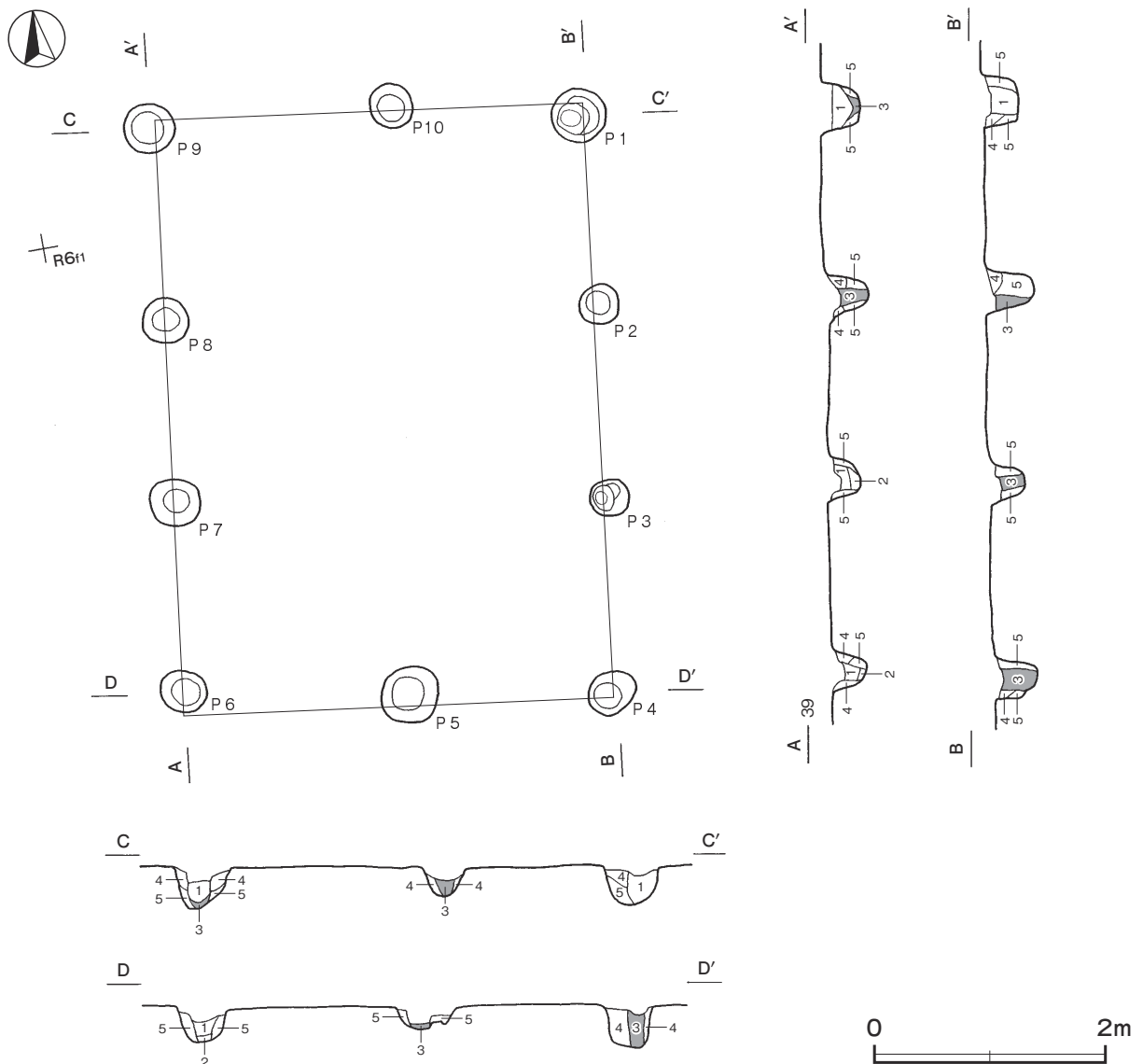
柱穴 10 か所。平面形は円形もしくは楕円形で, 長径 34 ~ 52 cm, 短径 31 ~ 50 cm である。深さは 18 ~ 40 cm で,

掘方の壁はほぼ直立している。第4・5層は埋土、第3層は柱痕跡、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。柱痕跡から、柱は直径14～18cmと推定できる。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量    | 4 にぶい黄褐色 ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量    | 5 暗褐色 ロームブロック少量    |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 |                    |

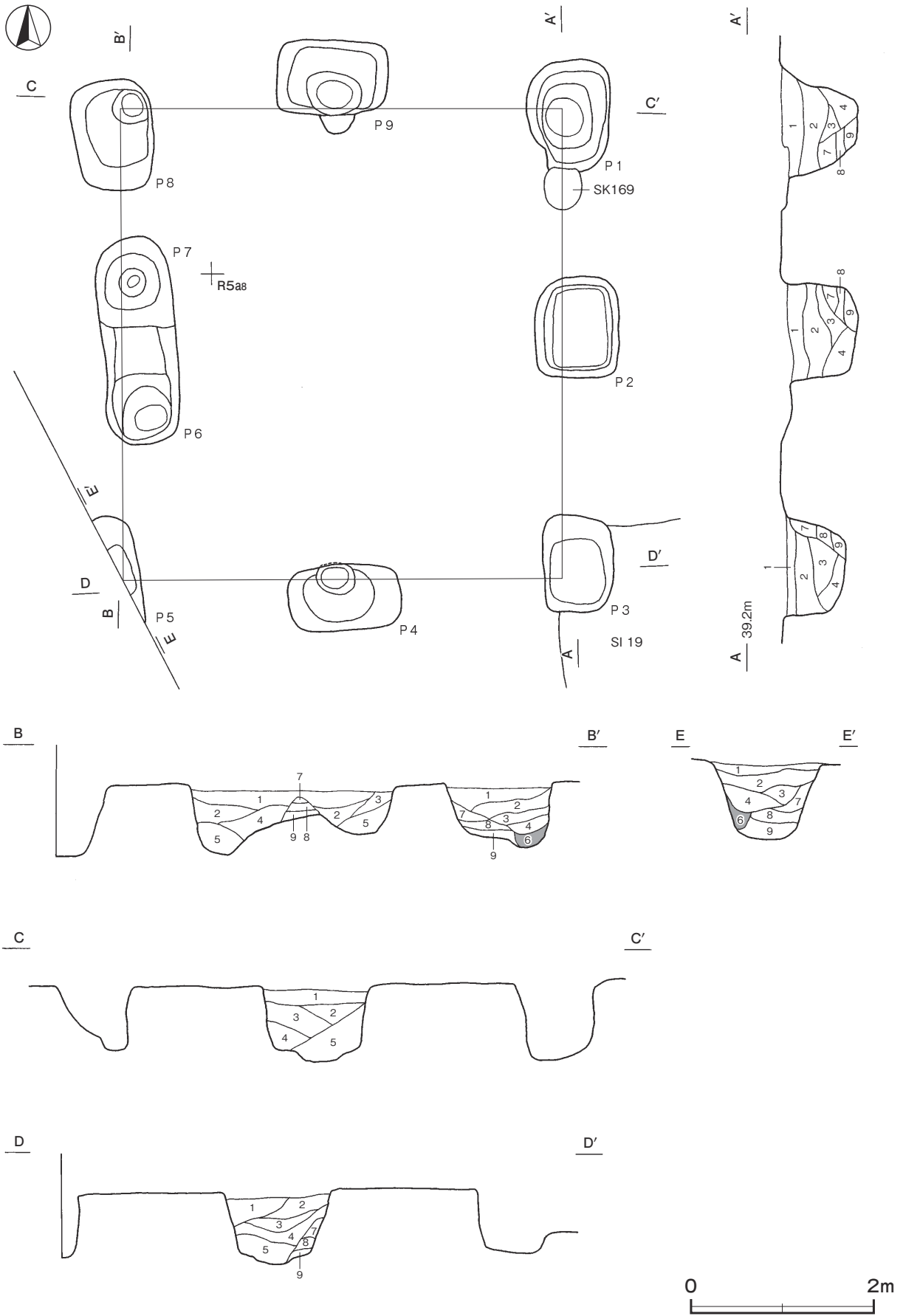
遺物出土状況 土師器片3点（甕）が、P4・P9から出土している。細片であることから、図示できない。  
 所見 時期は、柱間寸法に規格性があるものの、柱穴の規模が周辺の掘立柱建物跡より小規模であることや、桁行方向が第17号竪穴建物跡の主軸方向と近似するから、9世紀後葉と考えられる。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。



第103図 第14号掘立柱建物跡実測図

第15号掘立柱建物跡（第104図）

位置 調査区中央部のR5a8区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。



第 104 图 第 15 号掘立柱建物跡実測図

**重複関係** 第19号竪穴建物跡を掘り込み、第169号土坑に掘り込まれている。

**規模と構造** 東側桁行2間、西側桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-1°-Eの南北棟である。規模は、桁行5.10m、梁行4.80mで、面積は24.48㎡である。柱間寸法は、東側桁行が北妻側から2.40m(8尺)、2.70m(9尺)、西側桁行が北妻側から1.80m(6尺)、1.50m(5尺)、1.80m(6尺)、梁行は2.40m(8尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 9か所。平面形は隅丸長方形で、長軸104～223cm、短軸73～76cmである。深さは51～83cmで、掘方の壁は直立もしくはほぼ直立している。P6・P7は布掘りである。出入り口部の可能性があるが、不明である。第7～9層は埋土、第6層は柱痕跡、第1～5層は柱材を抜き取った後の覆土である。柱痕跡から、柱は直径30cmほどと推定できる。

**柱穴土層解説(各柱穴共通)**

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	6 黒褐色	炭化物少量、ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	7 におい黄褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	9 におい黄褐色	ロームブロック多量
5 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量		

**遺物出土状況** 土師器片8点(坏5・甕3)、須恵器片2点(坏1・甕1)が、P2・P4・P7・P8から出土している。細片であることから、図示できない。

**所見** 時期は、柱穴の平面形が第32号掘立柱建物跡に似ていることや、第19号竪穴建物跡との重複関係から、9世紀中葉と考えられる。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

**第16号掘立柱建物跡(第105図)**

**位置** 調査区中央部のQ5f7区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と構造** 北東部が調査区域外に延びているが、北側桁行2間、南側桁行3間、梁行2間の側柱建物跡と推定でき、桁行方向がN-89°-Wの東西棟である。確認できた規模は、桁行4.20m、梁行4.20mで、面積は17.64㎡と推定できる。柱間寸法は、北側桁行が2.10m(7尺)と推定でき、南側桁行が西妻側から1.50m(5尺)、1.20m(4尺)、15.0m(5尺)、梁行は2.10m(7尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

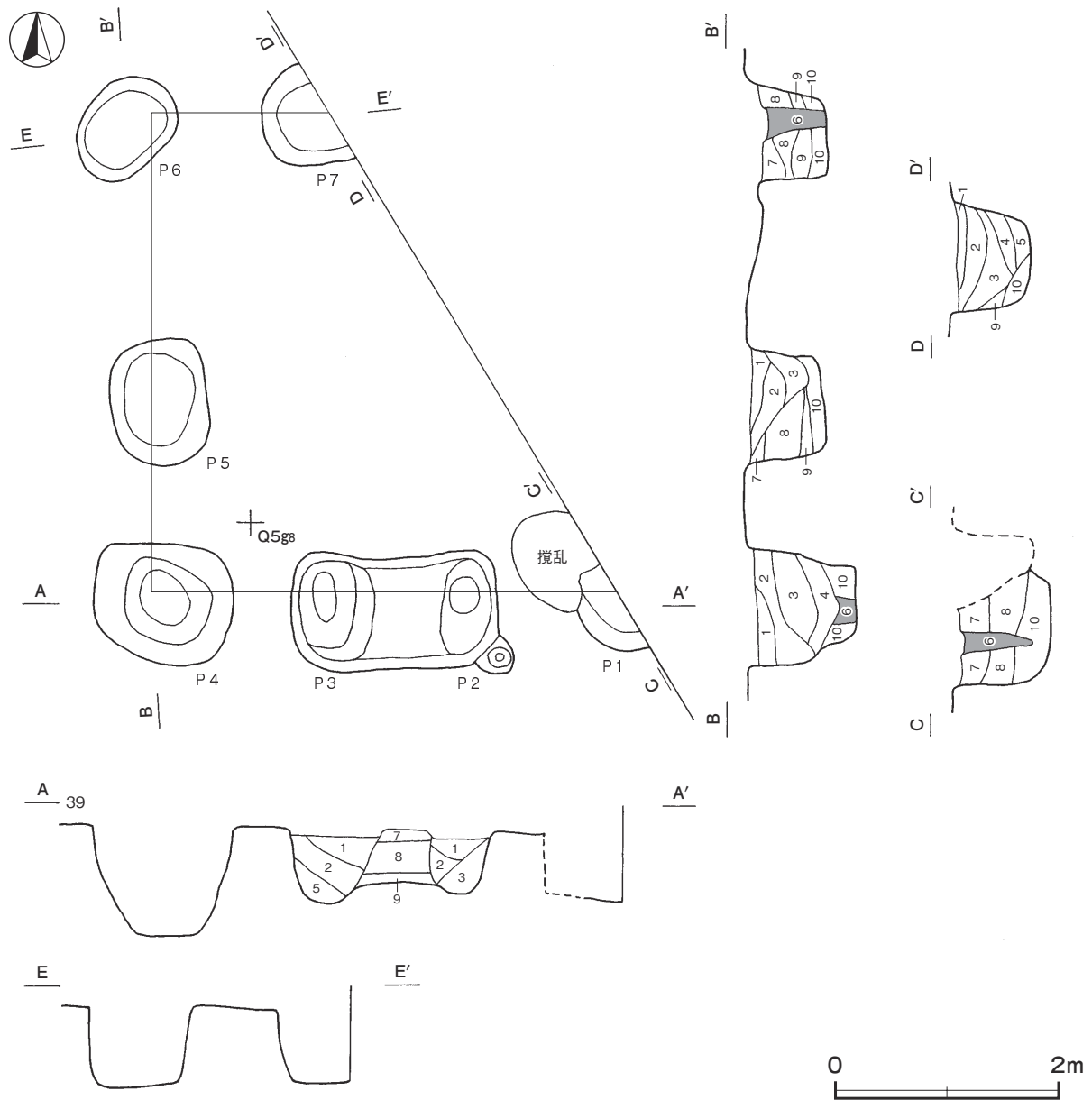
**柱穴** 7か所。平面形は楕円形もしくは隅丸長方形で、長径(軸)94～179cm、短径(軸)73～110cmである。深さは56～94cmで、掘方の壁は直立もしくはほぼ直立している。P2・P3は布掘りである。出入り口部の可能性があるが、不明である。第7～10層は埋土、第6層は柱痕跡、第1～5層は柱材の抜き取り後の覆土である。柱痕跡から、柱は直径18～22cmと推定できる。

**柱穴土層解説(各柱穴共通)**

1 におい黄褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	6 黒褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	7 におい黄褐色	ロームブロック多量
3 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	9 におい黄褐色	ロームブロック中量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	10 暗褐色	ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師器片2点(坏1・甕1)、須恵器片1点(甕)が、P2・P3から出土している。

**所見** 時期は、柱穴の平面形が第32号掘立柱建物跡に似ていることや、構造が第15号掘立柱建物跡と似ていることから、9世紀中葉と考えられる。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。



第 105 図 第 16 号掘立柱建物跡実測図

第 18 号掘立柱建物跡 (第 106 図)

**位置** 調査区中央部の Q 5 b3 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

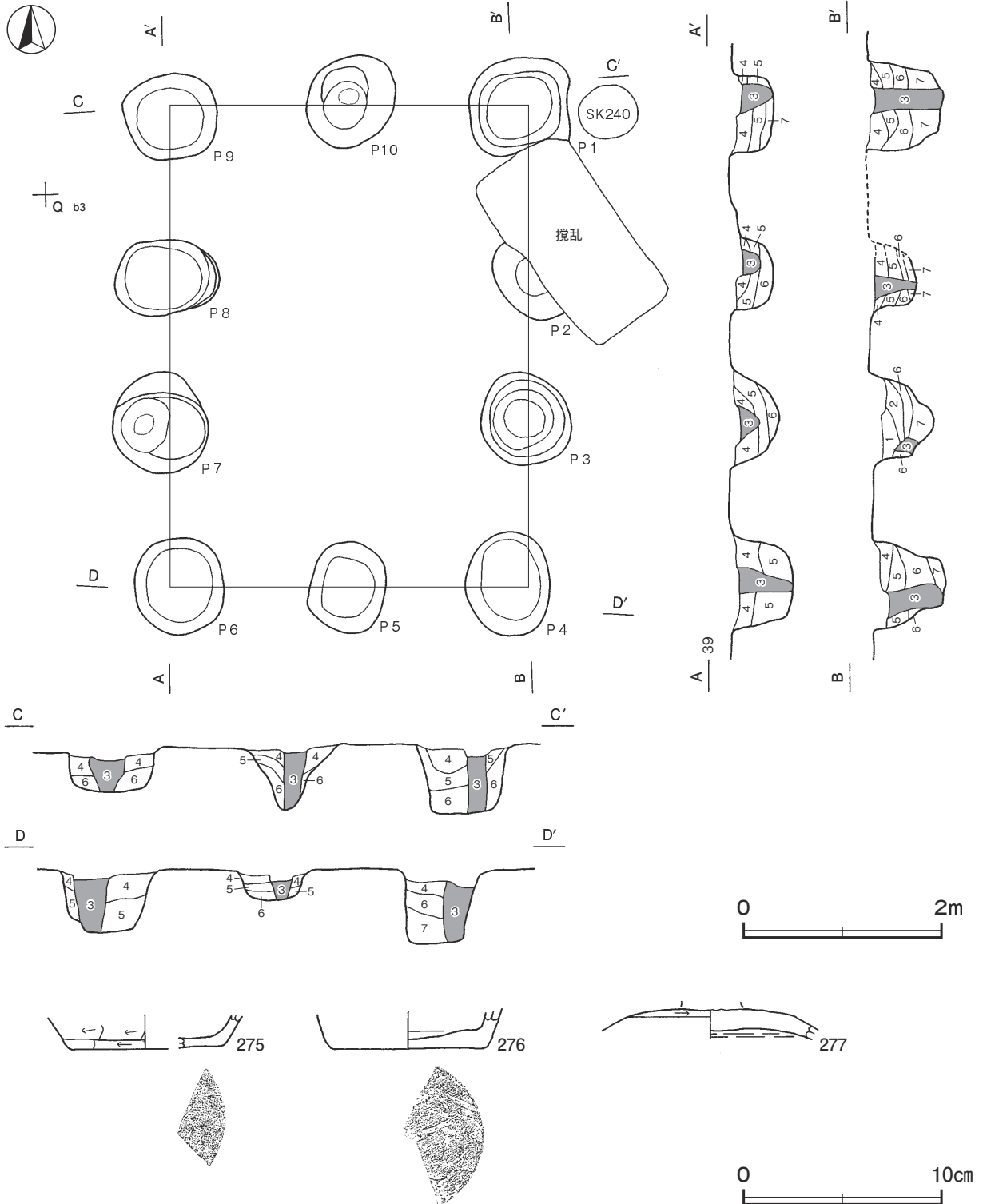
**規模と構造** 桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物跡で、桁行方向が  $N - 4^\circ - E$  の南北棟である。規模は、桁行 4.80 m、梁行 3.60 m で、面積は 17.28 $m^2$  である。柱間寸法は、桁行の北妻側が 1.80 m (6 尺)、中央間と南妻側が 1.50 m (5 尺)、梁行は 1.80 m (6 尺) で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 10 か所。平面形は楕円形もしくは隅丸長方形で、長径 (軸) 86 ~ 112 cm、短径 (軸) 72 ~ 90 cm である。深さは 32 ~ 70 cm で、掘方の壁は直立もしくは外傾している。第 4 ~ 7 層は埋土、第 3 層は柱痕跡、第 1・2 層は柱材の抜き取り後の覆土である。柱痕跡から、柱は直径 20 ~ 30 cm と推定できる。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                   |          |           |
|-------|-------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量  | 6 暗褐色    | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化物微量    | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量         |          |           |

遺物出土状況 土師器片 48点 (坏7・甕41), 須恵器片 69点 (坏41・蓋9・盤1・瓶類3・甕類15), 金属



第106図 第18号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

製品1点（不明）が、P1～P10から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

### 第18号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第106図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
275	須恵器	坏	-	(16)	[7.6]	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向の削り	P10覆土中	10% 堀ノ内窯
276	須恵器	坏	-	(18)	[7.6]	長石・石英・ 黒色粒子	黄灰	良好	底部一方向の削り	P10覆土中	10% 堀ノ内窯
277	須恵器	蓋	-	(14)	-	長石・黒色粒子・ 白色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り 摘み部貼付痕	P3覆土中	10% 堀ノ内窯

### 第19号掘立柱建物跡（第107図）

**位置** 調査区中央部のR5b8区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第19号竪穴建物跡、第188号土坑を掘り込み、第178号土坑に掘り込まれている。

**規模と構造** 南西隅柱が調査区域外に推定できることから、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡と考えられ、桁行方向がN-87°-Wの東西棟である。規模は、桁行7.50m、梁行3.90mで、面積は29.25㎡と判断できる。柱間寸法は、桁行の東妻側と中央間が2.40m（8尺）、西妻側が2.70m（9尺）、梁行は北平側が2.10（7尺）、南平側1.80m（6尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 9か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径74～81cm、短径70～72cmである。深さは27～56cmで、掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。第6～8層は埋土、第5層は柱痕跡、第1～4層は柱材を抜き取った後の覆土である。柱痕跡から、柱は直径18～24cmと推定できる。

#### 柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	5 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック微量	6 褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量	7 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	8 にぶい黄褐色	ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土師器片2点（甕）、須恵器片8点（坏4・甕4）が、P4～P7・P9から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。第19号竪穴建物跡より新しく、性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

### 第19号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第107図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
278	須恵器	坏	-	(13)	[7.8]	長石・雲母・ 黒色粒子	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り	P6覆土中	10% 堀ノ内窯

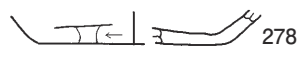
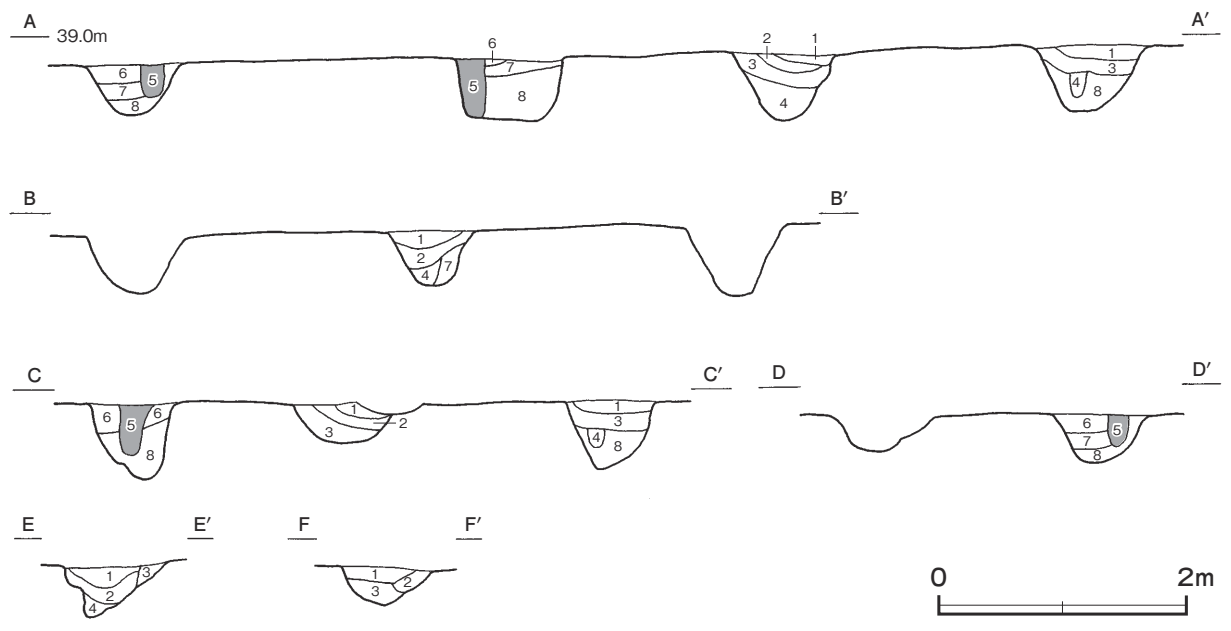
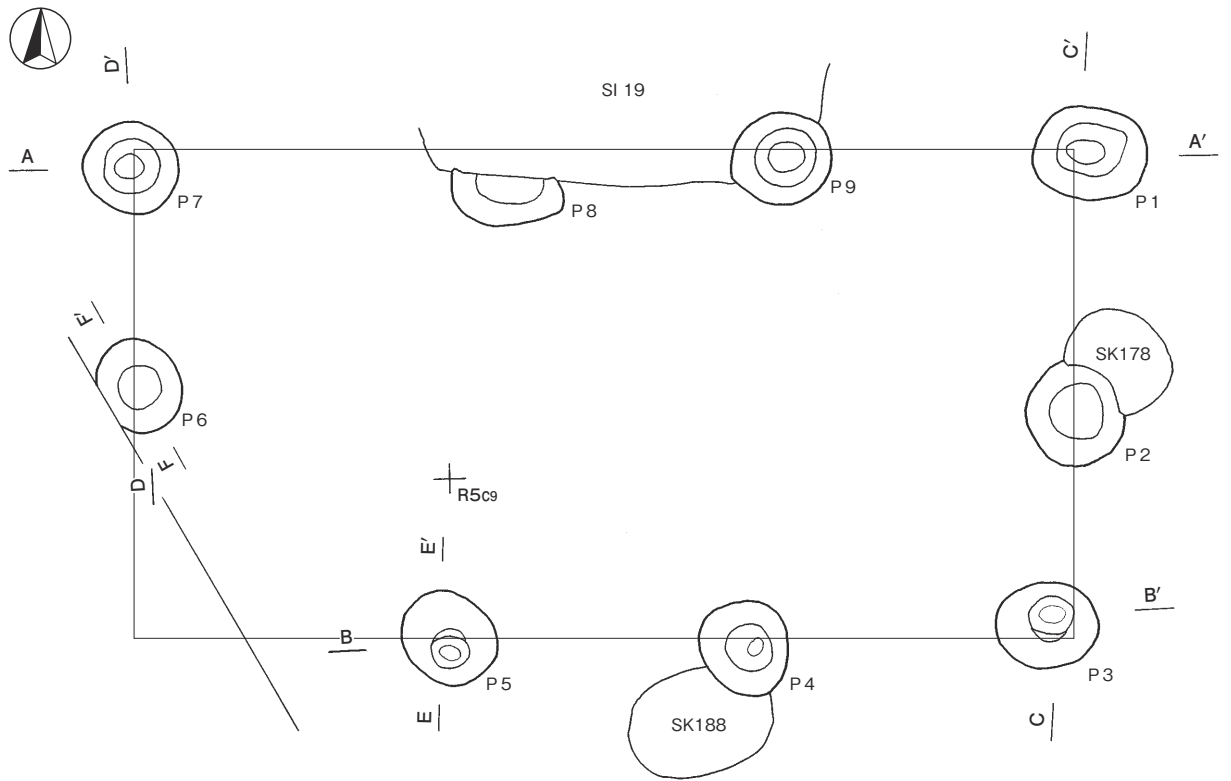
### 第20号掘立柱建物跡（第108図）

**位置** 調査区中央部のP5h2区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第24号竪穴建物跡、第211号土坑を掘り込んでいる。第254号土坑との新旧関係は不明である。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているが、周辺で確認できた掘立柱建物跡の柱穴の配置から、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡と推定でき、桁行方向がN-6°-Wの南北棟である。確認できた規模は、桁行が4.80m、





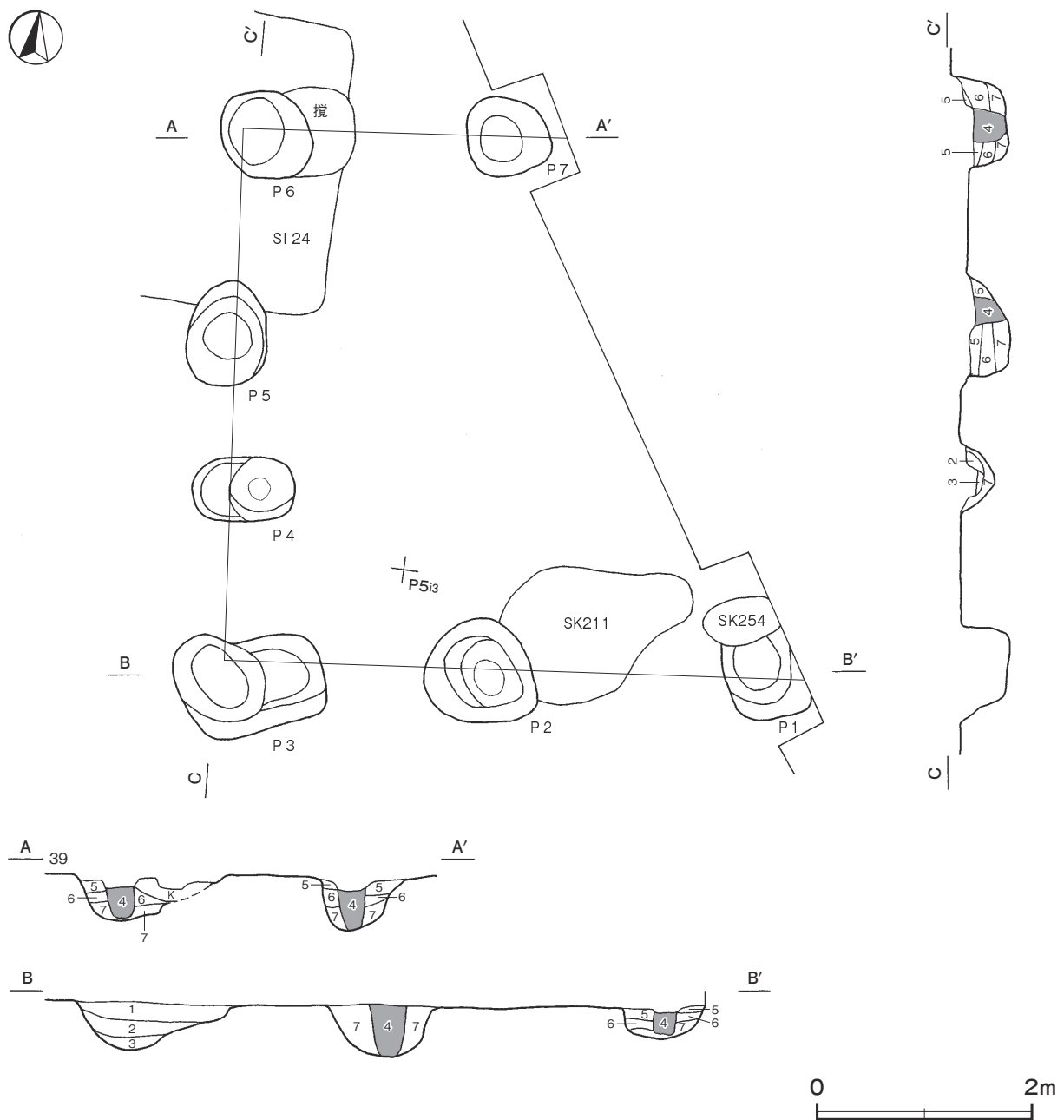
第 107 図 第 19 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

梁行が4.80 mで、面積は23.04㎡と推定できる。柱間寸法は、桁行の北妻側と南妻側が1.80 m（6尺）、中央間が1.20 m（4尺）、梁行は2.40 m（8尺）で、P4を除いて柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 7か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径92～98cm、短径60～96cmである。深さは30～47cmで、掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。P3・P4では、平面形が隅丸長方形で、長軸60～132cm、短軸68～82cm、深さ10～20cmの抜き取り穴が確認できた。第5～7層は埋土、第4層は柱痕跡、第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土である。柱痕跡から、柱は直径20～32cmと推定できる。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |          |                |          |           |
|----------|----------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量      | 5 黒褐色    | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色    | ロームブロック中量      | 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量      | 7 暗褐色    | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色    | ロームブロック・炭化粒子微量 |          |           |



第108図 第20号掘立柱建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 15 点（甕）、須恵器片 4 点（坏 2・甕 2）が、P 1～P 7 から出土している。細片であることから、図示できない。

**所見** 時期は、出土土器からは判断できない。周辺には 8 世紀中葉から後葉の遺構と、9 世紀前葉から中葉の遺構が存在している。8 世紀前葉から中葉の遺構が存在する調査区南東部では、竪穴建物跡と掘立柱建物跡の重複関係が認められないことや、8 世紀中葉の第 24 号竪穴建物跡を掘り込んでいること、9 世紀中葉に比定できる第 15 号掘立柱建物跡などの柱穴の平面形が隅丸方形もしくは隅丸長方形であることから、9 世紀前葉の可能性が高い。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

### 第 23 号掘立柱建物跡（第 109 図）

**位置** 調査区北西部の P 4c8 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 9 号柱穴列を掘り込んでいる。第 8 号柱穴列とは、柱穴同士の重複はないものの、第 8 号柱穴列と第 345 号土坑との重複関係から、本跡が先行している。

**規模と構造** 南部及び東部が調査区域外に延びていることから、北平の柱穴 4 か所しか確認できなかったが、側柱建物跡と考えられ、桁行方向が N - 89° - W の東西棟と推定できる。確認できた規模は、桁行が 5.70 m、である。柱間寸法は、桁行が西妻側から 2.10 m（7 尺）、1.80 m（6 尺）、1.80 m（6 尺）である。桁行の柱筋はほぼ揃っているが、梁行の柱筋は不明である。

**柱穴** 4 か所。平面形は楕円形もしくは隅丸長方形で、長径（軸）104～132cm、短径（軸）82～98cm である。深さは 70～114cm で、掘方の壁はほぼ直立している。P 1～P 3 では、平面形が楕円形で、長径 102～126cm、短径 78～98、深さ 31～81cm の抜き取り穴が確認できた。第 6～8 層は埋土、第 5 層は柱痕跡、第 1～4 層は柱材の抜き取り後の覆土である。P 1・P 3 の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径 20～38cm と推定できる。

#### 柱穴土層解説（各柱穴共通）

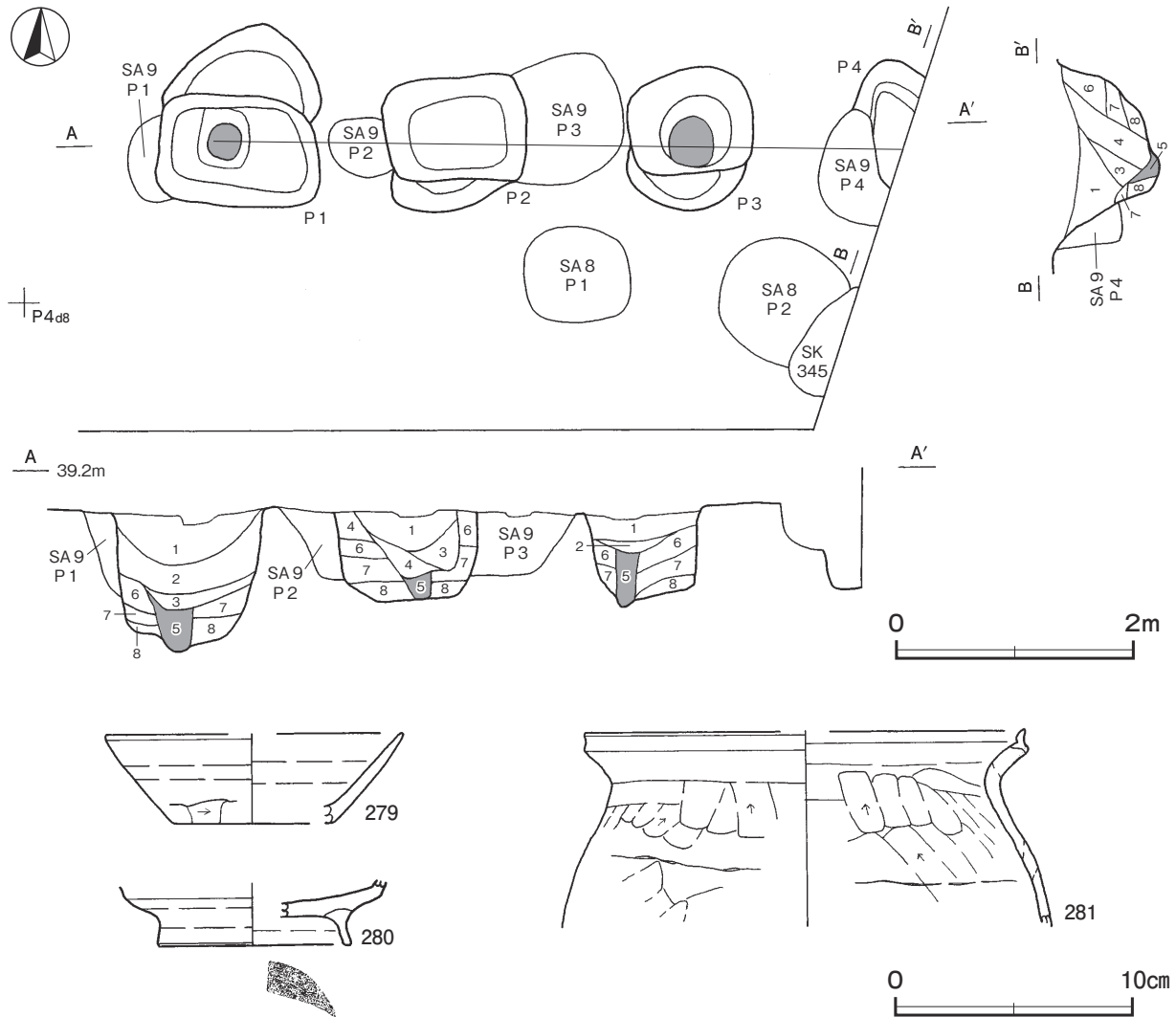
- |       |                        |          |           |
|-------|------------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量   | 5 黒褐色    | ローム粒子中量   |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   | 6 暗褐色    | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 7 黒褐色    | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |

**遺物出土状況** 土師器片 8 点（坏 1・甕 7）、須恵器片 20 点（坏 11・高台付坏 1・蓋 4・瓶類 1・甗 3）が、P 1～P 4 から出土している。柱材の抜き取り後の覆土から出土していることから、解体後に投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。第 9 号柱穴列と同じ範囲に位置し、重複していることから、建て替えが想定できる。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

### 第 23 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 109 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
279	須恵器	坏	[12.3]	3.6	[6.5]	長石・黒色粒子・白色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り	P 2 覆土中	5% 堀ノ内窯
280	須恵器	高台付坏	-	(2.7)	[7.6]	長石・黒色粒子・白色粒子	灰	良好	底部高台部貼付後ナデ	P 2 覆土中	5% 堀ノ内窯
281	土師器	小形甕	[18.4]	(8.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面縦・斜位のナデ	P 4 覆土中	10%



第 109 図 第 23 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

### 第 24 号掘立柱建物跡 (第 110 図)

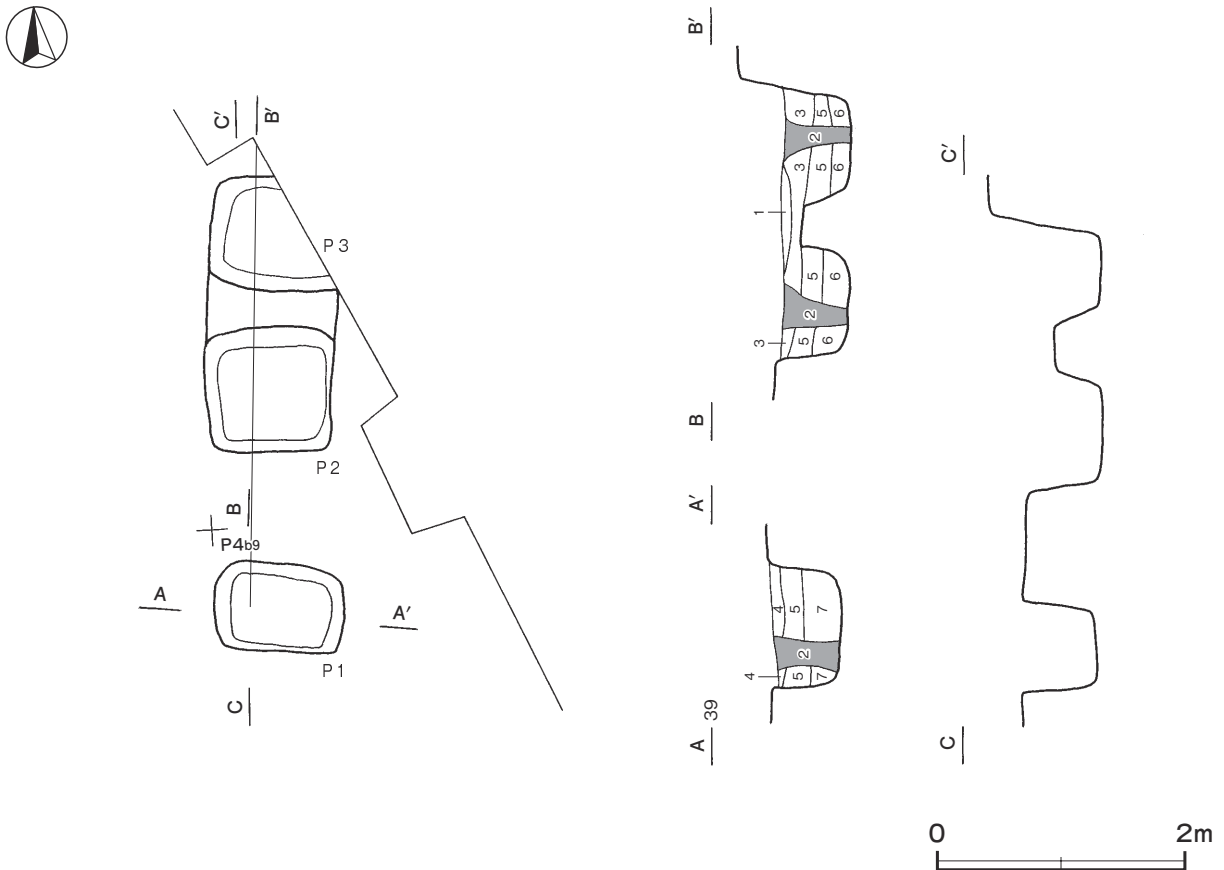
**位置** 調査区北西部の P 4 a9 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と構造** 北東部の大半が調査区域外に延びていることから、西平の柱穴 3 か所しか確認できなかったが、側柱建物跡と考えられ、桁行方向が  $N-4^{\circ}-E$  の南北棟と推定できる。確認できた規模は、桁行が 3.30 m、である。柱間寸法は、桁行が南妻側から 1.80 m (6 尺)、1.50 m (5 尺) である。桁行の柱筋はほぼ揃っているが、梁行の柱筋は不明である。

**柱穴** 3 か所。平面形は隅丸長方形で、長軸 100 ~ 200cm、短軸 70 ~ 106cm である。深さは 46 ~ 62cm で、掘方の壁は直立もしくはほぼ直立している。P 2・P 3 は布掘りである。出入り口部の可能性があるが、不明である。第 3 ~ 7 層は埋土、第 2 層は柱痕跡、第 1 層は流入土である。柱痕跡から、柱は直径 20 ~ 24cm と推定できる。

#### 柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量        | 5 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量      | 7 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 4 褐色 ロームブロック少量       |                 |



第 110 図 第 24 号掘立柱建物跡実測図

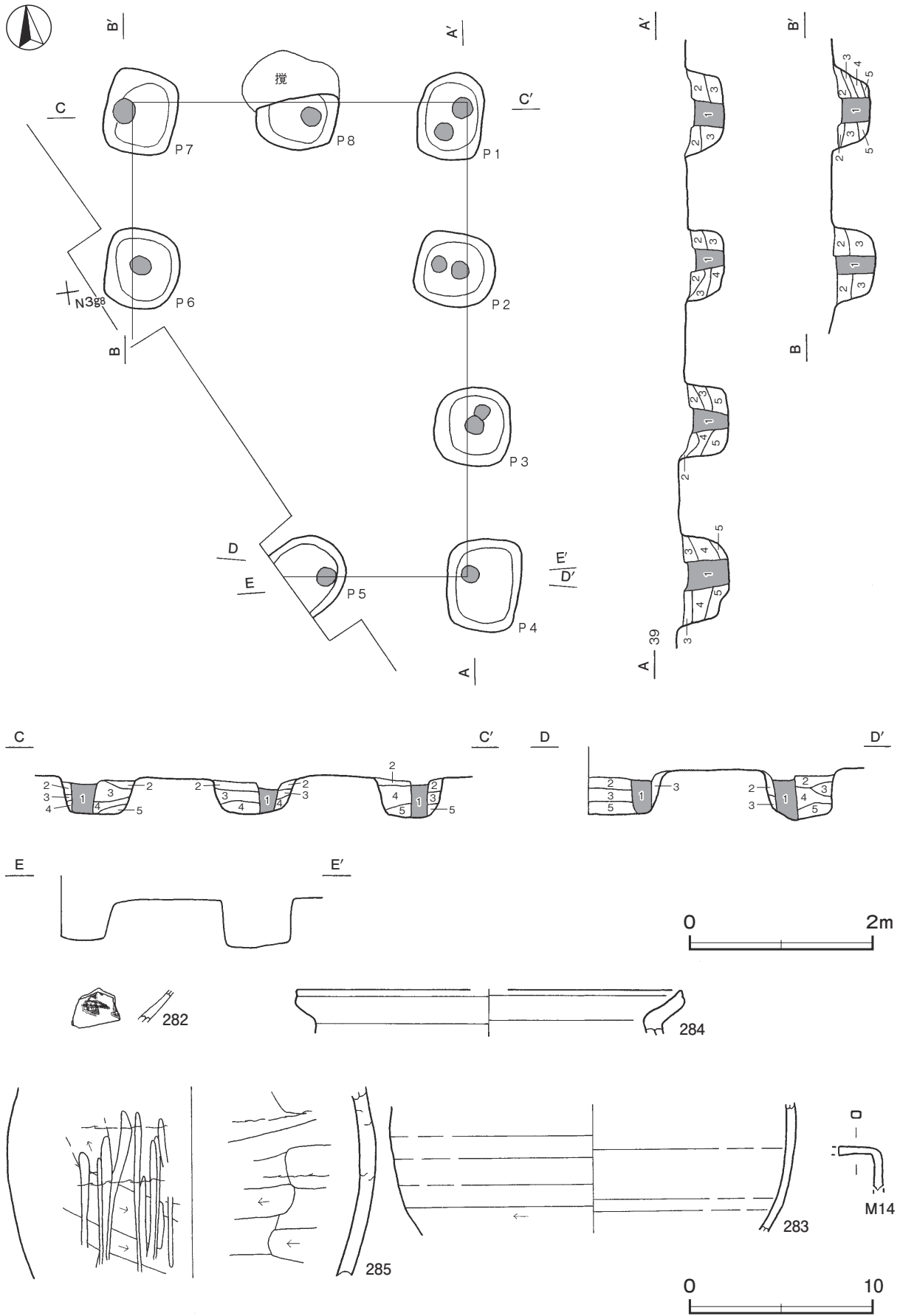
**所見** 時期は、土器片が出土しなかったものの、柱穴の平面形が第 15・16・23 号掘立柱建物跡と似ていることから、9 世紀中葉と考えられる。P 1～P 3 の南側延長部には柱穴が確認できなかったことや、第 15・16 号掘立柱建物跡の柱穴配置から、P 1 は南西隅柱に伴う柱穴と考えられる。P 1 から東へ 1.80 m 地点には第 345 号土坑が存在しており、南妻柱は第 345 号土坑によって掘り込まれている可能性があるが、調査区域の制限から明確にはできなかった。性格は、構造から「屋」としての機能が想定できる。

#### 第 25 号掘立柱建物跡（第 111 図）

**位置** 調査区北西部の N 3g8 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と構造** 南西部が調査区域外に伸びているが、桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物跡で、桁行方向が N-7°-E の南北棟である。確認できた規模は、桁行が 5.10 m、梁行が 3.60 m で、面積は 18.36㎡と推定できる。柱間寸法は、桁行の北妻側と中央間が 1.80 m（6 尺）、南妻側が 1.50 m（5 尺）、梁行は 1.80 m（6 尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 8 か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸 76～99cm、短軸 79～86cm である。深さは 31～56cm で、掘方の壁はほぼ直立している。第 2～5 層は埋土、第 1 層は柱痕跡である。P 1～P 8 の底面から、柱のあたりを確認した。柱あたりや柱痕跡から、柱は直径 20～32cm と推定できる。また、P 1～P 3 には柱のあたりが 2 か所確認できたことから、立て替えの可能性がある。



第 111 图 第 25 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- |          |           |          |           |
|----------|-----------|----------|-----------|
| 1 黒褐色    | ロームブロック微量 | 4 黒褐色    | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック少量 | 5 におい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |          |           |

遺物出土状況 土師器片 54 点（坏 1・甕 53），須恵器片 13 点（坏 5・高台付坏 1・瓶類 3・甕 4），金属製品 1 点（鏝）が，P 1～P 8 から出土している。

所見 時期は，出土土器が 9 世紀前葉から中葉と考えられることや，柱穴の平面形が第 15・16・23 号掘立柱建物跡と似ていることから，9 世紀中葉と考えられる。性格は，構造から「屋」としての機能が想定できる。

第 25 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 111 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
282	土師器	坏	-	(1.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐色	普通	体部内面横位の磨き 黒色処理	P 8 覆土中	5% PL36 「山神。」墨書
283	須恵器	瓶	-	(6.9)	-	長石・黒色粒子・白色粒子	暗灰黄	良好	体部下端回転ヘラ削り 自然袖付着	P 4 覆土中	5% 東海産
284	土師器	甕	[20.7]	(1.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	P 4 覆土中	5% 285 と同一個体カ
285	土師器	甕	-	(10.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面縦位のナデ，下位以下ヘラ削り後磨き 体部内面横位のナデ	P 4 覆土中	5% 284 と同一個体カ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 14	鏝	(2.4)	(2.4)	0.5	(3.28)	鉄	両先端部欠損 断面四角形 断面に使用時の歪みあり	P 2 覆土中	

表 7 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数		面積 (㎡)	柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時期	備考	
			桁×梁(間)	桁×梁(m)		桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形				深さ(cm)
14	R 6 f1	N - 6° - E	3 × 2	5.10 × 3.60	18.36	1.50 ~ 1.80	1.80	側柱	10	円形・楕円形	18 ~ 40	土師器	9 世紀後葉	
15	R 5 a8	N - 1° - E	東 2 × 2 西 3 × 2	5.10 × 4.80	24.48	1.50 ~ 2.70	2.40	側柱	9	隅丸長方形	51 ~ 83	土師器・須恵器	9 世紀中葉	SI19 → 本跡 → SK169
16	Q 5 f7	N - 89° - W	北 2 × 2 南 3 × 2	[4.20] × 4.20	[17.64]	1.20 ~ [2.10]	2.10	側柱	7	楕円形・隅丸長方形	56 ~ 94	土師器・須恵器	9 世紀中葉	
18	Q 5 b3	N - 4° - E	3 × 2	4.80 × 3.60	17.28	1.50 ~ 1.80	1.80	側柱	10	楕円形・隅丸長方形	32 ~ 70	土師器・須恵器・金属製品	9 世紀前葉	
19	R 5 b8	N - 87° - W	3 × 2	7.50 × 3.90	29.25	2.40 ~ 2.70	1.80 ~ 2.10	側柱	9	円形・楕円形	27 ~ 56	土師器・須恵器	9 世紀前葉	SI19・SK188 → 本跡 → SK178
20	P 5 h2	N - 6° - W	[3 × 2]	[4.80 × 4.80]	[23.04]	1.20 ~ 1.80	2.40	側柱	7	円形・楕円形	30 ~ 47	土師器・須恵器	9 世紀前葉	SI24・SK211 → 本跡 SK254 との重複不明
23	P 4 c8	N - 89° - W	(3 × -)	(5.70 × -)	-	1.80 ~ 2.10	-	[側柱]	4	楕円形・隅丸長方形	70 ~ 114	土師器・須恵器	9 世紀中葉	SA 9 → 本跡 → SA 8
24	P 4 a9	N - 4° - E	(2 × -)	(3.30 × -)	-	1.50 ~ 1.80	-	[側柱]	3	隅丸長方形	46 ~ 62	-	9 世紀中葉	
25	N 3 g8	N - 7° - E	[3 × 2]	[5.10 × 3.60]	[18.36]	1.50 ~ 1.80	1.80	側柱	8	隅丸方形・隅丸長方形	31 ~ 56	土師器・須恵器・金属製品	9 世紀中葉	

(3) 井戸跡

第 2 号井戸跡（第 112 ~ 120 図）

位置 調査区中央部の U 7 c6 区，標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 確認面は，長径 2.64 m，短径 2.40 m の楕円形で，長径方向は N - 53° - E である。確認面から 50cm までは，漏斗状に緩やかに窄まっている。そこから深さ 50cm までの中部は，長軸 1.72 m，短軸 1.68 m の隅丸方形（長軸方向 N - 0°）の筒状に掘り下げられ，壁面下部に幅 10 ~ 20cm の平場を形成している。さらに下部は長径 1.40cm，短径 1.30cm の円筒状に掘り込まれている。確認面から深さ 180cm ほど掘り下げた段階で，崩落が想定されたため，以下の調査を断念した。

**ピット** 8か所。P1～P8は深さ41～50cmで、位置から柱穴の可能性はあるが、建屋にを想定できる配置ではないことから、不明である。

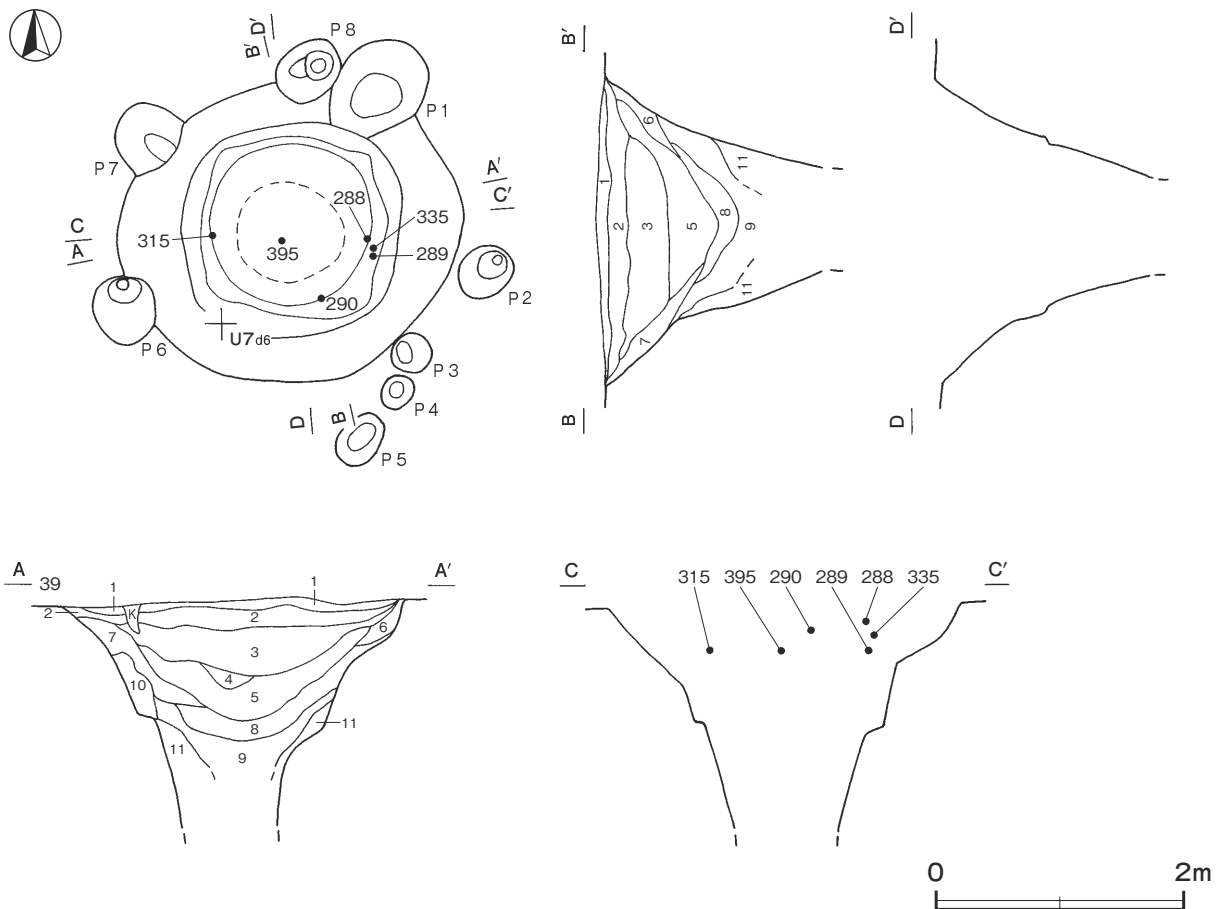
**覆土** 11層に分層できる。観察できた部分是不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒色	ロームブロック少量	7 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量	8 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	9 灰黄褐色	ロームブロック少量
4 褐色	ロームブロック中量	10 灰黄褐色	ロームブロック中量
5 褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量	11 にぶい黄褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量
6 にぶい褐色	ロームブロック少量		

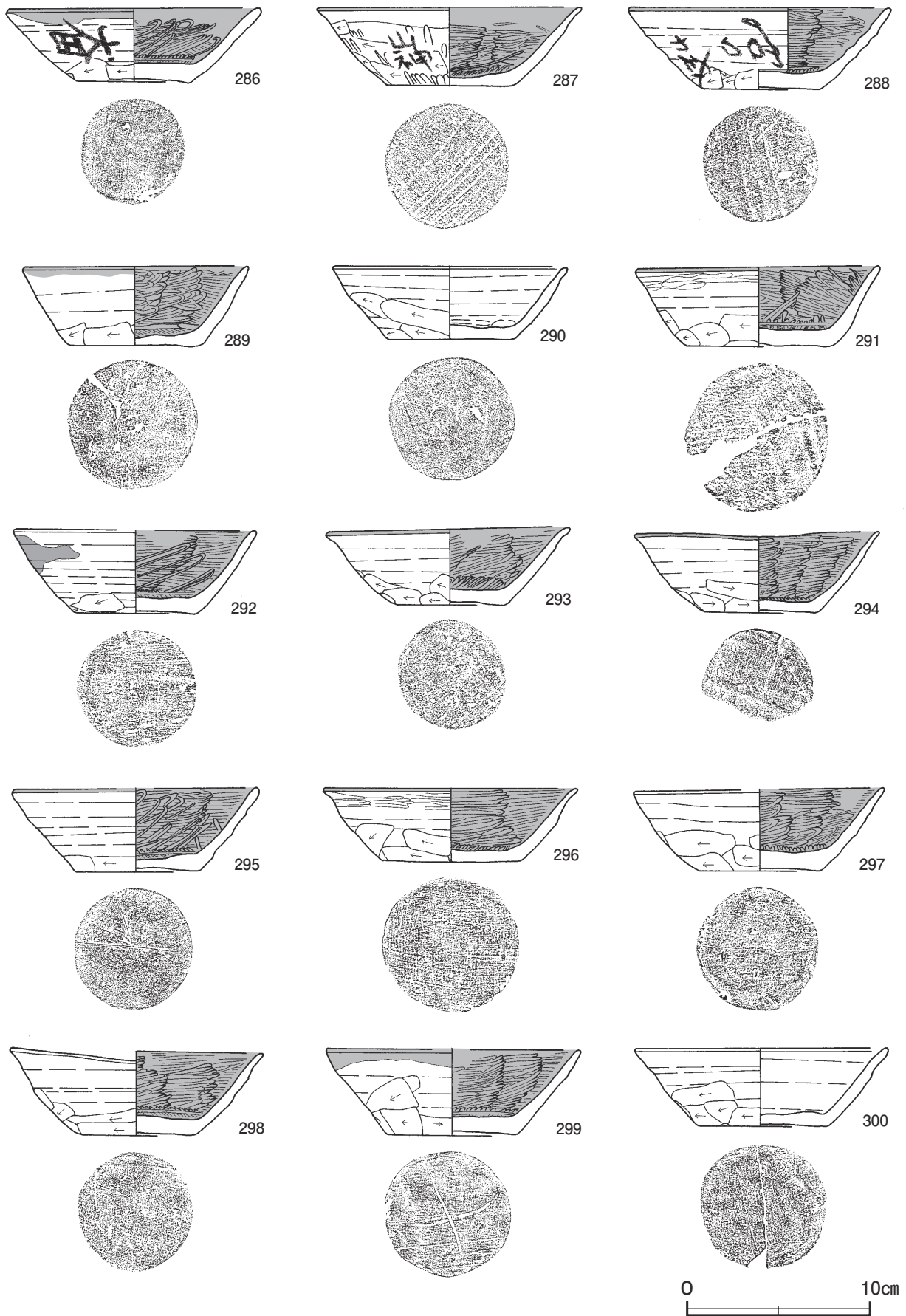
**遺物出土状況** 土師器片 1891点（坏 807・高台付碗 272・蓋 304・皿 183・鉢 32・甕類 289・甑 4）、須恵器片 105点（坏 42・高台付坏 5・蓋 7・盤 4・コップ形土器 1・鉢 1・甕類 44・甑 1）、土製品 1点（羽口）、動物遺存体 60点（馬の歯）が、全域に散在した状態で出土している。土器は主に完形品や接合関係が良好な大型の破片で、覆土上層から出土していることから、中位まで埋め戻された後に、一括投棄されている。動物遺存体も覆土上層から出土していることから、土器と共に投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。本跡の確認面の形状と中部以下の形状が異なることや堆積状況から、廃絶に際して井戸枠が抜き取られたと考えられる。出土した土器は供膳具が多く、煮沸具においては接合関係が乏しく、出土量も少ない特徴がみられる。中でも土師器の供献具は、ヘラ磨きの状態が良好であることや使用痕がほとんど認められないことから、使用頻度が少ないと考えられる。また馬の歯が共に出土していることと併せて考えると、「饗宴」あるいは「儀式」や「祀り」に使用された可能性がある。

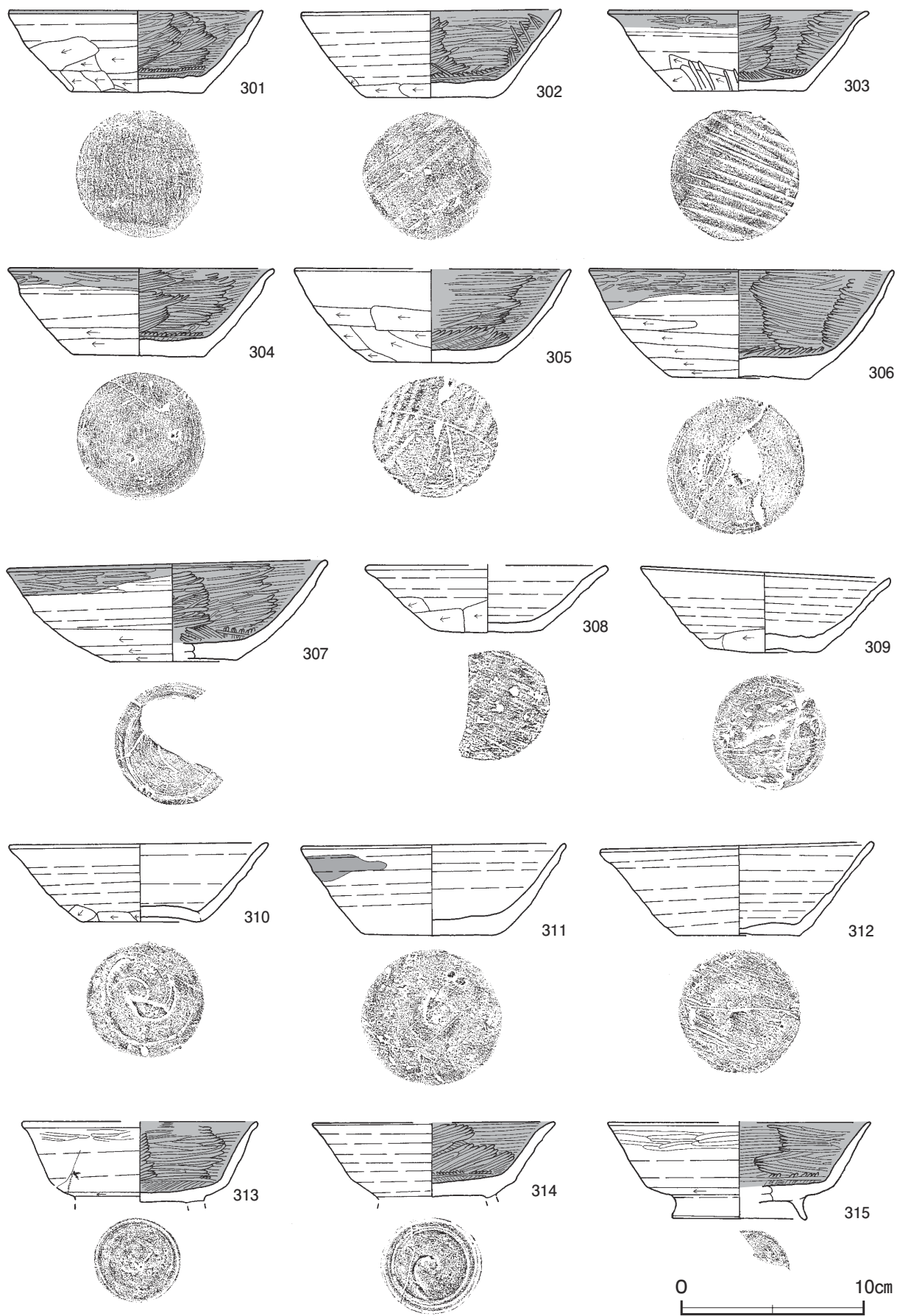


第 112 図 第 2 号井戸跡実測図

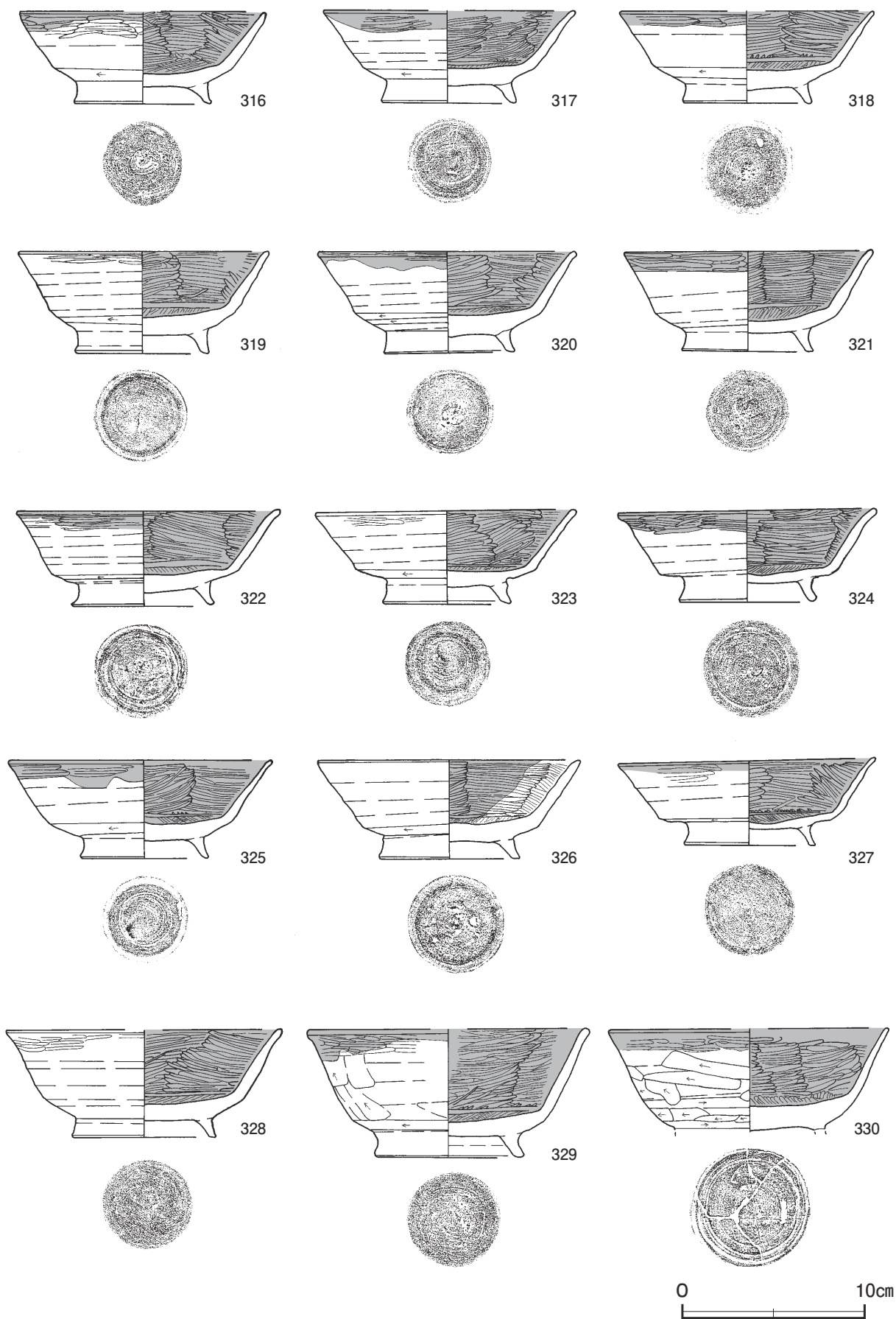




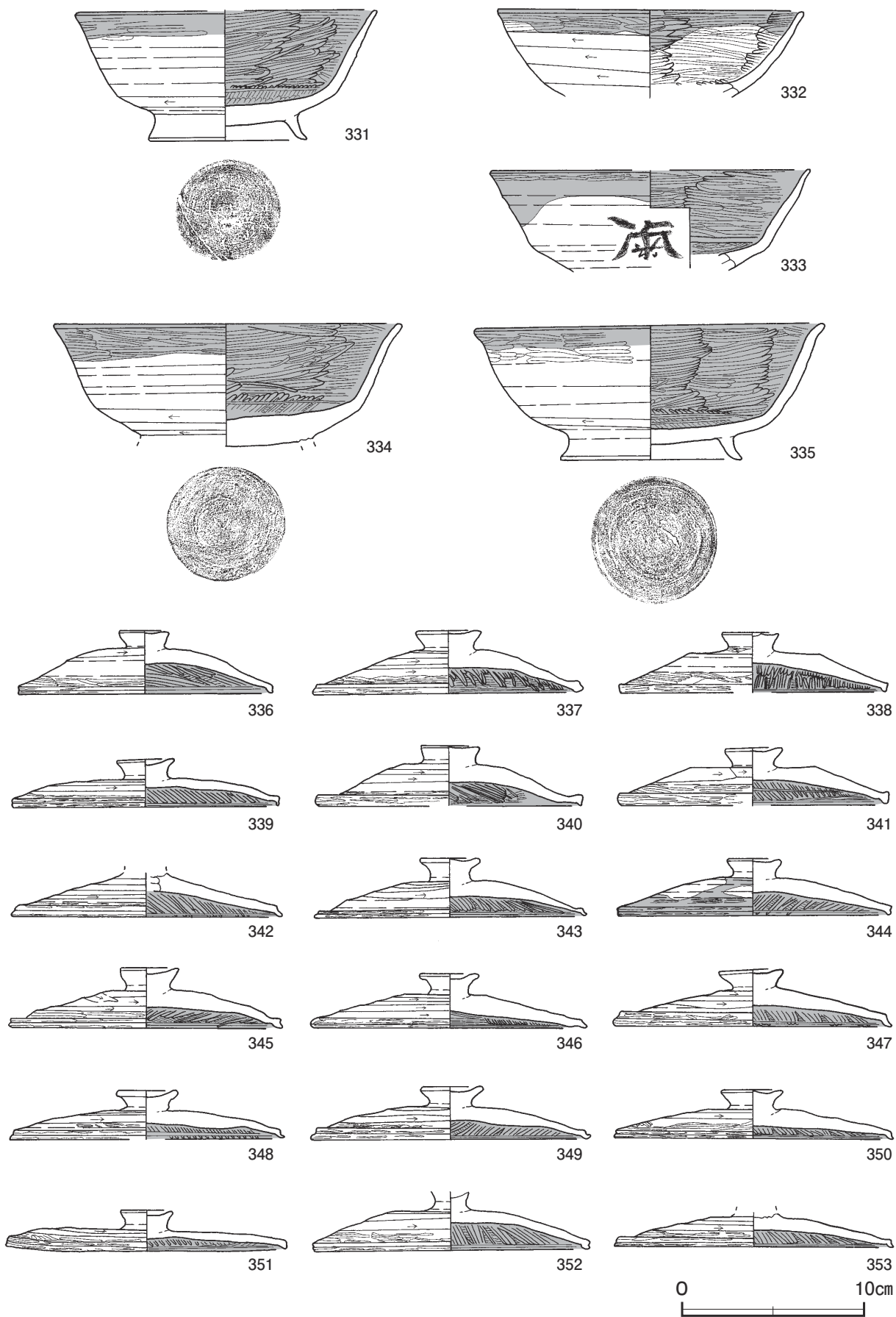
第 113 図 第 2 号井戸跡出土遺物実測図(1)



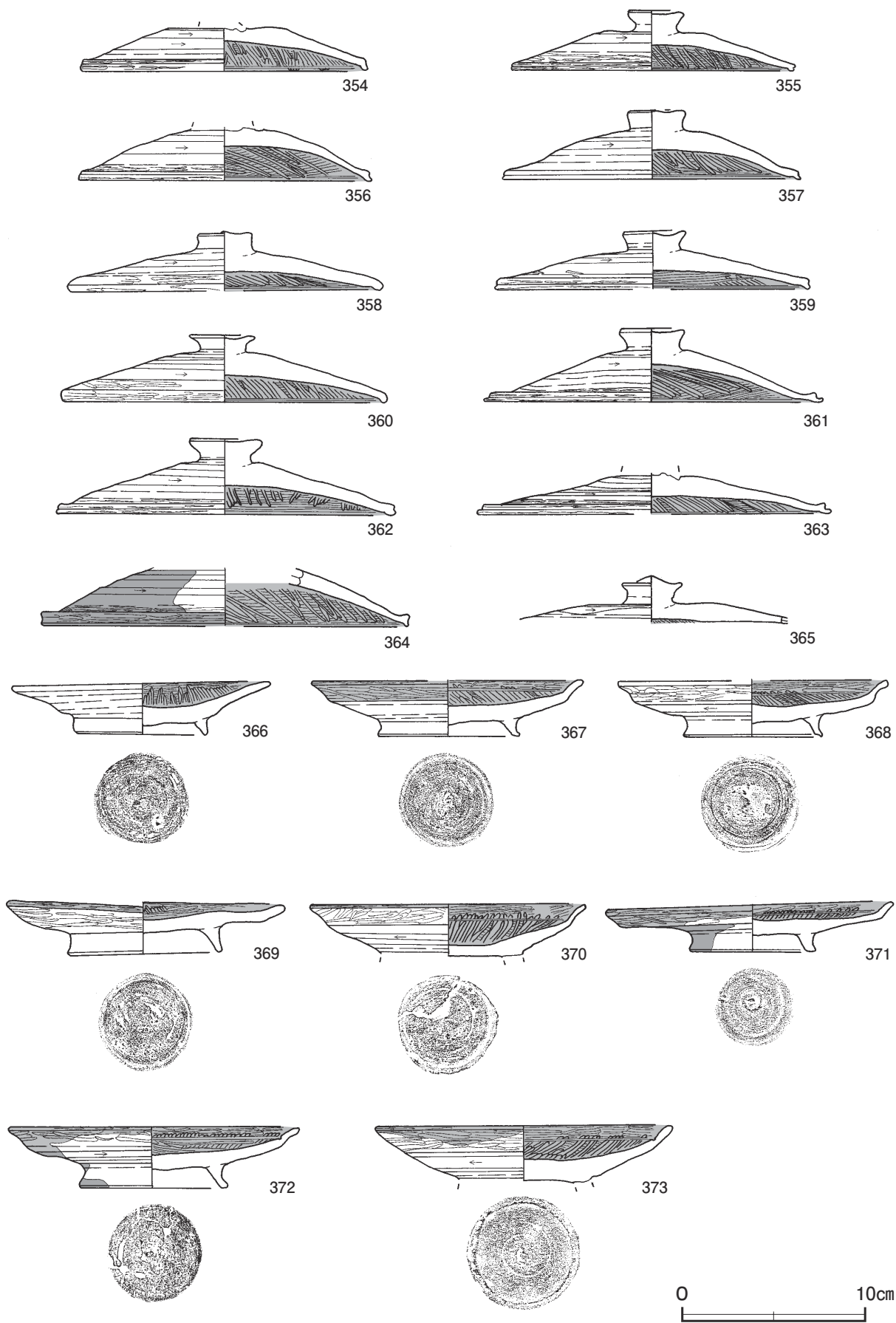
第 114 図 第 2 号井戸跡出土遺物実測図(2)



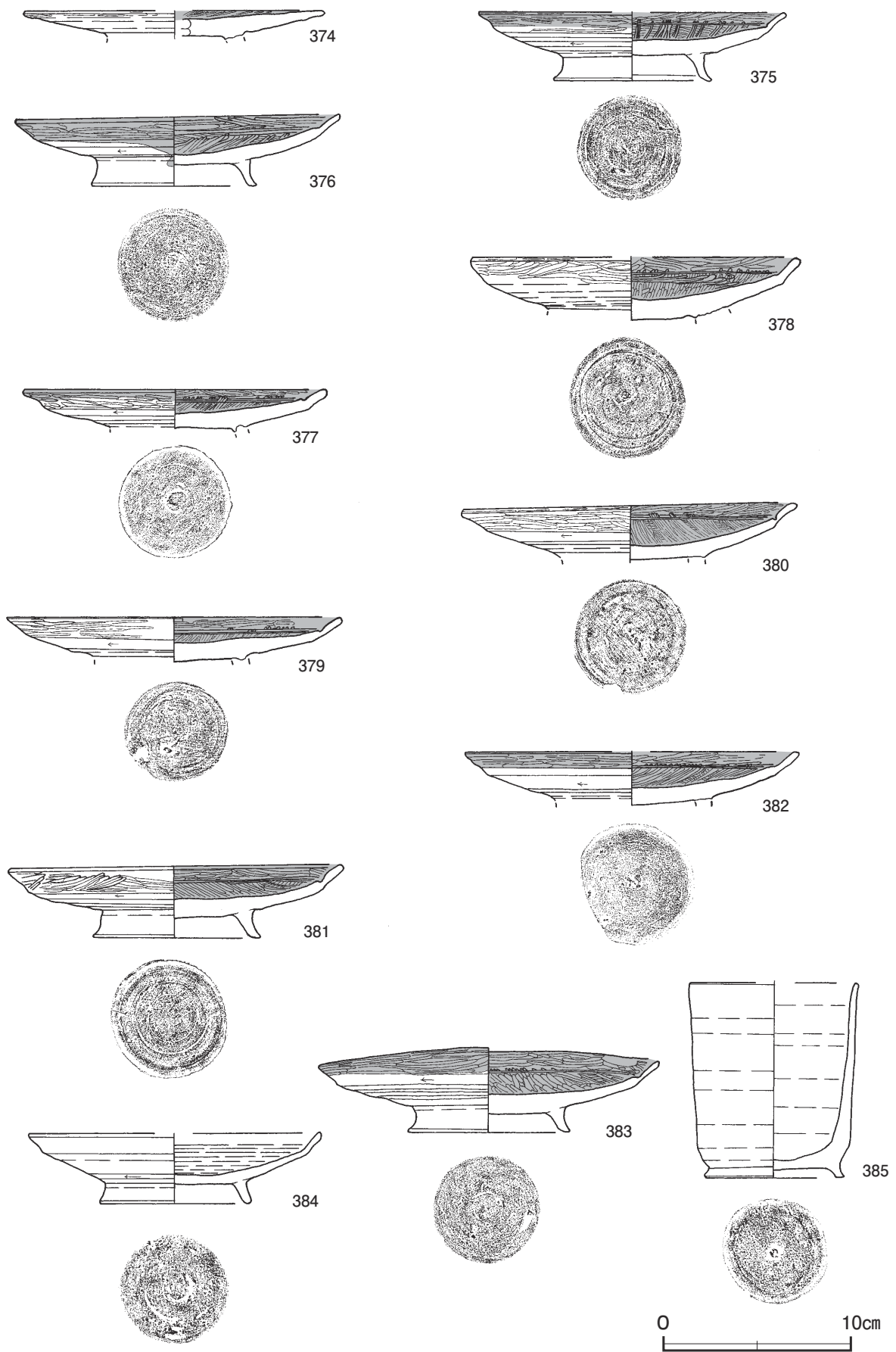
第 115 図 第 2 号井戸跡出土遺物実測図(3)



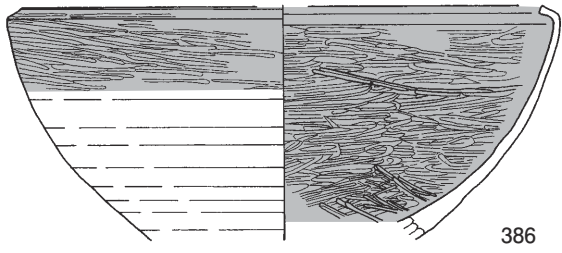
第 116 図 第 2 号井戸跡出土遺物実測図(4)



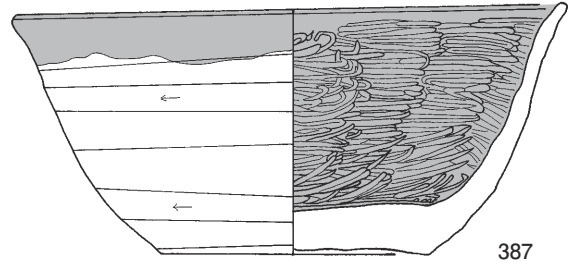
第 117 图 第 2 号井戸跡出土遺物実測図(5)



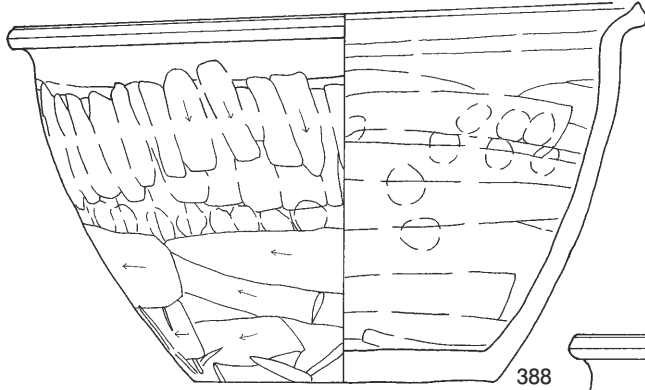
第 118 図 第 2 号井戸跡出土遺物実測図(6)



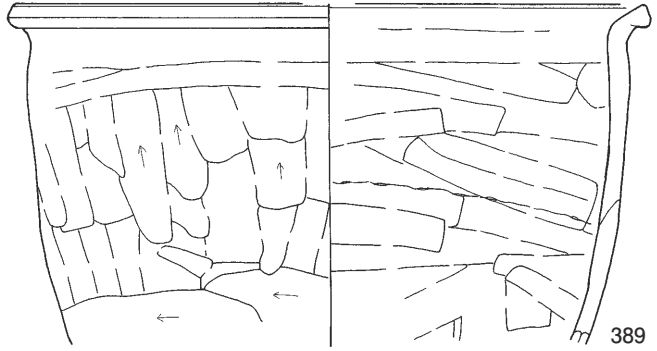
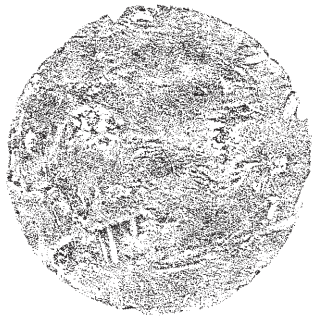
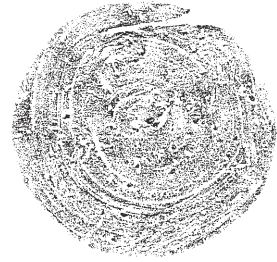
386



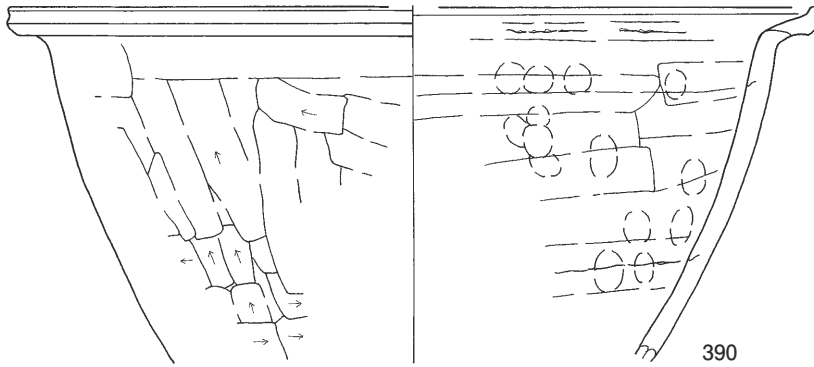
387



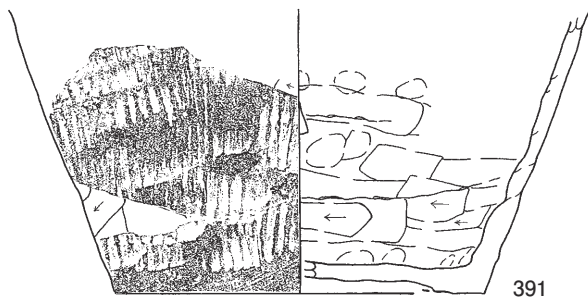
388



389



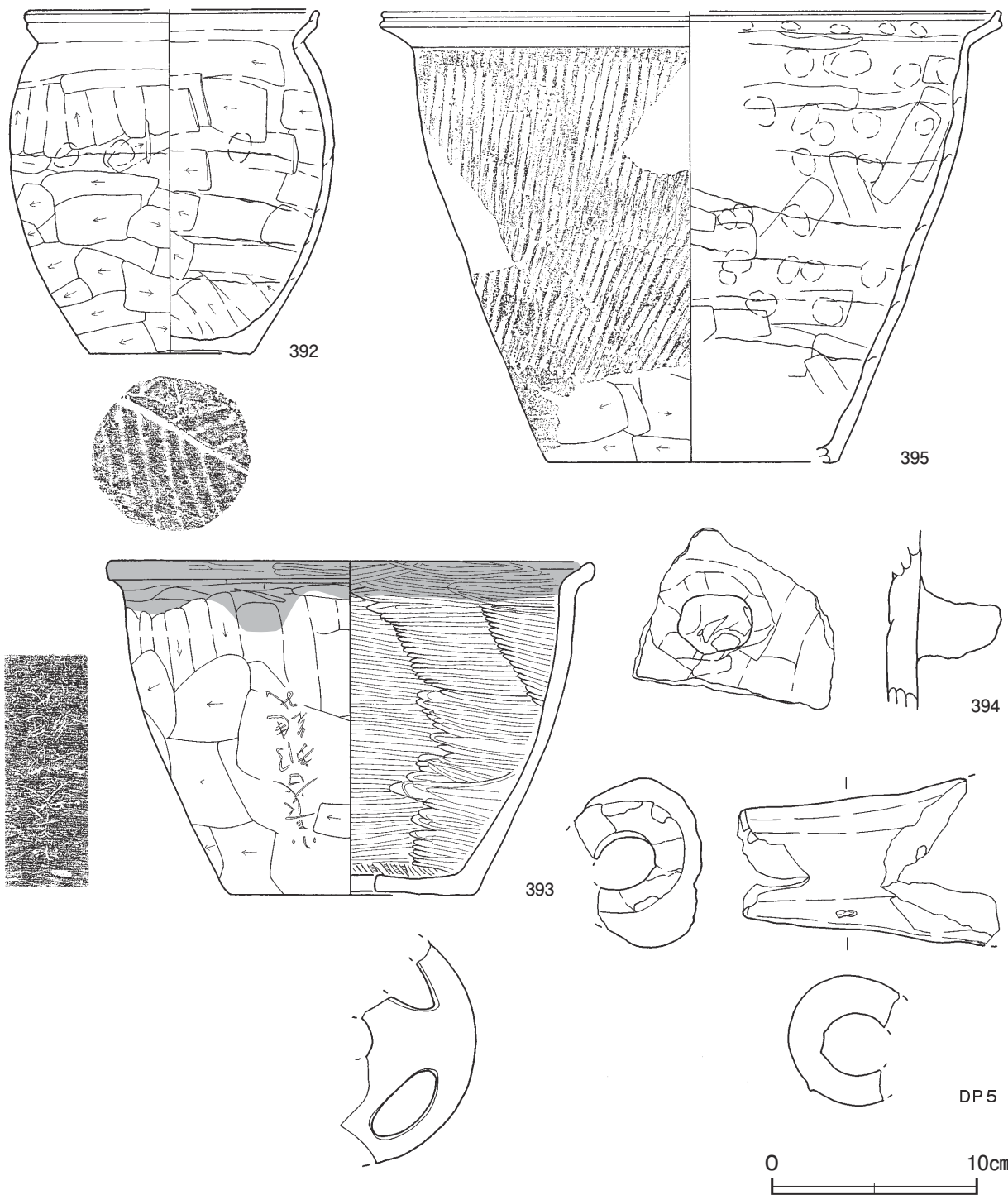
390



391



第 119 図 第 2 号井戸跡出土遺物実測図(7)



第120図 第2号井戸跡出土遺物実測図(8)

第2号井戸跡出土遺物観察表 (第113～120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
286	土師器	坏	13.5	4.1	5.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方向の削り 底部内面二方向の磨き	覆土上層	100% PL28 「大田」墨書
287	土師器	坏	14.0	4.3	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部手持ちヘラ削り ヘラ当て痕 体部内面横位の磨き 底部一方向の削り 底部内面一方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	90% PL29 「山神」墨書
288	土師器	坏	14.0	4.4	6.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き	覆土上層	90% PL28 「宮城」墨書
289	土師器	坏	12.1	4.3	7.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	90%



番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
290	土師器	坏	12.6	3.9	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部中位以下手持ちヘラ削り 底部二方向の削り 底部内面二方向のナデ	覆土上層	95%
291	土師器	坏	12.9	4.4	7.9	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	90%
292	土師器	坏	[12.9]	4.5	6.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	60% 煤付着
293	土師器	坏	13.0	4.2	5.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き	覆土上層	90%
294	土師器	坏	13.0	4.4	6.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方の削り 底部内面一方の磨き	覆土上層	60% PL29
295	土師器	坏	[13.3]	4.5	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方の削り後「×」のヘラ書き 底部内面二方向の磨き	覆土上層	60% PL29
296	土師器	坏	13.5	4.0	7.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き	覆土上層	90% PL29
297	土師器	坏	[13.5]	4.5	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面一方の磨き	覆土上層	70%
298	土師器	坏	13.5	4.6	6.3	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部一方の削り 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	60%
299	土師器	坏	[13.6]	4.6	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部中位以下手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り後「×」のヘラ書き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	40%
300	土師器	坏	13.6	4.2	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部中位以下手持ちヘラ削り 底部二方向の削り	覆土上層	90%
301	土師器	坏	13.8	4.4	7.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部中位以下手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き	覆土上層	80% PL29
302	土師器	坏	13.9	4.8	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	70%
303	土師器	坏	13.9	4.4	7.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 板目痕 底部内面二方向の磨き	覆土上層	60%
304	土師器	坏	14.1	4.8	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	80%
305	土師器	坏	[14.9]	5.1	6.9	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部中位以下手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り後「×」のヘラ書き 底部内面二方向の磨き	覆土上層	60%
306	土師器	坏	16.3	5.9	7.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部中位以下回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面二方向の磨き	覆土上層	90%
307	土師器	坏	17.0	5.4	[6.7]	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部中位以下回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部回転ヘラ削り 底部内面二方向の磨き	覆土上層	70% PL29
308	須恵器	坏	[12.8]	3.6	6.0	長石・黒色粒子・白色粒子	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方の削り	覆土上層	60% 堀ノ内窯
309	須恵器	坏	13.4	4.7	6.0	長石・雲母・白色粒子	暗灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切りを残す一方の削り	覆土上層	70% 新治窯
310	須恵器	坏	13.9	4.2	6.5	長石・黒色粒子・白色粒子	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切りを残す二方向のナデ	覆土上層	80% 堀ノ内窯
311	須恵器	坏	14.2	5.1	7.5	長石・石英・黒色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちによる一方のナデ 底部ヘラ切りを残す二方向の削り	覆土上層	95% 堀ノ内窯 煤付着
312	須恵器	坏	14.6	5.1	6.6	長石・細礫	灰黄	良好	底部ヘラ切りを残す二方向の削り	覆土上層	100% 益子窯。 PL34
313	土師器	高台付碗	[12.6]	(4.3)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部高台部貼付痕 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	70% PL30 「大。」墨書
314	土師器	高台付碗	[13.1]	(4.1)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部内面横・斜位の磨き 底部高台部貼付痕 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	P 8 覆土中	60%
315	土師器	高台付碗	[14.0]	5.2	[7.2]	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	40%
316	土師器	高台付碗	[13.2]	5.0	7.2	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部内面二方向の磨き	覆土上層	60% PL30
317	土師器	高台付碗	[13.5]	5.0	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	40%
318	土師器	高台付碗	[13.6]	5.0	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	70% PL30
319	土師器	高台付碗	13.4	5.6	7.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	70%
320	土師器	高台付碗	13.7	5.6	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	70%
321	土師器	高台付碗	13.5	5.5	7.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面横位の磨き 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	90%
322	土師器	高台付碗	13.9	5.1	7.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	80%
323	土師器	高台付碗	13.8	5.1	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	90%
324	土師器	高台付碗	14.0	5.0	7.3	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面横位の磨き 底部内面一方の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	90% PL30
325	土師器	高台付碗	14.0	5.3	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	70%
326	土師器	高台付碗	14.2	5.3	7.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	80%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
327	土師器	高台付椀	13.8	4.8	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き・体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き・底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	90% PL30
328	土師器	高台付椀	[14.8]	5.8	7.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き・体部内面横・斜位の磨き・底部内面一方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	60%
329	土師器	高台付椀	[15.0]	7.0	7.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き・体部下端回転ヘラ削り後縦位のナデ 体部内面横位の磨き・底部内面二方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	40%
330	土師器	高台付椀	[15.0]	(5.5)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き・体部下端回転ヘラ削り後中位以下手持ちヘラ削り 体部内面横位の磨き・底部高台部貼付痕「×」のヘラ書 底部内面二方向の磨き	覆土上層	80%
331	土師器	高台付椀	[16.2]	7.0	8.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き・体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き・底部内面一方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	60% PL30
332	土師器	高台付椀	16.4	(4.7)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き・体部外面回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き・底部内面一方向の磨き	覆土上層	40%
333	土師器	高台付椀	[17.0]	(5.5)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き・体部内面横位の磨き・底部内面一方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	35% PL37 「仄」墨書
334	土師器	高台付椀	18.5	(6.6)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き・体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き・底部高台部貼付痕 底部内面一方向の磨き後見込み外周に沿って円状の磨き	覆土上層	70%
335	土師器	高台付椀	18.9	7.3	9.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横位の磨き・体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き・底部内面一方向の磨き後見込み外周に沿って円状のナデ	覆土上層	80% PL30
336	土師器	蓋	13.7	3.4	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	天井部回転ヘラ削り 体部内面一方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	80% PL31
337	土師器	蓋	14.1	3.4	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	70%
338	土師器	蓋	[14.1]	3.3	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	50%
339	土師器	蓋	14.2	2.6	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
340	土師器	蓋	[14.2]	3.3	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	40%
341	土師器	蓋	[14.4]	3.1	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	40%
342	土師器	蓋	14.6	(2.4)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 摘み部貼付痕 体部内面一方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	70%
343	土師器	蓋	14.6	3.1	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面一方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	90% PL31
344	土師器	蓋	14.7	3.1	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部内面一方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
345	土師器	蓋	14.8	3.3	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	70%
346	土師器	蓋	14.8	2.9	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	70%
347	土師器	蓋	14.8	3.1	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	80% PL31
348	土師器	蓋	[14.8]	2.6	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	50%
349	土師器	蓋	14.9	3.0	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
350	土師器	蓋	15.0	2.6	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面一方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
351	土師器	蓋	15.0	2.2	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
352	土師器	蓋	15.0	(3.2)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	95%
353	土師器	蓋	15.0	(1.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 摘み部貼付痕 体部内面一方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
354	土師器	蓋	15.2	(2.3)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 摘み部貼付痕 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	90%
355	土師器	蓋	15.3	3.3	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	85%
356	土師器	蓋	15.5	(2.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 摘み部貼付痕 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	70%
357	土師器	蓋	16.1	3.8	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線	覆土上層	50%
358	土師器	蓋	[16.8]	3.2	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	40%
359	土師器	蓋	[17.0]	3.2	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	40%
360	土師器	蓋	17.3	3.6	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
361	土師器	蓋	18.0	3.9	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き・口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	60%
362	土師器	蓋	18.2	4.0	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	95% PL31

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
363	土師器	蓋	[18.7]	(2.2)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 摘み部貼痕 体部内面二方向の磨き、口縁部に沿って円状のナデ沈線 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	40%
364	土師器	蓋	[19.6]	(3.1)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部から天井部回転ヘラ削り 摘み部貼痕 体部内面二方向の磨き後口縁部に沿って円状の磨き 口縁部外面横位の磨き	覆土上層	30% 煤付着
365	土師器	蓋	-	(2.6)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	天井部回転ヘラ削り 体部内面一方向の磨き	覆土上層	30%
366	土師器	皿	13.7	2.9	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部内面二方向の磨き 底部回転ヘラ削り後高台部貼付	覆土上層	95%
367	土師器	皿	[14.4]	3.0	7.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	50%
368	土師器	皿	[14.4]	3.0	7.4	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	60%
369	土師器	皿	14.6	3.0	8.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き 底部高台部貼付後ナデ	覆土上層	80% PL31
370	土師器	皿	14.6	(2.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き 底部高台部貼付痕	覆土上層	90%
371	土師器	皿	15.1	2.7	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	90% PL31 煤付着
372	土師器	皿	15.6	3.2	8.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	90% PL31 煤付着
373	土師器	皿	16.0	(3.0)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面口唇部に沿って円状のナデ沈線 二方向の磨き後円状の磨き 底部高台部貼付痕	覆土上層	95%
374	土師器	皿	[15.8]	(1.5)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部内面二方向の磨き 底部高台部貼付痕	覆土上層	40%
375	土師器	皿	[16.0]	3.6	8.1	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	80%
376	土師器	皿	16.8	3.7	8.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	90% PL31
377	土師器	皿	16.0	(2.2)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面口唇部に沿って円状のナデ沈線 二方向の磨き後円状の磨き 底部高台部貼付痕	覆土上層	95%
378	土師器	皿	[17.3]	(3.3)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き 底部回転ヘラ削り後ナデ 高台部貼付痕	P 8 覆土中	80%
379	土師器	皿	17.4	(2.3)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面円状のナデ沈線 二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き 底部高台部貼付痕	覆土上層	80%
380	土師器	皿	17.5	(2.7)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面口唇部に沿って円状のナデ沈線 二方向の磨き後円状の磨き 底部高台部貼付痕	覆土上層	80%
381	土師器	皿	17.6	3.8	8.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	95%
382	土師器	皿	[17.6]	(2.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面円状のナデ沈線 二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き 底部高台部貼付痕	覆土上層	60%
383	土師器	皿	17.9	3.7	8.5	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面二方向の磨き後口唇部に沿って円状の磨き	覆土上層	95% PL31
384	須恵器	盤	[15.4]	3.7	7.8	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面口唇部に沿って円状のナデ 底部回転ヘラ削り 高台部貼付後ナデ	覆土上層	60% PL35 新治窯
385	須恵器	コップ形土器	[8.6]	10.2	7.1	長石・黒色粒子・白色粒子	灰	良好	ロクロナデ	覆土上層	60% PL35 堀ノ内窯
386	土師器	仏鉢	[20.7]	(9.3)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外面横位の磨き 口縁部内面横ナデ後横位の磨き 体部内面横位の磨き	覆土上層	25%
387	土師器	鉢	21.9	9.9	10.7	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部二方向のナデ 底部内面二方向の磨き	覆土上層	80% PL32
388	土師器	鉢	24.9	15.2	12.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後中位以下に削り 指頭痕 体部内面横位のナデ 指頭痕 底部二方向のナデ 底部内面ナデ	覆土上層	90% PL32
389	土師器	鉢	[25.0]	(13.6)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後下位にヘラ削り 体部内面横・斜位のナデ	覆土上層	20%
390	土師器	鉢	[32.0]	(14.2)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ後下位にヘラ削り 体部内面横位のナデ 指頭痕	覆土上層	20%
391	須恵器	鉢	-	(11.3)	[14.6]	長石・石英・黒色粒子	暗灰黄	良好	体部外面縦・斜位の平行叩き後下位にヘラ削り 体部内面横位のナデ 指頭痕 底部網代痕 二方向のナデ	覆土上層	20% 堀ノ内窯
392	土師器	小形甕	13.9	16.5	7.7	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・横位のナデ後中位以下に削り 体部内面横・斜位のナデ 底部本葉痕 一方向のナデ 指頭痕	覆土上層	70%
393	土師器	甕	23.2	16.0	[11.8]	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部外面縦位のナデ後中位以下に削り 体部内面横位の磨き 底部ヘラ切りによる穿孔 底部内面二方向の磨き	覆土上層	70% PL32 「小長谷部継成」ヘラ書
394	土師器	甕	-	(8.2)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい赤褐	普通	外面縦位のナデ後手貼付 内面横位のナデ	覆土上層	5%
395	須恵器	甕	[29.4]	21.7	[14.4]	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良好	体部外面縦・斜位の平行叩き後下位にヘラ削り 体部内面横位のナデ 指頭痕	覆土上層	40% 堀ノ内窯

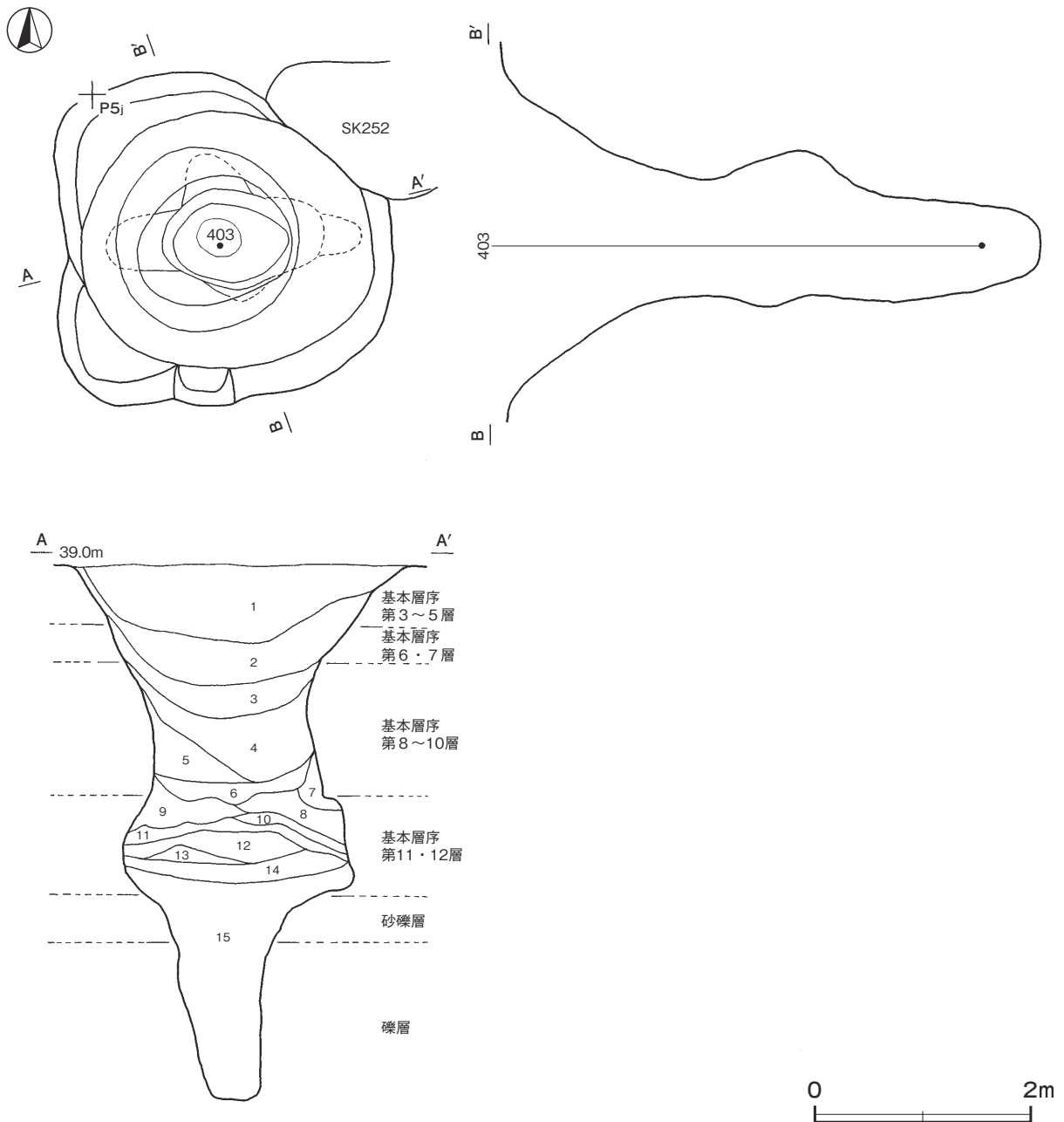
番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 5	羽口	(12.5)	(8.1)	3.0	(464.0)	石英・細礫・白色粒子	にぶい橙	ナデ 先端部一部滓化 吸気部ラッパ状	覆土上層	

#### 第4号井戸跡 (第121・122図)

**位置** 調査区中央部のP5j3区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第252号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 確認面は, 長径3.42m, 短径3.03mの楕円形である。長径方向はN-52°-Wである。確認面から深さ84cmまでの壁は漏斗状に窄まり, 以下は中部でフラスコ状に広がった後, 下部は長径1.05m, 短径0.86mの円筒状に485cmまで掘り込まれている。フラスコ状に広がった中部下位の壁面は, 確認面からの深さ290~320cmの部分で, 南北方向と東西方向に幅60~70cm, 奥行10~50cmほど抉られている。底面は鍋底状で, 礫層を掘り込んでいる。確認面の西半部に, 南北軸3.00m, 東西軸2.00mの範囲で, 隅丸長方形と推定できる掘り込みが確認できた。深さは20cmで, 壁は外傾し, 底面は平坦である。掘方の可能性もあるが, 北東コーナー部と南東コーナー部が確認できなかったことや, 堆積状況の調査ができなかったことから, 不明である。



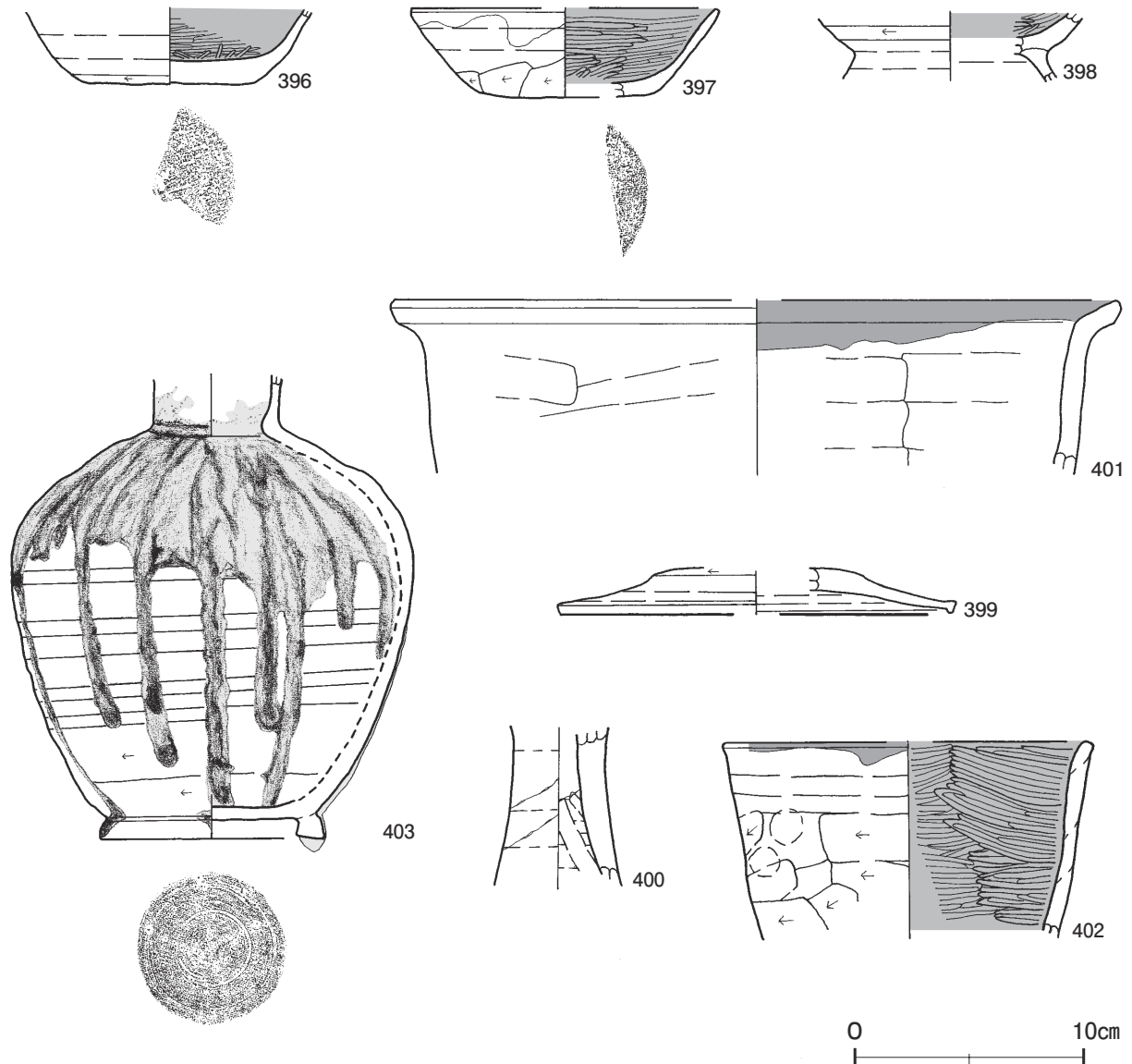
第121図 第4号井戸跡実測図

**覆土** 15層に分層できる。第5～15層はロームブロックが含まれる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第1～4層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。

**土層解説**

- |          |                   |          |           |
|----------|-------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 におい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色    | ロームブロック・焼土粒子微量    | 10 暗褐色   | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色    | ローム粒子・炭化粒子微量      | 11 灰黄褐色  | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色    | ローム粒子少量           | 12 褐色    | ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色    | ロームブロック中量, 鹿沼軽石微量 | 13 灰黄褐色  | ロームブロック中量 |
| 6 暗褐色    | ロームブロック少量         | 14 褐色    | ロームブロック中量 |
| 7 黒褐色    | ロームブロック微量         | 15 暗褐色   | ロームブロック多量 |
| 8 におい黄褐色 | ロームブロック中量         |          |           |

**遺物出土状況** 土師器片 210点 (坏85・高台付碗1・蓋5・鉢2・甕類115・甑2), 須恵器片 96点 (坏43・高台付坏1・蓋12・盤5・高盤1・長頸瓶3・甕類30・甑1), 灰釉陶器1点 (長頸瓶) が, 覆土上層から中層にかけて, 全域に散在した状態で出土している。396・398・402は細片で覆土上層から出土していることから, 流入と考えられる。397・399・400・401は細片で覆土中層, 403は良好な遺存状態で覆土下層から出土し



第122図 第4号井戸跡出土遺物実測図

ていることから、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉に廃絶されたと考えられる。フラスコ状に広がった中部の壁面は、白色粘土層の層厚とほぼ一致していることや覆土下層で崩落土が確認できなかったことから、埋め戻しの途中で粘土を採掘した可能性がある。

第4号井戸跡出土遺物観察表（第122図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
396	土師器	坏	-	(3.2)	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端一方向のヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部一方向の削り 底部内面多方向の磨き	覆土上層	10%
397	土師器	坏	[13.1]	3.8	[7.3]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横位の磨き 底部二方向の削り 底部内面多方向の磨き	覆土中層	25%
398	土師器	高台付碗	-	(2.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部内面横位の磨き	覆土上層	5%
399	須恵器	蓋	[16.8]	(1.9)	-	長石・黒色粒子・白色粒子	灰黄	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	5% 堀ノ内窯
400	須恵器	高盤	-	(6.8)	-	長石・黒色粒子・白色粒子	灰	良好	内面ヘラナデ、粘土紐巻き上げ	覆土中層	10% 堀ノ内窯
401	土師器	鉢	[31.0]	(7.5)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面横位のナデ	覆土中層	5%
402	土師器	鉢	[15.8]	(8.4)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面横・斜位のナデ後 下位にヘラ削り 体部内面横位の磨き	覆土上層	10%
403	灰釉陶器	長頸瓶	-	(19.9)	9.6	長石・黒色粒子・白色粒子	にぶい赤褐 オリーフ灰	良好	体部下位から底部回転ヘラ削り 漬け掛け	覆土下層	90% PL38 猿技産

表8 平安時代井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	U7c6	N-53°-E	中部隅丸方形 下部円形	2.64×2.40	(180)	不明	漏斗状	人為	土師器・須恵器・土製品・動物遺存体	
4	P5j3	N-52°-W	楕円形	3.42×3.03	485	鍋底状	円筒状	人為	土師器・須恵器・灰釉陶器	SK252→本跡

(4) 柱穴列

第8号柱穴列（第123図）

**位置** 調査区北西部のP4d9区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第345号土坑を掘り込んでいる。第23号掘立柱建物跡とは柱穴同士の重複はないものの、第345号土坑の時期から、第23号掘立柱建物跡が先行している。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びていることから、東西方向1.80mの間に配列された柱穴2か所しか確認できなかった。配列方向はN-89°-Eである。柱間寸法は1.80m（6尺）である。

**柱穴** 2か所。平面形は楕円形もしくは隅丸長方形で、長径（軸）は92～114cm、短径（軸）は84～100cmしか確認できなかった。深さは34～40cmで、掘方の壁は直立している。P1は2層に分層でき、柱材を抜き取った後、埋め戻されている。P2は4層に分層でき、第3・4層は埋土、第1・2層は柱痕跡である。柱痕跡から、柱は直径20cmと推定できる。

柱穴土層解説（P1柱穴）

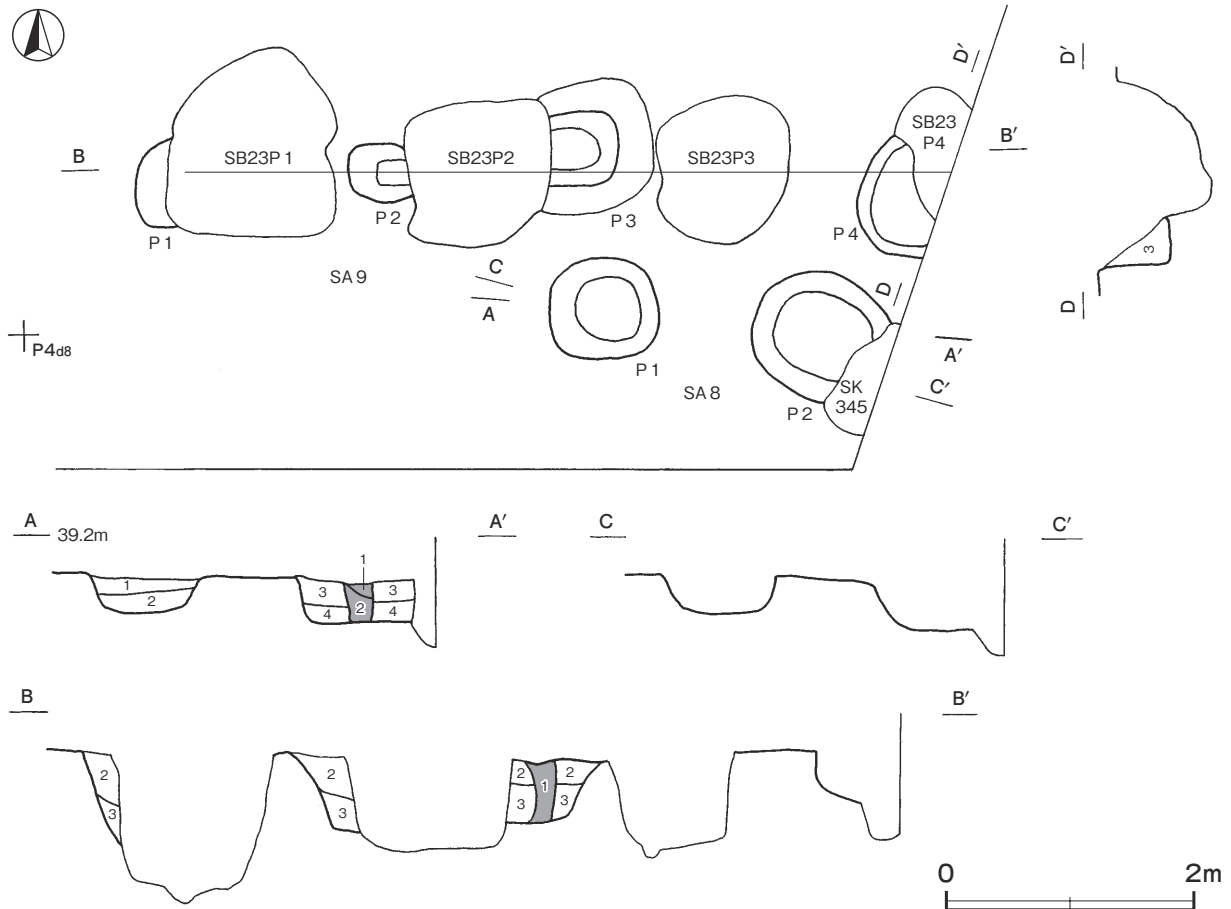
- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

柱穴土層解説（P2柱穴）

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

**所見** 時期は、第23号掘立柱建物跡との重複関係から、9世紀中葉から後葉と考えられる。柱穴の平面形が

第 23 号掘立柱建物跡の柱穴に似ていることから、掘立柱建物跡の可能性はある。



第 123 図 第 8・9号柱穴列実測図

### 第 9 号柱穴列 (第 123 図)

**位置** 調査区北西部の P 4c8 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 23 号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びていることから、東西方向 6.10 m の間に配列された柱穴 4 か所しか確認できなかった。配列方向は N - 84° - W である。柱間寸法は、P 1 ~ P 3 までは 1.5 m (5 尺) であることから、P 3 と P 4 の間に第 23 号掘立柱建物に掘り込まれて消滅した柱穴 1 か所が推定できる。柱筋は、P 3 を除いてほぼ揃っている。

**柱穴** 4 か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形と推定でき、南北軸 50 ~ 104 cm、東西軸は 24 ~ 82 cm しか確認できなかった。深さは 50 ~ 104 cm で、掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。2 ~ 3 層に分層でき、第 2・3 層は埋土、第 1 層は柱痕跡である。柱痕跡から、柱は直径 26 cm と推定できる。

#### 柱穴土層解説 (各ピット共通)

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒色 ローム粒子微量    | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 |                 |

**遺物出土状況** 土師器片 1 点 (坏) が、P 3 から出土している。

**所見** 時期は、第 23 号掘立柱建物跡との重複関係から、9 世紀前葉から中葉と考えられる。柱穴の平面形が

第 23 号掘立柱建物跡の柱穴に似ていることから、掘立柱建物跡の可能性があり、建て替えが想定できる。

表 9 平安時代柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ (m)	柱間 (m)	柱 穴					主な出土遺物	備 考
					柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
8	P 4 d9	N - 89° - E	(1.80)	1.80	2	楕円形・隅丸長方形	(92 ~ 114)	84 ~ 100	34 ~ 40	-	SB23・SK345 → 本跡
9	P 4 c8	N - 84° - W	(6.10)	[1.50]	4	[隅丸方形・隅丸長方形]	(24 ~ 82)	50 ~ 104	50 ~ 104	土師器	本跡 → SB23

(5) 土坑

第 1 号土坑 (第 124 図)

**位置** 調査区南東部の X 8 a1 区、標高 39 m ほどの台地緩斜面に位置している。

**規模と形状** 長径 0.72 m、短径 0.70 m の円形である。深さは 41 cm で、壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

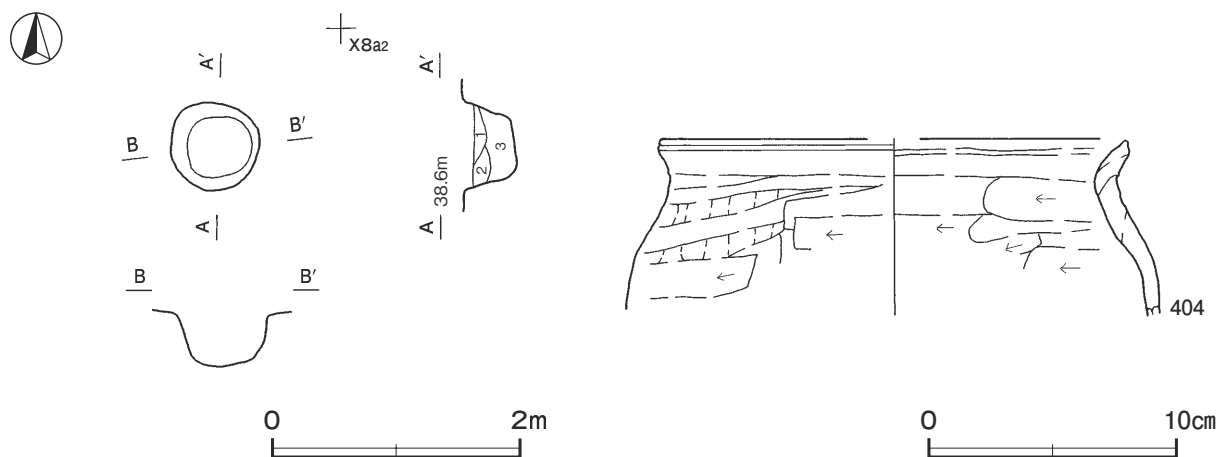
**覆土** 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 におい黄褐色 ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土師器片 11 点 (坏 3・甕類 8)、須恵器片 3 点 (坏 2・瓶類 1) が、出土している。廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第 124 図 第 1 号土坑・出土遺物実測図

第 1 号土坑出土遺物観察表 (第 124 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備 考
404	土師器	甕	[18.6]	(7.0)	-	長石・石英・雲母	におい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦方向のナデ 後横方向のナデ 体部内面横方向のナデ	覆土中	5%

第 56 号土坑 (第 125 図)

**位置** 調査区中央部の T 7 g3 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。



**重複関係** 第6号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径0.90 m、短径0.74 mの楕円形で、長径方向はN - 19° - Eである。深さは90cmで、壁は直立している。底面は平坦である。

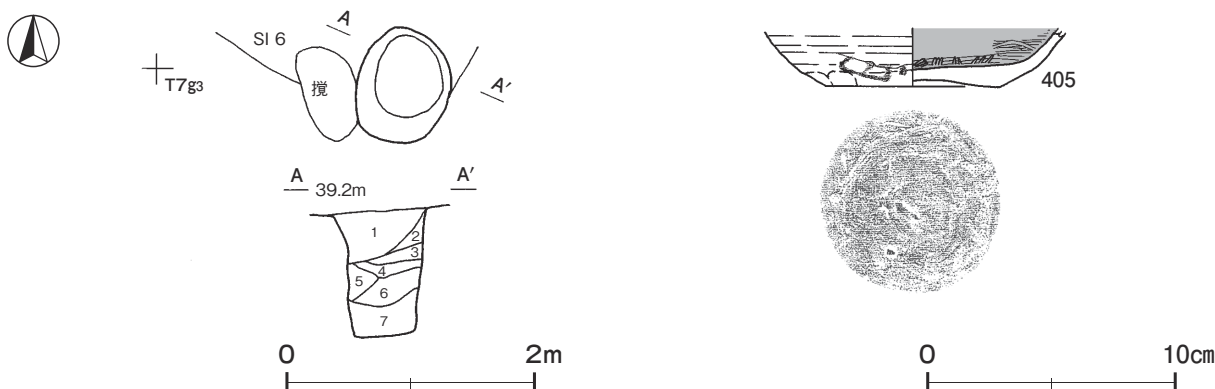
**覆土** 7層に分層できる。不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |                |       |                |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 黄褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 黄褐色 | ロームブロック少量      | 6 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼軽石少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 7 黒色  | 鹿沼軽石中量         |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |       |                |

**遺物出土状況** 土師器片11点（坏4・蓋3・甕類4）、須恵器片1点（坏）が、出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。性格は不明である。



第125図 第56号土坑・出土遺物実測図

第56号土坑出土遺物観察表（第125図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
405	土師器	坏	-	(1.9)	6.8	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部ヘラ削りを残す多方向のナデ 体部内面横位の磨き 底部内面多方向の磨き	覆土中	40% PL37「田。」墨書

**第57号土坑（第126図）**

**位置** 調査区中央部のT7g2区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長径1.06 m、短径0.80 mの楕円形で、長径方向はN - 48° - Eである。深さは58cmで、壁はほぼ直立しているが、東壁の中部に平場が形成され、有段になっている。平面は皿状である。

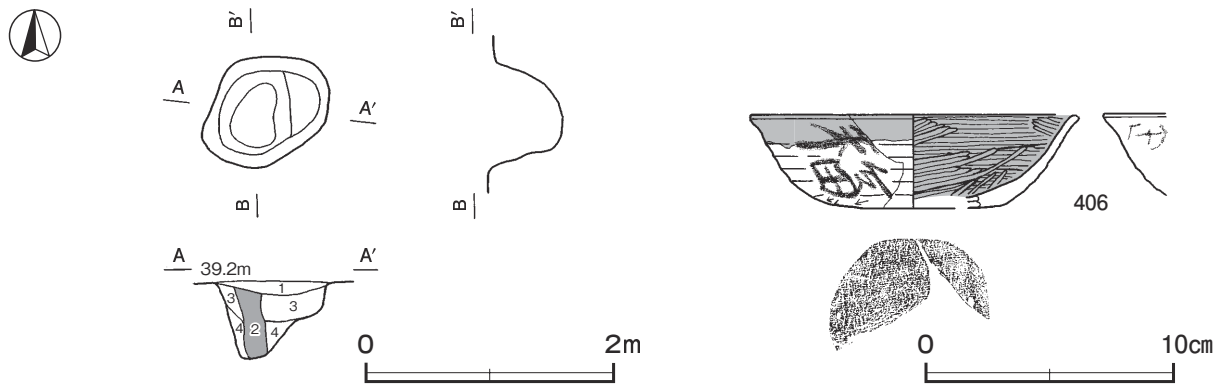
**覆土** 4層に分層できる。第3・4層は埋土、第2層は柱痕跡、第1層は流入土である。

**土層解説**

- |       |              |       |           |
|-------|--------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色  | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量      | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 土師器片13点（坏7・蓋1・甕類5）、須恵器片1点（甌）が、覆土から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。性格は柱穴であるが、関連する柱穴は周辺からは確認できなかった。



第126図 第57号土坑・出土遺物実測図

第57号土坑出土遺物観察表（第126図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
406	土師器	坏	13.0	3.7	[6.8]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端ヘラナデ 体部内面横位の磨き 底部二方向のナデ 底部内面体部から連続する横位の磨き	覆土中	50% PL28 「福」墨書 「田」刻書

### 第60号土坑（第127図）

**位置** 調査区中央部のT7h2区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長径0.67m、短径0.63mの円形である。深さ45cmで、壁は直立もしくはほぼ直立している。底面は平坦である。

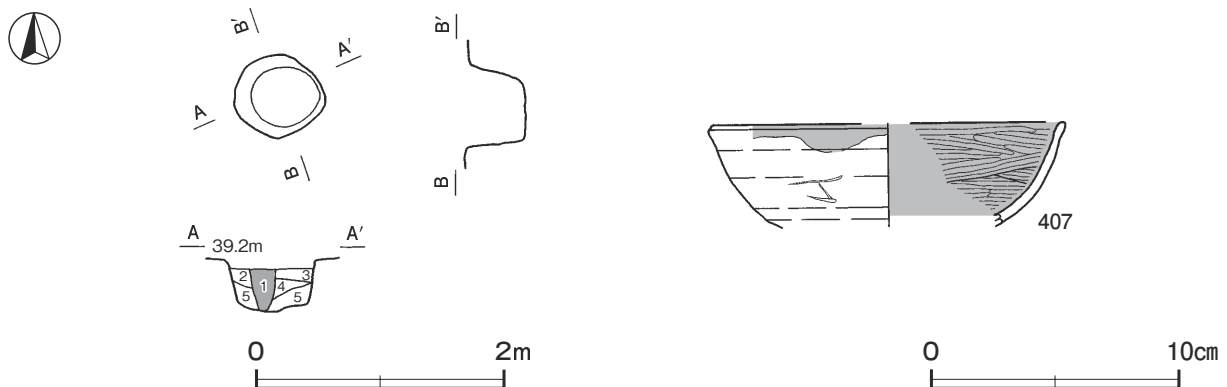
**覆土** 5層に分層できる。第2～5層は埋土、第1層は柱痕跡である。

#### 土層解説

- |          |                  |       |                  |
|----------|------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色    | ロームブロック少量        | 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 褐色  | ロームブロック少量        |
| 3 暗褐色    | ロームブロック・焼土粒子微量   |       |                  |

**遺物出土状況** 土師器片20点（坏8・甕類12）、須恵器片2点（坏1・甕類1）が、出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。性格は柱穴であるが、関連する柱穴は周辺からは確認できなかった。



第127図 第60号土坑・出土遺物実測図

第 60 号土坑出土遺物観察表 (第 127 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
407	土師器	坏	[14.0]	(4.1)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	ロクロナア 体部内面横位の磨き	覆土中	5% PL37 □ 刻書

第 61 号土坑 (第 128 図)

**位置** 調査区中央部の T7i2 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長径 2.18 m, 短径 1.50 m の不整楕円形で, 長径方向は N - 24° - E である。深さは 45cm で, 壁はほぼ直立もしくは外傾している。底面は平坦である。

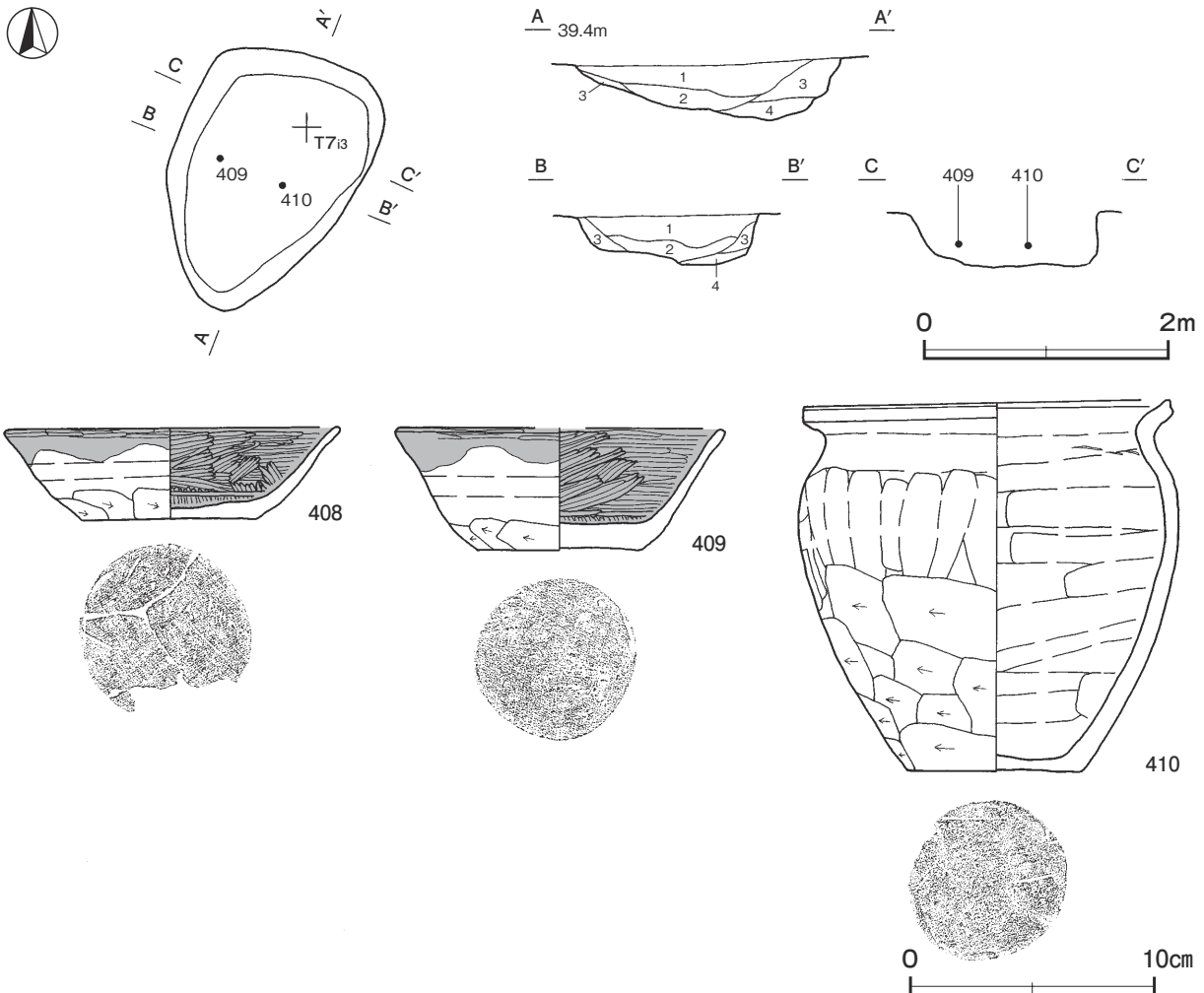
**覆土** 4 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |                        |          |                   |
|-------|------------------------|----------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量      | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量    |

**遺物出土状況** 土師器片 40 点 (坏 13・高台付椀 4・甕類 23), 須恵器片 5 点 (坏 4・蓋 1) が, 覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。性格は不明である。



第 128 図 第 61 号土坑・出土遺物実測図

第 61 号土坑出土遺物観察表 (第 128 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
408	土師器	坏	13.3	3.2	7.0	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き、体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き、底部二方向の削り、底部内面一方向の磨き後見込み外周に沿って凹状の磨き	覆土中	60%
409	土師器	坏	[13.1]	5.0	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横位の磨き、体部下端手持ちヘラ削り 体部内面横・斜位の磨き、底部二方向の削り、底部内面一方向の磨き後見込み外周に沿って凹状の磨き	覆土中	60%
410	土師器	小形甕	14.5	15.0	[6.9]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ、体部外面縦位のナデ後 中位以下に削り、体部内面横位のナデ、底部三方向のナデ	覆土中	80% PL33

第 71 号土坑 (第 129 図)

**位置** 調査区中央部の T 7 g1 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 8 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径 3.60 m、短径 1.48 m の楕円形で、長径方向は N - 71° - W である。深さは 48cm で、壁はほぼ直立もしくは外傾している。底面は若干凹凸している。

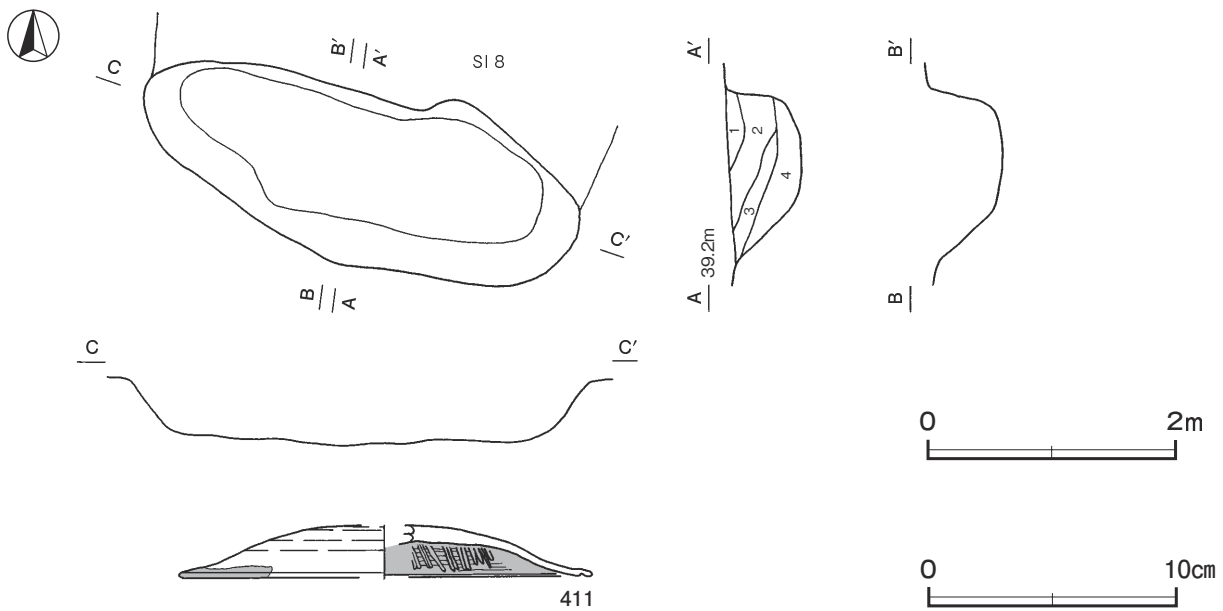
**覆土** 4 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |           |          |                |
|-------|-----------|----------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 3 暗褐色    | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量      |

**遺物出土状況** 土師器片 43 点 (坏 27・高台付椀 4・蓋 3・鉢 1・甕類 8)、須恵器片 6 点 (坏 2・甕類 4) のほか、炭化材 1 点 (34.32 g) が全域に散在した状態で出土している。土器は細片で、覆土中から出土していることから、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。性格は不明であるが、最終的には捨て場に利用されたと考えられる。



第 129 図 第 71 号土坑・出土遺物実測図



### 第 129 号土坑（第 131 図）

**位置** 調査区中央部の U 7c6 区，標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 東部が調査区域外に延びていることから，長軸は 1.20 m で，短軸は 0.48 m しか確認できなかった。確認できた範囲から隅丸長方形と推定でき，長径方向は N - 20° - W である。深さ 40cm で，壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

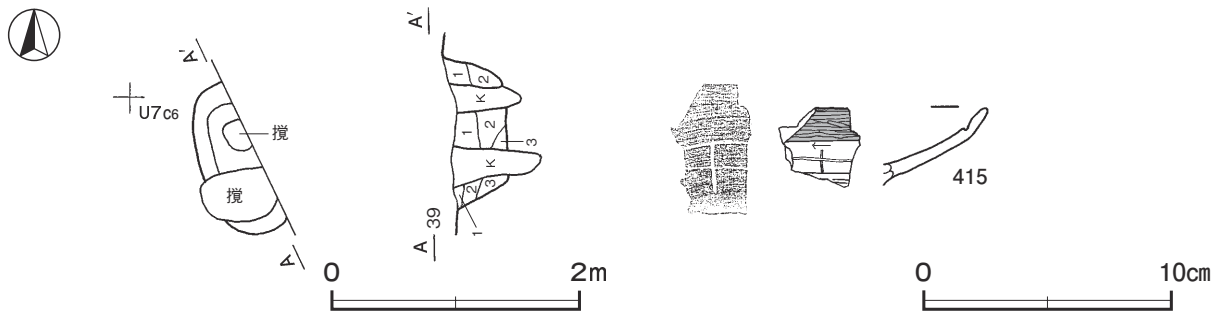
**覆土** 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

#### 土層解説

- |          |                    |        |           |
|----------|--------------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色    | ロームブロック少量，焼土ブロック微量 | 3 灰横褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 にぶい横褐色 | ロームブロック中量          |        |           |

**遺物出土状況** 土師器片 54 点（坏 14・高台付碗 2・蓋 10・皿 5・甕類 23），須恵器片 1 点（坏）のほか，土師質土器片 2 点（鍋）が，覆土中から出土している。埋め戻しに伴って一括投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。性格は不明である。



第 131 図 第 129 号土坑・出土遺物実測図

### 第 129 号土坑出土遺物観察表（第 131 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
415	土師器	皿	-	(3.1)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	灰横褐	普通	口縁部外面横位の磨き 体部回転ヘラ削り 体部内面口唇部に沈線後横位の磨き 内面黒色処理 「十」状のヘラ書	覆土中	10% PL37

### 第 261 号土坑（第 132 図）

**位置** 調査区中央部の P 4f9 区，標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長径 0.78 m，短径 0.50 m の不整楕円形で，長径方向は N - 34° - E である。深さは 60cm で，壁はほぼ直立もしくは外傾している。底面は北東部に平場が形成され，有段になっている。

**覆土** 5 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

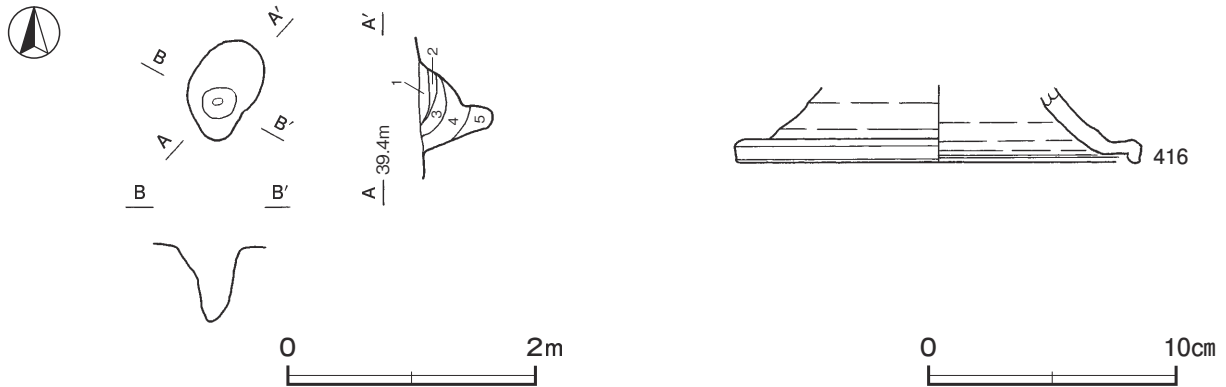
#### 土層解説

- |          |                  |       |                |
|----------|------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 にぶい横褐色 | ロームブロック中量        | 5 暗褐色 | ロームブロック中量      |
| 3 暗褐色    | ロームブロック少量        |       |                |

**遺物出土状況** 土師器片 1 点（鉢），須恵器片 2 点（高盤 1・甕 1）が，覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器や周辺の遺構配置から 9 世紀前葉から中葉に比定できる。性格は，断面形状から柱穴

と考えられるが、関連する柱穴は周辺からは確認できなかった。



第 132 図 第 261 号土坑・出土遺物実測図

第 261 号土坑出土遺物観察表 (第 132 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
416	須恵器	高盤	-	(3.0)	[16.0]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰	良好	内面端部に沿って円状のナデ沈線	覆土中	5%堀ノ内窯。

### 第 263 号土坑 (第 133 図)

**位置** 調査区中央部の P 5 il 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長径 1.20 m、短径 1.12 m の円形である。深さは 46cm で、壁はほぼ直立もしくは外傾している。底面は、西部から東部へ緩やかに傾斜している。

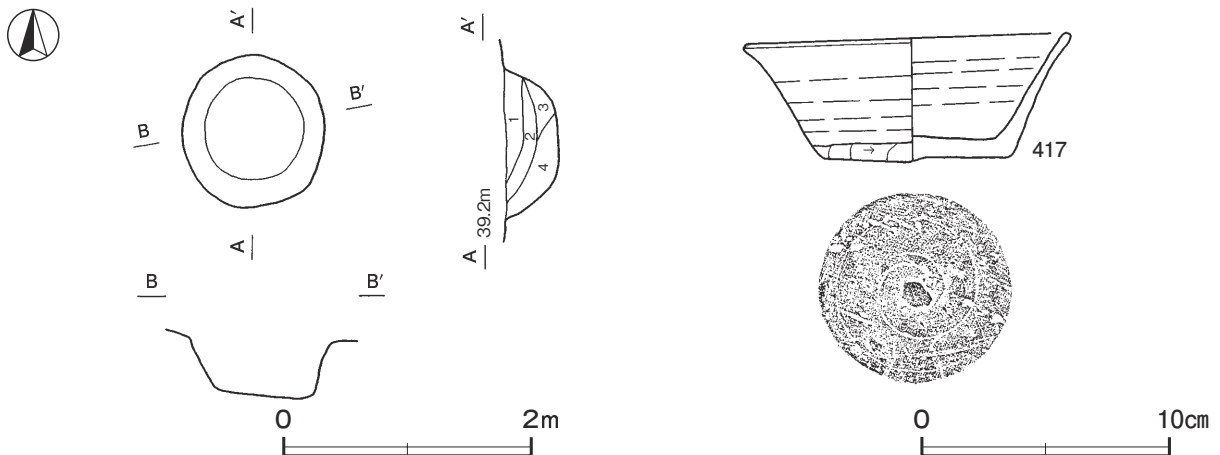
**覆土** 4 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |       |                    |       |           |
|-------|--------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量          | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 土師器片 21 点 (坏 6・甕類 15)、須恵器片 12 点 (坏 6・高台付坏 1・蓋 2・甕類 3) が、覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第 133 図 第 263 号土坑・出土遺物実測図

第 263 号土坑出土遺物観察表 (第 133 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
417	須恵器	坏	12.9	4.9	7.5	長石・石英・ 黒色粒子	灰	良好	体部下端手持ヘラ削り 二方向のナデ 底部ヘラ切りを残す	覆土中	70% PL34 堀ノ内窯

第 338 号土坑 (第 134 図)

**位置** 調査区中央部の P 4 h9 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 25 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

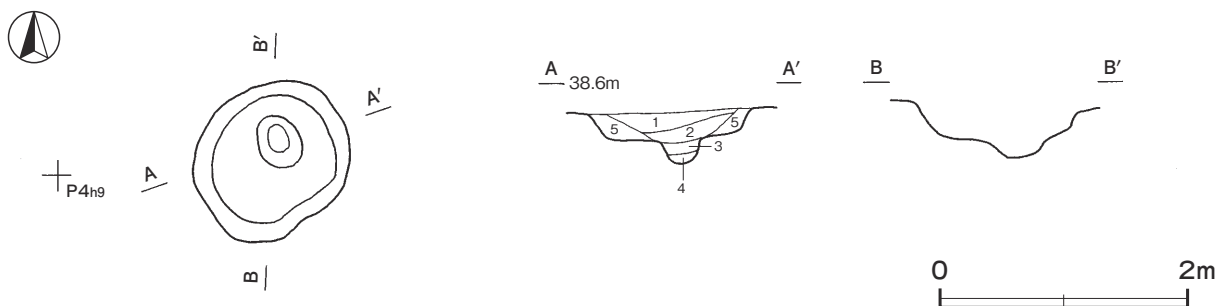
**規模と形状** 第 25 号竪穴建物跡の調査中に床面及び竈前方部を掘り込んだ状態で確認できたことから, 長軸は 1.26 m, 短軸は 1.12 m しか確認できなかつた。確認した範囲から楕円形と推定でき, 長径方向は N - 70° - E である。深さは 44cm しか確認できず, 壁は外傾している。底面は, 中央部北西寄りにピットを有しており, 有段になっている。

**覆土** 5 層に分層できる。第 5 層は埋土, 第 1 ~ 4 層は柱材の抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

- |          |                      |       |                |
|----------|----------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化物少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量  | 5 褐色  | ロームブロック少量      |
| 3 暗褐色    | ロームブロック・炭化粒子少量       |       |                |

**所見** 時期は, 第 25 号竪穴建物跡の年代や第 23 号掘立柱建物跡と第 8・9 号柱穴列の周辺に位置することから, 9 世紀中葉から後葉と推定できる。性格は, 堆積状況から柱穴と判断でき, 掘立柱建物跡の柱穴の可能性はある。



第 134 図 第 338 号土坑実測図

第 345 号土坑 (第 135 図)

**位置** 調査区北西部の P 4 b9 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 8 号柱穴列に掘り込まれている。

**規模と形状** 東半部が調査区域外に延びていることから, 南北径は 0.96 m, 東西径は 0.37 m しか確認できなかつた。確認した範囲から楕円形と推定でき, 長径方向は N - 27° - E である。深さは 76cm で, 壁はほぼ直立している。底面は, 平坦である。

**覆土** 6 層に分層できる。第 4 ~ 6 層は埋土, 第 1 ~ 3 層は柱材の抜き取り後の覆土である。

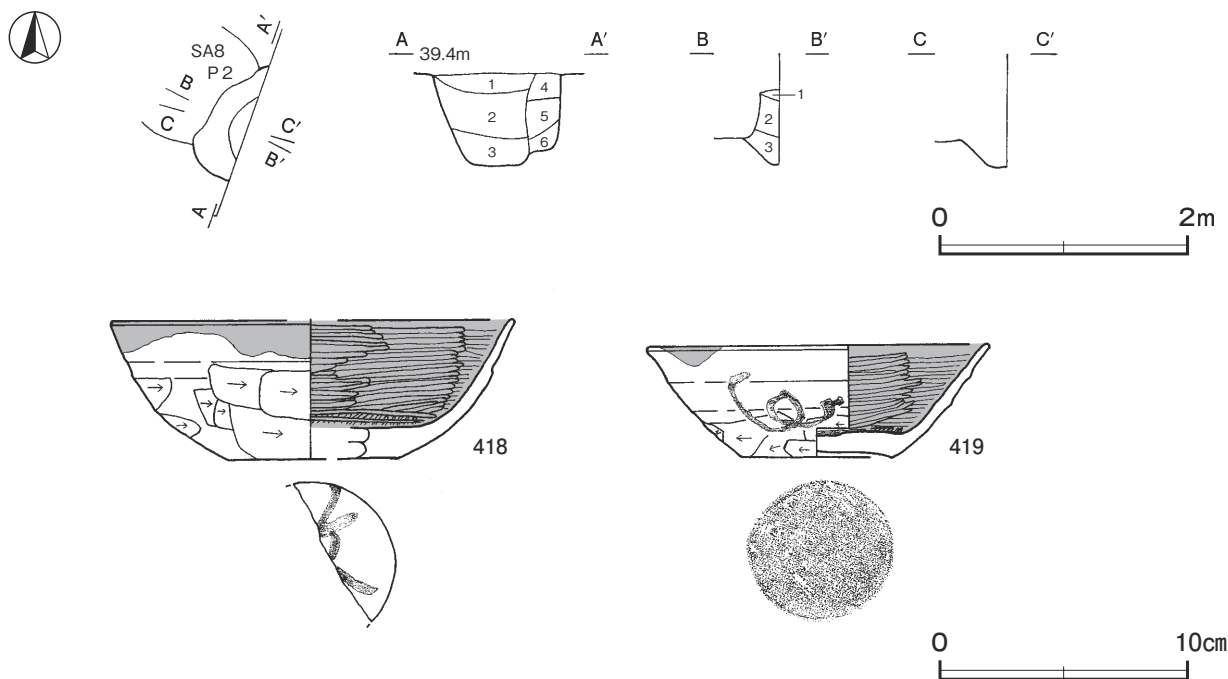


土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 にぶい黄褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化物少量
- 5 褐 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 42 点 (坏 9・高台付碗 2・皿 1・甕類 30), 須恵器片 4 点 (蓋 2・甌 2) が, 埋土から出土している。418・419 は遺存状態が良好であることから, 建立時に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土遺物から 9 世紀中葉に比定できる。底面までの深さが, 第 23 号掘立柱建物跡の柱穴の深さとほぼ一致することから, 第 23 号掘立柱建物跡の東妻柱の可能性はあるが, 調査区域の制約から明確にはできなかった。性格は, 堆積状況から柱穴と判断でき, 掘立柱建物跡の柱穴の可能性はある。



第 135 図 第 345 号土坑・出土遺物実測図

第 345 号土坑出土遺物観察表 (第 135 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
418	土師器	坏	[15.9]	5.5	[6.6]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部中位以下手持ちへら削り 体部内面横位の磨き 底部一方向の削り 底部内面一方向の磨き 後見込み部に外周沿って円状の磨き	埋土	40% PL37 [ ] 墨書
419	土師器	坏	13.5	4.5	5.9	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部下端手持ちへら削り 体部内面横位の磨き 底部一方向の削り 底部内面二方向の磨き 後見込み外周に沿って円状の磨き	埋土	80% PL28 [ ] 墨書

表 10 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	X 8a1	-	円形	0.72 × 0.70	41	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	
56	T 7g3	N - 19° - E	楕円形	0.90 × 0.74	90	平坦	直立	人為	土師器, 須恵器	SI 6 → 本跡
57	T 7g2	N - 48° - E	楕円形	1.06 × 0.80	58	皿状	ほぼ直立 有段	埋土・柱痕跡・流入土	土師器, 須恵器	
60	T 7h2	-	円形	0.67 × 0.63	45	平坦	直立 ほぼ直立	埋土・柱痕跡	土師器, 須恵器	
61	T 7i2	N - 24° - E	不整楕円形	2.18 × 1.50	45	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
71	T 7 g1	N - 71° - W	楕円形	3.60 × 1.42	48	凹凸	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器	SI 8 → 本跡
128	U 7 c5	N - 51° - W	楕円形	0.66 × 0.30	45 ~ 50	有段	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器, 土製品	
129	U 7 c6	N - 20° - W	[隅丸長方形]	1.20 × (0.48)	40	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	
261	P 4 f9	N - 34° - E	不整楕円形	0.78 × 0.50	60	有段	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器	
263	P 5 i1	-	円形	1.20 × 1.12	46	傾斜	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器	
338	P 4 h9	N - 70° - E	楕円形	(1.26) × (1.12)	(44)	有段	外傾	埋土	-	SI25 → 本跡
345	P 4 b9	N - 27° - E	[楕円形]	(0.96) × (0.37)	76	平坦	ほぼ直立	埋土	土師器, 須恵器	本跡 → SA 8

### (6) ピット群

#### 第6号ピット群 (第136図)

**位置** 調査区中央部のP 5j4～Q 5c2区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 南北12.64m, 東西7.10mの範囲に, ピット21か所を確認した。個々の形状, 計測値については, 一覧表に記載する。

**遺物出土状況** 土師器片12点(坏4・甕類8), 須恵器片10点(坏5・甕類4・甌1)が, P 2・P 4・P 8・P 9・P 11・P 12・P 14・P 16・P 18～P 20から出土している。

**所見** 時期は, 出土土器は細片であるが, 平安時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから, 9世紀代と考えられる。P 1～P 8, P 19～P 21は分布状況から, 建物跡は想定できないが, P 10～18は第18号掘立柱建物跡に沿って配置されていることから, 足場柱穴の可能性はある。

#### 第6号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	P 5j4	楕円形	36	26	23	8	Q 5a4	隅丸長方形	60	36	28	15	Q 5b2	楕円形	65	50	26
2	P 5j3	楕円形	54	48	32	9	Q 5a3	円形	30	30	18	16	Q 5c2	楕円形	62	51	20
3	P 5j3	楕円形	28	19	15	10	Q 5a3	楕円形	38	33	12	17	Q 5c2	円形	38	36	32
4	P 5j3	楕円形	36	30	24	11	Q 5a4	楕円形	48	42	20	18	Q 5a4	円形	56	56	14
5	P 5j3	円形	42	42	30	12	Q 5a3	円形	42	42	18	19	Q 5a3	楕円形	53	45	28
6	Q 5a3	楕円形	44	38	12	13	Q 5a3	円形	30	28	17	20	Q 5b3	楕円形	52	36	28
7	P 5j4	円形	62	60	28	14	Q 5a2	円形	32	30	18	21	Q 5b3	不定形	54	44	24

### 3 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は, 掘立柱建物跡6棟, 方形竪穴遺構2基, 井戸跡2基, 墓坑1基, 地下式坑7基, 柱穴列2条, 土坑2基, 溝跡1条, ピット群1か所を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

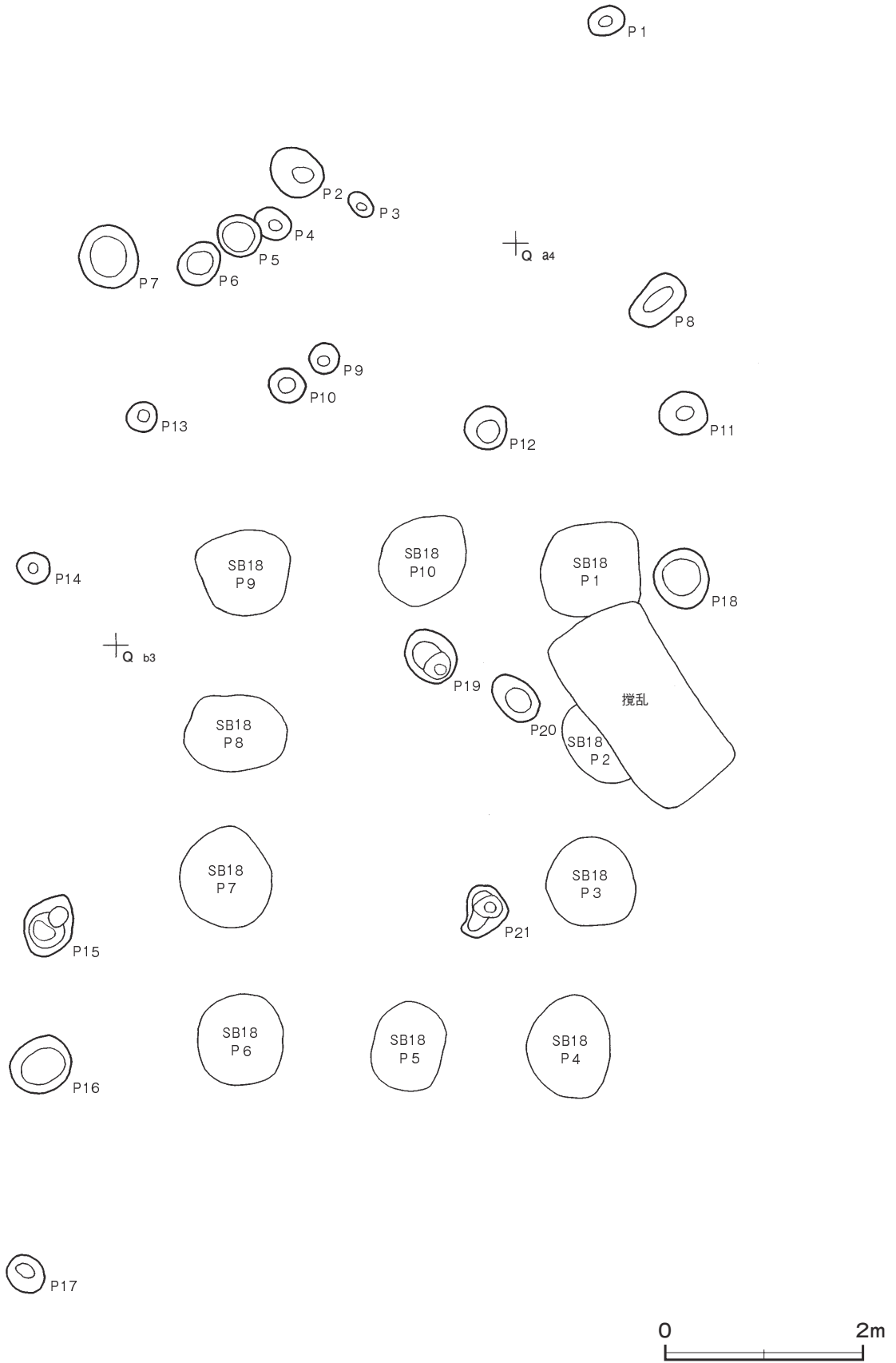
#### (1) 掘立柱建物跡

##### 第5号掘立柱建物跡 (第137図)

**位置** 調査区南東部のV 7h0区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第3号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行2間, 梁行2間の側柱建物跡で, 桁行方向がN - 88° - Wの東西棟である。規模は, 桁行



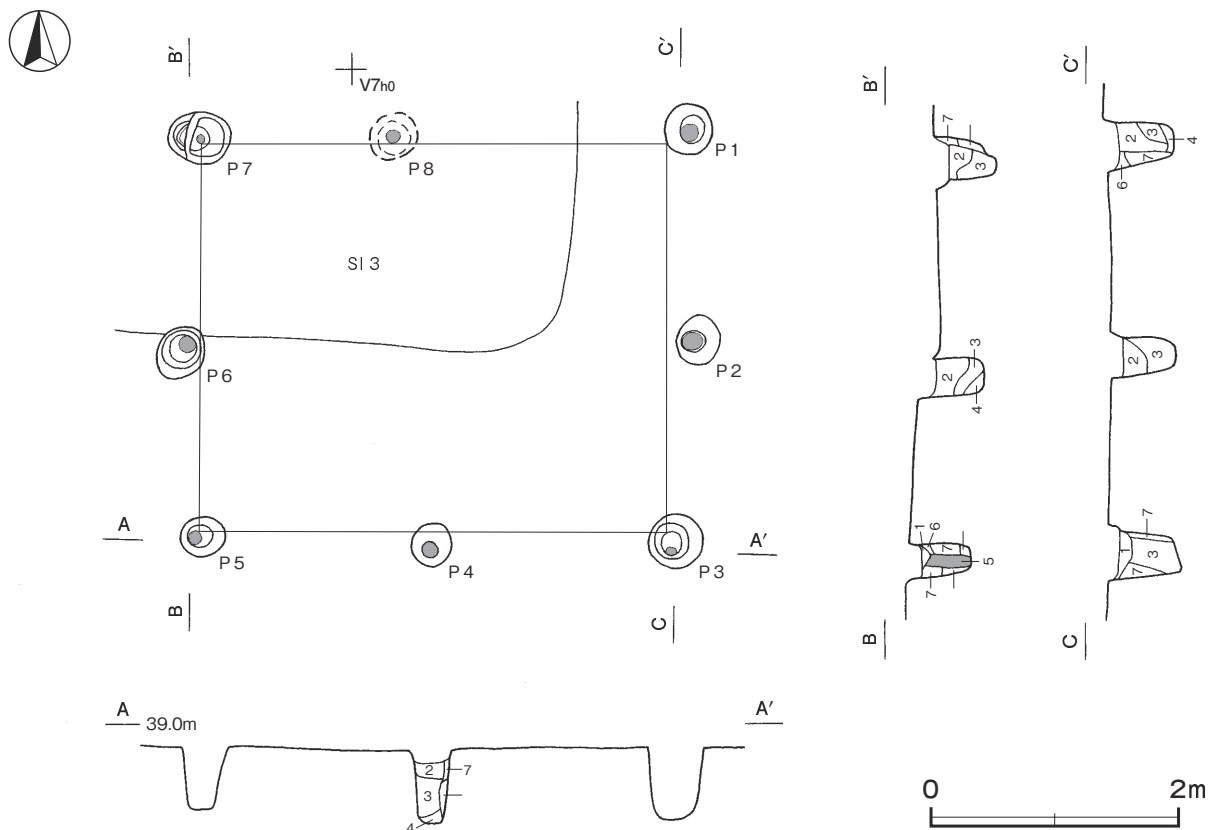
第 136 図 第 6 号ピット群実測図

3.70 m, 梁行 3.00 m で、面積は 11.10㎡である。柱間寸法は、北側桁行が東妻側から 2.10 m (7 尺), 1.60 m (約 5 尺), 南側桁行が 1.80 m (約 6 尺), 梁行は梁行は 1.50 m (5 尺) で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 8か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径 36 ~ 44cm, 短径 32 ~ 41cmである。深さは 29 ~ 58cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第 6 ~ 8 層は埋土, 第 5 層は柱痕跡, 第 2 ~ 4 層は柱材を抜き取った後の覆土, 第 1 層は流入土である。P 1 ~ P 8 の底部からは 柱のあたりが確認できた。柱のあたりや柱痕跡から、柱の直径は 8 ~ 18cmと推定できる。

**柱穴土層解説 (各柱穴共通)**

- |        |                     |       |                  |
|--------|---------------------|-------|------------------|
| 1 黒色   | ローム粒子微量             | 5 黒色  | 炭化物少量, ロームブロック微量 |
| 2 灰黄褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 6 黄褐色 | ロームブロック中量        |
| 3 黒褐色  | ロームブロック微量           | 7 暗褐色 | ロームブロック少量        |
| 4 黒褐色  | ロームブロック少量           | 8 黒褐色 | ロームブロック中量        |



第 137 図 第 5 号掘立柱建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 12 点 (坏 8・甕 4), 須恵器片 1 点 (甕) が, P 1・P 2・P 5 から出土しているが, 建立時や解体時の混入と考えられる。

**所見** 時期は, 奈良・平安時代の土器片が出土しているものの, 北側桁行と南側桁行の柱間寸法に規格性が認められないことから, 平安時代以降の建物跡と考えられる。調査区域では, 15 ~ 16 世紀の土器片が採集できていることから, 室町時代と推定できる。性格は, 「小屋」などの簡易な建物が想定できる。

**第 6 号掘立柱建物跡 (第 138 図)**

**位置** 調査区南東部の X 7 a 8 区, 標高 38 m ほどの台地緩斜面に位置している。

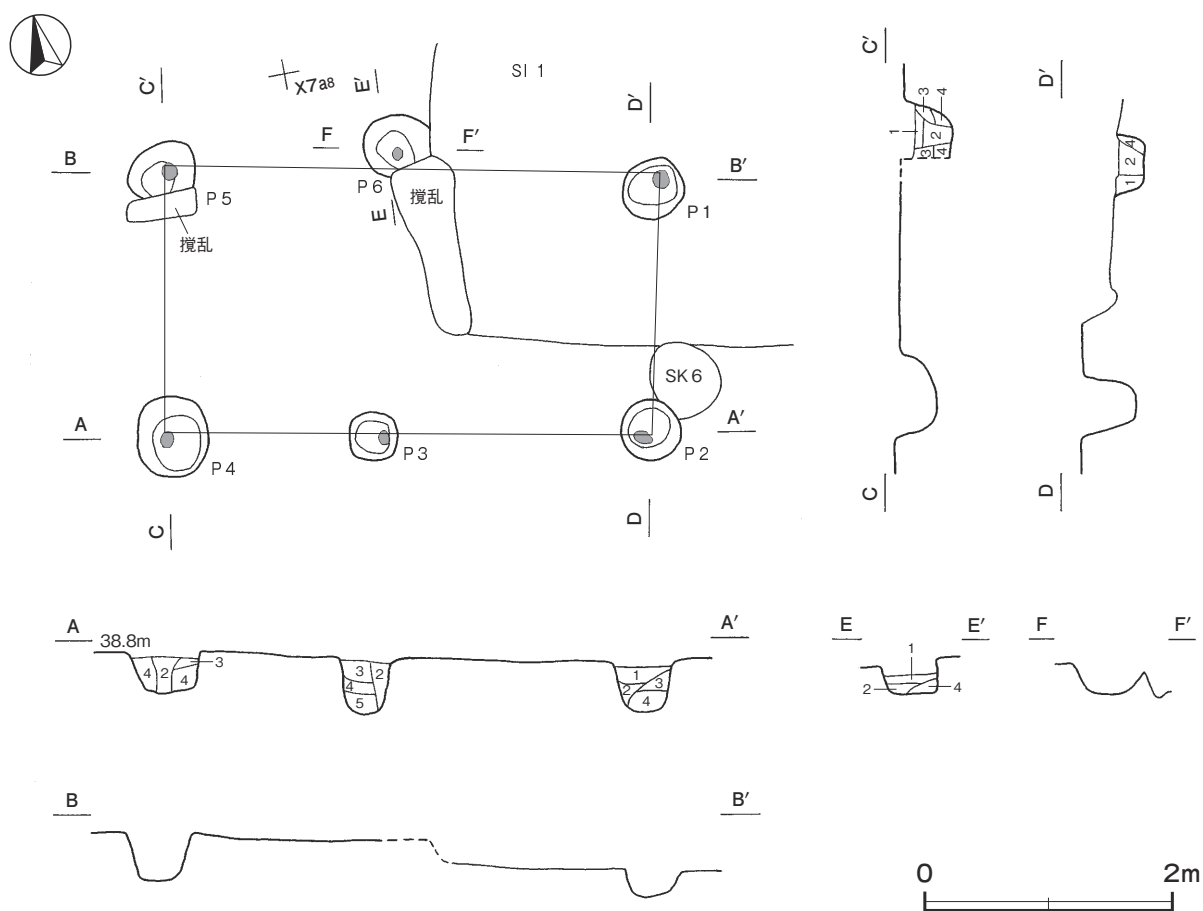
**重複関係** 第1号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第6号土坑との新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行2間，梁行1間の側柱建物跡で，桁行方向がN-78°-Wの東西棟である。規模は，桁行3.90m，梁行2.10mで，面積は8.19㎡である。柱間寸法は，桁行が東妻側から2.10m（7尺），1.80m（6尺），梁行は2.10m（7尺）で，P6を除いて柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 6か所。平面形は円形もしくは楕円形で，長径39～66cm，短径36～56cmである。深さは24～46cmで，掘方の壁はほぼ直立している。第3～5層は埋土，第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1～P6の底部からは柱のあたりが確認できた。柱のあたりから，柱の直径は10～14cmと推定できる。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |          |           |       |           |
|----------|-----------|-------|-----------|
| 1 褐色     | ロームブロック中量 | 4 褐色  | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |       |           |



第138図 第6号掘立柱建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片13点（坏2・甕11），須恵器片2点（長頸瓶・甕）が，P1・P2・P5・P6から出土しているが，建立時や解体時の混入と考えられる。

**所見** 時期は，奈良時代の土器片が出土しているものの，両梁行の妻柱が確認できなかったことから，平安時代以降の建物跡と考えられる。調査区域では，15～16世紀の土器片が採集できていることから，室町時代と推定できる。性格は，「小屋」などの簡易な建物が想定できる。

### 第7号掘立柱建物跡 (第139図)

**位置** 調査区南東部のW7j0区, 標高38mほどの台地緩斜面に位置している。

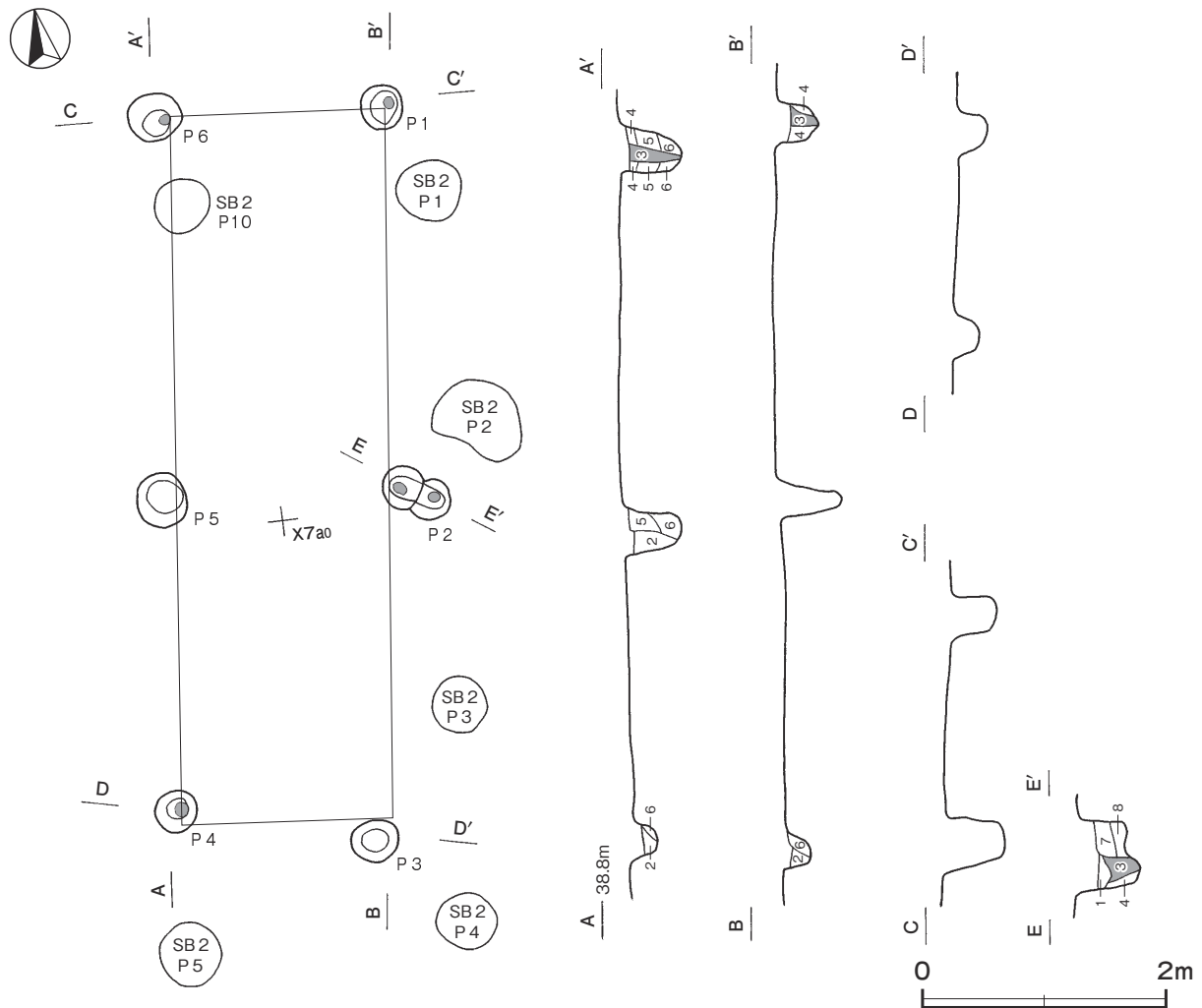
**重複関係** 第2号掘立柱建物跡と重複しているが, 柱穴同士は重複していないことから, 新旧関係は不明である。第2号掘立柱建物跡が奈良時代であることから, 本跡が新しいとみられる。

**規模と構造** 桁行2間, 梁行1間の側柱建物跡で, 桁行方向がN-8°-Eの南北棟である。規模は, 桁行5.70m, 梁行1.80mで面積は10.26㎡である。柱間寸法は, 桁行が北妻側から3.00m(10尺), 2.70m(9尺), 梁行は1.80m(6尺)で, 柱筋はP3を除いてほぼ揃っている。

**柱穴** 6か所。平面形は円形もしくは楕円形で, 長径34~58cm, 短径32~42cmである。深さは22~52cmで, 掘方の壁はほぼ直立している。第4~8層は埋土, 第3層は柱痕跡, 第2層は柱材の抜き取り後の覆土, 第1層は流入土である。P1・P2・P4・P6の底部からは柱のあたりが確認できた。柱のあたりから, 柱の直径は8~16cmと推定できる。また, P2は平面形状や柱のあたりが2か所確認されたことから, 立て替えられた可能性がある。

#### 柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                   |          |                   |
|-------|-------------------|----------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量           | 5 褐色     | ロームブロック少量         |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 褐色     | ロームブロック中量         |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量    | 7 暗褐色    | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量         | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |



第139図 第7号掘立柱建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片5点（甕）が、P2・P5・P6から出土しているが、建立時や解体時の混入と考えられる。

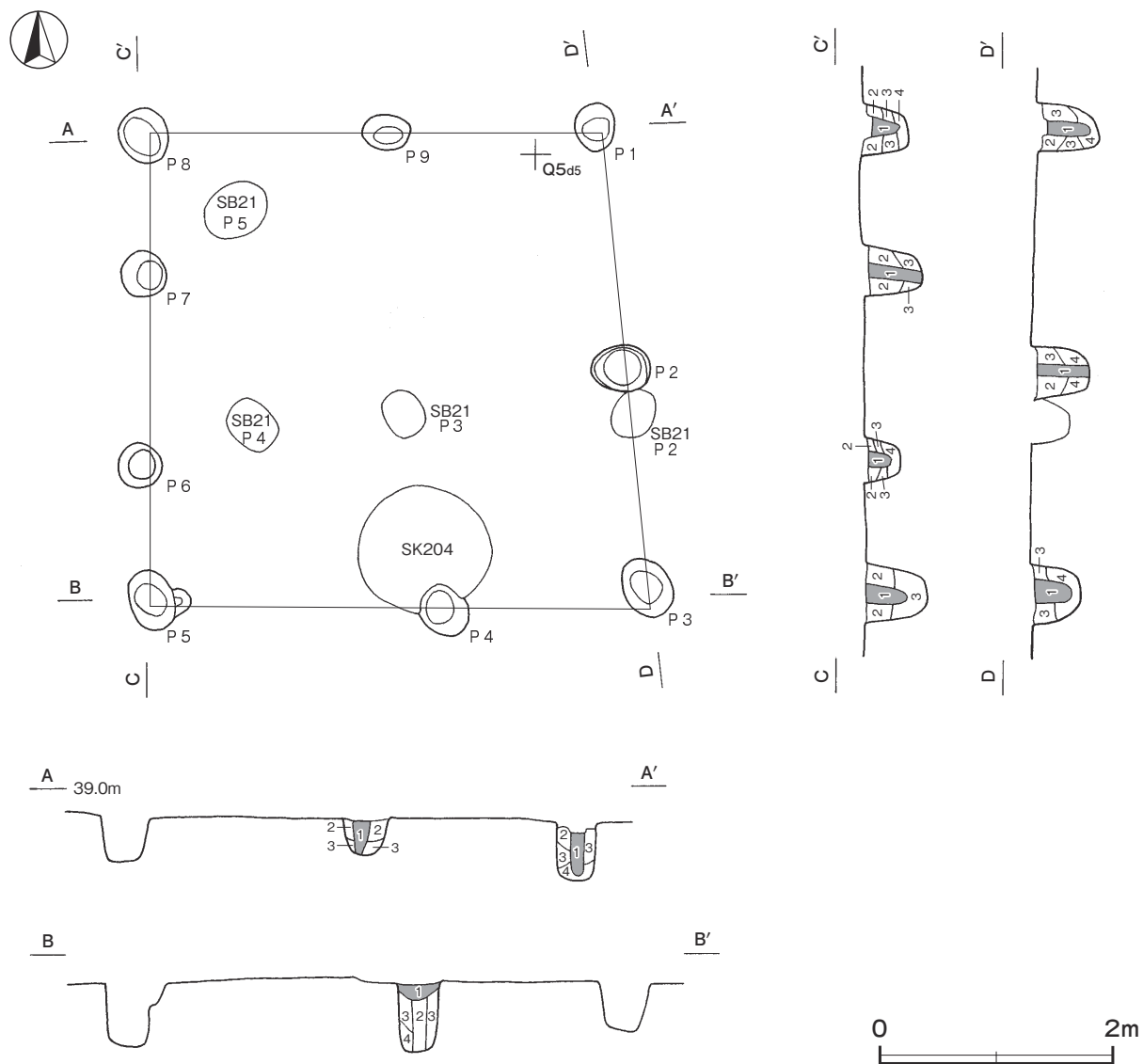
**所見** 時期は、奈良時代の土器片が出土しているものの、両梁行の妻柱が確認できなかったことから、平安時代以降の建物跡と考えられる。調査区域では、15～16世紀の土器片が採集できていることから、室町時代と推定できる。性格は、「小屋」などの簡易な建物が想定できる。

**第17号掘立柱建物跡（第140図）**

**位置** 調査区中央部のQ5d4区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第21号掘立柱建物跡を掘り込み、第204号土坑に掘り込まれている。

**規模と構造** 東側桁行2間、西側桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向が東側桁行でN-6°-W、西側桁行でN-1°-Eの南北棟である。確認できた規模は、桁行3.90m、北側梁行3.90m、南側梁行4.20mで、



第140図 第17号掘立柱建物跡実測図

面積は16.38㎡である。柱間寸法は、東側桁行が2.10 m（7尺）、西側桁行が北妻側から1.20 m（4尺）、1.50（5尺）、1.20 m（4尺）、梁行は北平側が東桁側から1.80 m（6尺）、2.10 m（7尺）、東平側が東桁側から1.80 m（6尺）、2.40 m（8尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 9か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径38～52cm、短径32～42cmである。深さは32～62cmで、掘方の壁は直立している。第2～4層は埋土、第1層は柱痕跡である。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |       |               |          |           |
|-------|---------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量     | 4 暗褐色    | ロームブロック中量 |

**遺物出土状況** 土師器片1点（甕）、須恵器片2点（坏1・甕1）が、P7から出土しているが、建立時の混入と考えられる。

**所見** 時期は、平安時代の土器片が出土しているものの、柱間寸法に規格性が認められないことから、平安時代以降の建物跡と考えられる。調査区域では、15～16世紀の土器片が採集できていることから、室町時代と推定できる。性格は、「小屋」などの簡易な建物が想定できる。

### 第21号掘立柱建物跡（第141図）

**位置** 調査区中央部のQ5d4区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第17号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と構造** 東側桁行1間、西側桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Wの南北棟と推定できる。確認できた規模は、桁行3.60m、梁行3.30mで、面積は12.54㎡と推定できる。柱間寸法は、東側桁行が3.60m（12尺）、西側桁行が1.80m（6尺）、北側梁行が東平側から2.10m（7尺）、1.50m（5尺）南側梁行が東平側から2.10m（7尺）、1.20m（4尺）で、柱筋は、P7を除いてほぼ揃っている。

**柱穴** 7か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径34～55cm、短径36～46cmである。深さは10～33cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第4～6層は埋土、第3層は柱痕跡、第1・2層は柱材の抜き取り後の覆土である。

**柱穴土層解説（各柱穴共通）**

- |          |                  |          |           |
|----------|------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック少量        | 4 黒褐色    | ロームブロック微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色    | ロームブロック・炭化物微量    | 6 褐色     | ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 須恵器片1点（坏）が、P1から出土しているが、建立時や解体時の混入と考えられる。

**所見** 時期は、平安時代の土器片が出土しているものの、柱間寸法に規格性が認められないことから、平安時代以降の建物跡と考えられる。調査区域では、15～16世紀の土器片が採集できていることから、室町時代と推定できる。性格は、「小屋」などの簡易な建物が想定できる。

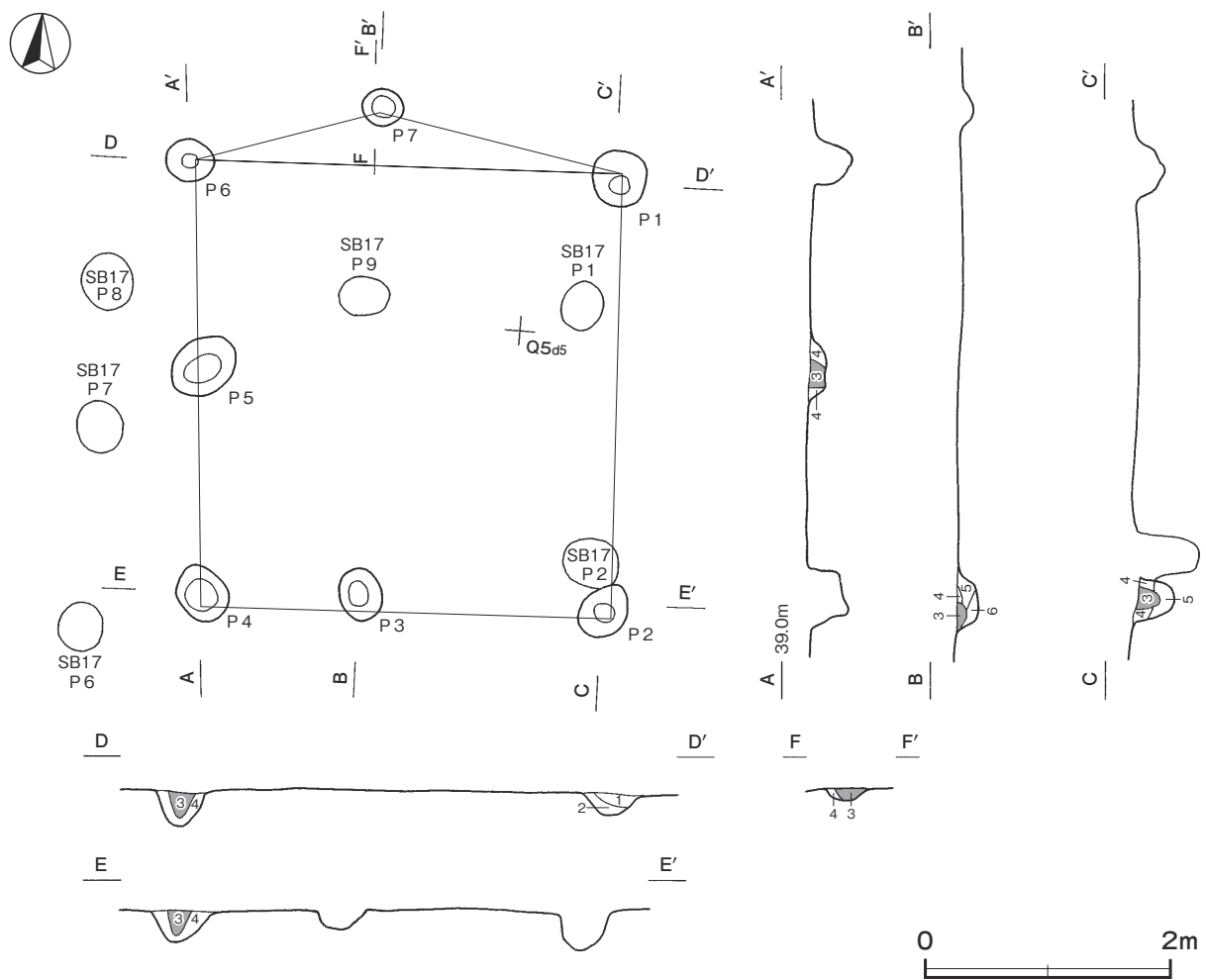
### 第26号掘立柱建物跡（第142図）

**位置** 調査区南東部のW7j8区、標高38mほどの台地緩斜面に位置している。

**重複関係** 第1号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 北西隅柱が調査区域外に推定できることから、北側柱穴列2間、南側柱穴列1間、東・西側柱穴列2間の側柱建物跡と判断できる。桁行方向や南北棟、東西棟かは不明である。確認できた規模から、南北方





第 141 図 第 21 号掘立柱建物跡実測図

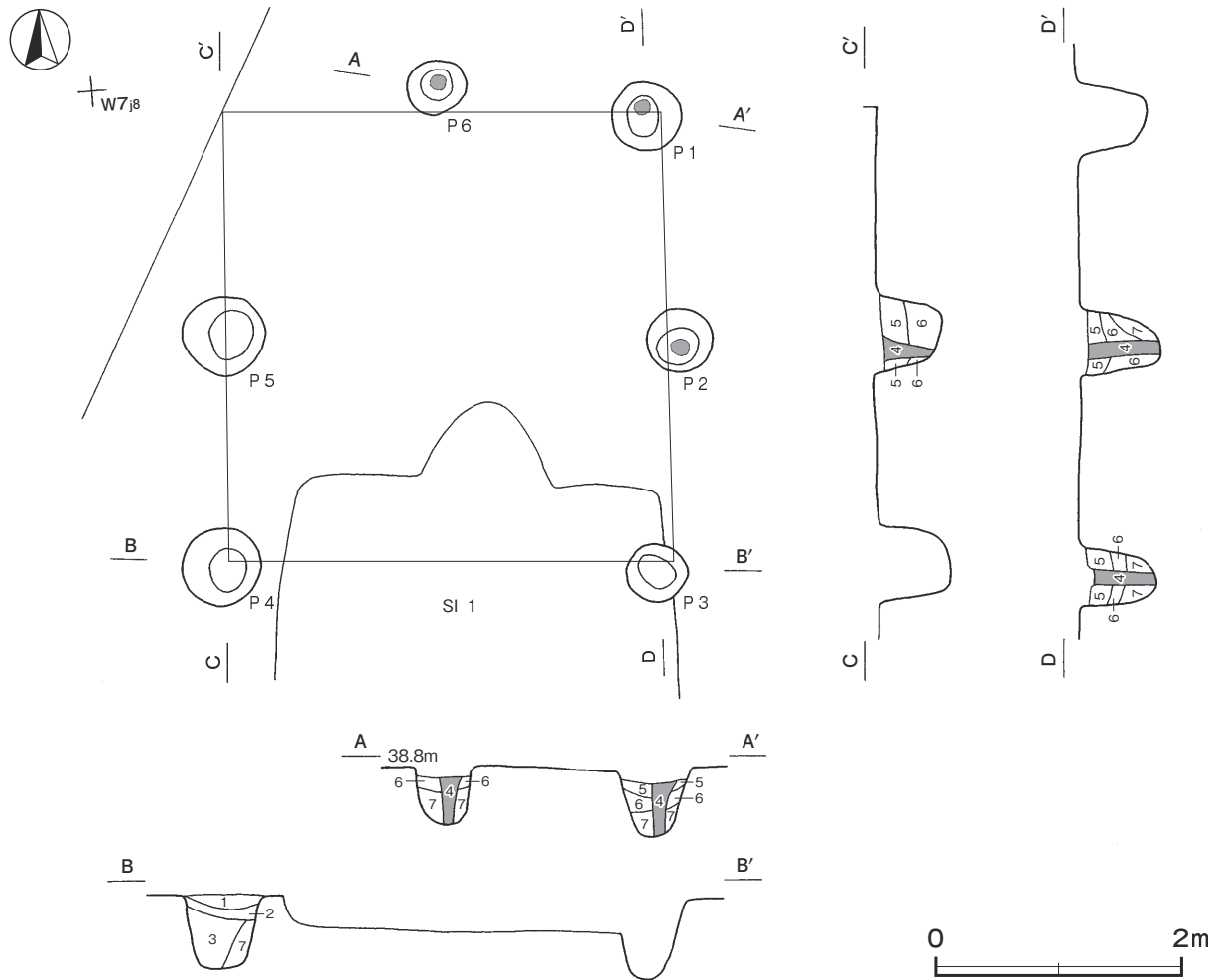
向 3.60 m, 東西方向 3.60 m で, 面積は 12.96m<sup>2</sup> と推定できる。柱間寸法は, 北側柱穴列と東・西側柱穴列の柱穴間が 1.80 m (6 尺), 南側柱穴列の柱穴間が 3.60 m (12 尺) で, P 2・P 6 を除いて柱筋はほぼ揃っている。  
**柱穴** 6 か所。平面形は円形もしくは楕円形で, 長径 50 ~ 64cm, 短径 46 ~ 62cm である。深さは 36 ~ 65cm で, 掘方の壁はほぼ直立している。第 5 ~ 7 層は埋土, 第 4 層は柱痕跡, 第 1 ~ 3 層は柱材の抜き取り後の覆土である。P 1・P 2・P 6 の底面から, 柱のあたりを確認した。柱のあたりや柱痕跡から, 柱の直径は 10 ~ 16cm と推定できる。

**柱穴土層解説 (各柱穴共通)**

- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 褐 暗 色 ローム粒子微量            | 5 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 6 褐 色 ロームブロック少量          |
| 3 暗 褐 色 ロームブロック中量          | 7 黒 褐 色 ロームブロック中量        |
| 4 暗 褐 色 ロームブロック微量          |                          |

**遺物出土状況** 土師器片 17 点 (坏 1, 甕 16), 須恵器片 3 点 (坏 2・甕 1) が, P 2 ~ P 6 から出土しているが, 建立時や解体時の混入と考えられる。

**所見** 時期は, 平安時代の土器片が出土しているものの, 南側柱穴列の中央柱が確認できなかったことから, 平安時代以降の建物跡と考えられる。調査区域では, 15 ~ 16 世紀の土器片が採集できていることから, 室町時代と推定できる。性格は, 「小屋」などの簡易な建物が想定できる。



第 142 図 第 26 号掘立柱建物跡実測図

表 11 室町時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁(間)	規模 桁×梁(m)	面積 (㎡)	柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時 期	備 考	
						桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形				深さ(cm)
5	V 7 h0	N - 88° - W	2 × 2	3.70 × 3.00	11.10	1.60 ~ 2.10	1.50	側柱	8	円形・楕円形	29 ~ 58	-	15 ~ 16 世紀	SI 3 → 本跡
6	X 7 a8	N - 78° - W	2 × 1	3.90 × 2.10	8.19	1.80 ~ 2.10	2.10	側柱	6	円形・楕円形	24 ~ 46	-	15 ~ 16 世紀	SI 1 → 本跡 SK 6 との重複不明
7	W 7 j0	N - 8° - E	2 × 1	5.70 × 1.80	10.26	2.70 ~ 3.00	1.80	側柱	6	円形・楕円形	22 ~ 52	-	15 ~ 16 世紀	SB 2 → 本跡
17	Q 5 d4	東 N - 6° - W 西 N - 1° - E	東 2 × 2 西 3 × 2	3.90 × 3.90・4.20	16.38	1.20 ~ 2.10	1.80 ~ 2.40	側柱	9	円形・楕円形	32 ~ 62	-	15 ~ 16 世紀	SB21 → 本跡 → SK204
21	Q 5 d4	N - 4° - W	東 1 × 2 西 2 × 2	3.60 × 3.30	12.54	1.80 ~ 3.60	1.20 ~ 2.10	側柱	7	円形・楕円形	10 ~ 33	-	15 ~ 16 世紀	本跡 → SB17
26	W 7 j8	不 明	北 2 × 2 南 1 × 2	3.60 × 3.60	[12.96]	1.80 ~ 3.60	1.80	側柱	6	円形・楕円形	36 ~ 65	-	15 ~ 16 世紀	SI 1 → 本跡

(2) 方形竪穴遺構

第 1 号方形竪穴遺構 (第 143 図)

位置 調査区中央部の U 7 b3 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 4 号地下式坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部を第 4 号地下式坑に掘り込まれているが, 長軸 2.20 m, 短軸 1.58 m の隅丸長方形で, 長

軸方向はN-9°-Wである。壁は高さ30cmで、直立している。出入口施設は確認できなかった。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。北西コーナー部に径40cmの範囲で、焼土と灰が廃棄されている。

**ピット** 2か所。P1・P2は深さ50～52cmで、配置から支柱穴と考えられる。3層に分層できる。第2・3層は埋土、第1層は柱痕跡である。

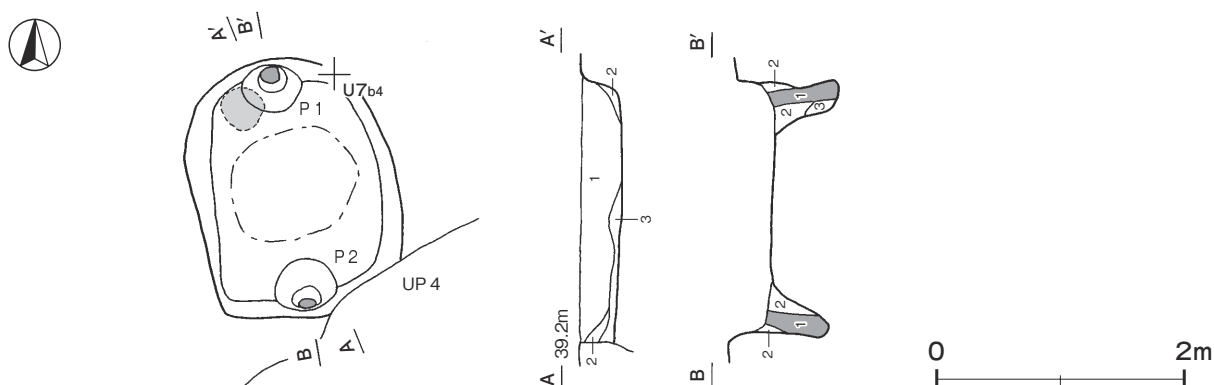
**ピット土層解説 (各ピット共通)**

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量        | 3 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・鹿沼軽石少量 |                 |

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量    | 3 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |                 |



第143図 第1号方形竪穴遺構実測図

**遺物出土状況** 石器・石製品1点（不明）が、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、第4号地下式坑との重複関係から15世紀前半に推定できる。性格は、床面が硬化していることや、焼土と灰が一角に廃棄されていたことから、何らかの作業場と考えられる。第2号方形竪穴遺構と形状が似ていることから、南壁の東部に出入口施設が想定できる。

**第2号方形竪穴遺構 (第144図)**

**位置** 調査区中央部のU7a2区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第80号土坑を掘り込み、第107号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸1.79m、短軸1.40mの隅丸長方形で、長軸方向はN-4°-Eである。壁は高さ50cmで、直立している。南壁の東部に張り出し部が確認できた。第107号土坑に掘り込まれていることから、幅は0.40mで、長さは0.20mしか確認できなかった。確認面から床面へ緩やかに傾斜していることから、出入口施設と考えられる。

**床** 平坦で、硬化面は認められない。

**ピット** 2か所。P1・P2は深さ26～32cmで、配置から支柱穴と考えられる。単一層で、柱材を抜き取った後の覆土である。

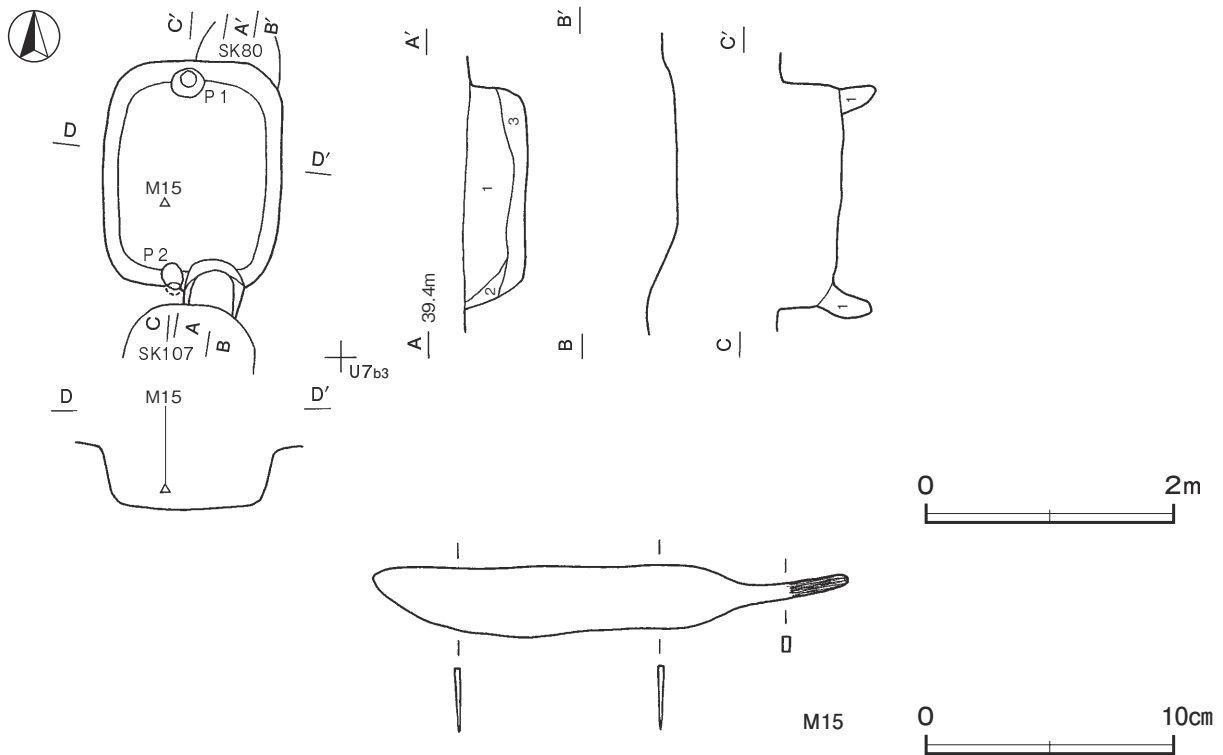
**ピット土層解説 (各ピット共通)**

- |                 |
|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量 |
|-----------------|

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量



第 144 図 第 2 号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片 1 点（鉢），金属製品 1 点（刀子）が，出土している。M 15 は大型で，床面から出土していることから，廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。

所見 時期は，規模や形状が似ている第 1 号方形竪穴遺構と同時期の 15 世紀前半と推定できる。

第 2 号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第 144 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 15	刀子	18.9	2.7	0.3	50.09	鉄	刃部断面三角形 茎部断面長方形、木片付着	床面	PL41

表 12 室町時代方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	内部施設			覆土	主な出土遺物	備考
				長軸×短軸 (m)				柱穴	出入口	ピット			
1	U 7 b3	N - 9° - W	隅丸長方形	2.20 × 1.58		30	平坦	2	[南壁]	-	人為	石器，石製品	本跡→UP 4
2	U 7 a2	N - 4° - E	隅丸長方形	1.79 × 1.40		50	平坦	2	南壁	-	人為	土師質土器，金属製品	SK80→本跡→SK107

(3) 井戸跡

第3号井戸跡 (第145図)

位置 調査区中央部のU7a4区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

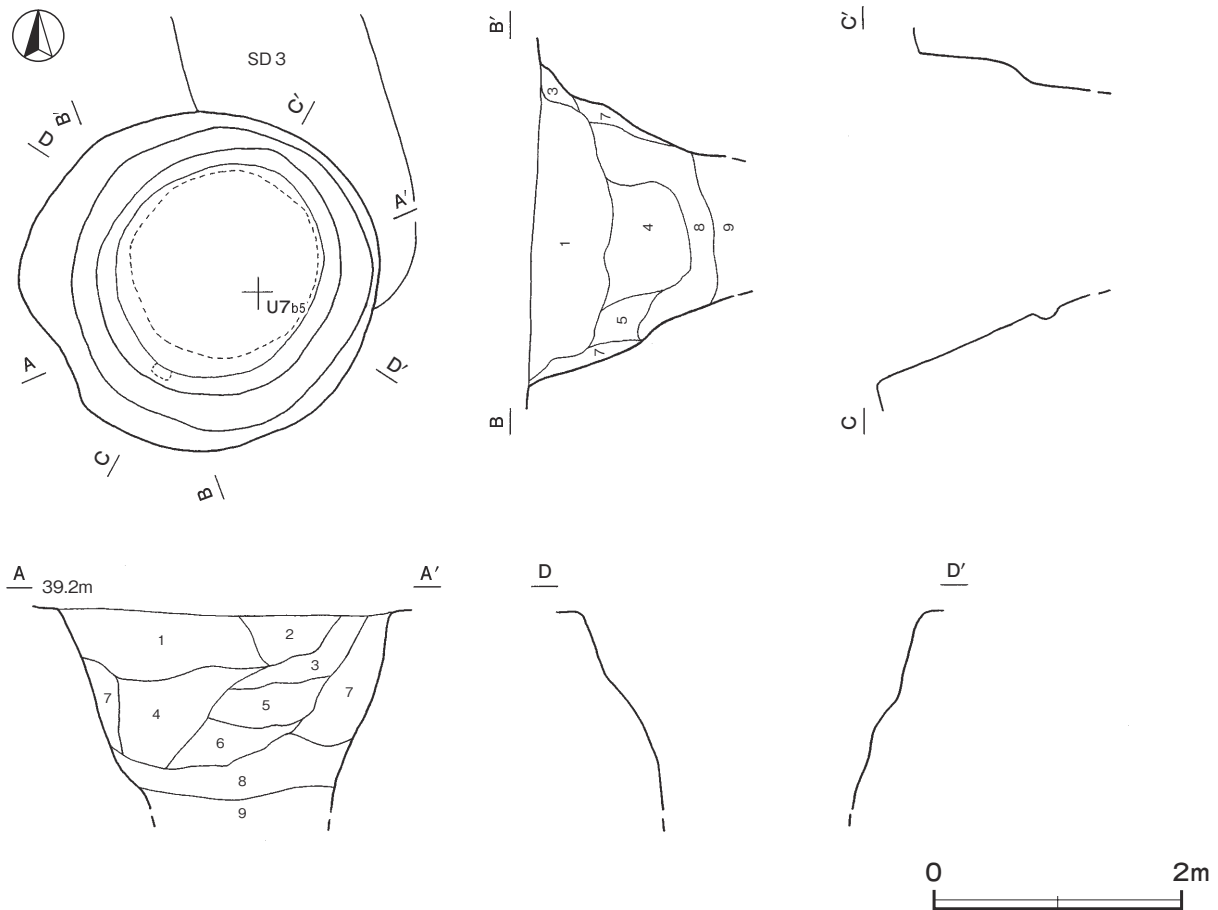
重複関係 第3号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認面は長径2.68m, 短径2.61mの円形である。確認面から深さ90cmまでは漏斗状に掘り込まれ, それより下部は長径1.88m, 短径1.82mの円筒状に掘り込まれている。確認面から深さ150cmほど掘り下げた段階で, 崩落が想定されたため, 以下の調査を断念した。

覆土 9層に分層できる。不自然な堆積状況から, 埋め戻されている。

土層解説

- |                           |                             |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・鹿沼軽石・炭化物少量  | 6 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量           |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量   | 7 にぶい黄褐色 ロームブロック少量          |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 8 暗褐色 ロームブロック・鹿沼軽石・粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量       | 9 黒褐色 ロームブロック少量             |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量           |                             |



第145図 第3号井戸跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片5点(皿1・鉢1・内耳鍋3), 陶器片2点(常滑産甕)のほか, 土製品4点(支脚), 石器1点(剥片), 金属製品1点(刀子)が, 全域に散在した状態で出土している。土器は主に細片で, 覆土上層から出土していることから, 埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 土器は細片で図示できないが, 重複関係から第3号溝跡より新しい15世紀後半と考えられる。

### 第6号井戸跡 (第146・147図)

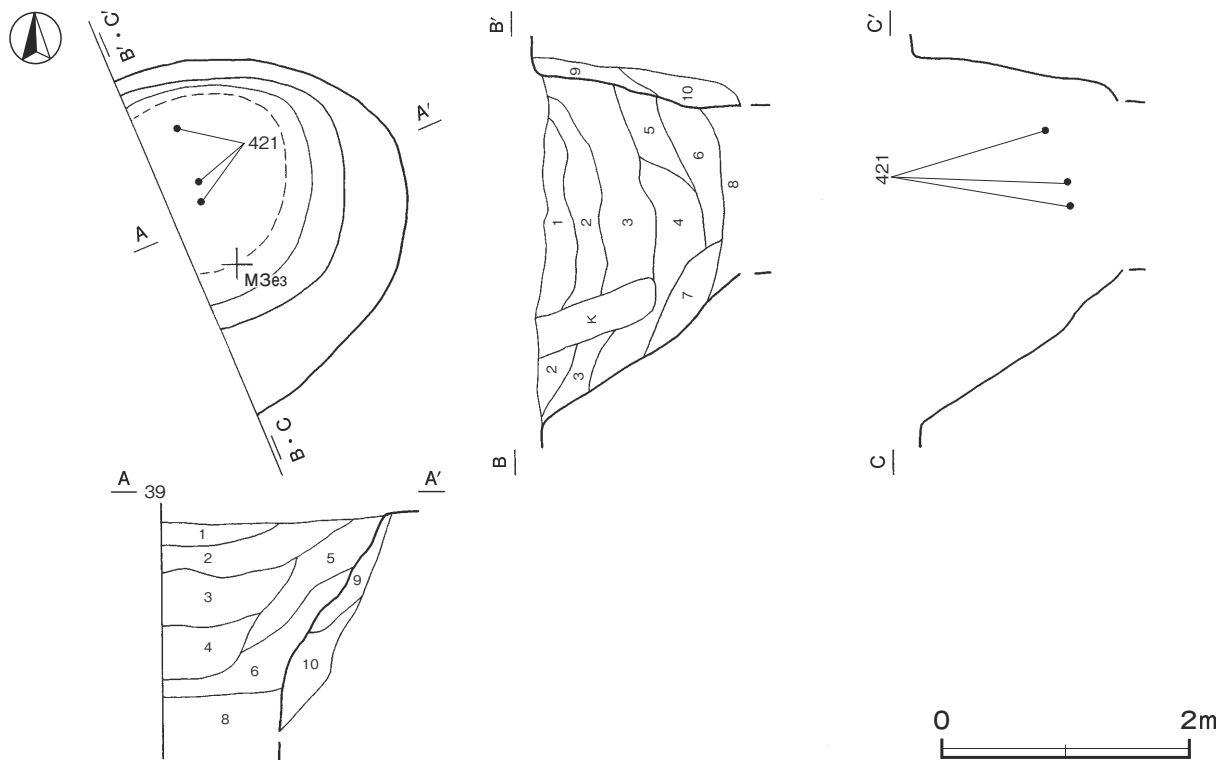
**位置** 調査区北西部のM3d3区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 西半部が調査区域外に延びていることから、確認面は南北径2.87m、東西径は1.80mしか確認できなかったが、円形もしくは楕円形と推定でき、南北径方向はN-25°-Wである。確認面から深さ126cmまでは、漏斗状に掘り込まれ、それより下部は南北軸1.50m、東西軸は1.04mしか確認できなかったが、隅丸方形もしくは隅丸長方形の筒状に掘り込まれている。確認面から深さ160cmほど掘り下げた段階で、崩落が想定されたため、以下の調査を断念した。

**覆土** 10層に分層できる。第3～8層はロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1～2層はレンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第9・10層は井戸枠を埋設した後の裏込め土である。

#### 土層解説

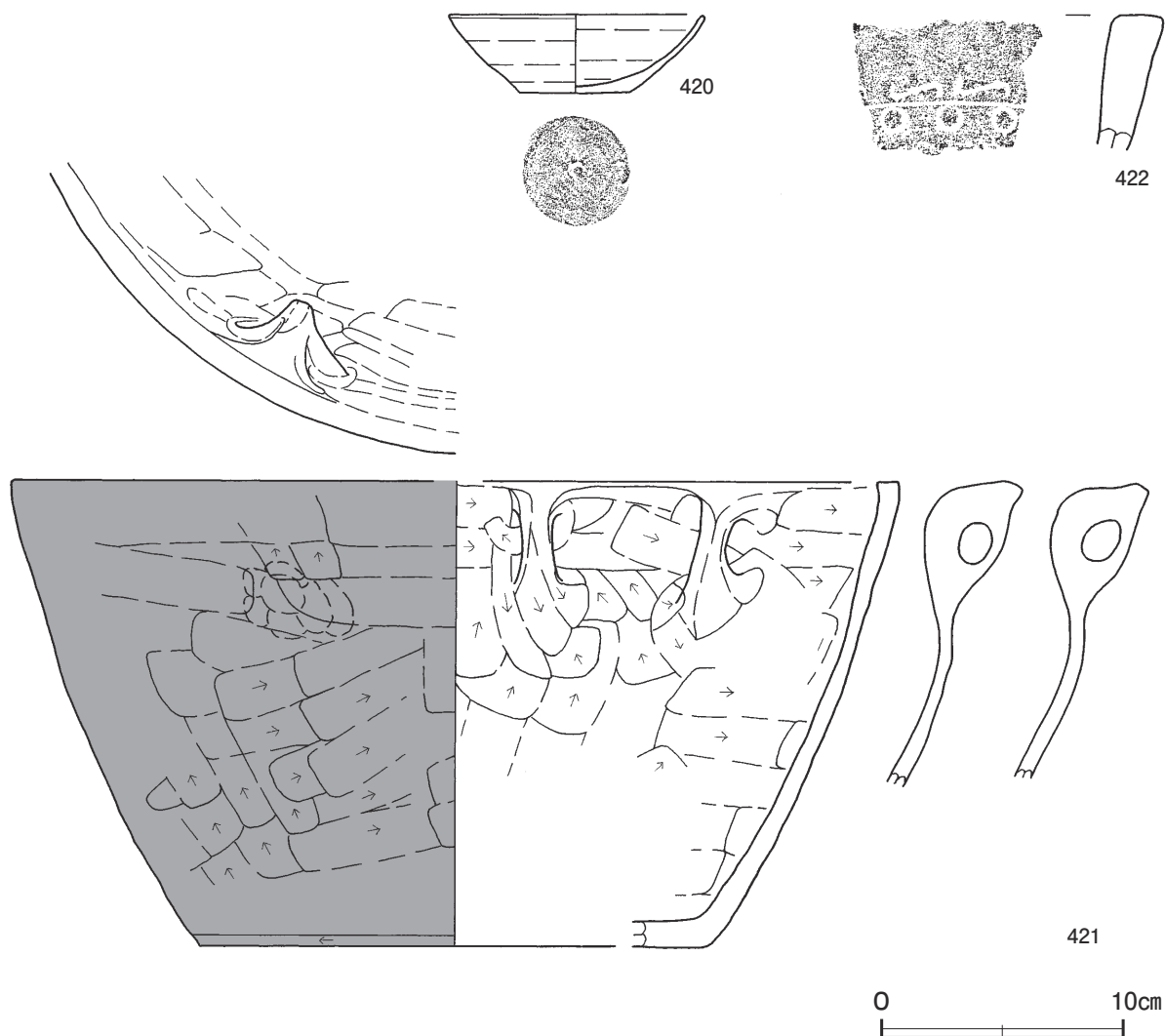
- |       |                     |           |                     |
|-------|---------------------|-----------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量      | 6 灰黄褐色    | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量             | 7 にぶい黄褐色  | ロームブロック中量           |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量           | 8 暗褐色     | ロームブロック中量           |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 9 褐色      | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量    | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量 |



第146図 第6号井戸跡実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片55点(皿1・内耳鍋53・火舎1), 陶器片1点(甕)のほか, 土師器片1点(甕類)が, 全域に散在した状態で出土している。土器は主に中型の破片で, 覆土上層から中層にかけて出土していることから, 埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から15世紀後半に比定できる。



第 147 図 第 6 号井戸跡出土遺物実測図

第 6 号井戸跡出土遺物観察表 (第 147 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
420	土師質土器	皿	[10.4]	3.2	[4.4]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り後ナデ	覆土中	75% PL39
421	土師質土器	内耳鍋	[36.1]	18.9	[20.6]	長石・石英・金雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のナデ後横位のナデ, 下端へら削り, 指頭痕 体部内面縦・横位のナデ 底部板目を残すナデ	覆土中層	75% PL39 煤付着
422	土師質土器	火舎	-	(5.5)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ, 外面に沈線を挟んで丸と S 字状の押印 体部内面横位のナデ	覆土中	5%

表 13 室町時代井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3	U 7 a4	-	円形	2.68 × 2.61	(150)	不明	漏斗状	人為	土師質土器, 陶器	SD 3 → 本跡
6	M 3 d3	N - 25° - W	[円形・楕円形]	2.87 × (1.80)	(160)	不明	漏斗状	自然 人為	土師質土器, 陶器	

(4) 墓坑

第1号墓坑 (第148図)

**位置** 調査区中央部のU7a3区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

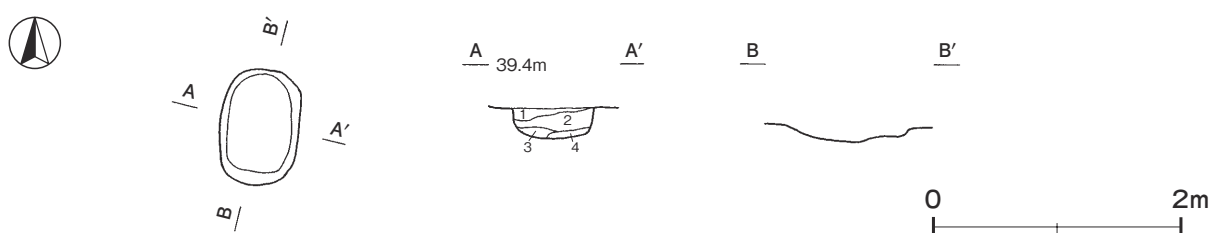
**重複関係** 第10号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸0.95m, 短軸0.63mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-6°-Eである。深さは25cmで, 壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋葬時に埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |           |          |           |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 3 にぶい横褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色  | ロームブロック中量 | 4 暗褐色    | ロームブロック少量 |



第148図 第1号墓坑実測図

**遺物出土状況** 少量の人骨片や歯(27本)が, 北東部の床面及び覆土下層から出土している。

**所見** 時期は, 周辺の地下式坑や井戸跡の年代から, 15世紀後半から16世紀前半に推定できる。墓坑の規模や骨片と歯の出土状況から, 埋葬は横臥屈葬の可能性がある。歯には乳歯と永久歯が含まれていることから, 幼少児と考えられるが, 性別は不明である。

(5) 地下式坑

第1号地下式坑 (第149図)

**位置** 調査区中央部のT7g2区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**軸長・軸方向** 軸長2.62m, 軸方向はN-28°-Eである。

**竪坑** 主室の南西壁中央部に位置し, 壁の上部が崩されていることから, 奥行0.90m, 横幅は1.00mしか確認できなかったが, 隅丸方形と推定できる。深さは90cmで, 壁は直立しているが, 上部は外傾している。底面は緩やかに下り, 主室に至っている。

**主室** 奥行1.54m, 横幅1.80mの長方形である。天井部は崩落しており, 確認面から底面までの深さは110cmで, 壁は直立している。底面は皿状で, 硬化面は認められなかった。

**覆土** 7層に分層できる。第4~7層は天井部の崩落土, 第3層は流入土, 第1~2層はロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。第2層にはロームブロックが多量に含まれていることや竪坑周辺が崩壊していることから, 竪坑の壁上部を崩して埋め戻している。

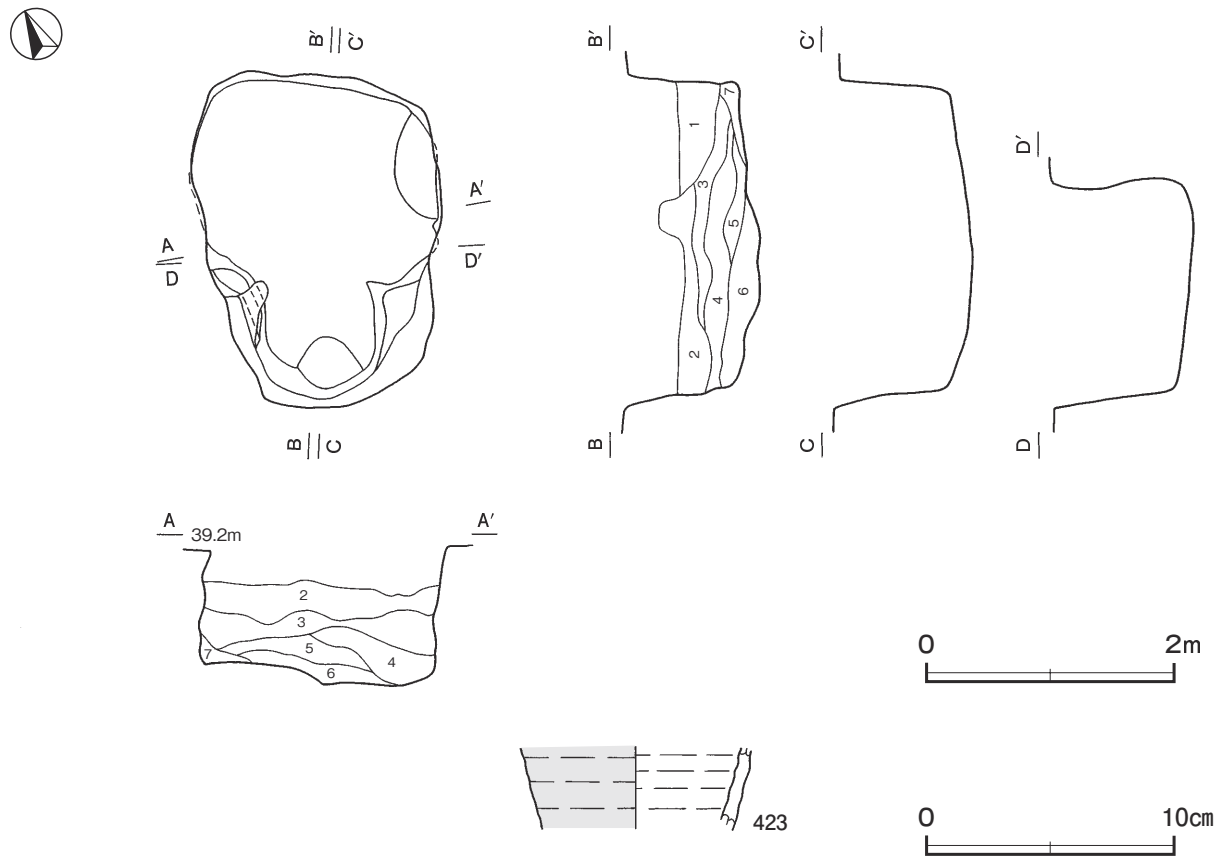
**土層解説**

- |          |                   |       |                   |
|----------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック・鹿沼軽石少量    | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼軽石少量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック多量, 鹿沼軽石少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量         |
| 3 黒色     | ローム粒子微量           | 7 黄褐色 | ロームブロック・鹿沼軽石少量    |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼軽石少量 |       |                   |



**遺物出土状況** 土師質土器片2点（鉢・内耳鍋）、陶器片1点（花瓶<sub>9</sub>）のほか、土師器片110点（坏40・高台付坏9・蓋3・皿2・甕類56）、須恵器片10点（坏8・蓋1・甕類1）が、全域に散在した状態で出土している。土師質土器は小型の破片で、覆土中から出土していることから、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から16世紀前半に比定できる。



第149図 第1号地下式坑・出土遺物実測図

第1号地下式坑出土遺物観察表（第149図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
423	陶器	花瓶 <sub>9</sub>	-	(3.2)	-	長石・石英・オリープ黄	ロクロナデ 漬け掛け	灰釉	瀬戸	覆土中	5%

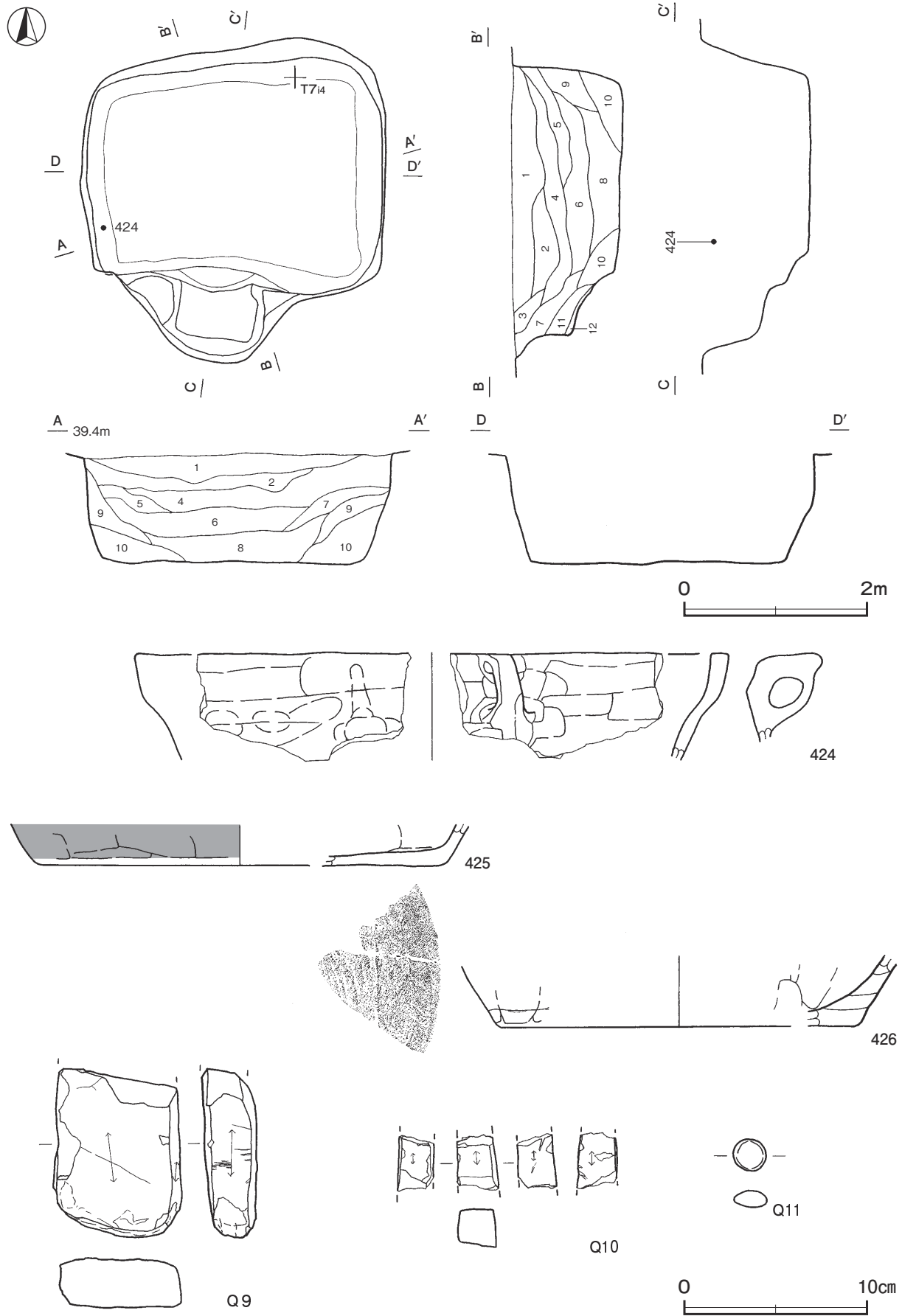
**第2号地下式坑（第150図）**

**位置** 調査区中央部のT7i3区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**軸長・軸方向** 軸長3.38m、軸方向はN-2°-Eである。

**竪坑** 主室の南壁中央部に位置し、東壁と西壁の上部が崩壊していることから、奥行0.64m、横幅は1.00mしか確認できなかったが、長方形と推定できる。深さは64cm及び90cmで、壁は、崩壊部分を除いてほぼ直立している。底面は階段状に下り、主室に至っている。

**主室** 奥行1.86m、横幅2.72mの長方形である。天井部の崩落層は確認できなかったものの、天井部が残存



第 150 图 第 2 号地下式坑·出土遺物実測図

していないことから、崩落したものと考えられる。確認面から底面までの深さは115cmで、壁はほぼ直立している。底面は平坦で、硬化面は認められなかった。

**覆土** 12層に分層できる。第10～12層は竪坑及び周囲からの流入土、第4～9層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1～3層は自然堆積である。

**土層解説**

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子中量	9	黒褐色	ロームブロック少量
4	極暗褐色	ロームブロック少量	10	暗褐色	ローム粒子多量
5	黒色	ロームブロック少量	11	極暗褐色	ローム粒子少量
6	黒色	ロームブロック微量	12	黒褐色	ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土師質土器片22点(内耳鍋),陶器片5点(鉢4・甕類1),石器・石製品12点(砥石11・基石,1)のほか、弥生土器片2点(広口壺),土師器片418点(坏123・高台付坏27・蓋19・甕類249),須恵器片75点(坏35・高台付坏1・蓋2・長頸瓶1・甕類36),土製品2点(紡錘車・羽口)鉄滓7点(384.82g)が、全域に散在した状態で出土している。出土遺物は細片で、覆土上層や覆土中から出土していることから、流入もしくは埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から15世紀後半に比定できる。天井部の崩落層が確認できなかったことから、天井崩落後、崩落土を取り除き再利用した可能性がある。

**第2号地下式坑出土遺物観察表(第150図)**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
424	土師質土器	内耳鍋	[31.8]	(5.7)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 指頭痕	覆土上層	5%
425	土師質土器	内耳鍋	-	(2.2)	[22.0]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外・内面横位のナデ 底部板目	覆土中	5% 煤付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
426	陶器	鉢	-	(3.8)	[19.0]	長石・石英 灰黄褐	縦位のナデ、輪積み痕	-	常滑	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	砥石	(9.0)	6.9	3.0	(293.56)	砂岩	砥面2面	覆土中	二次焼成
Q 10	砥石	(3.0)	2.2	2.0	(19.31)	凝灰岩	砥面4面	覆土中	二次焼成
Q 11	基石	1.8	1.8	0.9	4.00	砂岩	全面研磨	覆土中	二次焼成

**第3号地下式坑(第151図)**

**位置** 調査区中央部のT7h3区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

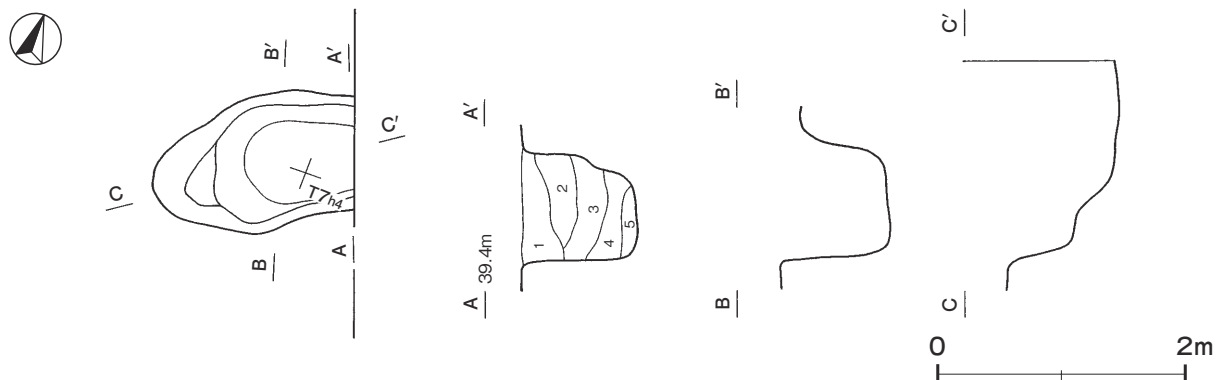
**軸長・軸方向** 主室が調査区外に位置することから、軸長は不明である。軸方向はN-63°-Eと推定できる。

**竪坑** 主室の西壁に推定できるが、詳細部は不明である。奥行は1.63mしか確認できなかったが、横幅1.06mの楕円形と推定できる。底面の深さは56cm及び90cmで、壁はほぼ直立している。底面は階段状に下り、主室に至ると推定できる。

**覆土** 5層に分層できる。第4～5層は竪坑からの流入土、第1～3層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |          |                     |       |         |
|----------|---------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色    | ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量           | 5 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色    | ロームブロック少量           |       |         |



第151図 第3号地下式坑実測図

**所見** 時期は、出土遺物は確認できなかったが、竪坑の断面形が周辺に位置する第2号地下式坑に類似することから、15世紀後半と推定できる。

**第4号地下式坑 (第152・153図)**

**位置** 調査区中央部のU7b4区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第12号竪穴建物跡、第1号方形竪穴遺構を掘り込んでいる。

**軸長・軸方向** 軸長3.32m、軸方向はN-69°-Eである。

**竪坑** 主室の南西壁中央部の北寄りに位置し、奥行1.18m、横幅1.50mの長方形である。深さは90cmで、壁は直立もしくはほぼ直立している。底面は緩やかに下り、段を有して主室に至っている。

**主室** 奥行1.84m、横幅2.80mの長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは118cmで、壁は直立もしくはほぼ直立している。底面は平坦で、硬化面は認められなかった。北東壁の中央部・北コーナー部と南西壁の中央部・北コーナー部に、横穴が4か所確認できた。径8~14cmの円形で、奥行きは6~14cmである。床面から19~21cmの高さに掘り込まれていることから、木組みや棚などが考えられるが、不明である。

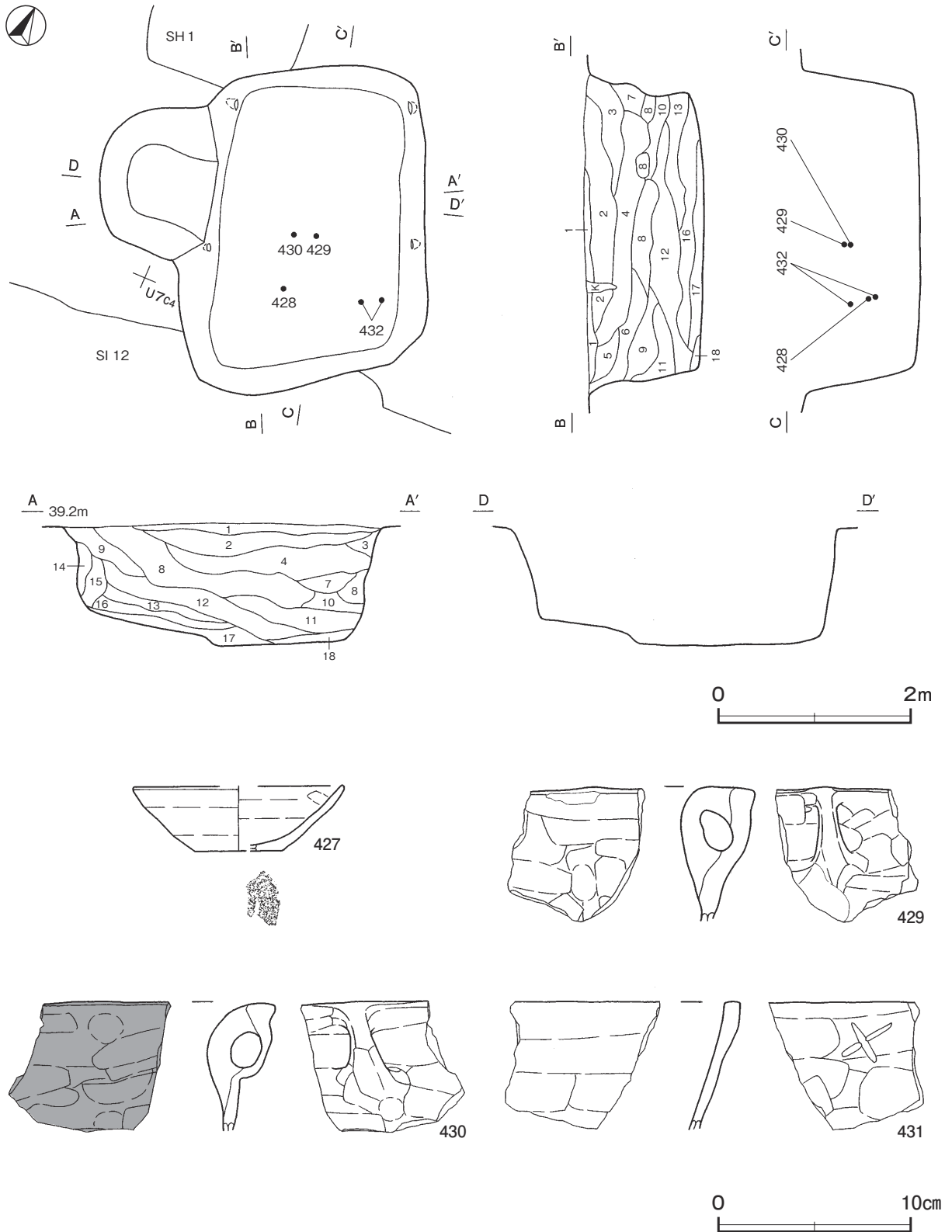
**覆土** 18層に分層できる。第14~18層は竪坑からの流入土及び壁の崩壊土、第8~13層は天井部の崩落土、第1~7層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |          |                      |           |                   |
|----------|----------------------|-----------|-------------------|
| 1 黒褐色    | ロームブロック少量            | 10 褐色     | ロームブロック少量         |
| 2 灰褐色    | ロームブロック・焼土ブロック微量     | 11 褐色     | ロームブロック中量         |
| 3 黒褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量     | 12 暗褐色    | ロームブロック中量         |
| 4 灰黄褐色   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 13 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量         |
| 5 黒褐色    | ロームブロック・粘土ブロック少量     | 14 褐色     | ロームブロック・鹿沼軽石少量    |
| 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量     | 15 褐色     | ロームブロック多量, 鹿沼軽石少量 |
| 7 黄褐色    | ロームブロック・焼土ブロック少量     | 16 黒褐色    | ロームブロック微量         |
| 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量            | 17 灰褐色    | ローム粒子少量           |
| 9 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼軽石微量    | 18 明黄褐色   | ローム粒子・鹿沼軽石少量      |

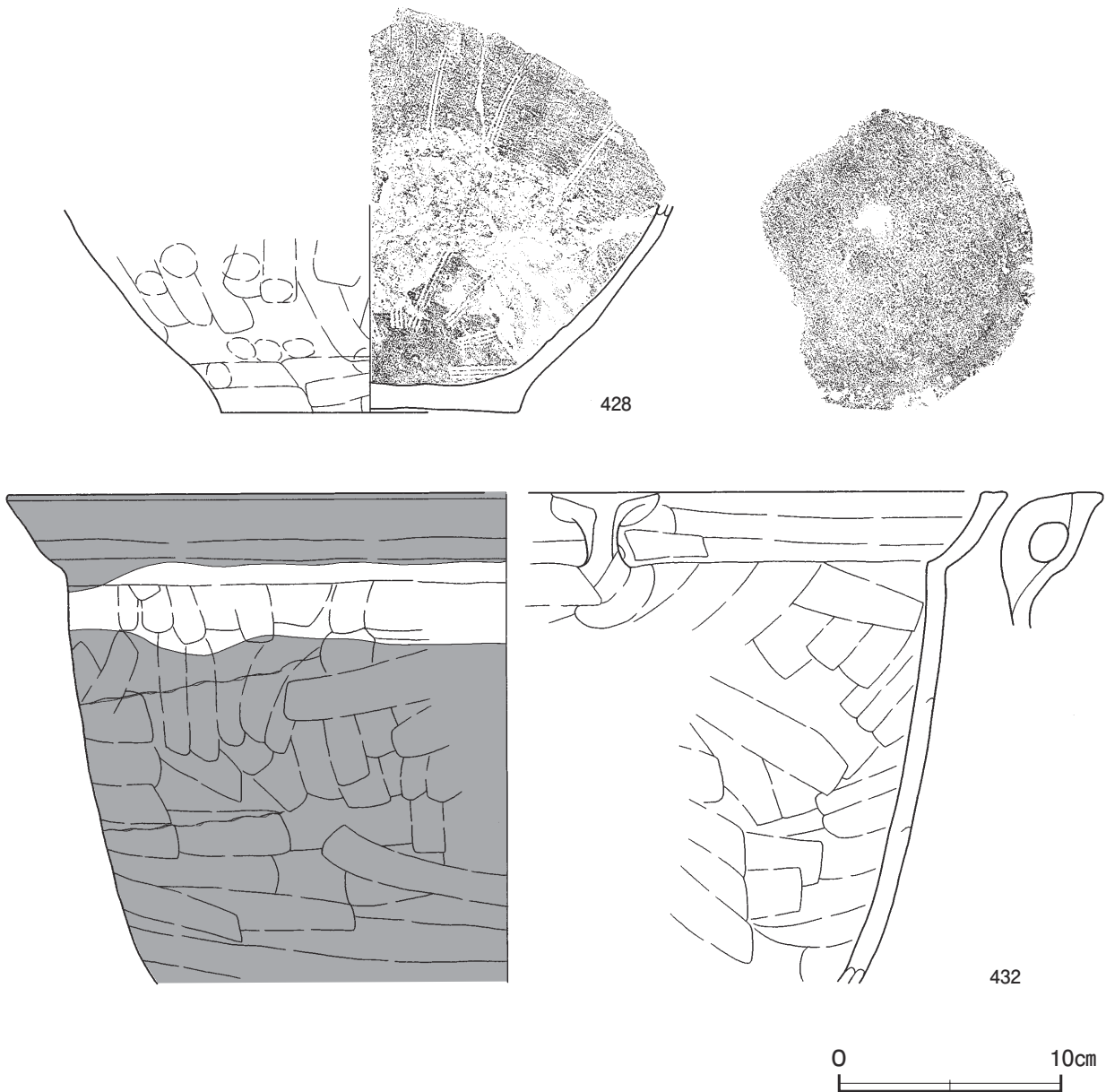
**遺物出土状況** 土師質土器片145点(皿1・鉢7・内耳鍋137)、石器・石製品1点(石塔<sub>ナ</sub>)のほか、土師器

片 844 点 (坏 440・高台付坏 81・蓋 29・皿 33・鉢 38・甕類 222・甌 1), 須恵器片 122 点 (坏 37・高台付坏 2・蓋 3・高盤 1・長頸瓶 2・甕類 77), 土製品 2 点 (支脚・羽口), 瓦 (軒丸瓦), 鉄滓 4 点 (236.12 g) が, 全域に散在した状態で出土している。土師質土器は中型の破片で, 覆土上層から中層にかけて出土していることから, 崩落後の埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。



第 152 図 第 4 号地下式坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から 15 世紀後半に比定できる。



第 153 図 第 4 号地下式坑出土遺物実測図

第 4 号地下式坑出土遺物観察表 (第 152・153 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
427	土師質土器	皿	[10.8]	3.3	[4.6]	長石・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面横位のナデ 底部回転系切り後ナデ	覆土中	30%
428	土師質土器	搦鉢	-	(9.1)	13.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面縦・横位のナデ 指頭痕 体部内面 4 条一単位の播目 底部多方向のナデ	覆土中層	40%
429	土師質土器	内耳鍋	-	(6.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 体部外・内面縦・横位のナデ 指頭痕	覆土中層	5%
430	土師質土器	内耳鍋	-	(6.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 体部外・内面横位のナデ 指頭痕	覆土中層	5% 煤付着
431	土師質土器	内耳鍋	-	(6.5)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面横位のナデ 内面「×」のヘラ書	覆土中	5%
432	土師質土器	内耳鍋	[24.0]	(21.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部 3 か所貼付後ナデ 体部外面縦・横位のナデ 体部内面横・斜位のナデ	覆土中層	30% 煤付着

**第5号地下式坑 (第154図)**

**位置** 調査区中央部のU7a4区, 標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第3号溝跡を掘り込んでいる。

**軸長・軸方向** 軸長3.52m, 軸方向はN-34°-Eである。

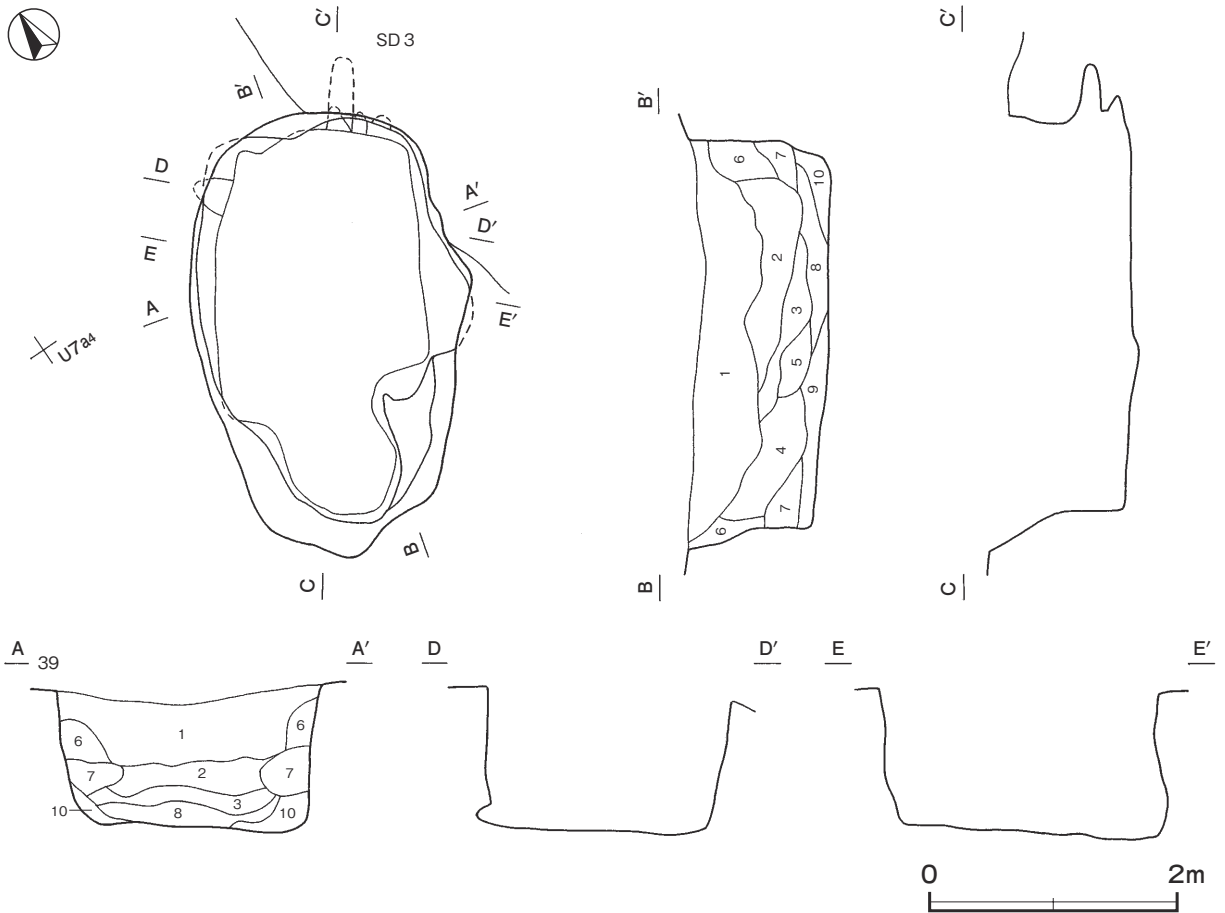
**竪坑** 主室の南西壁の中央部に位置し, 東壁と西壁の上部が崩壊していることから, 奥行1.12m, 横幅は0.98mしか確認できなかったが, 半円形と判断できる。深さは104cmで, 壁は直立もしくはほぼ直立している。底面は緩やかに下り, 主室に至っている。

**主室** 奥行2.10m, 横幅1.62mの長方形である。天井部は崩落しており, 確認面から底面までの深さは112cmで, 壁は直立もしくは内彎している。底面は平坦で, 硬化面は認められなかった。北東壁の中央部と南西壁の北部には, 横穴が6か所確認できた。径14~20cmの円形で, 奥行きは12~34cmである。床面から4~8cmと24~28cmの高さに掘り込まれていることから, 木組みや棚などが考えられるが, 不明である。

**覆土** 10層に分層できる。第9・10層は竪坑からの流入土及び壁の崩壊土, 第7・8層は天井部の崩落土, 第2~6層はロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。第1層は埋め戻し後の流入土である。

**土層解説**

- |       |                   |          |                  |
|-------|-------------------|----------|------------------|
| 1 黒色  | ローム粒子微量           | 6 暗褐色    | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 鹿沼軽石微量 | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量        |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼軽石微量 | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量        |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量  | 9 黒褐色    | ローム粒子・鹿沼軽石微量     |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量  | 10 褐色    | ロームブロック中量        |



第154図 第5号地下式坑実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片 3 点 (内耳鍋), 石器・石製品 1 点 (不明) のほか, 土師器片 477 点 (坏 277・高台付坏 20・蓋 9・皿 6・鉢 4・甕類 161), 須恵器片 40 点 (坏 14・蓋 4・甕類 22), 土製品 1 点 (支脚) が, 全域に散在した状態で出土している。土師質土器は細片で, 覆土中層から出土していることから, 崩落後の埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

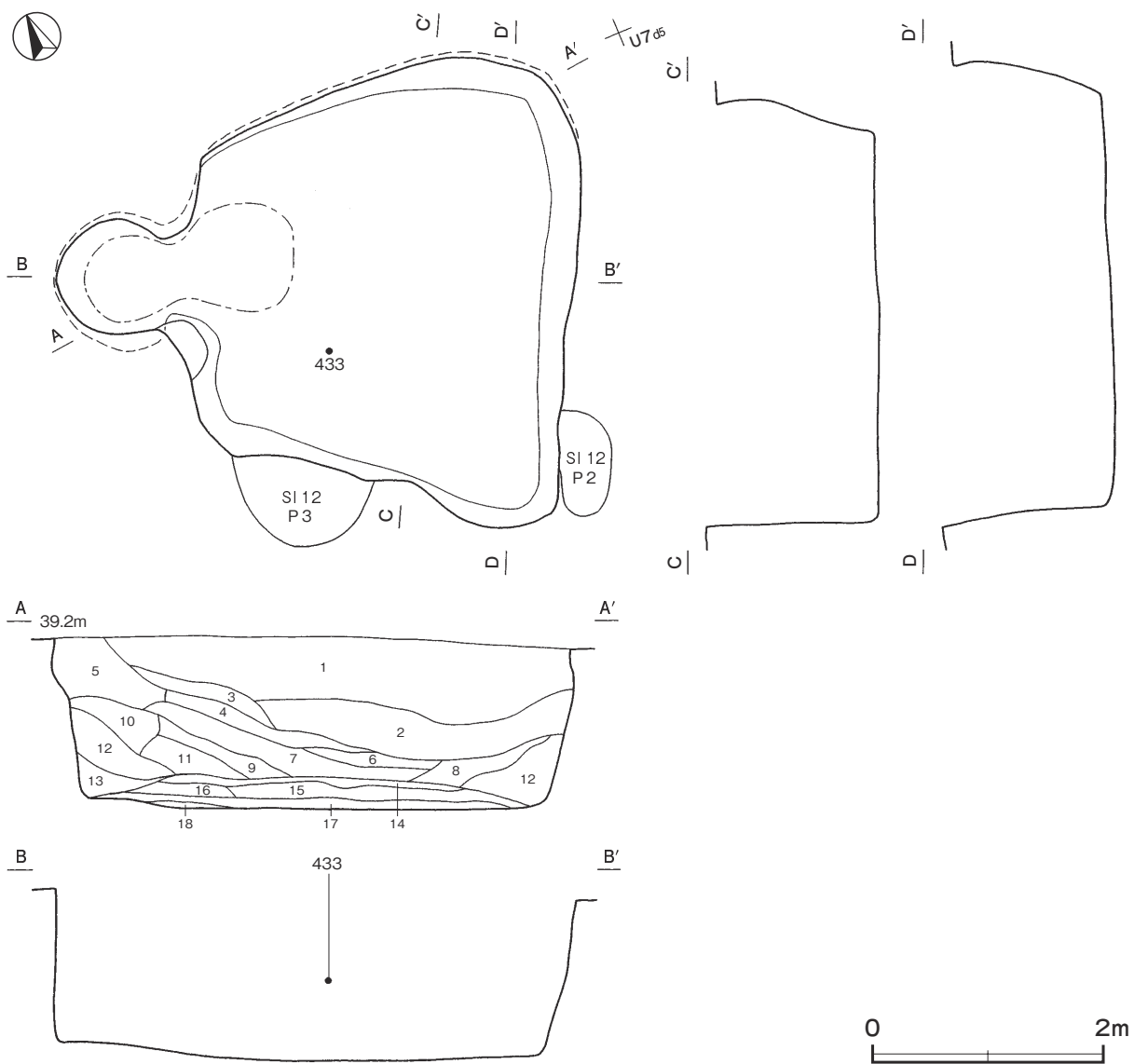
**所見** 時期は, 出土土器からは判断できないが, 第 1 号地下式坑と形状が似ることから, 16 世紀前半と考えられる。

**第 7 号地下式坑 (第 155 ~ 157 図)**

**位置** 調査区中央部の U 7 d4 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 12 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 99 号土坑に掘り込まれている。

**軸長・軸方向** 軸長 4.47 m, 軸方向は N - 66° - W である。



第 155 図 第 7 号地下式坑実測図



**竪坑** 主室の南西壁の中央部に位置し、奥行0.97 m、横幅1.00 mの円形である。深さは112cmで、壁は直立している。底面は緩やかに下り、主室に至っている。

**主室** 南西壁の南コーナー部を第99号土坑に掘り込まれているが、奥行2.94 m、横幅3.50 mの台形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは140cmで、壁は直立もしくはほぼ直立している。底面は平坦で、硬化面は竪坑の床面から南西壁際の中央部が踏み固められている。

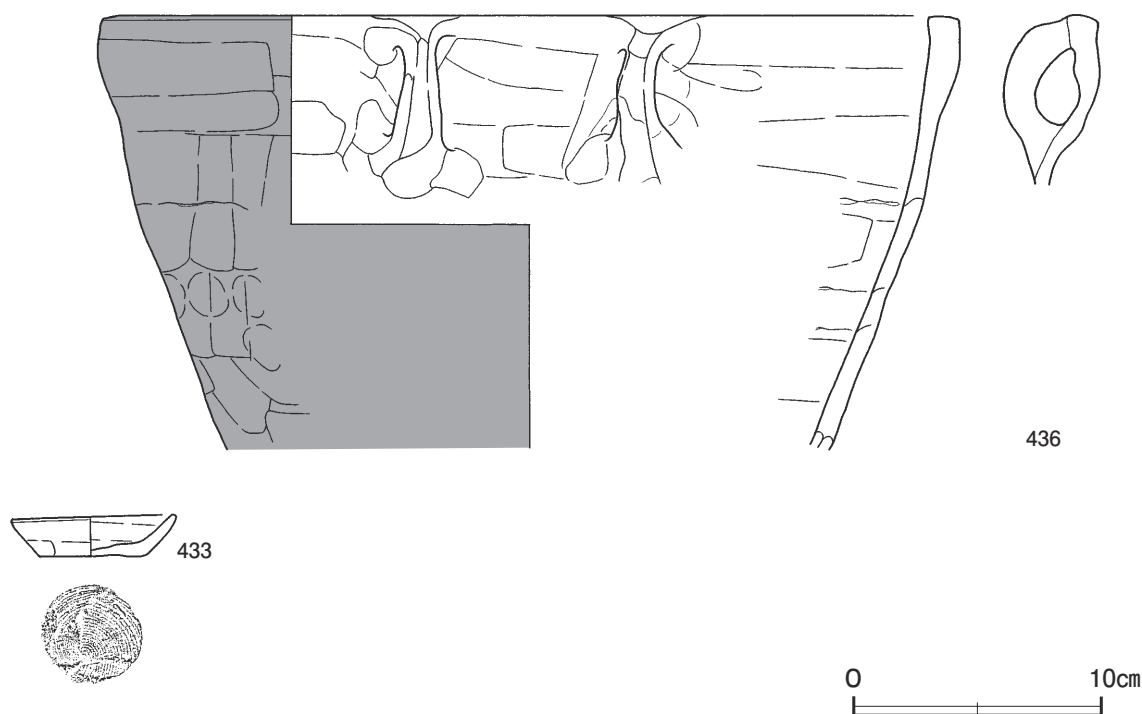
**覆土** 18層に分層できる。第14～18層は天井部の崩落土と考えられるが、締まっている。第3～13層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1・2層は流入土である。

**土層解説**

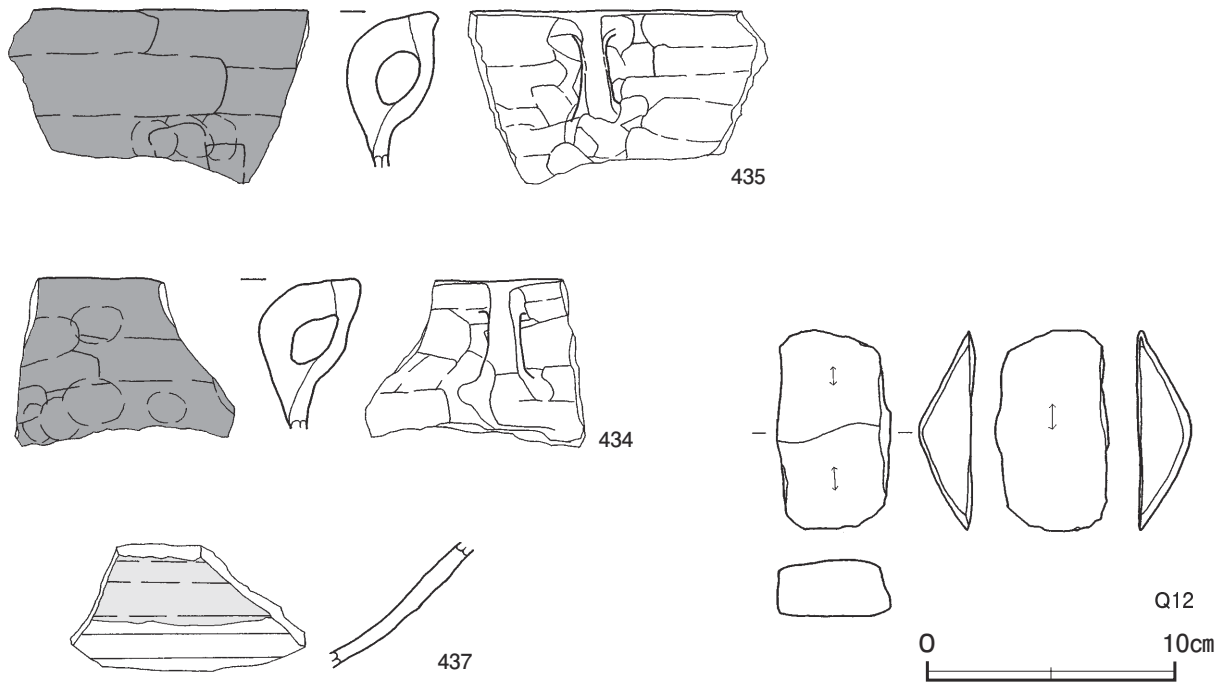
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック中量
2 褐灰色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量	11 極暗褐色	ロームブロック少量
3 にぶい褐色	ロームブロック少量	12 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	13 にぶい褐色	ロームブロック中量
5 褐灰色	ロームブロック・鹿沼軽石少量	14 褐色	ロームブロック少量
6 褐灰色	ロームブロック少量	15 黒褐色	ロームブロック中量
7 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	16 にぶい褐色	ロームブロック多量
8 褐色	ロームブロック中量	17 褐色	ロームブロック多量
9 褐灰色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	18 にぶい黄褐色	ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土師質土器片180点（皿9・鉢11・内耳鍋159・火舎1）、陶器片4点（碗1・甕類3）、石器・石製品3点（砥石1・不明2）のほか、土師器片1482点（坏702・高台付坏55・蓋45・皿51・甕類629）、須恵器片1点（坏）が、全域に散在した状態で出土している。土師質土器や陶器は中型の破片や細片で、覆土中層から出土していることから、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から15世紀後半に比定できる。第12号竪穴建物跡を掘り込んで構築されていることから、構築後の早い段階で天井部が崩落したと考えられる。天井部の崩落土と考えられる第14～18層は、締まりが強い層位であることから、踏み固めて床面とし再利用したと考えられる。



第156図 第7号地下式坑出土遺物実測図(1)



第157図 第7号地下式坑出土遺物実測図(2)

第7号地下式坑出土遺物観察表 (第156・157図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
433	土師質土器	小皿	6.4	1.7	4.1	長石・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ 外面ヘラナデ 底部回転糸切り	覆土中層	100% PL39
434	土師質土器	内耳鍋	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 体部外・内面横位のナデ 指頭痕	覆土中	5% 煤付着
435	土師質土器	内耳鍋	-	(6.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 体部外・内面横位のナデ 指頭痕	覆土中	5% 煤付着
436	土師質土器	内耳鍋	[34.0]	(17.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部2か所貼付後 ナデ 体部外・内面横位のナデ 指頭痕	覆土中	20% 煤付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
437	陶器	平碗	-	(5.0)	-	長石・黒色粒子・ 灰黄褐	ロクロナデ 漬け掛け	灰釉	瀬戸	覆土中	5% PL38

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 12	砥石	7.9	4.4	2.2	(87.37)	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL41 二次焼成

### 第9号地下式坑 (第158図)

**位置** 調査区北西部のM3d5区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

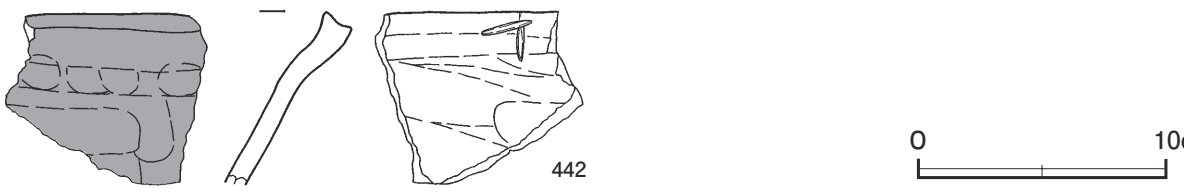
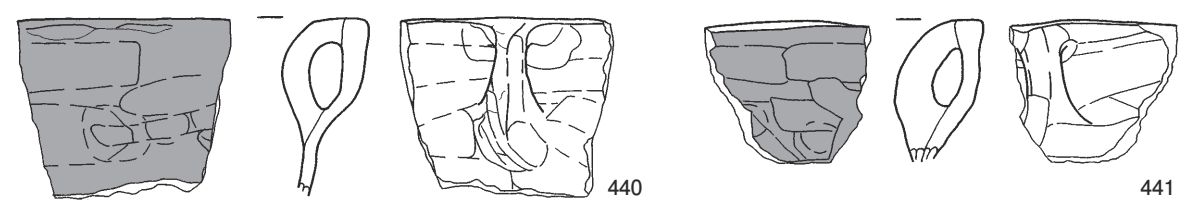
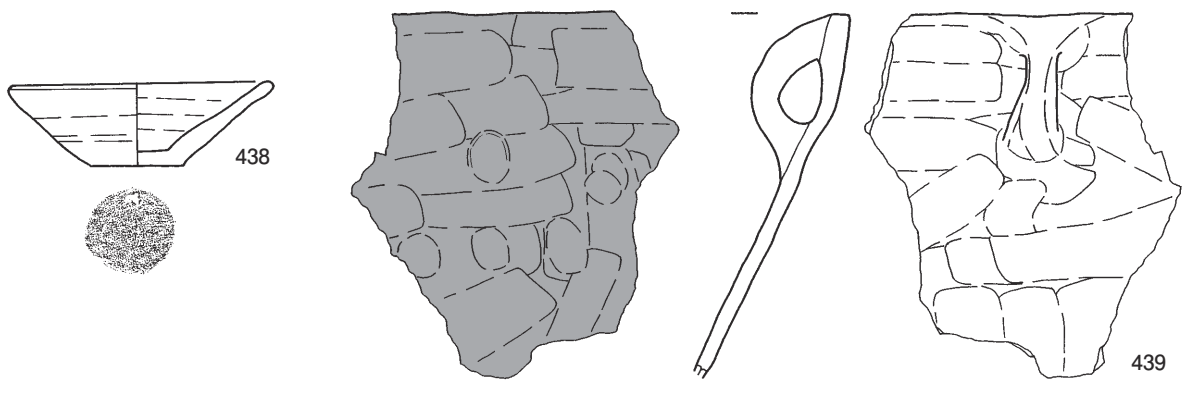
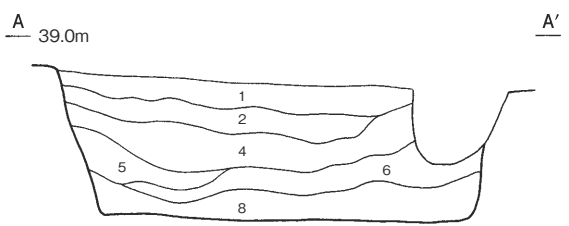
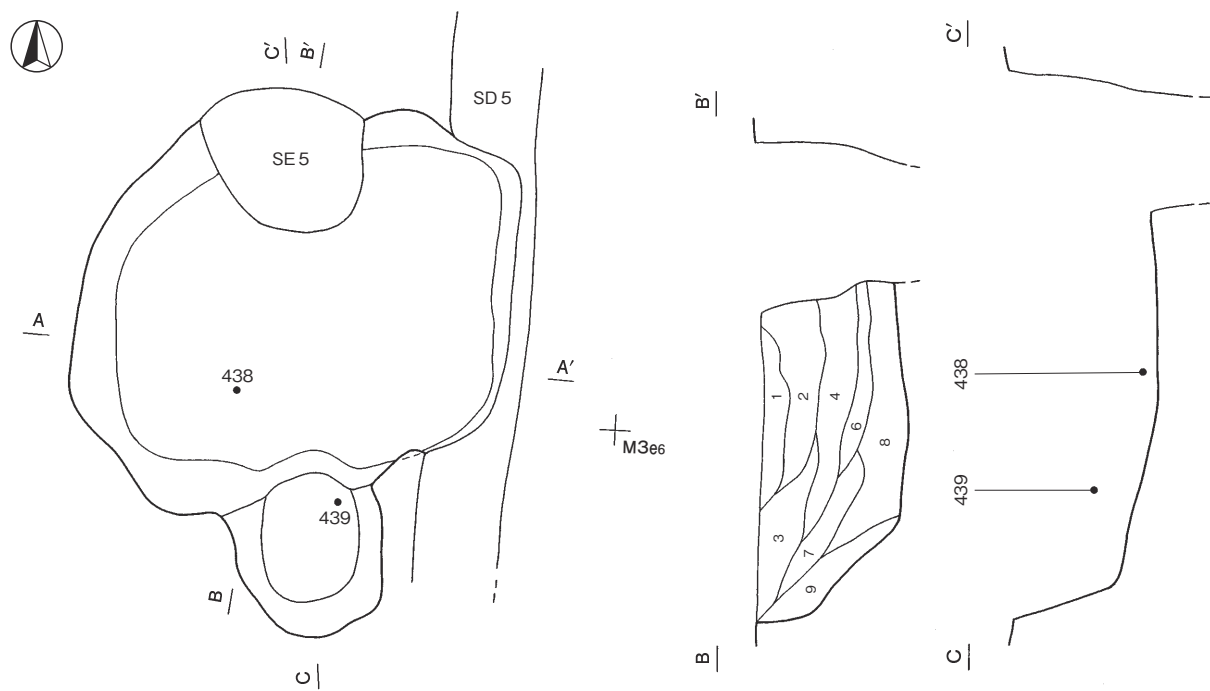
**重複関係** 第5号井戸、第5号溝に掘り込まれている。

**軸長・軸方向** 軸長4.10m、軸方向はN-3°-Eである。

**竪坑** 主室の南壁の中央部に位置し、奥行1.48m、横幅1.14mの楕円形である。深さは92cmで、壁は直立している。底面は緩やかに下り、主室に至っている。

**主室** 奥行2.54m、横幅2.96mの不整長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは118cmで、壁は、ほぼ直立している。底面は平坦で、硬化面は認められなかった。

**覆土** 9層に分層できる。第9層は竪坑からの流入土、第8層は天井部の崩落土、第1～7層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



第 158 図 第 9 号地下式坑・出土遺物実測図

土層解説

- |       |                     |          |                     |
|-------|---------------------|----------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量           | 6 黒褐色    | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量   | 7 暗褐色    | ロームブロック少量           |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量           | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量           |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量    | 9 暗褐色    | ロームブロック微量           |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |          |                     |

**遺物出土状況** 土師質土器片 149 点 (皿 1・内耳鍋 148), 陶器片 1 点 (甕類) のほか, 縄文土器片 1 点 (深鉢), 弥生土器片 1 点 (広口壺), 土師器片 18 点 (坏 5・高台付坏 2・甕類 10・不明 1), 須恵器片 8 点 (坏 4・甕類 4), 鉄製品 1 点 (釘) が, 全域に散在した状態で出土している。土師質土器や陶器は主に細片で, 覆土上層から中層にかけて出土していることから, 埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 16 世紀前半に比定できる。

第 9 号地下式坑出土遺物観察表 (第 158 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
438	土師質土器	皿	10.3	3.3	3.5	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り後ヘラナデ	覆土中層	100% PL39
439	土師質土器	内耳鍋	-	(14.4)	-	長石・石英・黒色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 体部外・内面縦・横位のナデ 指頭痕	覆土中層	5% 煤付着
440	土師質土器	内耳鍋	-	(7.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 体部外・内面横位のナデ 指頭痕	覆土中	5% 煤付着
441	土師質土器	内耳鍋	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 体部外・内面横位のナデ 指頭痕	覆土中	5% 煤付着
442	土師質土器	内耳鍋	-	(8.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面耳部貼付後ナデ 「T」字状のヘラ書 体部外面縦・横位のナデ 指頭痕 体部内面斜位のナデ	覆土中	5% 煤付着

表 14 室町時代地下式坑一覧表

番号	位置	軸方向	平面形		軸長 (m)	主室規模			竪坑規模			覆土	主な出土遺物	備考
			主室	竪坑		奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)			
1	T 7 g2	N - 28° - E	長方形	[方形]	2.62	1.54	1.80	110	0.90	[1.00]	90	人為	土師質土器, 陶器	
2	T 7 i3	N - 2° - E	長方形	[長方形]	3.38	1.86	2.72	115	0.64	[1.00]	64・90	自然 人為	土師質土器, 陶器, 石器・ 石製品	
3	T 7 h3	N - 63° - E	-	[楕円形]	(1.63)	-	-	-	(1.63)	1.06	56・90	自然 人為	-	
4	U 7 b4	N - 69° - E	長方形	長方形	3.32	1.84	2.80	118	1.18	1.50	90	自然 人為	土師質土器, 石器・石製品	SI12・SH 1 → 本跡
5	U 7 a4	N - 34° - E	長方形	[半円形]	3.52	2.10	1.62	112	1.12	(0.98)	104	自然 人為	土師質土器, 石器・石製品	SD 3 → 本跡
7	U 7 d4	N - 66° - W	台形	円形	4.47	2.94	3.50	140	0.97	1.00	112	自然 人為	土師質土器, 陶器, 石器・ 石製品	SI12 → 本跡 → SK99
9	M 3 d5	N - 3° - E	長方形	楕円形	4.10	2.54	2.96	118	1.48	1.14	92	自然 人為	土師質土器, 陶器	本跡 → SE 5・SD 5

(6) 柱穴列

第 4 号柱穴列 (第 159 図)

**位置** 調査区中央部の U 7 j7 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と構造** 南北方向 3.60 m の間に配列された柱穴 3 か所を確認した。配列方向は N - 1° - E である。柱間寸法は 1.50 ~ 1.80 m (5 ~ 6 尺) で, 柱筋はほぼ揃っている。

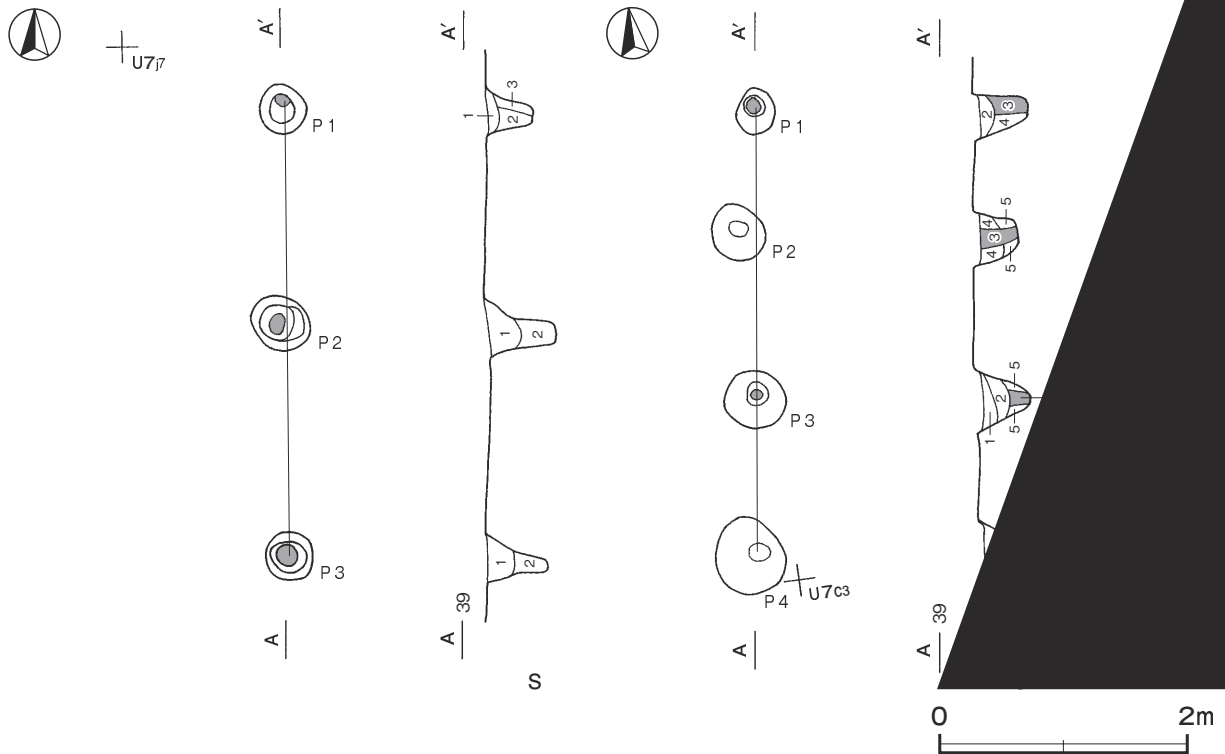
**柱穴** 3 か所。平面形は円形もしくは楕円形で, 長径 40 ~ 50cm, 短径 39 ~ 42cm である。深さは 36 ~ 54cm で, 掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。2 ~ 3 層に分層でき, 第 3 層は埋土, 第 1・2 層は柱材の抜き取り後の覆土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック少量

- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

所見 時期は，柱穴の規模が小規模であることや，配列方向が第5号掘立柱建物跡の桁行方向にほぼ直行していることから，室町時代と考えられる。性格は，掘立柱建物や塀の可能性があるが，不明である。



第159図 第4・7号柱穴列実測図

第7号柱穴列（第159図）

位置 調査区中央部のU7b2区，標高39mほどの台地平坦面に位置している。

規模と構造 南北方向4.00mの間に配列された柱穴4か所を確認した。配列方向はN-8°-Eである。柱間寸法は1.20m（4尺）で，P2を除いて柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 4か所。平面形は円形もしくは楕円形で，長径35～61cm，短径31～56cmである。深さは24～58cmで，掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。3～5層に分層でき，第4～5層は埋土，第3層は柱痕跡，第1・2層は柱材の抜き取り後の覆土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量  
2 褐色 ロームブロック少量  
3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

- 4 暗褐色 ロームブロック多量  
5 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片1点（皿）がP1から出土しているが，混入と考えられる。

所見 時期は，柱穴の規模が小規模であることや，15世紀代の遺構が確認できた範囲に位置していることから，室町時代と考えられる。性格は，掘立柱建物や塀の可能性があるが，不明である。

表 15 室町時代柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ (m)	柱間 (m)	柱 穴					主な出土遺物	備 考
					柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
4	U 7j7	N - 1° - E	3.60	1.50 ~ 1.80	3	円形・楕円形	40 ~ 50	39 ~ 42	36 ~ 54	-	
7	U 7b2	N - 8° - E	4.00	1.20	4	円形・楕円形	35 ~ 61	31 ~ 56	24 ~ 58	土師質土器	

(7) 土坑

第 106 号土坑 (第 160 図)

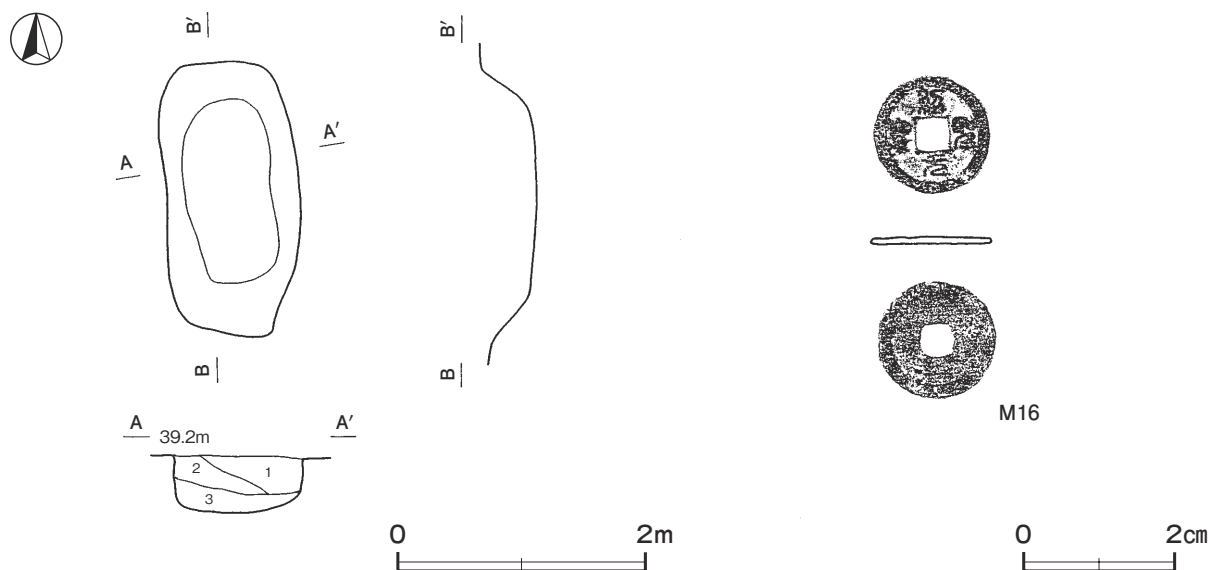
**位置** 調査区中央部の S 6h7 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 長軸 2.23 m, 短軸 1.10 m の隅丸長方形で, 長軸方向は N - 2° - W である。深さは 38cm で, 壁は外傾している。底面は平坦である。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量



第 160 図 第 106 号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 陶器片 1 点 (鉢), 金属製品 1 点 (銭貨) のほか, 土師器片 26 点 (坏 3・甕類 23), 須恵器片 3 点 (坏 2・甕類 1) が覆土中から出土している。土師器片や須恵器片は埋め戻しの際の混入, 銭貨は副葬品の可能性がある。

**所見** 時期は, 陶器片が常滑産と思われることから, 15 世紀代に推定できる。性格は, 銭貨が出土していることや, 長軸方向が第 1 号墓坑の長軸に近似していることから, 墓坑の可能性がある。

第 106 号土坑出土遺物観察表 (第 160 図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 16	紹聖元寶	2.4	0.6	0.1	3.30	銅	1094 年	北宋銭 篆書体	覆土中	PL42

第 304 号土坑 (第 161 図)

**位置** 調査区北西部の M 3 a3 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 305 号土坑を掘り込んでいる。

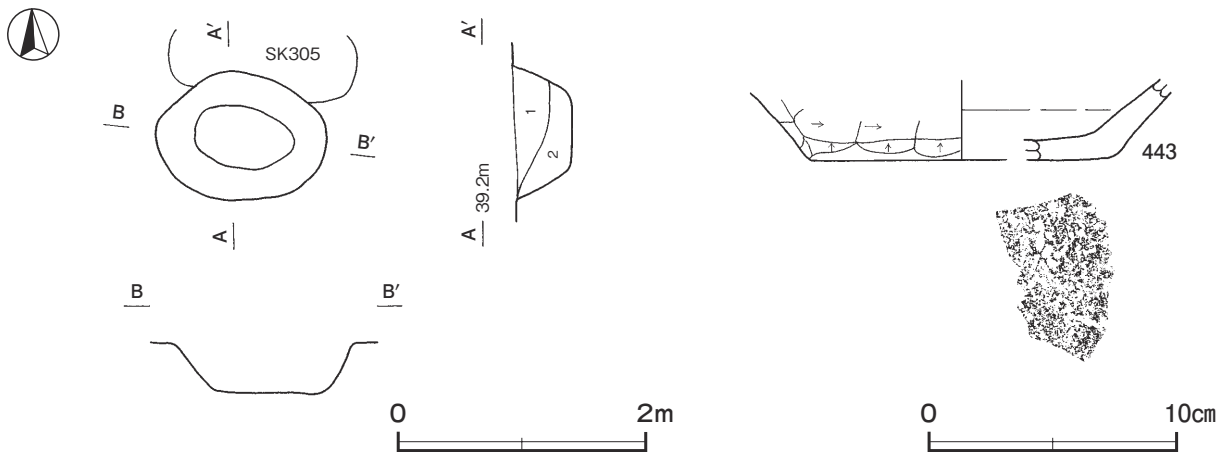
**規模と形状** 長径 1.38 m, 短径 1.02 m の楕円形で, 長径方向は N - 84° - W である。深さ 40cm で, 壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

**覆土** 2 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

**土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック中量



第 161 図 第 304 号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片 4 点 (鉢 1・内耳鍋 3), 陶器片 1 点 (鉢) のほか, 縄文土器片 1 点 (深鉢), 須恵器片 1 点 (坏) が覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 15 世紀後半に比定できる。性格は不明である。

第 304 号土坑出土遺物観察表 (第 161 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
443	陶器	鉢	-	(3.1)	[11.7]	長石・黒色粒子	体部下端ヘラ割り 体部内面摩滅 底部砂目	-	常滑	覆土中	

表 16 室町時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
106	S 6 h7	N - 2° - W	隅丸長方形	2.23 × 1.10	38	平坦	外傾	人為	陶器, 金属製品	
304	M 3 a3	N - 84° - W	楕円形	1.38 × 1.02	40	ほぼ直立	平坦	人為	土師質土器, 陶器	SK305 → 本跡

(8) 溝跡

第3号溝跡 (第162図・付図)

**位置** 調査区中央部のT7i4～U7b5区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

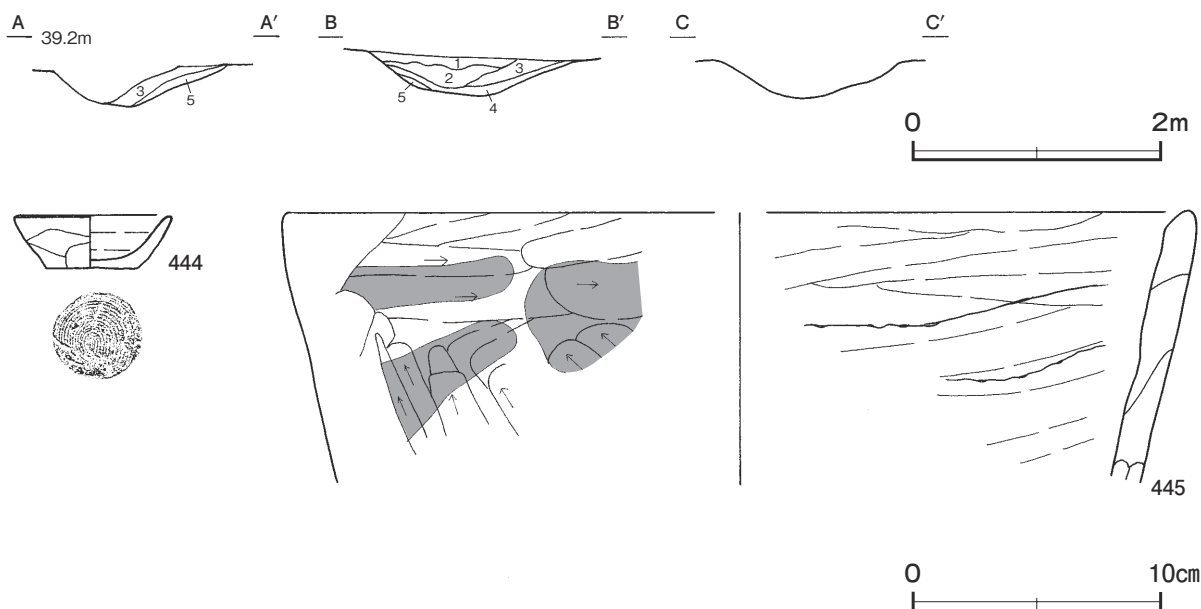
**重複関係** 第3号井戸、第5号地下式坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部が調査区域外に延びていることから、長さ9.28mしか確認できなかった。U7b5区から北方向(N-7°-E)へ直線状に延びている。上幅1.42～1.76m、下幅0.22～0.44m、深さ26～31cmで、断面は浅井U字状である。底面は平坦で、北部に向かって緩やかに低くなっている。

**覆土** 5層に分層できる。第5層はローム粒子が均一に含まれる堆積状況から、自然堆積である。第1～4層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- |       |           |          |           |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色    | ローム粒子少量   |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 |          |           |



第162図 第3号溝跡・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片34点(小皿1・鉢6・内耳鍋26・竈鏝<sub>1</sub>1), 石器1点(砥石)のほか、土師器片373点(坏200・高台付坏21・蓋10・皿8・鉢1・甕類132・不明1), 須恵器片34点(坏9・甕類25)が出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器や重複関係から、第3号井戸跡より古い15世紀後半に比定できる。性格は、区画と考えられる。

第3号溝跡出土遺物観察表 (第162図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
444	土師質土器	小皿	6.2	2.1	3.6	長石・雲母	におい橙	普通	口クロナデ 底部回転糸切り 底部内面口クロ目残存	覆土中	100%
445	土師質土器	鉢	[36.0]	(10.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のナデ 体部内面横位のナデ 輪積み痕	覆土中	10% 煤付着



(9) ピット群

第4号ピット群 (第163図)

**位置** 調査区中央部のU7a2～U7a3区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

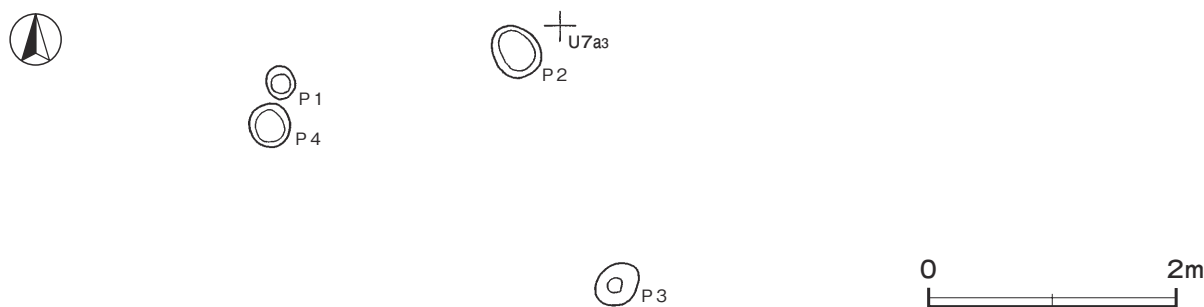
**規模と形状** 南北2.20m、東西3.10mの範囲に、ピット4か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

**遺物出土状況** 土師器片1点(甕類)が、P2から出土しているが、混入と思われる。

**所見** 時期は、室町時代の遺構が確認できた範囲に位置していることから、15世紀代と推定できる。ピットの分布状況から、建物跡は想定できない。

第4号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	U7a2	楕円形	26	24	49
2	U7a2	楕円形	42	35	26
3	U7a3	楕円形	40	32	30
4	U7a2	楕円形	35	32	24



第163図 第4号ピット群実測図

4 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、井戸跡2基、墓坑群1か所、道路跡2条、土坑1基、溝跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 井戸跡

第5号井戸跡 (第164図)

**位置** 調査区北西部のM3d5区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第9号地下式坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 確認面は、長径1.52m、短径1.36mの楕円形で、長径方向はN-60°-Wである。確認面から円筒状に掘り込まれている。深さ215cmまで掘り下げた段階で、崩落が想定されたため、以下の調査を断念した。

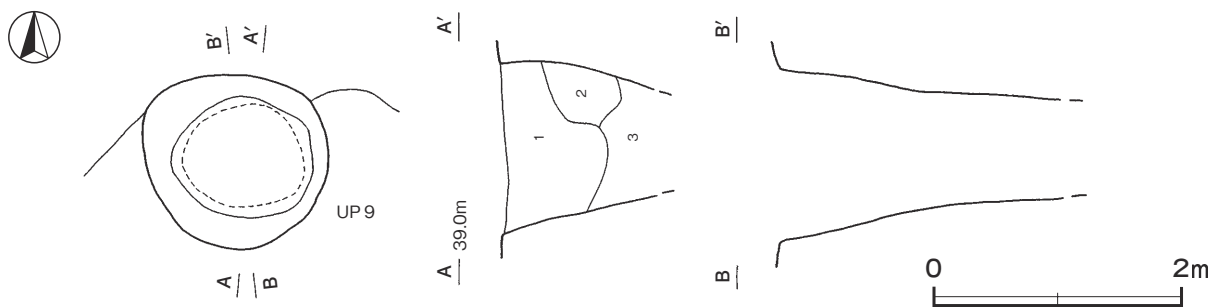
**覆土** 3層に分層できる。不自然な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量  
2 黒褐色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、遺物が出土しなかったものの、第9号地下式坑との重複関係や第4・5号溝跡の区画内に位置することから、江戸時代と考えられる。



第164図 第5号井戸跡実測図

### 第7号井戸跡（第165図）

位置 調査区中央部のS 6 a4区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第15号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

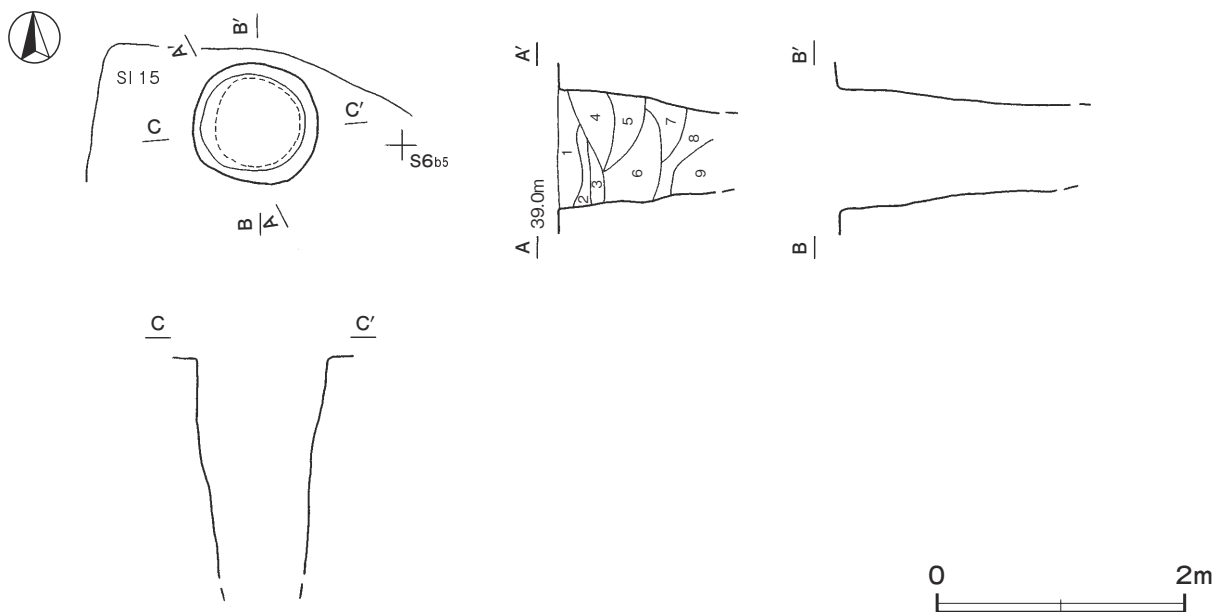
規模と形状 確認面は、長径1.00m、短径0.90mの円形で、円筒形に掘り込まれている。深さ180cmまで掘り下げた段階で、崩落が想定されたため、以下の調査を断念した。

覆土 9層に分層できる。不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |          |                  |          |                 |
|----------|------------------|----------|-----------------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子少量          | 6 暗褐色    | ロームブロック少量       |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色    | ロームブロック・焼土粒子少量  |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量        | 8 暗褐色    | ロームブロック微量       |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量        | 9 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 5 暗褐色    | ロームブロック少量、炭化物微量  |          |                 |

所見 時期は、遺物が出土しなかったものの、掘方の形状が第5号井戸跡に似ていることから、江戸時代の可能性がある。



第165図 第7号井戸跡実測図

表 17 江戸時代井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
5	M 3 d5	N - 60° - W	楕円形	1.52 × 1.36	(215)	不明	円筒状	人為	-	UP 9 → 本跡
7	S 6 a4	-	円形	1.00 × 0.90	(180)	不明	円筒状	人為	-	SI15 → 本跡

(2) 墓坑群

第 1 号墓坑群 (第 166 ~ 169 図)

**位置** 調査区北西部の M 3 j5 ~ N 3 a6 区, 標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**確認状況** 表土除去以前から表土面には石仏や石塔, 台座などが確認できていた。隣接する西側の区域には現在も墓域が存在しており, 本跡の一部もしくは移設されたものと考えられる。採集できた石仏や石塔, 台座などについては, 発掘調査終了に伴い筑西市教育委員会へ引き渡したが, Q 13 ~ Q 17 については調査時に簡易実測をおこなっているので掲載する。

**重複関係** 第 10 号墓坑が第 5 号溝跡を掘り込んでいる。墓坑同士の重複については, 一覧表の備考欄に記載する。

**規模と形状** 北部除いて調査区域外に延びていることから, 南北は 5.16 m, 東西は 4.82 m の範囲しか確認できなかった。確認できた墓坑は 22 基である。個々の形状, 計測値については, 一覧表に記載する。

**覆土** 1 ~ 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋葬時に埋め戻されている。

第 2 号墓坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量

第 5 号墓坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック多量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量

第 6 号墓坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化物少量

第 7 号墓坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック微量

第 8 号墓坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化物少量

第 9 号墓坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 褐 色 ロームブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量

第 10 号墓坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量

第 11 号墓坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第 13 号墓坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量

第 14 号墓坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・鹿沼軽石中量

第 15 号墓坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量

第 19 号墓坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化物微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量

第 21 号墓坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第 22 号墓坑土層解説

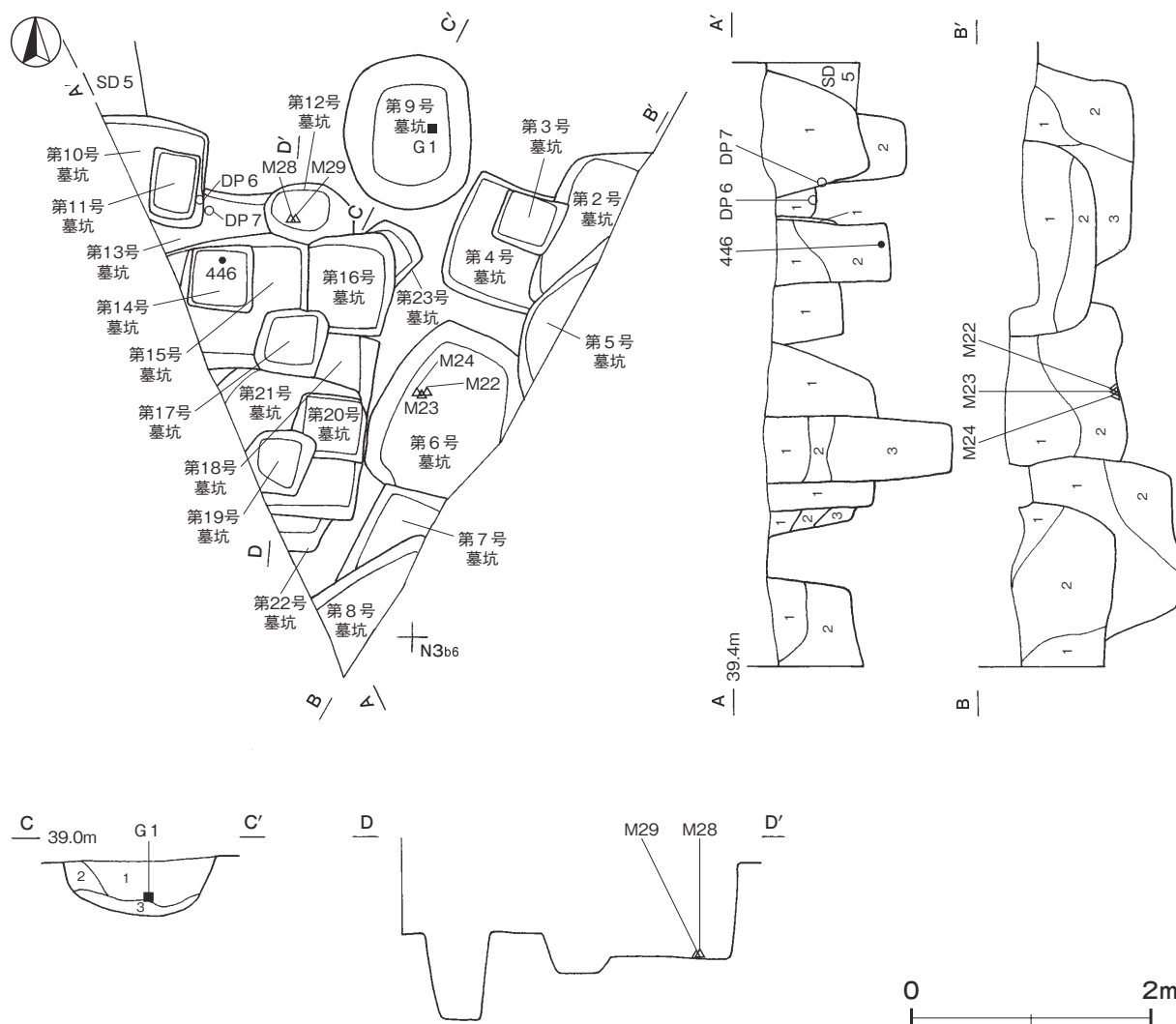
- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師質土器 1 点 (甕), 土製品 2 点 (土人形), 金属製品 47 点 (釘 18 点・煙管 2 点・銭貨 27 枚), ガラス製品 1 点 (数珠玉) が, 第 4 ~ 7・9・11・12・14・19 号墓坑から出土している。446 は土器棺として用いられている。M 17・M 18・M 21・M 30 ~ M 32 は木棺の接合部材, DP 6・DP 7, M 19・M 20・M 22 ~ M 29・M 33, G 1 は副葬品である。

所見 時期は、重複関係が複雑であることから、個々の墓坑については不明である。墓坑群としては、出土遺物や墓坑の形状、第5号溝跡との重複関係から、17世紀後半から19世紀前半と推定できる。

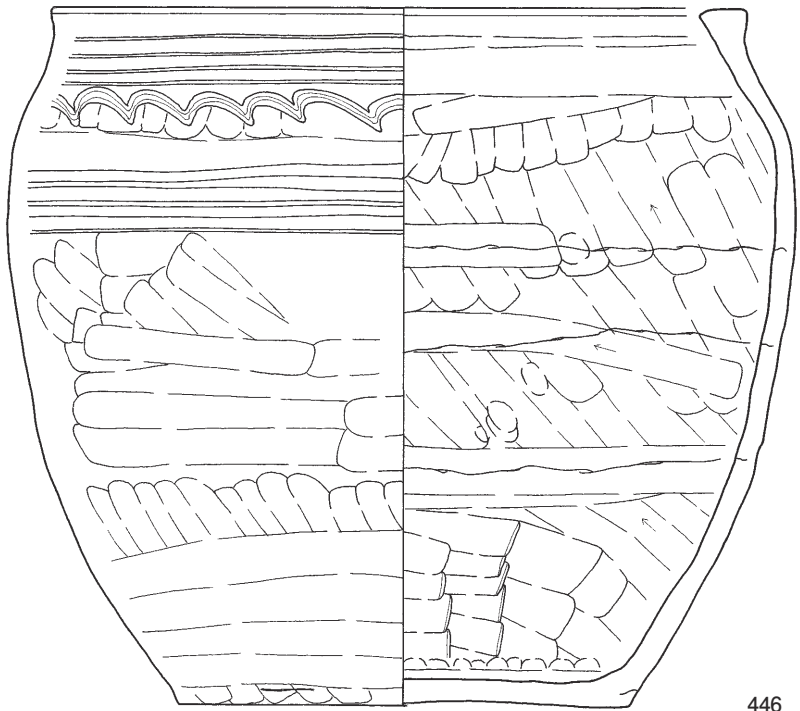
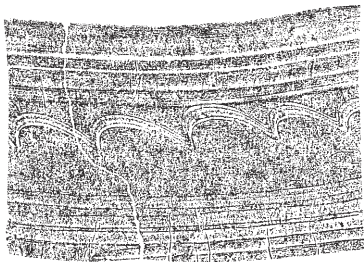
表 18 江戸時代墓坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
第2号墓坑	N 3a6	N - 21° - E	[隅丸長方形]	[1.45] × 0.53	72	平坦	直立	人為	-	本跡→5号墓
第3号墓坑	N 3a6	N - 20° - E	方形	0.50 × 0.46	102	平坦	直立	人為	-	不明
第4号墓坑	N 3a6	N - 20° - E	[方形・長方形]	0.97 × (0.75)	(36)	平坦	直立	人為	金属製品	不明
第5号墓坑	N 3a6	N - 56° - E	[隅丸長方形]	(0.53) × (0.30)	29	平坦	直立	人為	金属製品	2・6号墓→本跡
第6号墓坑	N 3a6	N - 30° - E	隅丸長方形	1.43 × (1.03)	70	平坦	直立	人為	金属製品	本跡→5・7号墓
第7号墓坑	N 3a5	N - 25° - E	不明	[1.43] × 0.50	102	平坦	直立	人為	金属製品	6号墓→本跡→8号墓
第8号墓坑	N 3a5	N - 60° - E	不明	(1.06) × (0.66)	110	平坦	ほぼ直立	人為	-	7号墓→本跡
第9号墓坑	M 3j5	N - 2° - E	隅丸長方形	1.25 × 1.03	44	平坦	ほぼ直立	人為	ガラス製品	
第10号墓坑	N 3a5	N - 4° - E	[方形・長方形]	0.87 × (0.80)	47	平坦	ほぼ直立	人為	-	SD 5, 11号墓→本跡
第11号墓坑	N 3a5	N - 4° - E	長方形	0.62 × 0.38	89	平坦	直立	人為	土製品, 金属製品	本跡→10号墓
第12号墓坑	N 3a5	N - 86° - W	[楕円形]	0.74 × 0.49	90	平坦	直立	人為	金属製品	不明
第13号墓坑	N 3a5	不明	不明	(0.90) × (0.40)	24	平坦	直立	人為	土師質土器	10・15号墓→本跡



第 166 図 第 1 号墓坑群実測図

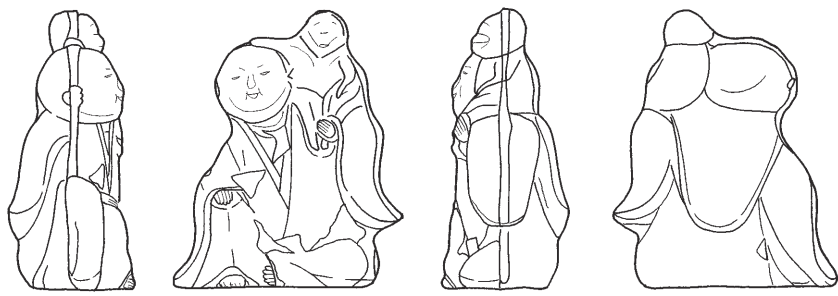
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
第14号墓坑	N 3 a5	N - 4° - E	方形	0.53 × 0.53	115	平坦	直立	人為	土師質土器, 土製品	15号墓→本跡
第15号墓坑	N 3 a5	N - 4° - E	方形	1.08 × 1.04	78	平坦	直立	人為	-	本跡→13・14・21号墓
第16号墓坑	N 3 a5	N - 4° - E	長方形	0.85 × 0.70	46	平坦	直立	人為	-	不明
第17号墓坑	N 3 a5	N - 9° - E	方形	0.55 × 0.54	90	平坦	直立	人為	-	不明
第18号墓坑	N 3 a5	不 明	不明	(0.46) × (0.46)	58	平坦	直立	人為	-	不明
第19号墓坑	N 3 a5	N - 14° - E	方形	0.54 × 0.52	130	平坦	直立	人為	金属製品	21号墓→本跡
第20号墓坑	N 3 a5	N - 8° - E	方形	0.62 × 0.51	92	平坦	直立	人為	-	不明
第21号墓坑	N 3 a5	N - 8° - E	[方形]	1.20 × (1.13)	61	平坦	直立	人為	-	22号墓→本跡→19号墓
第22号墓坑	N 3 a5	不 明	不明	(0.42) × (0.28)	68	平坦	直立	人為	-	本跡→21号墓
第23号墓坑	N 3 a5	N - 45° - E	不明	(0.50) × 0.30	35	平坦	直立	人為	-	不明



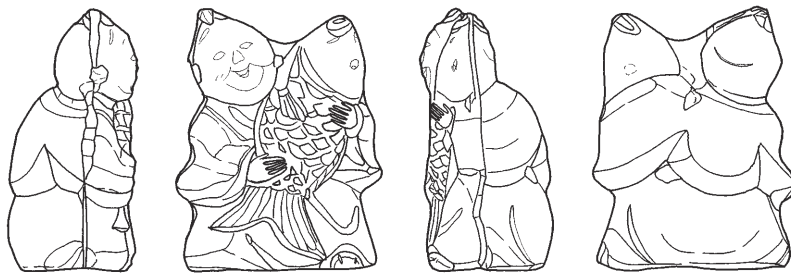
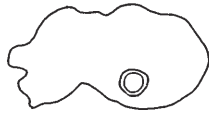
446



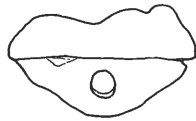
第167図 第1号墓坑群出土遺物実測図(1)



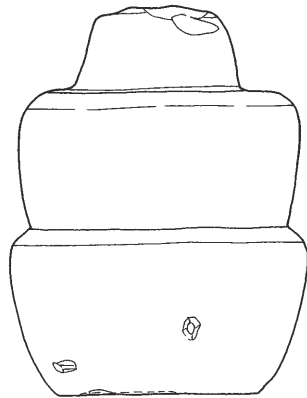
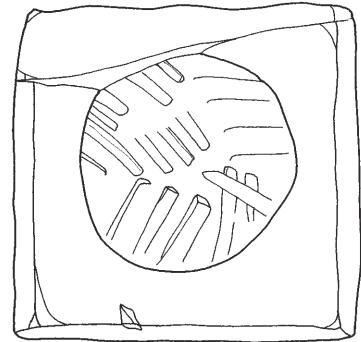
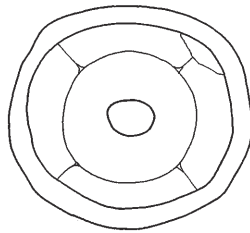
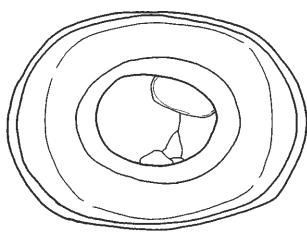
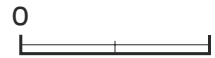
DP6



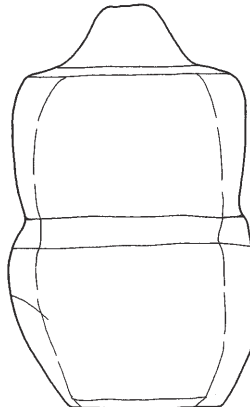
DP7



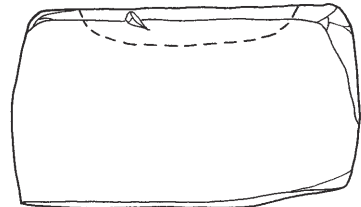
⊙  
⊕  
G1



Q13



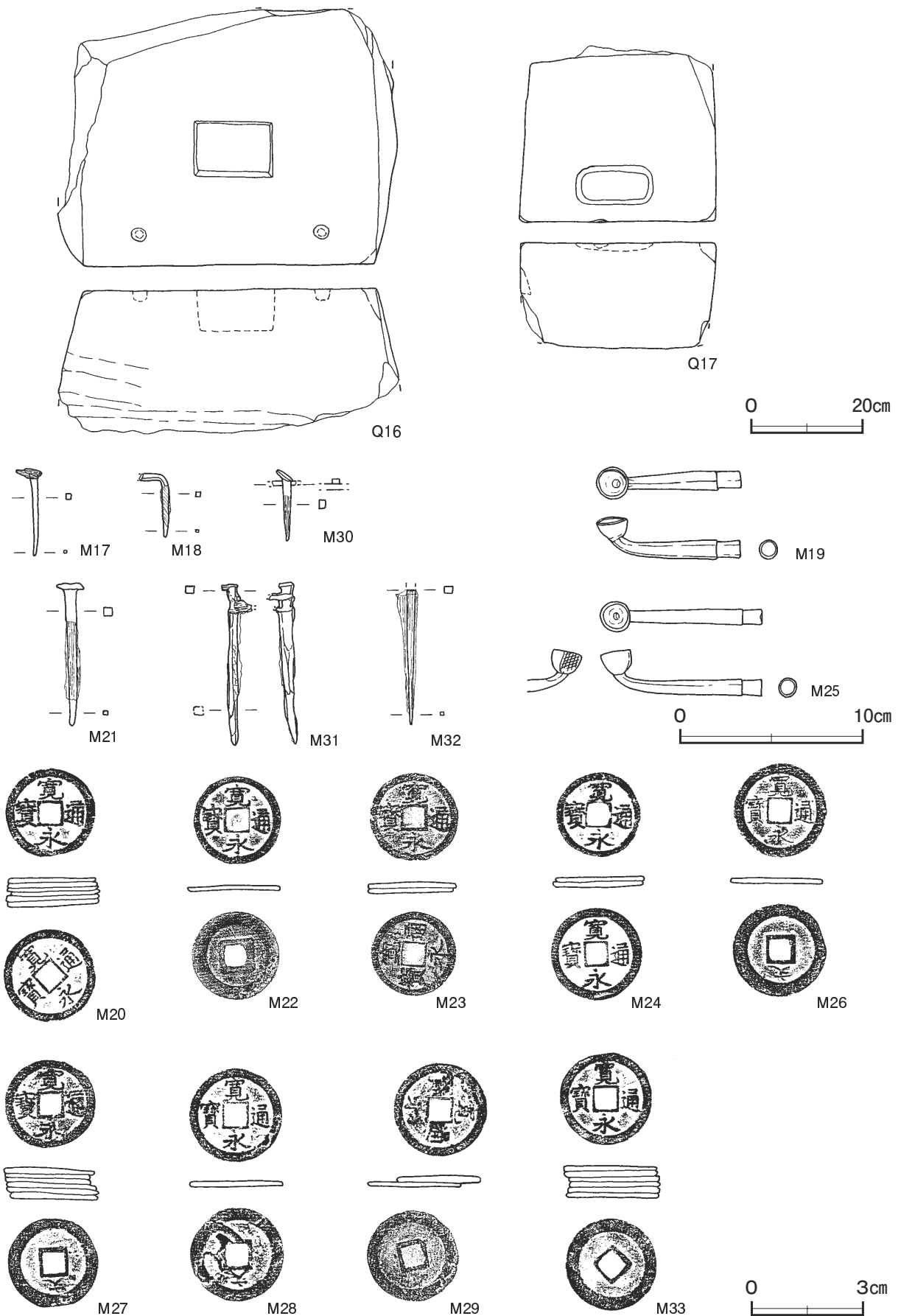
Q14



Q15



第 168 图 第 1 号墓坑群出土遺物実測図(2)



第 169 图 第 1 号墓坑群出土遺物実測図(3)

第4号墓坑出土遺物観察表（第169図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 17	釘	4.7	0.8	0.3	1.57	鉄	断面方形 頭部に木片付着	覆土中	
M 18	釘	(4.6)	0.3	0.3	(0.89)	鉄	断面方形 頭部破損 胴部屈折, 木片付着	覆土中	
M 19	煙管	7.8	1.7	2.2	12.30	銅	受け部・管部側面貼合わ 管部径 0.8cm	覆土中	PL42

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 20	寛永通寶	2.5	0.5	0.1 × 6	21.47	銅	上面 1636 下面 1697	上面古寛永（Ⅰ期） 下面新寛永（Ⅲ期。） 6枚付着 六文銭	覆土中	PL42

第5号墓坑出土遺物観察表（第169図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 21	釘	7.8	1.5	0.5	5.73	鉄	断面方形 胴部木片付着	覆土中	PL41

第6号墓坑出土遺物観察表（第169図）

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 22	寛永通寶	2.3	0.5	0.1	2.41	銅	1636	古寛永（Ⅰ期） 六文銭。	床面	PL42
M 23	寛永通寶	2.3~ 2.4	0.5	0.1 × 2	5.55	銅	1636	上・下面古寛永（Ⅰ期） 2枚付着 六文銭。	床面	PL42
M 24	寛永通寶	2.3~ 2.5	0.5	0.1 × 2	5.41	銅	1636	上・下面古寛永（Ⅰ期） 2枚付着 六文銭。	床面	PL42

第7号墓坑出土遺物観察表（第169図）

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 25	煙管	8.7	1.6	2.9	11.40	銅	受け部・管部側面貼合わ 管部径 0.8cm	覆土中	PL42 受口部に織維付着

第9号墓坑出土遺物観察表（第168図）

番号	器種	高さ	幅	孔径	重量	色調	材質	特徴	出土位置	備考
G 1	数珠玉	0.5	0.6	0.15	0.31	半透明	ガラス	型作り 表面研磨後一方向からの穿孔	覆土下層	PL42

第11号墓坑出土遺物観察表（第168・169図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 6	土人形	7.3	6.1	3.5	44.16	赤色粒子・ 白色粒子	橙	表・裏面型押し後貼付, 底面一方向からの穿孔 僧侶と猿	床面	PL39
DP 7	土人形	6.9	5.5	3.5	43.61	赤色粒子・ 白色粒子	橙	表・裏面型押し後貼付, 底面一方向からの穿孔 鯛持ち童子	覆土中層	PL39

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 26	寛永通寶	2.5	0.6	0.1	2.98	銅	1668	新寛永（Ⅱ期） 裏面「文」字	覆土中	PL42
M 27	寛永通寶	2.5	0.6	0.1 × 6	21.08	銅	上面 1636 下面 1668	上面古寛永（Ⅰ期） 下面新寛永（Ⅱ期）, 裏面「文」字 6枚付着 六文銭	覆土中	PL42

第12号墓坑出土遺物観察表（第169図）

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 28	寛永通寶	2.5	0.6	0.1	3.61	銅	1668	新寛永（Ⅱ期） 裏面「文」字 六文銭。	床面	PL42
M 29	寛永通寶	2.5	0.6	0.1 × 2	7.00	銅	1668	上・下面新寛永（Ⅱ期） 裏面「文」字 2枚付着 六文銭。	床面	PL42



第 14 号墓坑出土遺物観察表（第 167 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
446	土師質土器	甕	36.0	36.5	23.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・斜位のナデ後横位のナデ、上位にヘラによる沈線状・波状のナデ 体部内面縦・斜位のナデ、輪積み痕	床面	100% PL39

第 19 号墓坑出土遺物観察表（第 169 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 30	釘	3.8	0.5	0.6	1.71	鉄	頭部長方形 断面方形 頭部下位に別釘付着 胴部木片付着	覆土中	
M 31	釘	8.7	0.5	0.5	4.89	鉄	頭部長方形 断面方形 頭部下位に別釘付着 胴部木片付着	覆土中	PL41
M 32	釘	(7.3)	0.5	0.4	(4.13)	鉄	頭部欠損 断面方形 胴部木片付着	覆土中	

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 33	寛永通寶	2.5	0.6	0.1 × 6	21.19	銅	上面 1697 下面 不明	上面新寛永（Ⅲ期）裏面不明 6枚付着 六文	覆土中	PL42

墓坑群表土採集遺物観察表（第 168・169 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	五輪塔	25.5	19.8	14.4	-	花崗岩	空風輪 空輪部と風輪部のくびれ部は段状	表土面	
Q 14	五輪塔	26.6	16.4	14.8	-	花崗岩	空風輪 空輪部と風輪部のくびれ部は段状	表土面	
Q 15	五輪塔	22.8	22.4	12.4	-	花崗岩	地輪 上面中央部に凹状の窪み 角ノミ状工具による加工痕	表土面	
Q 16	墓石	46.0	61.0	25.5	-	花崗岩	台座 上面中央部に凹状の窪みと前方部に 2か所の窪み 前面部に加工痕	表土面	
Q 17	墓石	31.5	35.0	19.0	-	花崗岩	台座 上面前方部に皿状の窪み	表土面	

(3) 道路跡

第 1 号道路跡（第 170 図）

**位置** 調査区南東部から中央部にかけての U 7j6 ~ U 7j9 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

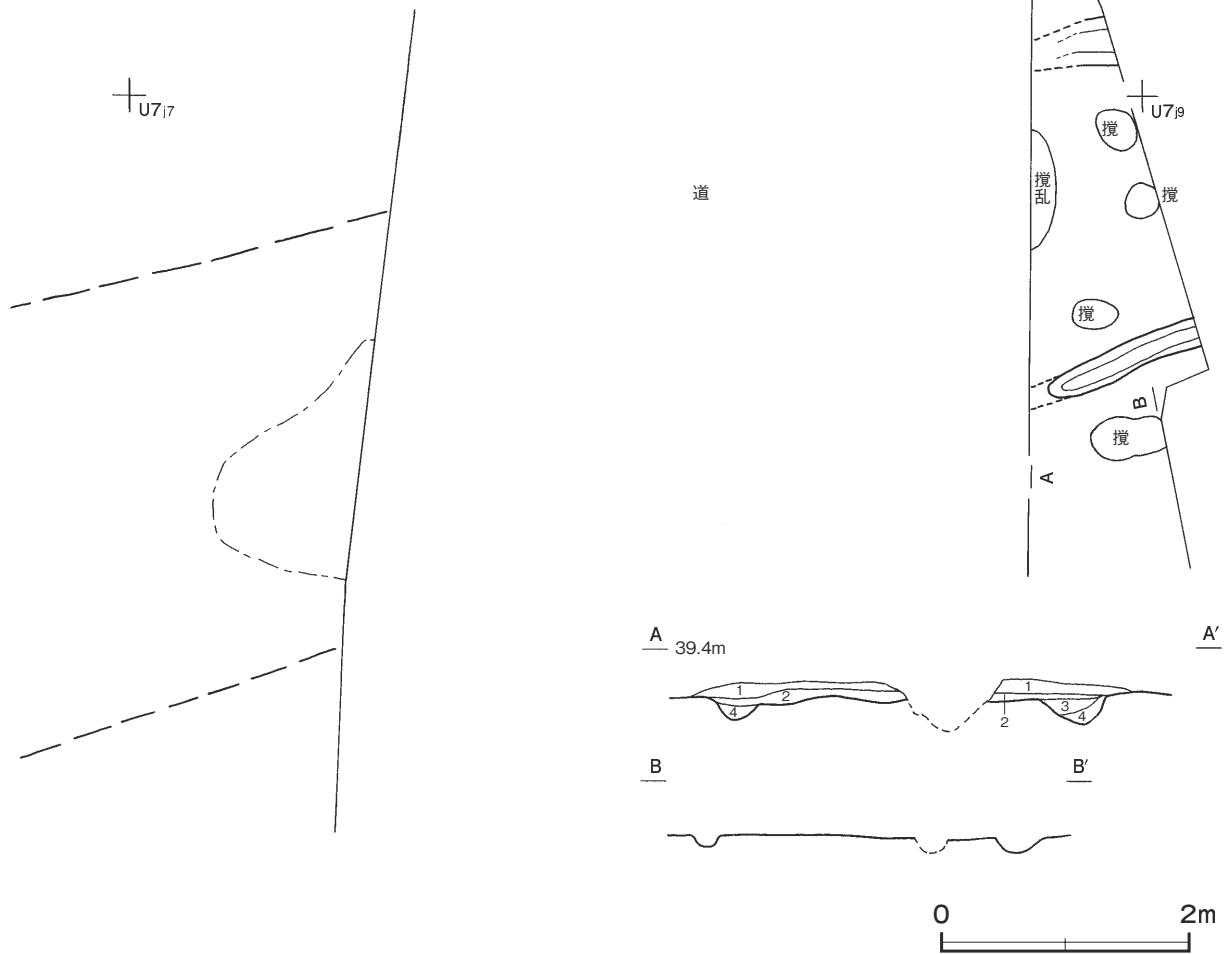
**規模と形状** 西南西部が消滅しており、東北東部が調査区域外に延びていることから、長さは 4.10 m、幅は 2.62 m しか確認できなかった。U 7j6 区から東北東方向（N - 75° - E）へ直線状に延びている。また、U 7j6 区の地山面に硬化面が確認できたことから、西南西方向に延びていたと推定できる。路面は 3 面が確認できた。第 1 面は地山を 6 ~ 10cm 掘り込んで、側溝が構築されている。地山面には、硬化面が部分的に残存している。第 2 面は、第 4 層を積み上げて構築されている。第 3 面は、側溝を第 2・3 層で埋め戻した後、第 4 層及び第 2・3 層上面から第 1 層を積み上げて構築されている。各面の断面は、いずれも中央部から外側へ緩やかに下っている。

**側溝** 2 条。硬化した地山面に沿って、幅 0.20 ~ 0.48 m で確認できた。深さ 12 ~ 24cm で、壁は外傾している。底面は平坦で、東北東に向かって緩やかに傾斜している。側溝間は 2.14 ~ 2.22 m である。

**覆土** 4 層に分層できる。第 4 層は第 2 面の構築土、第 3・4 層は側溝の覆土で埋め戻されている。第 1 層は第 3 面の構築土で、非常に強く締まっている。

土層解説

- |       |                  |          |                  |
|-------|------------------|----------|------------------|
| 1 褐灰色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量        |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量        | 4 暗褐色    | ロームブロック・粘土ブロック少量 |



第 170 図 第 1 号道路跡実測図

**遺物出土状況** 瓦質土器 1 点（焙烙）が、構築土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、第 2・3 面は江戸時代で改修されている。第 1 面の構築年代は不明であるが、室町時代の掘立柱建物跡が確認できた調査区南東部と地下式坑群が確認できた調査区中央部を隔てる位置にあることから、15 世紀代の可能性がある。

### 第 2 号道路跡（第 171 図・付図）

**位置** 調査区南東部の V 7 h8 ～ V 7 d0 区、標高 39 m ほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第 3 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

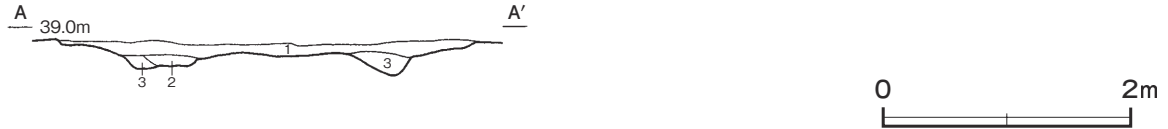
**規模と形状** 北東部・南西部が調査区域外に伸びていることから、長さは 21.40 m、幅 3.30 m しか確認できなかった。V 7 h8 区から北東方向（N - 28° - E）へ直線状に伸びている。路面は 2 面が確認できた。第 1 面は、地山を 8 ～ 10cm 掘り込んで、側溝が構築されている。地山面には、部分的に硬化面が残存している。断面は緩やかな W 字状である。第 2 面は、側溝を第 2・3 層で埋め戻した後、地山及び第 2・3 層の上面に第 1 層を積み上げて構築されている。断面はほぼ平坦である。

**側溝** 2条。地山の硬化面に沿って、幅0.26～0.38 mで確認できた。深さ10～14cmで、壁は外傾している。底面は平坦で、北東部に向かって緩やかに傾斜している。側溝間は0.64～0.82 mである。

**覆土** 3層に分層できる。第2・3層は側溝の覆土で、埋め戻されている。第1層は地山及び側溝の上面から構築されており、非常に強く締まっている。

**土層解説**

- 1 褐 灰 色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 にぶい横褐色 ロームブロック中量



第171図 第2号道路跡実測図

**遺物出土状況** 磁器片1点(碗)が、側溝の覆土から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、第2面は江戸時代で改修されている。第1面の構築年代は不明であるが、室町時代の掘立柱建物跡が確認できた調査区南東部と地下式坑群が確認できた調査区中央部を隔てる位置にあることから、15世紀代の可能性がある。

表19 江戸時代道路跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規 模				溝	構築面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	溝幅(m)	溝間(m)					
1	U 7 j6 ~ U 7 j9	N - 75° - E	直線	(4.10)	2.62	0.20 ~ 0.48	2.14 ~ 2.22	2	3	人為	瓦質土器	
2	V 7 h8 ~ V 7 d0	N - 28° - E	直線	(21.40)	3.30	0.26 ~ 0.38	0.64 ~ 0.82	2	2	人為	磁器	

(4) 土坑

**第344号土坑** (第172図)

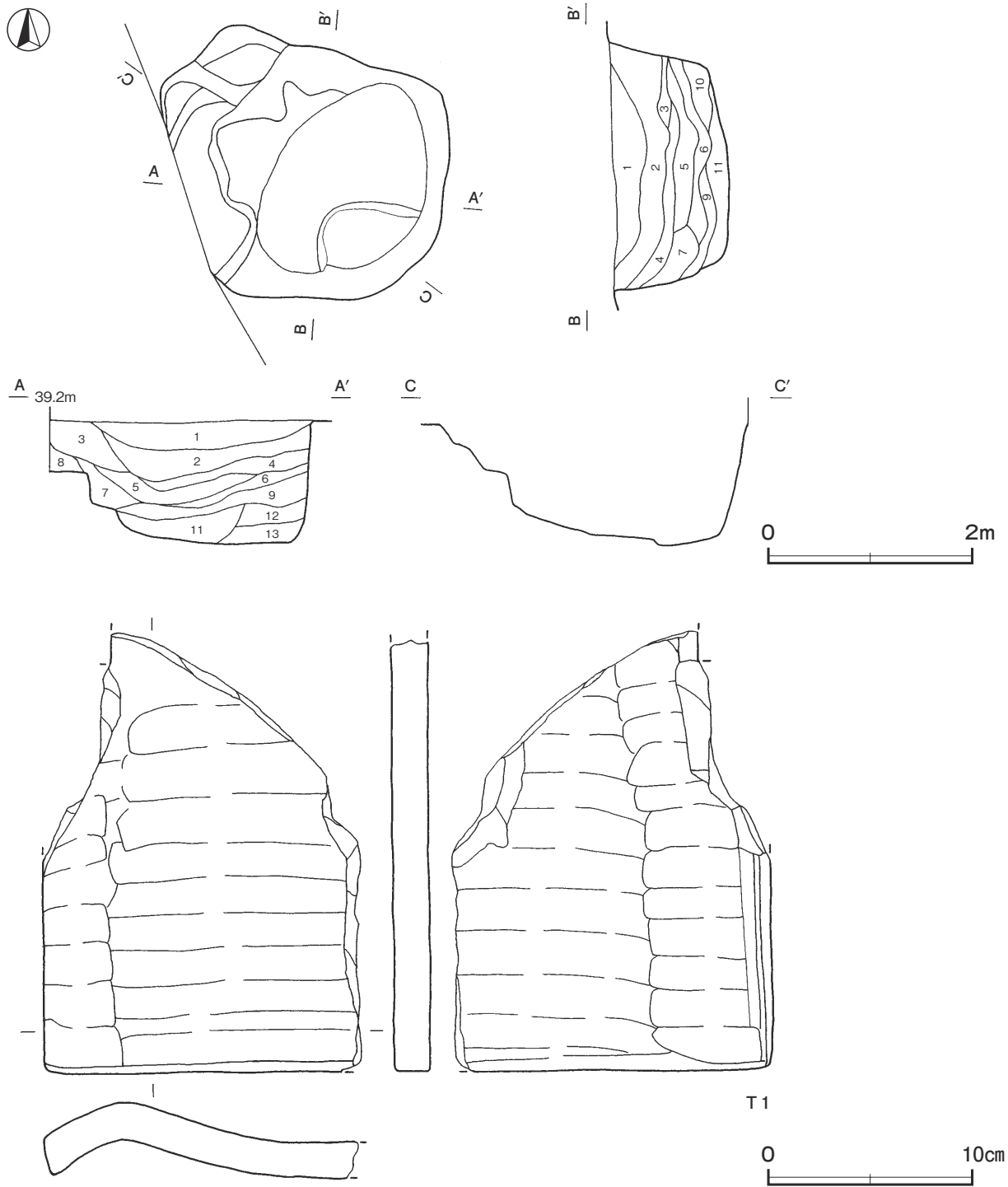
**位置** 調査区北西部のL 2 i0区、標高39 mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 西部が調査区域外に延びているが、確認できた範囲から長軸3.00 m、短軸2.50 mの不整な隅丸長方形と推定でき、長軸方向はN - 56° - Wである。深さ120cmで、壁はほぼ直立しているが、北西壁面には2か所の平場が形成され、階段状になっている。底面は皿状で、硬化面は認められなかった。

**覆土** 13層に分層できる。第12・13層は大型のロームブロックが多量に含まれていることから、崩落土の可能性はある。第1～11層はロームブロックや鹿沼軽石が含まれる不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・鹿沼軽石中量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック・鹿沼軽石少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 5 にぶい横褐色 ロームブロック中量、鹿沼軽石少量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック少量、鹿沼軽石微量
- 7 にぶい横褐色 ロームブロック中量
- 8 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 9 暗 褐 色 鹿沼軽石少量、ロームブロック微量
- 10 暗 褐 色 ロームブロック少量、鹿沼軽石微量
- 11 褐 色 ロームブロック・鹿沼軽石少量
- 12 横 褐 色 ロームブロック多量、鹿沼軽石少量
- 13 横 褐 色 ロームブロック多量

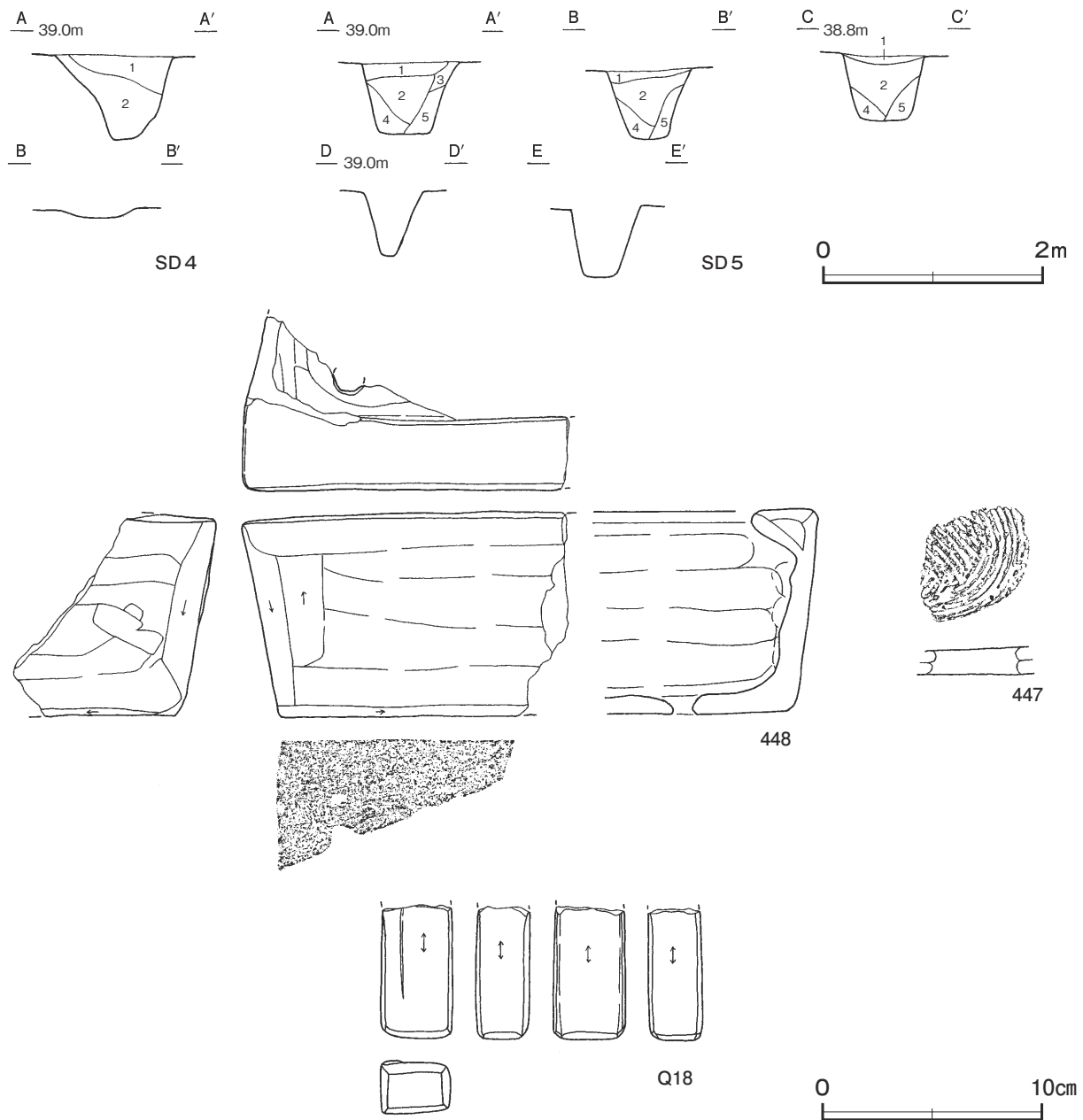


第 172 図 第 344 号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 瓦片 1 点（軒平瓦）が、覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 19 世紀後半に比定できる。性格は、北西壁面が有段であることや崩落土の可能性のある層位を確認したことから、「地下室」の可能性はあるが、詳細は不明である。





第173図 第4・5号溝跡・出土遺物実測図

第5号溝跡出土遺物観察表（第173図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴		釉薬	産地	出土位置	備考
447	陶器	播鉢	-	(1.2)	-	長石・石英・赤色粒子・浅黄澄	内面5本一単位の播目、漬け掛け 外面多方向のナデ、ハケ塗り		鉄釉	瀬戸・美濃	覆土中	5%
番号	種別	器種	口辺	器高	底辺	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか		出土位置	備考
448	瓦質土器	火鉢	(14.6 × 4.0)	9.1	(10.7 × 5.7)	雲母・赤色粒子・白色粒子	灰	普通	板作り成形 外・内面横位のナデ、底部砂目を残す 一方向のナデ 植木鉢転用		覆土中	10% 底部内面からの穿孔
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
Q18	砥石	(6.0)	3.2	2.4	(91.76)	花崗岩	砥面4面			覆土中	PL39	

表 20 江戸時代溝跡一覧表

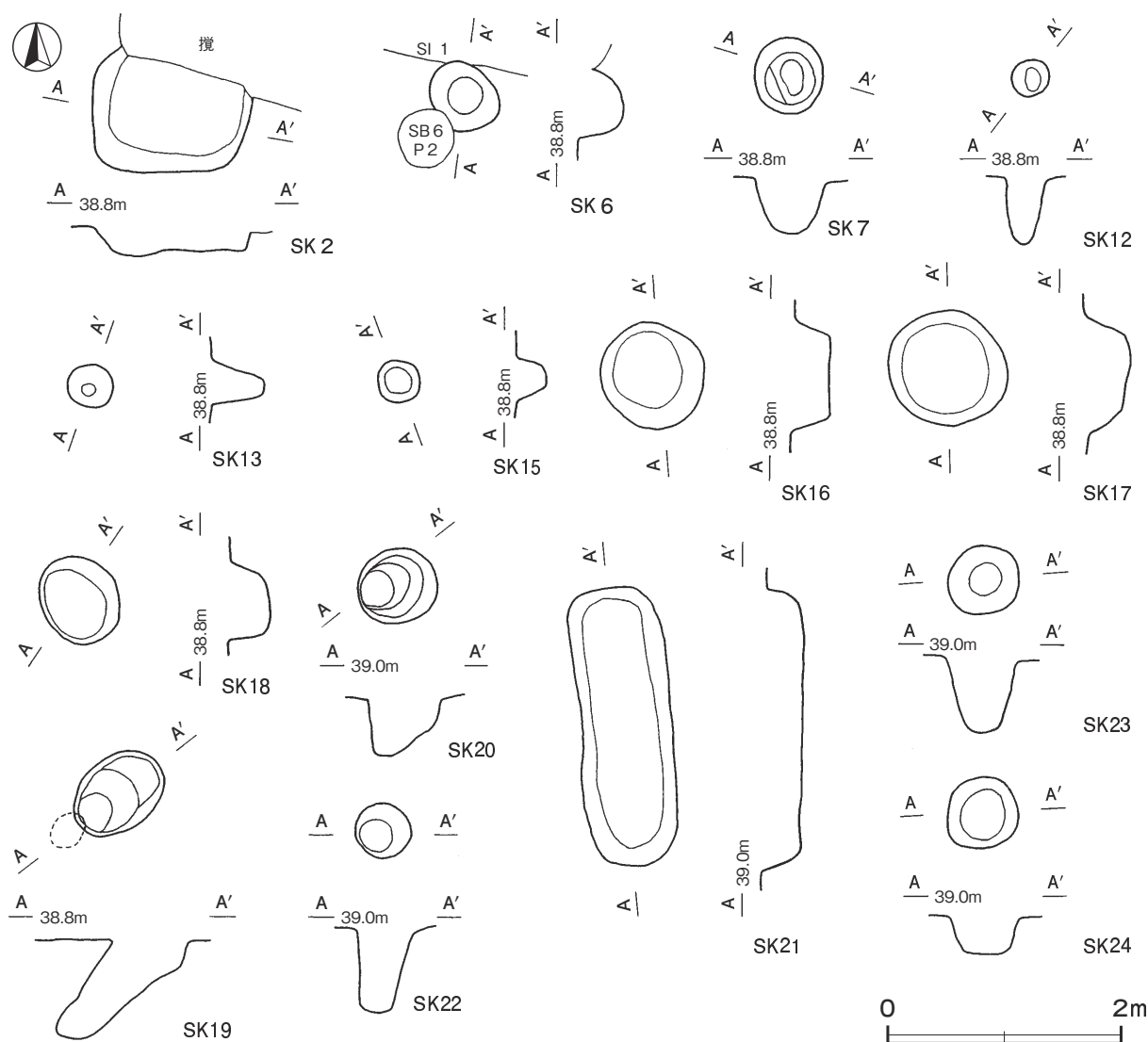
番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
4	M3f3~M3f5	N-93°-E	直線	7.35	0.53~1.18	0.42~0.98	72~78	箱状	ほぼ直立	人為	陶器	SD 5に接続
5	M3d5~N3a5	N-3°-E	直線	(27.34)	0.61~1.11	0.18~0.53	62~74	箱状	ほぼ直立	人為	瓦質土器, 陶器, 瓦, 砥石	UP 9→本跡→第10号墓坑

5 その他の遺構と遺物

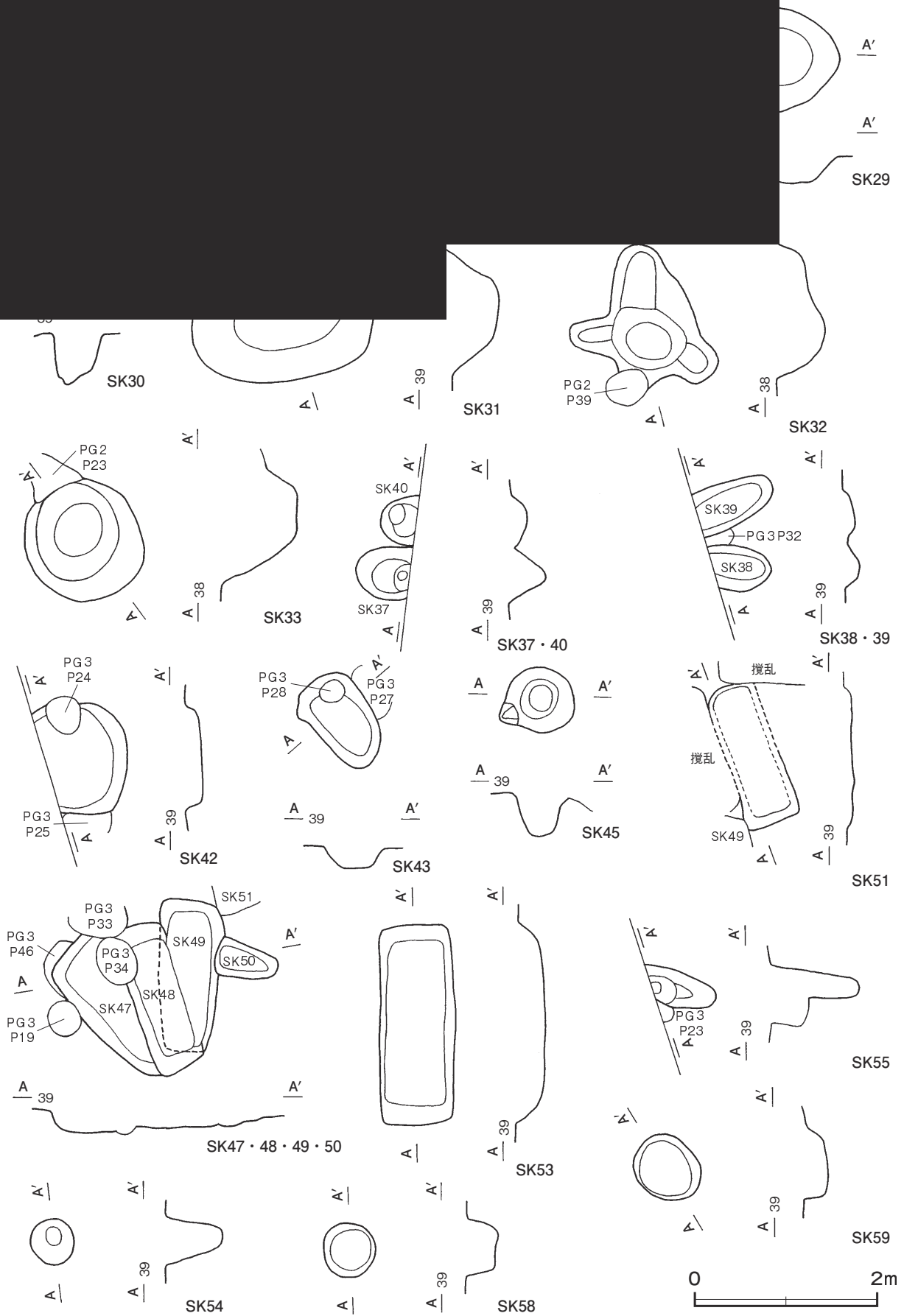
今回の調査では、時期が明確にできなかった土坑 221 基、ピット群 1 か所を確認している。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑 (第 174 図)

時期不明の土坑 221 基については、実測図及び一覧表を掲載する。

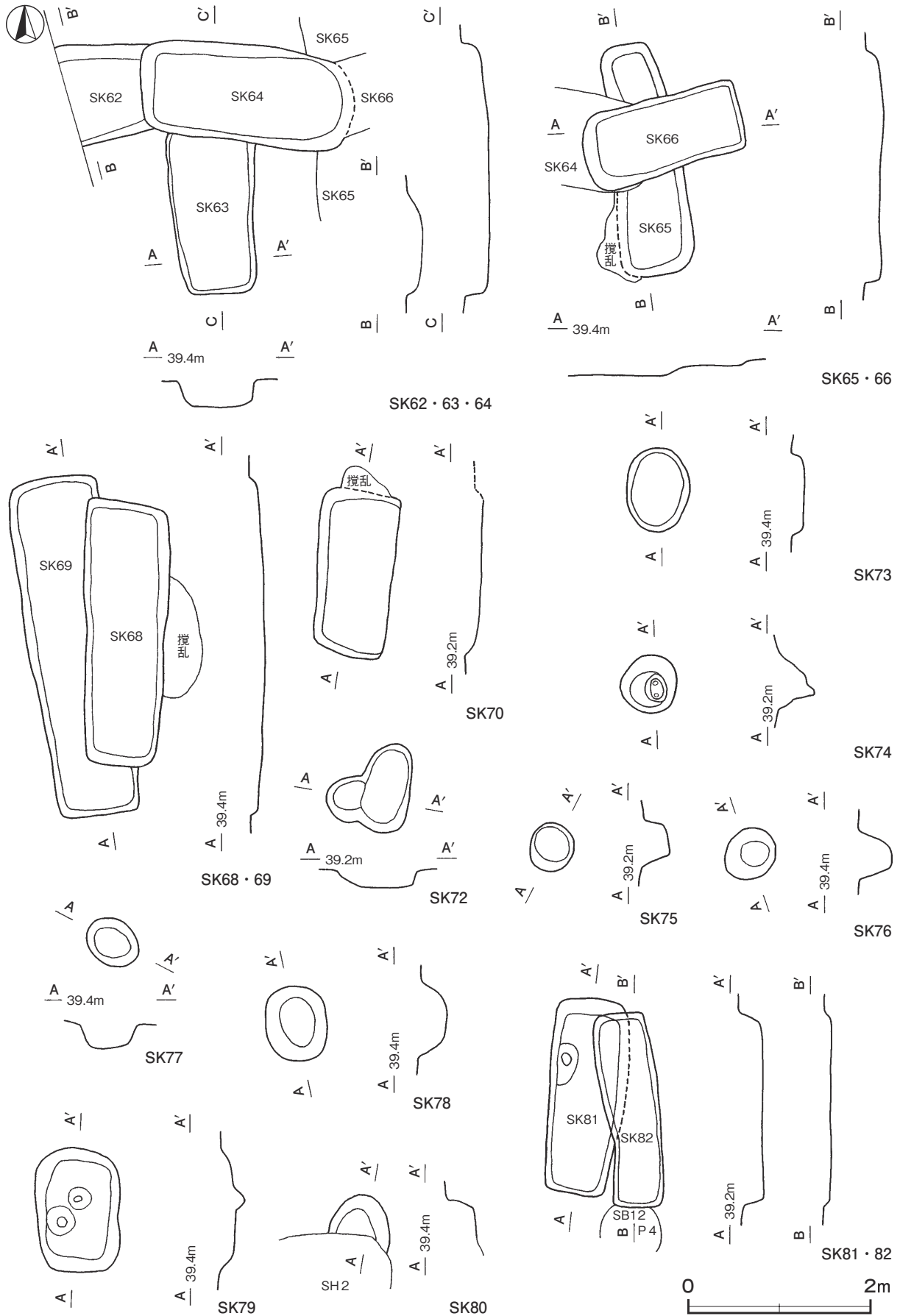


第 174 図 その他の土坑実測図(1)

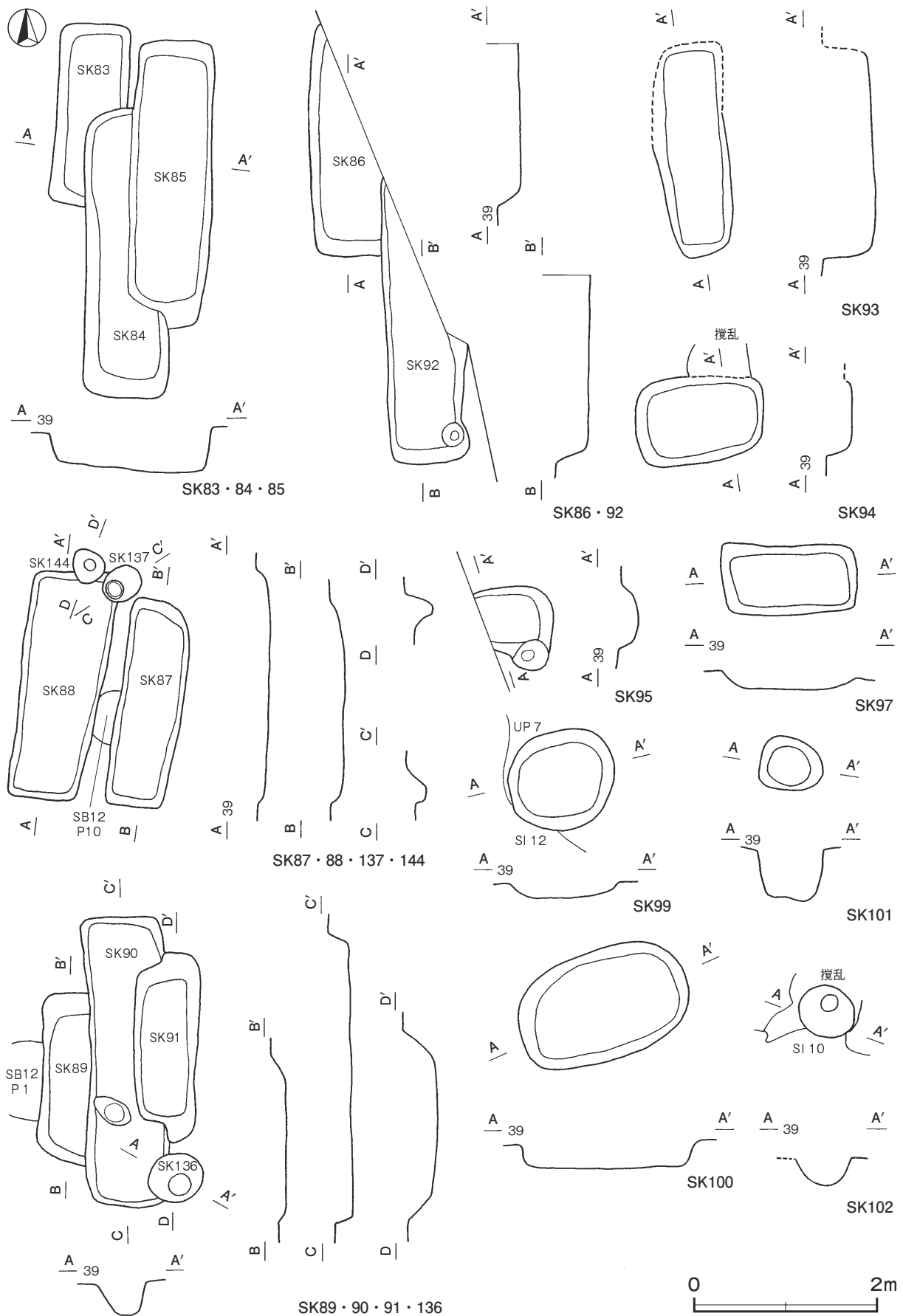


第 175 図 その他の土坑実測図(2)

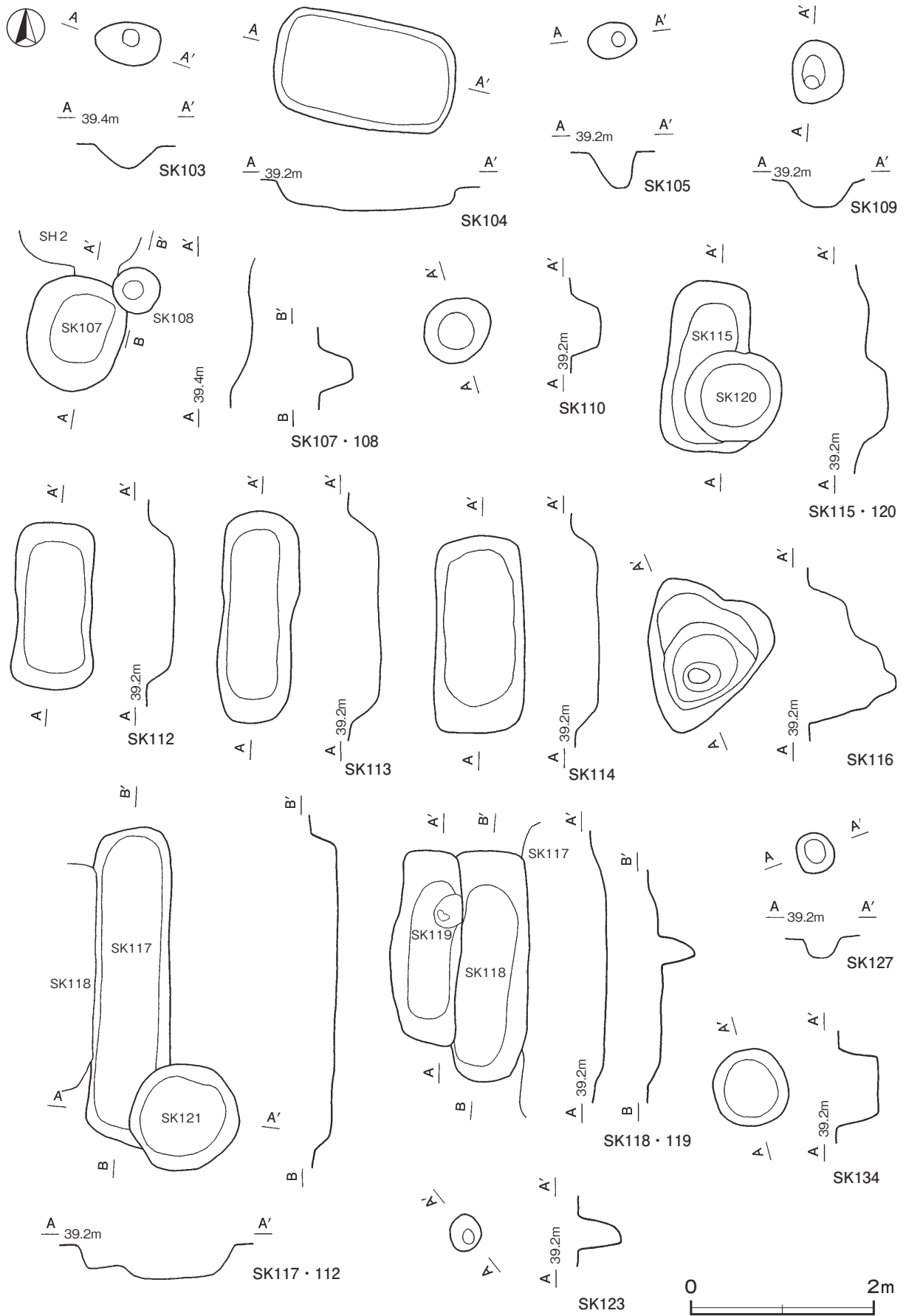




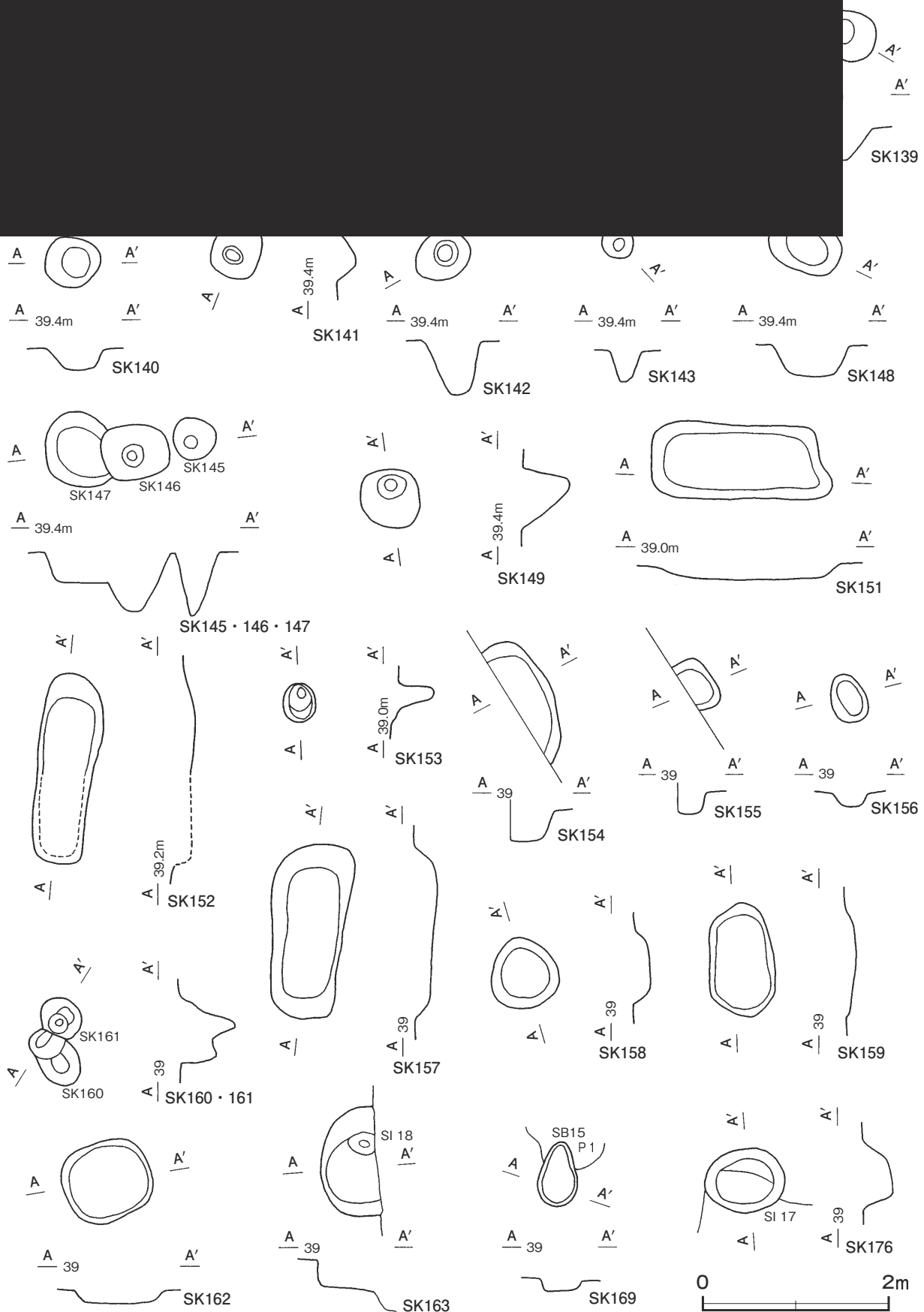
第 176 図 その他の土坑実測図(3)



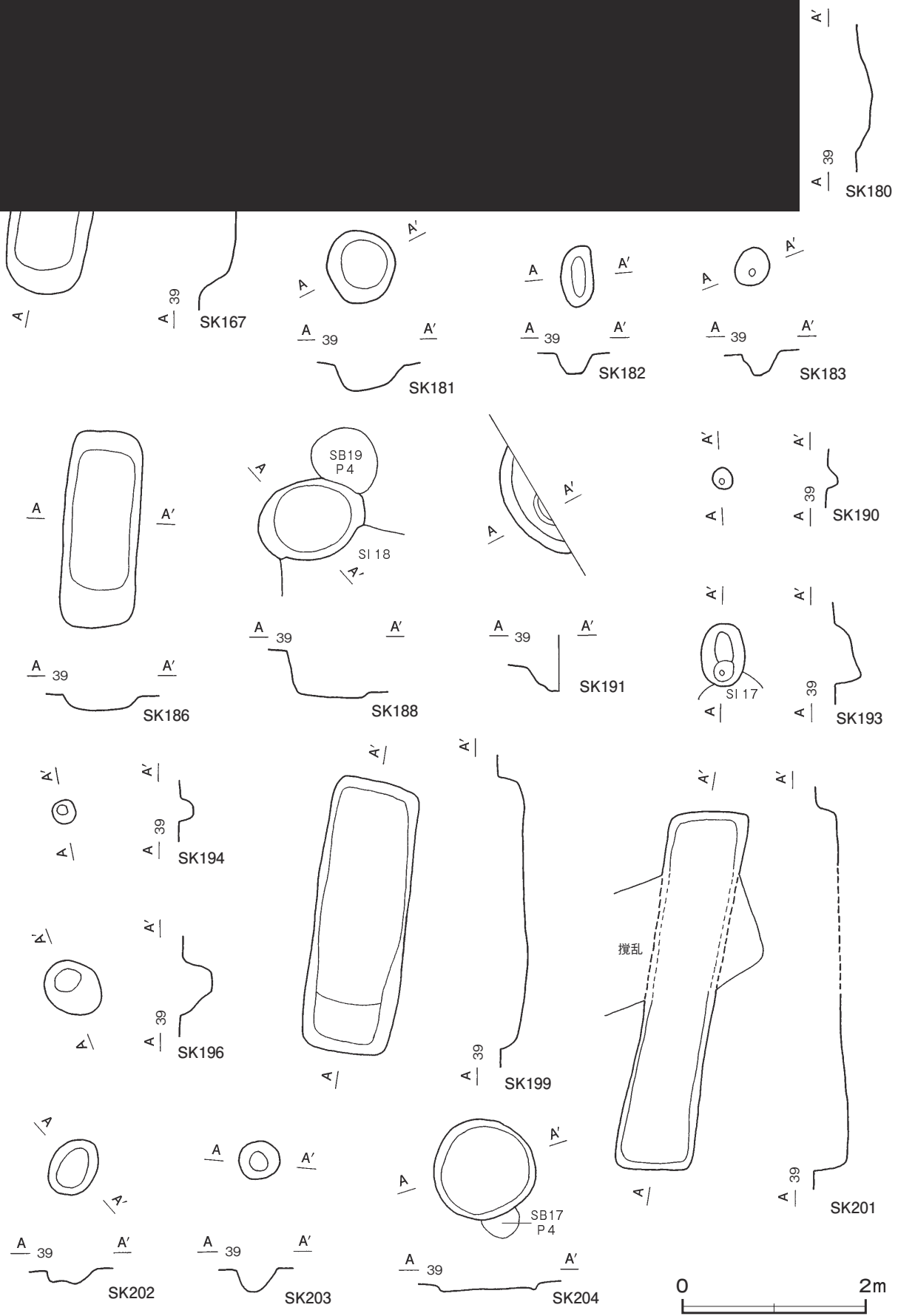
第 177 図 その他の土坑実測図(4)



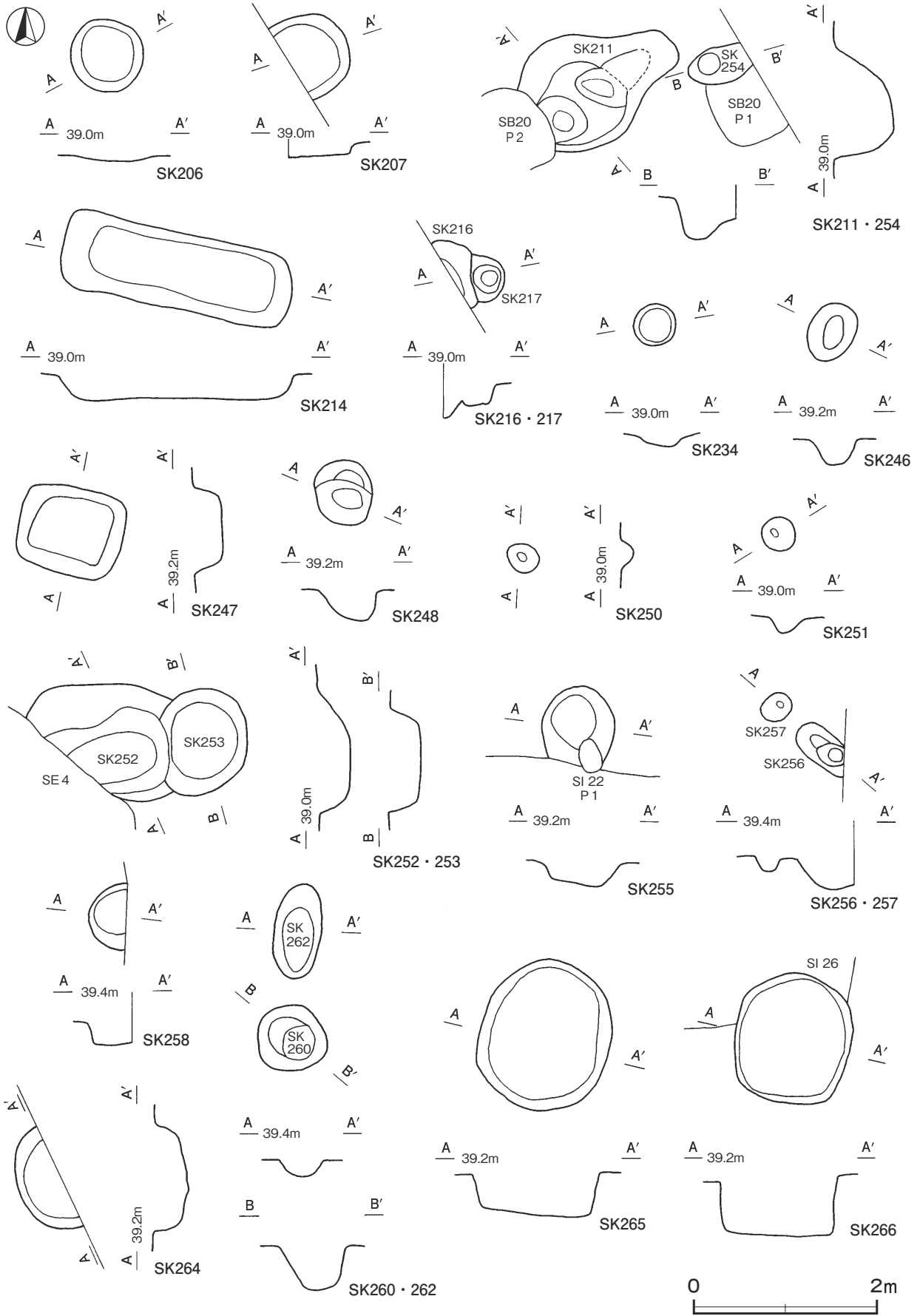
第 178 図 その他の土坑実測図(5)



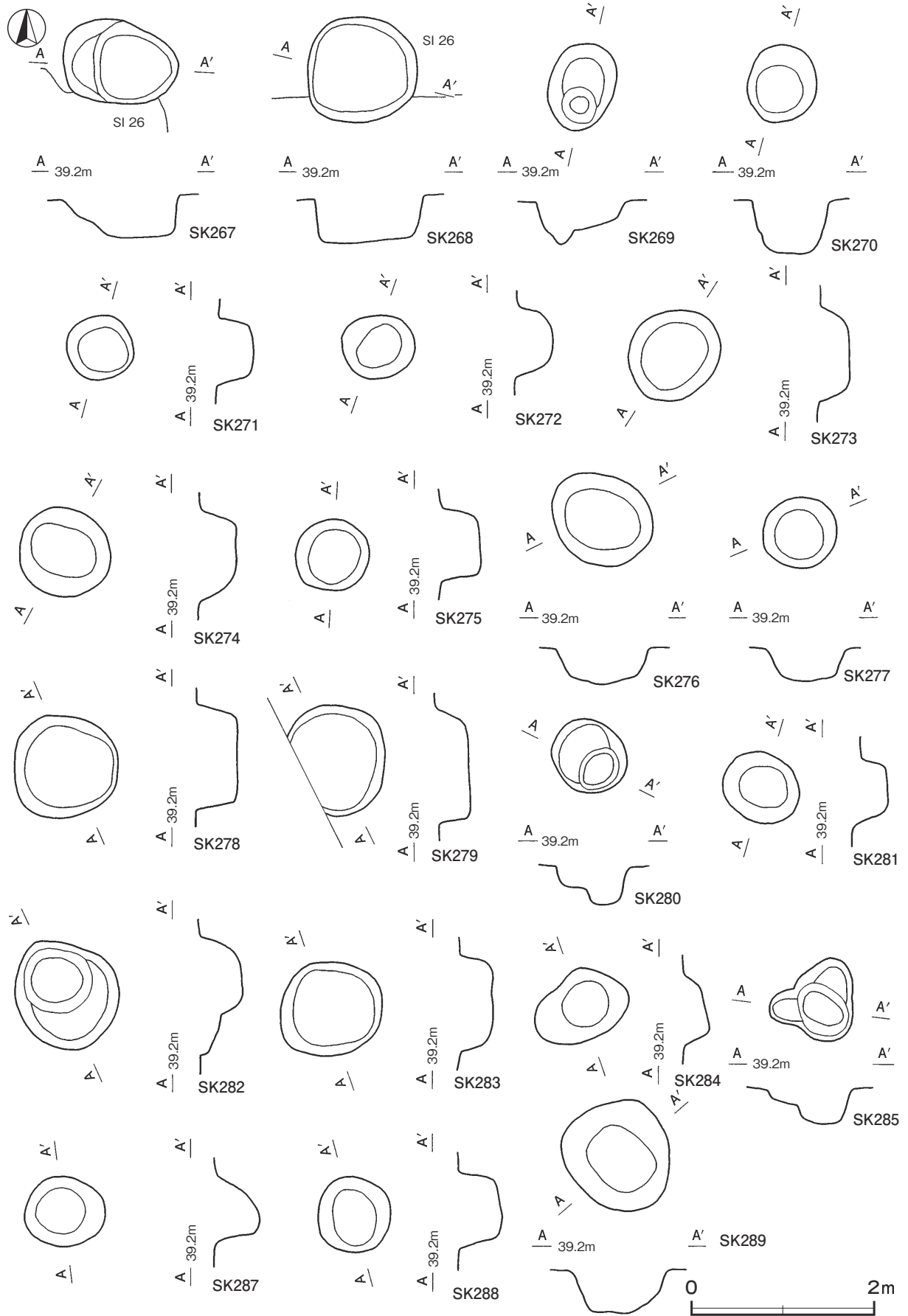
第 179 図 その他の土坑実測図(6)



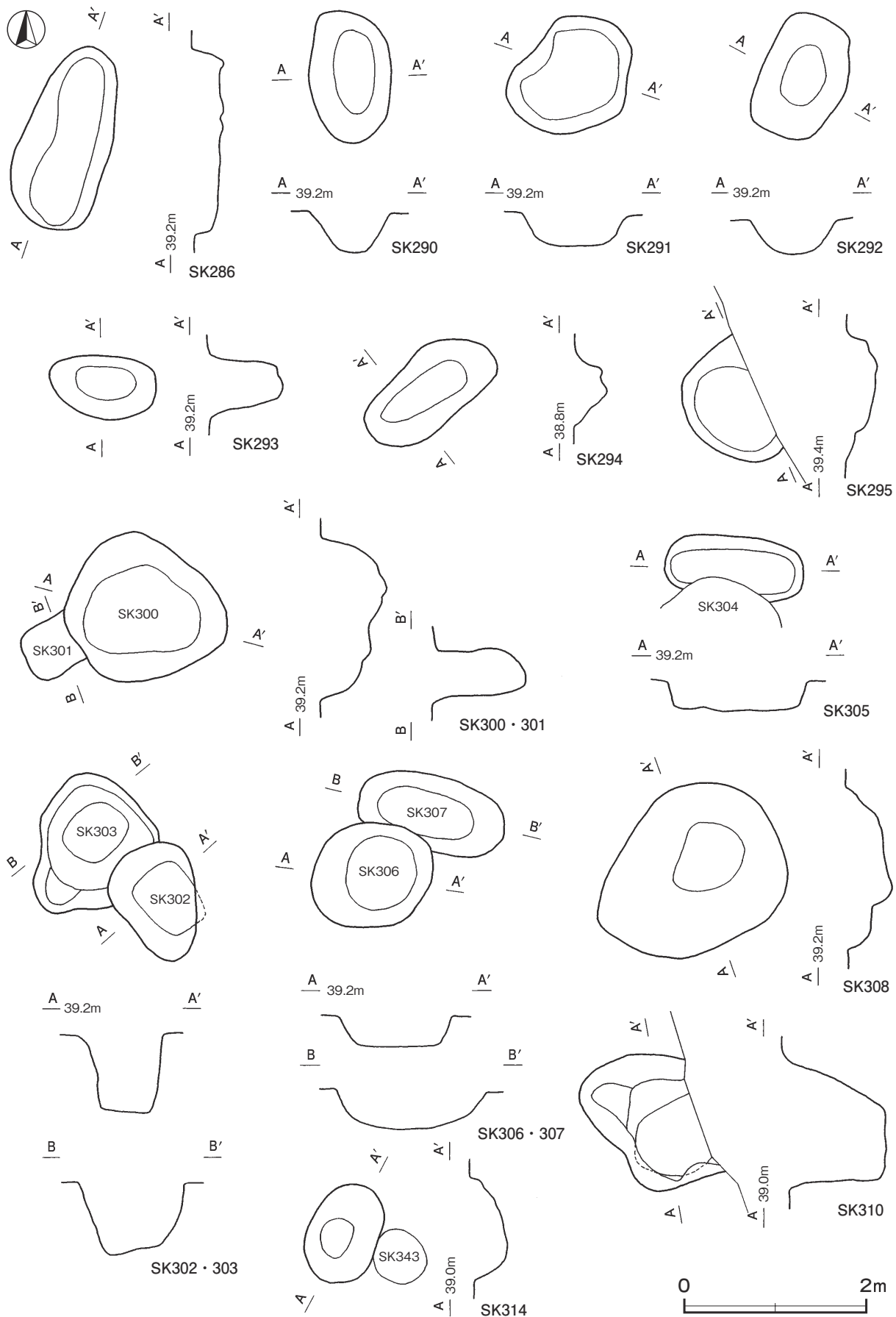
第 180 図 その他の土坑実測図(7)



第 181 図 その他の土坑実測図(8)

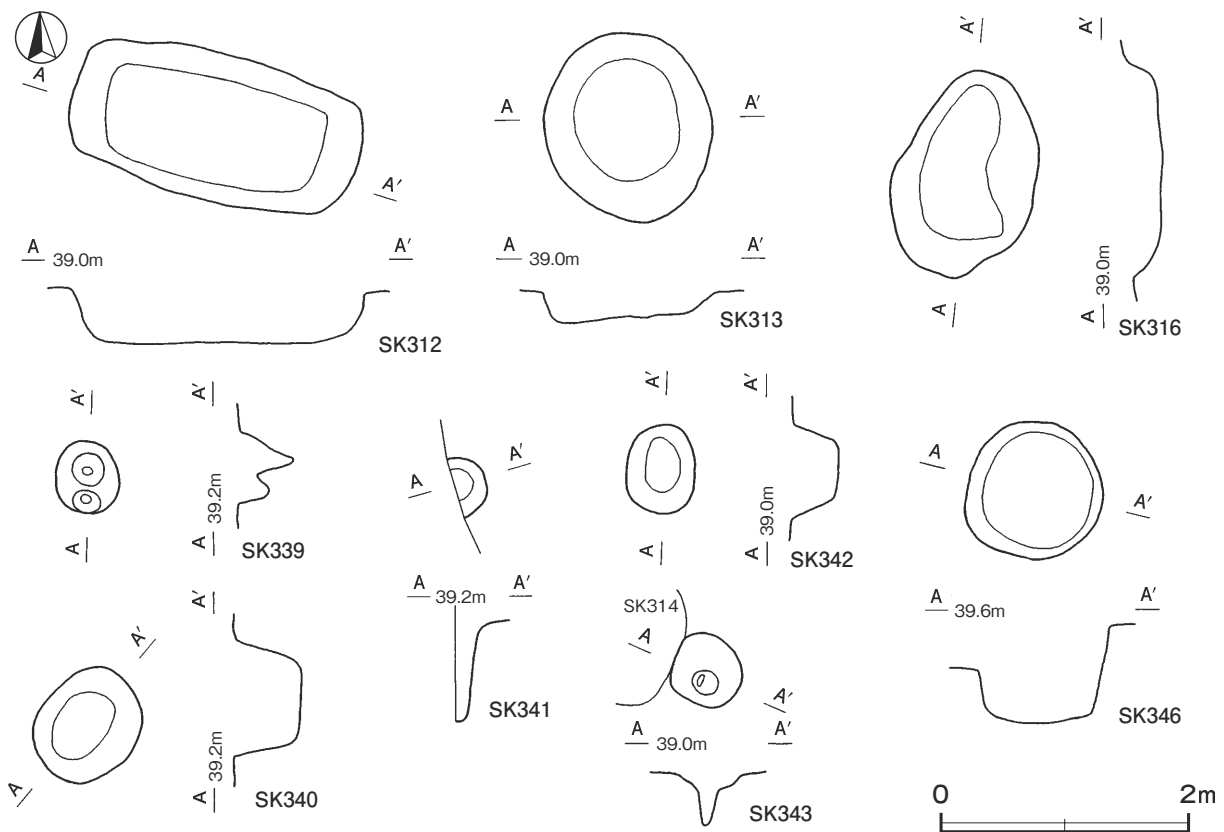


第 182 図 その他の土坑実測図(9)



第 183 図 その他の土坑実測図(10)





第 184 図 その他の土坑実測図(11)

表 21 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	W 8 j1	N - 80° - W	[隅丸方形]	1.31 × (0.90)	23	平坦	外傾	自然	-	
6	X 7 a8	N - 49° - W	[楕円形]	0.63 × (0.47)	36	皿状	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	SI 1 → 本跡 SB 6 との重複不明
7	X 7 b8	N - 14° - W	楕円形	0.66 × 0.58	42	皿状	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	
12	W 7 j9	-	円形	0.31 × 0.29	55	皿状	直立	埋土・柱痕跡	-	
13	W 7 j9	-	円形	0.36 × 0.36	43	皿状	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	
15	W 7 g0	-	円形	0.35 × 0.34	24	皿状	ほぼ直立	人為	-	
16	W 8 h1	-	円形	0.90 × 0.87	30	平坦	ほぼ直立	人為	-	
17	W 8 g1	-	円形	0.98 × 0.98	36	平坦	外傾	人為	-	
18	W 8 g2	N - 33° - W	楕円形	0.74 × 0.64	33	平坦	ほぼ直立	人為	-	
19	W 8 i1	N - 52° - E	楕円形	0.83 × 0.62	82	皿状	オーバーハング	埋土・柱痕跡	-	
20	W 7 h9	-	円形	0.66 × 0.62	48	皿状	直立・外傾	埋土・柱痕跡	-	
21	V 8 j1	N - 60° - W	隅丸長方形	2.35 × 0.80	30	平坦	ほぼ直立	自然	-	
22	V 7 j0	-	円形	0.46 × 0.46	70	平坦	直立	埋土・柱痕跡	土師器	
23	V 7 j0	-	円形	0.60 × 0.58	65	皿状	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	土師器	
24	V 7 j0	N - 3° - W	隅丸方形	0.61 × 0.58	31	平坦	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	
25	W 7 f0	-	円形	0.65 × 0.61	57	平坦	外傾	埋土・柱痕跡	土師器	
26	X 7 a0	-	円形	0.42 × 0.42	40	平坦	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	
27	X 7 a9	-	円形	0.32 × 0.29	53	平坦	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	
29	T 7 c1	N - 80° - W	楕円形	1.40 × 1.16	28	平坦	外傾	人為	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
30	W7c0	-	円形	0.54 × 0.50	56	有段	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	
31	W7d9	N-71°-E	楕円形	2.05 × 1.35	56	平坦	外傾	自然	-	
32	W7d0	N-30°-E	不定形	1.54 × 1.46	56	皿状	外傾	自然	-	本跡→PG 2 P 39
33	W8e2	-	円形	1.32 × 1.26	80	平坦	外傾	-	-	本跡→SB 9・PG 2 P 23
37	V7d7	N-77°-W	[楕円形]	(0.60) × 0.58	40	平坦	外傾	人為	土師器	
38	V7e6	N-75°-W	[楕円形]	(0.70) × 0.55	13	皿状	外傾	人為	-	PG 3 P 32 →本跡
39	V7d6	N-65°-E	[楕円形]	(0.87) × 0.57	8	平坦	外傾	人為	-	PG 3 P 32 →本跡
40	V7e6	N-7°-E	[楕円形]	0.55 × (0.38)	14	皿状	外傾	人為	-	
42	V7c6	N-15°-W	[楕円形]	1.24 × (0.90)	20	平坦	外傾	人為	-	PG 3 P 25 →本跡 → PG 3 P 24
43	V7c6	N-40°-E	楕円形	1.04 × 0.64	21	平坦	外傾	人為	-	PG 3 P 27 →本跡 → PG 3 P 28
45	U7i7	N-66°-E	楕円形	0.82 × 0.70	48	平坦	外傾	人為	-	
47	U7j6	N-42°-W	[長方形]	1.64 × (0.56)	22	平坦	外傾	人為	-	PG 3 P 46 →本跡 → SK48
48	U7j6	N-18°-W	長方形	1.60 × 0.62	16	平坦	外傾	人為	-	SK47 →本跡 → SK49・PG 3 P 33・34
49	U7j6	N-3°-E	長方形	1.64 × 0.66	16	平坦	外傾	人為	-	SK48 →本跡 → SK50・51
50	U7j6	N-77°-W	楕円形	0.70 × 0.36	10	平坦	外傾	人為	-	SK49 →本跡
51	U7i6	N-20°-W	[長方形]	[1.54] × [0.56]	4	平坦	外傾	人為	-	SK49 →本跡
53	U7i5	N-0°	長方形	2.15 × 0.80	30	平坦	外傾	人為	土師器	
54	V7d6	N-8°-W	楕円形	0.52 × 0.46	58	平坦	ほぼ直立	-	土師器, 須恵器	
55	V7c6	N-76°-W	[楕円形]	(0.72) × 0.40	94	平坦	直立	埋土・柱痕跡	-	PG 3 P 23 →本跡
58	T7g3	-	円形	0.60 × 0.56	24	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
59	T7h3	N-30°-W	楕円形	0.75 × 0.64	30	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	
62	U7g4	N-79°-E	[隅丸長方形]	(1.03) × (0.78)	11	平坦	外傾	人為	-	本跡→SK64
63	U7h4	N-3°-W	[隅丸長方形]	(1.66) × 0.89	25	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 陶器	本跡→SK64
64	U7g4	N-83°-W	[隅丸長方形]	(2.30) × 1.03	25	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SB12 A・B, SK62・63 →本跡→SK66
65	U7g5	N-9°-W	隅丸長方形	2.54 × 0.73	20	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK64・66
66	U7g5	N-75°-E	隅丸長方形	1.76 × 0.74	13	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SK64・65 →本跡
68	U7g5	N-1°-E	長方形	2.82 × 0.86	16	平坦	外傾	人為	土師器	SK69 →本跡
69	U7g5	N-9°-W	長方形	3.68 × 0.93	10	平坦	外傾	人為	土師器	SB12 →本跡→SK68
70	U7h7	N-6°-W	[長方形]	[1.78] × [0.80]	13	平坦	外傾	人為	土師器	
72	T7h1	N-16°-E	不定形	0.97 × 0.85	19	平坦	ほぼ直立 外傾	自然	-	
73	T7i3	N-5°-W	楕円形	0.90 × 0.66	14	平坦	ほぼ直立	自然	-	
74	T7h4	-	円形	0.64 × 0.60	37	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
75	T7g1	N-42°-E	楕円形	0.53 × 0.47	28	平坦	ほぼ直立	自然	土師器, 須恵器	
76	T7h1	N-52°-E	楕円形	0.60 × 0.50	37	平坦	ほぼ直立	埋土・柱痕跡	-	
77	U7a2	N-62°-W	楕円形	0.60 × 0.47	27	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	
78	U7j3	N-11°-W	楕円形	0.82 × 0.67	29	平坦	外傾	自然	土師器	
79	U7b3	N-3°-W	隅丸長方形	1.32 × 0.86	15	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器	
80	U7a2	N-11°-E	[楕円形]	0.66 × (0.42)	32	平坦	ほぼ直立	人為	-	本跡→SH 2
81	U7h6	N-7°-E	長方形	2.12 × 0.82	29	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	本跡→SK82
82	U7h6	N-7°-W	長方形	2.10 × 0.59	10	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	SB12 A・B, SK81 →本跡
83	U7h6	N-5°-E	長方形	1.96 × 0.76	34	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	本跡→SK84
84	U7h6	N-1°-E	長方形	3.13 × 0.89	40	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	SK83・85 →本跡
85	U7h6	N-3°-E	長方形	3.06 × 0.90	46	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	本跡→SK84
86	U7f7	N-1°-E	[長方形]	(2.44) × (0.77)	25	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	本跡→SK92
87	U7f6	N-9°-E	長方形	2.22 × 0.68	14	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器, 陶器	SB12 A・B →本跡
88	U7f5	N-9°-E	長方形	2.47 × 0.86	13	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SB12 A・B →本跡 → SK137・144

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
89	U 7 f6	N - 1° - E	[隅丸長方形]	1.82 × 0.54	12	平坦	外傾	人為	土師器	SB12 A・B→本跡 →SK90
90	U 7 f6	N - 2° - W	長方形	3.10 × 0.87	22	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	本跡→SK91・136
91	U 7 f6	N - 2° - W	長方形	2.02 × 0.65	35	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SK90→本跡
92	U 7 g7	N - 1° - E	[長方形]	(3.02) × 0.88	46	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SK86→本跡
93	U 7 e4	N - 4° - W	長方形	2.30 × 0.79	57	平坦	直立	人為	土師器, 須恵器	
94	U 7 e4	N - 84° - E	隅丸長方形	1.32 × 0.94	26	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	
95	U 7 e3	N - 87° - E	(方形)	(0.76) × 0.74	18	皿状	ほぼ直立 外傾	人為	-	
97	U 7 e5	N - 86° - E	長方形	1.45 × 0.76	19	平坦	外傾	-	土師器, 須恵器	
99	U 7 d4	N - 82° - E	楕円形	1.16 × 1.01	17	平坦	ほぼ直立	自然	-	SI12・UP 7→ 本跡
100	U 7 c3	N - 58° - E	楕円形	1.86 × 1.26	32	平坦	直立	人為	土師器, 須恵器	SI12→本跡
101	T 7 i1	N - 67° - E	楕円形	0.71 × 0.60	54	平坦	直立	人為	-	
102	T 7 j3	N - 72° - W	楕円形	0.61 × 0.52	29	皿状	外傾	人為	土師器	SI10→本跡
103	T 7 j3	N - 75° - W	楕円形	0.68 × 0.48	24	皿状	外傾	人為	土師器	
104	U 7 c3	N - 52° - W	隅丸長方形	2.00 × 1.19	28	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器, 砥石	
105	U 7 a3	N - 90° - E	楕円形	0.52 × 0.38	38	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器	
107	U 7 b2	N - 8° - E	[楕円形]	[1.24] × 1.04	25	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SH 2→本跡→SK108
108	U 7 a2	-	円形	0.51 × 0.49	38	平坦	外傾	人為	土師器	SK107→本跡
109	T 7 j2	N - 33° - E	楕円形	0.68 × 0.59	27	平坦	外傾	人為	土師器	
110	T 7 j3	N - 48° - E	楕円形	0.73 × 0.64	39	平坦	外傾	人為	土師器	
112	S 6 h8	N - 18° - W	隅丸長方形	1.81 × 0.90	27	平坦	外傾	人為	-	
113	S 6 i8	N - 2° - E	隅丸長方形	2.27 × 0.84	34	平坦	外傾	人為	-	
114	S 6 h9	N - 1° - E	隅丸長方形	2.12 × 0.98	26	平坦	外傾	外傾	-	
115	S 6 g7	N - 7° - E	隅丸長方形	1.86 × 0.85	12	皿状	外傾	人為	土師器	SK120→本跡
116	S 6 h8	N - 19° - E	不定形	1.52 × 1.34	92	有段	ほぼ直立	人為	-	
117	S 6 h9	N - 2° - E	隅丸長方形	3.41 × 0.84	30	平坦	外傾	人為	-	本跡→SK118・121
118	S 6 h9	N - 2° - E	隅丸長方形	2.48 × 0.76	14	平坦	外傾	人為	-	SK117→本跡→SK119
119	S 6 i8	N - 2° - E	隅丸長方形	2.07 × 0.78	16	平坦	外傾	人為	土師器	SK118→本跡
120	S 6 g7	-	円形	1.04 × 0.99	26	平坦	外傾	人為	-	本跡→SK115
121	S 6 i9	-	円形	1.20 × 1.12	37	平坦	外傾	人為	-	SK117→本跡
123	S 6 d6	-	円形	0.38 × 0.36	46	皿状	ほぼ直立	埋土・ 柱痕跡	土師器	
124	S 6 c5	N - 14° - E	楕円形	0.50 × 0.40	43	皿状	ほぼ直立	埋土・ 柱痕跡	-	
125	S 6 c5	-	円形	0.34 × 0.34	26	皿状	ほぼ直立	-	-	
126	S 6 c5	-	円形	0.40 × 0.40	30	皿状	ほぼ直立	-	-	
127	S 6 e6	-	円形	0.42 × 0.40	20	皿状	ほぼ直立	-	-	
134	U 7 h6	-	円形	0.80 × 0.80	42	平坦	ほぼ直立	-	-	
135	U 7 g6	-	円形	0.71 × 0.71	27	平坦	ほぼ直立	-	土師器	
136	U 7 g6	-	円形	0.53 × 0.53	36	平坦	外傾	-	-	
137	U 7 f5	N - 60° - E	楕円形	0.43 × 0.33	23	平坦	ほぼ直立 外傾	-	土師器, 須恵器	SK90→本跡
138	U 7 g5	N - 70° - E	長方形	0.62 × 0.52	27	平坦	外傾	-	土師器	SK88→本跡
139	U 7 g5	N - 53° - W	楕円形	0.56 × 0.49	37	平坦	ほぼ直立 外傾	-	土師器, 須恵器	
140	U 7 g5	-	円形	0.60 × 0.62	22	平坦	外傾	-	-	
141	U 7 f5	N - 22° - E	方形	5.90 × 0.50	20	平坦	ほぼ直立	-	土師器	
142	U 7 e4	N - 61° - E	楕円形	0.60 × 0.49	58	皿状	ほぼ直立	-	土師器, 鉄滓	
143	U 7 f6	-	円形	0.33 × 0.32	33	平坦	ほぼ直立	-	-	
144	U 7 f5	-	円形	0.34 × 0.34	35	平坦	ほぼ直立	-	土師器	SK88→本跡
145	U 7 f6	-	円形	0.46 × 0.44	66	皿状	ほぼ直立	-	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
146	U 7 f6	N - 84° - E	隅丸長方形	0.72 × 0.58	54	皿状	外傾	-	須恵器	SK147 との新旧不明
147	U 7 f6	N - 45° - W	楕円形	0.84 × 0.72	32	平坦	ほぼ直立	-	土師器	SK146 との新旧不明
148	U 7 f6	N - 65° - W	隅丸長方形	0.84 × 0.57	32	平坦	ほぼ直立	-	-	
149	U 7 e6	-	円形	0.64 × 0.62	50	皿状	ほぼ直立 外傾	-	-	
151	R 6 h1	N - 88° - W	隅丸長方形	1.92 × 0.78	14	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
152	R 6 h4	N - 5° - E	隅丸長方形	2.00 × 0.64	12	平坦	外傾	人為	土師器	
153	R 6 h1	N - 1° - W	楕円形	0.42 × 0.32	38	皿状	直立	人為	須恵器	
154	R 6 g1	N - 34° - W	不明	1.38 × (0.42)	34	平坦	直立	人為	土師器	
155	R 5 g0	N - 33° - W	[方形・長方形]	0.57 × (0.30)	20	平坦	直立	人為	土師器	
156	R 5 f0	N - 27° - W	楕円形	0.52 × 0.38	12	皿状	ほぼ直立	自然	土師器	
157	R 5 e0	N - 7° - E	隅丸長方形	1.86 × 0.82	26	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
158	R 6 d2	-	円形	0.75 × 0.72	17	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
159	R 5 e0	N - 9° - W	隅丸長方形	1.20 × 0.70	7	平坦	外傾	人為	土師器	
160	R 6 e3	N - 39° - W	楕円形	0.66 × 0.42	38	皿状	ほぼ直立	自然	土師器	SK161 との新旧不明
161	R 6 e3	-	円形	0.46 × 0.42	38	皿状	直立	人為	-	SK160 との新旧不明
162	R 5 c0	N - 70° - E	隅丸長方形	0.92 × 0.82	14	平坦	外傾	柱痕跡	土師器	
163	R 5 d9	N - 3° - E	[楕円形]	1.15 × (0.60)	28	皿状	ほぼ直立 自然 人為	-	-	SI18 →本跡
167	Q 5 j9	N - 11° - E	隅丸長方形	2.67 × 0.88	36	平坦	外傾	人為	土師器	
169	Q 5 f8	N - 2° - E	楕円形	0.70 × 0.44	10	平坦	外傾	自然	-	SB15 →本跡
176	R 6 c1	-	円形	0.82 × 0.77	30	平坦	外傾	人為	-	SI17 →本跡
178	R 5 b0	-	円形	0.88 × 0.81	9	平坦	外傾	自然	-	SB19 →本跡
179	R 5 b9	N - 4° - W	楕円形	0.67 × 0.54	38	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
180	R 5 c9	N - 10° - E	楕円形	1.17 × 0.68	15	皿状	外傾	人為	土師器	
181	R 6 c1	N - 16° - E	楕円形	0.79 × 0.70	25	皿状	外傾	人為	-	
182	R 5 d8	N - 3° - W	楕円形	0.63 × 0.34	20	平坦	外傾	人為	-	
183	R 5 d8	N - 17° - E	楕円形	0.41 × 0.32	23	平坦	外傾	人為	-	
186	Q 5 h7	N - 6° - E	隅丸長方形	2.13 × 0.80	16	平坦	外傾	人為	土師器	
188	R 5 c9	N - 70° - E	楕円形	1.17 × 0.85	48	平坦	ほぼ直立	自然	土師器, 須恵器	SI18 →本跡→SB19
190	R 5 a8	-	円形	0.22 × 0.22	9	平坦	外傾	自然	-	
191	Q 5 i0	N - 31° - W	[楕円形]	(1.35) × (0.35)	27	平坦	外傾	人為	-	
193	R 6 c1	N - 1° - E	楕円形	0.68 × 0.45	26	皿状	外傾	自然	須恵器	SI17 →本跡
194	R 5 a8	-	円形	0.27 × 0.27	14	平坦	外傾	自然	-	
196	Q 5 g6	-	円形	0.63 × 0.58	34	平坦	外傾	人為	-	
199	Q 5 f5	N - 9° - E	長方形	2.92 × 1.00	29	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器, 須恵器	
201	Q 5 f6	N - 8° - E	長方形	3.87 × 0.74	37	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器, 陶器	
202	Q 5 f6	N - 29° - E	楕円形	0.61 × 0.48	4	凹凸	ほぼ直立 外傾	人為	土師器	
203	Q 5 d6	-	円形	0.41 × 0.40	26	平坦	ほぼ直立	人為	須恵器	
204	Q 5 d4	-	円形	1.08 × 1.06	8	平坦	外傾	自然	土師器, 須恵器	SB17 →本跡
206	Q 5 d3	-	円形	0.80 × 0.76	4	平坦	外傾	自然	土師器	
207	Q 5 d3	-	[円形]	0.92 × (0.66)	12	平坦	直立	自然	-	
211	P 5 i3	N - 60° - E	不定形	(1.60) × 1.24	63	平坦	ほぼ直立	人為	-	本跡→SB20
214	Q 5 a2	N - 79° - W	隅丸長方形	2.50 × 0.84	26	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
216	Q 5 g5	N - 31° - W	[不定形]	0.80 × (0.32)	34	凹凸	外傾	人為	-	SK217 →本跡
217	Q 5 g5	N - 18° - E	[楕円形]	0.46 × (0.34)	23	凹凸	外傾	人為	土師器, 須恵器	本跡→SK216
234	Q 5 c4	N - 29° - E	円形	0.35 × 0.34	8	平坦	外傾	人為	-	
246	R 6 f2	N - 27° - E	楕円形	0.65 × 0.46	27	平坦	外傾	柱痕跡 埋土	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
247	P 5 g2	N - 68° - E	長方形	1.14 × 0.94	29	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	
248	P 5 g1	-	円形	0.69 × 0.67	31	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器	
250	Q 5 d4	N - 56° - W	楕円形	0.36 × 0.28	16	皿状	外傾	自然	-	
251	Q 5 c4	-	円形	0.36 × 0.34	15	平坦	外傾	自然	-	
252	P 5 j3	N - 87° - E	[楕円形]	[1.54] × 1.26	35	平坦	外傾	自然 人為	須恵器, 鉄滓	本跡→SE 4・SK253
253	P 5 j3	N - 22° - E	楕円形	1.15 × 1.00	32	平坦	ほぼ直立	自然 人為	土師器, 須恵器	SK252→本跡
254	P 5 i3	N - 67° - E	楕円形	0.66 × 0.39	45	平坦	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	SB20→本跡
255	P 5 f1	N - 8° - E	[楕円形]	(0.86) × 0.78	19	平坦	外傾	人為	-	本跡→SI22
256	P 4 f9	N - 55° - W [隅丸長方形]		(0.58) × 0.32	34	平坦	外傾	人為	-	
257	P 4 f9	N - 47° - E	楕円形	0.33 × 0.28	16	平坦	ほぼ直立	人為	-	
258	P 4 f9	N - 4° - W	[楕円形]	0.70 × (0.40)	24	平坦	直立	人為	-	
260	P 4 f9	N - 53° - W	楕円形	0.77 × 0.45	45	平坦	ほぼ直立	人為	-	
262	P 4 f9	N - 40° - E	楕円形	1.03 × 0.50	18	平坦	外傾	-	土師器	
264	O 4 j8	N - 26° - W	[楕円形]	1.17 × (0.47)	36	平坦	ほぼ直立	人為	-	
265	P 4 a8	N - 14° - E	楕円形	1.62 × 1.39	47	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	-	
266	P 4 a8	N - 10° - E	楕円形	1.40 × 1.24	64	平坦	直立	人為	-	SI26→本跡
267	O 4 j8	N - 83° - E	楕円形	1.23 × 0.90	44	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	-	SI26→本跡
268	P 4 a7	-	円形	1.17 × 1.17	48	平坦	直立	人為	-	SI26→本跡
269	O 4 g6	N - 10° - E	楕円形	0.90 × 0.68	46	有段	ほぼ直立 外傾	人為	-	
270	O 4 g5	N - 23° - E	楕円形	0.84 × 0.73	55	平坦	ほぼ直立	柱痕跡 埋土	-	
271	O 4 f5	-	円形	0.73 × 0.70	39	平坦	直立	柱痕跡 埋土	-	
272	O 4 g5	-	円形	0.73 × 0.72	37	平坦	ほぼ直立	柱痕跡 埋土	土師質土器	
273	O 4 h5	N - 34° - E	楕円形	1.06 × 0.92	37	平坦	外傾	人為	-	
274	O 4 h5	-	円形	1.02 × 0.96	43	平坦	外傾	人為	土師器, 土師質土器	
275	O 4 f4	-	円形	0.78 × 0.77	43	平坦	ほぼ直立	自然 人為	-	
276	O 4 h4	N - 50° - E	楕円形	1.11 × 0.97	39	平坦	ほぼ直立	人為	-	
277	O 4 g4	-	円形	0.78 × 0.76	32	平坦	ほぼ直立	人為	-	
278	O 4 f3	-	円形	1.15 × 1.12	45	平坦	ほぼ直立	人為	-	
279	O 4 g3	N - 26° - W	楕円形	1.20 × (0.90)	36	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	-	
280	O 4 e5	N - 35° - W	楕円形	0.83 × 0.75	40	平坦	ほぼ直立 外傾	自然 人為	-	
281	O 4 g4	-	円形	0.87 × 0.85	38	平坦	外傾	人為	-	
282	O 4 g4	N - 27° - W	楕円形	1.26 × 1.09	46	平坦	外傾	-	-	
283	O 4 g3	-	円形	1.12 × 1.03	34	平坦	ほぼ直立	自然	-	
284	O 4 e3	N - 70° - E	不定形	1.05 × 0.77	29	平坦	外傾	自然 人為	-	
285	O 4 d3	-	不定形	0.88 × 0.88	37	平坦	ほぼ直立 外傾	自然	-	
286	O 4 d4	N - 17° - E	楕円形	2.00 × 0.98	31	平坦	ほぼ直立 外傾	自然	縄文土器	
287	O 4 f4	-	円形	0.82 × 0.81	54	皿状	外傾	自然	陶器	
288	O 4 g4	-	円形	0.82 × 0.81	48	平坦	ほぼ直立	自然	-	
289	O 4 c2	N - 34° - W	楕円形	1.22 × 1.08	49	平坦	外傾	人為	-	
290	N 4 i1	N - 6° - W	楕円形	1.42 × 0.88	43	平坦	外傾	人為	-	
291	N 4 i0	N - 40° - E	不定形	1.42 × 1.13	36	平坦	外傾	自然	-	
292	N 3 c9	N - 24° - E	楕円形	1.36 × 0.92	40	皿状	外傾	自然	須恵器	
293	N 3 c8	N - 77° - W	楕円形	1.15 × 0.70	80	平坦	ほぼ直立	柱痕跡 埋土	-	
294	O 4 j7	N - 52° - E	楕円形	1.58 × 0.77	32	凹凸	外傾	人為	-	SI26→本跡
295	L 3 g3	N - 35° - W	[楕円形]	1.32 × (0.84)	30	凹凸	ほぼ直立	自然	-	
300	M 3 a3	N - 75° - W	不定形	1.74 × 1.60	72	凹凸	ほぼ直立	人為	-	SK301→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
301	M 3 a2	N - 65° - E	(方形)	0.60 × (0.58)	100	平坦	直立	人為	-	本跡→SK300
302	M 3 a3	N - 23° - W	不定形	1.29 × 0.92	86	平坦	ほぼ直立	人為	-	SK303→本跡
303	M 3 a3	N - 36° - E	不定形	1.53 × [1.36]	77	平坦	ほぼ直立	人為	-	本跡→SK302
305	M 3 a3	N - 88° - W	隅丸長方形	1.48 × 0.62	30	平坦	ほぼ直立	自然	-	本跡→SK304
306	M 3 a4	-	円形	1.35 × 1.27	32	平坦	ほぼ直立	人為	-	SK307→本跡
307	M 3 a4	N - 75° - E	隅丸長方形	1.60 × 1.80	40	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	-	本跡→SK306
308	M 3 b3	N - 69° - E	不定形	2.11 × 1.73	48	平坦	外傾	自然 人為	-	
310	M 3 c5	N - 24° - W	不定形	1.51 × (1.21)	107	平坦	直立・ ほぼ直立	人為	-	
312	M 3 g4	N - 75° - W	楕円形	2.33 × 1.16	44	平坦	外傾	自然	-	
313	M 3 g6	N - 9° - W	楕円形	1.52 × 1.33	24	平坦	外傾	自然	-	
314	M 3 g6	N - 26° - E	楕円形	1.09 × 0.74	38	皿状	外傾	自然 人為	-	SK343との新旧不明
316	M 3 i7	N - 10° - E	楕円形	1.68 × 1.14	24	平坦	外傾	自然	-	
339	N 3 a8	N - 9° - E	楕円形	0.55 × 0.50	46	凹凸	ほぼ直立	-	-	
340	L 3 i1	N - 41° - E	楕円形	0.94 × 0.78	51	平坦	ほぼ直立	-	-	
341	L 3 j1	N - 30° - E	[楕円形]	0.48 × (0.20)	66	平坦	直立	-	縄文土器	
342	M 3 g4	N - 5° - E	楕円形	0.70 × 0.54	37	平坦	ほぼ直立	-	土師器	
343	M 3 g6	-	円形	0.59 × 0.54	48	平坦	外傾	-	土師質土器	SK314との新旧不明
346	P 4 d9	-	円形	1.09 × 1.06	40	平坦	ほぼ直立	人為	-	

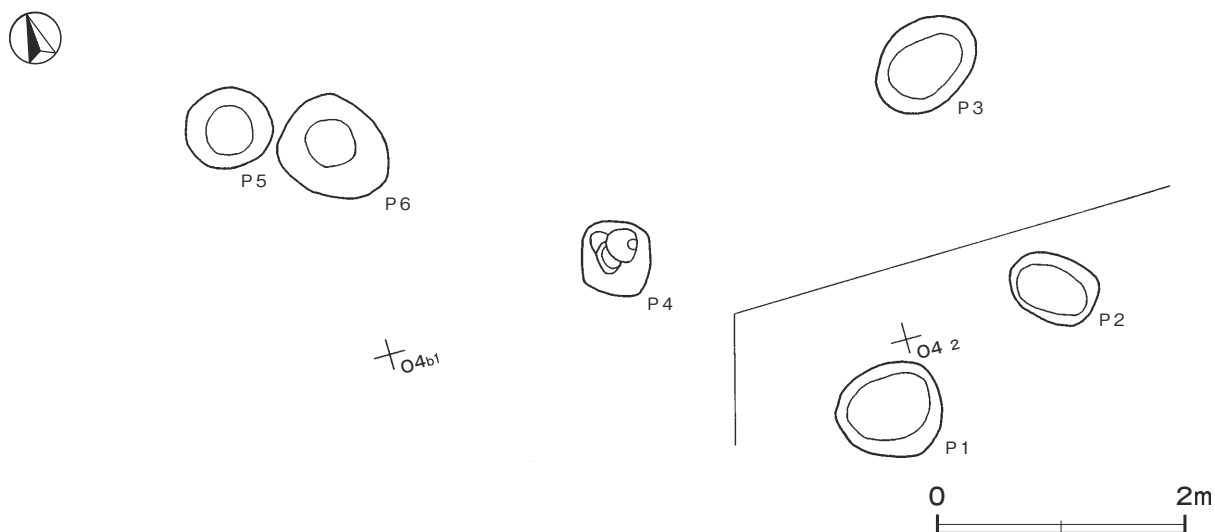
(2) ピット群

第5号ピット群 (第185図)

**位置** 調査区北西部のO 3 a0～O 4 c2区、標高39mほどの台地平坦面に位置している。

**規模と形状** 南北11.28m、東西10.46mの範囲に、ピット6か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

**所見** 時期は、土器が出土しなかったことや周辺の遺構が時期不明であることから、不明である。ピットの分布状況から、建物跡は想定できない。



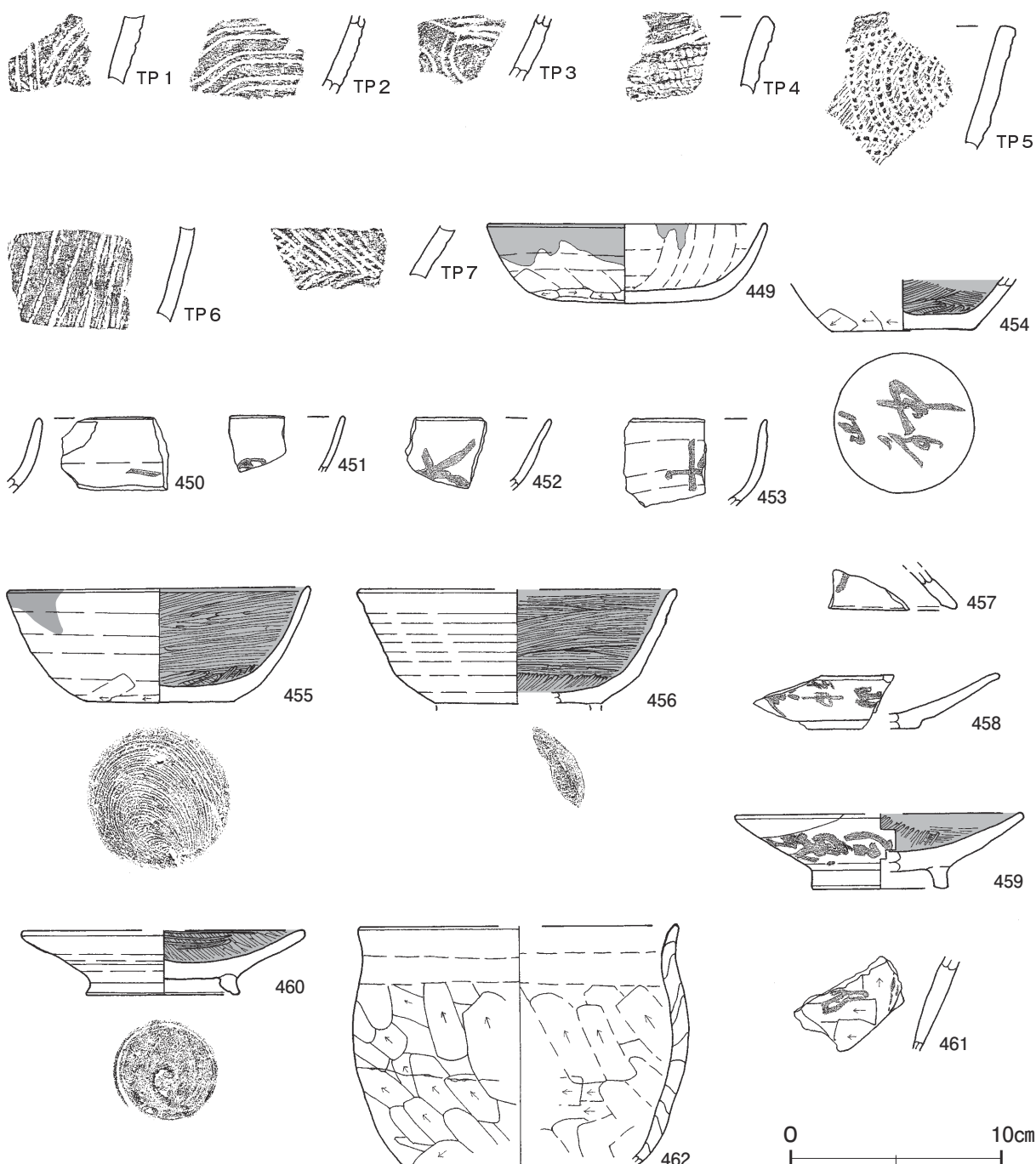
第185図 第5号ピット群実測図

第5号ピット群ピット計測表

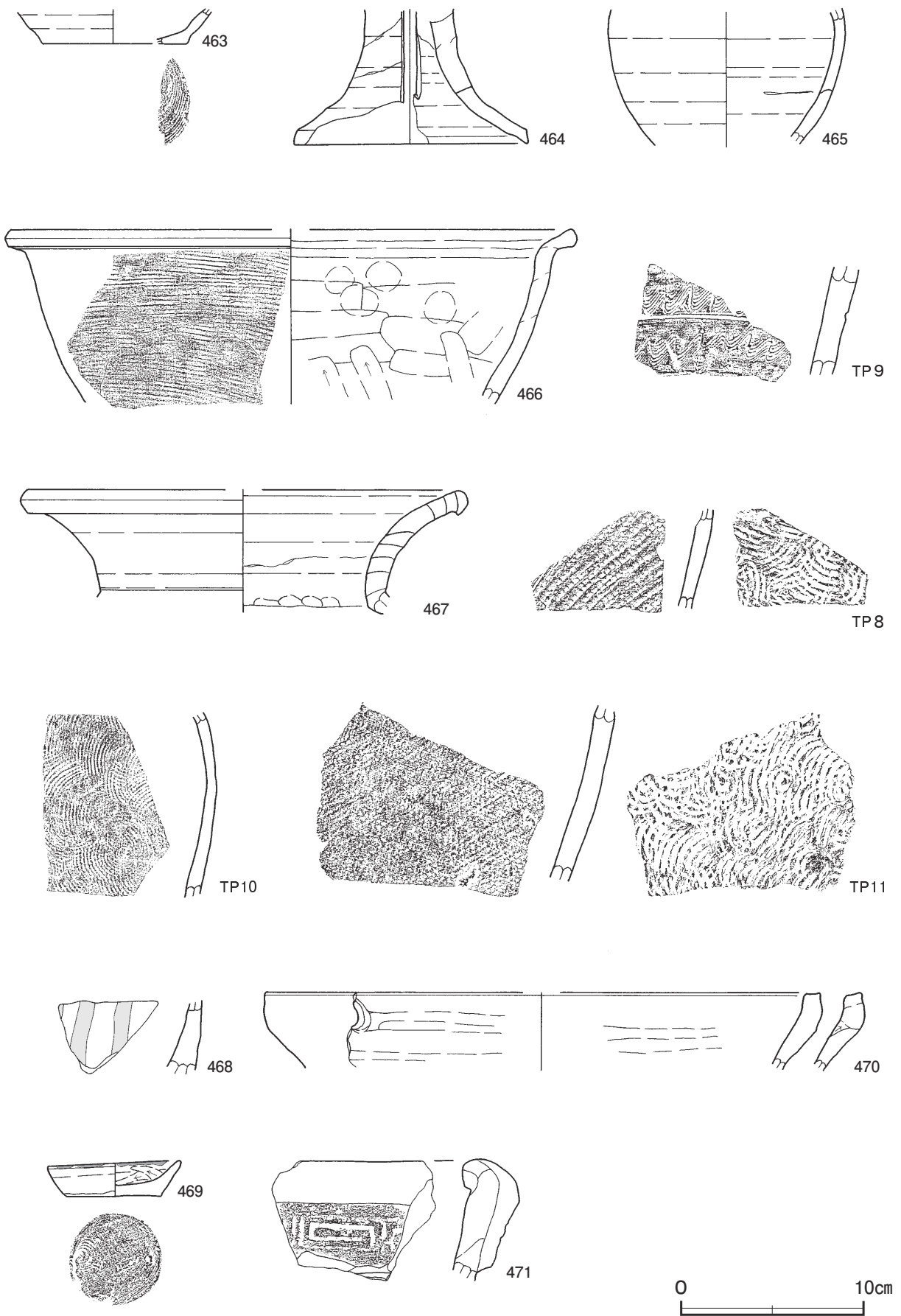
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	O 4 d1	楕円形	82	76	27	3	O 4 a2	楕円形	86	65	42	5	O 3 a0	楕円形	70	61	71
2	O 4 c2	楕円形	70	51	39	4	O 4 a1	長方形	66	62	59	6	O 4 a1	楕円形	91	77	34

(3) 遺構外出土遺物 (第 186 ~ 188 図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については、実測図及び遺物観察表を掲載する。

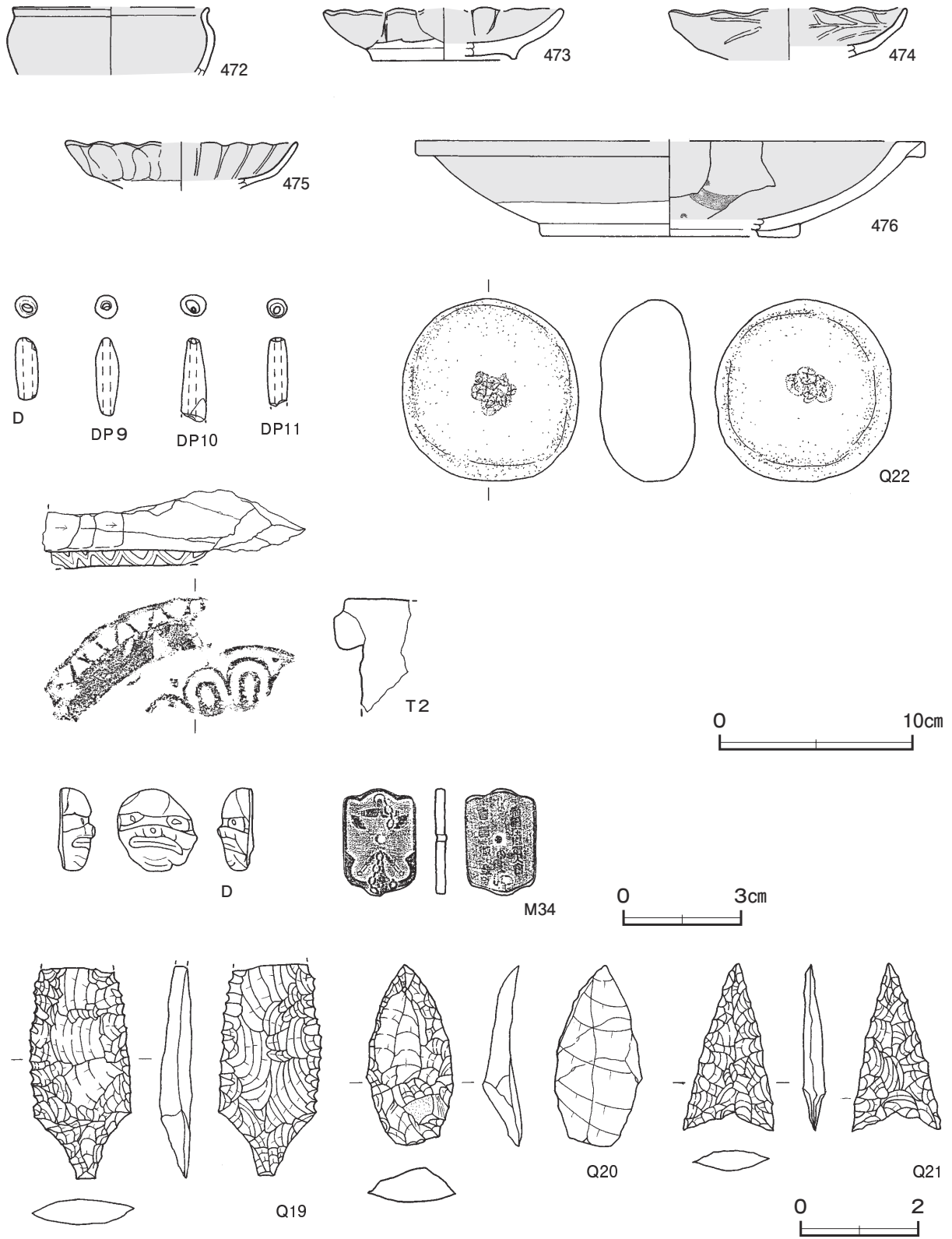


第 186 図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 187 図 遺構外出土遺物実測図(2)





第 188 図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第 186 ~ 188 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	外面半裁竹管による平行沈線	調査区北西部表土	5% 浮島 I 式
TP 2	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	外面半裁竹管による平行沈線	調査区北西部表土	5% 浮島 I 式
TP 3	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	外面半裁竹管による平行沈線	調査区北西部表土	5% 浮島 I 式
TP 4	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	外面 RL 単節縄文地文、口縁部に沿ってナデ消し後沈線 内面斜位の磨き	表土	5% 堀ノ内 I 式
TP 5	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	灰黄褐	普通	波状口縁 外面半裁竹管による条線施文後連続する爪形文の描画	表土	5% 諸磯 c 式 ~ 十三善提
TP 6	弥生土器	広口壺	-	(4.5)	-	長石・橙色粒子	にぶい黄橙	普通	撚り糸文	表土	5% 後期後葉
TP 7	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	-	長石・石英・黒色粒子	灰黄褐	普通	附加条一種附加 2 条	表土	5% 後期後葉
449	土師器	坏	13.0	3.8	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面横位から縦位へ連続するナデ 底部手持ちへラ削り	UP 7 覆土中	95% 煤付着
450	土師器	坏	-	(3.5)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	灰黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	UP 7 覆土中	10% PL37 「□」 墨書
451	土師器	坏	-	(2.6)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	内面横位の磨き 黒色処理	UP 4 覆土中	5% PL36 「田。」 墨書
452	土師器	坏	-	(3.9)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	内面横位の磨き 黒色処理	SI12 覆土中	5% PL37 「□」 墨書
453	土師器	坏	-	(4.1)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	内面横位の磨き 黒色処理	UP 5 覆土中	5% PL37 「大。」 墨書
454	土師器	坏	-	(2.4)	6.6	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部下端手持ちへラ削り 体部内面横・斜位の磨き 底部二方向の削り 底部内面二方向の磨き	調査区中央部表土	30% PL37 「山神」 墨書
455	土師器	坏	14.0	5.4	7.0	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちによる一方のナデ 体部内面横位の磨き 底部回転糸切り 底部内面二方向の磨き	調査区中央部表土	60% PL29 煤付着
456	土師器	高台付椀	[14.8]	5.3	[7.8]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内面横位の磨き 底部高台部貼付痕 底部内面一方の磨き	調査区中央部表土	20%
457	土師器	蓋	-	(1.8)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	調査区中央部表土	5% PL36 「□」 墨書
458	土師器	皿	-	(2.6)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	内面横位の磨き、黒色処理 底部高台部貼付痕	調査区中央部表土	30% PL37 「山神。」 墨書
459	土師器	皿	[13.4]	3.5	[6.2]	雲母・赤色粒子・白色粒子	灰褐	普通	体部内面二方向の磨き	調査区中央部表土	30% PL37 「宮城。」 墨書
460	土師器	皿	[13.2]	3.0	[7.1]	雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐	普通	体部内面二方向の磨き	調査区中央部表土	50%
461	土師器	鉢	-	(4.5)	-	雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐	普通	体部外面手持ちへラ削り 体部内面ナデ	調査区中央部表土	5% 「□□」 墨書
462	土師器	小形甕	[14.8]	(11.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦・斜位の削り 体部内面横・斜位のナデ 輪積み痕	調査区中央部表土	10%
463	須恵器	坏	-	(1.9)	[7.8]	長石・石英・白色粒子	灰黄褐	普通	底部回転糸切り	調査区中央部表土	5%
464	須恵器	高盤	-	(7.3)	[12.6]	長石・石英・黒色粒子	灰黄褐	良好	透かし部へラ削りによる穿孔、粘土紐巻き上げ痕	調査区中央部表土	30% 堀ノ内窯
465	須恵器	長頸瓶	-	(7.2)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	輪積み痕 自然袖付着	SB 6 覆土中	10% 堀ノ内窯
466	須恵器	鉢	[30.2]	(9.4)	-	長石・黒色粒子・白色粒子	灰	良好	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位の平行叩き 体部内面横・斜位のナデ、指頭痕	調査区中央部表土	10% 堀ノ内窯
467	須恵器	甕	[23.2]	(6.6)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	頸部外面自然袖付着 頸部内面連続する指頭痕	調査区中央部表土	5% 堀ノ内窯
TP 8	須恵器	甕	-	(5.4)	-	長石・石英・黒色粒子	暗灰黄	良好	外面格子状の叩き 内面同心円状の当て具痕	調査区中央部表土	5% 堀ノ内窯
TP 9	須恵器	甕	-	(5.8)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	外面沈線による区画後 7 条一単位の波状文	調査区中央部表土	5% 堀ノ内窯
TP10	須恵器	甕	-	(10.1)	-	長石・雲母・黒色粒子	灰	良好	外面同心円状の叩き 内面横位のナデ	調査区中央部表土	5% 堀ノ内窯
TP11	須恵器	甕	-	(9.2)	-	長石・雲母・黒色粒子	オリーブ黒	良好	外面二方向の平行の叩き 内面同心円状の当て具痕	調査区中央部表土	5% 堀ノ内窯
468	灰釉陶器	長頸瓶	-	(4.1)	-	長石・黒色粒子	灰黄	良好	外面漬け掛け	SI12 覆土中	5% 折戸 53 式。
469	土師質土器	小皿	7.0	1.9	5.0	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面横位から連続する斜位のナデ 底部回転糸切り	調査区北西部表土	95% PL39 煤付着
470	土師質土器	鉢	[29.1]	(4.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面からの穿孔	表土	5%
471	土師質土器	甕	-	(6.5)	-	石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 雷文押捺	表土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
472	陶器	碗	[10.0]	(3.5)	-	緻密・褐/黒	ロクロナデ 禾目天目 漬け掛け	鉄釉	瀬戸・美濃	調査区北西部表土	10% PL38
473	陶器	皿	[12.4]	(2.7)	[7.4]	緻密・浅黄	口縁から体部外・内面型打菊花 底部削りだし 漬け掛け	灰釉	瀬戸・美濃	調査区北西部表土	20%
474	陶器	皿	[12.0]	(2.6)	-	緻密・浅黄	型打木葉 漬け掛け	灰釉	瀬戸・美濃	調査区北西部表土	20% PL38
475	陶器	皿	[11.8]	(2.4)	-	緻密・浅黄	型打菊花 漬け掛け	灰釉	瀬戸・美濃	調査区北西部表土	20% PL38
476	陶器	鉢	[26.0]	4.9	[13.0]	緻密・浅黄/青灰	ロクロナデ 体部内面草花文絵付け 底部高台貼付	灰釉・呉須	瀬戸・美濃	調査区北西部表土	10%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 8	管状土鉢	3.2	1.2	0.5	3.94	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	二方向からの穿孔、ナデ	調査区中央部表土	PL40
DP 9	管状土鉢	4.0	1.2	0.4	5.17	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	二方向からの穿孔、ナデ	調査区中央部表土	PL40

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP10	管状土錘	(4.3)	1.3	0.3	(6.69)	長石・赤色粒子	にぶい褐	二方向からの穿孔, ナデ	調査区中央部表土	PL40
DP11	管状土錘	(3.5)	1.1	0.4	(4.02)	長石・雲母・赤色粒子	灰褐	二方向からの穿孔, ナデ	調査区中央部表土	PL40
DP12	泥面子	2.1	2.0	1.0	2.98	赤色粒子・白色粒子	橙	表面型押し作り 裏面指頭痕	調査区北西部表土	PL39

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 19	有基尖頭器	(3.6)	1.8	0.6	3.24	ガラス質安山岩	縦長剥片を素材とした両面調整 2側面から鋸刃状に細かい連続する二次調整 凸基	調査区南東部表土	PL41
Q 20	削器	3.1	1.5	0.7	2.01	頁岩	縦長剥片を素材とした片面調整 2側面から細かい連続する二次調整	調査区南東部表土	PL41
Q 21	石鏃	2.8	1.5	0.3	1.03	チャート	両面調整 周辺から細かい連続調整 凹基	調査区中央部表土	PL41
Q 22	敲石	9.3	9.0	4.9	608.0	安山岩	表・裏面中央部に敲き痕	UP 6 覆土中	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 34	徽章	2.7	1.8	0.25	9.27	真鍮	鋳造 表面碇 裏面「帝國在郷軍人會 ㊦ 會員徽章」銘	調査区北西部表土	PL42

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T 2	瓦	軒丸瓦	(3.9)	(13.2)	(5.8)	長石・石英	にぶい橙	普通	軒部貼付後ナデ, 瓦当部素縁単弁蓮華文, 素縁圈帯部外周に鋸歯文	調査区中央部表土	PL40

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の調査では、竪穴建物跡 32 棟、掘立柱建物跡 22 棟、方形竪穴遺構 2 基、井戸跡 6 基、大型円形土坑 1 基、墓坑 1 基、墓坑群 1 か所、地下式坑 7 基、柱穴列 8 条、道路跡 2 条、土坑 245 基、溝跡 3 条、ピット群 6 か所を確認した。これらは時期不明の遺構を除けば、奈良時代、平安時代、室町時代、江戸時代の遺構で、当台地上に断続的な人々の生活が営まれてきたことを物語っている。また、遺構外の出土遺物には僅かながら、有基尖頭器や削器などの石器類、縄文土器、弥生土器が含まれていることから、当遺跡の周辺に旧石器時代の狩り場や縄文・弥生時代の集落跡が想定できる。出土遺物を伴わないことから、時期不明の遺構として扱った第 31・32 号土坑は、奈良時代の第 11 号掘立柱建物や第 2 号ピット群に掘り込まれており、奈良時代より前時代の遺構であることも考えられる。

しかし、発掘調査をおこなった範囲内では、竪穴建物跡や掘立柱建物跡などにおいて、遺物を伴うことが確認できたのは奈良時代からであり、このことから律令期に創設された集落と判断できる。

以下、奈良時代から江戸時代までの当遺跡の様相や特筆される遺構や遺物について記述する。

### 2 奈良時代の様相 (第 189 図)

当時代の遺構は、竪穴建物跡 7 棟、掘立柱建物跡 7 棟、大形円形土坑 1 基、柱穴列 4 条、土坑 9 基、ピット群 3 か所を確認した。遺構の分布状況や出土遺物からは、8 世紀前葉から中葉と 8 世紀中葉から後葉に分けられることから、8 世紀前半と後半の 2 時期に区分して、集落の様相を述べる。

#### 第 I 期

当期の主な遺構は、第 2・3・12 号竪穴建物跡、第 2～4・9・11・12 A・12 B 号掘立柱建物跡、第 1 号

大型円形土坑，第2号柱穴列で，調査区南東部及び中央部の南域に分布している。竪穴建物跡や掘立柱建物跡，第2号柱穴列の配置から，A群とB群の2群で構成されていたと考えられる。

A群は，長軸7.92 m，短軸7.62 mの第12号竪穴建物跡と庇が付設される第12 A・B号掘立柱建物跡を中心とし，長軸5.20 m，短軸5.10 mの第3号竪穴建物跡を含む一群である。第12号竪穴建物跡と第12号掘立柱建物跡については，1～2回の柱の立て替え，もしくは建物全体の建て替えが確認できている。特に第12号掘立柱建物跡の身舎では，梁行の柱間寸法が1.80 m（6尺）から2.10 m（7尺）へ拡張され，面積も24.84㎡から28.98㎡に大型化している。第12号竪穴建物跡の出土遺物の中には，土製や石製の紡錘車4点や刀子，手鎌各1点が含まれ，B群からは出土していない製品がみられる。主に覆土中層から下層にかけて出土しており，埋没の早期段階で投棄されたものと考えられることから，第12号竪穴建物の戸主や，A群との関係が深い製品であると推察できる。

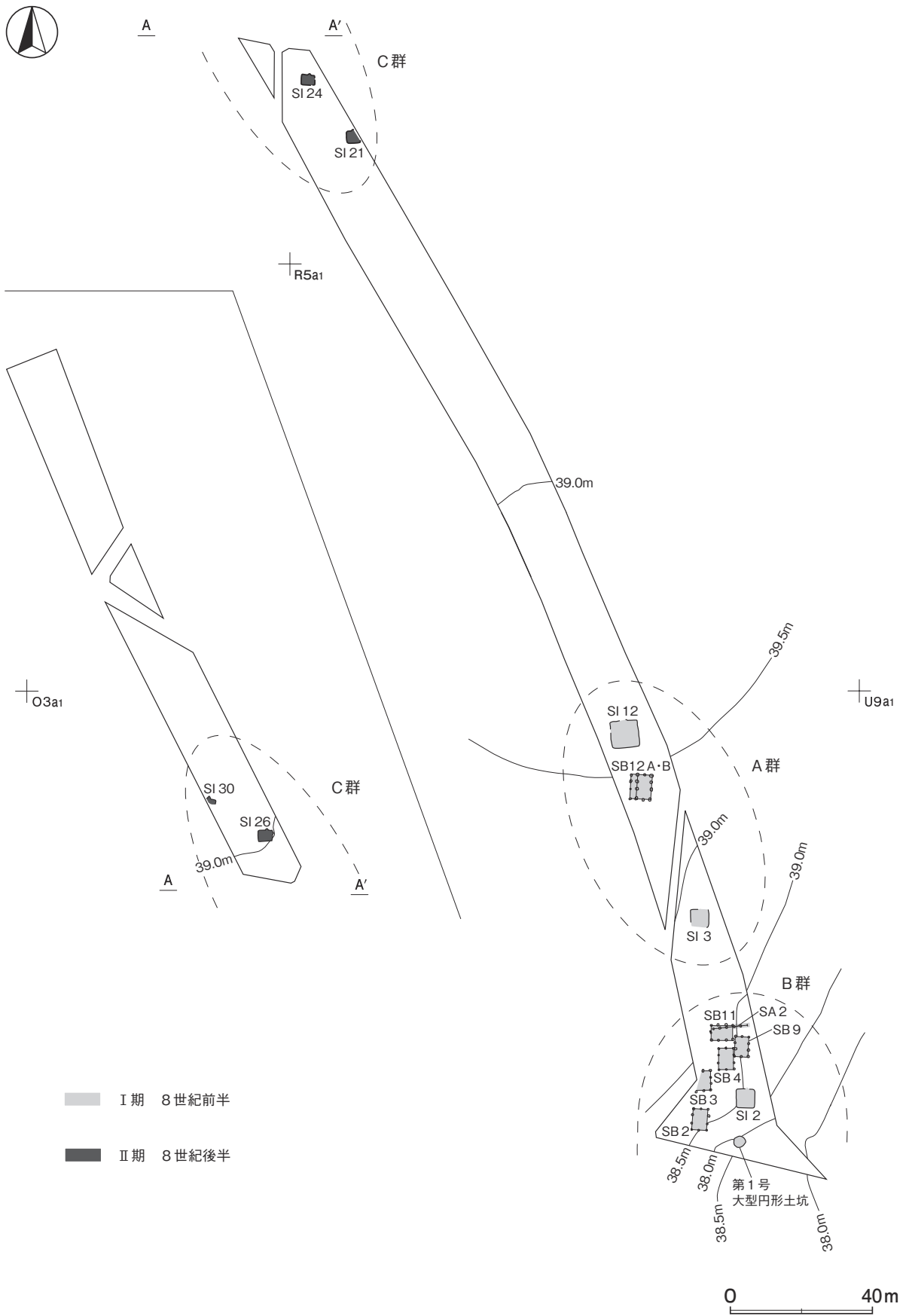
B群は，長軸5.36 m，短軸5.27 mの第2号竪穴建物跡を中心として，掘立柱建物跡群が分布する一群である。掘立柱建物跡の面積は，22㎡台の第3・9号掘立柱建物跡，25㎡台の第2・4・11号掘立柱建物跡に分けられる。これらのうち，柱穴間の重複関係が認められるのは，第4号掘立柱建物跡と第9号掘立柱建物跡で，後者から前者に建て替えられており，掘立柱建物の面積も増加している。こうした傾向はA群の第12号掘立柱建物跡と同様に，8世紀前半においては，時期が下るにつれて，掘立柱建物が大型化していったものと考えられる。

A群とB群は，第2号柱穴列によって区切られると考えられる。第2号柱穴列の配列方向は，N-85°-Eで，東部は調査区域外へ延びている。第11号掘立柱建物に掘り込まれているが，当掘立柱建物がA群の区域に大きく張り出すことはなく，第2号柱穴列の配列にほぼ沿って建てられていることから，A群とB群の区画は，第2号柱穴列が廃絶された後も，踏襲されていたものと考えられる。

B群と似た遺構の配置が認められる上宿遺跡では，竪穴建物跡群が穎稻などを収納する「屋」として利用されたと考えられている<sup>1)</sup>。B群は掘立柱建物跡群の存在から倉庫群の区域と考えられ，倉庫群に囲まれる第2号竪穴建物跡は，その管理機関と推察できる。A群は，B群の管理機関や邸宅と考えられるが，第12号竪穴建物跡と第12号A・B号掘立柱建物跡を主として，第3号竪穴建物跡が配されていることから，邸宅に関わる区域の可能性が高い。このことは，官衙関連の掘立柱建物跡とは異なり，身舎の面積が50㎡以下であること<sup>2)</sup>や，当期に墨書土器などの文字資料が出土していない点に裏付けされ，限りなく一般的集落に近いと考えられる。当遺跡が律令期に創設された集落と考えられることから，養老7（723）年の三身一身法や天平15（743）年の壘田永年私財法の影響下，当地の壘田開発に関わった人物の集落と考えられ，A・B群が緩斜面や緩斜面に面した平坦面に位置することから，緩斜面を下った先に壘田の開発地が推測できる。そして，掘立柱建物の身舎の面積が増加していることは，時代が下るにつれ開発地が増加し，生産余剰が増加したためと考えられる。

第1号大型円形土坑は，氷室や井戸などの諸説がある遺構である。当遺構の廃絶は8世紀前葉から中葉であり，A・B群の年代とも一致している。上層の自然堆積層からは，威信財と考えられる猿投産や県内産の長頸瓶や高盤などが出土しており，A・B群によって構成される集落の移転に伴って不必要となった製品が廃棄されたものと考えられる。

出土土器の器種構成は，主に土師器の坏・甕と須恵器の坏・高台付坏・蓋・高盤・短頸壺・長頸瓶・甕・甌で構成される。掲載遺物にみる須恵器の生産地の割合は，新治産が12点，堀ノ内産が8点のほか，猿投産が1点などで，新治産が優勢である。



第 189 図 宮後東原遺跡の奈良時代主要遺構配置図 (第 I・II期)

## 第Ⅱ期

当期の主な遺構は、C群とした第21・24・26・30号竪穴建物跡で、調査区中央部の北域及び北西部の南域に分布している。調査区域外に延びている第21・30号竪穴建物跡を除けば、長軸3.82～4.06 m、短軸2.90～3.42 mである。第Ⅰ期の集落が同じ台地上の南方に位置していることから、北方に移動したものと考えられる。確認できた竪穴建物跡は、8世紀中葉の第24・30号竪穴建物跡、8世紀後葉の第21・26号竪穴建物跡の4棟のみであることから、当期の集落の中心部にあたるかは不明である。集落の移動については、当期の遺構が台地の北方に移動していることからすれば、台地の縁辺に沿って形成されている低地部の開発が、台地北側に移動したことに起因するものと推測できる。

出土土器の器種構成は、土師器では坏がほとんど認められず、甕が主体となる。ただし、8世紀後葉の第26号竪穴建物跡からは、ロクロ成形で摘み部をもつ土師器の蓋が出土していることから、須恵器の技法を用いた土師器の製品が、この頃に出現した可能性がある。一方、須恵器の製品は多量に出土している。盤が出土していることから、第Ⅰ期にみられる坏・高台付坏・蓋の供膳具に加わっている。掲載遺物にみる須恵器の生産地の割合は、新治産が4点、堀ノ内産が12点で、堀ノ内産が優勢に転じている。

### 3 平安時代の様相（第190・191図）

当時代の遺構は、竪穴建物跡25棟、掘立柱建物跡9棟、井戸跡2基、柱穴列2条、土坑12基、ピット群1か所を確認した。出土遺物から9世紀前葉・中葉・後葉・10世紀前葉の4時期に区分して、集落の様相を述べる。なお、8世紀後葉から継続性が認められることから、時期区分は奈良時代から通し番号を付した。

## 第Ⅲ期

9世紀前葉にあたる第Ⅲ期は、A群からC群の小集団で構成されるものと判断できる。C群は、第Ⅱ期の竪穴建物跡群の分布と重なっていることから、第Ⅲ期から継続しているものと考えられる。また、調査区中央部の中央域と中央部の北域の遺構群との間には、各期に空闲地が認められることから、別群として分けられる可能性もあるが、調査区域の制約から明確にはできない。A群は、B・C群の小集団とは離れた調査区南東部の南域に分布していることから、B・C群の小集団で構成される集落とは別の集落と考えられる。

A群は第1号竪穴建物跡で、調査区南東部の南域に位置している。長軸3.36 m、短軸3.23 mで、出土土器は比較的多く、土師器片272点、須恵器片90点で、円面硯や共に出土した鉄滓1点（30.2 g）が特筆される。

B群の主な遺構は、第11・13号竪穴建物跡で調査区中央部の南域に位置している。第11号竪穴建物跡は長軸2.64 m、短軸2.40 m、第13号竪穴建物跡は長軸3.52 m、短軸3.48 mで、大きさが異なっている。出土土器が比較的多いのは第13号竪穴建物跡で、土師器片238点、須恵器片54点に含まれて、判読できなかった墨書土器1点が検出されている。

C群の主な遺構は、調査区中央部の中央域に分布している第16・19号竪穴建物跡と第19号掘立柱建物跡、調査区中央部の北域に分布している第20・25・27・28・31号竪穴建物跡と第18・20号掘立柱建物跡である。

第16・19号竪穴建物跡は、長軸3.46～3.50 m、短軸3.01～3.42 mで、コーナー部に貯蔵穴や柱穴の可能性のあるピットを有している特徴がみられる。第19号掘立柱建物跡は面積が29.25㎡で、柱穴の平面形が円形もしくは楕円形を呈している。

第19号竪穴建物跡を掘り込んでいることから、第19号竪穴建物跡が先行している。このことから後出の

第16号竪穴建物跡と第19号掘立柱建物跡の構成、もしくは第16・19号竪穴建物跡が先行し、後出の第19号掘立柱建物跡の構成が考えられるが、当群の第Ⅳ・Ⅴ期にみられる建物跡の配置からすれば、前者の構成である可能性が高いと思われる。このことは出土土器の数量からも推測でき、第19号竪穴建物跡から出土した土師器片40点、須恵器片66点に対して、第16号竪穴建物跡は土師器片66点、須恵器片12点で、第16号竪穴建物跡は、土師器の出土量が須恵器を凌駕する第Ⅳ期に近い土器の出土状況を示している。このことから、第16・19号竪穴建物跡は、重複関係がみられないものの、第19号建物跡から第16号建物へ建て替えられたと推定でき、「竪穴建物+掘立柱建物」の構成が、一部の小集団では一般化したと推測できる。

調査区中央部の北域に分布している第25号竪穴建物跡は、大半が調査区域外に延びていることから、南北軸は4.58m、東西軸は3.00mしか確認できなかったが、支柱穴の可能性のあるピットが確認できていることから、他の竪穴建物跡よりは大型である可能性がある。出土土器は土師器片508点、須恵器片215点で、刀子2本が出土している。同群の他の竪穴建物跡やA群からC群の竪穴建物跡と比しても出土遺物が突出していることから、集落内の優位的な人物との関係性が考えられる。第25号竪穴建物跡や調査区域外に延びている竪穴建物跡を除いた竪穴建物跡は、長軸3.29～3.48m、短軸2.57～2.98mである。第18号掘立柱建物跡は面積が17.28㎡で、柱穴の平面形が楕円形もしくは隅丸方形を呈し、第20号掘立柱建物跡は推定面積23.04㎡で、柱穴の平面形が円形もしくは楕円形を呈している。このうち、第20号竪穴建物跡と第18号掘立柱建物跡の配置は、調査区中央部の中央域で想定された第16号竪穴建物跡と第19号掘立柱建物跡の配置に類似し、中央部の北域においても「竪穴建物+掘立柱建物」の構成が認められる。文字資料としては、第28号竪穴建物跡から「大田井」の墨書土器が出土している。

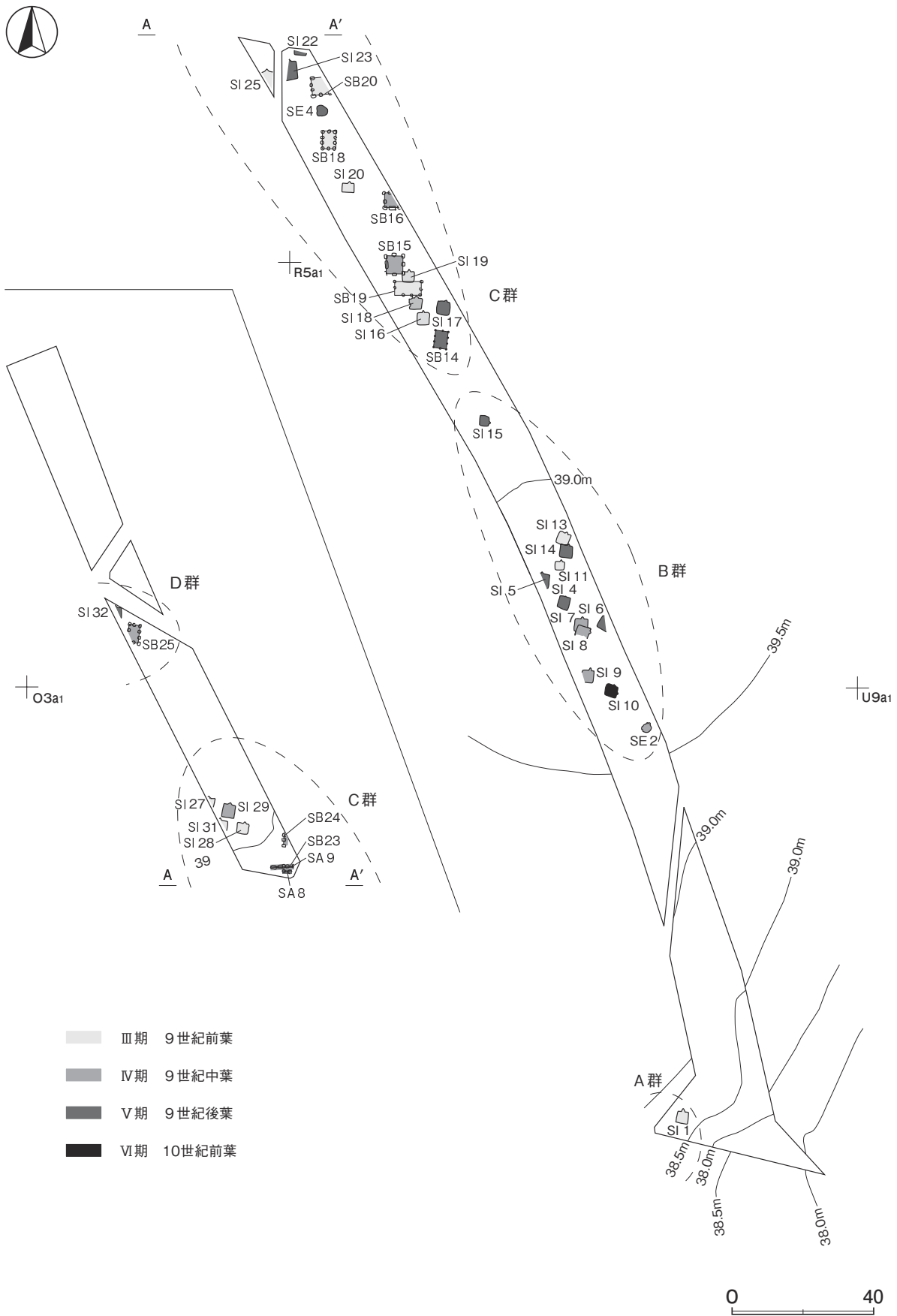
出土土器の器種構成は、煮沸具を主体とした土師器と供膳具を主体とした須恵器で、第Ⅱ期を継承している。しかし、実測ができなかった土師器片には供膳具の数量が第Ⅱ期より増加する傾向がみられ、中には第11号竪穴建物跡のように高台付椀や蓋・皿が含まれていることから、須恵器供膳具と同様の構成が土師器でも確認できる。こうした特徴は、土師器の供膳具が急増する第Ⅳ期の前段階と評価することも可能であるが、破片資料であることから混入の可能性もあり、今後の周辺遺跡における資料との比較検討を要する課題である。掲載遺物からみた須恵器の生産地の割合は、新治産が6点、堀ノ内産が30点のほか、木葉下産や東海産と思われるものが各1点であり、堀ノ内産の優勢が継続している。

このほか、僅かながら文字資料や円面硯、鉄滓が確認できていることから、集落内に識字者が存在したことや近辺で鍛冶関連の生業が開始されたと推測できる。

#### 第Ⅳ期

9世紀中葉にあたる第Ⅳ期は、B群からD群の小集団で構成されると判断できる。このうちB・C群は、9世紀前葉の各群の範囲とほぼ重なっていることから、Ⅲ期から継続しているものと考えられる。

B群の主な遺構は、第7～9号竪穴建物跡と第2号井戸跡で、第Ⅲ期の遺構群からは南域に移動している。これらの竪穴建物跡は長軸3.46～3.70m、短軸3.38～3.53mで、ほぼ同じ規模である。第7号竪穴建物跡と第8号竪穴建物跡は重複関係が認められ、前者が廃絶された後、後者が建てられている。B群の竪穴建物跡や井戸跡からは、他の小集団にはみられない数量の土器が出土している。第7号竪穴建物跡では土師器片779点、須恵器片31点、第8号竪穴建物跡では土師器片1588点、須恵器片144点、第9号竪穴建物跡では土師器片502点、須恵器片21点であり、第2号井戸跡では土師器片1891点、須恵器片105点で、出土量においては土師器が須恵器を凌駕している。また、土師器供膳具の出土量が多い特徴がみられる。



第190図 宮後東原遺跡の平安時代主要遺構配置図（第Ⅲ～Ⅵ期）





文字資料の出土も多く、第7号竪穴建物跡では「井<sub>ナ</sub>」「西門」の墨書土器、第8号竪穴建物跡では「城」「宮城」の墨書土器のほか、判読できなかった墨書土器3点、第9号竪穴建物跡では判読できなかった墨書土器1点、第2号井戸跡では「大田」「山神」「宮城」「大<sub>ナ</sub>」「瓦<sub>ナ</sub>」の墨書土器や「小長谷部継成」のヘラ書、第57号土坑では一つの坏に「福」の墨書と「田」の刻書が共にみられ、第60号土坑では判読できなかった刻書、第129号土坑では「十」状のヘラ書が確認できている。また、第7号竪穴建物跡からは椀形滓1点(464.0g)、第8号竪穴建物跡からは鉄滓1点(32.6g)、第2号井戸跡からは羽口1点、第128号土坑からは羽口2点が出土している。

C群は、調査区中央部の中央域と北西部の南域にかけて分布しており、第Ⅲ期から継続している。

調査区中央部の中央域における主な遺構は第18号竪穴建物跡と第15・16号掘立柱建物跡で、第Ⅲ期の遺構群からは北域に移動している。第16号掘立柱建物跡をC群に含めたが、調査区域外にC群とは別の小集団が存在している可能性もある。

第18号竪穴建物跡は、長軸3.62m、短軸が3.24mで、コーナー部にピットを有しており、前時期からの特徴が継承されている。出土土器は、土師器片320点、須恵器片87点である。第15号掘立柱建物跡は面積24.48㎡、第16号掘立柱建物跡は推定面積17.64㎡で、平面形が楕円形もしくは隅丸長方形を呈する柱穴と布掘りされた柱穴が確認できている。こうした柱穴の掘方をもつ掘立柱建物は、D群でも確認できしており、当期の掘立柱建物の特徴といえる。第18号竪穴建物跡の北西には第15号掘立柱建物跡が存在しており、この配置は第Ⅲ期の第16号竪穴建物跡と第19号掘立柱建物跡の配置に類似しており、「竪穴建物+掘立柱建物」の構成を継承している。

調査区北西部の南域の主な遺構は、第29号竪穴建物跡と第23・24号掘立柱建物跡、掘立柱建物跡の可能性のある第9号柱穴列で、第Ⅲ期の遺構群からは北域に移動している。形状が明確な第29号竪穴建物跡は、長軸3.75m、短軸3.54mで、コーナー部にピットを有しており、当群でみられた竪穴建物と類似点がみられる。出土土器は土師器片63点、須恵器片28点である。

第23号掘立柱建物跡は面積が不明であるが、柱穴の平面形は楕円形もしくは隅丸長方形である。平面形が隅丸長方形もしくは隅丸長方形の柱穴を有する第9号柱穴列と重複しており、建て替えが想定できる。第23号掘立柱建物跡や第9号柱穴列の南西には、第Ⅴ期の第23号竪穴建物跡が位置している。第23号竪穴建物跡は南北軸5.08mで、当遺跡では大型の建物跡である。南壁から1.08m内側の貼床構築層下から壁溝の可能性のある遺構が確認でき、拡張されたと考えられる。このことから拡張前の第23号竪穴建物跡と第23号掘立柱建物跡や第9号柱穴列が「竪穴建物跡+掘立柱建物跡」の構成となる可能性がある。第24号掘立柱建物跡は調査区域外へ延びていることから、面積は不明であるが、柱穴の平面形状が隅丸長方形あるいは隅丸長方形で、布掘りされた柱穴を有している。この特徴は中央部の中央域の15・16号掘立柱建物跡と類似し、第Ⅲ期までの掘立柱建物跡とは異なる様相がみられる。文字資料としては、第18号竪穴建物跡から判読できなかった墨書土器2点、第23号竪穴建物跡の妻柱跡の可能性のある第345号土坑から、判読できなかった墨書土器2点が出土している。

D群の主な遺構は、第25号掘立柱建物跡で調査区北西部に分布している。推定面積は18.36㎡で、柱穴の平面形は隅丸長方形もしくは隅丸長方形である。調査区域内の西側に偏る遺構分布状況から、当群は調査区域の西側へさらに広がっていた可能性がある。文字資料としては、第25号掘立柱建物跡の柱穴から「山神<sub>ナ</sub>」の墨書土器が出土している。

出土土器の器種構成は、土師器の供膳具と調理具、煮沸具が主体を占め、須恵器の同様の製品が劣勢に転

じている。土師器は坏、高台付椀、蓋、皿、鉢、甕、甌などと多様化し、第Ⅲ期における須恵器の器種構成が用いられている。また、供膳具の大多数と一部の調理具、煮沸具の内面には、ヘラ磨きと黒色処理が施される特徴がみられる。須恵器も第Ⅲ期の器種が継承されているが、焼成状態の不良な製品が少量ながらみられる。掲載遺物からみた須恵器の生産地の割合は、新治産4点、堀ノ内産10点、東海産や益子産と思われるものが1点で、堀ノ内産が優勢を保っている。

また、文字資料や鍛冶関連に関わる出土品は、第Ⅲ期と比べると飛躍的に延びており、集落内の識字者数や近辺での生産力が向上したことが推測できる。特に、文字資料や鉄滓などの出土がB群から多くみられることや、加えてC・D群の掘立柱建物跡の形態変化が注視される。

## 第Ⅴ期

9世紀後葉にあたる第Ⅴ期は、B群からD群の小集団が継続している。

B群は、調査区中央部の南域と中央部の中央域に分布している。調査区中央部の中央域に分布する第15号竪穴建物跡は、調査区中央部の南域に分布する遺構群とC群の遺構群との中間地点に単独で存在することから、別の一群の可能性もあるが、掘立柱建物跡を伴わないことから、B群に含めた。

調査区中央部の南域における主な遺構は第4～6・14号竪穴建物跡で、第Ⅳ期の遺構群からは北域に移動している。形状が明確な竪穴建物跡は4・14号建物跡で、長軸3.34～3.62m、短軸3.28～3.44mである。第4号竪穴建物跡には竈の両側に棚状施設が推定でき、コーナー部にピットを有している。出土土器は、第4号竪穴建物跡で土師器片606点、須恵器片55点、第5号竪穴建物跡で土師器片338点、須恵器片38点、第14号竪穴建物跡で土師器片200点、須恵器片38点である。第6号竪穴建物跡は長軸4.50m、短軸3.60mで、B群では一回り大型の建物跡である。当群の他の竪穴建物跡には出土がみられない灰釉陶器や須恵器の大甕片が出土していることから、B群内における優位性が推測できる。

調査区中央部の中央域に分布している第15号竪穴建物跡は、当遺跡では小型竪穴建物であり、長軸2.95m、短軸2.70mで、東壁に竈が付設されている。出土土器は土師器片49点、須恵器片6点と少ないものの、下記に記す埴塼などの出土が特筆できる。

文字資料としては、第4号竪穴建物跡で「宮城<sub>ノ</sub>」の墨書土器のほか、判読できなかった墨書土器4点、「□成井」の刻書、「千万」のヘラ書、第5号竪穴建物跡では一つの坏に墨書で「家<sub>ノ</sub>□」と「井」が記される土師器をはじめに、「城<sub>ノ</sub>」「井<sub>ノ</sub>」の墨書土器、判読できなかった墨書土器2点、「山」のヘラ書、第6号竪穴建物跡では「田」や「田<sub>ノ</sub>」の刻書、第15号竪穴建物跡では「亀<sub>ノ</sub>」の墨書土器と判読できなかった墨書土器片1点、第56号土坑では「田<sub>ノ</sub>」の墨書土器が確認できている。また第4号竪穴建物跡からは羽口4点と鉄滓2点(81.3g)、第5号竪穴建物跡からは鉄滓2点(105.3g)、第15号竪穴建物跡からは埴塼・羽口各1点と鉄滓8点(461.8g)が出土している。

C群の遺構は、第Ⅳ期と同様に調査区中央部の中央域と北西部の南域にかけて分布している。

調査区中央部の中央域における主な遺構は、第17号竪穴建物跡と第14号掘立柱建物跡で、第Ⅳ期の遺構群からは南域に移動している。第17号竪穴建物跡は、長軸3.81m、短軸3.78mで、出土土器は土師器片235点、須恵器片37点、灰釉陶器片3点である。第14号掘立柱建物跡は面積18.36㎡で、平面形が円形もしくは楕円形の柱穴である。両建物跡は第Ⅳ期の第18号竪穴建物跡と第15号掘立柱建物跡の配置関係とは異なるものの、「竪穴建物跡+掘立柱建物跡」の構成は継承していると考えられる。

調査区中央部の北域における主な遺構は、第22・23号竪穴建物跡と第4号井戸跡、第8号柱穴列で、第

Ⅳ期の遺構群とはほぼ同域に位置している。第23号竪穴建物跡は調査区域外へ延びていることから、明確な形状は不明であるが、南北軸は5.08 mで、当遺跡では大型である。出土土器は土師器片642点、須恵器片79点で、当期の他の竪穴建物跡と比して出土量が多く、また灰釉陶器の皿や鉸具の可能性のある金属製品が出土している点にも着目できる。また、近辺に位置する第4号井戸跡からも灰釉陶器の長頸瓶が出土しており、第23号竪穴建物跡との関係が考えられる。掘立柱建物跡の可能性のある第8号柱穴列は、第Ⅳ期の第23号掘立柱建物跡や掘立柱建物跡の可能性のある第9号柱穴列とほぼ同じ位置に建てられていることから、後身としての建物の可能性があり、大型の第23号竪穴建物跡との関係性が考えられる。これらのことから、他の小集団に対しての優位性は継続されているものと考えられる。

文字資料としては第17号竪穴建物跡から「井」や「井」と推定できる墨書土器3点と「奉」の刻書があり、第23号竪穴建物跡から「□鳥」の墨書土器と判読できなかった墨書4点が出土している。また、第17号竪穴建物跡からは椀形滓2点(282.3 g)、鉄滓11点(345.2 g)が共に出土している。

D群は、第32号竪穴建物跡のみで、第Ⅳ期の遺構群とはほぼ同じ位置に分布している。調査区域外に延びていることから、形状や規模は不明である。出土土器は土師器片25点、須恵器片23点である。当群については、調査区域内の西側に偏る遺構の分布状況や、第Ⅳ期では第25号掘立柱建物跡が確認できていることから、C群と同様に、竪穴建物と掘立柱建物で構成された小集団である可能性も指摘できる。文字資料は確認できなかったが、第32号竪穴建物跡からは鉄滓1点(108.3 g)が出土している。

出土土器の器種構成は、土師器、須恵器共に第Ⅳ期を継承しているが、出土量は土師器が主体である。器種ごとでは、土師器の高台付椀・蓋・皿、須恵器の高台付杯・蓋・盤が減少傾向にあり、第Ⅳ期にみられた土師器の器種構成が崩壊し始めたと考えられるが、土師器供膳具を主体に施された内面のヘラ磨きと黒色処理は継承されている。土師器供膳具の一部の器種が減少するなか、当遺跡では灰釉陶器が搬入されている。器種には碗・皿・長頸瓶がみられるが、減少した土師器供膳具の器種を補うだけの数量は出土していない。あるいは再利用可能な銅製品や腐食などによって失われてしまう漆器が、灰釉陶器と共に土師器供膳具を補填していた可能性がある。第15号竪穴建物跡から出土した埴塙には、緑錆が付着していることから、銅製品の再利用による鑄造が行われていた可能性があり、注視できる。

また、文字資料や生産関連に関わる出土品は、第Ⅳ期の水準を維持しているが、鑄造に関わる生産が加わったと考えられる。生産関連の出土品は、B群に加えて、C・D群からも出土していることから、各小集団の近辺にも拡散したものと推測できる。文字資料については、依然としてB群からの出土が多くみられる。

## 第Ⅵ期

第Ⅵ期は10世紀前葉で、第10号竪穴建物跡がB群でのみ確認できた。このことから、9世紀代の集落が10世紀に入ると衰退、もしくは移動したものと考えられる。第10号竪穴建物跡は、長軸3.60 m、短軸3.38 mで、東壁から北壁へ竈が作り替えられている。第Ⅴ期の東壁に竈を有する第15号竪穴建物との連続性も考えられるが、明確な判断はできない。出土土器片には土師器の蓋や皿が含まれているが、周辺に第Ⅳ期の遺構が多いことから、供膳具の構成に継承されているかは明確にはできない。少なくとも第Ⅴ期までに含まれない羽釜や置竈が出土していることから、当遺跡においては、羽釜や置竈が器種構成に加わるものと考えられる。また、鉄滓1点(34.2 g)が出土していることから、調査区域近辺で鍛冶関連の生業が継続していた可能性がある。

#### 4 平安時代の宮後東原遺跡の集落について（第190・191図）

平安時代の集落は、9世紀前葉から10世紀前葉までの遺構が確認でき、小集団はA群からD群に分けることができる。A群は、B群からD群で構成される集落から離れて確認できたことから、別の集落の可能性はある。B群からD群で構成される集落は、B群が9世紀前葉から10世紀前葉、C群が8世紀後葉から9世紀後葉、D群が9世紀中葉から9世紀後葉まで継続している。このことから、調査区内域には9世紀前葉から後葉にかけて、小集団の増加や拡大が徐々に進展し、10世紀前葉では急激に衰退、もしくは集落の移動がなされたものと考えられる。

当集落における各小集団は、竪穴建物跡と掘立柱建物跡で構成、もしくは構成されていた可能性があるC・D群と、竪穴建物跡のみが確認できたB群に分類できる。

前者の竪穴建物跡と掘立柱建物跡の構成は、C群における調査区中央部の中央域で顕著に認められ、9世紀前葉から後葉にかけて両建物がほぼ等間隔で移動している状況がうかがわれ、竪穴建物1棟につき掘立柱建物1棟で構成されていた可能性がある。また、C群における調査区中央部の北域から北西部の南域にかけては、9世紀前葉の第25号竪穴建物跡や9世紀後葉以前に拡張された可能性がある第23号竪穴建物跡が、ほぼ同じ場所に建てられている。そして、それらの北側のほぼ同じ場所には、9世紀中葉以前から後葉にかけて、第23号掘立柱建物跡や掘立柱建物跡の可能性のある第8・9号柱穴列が順を追って建て替えられていることから、C群における調査区中央部の中央域で顕著にみられた両建物の構成が想定できる。C・D群は、竪穴建物跡の規模や遺物の出土量などからすれば、調査区域内ではC群における調査区中央部の北域から北西部の南域にかけての遺構群に優位性が認められると考えられる。こうした優位性は、9世紀後葉に、少数ながらも確認できた灰釉陶器の出土状況からもうかがわれ、第23号竪穴建物跡出土の折戸53号窯式の皿や第4号井戸跡出土の猿投産の長頸瓶が認められたほかは、C群における調査区中央部の中央域やD群では細片や出土が認められなかった。

一方、竪穴建物跡のみが確認できた後者は、文字資料の出土量が多い点に特徴がみられる。当遺跡における文字資料の出土状況は、9世紀中葉に急激な増加がみられ、9世紀後葉までその水準を維持しているが、それらの多数はB群から出土している。こうした文字資料の出土状況からは、少なくともB群が、集落や在地を治めるための機能を果たしていたものと推測できる。

こうした竪穴建物と掘立柱建物で構成される小集団や竪穴建物のみが確認できた小集団は、概して邸宅などの「私」的空間と、集落や在地を治める機能を有していた「公」的空間と考えられ、第I期でみられた第2号柱穴列を境としたA・B群の空間構造にも類似している。「私」的空間は、C群の北域に優位性が認められる小集団の集合体と考えられるが、C群以外でも9世紀中葉から竪穴建物と掘立柱建物で構成されている可能性があることから、小集団内に邸宅もしくは私的な倉庫としての掘立柱建物が存在したと考えられる。また、二つの空間から出土した遺物には、識字者の存在をうかがわせる墨書土器などの文字資料や社会的・経済的な優位性が認められる灰釉陶器などがあり、当時、在地で成長してきた富豪層の集落として当遺跡を位置づけることができると考えられる。

こうした富豪層の成長の背景には、軍団や重税などで疲弊してた地方の救済・再生を目的とした延暦24(805)年の藤原緒継による軍事と造作停止の上申や、弘仁5(814)年の藤原園人による国司・郡司の朝廷への献物を口実とした課税の禁止などがあげられ、中央の政策転化と密接に関係したものと考えられる。当遺跡では9世紀中葉の第IV期に、文字資料の急激な増加や掘立柱建物跡における柱穴の平面形が隅丸方形や隅丸長方形へと変化がみられる。こうした状況を直ちに富豪層の地方官人化や、国衙・郡衙の出先機関とし

て成長した集落と位置づける判断はできないが、成長してきた富豪層と国衙・郡衙との何らかの関係性による結果である可能性は否定できない。

文字資料の出土が多いことから「公」的空間と考えられるB群からは、「宮城」の墨書土器が複数確認できているほか、「宮城」の可能性のある「城」の墨書土器などもみられる。平川南氏からは、公的施設から出土例が多く、時代が下るにつれ私的な施設でも用いられることが多い文字資料であるとの御教示を頂いた。「公」的空間に「私」的空間から富豪層や従事者が通い、在地に関わる政務を行ったかどうかは不明であるが、9世紀中葉以降に「公」的空間を主として急増する文字資料や、第7～9号竪穴建物跡から出土した土師器供膳具の数量は異例なまでに多く、富豪層などの識字者による重要な集会の場であったことが推測できる。

また、それぞれの空間に位置する遺構から出土した埴塙や羽口、鉄滓は、当遺跡の近辺に鍛冶や鑄造に関わる施設の存在が推測でき、工人との関係が指摘できる。こうした生業に関わる遺物の出土は、9世紀中葉には「公」的空間と考えられるB群のみから出土し、9世紀後葉には「私」的空間に含まれるC・D群からも出土していることから、工人と集落の関係は公的結束から私的結束も含めて変化したものと考えられる。同じように井戸の分布も、9世紀中葉はB群内に第2号井戸が位置していたが、9世紀後葉にはD群内に第4号井戸が造られ、廃絶されていることから、公的空間から私的空間への転換が認められる。

#### 5 内面黒色処理された土師器供膳具の技法について（第192・193図）

当遺跡では、9世紀中葉から須恵器の出土量が減少し、土師器の出土量が増加する傾向がみられる。特に、土師器供膳具を主として、内面にヘラ磨きと黒色処理を施した製品が急増している。こうした土器は、東国の各地で確認されており、器形面において畿内の黒色土器に準じた様相の展開がみられるとし、8世紀後半から9世紀前半では、畿内系I類に類似したの平底無高台の黒色土器、9世紀後半では灰釉陶器模倣の椀・皿、10世紀代では深椀形態のものが出現すると考えられている<sup>3)</sup>。なお、こうした内面ヘラ磨きと黒色処理された土器が「黒色土器」のほか、「ロクロ土師器<sup>4)</sup>」、「土師質土器<sup>5)</sup>」、「須恵器系土師質土器<sup>6)</sup>」などとして扱われることが多くみられるが、本書では便宜上、土師器として扱っている。

第Ⅳ～Ⅴ期における土師器の供膳具の成形技法は、ロクロナデによる成形であるが、その後の整形段階で第Ⅳ期と第Ⅴ期では異なる様相がみられる。

第Ⅳ期段階の坏では、手持ちヘラ削りによって整形を施している。手持ちヘラ削りは、体部下端に横位一方向で節をもつもの(263)と、斜位や横位方向に複数単位で削る(118・119・144・155・157)技法がみられ、底部には全面に一・二方向あるいは多方向の手持ちヘラ削りを施したものが主としてみられる。比較的大きめの坏には、体部中位以下に回転ヘラ削りが施されるもの(306)もある。高台坏碗や蓋・皿では天井部や体部下端に回転ヘラ削りによる整形を施したものが多数みられるが、摘み部や高台部を貼り付けた後のナデによって、ヘラ削りの痕跡が消滅しているものもみられる。皿の形状には、体部から屈折して口唇部が立ち上がる盤状の器形(126・131・151・167・168)と口縁部に屈折を持たずに体部から外反気味に立ち上がる器形(149・150)がみられる。このうち前者の口唇部内面の屈折部には、ヘラ磨きされた後も、円状のナデ沈線が残っている製品もみられ、須恵器の盤と同様のナデ整形が垣間見られる。第7・8号竪穴建物跡の重複関係から、前者の屈折部は徐々に弱くなるものと考えられ、第Ⅴ期にはみられなくなることから、当遺跡では第Ⅴ期段階までに消滅し、後者のみが残るものと考えられる。

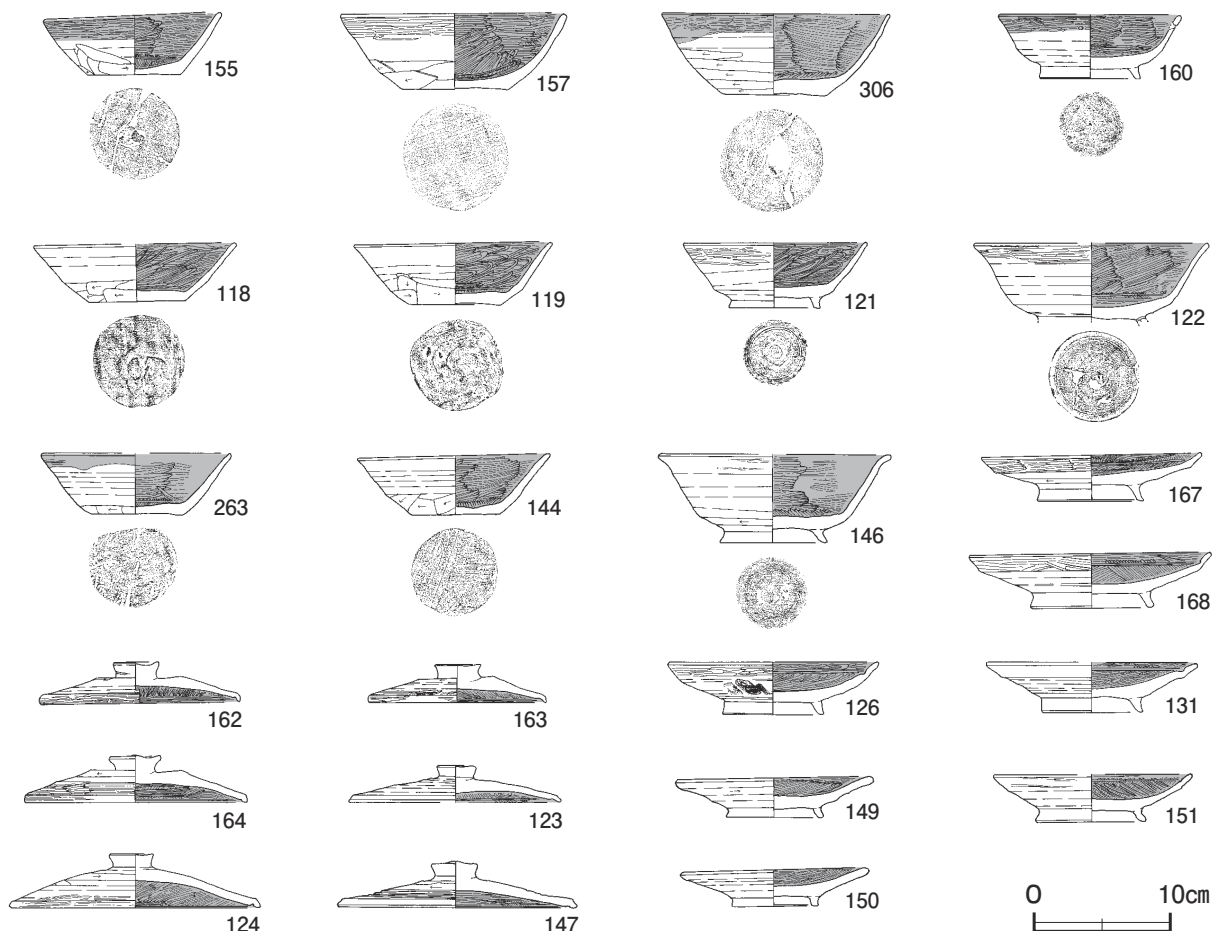
第Ⅴ期段階の坏には、第Ⅳ期段階の手持ちヘラ削りの整形は継続している(194・397)ものの、回転ヘラ削りを施した製品(100・102・103・196)や、手持ちヘラ削りに似た技法で、体部下端のヘラナデと底部に

ヘラ切りを残すヘラナデが施された製品（195・207・210）がみられるようになる。回転ヘラ削りの製品は、底部に回転ヘラ削りがそのまま残るのものが多くみられる。第Ⅳ期段階の大型の坏や高台付碗、蓋・皿には回転ヘラ削が施されたものもみられることから、大型の坏などの整形が当期段階で、坏にまで及んだと考えられる。体部下端のヘラナデについては、削りの工程へ移行する乾燥期間を省いることから、手持ちヘラ削り技法の簡略化と考えられる。こうした技法の消長については、遺構の重複関係が殆どみられない当遺跡においては、明確な判断はできないが、手持ちヘラ削り技法の簡略化の一面がみられることから、徐々に手持ちヘラ削り技法の系譜が衰退していくことが想定できる。また、僅かながら削り出し高台の坏（188）も確認できる。

こうした土師器供膳具にみられる手持ちヘラ削りの整形や、盤状の皿にみられる口縁部内面の沈線状のナデ整形は、県下の須恵器にみられる整形技法に顕著にみられ、少なくともヘラ磨きと黒色処理が施された土師器製品の整形までの工程には、須恵器工人との関わりや交流による影響が考えられる。

内面調整については、第Ⅳ・Ⅴ期共にヘラ磨きが施されているが、磨き方には異なる点もみられる。

第Ⅳ期の坏・高台付碗は、体部内面に複数の縦位単位で横位もしくは斜位方向のヘラ磨きが施された後、底部に一方向もしくは二方向のヘラ磨きが施され、最後に底部の見込み外周に沿って円状のヘラ磨きがされている。見込み部の円状のヘラ磨きは、施されないものもみられるが、多数の製品で確認できる。蓋や皿は、体部に一方向もしくは二方向の横位や斜位方向のヘラ磨きが施された後、蓋では口縁部、盤状の皿では口唇部の屈折部に沿って円状の磨きが施されているものが多くみられる。



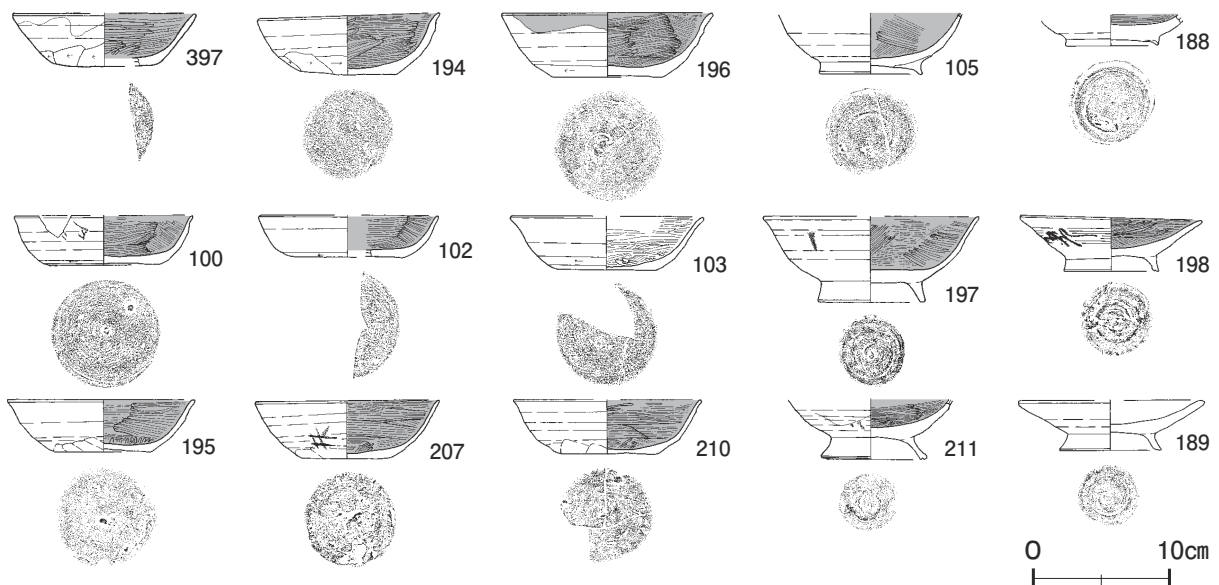
第192図 宮後東原遺跡における第Ⅳ期の主な供膳具

こうした製品の中には、口縁部外面に横位のヘラ磨きが施されるものと施されないものが存在する。第7・8号竪穴建物跡の重複関係からみた場合、第7号竪穴建物跡出土の製品には半数ほどヘラ磨きが施されているのに対し、第8号竪穴建物跡の製品には殆どヘラ磨きが施されていない。また、第V期の製品には、ほとんどが口縁部外面にヘラ磨きが施されていないことから、時期が下るにつれて、口縁部外面へのヘラ磨きは施されなくなったと考えられる。平安京Ⅱ～Ⅲ期にかけての黒色土器A類の碗では、口縁部外面のヘラ磨きがⅢ期ではほとんどみられなくなる傾向があり<sup>7)</sup>、当遺跡の土師器供膳具もこうした傾向に準じている可能性がある。

第V期段階の坏や高台付碗は、第IV期にみられる内面のヘラ磨きの技法が若干残るものの、多くは次の3つのヘラ磨きの技法に集約される。一つは、体部内面に複数の縦位単位で横位もしくは斜位方向のヘラ磨きが行われた後、底部に多方向のヘラ磨きが行われるもの(194～196・397)と、もう一つは体部から底部を経て、対面の体部へ連続してヘラ磨きが行われるもの(100・102)である。さらに、体部内面に横位単位で横位もしくは斜位方向のヘラ磨きを行った後、底部に多方向の磨きが行われるものがみられる(103・207・210)。福島県新地町の北原遺跡では、内面のヘラ磨きにロクロの回転を用いたと考えられる土師器の坏が報告されている<sup>8)</sup>。この土師器坏のヘラ磨きは、横位単位であることから、当遺跡の横位単位のヘラ磨きは、回転による磨きの可能性がある。ただし、底部内面にみられる多方向のヘラ磨きは、第V期段階の3つの技法で認められることから手持ちによるものと考えられ、横位単位のヘラ磨きは、器面に沿って円を描くようにヘラ磨きを行った可能性が高いと思われる。

第IV期と第V期の磨き方の変化は、第IV期の坏や高台付碗の内面が底部から屈曲して体部に立ち上がるものが多いのに対し、第V期では底部から体部にかけて内彎状に立ち上がる形状の変化をもたらした結果と考えられる。蓋や皿は出土量が減少し、供膳具の構成から徐々に除かれていく可能性があるが、出土した皿のヘラ磨きは、第IV期の口縁部に屈折を持たない皿と変わらないことから、蓋についても踏襲されていると想定できる。

こうした内面にヘラ磨きと黒色処理が施された土師器供膳具は、9～10世紀の「王朝国家的食器様式<sup>9)</sup>」や「金銀朱漆瓷を頂点とする食器体制<sup>10)</sup>」に提唱される金属器、朱漆器、中国磁器、漆器、国産陶器、黒



第193図 宮後東原遺跡における第V期の主な供膳具



色土器、須恵器、土師器の食器序列に準じるものであったと考えられる。京都における黒色土器は、総合的な出土量が少なく、モデルとなった容器（金属器、中国磁器、漆器、国産陶器とするかは諸説ある）の質感に近似させた代用品の性格が強く、また商品性をうかがわせる製品として考えられている<sup>11)</sup>。また地方においては、国府を中心とした狭い地域で畿内を志向した食器様式の影響が受容されていた可能性や、一般集落においても在地でロクロを用いた土師器の器種体系に磁器型食器の器種が取り入れられていることが指摘されている<sup>12)</sup>。

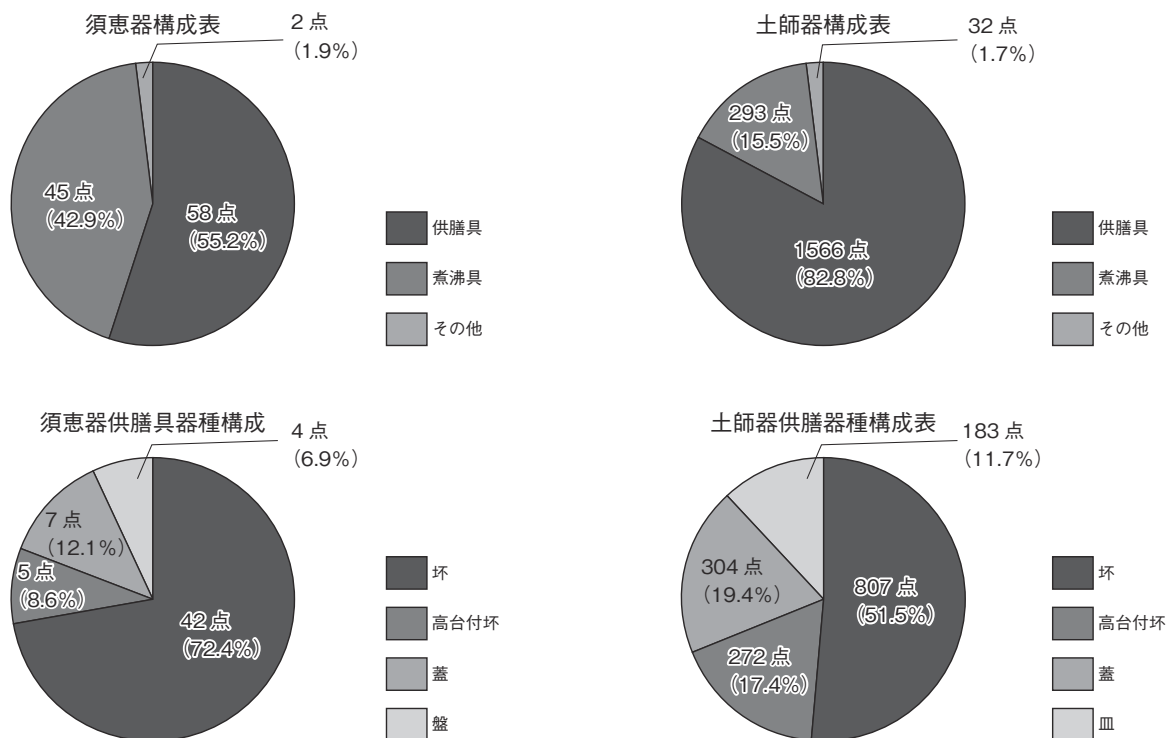
当遺跡では、9世紀中葉には文字資料が急増し、掘立柱建物跡の柱穴の平面形が隅丸方形あるいは隅丸長方形の形状に変化していることから、少なくとも、当集落を治めた富豪層と国衙・郡衙との関係性が想定できる。そうした食器様式の影響や富豪層と国衙・郡衙との関係性を背景として、ヘラ磨きと黒色処理が施された土師器供膳具は、金属器や中国磁器、漆器、国産陶器に類似した色調や質感をもった製品として要求性が高まり、製作技法面から、須恵器の工人もしくは須恵器製作技法に影響を受けた工人へ黒色土器に似た製品が発注された可能性は十分に考えられる。

## 6 第2号井戸跡出土の供膳具と小長谷部氏について

第2号井戸跡からは、土師器片 1891点（坏 807・高台付碗 272・蓋 304・皿 183・鉢 32・甕類 289・甑 4）、須恵器片 105点（坏 42・高台付坏 5・蓋 7・盤 4・コップ形土器 1・鉢 1・甕類 44・甑 1）、土製品 1点（羽口）、動物遺存体 60点（馬の歯）が出土している。時期は、出土土器の形状や製作技法、外・内面の調整から9世紀中葉に比定できる。中でも土師器供膳具には、ヘラ磨きの状態が良好であることや使用痕がほとんど認められないことから、使用頻度が少なかったと考えられる。また馬の歯が共に投棄されていることから、「饗宴」あるいは「儀式」や「祀り」に使用されたものと考えられる。

出土土師器の構成は供膳具が多く、煮沸具が少ない特徴がみられ、供膳具は全体の82.8%を占め、煮沸具

表 22 第2号井戸跡出土土器組成表



は15.5%である。須恵器の出土量についても、供膳具は全体の55.2%、煮沸具は42.9%で、供膳具が若干多いことから、「饗宴」などに使用された可能性がある。出土量が少量であることからすれば、土師器供膳具の補填的な器と考えられる。(表22)。

土師器供膳具の器種組成は、坏, 高台付椀, 蓋, 皿で、出土量は、坏が圧倒的に多く51.5%、高台付椀が17.4%、蓋が19.4%、皿が11.7%である(表22)。蓋の出土量は全体の約2割に上り、蓋と他の供膳具との組み合わせも考えられることから、口径値の比較を試みた。表23は、第112～120図で掲載した土師器供膳具における口径と出土点数を示したものである。

<b>坏</b>	a, 12.1cm (1点) b, 12.6～14.1cm (18点) c, 14.9cm (1点) d, 16.3cm (1点) e, 17.0cm (1点)
<b>高台付椀</b>	a, 12.6～14.2cm (15点) b, 14.8～15.0cm (3点) c, 16.2～16.4cm (2点) d, 17.0cm (1点) e, 18.5～18.9cm (2点)
<b>蓋</b>	a, 13.7～15.5cm (21点) b, 16.1cm (1点) c, 16.8～17.3cm (3点) d, 18.0～18.7cm (3点) e, 19.6cm (1点)
<b>皿</b>	a, 13.7cm (1点) b, 14.6～15.1cm (5点) c, 15.6～16.0cm (5点) d, 16.8cm (1点) e, 17.3～17.6cm (5点) f, 17.9cm (1点)

表23 第2号井戸跡土師器供膳具の口径値

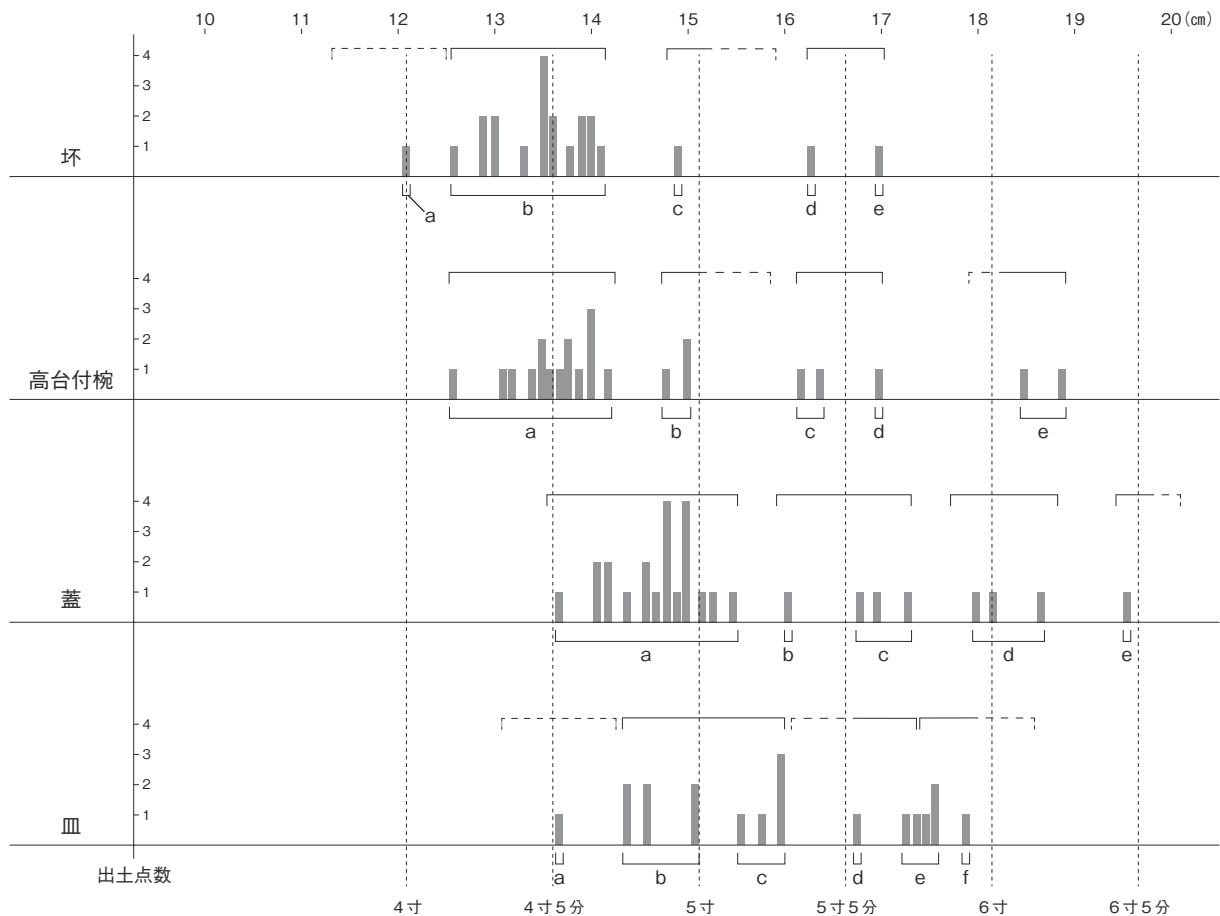


表 23 によると、口径の大きさは、坏と高台付椀が近似値であることが分かる。すなわち、坏 b と高台付椀 a、坏 c と高台付椀 b、坏 d と高台付椀 c、坏 e と高台付椀 d であり、坏と高台付椀の口径の規格は、坏 a と高台付椀 e を除いて、法量上は統一的であると判断できる。しかも、こうした口径の統一値を寸尺と照合すると、坏 a は 4 寸（約 12.1cm）、坏 b と高台付椀 a は 4 寸 5 分前後（約 13.6cm ± 1 cm 前後）、坏 c と高台付椀 b は 5 寸（約 15.2cm）、坏 d と高台付椀 c および坏 e と高台付椀 d は 5 寸 5 分前後（約 16.7cm ± 1 cm 前後）、高台付椀 e は 6 寸（約 18.2cm）に近似値となり、それぞれ 4 種に分けられると考えられる。

蓋 a ～ e については、高台付椀 a ～ e に対して、口径値が概ね 3 ～ 5 分程度（約 9.0 ～ 1.5cm 程度）で大きくなっていることから、a は 4 寸 5 分、b は 5 寸、c・d は 5 寸 5 分、e は 6 寸の製品に用いられる蓋と推定できる。ただし、a の中には口径値 13.7cm のものが 1 点含まれており、あるいは 4 寸の製品と組み合わせる可能性もあることから、4 ～ 5 種類に分けられると考えられる。

皿 a ～ f については、大きく a と b・c、d ～ f でまとまりがみられ、3 種にわけることが可能と考えられるが一方で、坏や高台付椀、蓋には 4 寸から 6 寸 5 分までの規格に応じて、口径値の誤差 ± 1 cm 前後の範疇で製作されていることから、皿のみが規格外であることに違和感がある。口径値からは、a は口径 13.7cm で 4 寸 5 分あり、b・c は口径 14.6 ～ 16.0cm であることから、5 寸前後（15.2cm ± 1 cm 前後）に当てはまり、坏や高台付椀、蓋と同様の傾向を示している。このことからすれば、d は 5 寸 5 分、f は 6 寸と考えられ、e は口径値の誤差 ± 1 cm 前後の製品と考えられ、5 寸 5 分もしくは 6 寸の皿と推定でき、皿も 4 種に分けられる可能性がある。

以上のことから、坏、高台付椀、皿は口径を 4 ～ 6 寸 5 分を 5 分間隔で区切り、口径値規格の ± 1 cm 程度の誤差程度で製作されたと製品と推定でき、規格性の高い供膳具と考えられる。このことから、蓋はいずれの製品とも組み合わせることが可能であるが、当遺跡の土師器供膳具が、須恵器の製作工人の影響を受けている可能性があることや高台付椀と蓋の出土量が近似値であること、高台付椀と蓋の口径値によって分けられる a ～ e の出土数量の傾向が似ていることから、須恵器の組み合わせと同様に<sup>13)</sup> 高台付椀と蓋の組み合わせが基本になるものと考えられる。

第 2 号井戸跡からは、「大田」「山神」「宮城」「大<sub>ナ</sub>」「夙<sub>ナ</sub>」の墨書土器や「小長谷部継成」のヘラ書された甑が出土している。当集落は B 群から D 群の小集団で構成され、B 群は 9 世紀前葉から 10 世紀前葉、C 群は 8 世紀後葉から 9 世紀後葉、D 群は、9 世紀中葉から後葉まで継続が確認できている。B 群では「宮城」「田」「井」「城」、C 群では「井」「大田井」と判読、もしくは推定できる文字資料が特徴的にみられる。このうち、「田」や「大」は「大田」の略称や土器の破損のため「大」や「田」が欠損している可能性があり、「城」についても、また同様に「宮城」の可能性もある。このことから、第 2 号井戸跡出土の文字資料の一部は、B ～ D 集団に関わる文字資料と推測できる。また「山神」は、筑波連山の麓下に山尾権現廢寺などの古代寺院跡がみられることや『常陸風土記』に筑波山の神が登場することから、古くから信仰の対象であった筑波山やその連山に座する神であると考えられ、「饗宴」などの場では主賓的な役割を果たしたと考えられる。「夙」と推定される墨書は、則天文字と思われ、苛政や弊政が無い新世界の到来を表す「天興」を意味している。「夙」の意味を理解して用いられたかは別として、地方の集落で則天文字が用いられることは、則天文字がもつ異質な字体から、漢字が付帯する権威や魔力よりも一層効果的であったと考えられる<sup>14)</sup>。「小長谷部継成」は、甑にヘラ書されていることから、土師器供膳具の製作者もしくは発注者と考えられる。小長谷部氏は武烈天皇の子代として設立された部民で、奈良時代には『万葉集』や正倉院の御物の一つである麻布に信濃国の小長谷部笠麿や小長谷部尼麿がみられる。また、甲斐国山梨郡や遠江国磐田の郡散事<sup>15)</sup> の記

録、下総国葛飾郡大島郷の戸籍に記された小長谷部涼売ほか9名などにも記載されており、東国の各所で散見できる。県下では鹿の子C遺跡で、8世紀後葉の第133号竪穴住居（建物）跡から底部に「小長谷」と墨書で記された須恵器高台付坏が出土している<sup>16)</sup>。

第2号井戸跡から出土した文字資料は、「𠩺<sub>9</sub>」を除けば、すべて饗宴や祀りに集った小集団や主賓に関わる資料と推測できることから、「小長谷部継成」もまた饗宴や祀りに関わった人物と考えられる。このことからすれば、「小長谷部継成」は饗宴や祀りの主催者として供膳具を発注した人物として浮かび上がり、食材を調理して料理を持ってなす主人としての役割が推測され、その象徴として甑に銘を記したものと思われる。

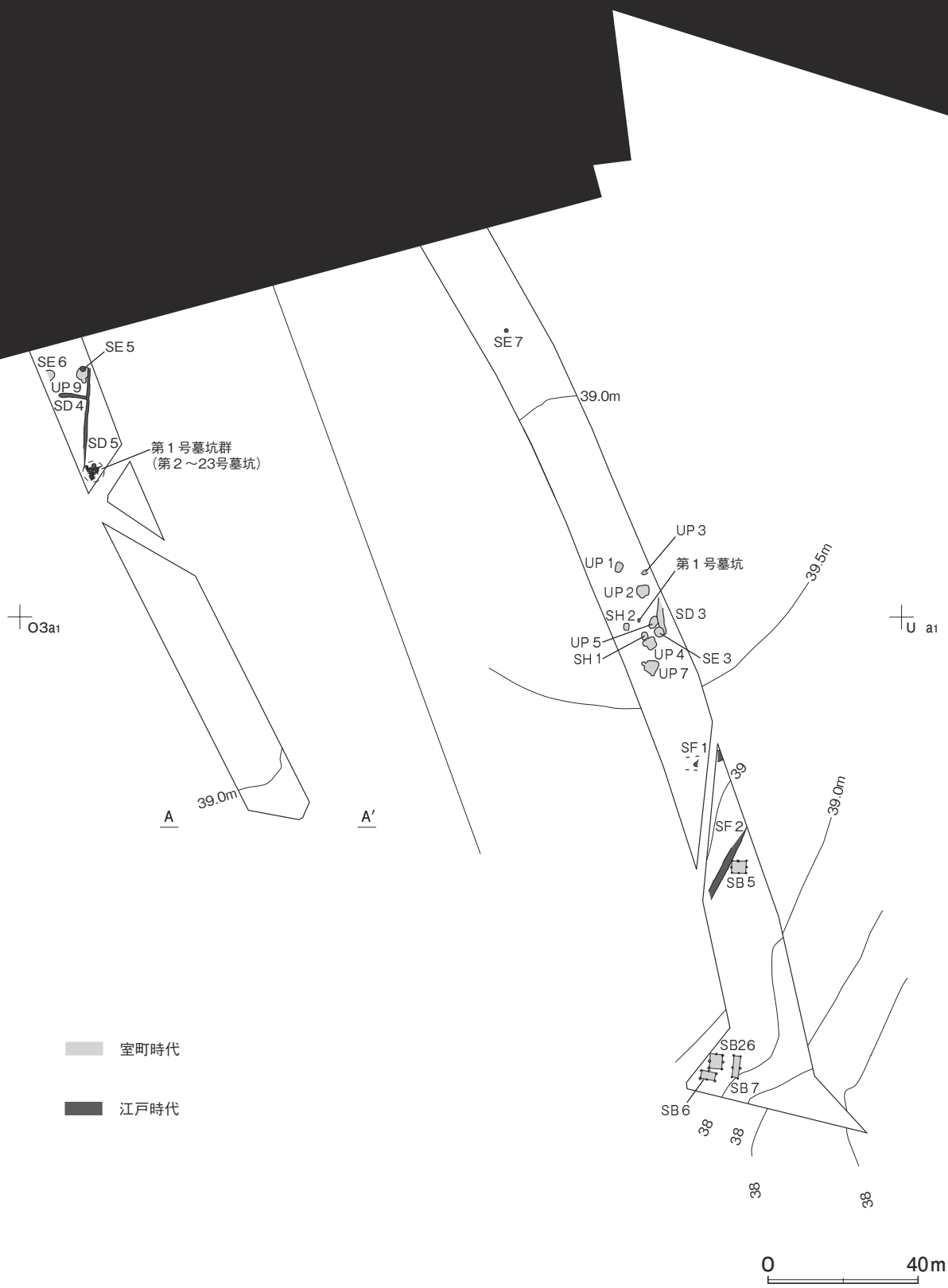
日本には共食の文化が存在し、神事においては神饌が献上され儀式が催された後に、直会として祭祀者や集った人々が神と共に食する饗宴儀式があり、『日本書紀』では外国使節を迎えるに際し、供食者を設けた記述をみることができる。こうした共食の文化は「王朝国家的食器様式」などに象徴される9世紀以降の中央貴族の饗宴にも継承されるが、食材は同じ物を使用する共食の文化が働きながらも、調理法や献立数、調味料の種類などによる配膳内容や席次には格差がみられ、饗宴の場をもって明確な身分秩序が表現されている<sup>17)</sup>。こうした献立の中には、一つの容器に盛られた料理を複数の者が共有し、取り分けて食する配膳もみられ、特筆できる。

第2号井戸跡の出土土器には、土師器供膳具と共に出土した386・387（第119図）があり、同時期で、土師器供膳具を主として出土した第7号竪物跡では、口径が蓋の最大法量を超えることから、鉢に分類した134・136（第61図）がみられる。これらの製品には、土師器供膳具と同様にヘラ磨きと黒色処理が施され、中には坏と器形を同じくするものもみられる。これらの大型の製品が、複数の者を対象とした供膳具である可能性は否定できず、圧倒的多数で出土している坏の一定数は、複数の者が取り分けて食するために使用されたものも含まれていると推測できる。こうした視点からすれば、蓋との組み合わせによる供膳具の配膳が身分秩序を反映していると考えられ、高台付碗と蓋との組み合わせが基本となりながらも、他の供膳具とも組み合わせが可能な第2号井戸跡出土の土師器供膳具は、「饗宴」や「祀り」などの場で、配膳がもたらす身分秩序を視覚的に表現するために理にかなった供膳具であったと推測できる。

島名熊の山遺跡では、9世紀中葉を画期として、共同体の紐帯を強めるための集落全体で執り行われる祭祀から、富豪層などの特定集団や個人で行われるものへ変化していったことが考えられている<sup>18)</sup>。当遺跡においても9世紀中葉を画期として、「公」的空間から「私」的空間の重要性が高まったと考えられることから、第2号井戸跡から出土した土師器供膳具についても、富豪層などの特定集団が執り行う饗宴や儀式、祀りによる集落内、あるいは在地における身分秩序を確認する一面性が含まれていたものと推測できる。8世紀前葉から中葉の第1号大型土坑と9世紀中葉の第2号井戸跡は、掘立柱建物跡群や文字資料の出土が多くみられる竪穴建物跡群に位置するのに対し、第6号井戸跡は竪穴建物と掘立柱建物で構成される小集団の中で、優位的な小集団であるD群中に位置している。このことは集落や在地を治めるに際し、共同体の紐帯を強めるために「公」的空間を重要視した集落から、徐々に富豪層を中心とした集落や在地の身分秩序によって編成された「私」的空間を重視した集落へと変化したことが考えられる。

## 7 室町時代（第194図）

当時代の遺構は、掘立柱建物跡6棟、方形竪穴遺構2棟、井戸跡2基、墓坑1基、地下式坑7基、柱穴列2条、土坑2基、溝跡1条、ピット群1か所を確認した。これらの遺構は出土遺物から、15世紀前半から16世紀前半に比定できる。



第 194 図 宮後東原遺跡の室町・江戸時代主要遺構配置図

掘立柱建物跡は調査区南東部の第5～7・26号掘立柱建物跡の小群と中央部北域の第17・21号掘立柱建物跡の小群に分かれて建てられている。いずれも時期を決定づける遺物が出土していないことから、明確な時期は不明であるが、周辺の出土遺物から15～16世紀と考えられる。また、調査区中央部の南域は、第1・2号方形竪穴遺構、第3号井戸跡、第1号墓坑、第1～5・7号地下式坑、第3溝跡の遺構群、調査区北西部からは第6号井戸跡、第9号地下式坑が確認できている。

第5～7・26号掘立柱建物跡は柱の立て替えの可能性があるものの、建物自体の建て替えは確認できない。また建物同士の重複も認められないことから、長期的な施設や永住性がある建物とは考えにくく、短期的な倉庫や住居などとしての小屋が考えられる。第6・7号掘立柱建物跡は、第26号掘立柱建物跡を囲むように配置されており、納屋などを含めた倉庫群と住居としての建物が推測でき、第26号掘立柱建物跡とほぼ同規模の第5号掘立柱建物跡も、住居である可能性がある。調査区中央部の南域は、墓坑や地下式坑、井戸跡が確認できたことから墓域と考えられるが、第1号方形竪穴遺構と第4号地下式坑の重複関係から、墓域となる以前にも土地利用がされていたものと考えられる。第1号方形竪穴遺構は焼土と灰が一角に廃棄され、第2号方形竪穴遺構は刀子(M15)が遺棄されていたことから、作業場と考えられる。他の遺跡から確認できた一般的な方形竪穴遺構と比べると、大きさは非常に小型で、柱の立て替えも認められないことから、短期間で役割を終えたと考えられる。調査区南東部と中央部南域では、江戸時代に改修が認められた第1・2号道路跡を挟んで遺構群の性格が異なっている。こうしたことから、第1・2号道路跡は室町時代まで遡る可能性があり、道路を境として居住区と作業場、あるいは墓域が区画されていたものと考えられる。墓域は地下式坑出土の遺物から、15世紀後半から16世紀前半と比較的長期にわたり営まれていたのに対し、居住区と作業場は短期間で機能を停止したと考えられる。このことから当時、各地を移動しながら生活していた職能民が、一時的に定着した可能性も指摘できるが、出土遺物が乏しいことから明確な判断はできない。

15世紀後半から16世紀前半に墓域となった調査区中央部南域では、第2～4・7号地下式坑が直線状に配置され、その東側に第3溝跡が地下式坑群に並行して位置していることから、当初は区画性をもった墓域であったと考えられる。第3号溝が廃絶された後は、第3号井戸や第5号地下式坑が造られることによって、区画性が崩壊している。地下式坑は、第2～4・7号地下式坑が15世紀後半、第1・5号地下式坑が16世紀前半に比定できる。前者の竪坑底面は第2・3号地下式坑が階段状、第4号地下式坑が緩やかに下って段を有し、第7号地下式坑は緩やかに下って主室に至っている。これに対して、後者は緩やかに下って主室に至る形状のみである。また、主室の平面形状は第2～4号地下式坑が奥行きの短い長方形、第7号地下式坑が奥行きの長い台形状、第1・5号地下式坑が奥行きの長い長方形に転じている。このことから、当遺跡における地下式坑の形態は、15世紀後半から16世紀前半にかけて、竪坑底面が段状から徐々にスロープ化し、主室の奥行きが短いものから長いものへ変化していると考えられる。第2号地下式坑は天井部が崩落しているにも関わらず、崩落層が認められなかったことや、第7号地下式坑では崩落層を踏み固めて床面としているから、天井崩落後も何らかの形で再利用されていた可能性があり、今後の検討課題といえる。

第17・21号掘立柱建物跡は、桁行や梁行の方向が揃っておらず、柱穴間も疎らであることから、仮設や臨時的な小屋であったと考えられる。重複関係から第21号掘立柱建物が廃絶された後、第17号掘立柱建物が建てられているが、建て替えであるのか、一定期間を置いて同じ場所に建てたのかは不明であり、どのような役割を果たしたのかも不明である。

北西区は15世紀後半に比定できる第6号井戸跡と16世紀前半に比定できる第9号地下式坑が確認できていることから、墓域と推定できる。明確な墓坑や区画などは確認できなかったことから、墓域の範囲は不明

である。時期が調査区中央部南域の墓域と重なることから、村落内の組や講などの小集団ごとに、共同墓が営まれたものと考えられる。

## 8 江戸時代（第194図）

当時代は、井戸跡2基、墓坑群1か所、道路跡2条、土坑1基、溝跡2条を確認した。調査区南東部は第1・2号道路跡、中央部北域は第7号井戸跡、北西部は第5号井戸跡、第1号墓坑群、第344号土坑、第4・5号溝跡が分布する。

調査区南東部の第1・2号道路跡の近辺には、当時代の遺構は確認できず、室町時代とは一変している。調査区周辺は、現在も畑地として土地利用がされていることから、耕作地へと変化していったものと考えられる。第1・2号道路跡は、江戸時代のどの時期かは不明であるが、改修されていることから、耕作地へと変化した後も、村落においては重要な交通路として機能していたと推測できる。

調査区中央部北域には、井戸跡1基のみが確認できた。井戸跡の周辺には、居住や倉庫群などの建物跡が確認できなかったことから、第7号井戸は農耕に用いられた可能性があり、調査区南東部と同様な土地利用がなされていたものと考えられる。

調査区北西部は、第4・5溝で区画された内部に第5号井戸跡や地下室の可能性のある第344号土坑が配置されている。地下室は、江戸市中やその近郊で貯蔵や野菜の軟化栽培などを目的に一般的に造られ、素掘りや崩落を防ぐための木組み、あるいは石組みを伴って確認されている<sup>19)</sup>。周辺遺跡の報告例はみあたらないことから、地下室であるかは明確ではないが、地方においても貯蔵施設として使用されたり、野菜の栽培法が伝播している可能性もあり、今後、江戸時代の遺構資料の蓄積が待たれる。第1号墓坑群からは、第2～23号墓坑が確認できているが、個々の時期は不明である。墓坑群としては、第10号墓坑が第5号溝跡を掘り込んでいるが、第4・5号溝によって区画された範囲に大きく展開することはなく、墓域は当初の範囲を踏襲しているものと判断できる。第4・5号溝によって区画された西側には旧家が存在していることから、この区画は屋敷地やそれに付帯する区画と考えられる。墓坑群が区画内へ大きく逸脱しなかった背景には、生活空間と墓域が明確に区別されていたためと考えられ、その結果、墓坑群の重複が複雑化したものと考えられる。墓坑の形状を概すると、平面形状が隅丸長方形や隅丸長方形と推定されるものは、深さ70cmより浅いものが多く、方形のものは深さ70cmを超えるものが多い。墓坑の規模から、仰臥屈葬や横臥屈葬にみられる横位屈葬から座葬へ、埋葬の様相が徐々に変化していったと考えられる。調査区中央部の南域から確認できた室町時代の第1号墓坑は、横臥屈葬での埋葬が推定できることや、墓坑群の出土遺物から、17世紀後半が画期と推測できる。棺は、第14号墓坑の甕棺を除いて、木片が付着した鉄釘の出土状況から木棺と推定できる。第5号溝跡との重複関係から、短くても19世紀前葉までは存続しており、長期間墓域として営まれていたと考えられる。

## 9 おわりに

以上のように、宮後東原遺跡の集落や墓域の様相と土師器供膳具について、若干の考察をおこなった。

奈良時代と平安時代の集落は、「竪穴建物+掘立柱建物」で構成される「私」的空間と、竪穴建物を中心とした倉庫群や墨書土器の出土が多い竪穴建物群で構成される「公」的空間から成立し、近辺には鍛冶などの関連施設が想定できた。二つの空間バランスは、9世紀中葉を画期として、掘立柱建物の形態変化や文字資料の増加、須恵器から土師器への転換、生産関連遺物の拡散、井戸の配置変換などが象徴的にみられ、徐々

に「公」的空間から「私」的空間へ優位性が転換していったと考えられる。また、9世紀中葉に廃絶された第2号井戸跡から出土した土師器供膳具には、須恵器供膳具の器種構成を引き継ぎながらも、身分秩序に基づいた王朝国家的食器が有する性格の一面が垣間みられた。これらのことは、当該期の集落や社会を知るうえで、貴重な資料になるものと思われる。

室町時代の墓域については、地下式坑の形態変化が捉えられ、江戸時代の墓坑群についても室町時代からみられる横位屈葬から座葬へと変化していくことが推測できるなど、墓制を考える重要な資料が得られた。

今回の調査で得られた成果が、当地の歴史を解明するうえで一助となれば幸いである。

#### 註

- 1) 長洲正博 「上宿遺跡 一般国道50号下館バイパス改築事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第394集 2015年3月
- 2) 山中敏史 『古代官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺構編』 独立行政法人奈良文化財研究所 2004年3月
- 3) 森隆 「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年12月
- 4) 佐久間豊ほか 「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『房総における奈良・平安時代の土器』 市立市川考古博物館 1983年10月
- 5) 中沢悟 「清里・陣場遺跡」『昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』 群馬県埋蔵文化財財団 1981年3月
- 6) 福田健司 「南武蔵における平安時代後期の土器群－11世紀の土器群－」『古代末～中世における在来系土器の諸問題』 神奈川考古学第21号 神奈川考古同人会 1986年4月
- 7) 小森俊寛 「土師器・黒色土器・瓦器」『平安京提要』 角川書店 1994年6月
- 8) 橋本博幸ほか 「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ 北原遺跡 藩境土塁 原田遺跡(第二次)」『福島県文化財調査報告書』第166集 福島県教育委員会 財団法人福島県文化センター 1986年3月
- 9) 中井淳史 「畿内土器様相の中世的特質」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』 日本中世土器研究会 1994年12月
- 10) 高橋照彦 「「盗器」「茶碗」「葉椀」「様器」考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 1997年3月
- 11) 7に同じ
- 12) 森隆 「中世的土器生産の特質と成立過程」『古代文化』第45巻第5・6号 古代学協会 1993年5・6月
- 13) 高井悌三郎ほか 『常陸国新治郡上代遺跡の研究Ⅱ 堀ノ内古窯跡群 古郡台原古墳』 甲陽史学会 1988年1月
- 14) 平川南 『出土文字に新しい古代史を求めて』 同成社 2014年4月
- 15) 野村忠夫 『古代貴族と地方豪族』 吉川弘文館 1989年10月
- 16) 川井正一ほか 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第20集 財団法人茨城県教育財団 1983年3月
- 17) 原田信男 「古代・中世における共食と身分」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997年3月
- 18) 清水哲 「鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理地内埋蔵文化財報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第380集 公益財団法人茨城県教育財団 2013年3月
- 19) 江戸遺跡研究会編 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房 2001年4月



# 付 章

## 宮後東原遺跡出土金属製品の付着木質の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1 はじめに

宮後東原遺跡は、桜川右岸の標高約 38～39m の島状に独立する台地上に立地している。これまでの発掘調査から、奈良時代から平安時代、室町時代、江戸時代の集落跡や墓域に伴う遺構が検出されている。

本報告では、第2号方形竪穴遺構から出土した刀子（M15）について保存処理を実施し、柄部に残存している木質を対象として、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

### 2 金属製品付着木質の樹種

#### (1) 試料

試料は、第2号方形竪穴遺構から出土した刀子の茎部付近に付着していた木質である。状況から、柄の一部が残存したものと考えられる。小片で保存状態が悪いため、木取りの詳細は不明である。

#### (2) 分析方法

刀子から木片を採取する。木片から木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東<sup>1)</sup>やRichter 他<sup>2)</sup>を参考にする。

#### (3) 結果

刀子の基部付着木質は、針葉樹に同定された。解剖学的特徴等を記す。

##### ・針葉樹

軸方向組織は、仮道管を主要素とするが、全体的に保存状態が悪く、組織配列はほとんど観察できない。放射組織の存在は確認できるが、壁孔の形態、放射仮道管の有無等は不明である。放射組織は単列であることが木口面で確認できるが、高さなどの詳細は不明である。

仮道管を主要素とする特徴から針葉樹と判断できる。しかし、保存状態が悪いために、そのほかの特徴が観察できず、種類は不明である。

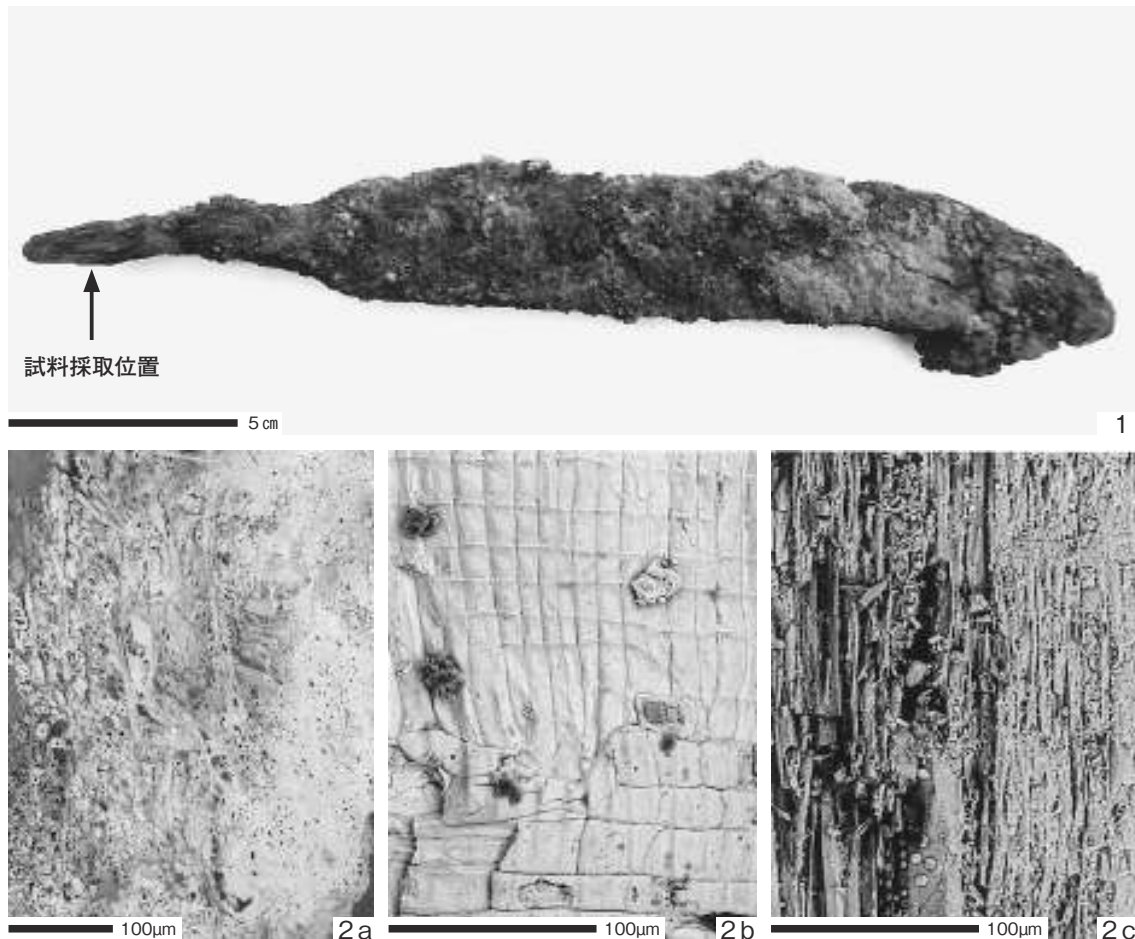
### 3 考察

刀子の柄と考えられる木質は、刀子の鉄錆が浸透してかろうじて形状を保っている状態である。組織の観察から針葉樹であることが明らかとなったが、保存状態が悪いために種類は不明である。また、木取りについても観察できなかった。針葉樹は、一般的に広葉樹に比べて軽軟で加工性が高い。

茨城県内では、古代から中世の刀子の柄について樹種を明らかにした例が知られていない。刀子以外の木製品について樹種同定を実施した例をみると、マツ属、モミ属、スギ、ヒノキ属、アスナロ属、カヤ、イヌ

ガヤ等の針葉樹材が確認されており，今回の柄もこうした針葉樹に由来する可能性がある。

なお，伊東・山田<sup>3)</sup>のデータベースで古代を中心とした刀子の柄に利用された樹種をみると，アカガシ亜属やヒノキの利用が比較的多い傾向がある。



第195図 1, 第2号方形竪穴遺構出土の刀子と折試料採取位置 2, 折試料標本写真(a小口, b柁目, c板目)

註)

- 1) 鳥地 謙・伊東 隆夫 『図説木材組織』 地球社 176p. 1982年
- 2) Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』 海青社 70p 2006年 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修) [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
- 3) 伊東 隆夫・山田 昌久(編) 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社 449p. 2012年

写 真 図 版



宮後東原遺跡遠景（北西から）





平成23年度調査区南東部全景



平成23年度調査区中央部南全景

PL2



平成24年度調査区中央部北全景



平成25年度調査区北西部全景



第2号豎穴建物跡  
遺物出土狀況



第2号豎穴建物跡  
完掘狀況



第2号豎穴建物跡  
竈完掘狀況

PL4



第12号竖穴建物跡  
遺物出土状況①



第12号竖穴建物跡  
遺物出土状況②



第12号竖穴建物跡  
完掘状況



第21号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第21号竖穴建物跡  
完掘状況



第24号竖穴建物跡  
完掘状況



PL6



第30号竖穴建物跡  
遺物出土状況①



第30号竖穴建物跡  
竈遺物出土状況②



第2・7号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況

第4号掘立柱建物跡  
掘方完掘狀況



第9号掘立柱建物跡  
掘方完掘狀況



第11号掘立柱建物跡  
第2号柱列跡  
掘方完掘狀況



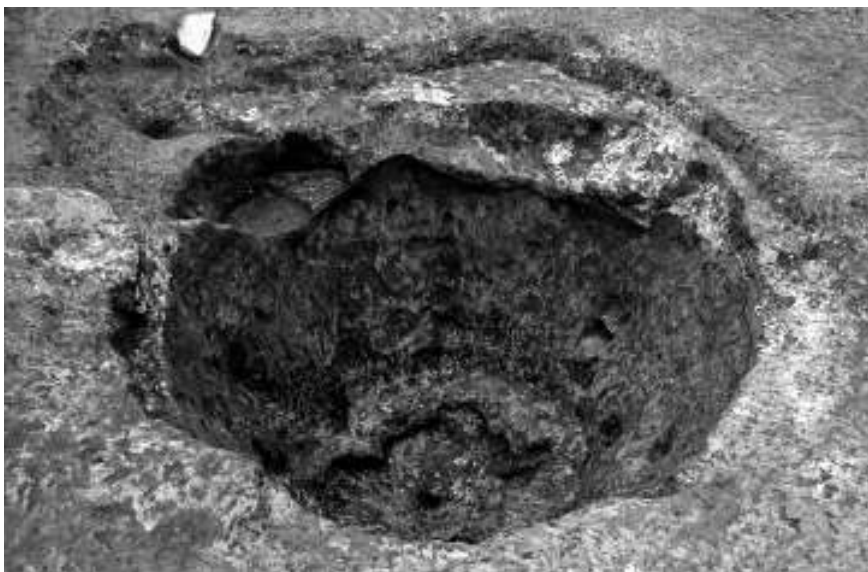
PL8



第12号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況



第1号大型円形土坑  
遺物出土状況



第1号大型円形土坑  
完掘状況

第4号竖穴建物跡  
完掘狀況



第7号竖穴建物跡  
遺物出土狀況



第7号竖穴建物跡  
完掘狀況



PL10



第8号竖穴建物跡  
遺物出土状況①



第8号竖穴建物跡  
遺物出土状況②



第8号竖穴建物跡  
完掘状況

第9号竖穴建物跡  
遺物出土狀況



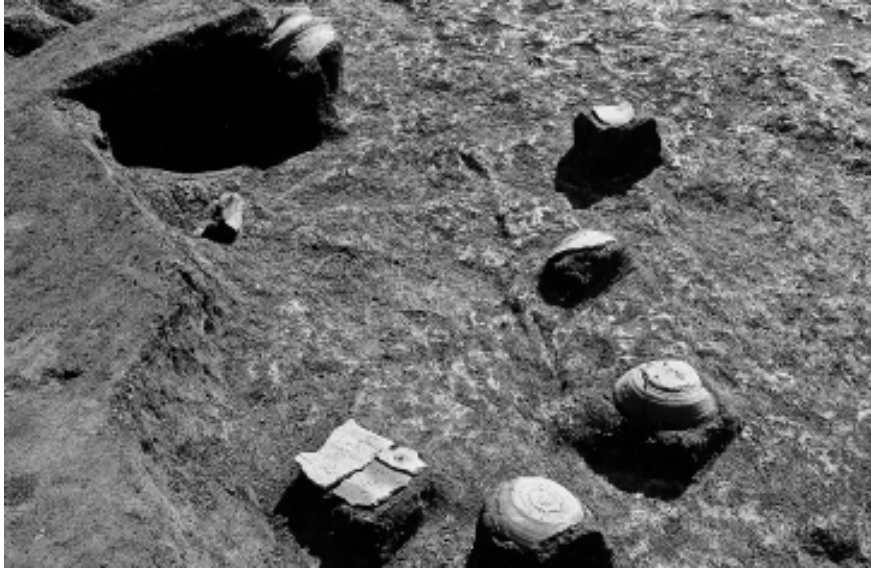
第9号竖穴建物跡  
完掘狀況



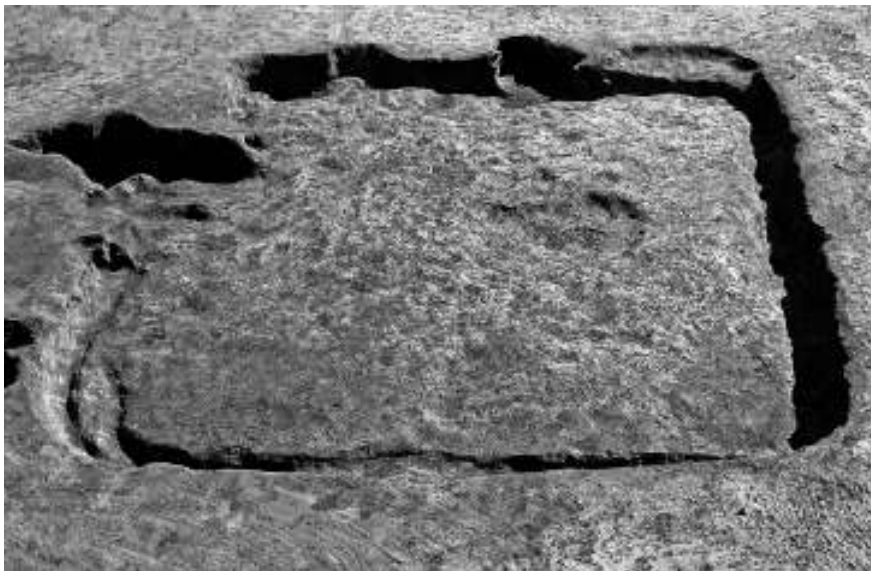
第9号竖穴建物跡  
竈遺物出土狀況



PL12



第10号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第10号竖穴建物跡  
完掘状況



第13号竖穴建物跡  
完掘状況





第13号豎穴建物跡  
竈遺物出土狀況



第16号豎穴建物跡  
完掘狀況



第23号豎穴建物跡  
遺物出土狀況

PL14



第23号竖穴建物跡  
竈遺物出土状況



第25号竖穴建物跡  
遺物出土状況

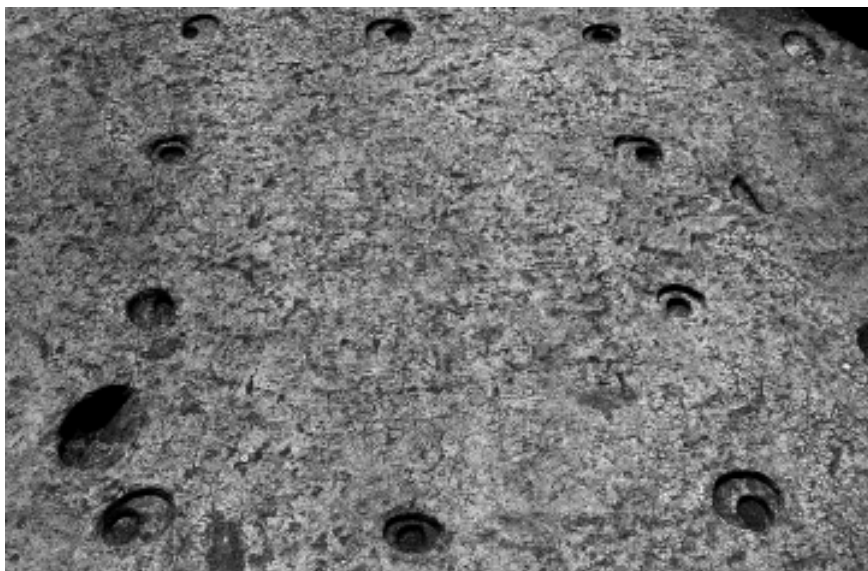


第28号竖穴建物跡  
完掘状況

第29号竖穴建物跡  
完掘状況



第14号掘立柱建物跡  
確認状況



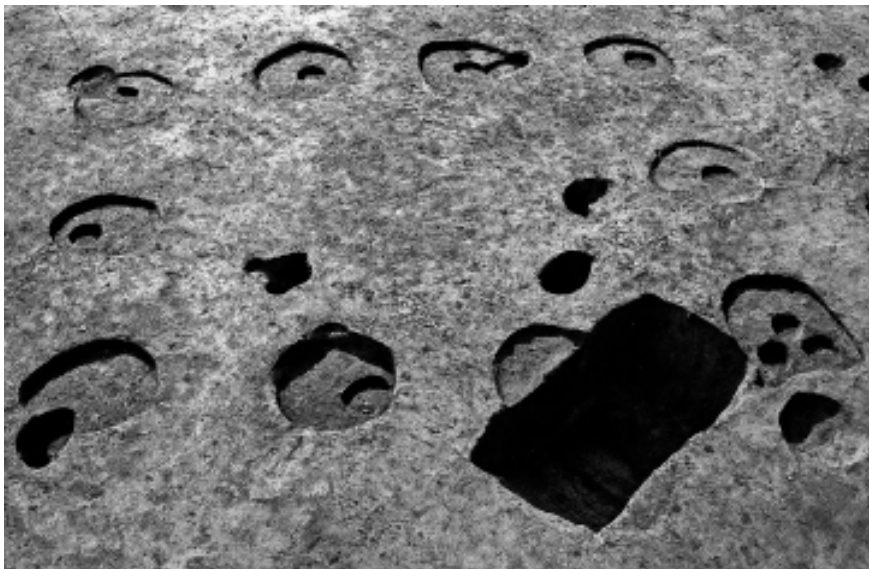
第14号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況



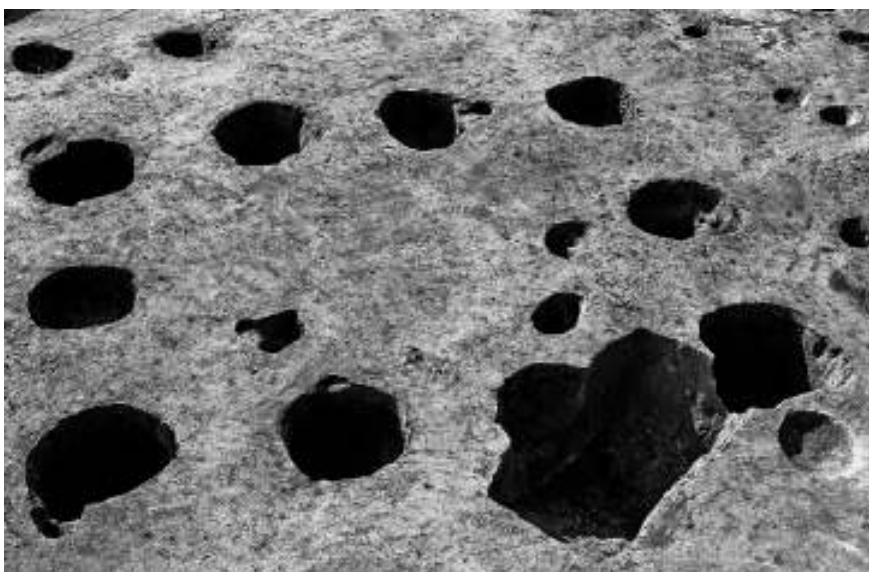
PL16



第15号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況

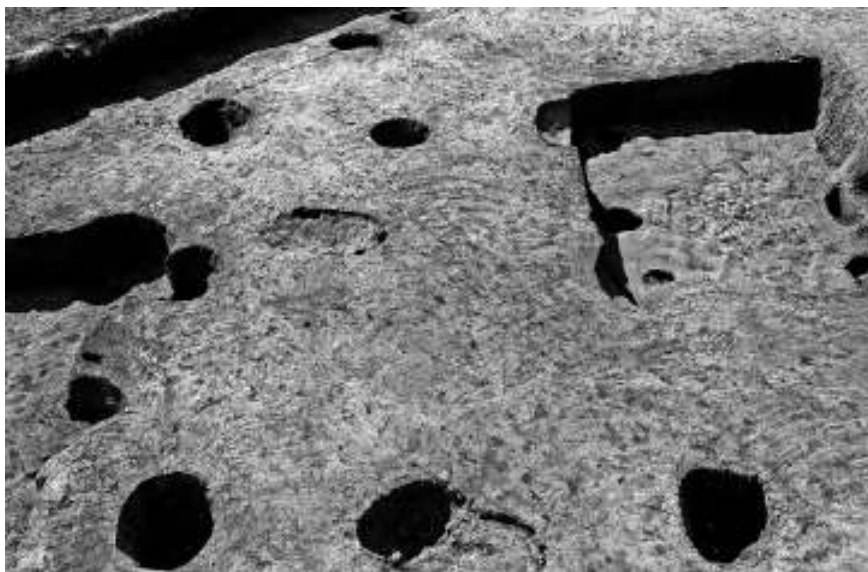


第18号掘立柱建物跡  
確認状況



第18号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況

第19号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況



第23号掘立柱建物跡  
第8・9号柱穴列  
確認状況



第23号掘立柱建物跡  
第8・9号柱穴列  
完掘状況





第24号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況



第25号掘立柱建物跡  
確認状況



第25号掘立柱建物跡  
掘方完掘状況

第 2 号 井 戸 跡  
確 認 状 況



第 2 号 井 戸 跡  
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 井 戸 跡  
調 査 終 了 状 況



PL20



第 4 号 井 戸 跡  
完 掘 状 况



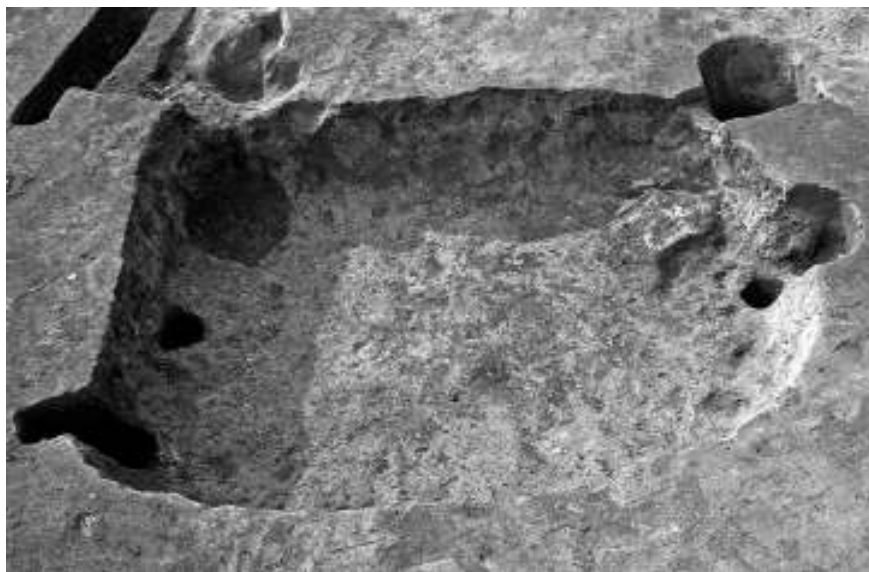
第 61 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 况



第 128 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 况



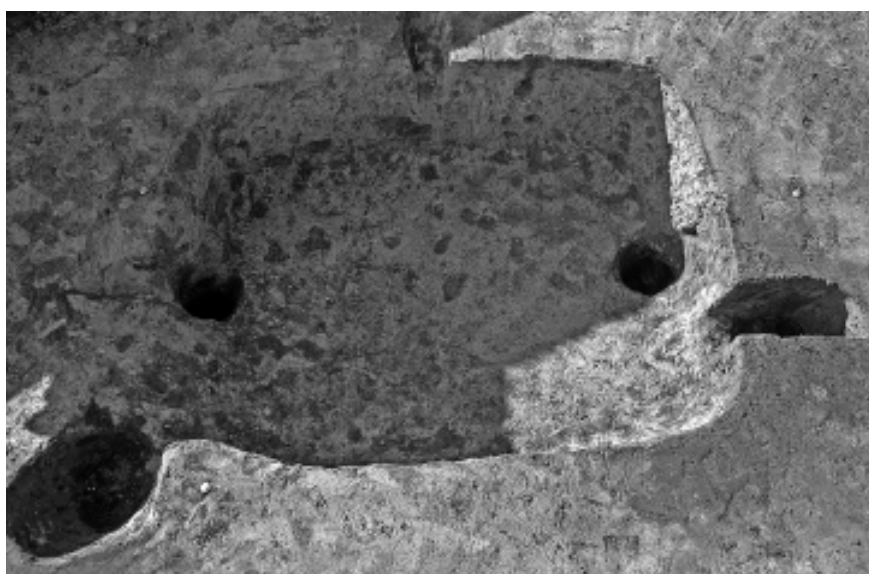
第1号方形竖穴遺構  
完掘狀況



第2号方形竖穴遺構  
遺物出土狀況



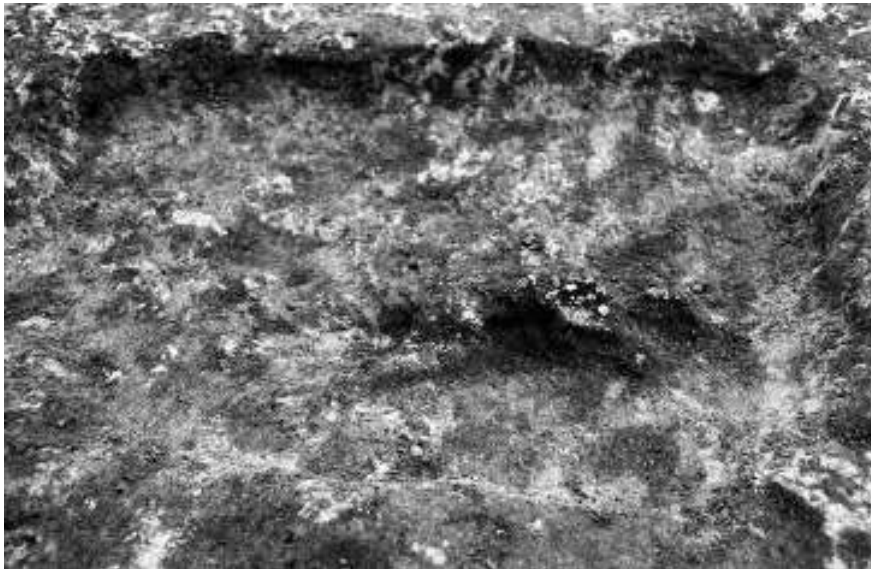
第2号方形竖穴遺構  
完掘狀況



PL22



第 3 号 井 戸 跡  
調 査 終 了 状 況



第 1 号 墓 坑  
人 骨 出 土 状 況

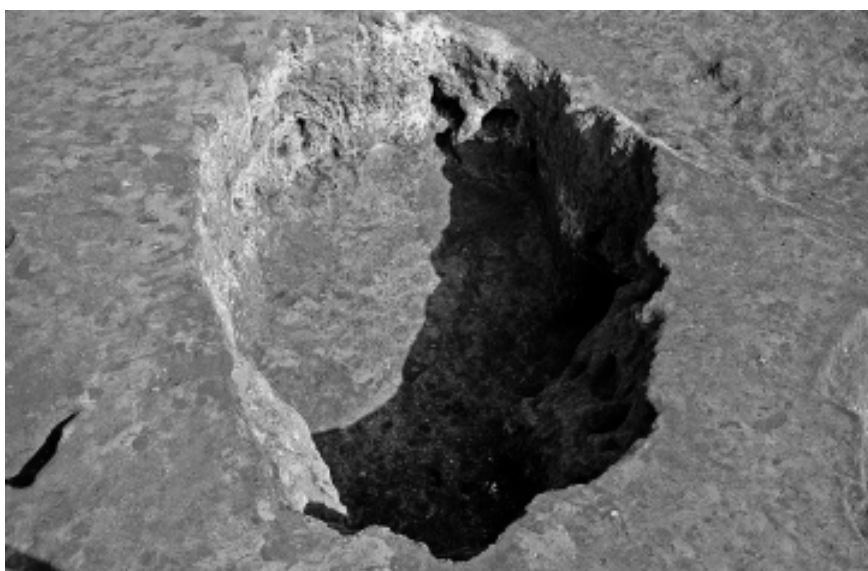


第 1 号 地 下 式 坑  
完 掘 状 況

第 2 号地下式坑  
完 掘 状 况



第 5 号地下式坑  
完 掘 状 况

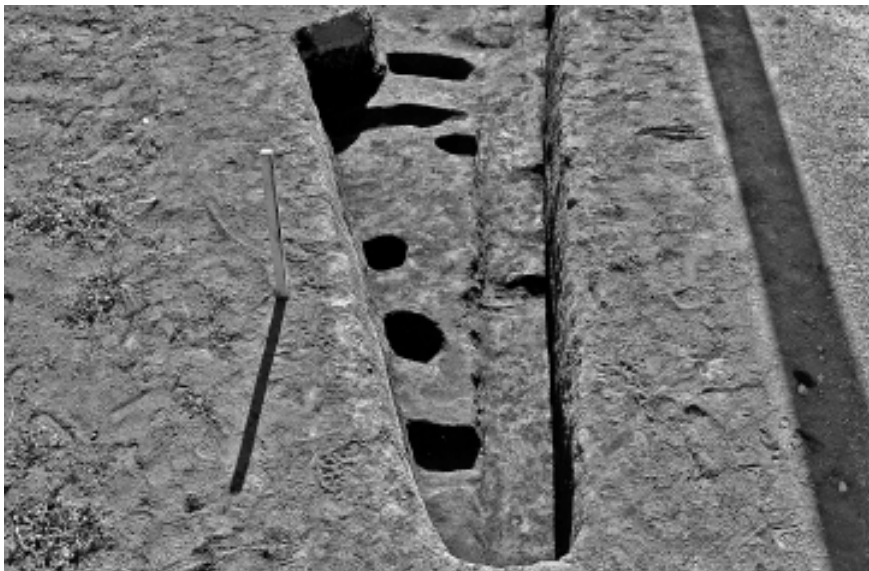


第 9 号地下式坑  
完 掘 状 况

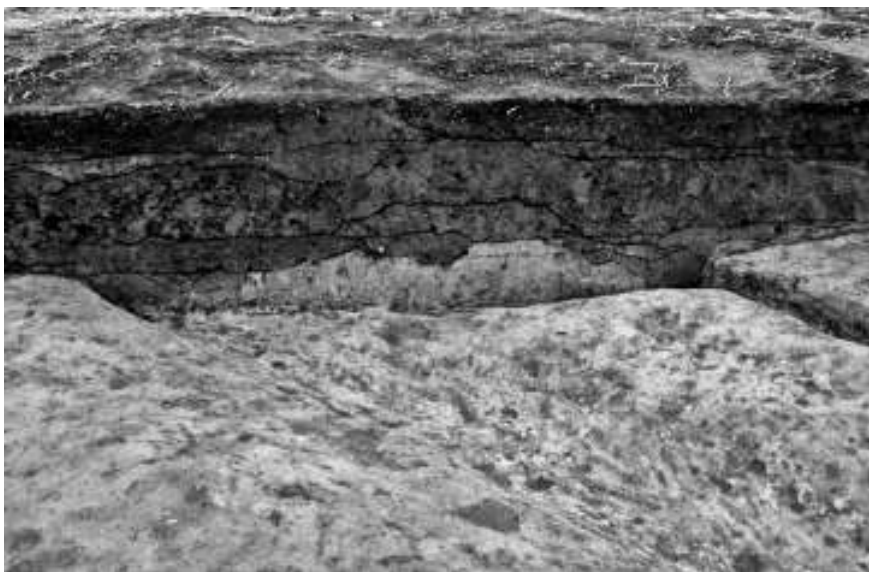




第 1 号墓坑群  
完 掘 状 况



第 1 号道路迹  
完 掘 状 况

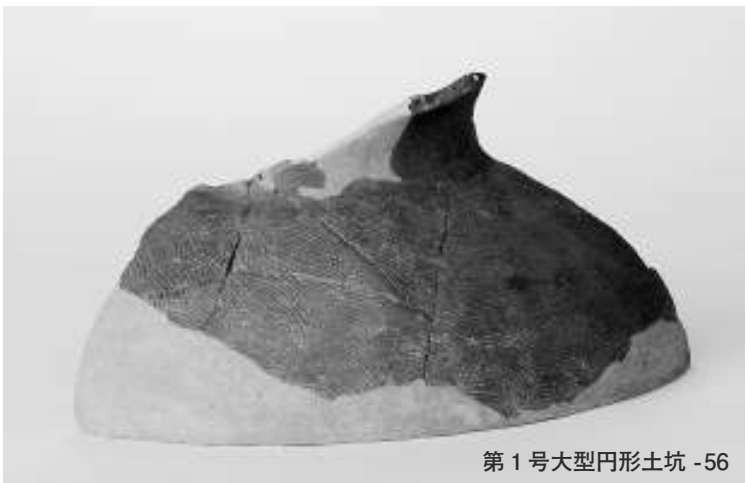


第 2 号道路迹  
土 层 断 面

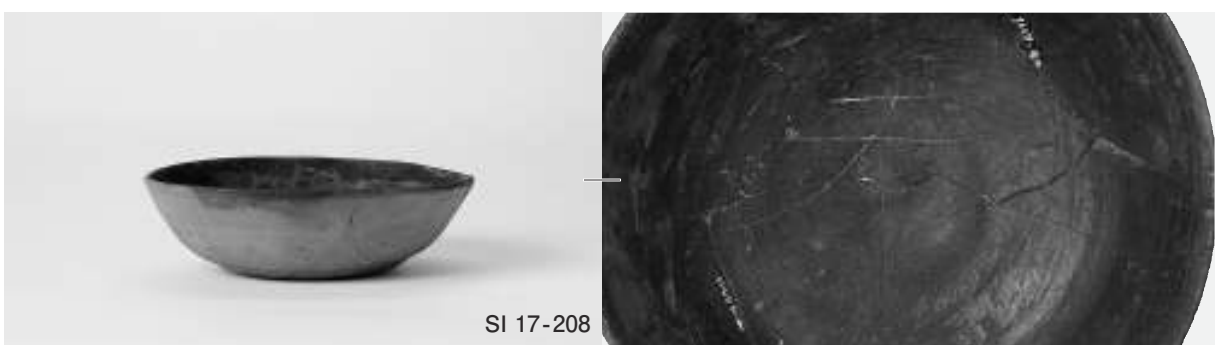
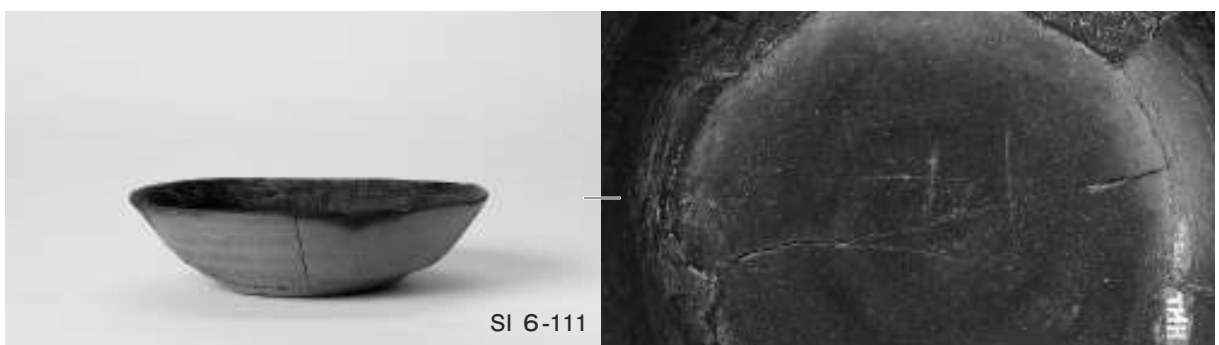
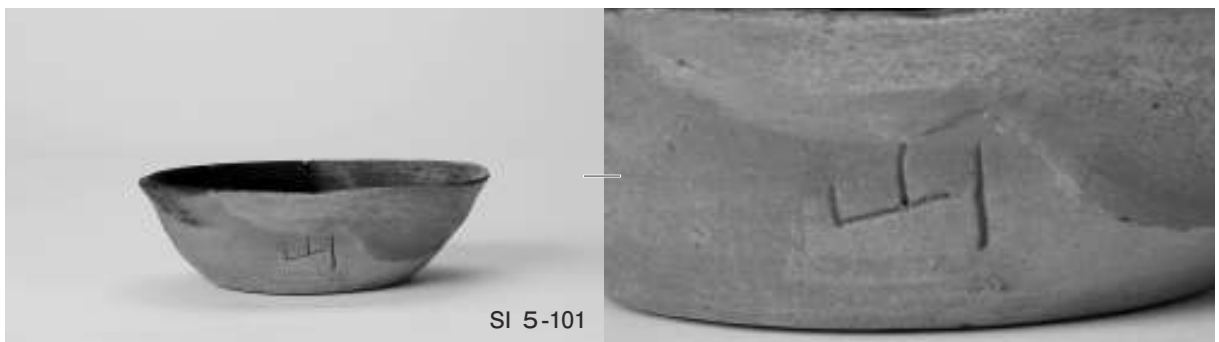
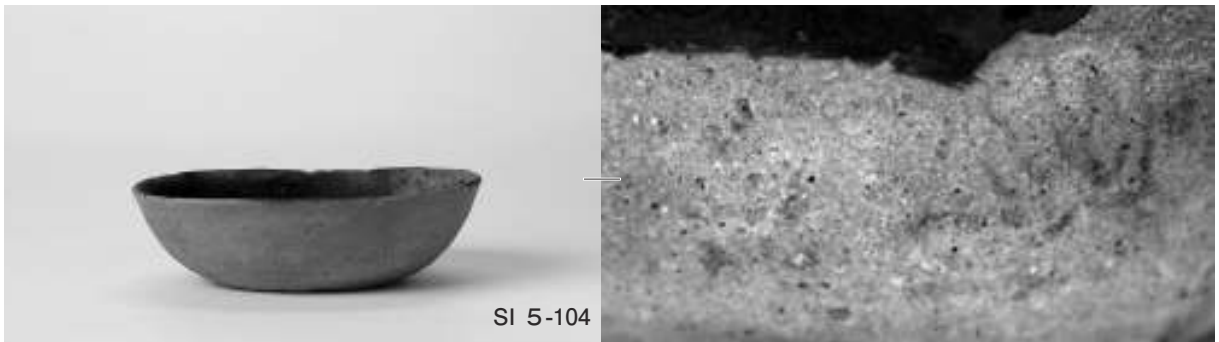
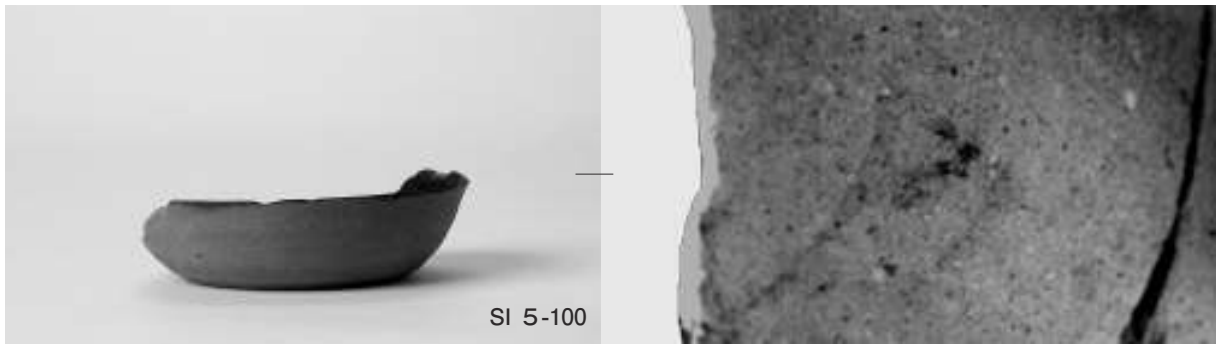


第3・12・30号竖穴建物跡，第1号大型円形土坑出土土器

PL26



第12・21・24号竖穴建物跡，第1号大型円形土坑出土土器



第5・6・17号竖穴建物跡出土土器



第17号竖穴建物跡，第2号井戸跡，第57・345号土坑出土土器





第15・17・18号竖穴建物跡，第2号井戸跡，遺構外出土土器

PL30

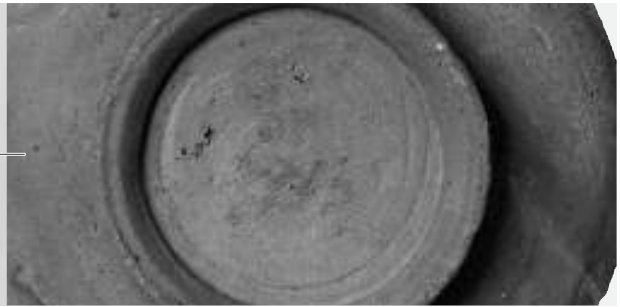


第15・17号竖穴建物居跡，第2号井戸跡出土土器



第8・15号竖穴建物跡，第2号井戸跡出土土器

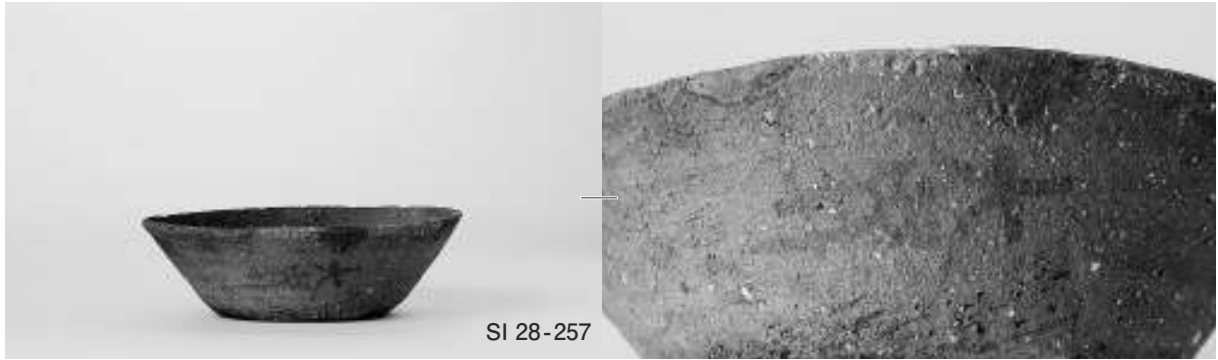
PL32



第7～9号豎穴建物跡，第2号井戸跡出土土器



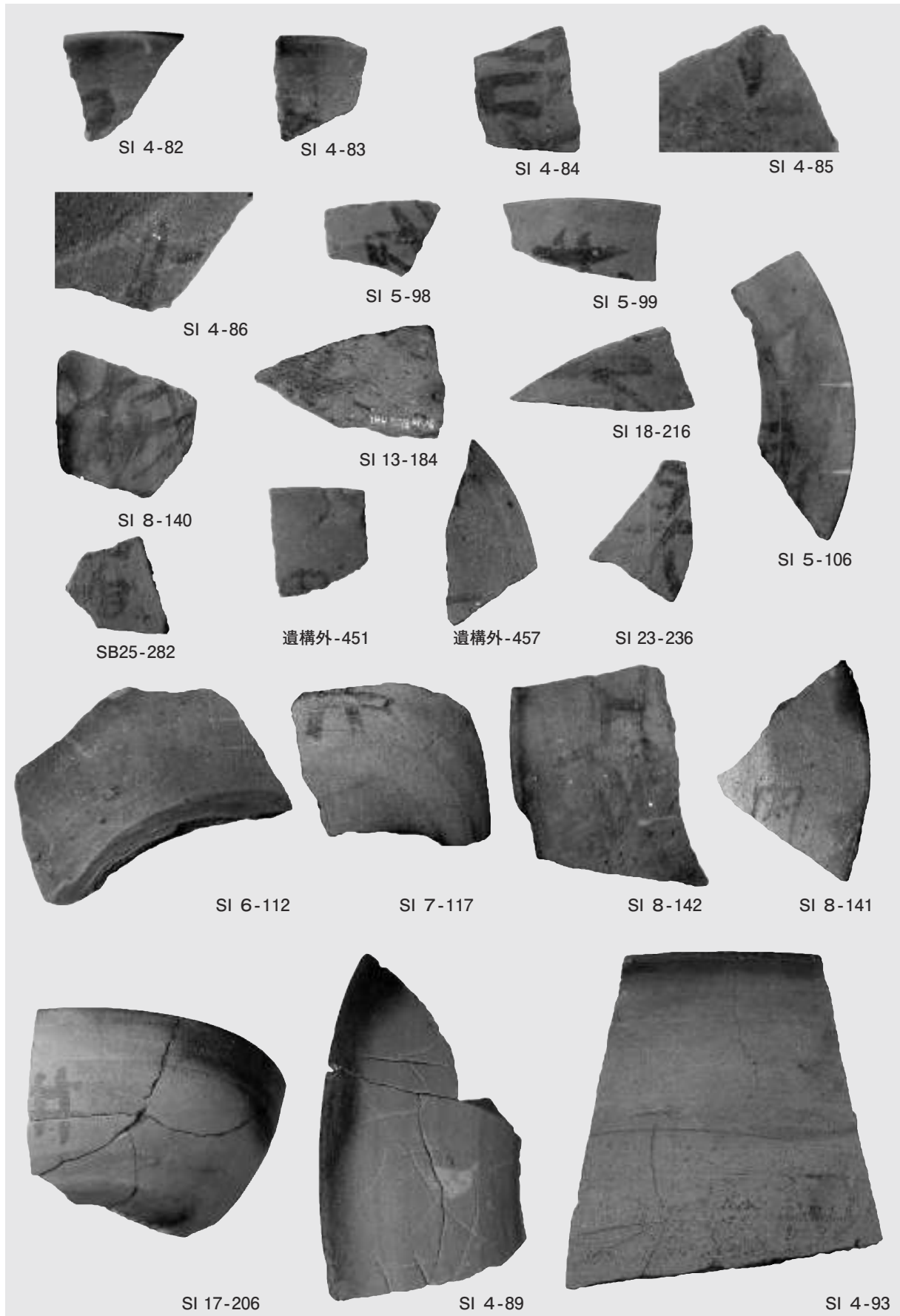
第5・9・10・14・23号竖穴建物跡，第61号土坑出土土器



第1・9・10・28号竖穴建物跡，第2号井戸跡，第263号土坑出土土器

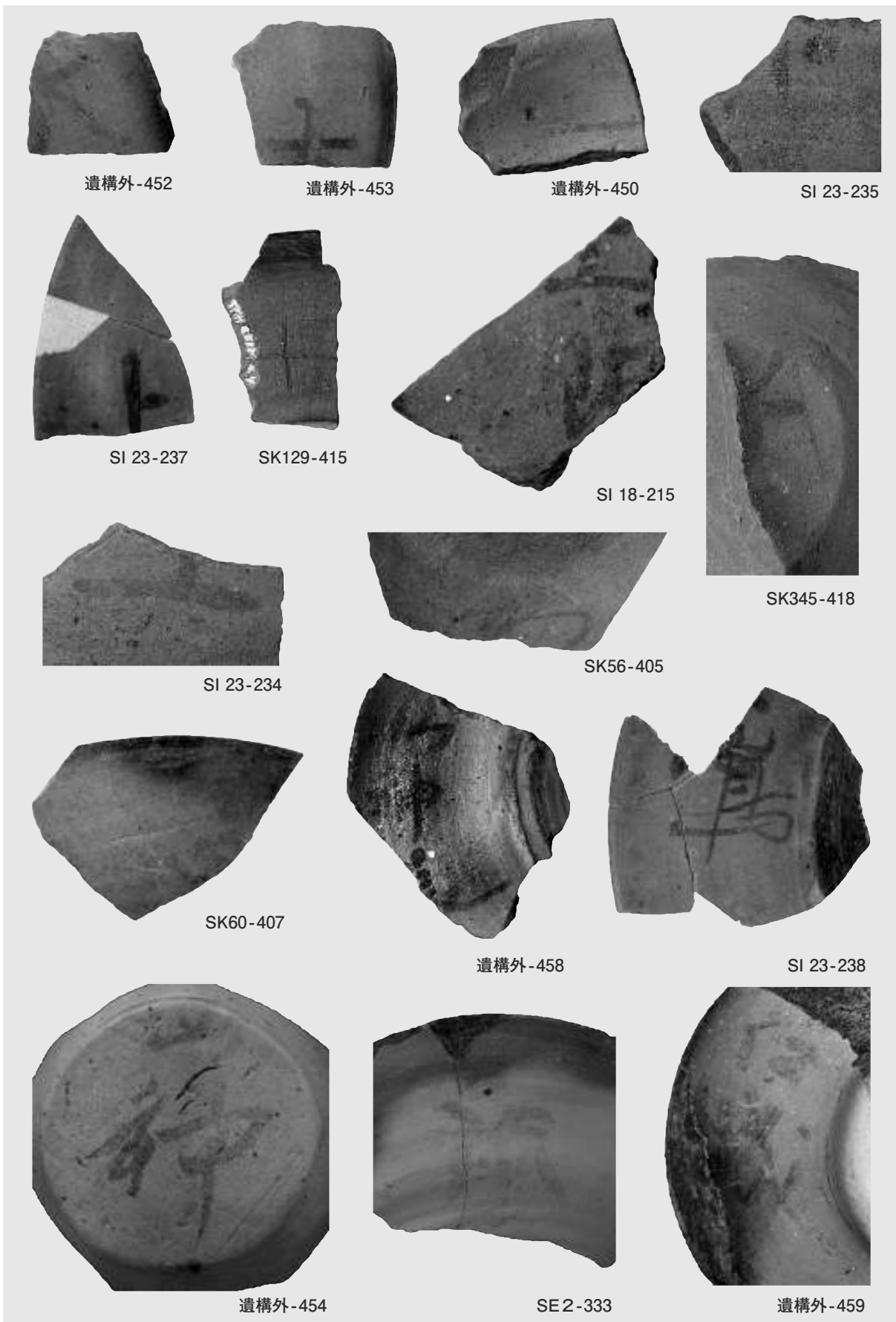


第1・5・7・16・19・28号竪穴建物跡，第2号井戸跡出土土器

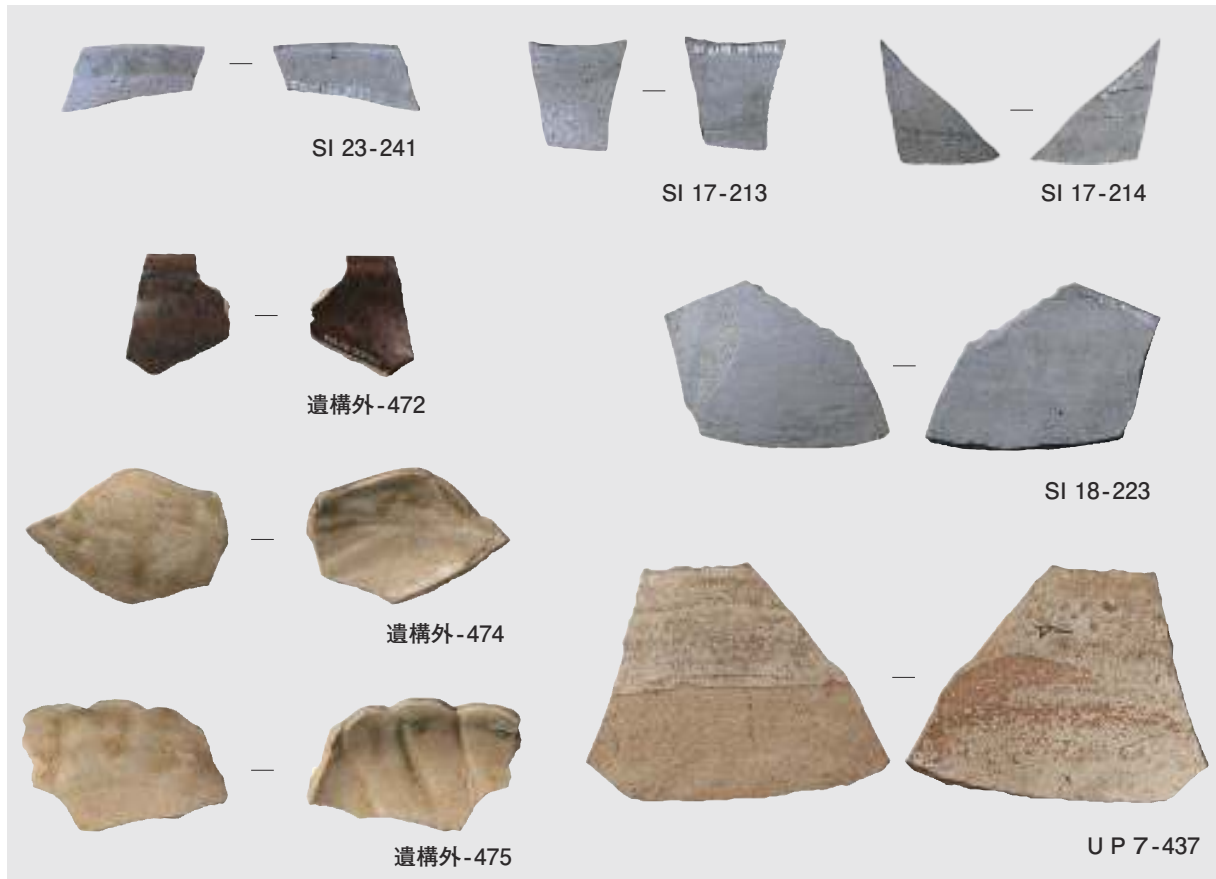


宮後東原遺跡出土文字資料(1)

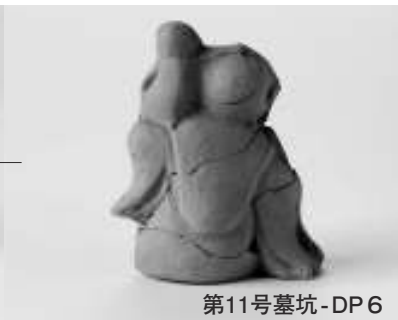




宮後東原遺跡出土文字資料(2)



第17・18・20・23・25号豎穴建物跡，第1号大型円形土坑，第4号井戸跡，第7号地下式坑，遺構外出土土器

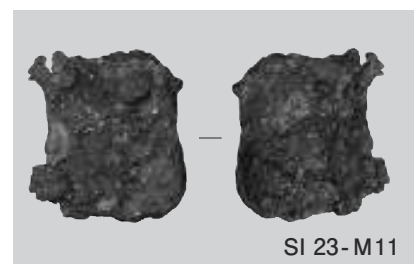
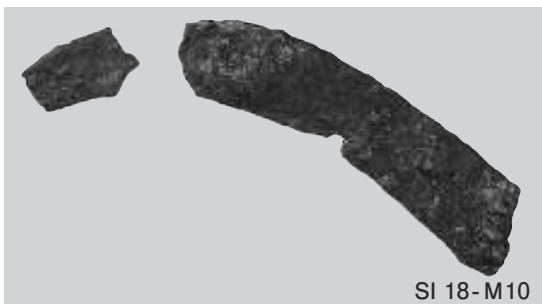
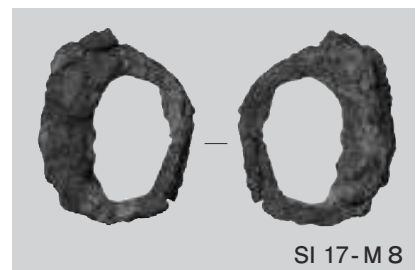
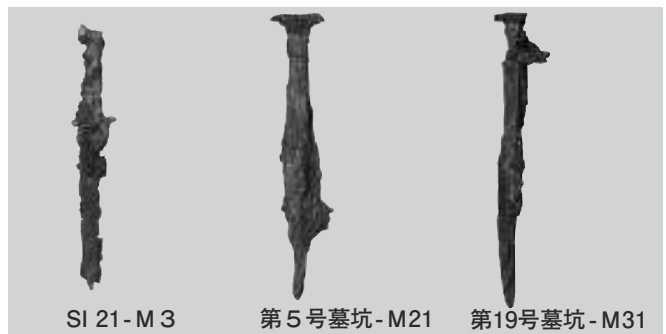
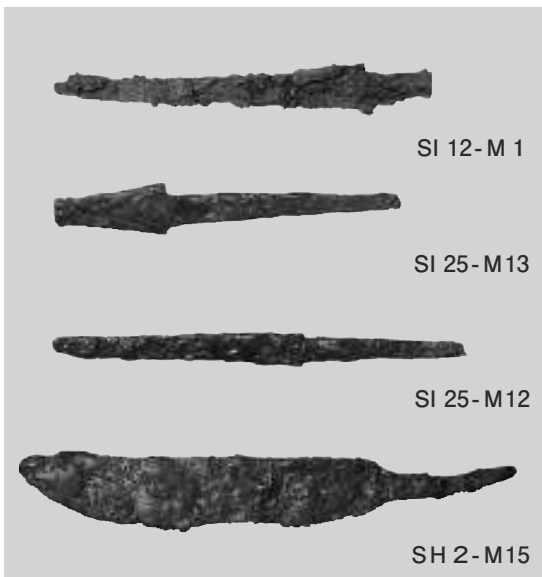
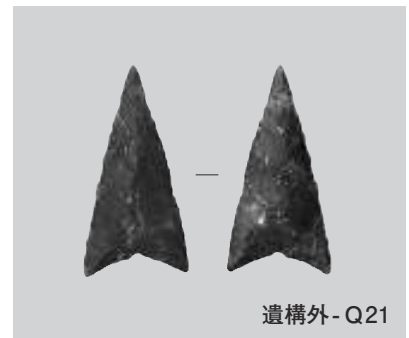
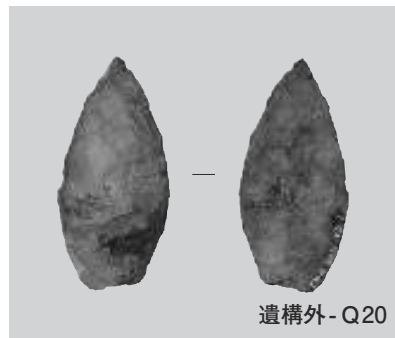
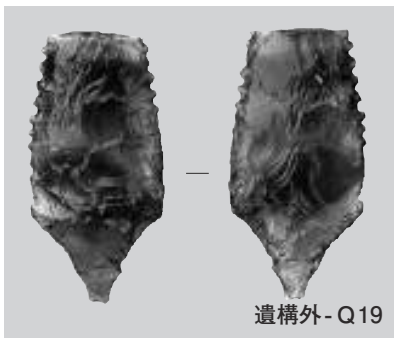


第6号井戸跡, 第11・14号墓坑, 第7・9号地下式坑, 第5号溝跡, 遺構外出土遺物

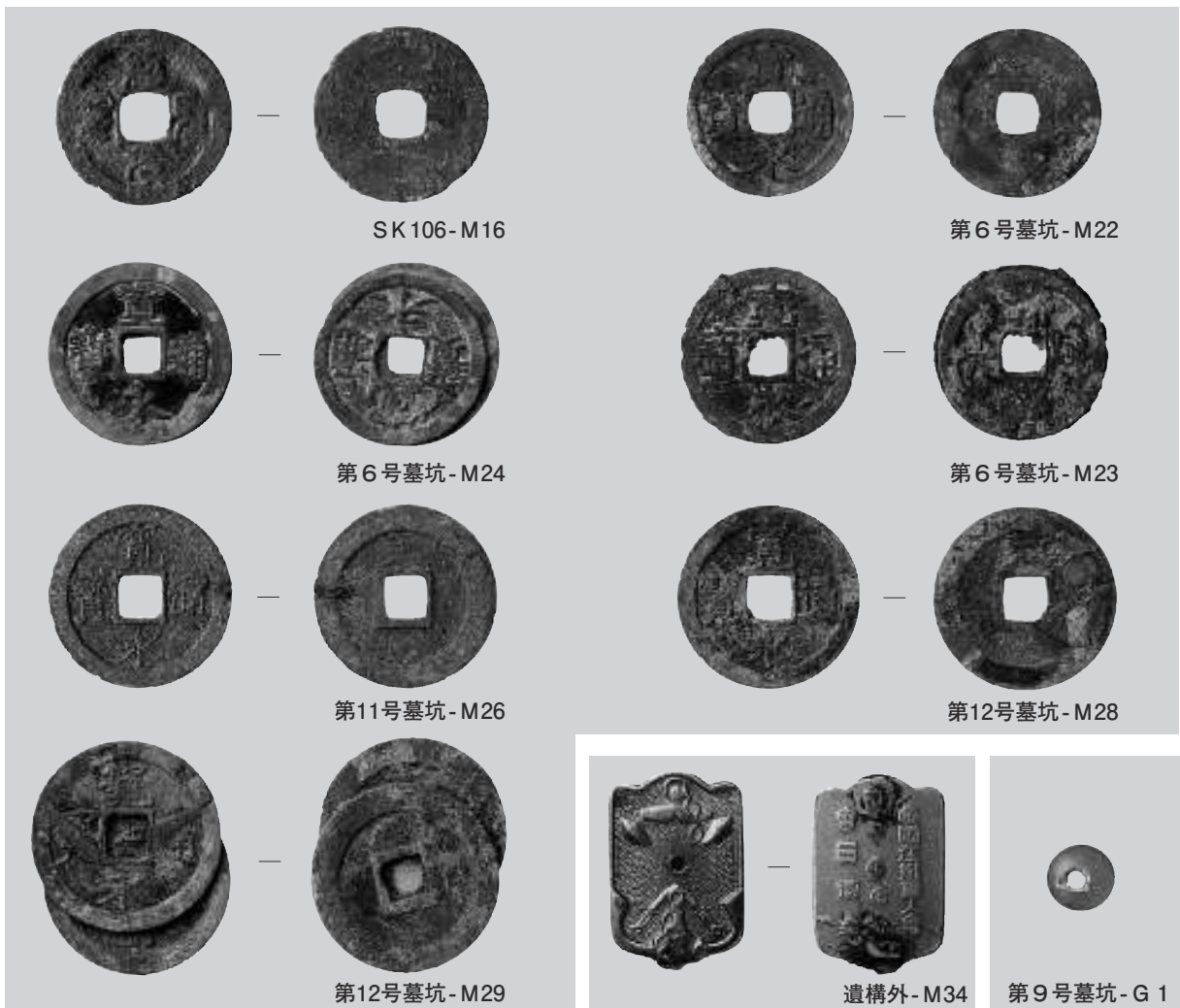
PL40



第4・7・12・15・27号竪穴建物跡，遺構外出土遺物



第12·15·17·18·21·23·25号竖穴建物跡，第2号方形竖穴遺構，第5·19号墓坑，第7号地下式坑，遺構外出土遺物



第4·6·7·9·11·12·19号墓坑, 第106号土坑, 遺構外出土遺物

## 抄 録

ふりがな	みやごひがしはらいせき							
書名	宮後東原遺跡							
副書名	一般県道東山田岩瀬線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第412集							
著者名	田村雅樹							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2016(平成28)年3月18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
宮後東原遺跡	茨城県筑西市宮後字東原541番地6ほか	08502 - 041	36度 05分 43秒	140度 27分 00秒	38～ 39m	20111101～ 20120331 20120801～ 0930 20140201～ 0331	3,558㎡ 1,592㎡ 2,008㎡	一般県道東山田岩瀬線道路整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮後東原遺跡	集落跡	奈良時代	竪穴建物跡	7棟	土師器(坏・小形甕・甕), 須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・短頸壺・長頸瓶・甕・甌), 土製品(支脚・紡錘車), 石器(砥石・紡錘車), 金属製品(刀子・手鎌・釘)			
		平安時代	掘立柱建物跡	7棟	土師器(坏・高台付碗・蓋・皿・鉢・甕・羽釜・甌・埴埴), 須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・円面硯・コップ形土器・長頸瓶・鉢・甕・甌), 灰釉陶器(皿・長頸瓶), 土製品(羽口), 金属製品(刀子・鎌・鉸具・貴金具・鏝), 埴形滓, 鉄滓			
			大型円形土坑	1基				
			柱穴列	4条				
			土坑	9基				
	ピット群	3か所						
室町時代	掘立柱建物跡	6棟	金属製品(刀子)					
江戸時代	方形竪穴遺構	2棟	瓦質土器(火鉢), 陶器(碗・播鉢), 石器(砥石), 瓦(棧瓦)					
	柱穴列	2条						
	土坑	1基						
溝跡	2条							
墓域	室町時代	井戸跡	2基	土師質土器(皿・播鉢・内耳鍋), 陶器(平碗・鉢), 石器(砥石), 金属製品(銭貨)				
		墓坑	1基					
		地下式坑	7基					
	土坑	1基						
溝跡	1条							
江戸時代	墓坑群	1か所	土師質土器(甕), 土製品(土人形), 金属製品(釘・煙管・銭貨), ガラス製品(数珠玉)					

	その他	時期不明	土坑 ピット群	221基 1か所	縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺）、土師器、須恵器、陶器（碗・皿・鉢）、土製品（管状土錘）、石器（尖頭器・削器・石鏃・敲石）、金属製品（徽章）、瓦（軒丸瓦）	
要 約	<p>奈良時代から江戸時代の集落跡と室町・江戸時代の墓域を確認した。奈良・平安時代の集落は、確認できた遺構の分布状況から竪穴建物と掘立柱建物、竪穴建物とそれを取り囲む掘立柱建物、竪穴建物群で構成された小群で形成されていたものと考えられる。また、埴塼や羽口、鉄滓などが出土していることから、近辺に集落と関わる工房などの施設が想定できる。</p> <p>第2号井戸跡から出土した約1,900点にのぼる土師器は、供膳具の割合が多く、使用痕が少ないことから饗宴や祀りなどに使用されたと考えられる。供膳具は、口径値が統一的事であることから、蓋との組み合わせを考慮した規格性の高い製品と推測できる。</p> <p>また、室町時代では地下式坑の形態変化、江戸時代の墓坑群では横位屈葬から座葬へ、埋葬の仕方が変化していくことが推測でき、墓制に関わる良好な資料が得られた。</p>					



## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES-10000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第412集

### 宮後東原遺跡

一般県道東山田岩瀬線道路整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28（2016）年 3月15日 印刷

平成28（2016）年 3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社  
〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2  
TEL 029-231-4241

